世界大思想全集 22

フロイド
精神分析

ショーペンハウエル
論文集

春秋社版

（第三十一回配本）

世界大思想全集

22

精神分析
論文集

春秋社版

世界大思想全集

春秋社版

世界大思想全集

22

フロイド著
中村古峡譯

精神分析

シヨーペンハウエル著
佐久間政一譯

論文集

春秋社版

世界大思想全集

22

フロイド著

中村古峡譯

精神分析

ショーペンハウエル著

佐久間政一譯

論文集

春秋社版

原序

私がこゝに『精神分析學概說』として、この書を刊行することになつたのは、今日まで既に公刊されたる諸多の斯學研究書（プフィスター著『精神分析の方法』一九一三年。レオ・カプラン著『精神分析法概論』一九一四年。レギ、ヘスナール共著『神經病及び精神病の精神分析』一九一四年。アドルフ・マイエル著『神經病者の精神分析』一九一五年。）等と競爭せんがためではない。これは私が一九一五―六年及び一九一六―七年の二回の冬期講演（譯者曰く、ウヰン大學での）において、醫師及び醫師以外の一般男女聽講者に對して行つた、講話の忠實なる筆記である。

本書が讀者諸君に印象づけるすべての特質は、かうした成立條件から自づから明白になるであらう。說明において、科學的論述の冷靜な態度を常に保持することは、私にとつては不可能であつた。講演者は、約二時間に亙る講義の間、聽衆の注意を痲痺させないやうに、絕えず用心しなければならなかつた。各瞬間の效果を顧慮することが、同一の事件を度々繰返して取扱ふことを餘儀なくさせた。例へば、一度は夢の解釋の各章下において、次には又神經病の問題に關聯して述べたが如きである。材料の配列においても亦、二三の重要な題目、例へば無意識の問題の如きを、一個所で充分に說き盡すことが出來ずして、却つて諸所で繰返し取り上げて見ては、更に又その知識を補充する必要のある、他の新らしき機會の來るまでは、再びそれを放棄しなければならなかつた。

これまで精神分析に關する文獻を多く讀まれた諸君は、この『概說』においては、他の書物で知ることの出來なかつたやうな、もつと詳細な發表を殆ど見出すことが無かつたであらう。しかし、著者は、材料の充實と豐富とを期する必要に迫られて、一二の章下（苦悶の病原や、ヒステリー性空想に關する）で、これまでまだ保留しておいた材料を、始めて紹介しておいた積りである。

一九一七年春、ウヰンにおいて

フロイド

譯者例言

一、この飜譯は、一九二〇年ライプチヒで發刊された、フロイド原著 "Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse" と題する袖珍版を基礎とし、傍らアーネスト・ジョーンズの英譯本を參考して執筆されたものである。

一、フロイドの精神分析學については、世既に定評がある。またその梗概と批判については、私が嘗てこの全集の姉妹篇である、大思想エンサイクロペヂアの第五卷において、可なり詳細に記述しておいたから、今更爰に贅言を必要としない。只私は爰に、この譯書の成立について、一言を費しておきたいと思ふ。

一、この譯書は何を匿さう、實はかねて私が經營してゐる日本變態心理學會で、嘗て『近世變態心理學大觀』と題する全十二卷の豫約出版を企てた時、そのうちの一篇として編入されてゐたものであつた。處が右の豫約出版は、かの大正十二年の大震災のお蔭で、僅に三卷を出しただけで、後は廢絶の止むなき運命に立到つたので、この譯稿も久しく私の篋底に幽閉されてゐたのを、今回この全集によつて、世に出ることゝなつたのである。

一、その當時、この飜譯は畏友文學博士久保良英氏にお願ひして、完了していたゞく手筈になつてゐたのだが、久保博士は非常に御多忙であつたので、第七講まで譯してお斷りになつた。それで、あとは私の手許で飜譯することになつたのである。さればこの譯書も第七講までは久保博士の執筆に係るものである。私はこの書の讀者諸君と共に、厚く同博士に感謝の意を表したいと思ふ。

一、專門語の譯語は、校正の際成るべく統一を圖る積りであつたが、なほ一二の例外を遺さない譯には行かなかつた。たとへば "complex" の如きは、久保博士はかねてから、これを『錯綜』と譯してをられて、今日既に一部學者間の定譯語にもなつてゐるので、それを私達の常用語に書きかへることは、博士の意に反くこと萬々なるを虞れたが如きである。第八講以下では、この語を私達の常用語に從つて、『複合體』と譯しておいた。

一、この譯本は、刊行が餘りに突急であつたため、譯文の推敲も思ふやうに行かず、校正の如きも、僅に刷下しの初校を見ただけで、それも非常に多忙の中で點檢したのだから、定めし意外の誤譯や誤植が多々あることと思ふ。偏に讀者諸君の諒恕を仰ぐ次第である。

一、最後にこの書の飜譯に際し、友人岡島龜次郎君に多大の助力を受けたことを附記して、同君の勞を謝したいと思ふ。

一九二九年九月　千葉醫科大學精神病學教室において　中村古峽

精神分析學目次

原序……一
譯者例言……二
第一篇　誤謬の心理……三
第一講　序論……三
第二講　誤謬の心理……一〇
第三講　誤謬の心理——續き——……二二
第四講　誤謬の心理——續き——……三七
第二篇　夢の心理……五五
第五講　困難と本問題への最初の接近……五五
第六講　解釋の假設と方法……六九
第七講　顯在內容と潛在思想……八〇
第八講　子供の夢……九一
第九講　夢に於ける監視作用……九九
第十講　夢に於ける象徵主義……一一〇
第十一講　夢の作業……一二七
第十二講　夢の諸例の分析……一三九

第十三講　夢に於ける古代的及び幼兒的特徴……一五二
第十四講　欲望の充足……一六三
第十五講　不確實な諸點と批評……一七六
第三篇　神經病學概說……一八七
第十六講　精神分析と精神病學……一八七
第十七講　症候の意味……一九八
第十八講　外傷への固着、無意識……二一一
第十九講　抵抗と抑壓……二二一
第二十講　人類の性的生活……二三四
第二十一講　リビドーの發達と性的組織……二四七
第二十二講　發達と退行の諸相、病原論……二六三
第二十三講　症候形成の徑路……二七七
第二十四講　一般神經質……二九二
第二十五講　苦悶……三〇四
第二十六講　リビドーの原理とナーシズム……三一九
第二十七講　轉移作用……三三五
第二十八講　分析的療法……三四九

精神分析學

フロイド著
中村古峽譯

第一篇　誤謬の心理

第一講　序　論

私は皆さんが精神分析學に就て、これまで讀んだり聞いたりして、どれだけの知識を有つて居られるかは少しも知らない。しかし私の講義の題目が『精神分析學序說』といふ以上は、皆さんが精神分析學に就て少しも知らない者として講義を進めなければならぬ。

併し皆さんが恐らく知つて居られると豫想し得る點は、精神分析學は神經的疾患に苦しむ人に對する醫治的方法であるといふことである。而して直ちに皆樣に說明しようと思ふ點は、精神分析學は、在來の醫學に用ゐられた方法と相違して居ること、尙又屢々相反するやうな手續を取るといふことである。通常吾々が新しい療法を患者に試みようとする場合には、その困難を出來るだけ尠くし、且つその結果の確實なことを信ぜしむるやうにする。そのために成功の確實性を增すから、かやうな方法は確かに正當なものであると私は思ふのである。しかし神經病患者に對して精神分析的處置を行ふ場合には、之と全く異つた方法を取る。卽ち吾々は患者に向つて方法の困難なること、長い時間を要すること、患者の努力と犧牲とを要することを告げ、又その結果に於ても確實な保證は出來ないこと、而してその成功は一に患者自身の努力・理解・順應・固執に基いて居ることを告げる。かやうに外見上反對した態度を取ることには、勿論相當の理由がある。それは後に至つて皆さんがお分りになることゝ思ふ。

私が最初から神經病患者を取扱ふと同じ風に皆さんを取扱ふやうなことがあれば、どうかお宥しを願つて置きたい。二度と私の講義を聞きに來られないやうに忠告する。しかしそのために私から精神分析學に關する不完全な知識を得ることも必要であり、且つこの問題に就て獨自の判斷を構成するには如何なる困難に遭遇するかも知れないことを說明しようと思ふ。卽ち皆さんが以前に受けた教育の方向や、從來馴れ來つた思想の樣式が必ずや精神分析

學に對して敵意を示し、且つこれ等の本能的反抗を打破するには、どの位皆さんの心に打勝たなければならぬかを示さうと思ふ。私の講義から精神分析學に就てどの位の知識を皆さんが獲得し得るかを言ふことは勿論出來ない。しかし私の講義からして、精神分析的研究をなす方法や、精神分析的療法を行ふ方法を習得しないことは確實である。尙又誰かゞ精神分析學に就て只僅かに粗雜の知識のみを得たといふことに不滿足を感じ、何時までもこの問題から離れないやうに望むならば、私はその人を失望させるのみならず、尙さう言ふことをしないやうに警告しようと思ふ。蓋しかやうなやり方は學術的研究の成功に終りを告げしむるばかりであり、實際家として仕事をして行く上に、その人の目的や計畫が社會から誤解され、疑惑や敵意を以てその人を見るやうになり、心內に潜在せる凡ての惡の衝動をその人に向けるやうにする。今歐洲に行はれて居る戰爭に從事して居るものからして、どの位の群衆があるかを皆さんは推定し得るであらう。

しかし或る人に於ては新知識の附加され得ることが、常に如上の不便に打勝つ程强く心を牽くことがある。故に若し皆さんの中で私の警告に拘はらず、私の第二回の講義に出席する人があればそれは大に歡迎する。しかし皆さんは、凡て私が諷示した精神分析學固有の困難は何であるかを知る權利がある。

先づ第一に精神分析學に於ける教訓や解釋に關する問題である。醫學の研究に於ては眼を使用することに習熟する。卽ち解剖の標本や化學的反應の沈澱物や神經を刺激した結果として生ずる筋肉の收縮等を見る。然る後患者と接觸し、五官の證據によつて病氣の症候を知り、病理的經過の結果を說明し、且つ往々それ等疾病の煽動者すらも孤立した形に於て表はすことが出來る。外科の方面でもあなたは患者の處置の程度を目擊する者になり、又その程度によつて處置をすることを許される。精神病學に於ても患者の種々の表情・言語・行動が觀察の對象になり、それ等があなたの心に深き印象を殘すであらう。かやうに醫學の教師は恰も博物館に於ける如く、あなたを導く說明者又は案內者の役目をする。その際皆さんは指示された事項に對して、この方法によつて直接の關係を得るやうになり、自分自身の經驗によつて新事實の存在を確信するやうになる。

所が不幸にも精神分析學では凡て如上の事項が相違して居る。精神分析に於ては、患者と醫者との間に言語が交

換される外何も生じない。患者は過去の經驗や現在の印象を物語り、希望や情緒を訴へたり述べたりする。醫者はそれに耳を傾け、患者の思想過程を指導するやうに企て、回想させ、一定の方向に注意を向けるやうにし、解釋してやつたり、或はかやうにして引起された了解や否認の反應を觀察する。患者の無學の親類、即ち活動寫眞に於て見る如く視的又は觸的にのみ何事も考へるやうな者は、談話ばかりで病氣を治し得るといふ方法に必ず疑を挾むであらう。是等の人々の推理は勿論非論理的であると共に無定見である。蓋し此等の人々は、神經病の症候は彼等自身の想像から構成されて居ると常に確信して居る人々である。言語と魔法とは最初は同一物であつた。現在でも尙言語が魔力を有して居るものがある。即ち吾々は言語によつて他人に無上の幸福を與へたり、非常の失望を與へたりすることが出來る。教師は言語によつて知識を生徒に傳達し、演說者は言語によつて聽衆を感動させ、自己の判斷や決意に同意せしめる。言語は又情緒を引起し、他人に影響を與ふる手段として一般に使用されて居る。故に私が精神療法に言語を用ふることを輕視してはならぬ。而して分析者と患者との間に行はれる言語を洩れ聞きしても、別に不審を懷かないやうにしなければならぬ。

併しその事すらも不可能である。分析的處置を行ふ際の對話に聽衆は不慣れで、從つてその過程を說明することが不可能である。勿論神經衰弱やヒステリーに罹つた患者を生徒に示して精神病の講義をすることは出來る。その病人の容體や症候を述べることは出來るが、それ以上に及ばない。患者は醫者に對し最も親密の關係にある場合に於てのみ、分析に必要な話を打明けるが、之に反してその人に全く無關係の者の面前では默つて仕舞ふ。蓋し是等の打明け話は患者の最も內密の思想であり感情であるからで、社會的に獨立して行く人としては他人に祕密にしなければならぬものであるか、或は自己の概念と全く相容れないものであるために、他人には勿論のこと、自分自身に對しても祕密にしようと試みるからである。

故に精神分析的處置の際に實際それを目擊することは不可能である。只その時の處置の有樣を後になつて言葉で說明を聽いて精神分析の方法を學ぶより外はない。かやうに直接に聞かないで、又聞きの敎授の爲に、この事項に就ての諸君自身の判斷を構成する上に甚だ不自然に且つ困難な狀態に陷らしめる。故にこの場合には敎授者の言に

信を置くより外に仕方が無い。

今暫らく精神病學の講義でなく歴史の講義を聞いて居ると想像して御覽なさい。講師がアレキサンダー大帝の生涯や偉業を講義して居るとすれば、その事蹟を何故に吾々は信ずるやうになるのであるか。歷史の場合は精神分析のそれよりも一見不利益の點が多いやうである。蓋し歷史の先生は、皆さんと同じくアレキサンダーの戰爭に參加して居ない。所が精神分析者は自からその事件に關與したことを少くとも皆さんに話すからである。しかし吾々が歷史家の言を信ずるに至る理由はどこにあるかを少しく考究して見よう。歷史家は現存して居る他の歷史家や、その事件の後餘り時を經過しないで棲息して居た歷史家、例へばディオドール、プルターク、アリアン等の言說を參考にする。又その時代の貨幣や王の彫像を、模造品を皆さんの前に示し、イソスの戰を示すポンペイの寄木細工の寫眞を廻覽したりする。嚴密に言へば、是等の文書によつてアレキサンダーの存在や彼の事業の實在が已に以前の世紀の人々によつて信じられて居たことを證明する。而して皆さんの批評は全く新しいものであることが分る。アレキサンダーに就て報告された事が凡て十分に信用を置くに足るものとは言へないが、しかしその爲にアレキサンダー大帝の實在を疑つて、此の教室を出て行くものは一人も無からうと思ふ。皆さんの確信は主として二つの點から決定されて居る。第一は自分に僞りと思つて居るものを皆さんに信ぜしめようとする動機が、その講義に無いといふこと、第二に凡ての權威者が、それの大體の事柄に就て意見が一致して居るといふことである。以前の著者の言說の眞僞を判定する場合にも同樣で、著者の動機や、他の學者の意見の一致によつてその眞僞を檢査する。かやうな檢査の結果からしてアレキサンダーの場合の確信は生ずるが、モーゼスやモハメッドの場合にはその確信が減じてくる。精神分析學の說明者に對して皆さんの有する疑問に就ては、後になつて明白になるであらう。

茲に於て皆さんは次の疑問を發する權利がある。卽ち精神分析に對する客觀的證據も無く、その過程を說明する可能も無いのに、如何にしてそれを研究することが出來たり又はその眞なることを信ずることが出來るか。その研究は實に容易のことでない。又それを完全に習得した人士も多く無い。しかしそれを學習し得る何等かの方法があることは勿論である。精神分析學は先づ第一に自己の人格の硏究によつて、自分自身で學ばれるのである。それは

自己觀察（Selbstbeobachtung）と全く同意義のものでないが、別に適當の語が無いので、この術語を使用してもよい。若し吾々がこの方法を知るやうになれば、自己分析の材料として、日常の熟知せる精神現象を採用することが出來る。この方法によると精神分析で敍述する過程の實在や、又その概念の眞なることを確信することが出來る。尤もこの方面の進歩にはその限界が無いでも無い。それで熟練した分析者に自身の分析を委ねると、分析者の使用する精細の技術を觀察する機會を得る事が出來て、尙一層進歩するやうになる。勿論之は最良の方法ではあるが、個人の場合にのみ實行が出來ることで、學級の生徒全體に使用することは出來ない。

精神分析學を習得する上に第二の困難とする點は精神分析學その者に固有したものでなく、皆さんの醫學の研究によつて禍ひされて居る點に困難があるので、謂はゞ皆さん自身に責任があると言はなければならぬ。蓋し皆さんが受けられた敎育は精神分析學を理解するには餘りにかけ離れた心の態度を養成して居る。卽ち有機體の機能や障礙を解剖學的基礎の上に建設したり、化學や物理の術語でそれ等を說明したり、又は生物學的見地からそれ等を觀察したりするやうに敎育されて居る。從つて皆さんの興味は極めて複雜なる發達の極度に達して居る人生の精神的方面に向つて居ない。故に心に對する心理學的態度は皆さんには全く未知のもので、疑惑を以て之を迎へ、科學的地位を否定して、只一般の通俗人・詩人・魔術師・哲學者の仕事のやうに考へて居る。かやうな限界が皆さんの醫學的能率の上に害をなして居ることは明白である。蓋し患者に接する際に、先づ第一に接觸するのは精神的方面で、最も人間的關係に立つて居る。從つて皆さんの輕蔑する藪醫者・魔術師・信仰によつて治療をする者に、治療的勢力の一部を奪はれるといふやうな罰を皆さんは被つて居ることを私は懸念する。

上述のやうな缺陷が皆さんの以前の敎育の上に存することに對する辯疏があることを私は十分に認める。卽ち皆さんの職務に役立つやうな哲學的の補助學科が授けられないといふことである。思索的哲學や敍述的心理學や或は感官生理學と聯關せる所謂實驗心理學の如きも、身體と精神との間に存する關係に就て必要な事を皆さんに敎へることが出來ないし、又精神機能の混亂に就て理解せしむべき手引をも與へることが出來ない。醫學の中の精神病に屬する部門は、認められ得る精神障碍の種々異つた形式を敍述したり、臨床上の疾病圖に分類したりすることのみ

に沒頭して居る。のみならず精々よい場合ですらも、精神病學者それ自身が、純粹の敍述的排列が科學と稱へられる資格があるかどうかと疑つて居る。臨床上の圖を組立てる症候の起原・機制・相互關係は發見されないで、それ等が腦髓に於ける説明し得べき變化と關係せしめることも出來ないし、又は説明の出來ない變化とも關係せしめることが出來ない。これ等の精神障碍は、それが或る有機的疾患の二次的結果と同一視され得る時にのみ治療的影響が與へられるやうになる。

この空隙こそ精神分析學が充たさうと努力して居る所である。精神分析學は精神病學に對して、心理的基礎の缺けたる所を補つてやることを希望し、身體的並に精神的障碍の相關が理解されるやうになる普通の基礎を發見することを望んで居る。この目的の爲に解剖學や化學や生理學等に於ける臆説から離れて、純粹に心理學的補助概念によらなければならぬ。この理由からして先づ第一に皆さんに精神分析學が異樣に見えるであらうことを私は懸念したのである。

次の困難に對しては、皆さんの敎育や精神的態度に責を歸さうとは思はない。精神分析學には全世界の人々を怒らせ、彼等の嫌厭を引起す二つの敎義がある。一は知的偏見と衝突し、他は道德的並に美的偏見と矛盾する。而して是等の偏見を低く評價してはならない。蓋し是等の偏見は有力のもので、人類に於ける必要且つ價値ある進化の沈澱物である。是等は情緖力によつて支持されて居るので、是等に對する戰は困難なる仕事である。

精神分析學が世界の人々に喜ばれない主張の第一は次のやうなことである。卽ち心的過程は本質上無意識である。而して意識せる部分は單に孤立した行爲で、全精神生活の一部に過ぎないといふ點である。所が吾々は精神過程と意識過程とを同一視する習慣になつて居る。意識は精神生活を定義する特質のやうに思へる。而して心理學は意識の內容を硏究する學のやうに認めて居る。しかもそれに反對することは全く無意味のことのやうに明白に見える。所が精神分析學ではこの反對を避けることは出來ない。而して意識的と心的とを決して同一視することは出來ない。心の精神分析的定義は感情・思考・欲望の本質の過程を包含し、又同時に無意識的思考や無意識的欲望の如きものをも包括する。しかし、かやうにする爲に、精神分析學はその出發點に於て眞面目な科學的硏究者の同情を失

ひ、底知れぬ暗黒の不可思議を有する空想的崇拜たるの疑を蒙つた。『精神的といふことは意識的である』といふやうな抽象的命題は偏見であるとした理由を、皆さんは理解するに困難せらるゝに相違ない。又無意識といふことが實際にあるのに、それを拒むといふのは如何なる進化的過程に基くか、又無意識の否定によつて如何なる利益が得られるかを、皆さんは推測することが出來ない。精神生活は意識と共在すると認むべきか、或はその範圍以上に廣がつて居ると言ひ得るかを論ずることは言語上の空論のやうに見える。無意識的精神過程の承認は世界並に科學に於ける新しき方向へ一歩を踏み入れたものと私は斷言することが出來る。

この精神分析學への大膽なる第一歩と、これから述べようとする第二歩との間に密接なる連絡のあることを皆さんは疑ふことが出來ない。蓋し精神分析學の一發見として吹聽する次の命題は、狹義又は廣義の性的としてのみ記述し得る衝動が、神經的並に精神的疾患の原因として特に重大なる役目を演じて居るといふ主張で、之は以前に十分認められて居なかつた所である。尙それ以上に、この性的衝動は人間精神の最高の文化的、藝術的、社會的成果に對して評價し得べからざる程の貢獻をなして居る。

私の經驗によると、この種の精神分析的研究の結論に對する嫌忌が、反對を蒙る最も重大なる原因になつて居る。皆さんはそれに對する說明を知りたいか。吾々の信ずる所によれば、文明は生存競爭の壓迫の下に原始的衝動の滿足を犧牲にして建設され、且つ大部分は常に新に創造されつゝあるもので、新に社會に入つてくる個人は、全體の者の善のために自己の本能的滿足の犧牲を反復して居る。かやうに利用された本能的力の中で性慾は重要なる役目を演じた。この場合に性慾は純化された。詳言すればその勢力は性的目標から外れて、他の目的の方へ變向し、最早性的でなく社會的に一層價値のあるものに變つた。しかしかやうな構成は安固でない。蓋し性慾は抑制することは困難である。文化事業に與かる人々の中には、性慾がその勢力の轉向に對して拒斥するといふ危險がある。性的衝動の解放卽ちその衝動が最初の目標に復歸することによつて生ずるものほど、文化に對して强力な威嚇はないと社會は信ずる。故に社會はそれの建設に於ける、この困難なる部分に考を向けることを好まない。社會は又性的本能の力を認めたり、個人の性的生活の重要を明かにしたりすることに全く興味を有しない。寧ろ訓練の見地からし

て、この凡ての方向から注意を轉向せしむるやうにした。その爲に社會は精神分析學の研究結果に對して忍ぶことが出來ないで、美的に嫌忌すべく、道德的に非難すべきものとせられた。しかしかやうな非難は科學的研究の確立せる客觀的結果に對して何等の價値もない。非難は知的術語に飜譯されて後に發表されなければならぬ。自分の嫌ひなことは不正當であるやうに考へ、容易にそれに反對する議論をするのが人間の特質である。從つて社會は好ましくないことを不正となし、情緒的起原を有する論理的並に具體的議論を以て精神分析學の眞理を討議し、如何に辯駁を企てゝも、それは凡て偏見であると固執する。

しかし吾々はこの異議ある原理を提出するに當つて何等の傾向にも從はなかつたことを主張する。吾々は只困難なる研究の結果發見したる事實を發表するに過ぎない。而して吾々はかやうな實際的考察を餘儀なく口にしたことが正しいか否かを決する前に、科學的研究の方面にこの實際的考察を導き入れたことを無條件に拒斥する權利がある。

以上述べたことが、皆さんの最初精神分析學に興味を示し初める際に遭遇する困難の諸點である。初めるにはこれで恐らく十分過ぎると思ふ。若し、皆さんが落膽するやうな印象に打勝つことが出來れば、これから尙說明を進めて行かうと思ふ。

第二講　誤謬の心理

吾々は假定でなく研究から初めようと思ふ。その爲に先づ極めて屢々起り且つ一般が熟知しては居るが、しかし看過されて居る現象を選んで說明しよう。尤もこの現象は病氣の際に表はれるのでなく、孰れの健康體の者にも現はれるものである。それは各人が行ふ誤謬で、例へば或ることを話さうとして、誤つて異つたことを言つたり、或は書記の誤りをしたり、印刷物や書寫のものを讀む時に、實際に書いてあることゝ違つて讀んだり、聽覺器官には別に異狀がないのに、他人の言ふことを聞違へたりする各種の誤謬行爲に就ての現象である。勿論是等の誤謬はその本人が氣付いて居ることもあり、氣付いて居ないこともある。この他又永久的の忘却でなく、一時的の忘却の爲

に生ずる現象がある。例へば善く知つて居り、且つ逢へば直ぐに認知し得る人の名前を思ひ出すことが出來ないとか、又は後になつては思出すのに一定時間だけ或る企てを行ふことを忘れたりすることがある。この一時的といふことが第三の種類の中には缺如して居る。例へば見出すことの出來ない位、品物を置き忘れるといふことがある。これは普通の場合と異つて見える所の一種の忘却で、その理由が分らず、只驚くか又は當惑するのである。この外尙時間的要素が認められる忘却がある。例へばそれ以前か、それ以後は誤つて居るのに氣付くが、少くともその當時は眞實と信ずる場合がある。この他尙種々の名前を與へられた、これ等と相似た多數の現象がある。

凡て是等の出來事の間に於ける內部の關係は獨逸語で Ver といふ接頭語で示されて居る。(譯者註 Versprechen 話誤り、Verlesen 讀誤り、Verschreiben 書誤り、Verhören 聞誤り、Verlagen 置誤り、Vergessen 見落す又は忘れる)而して是等の語は人生に於てあまり重要なる意義を有せず、一般に一時的の行爲に關係して居る。或る事物を失つたといふ場合のやうな、實際的に大切な意味を有することは稀である。從つてかやうな出來事に對しては殆ど注意を拂ふこともなく、又そのために何等の感情をも生じない。

今皆樣がこの現象に對して注意を向けて聽きたいと思ふ。しかしそれに對して皆樣は次のやうな不平を述べられるかも知れない。『廣い世界にも、又狹い精神生活にも幾多の解決に困る謎があり、又精神的疾患の中には說明を要求し、且つ說明の價値ある夥多の不可思議のものがあるのに、かやうな些細な事に勞力と興味とを費すのは實際つまらないやうに思はれる。若し健全なる視力と聽力とを有する者が實在しない者を白晝に見たり聞いたりすることが如何にして可能なるか、最も愛する者が彼を迫害せんとして居ると突然信ずるやうになるのは何故か、どの子供に取つても無意味に見える幻想が達見的主張として是認せられるのは如何にしてあり得るかを、吾々に說明することが出來るならば、精神分析學を眞面目に考へる氣になるであらう。之に反して精神分析學は、談話者が間違つたことを話したり、主婦が鍵を置き忘れたりするやうな極つまらないこと以上に興味あることを取扱ふことが出來ないとすれば、それよりも一層善い何かを發見して吾々の興味と時間とを費したいと思ふ』と。

それに對して私は『暫く御辛抱を願ひたい』と言ひたい。皆樣の批評は正鵠を得て居ない。精神分析學は些細な

ことをこれまで取扱はなかつたと自負することの出來ないのは眞實である。寧ろ却つて精神分析學の觀察する材料は、日常生活に有りふれた出來事で、他の科學から餘りに無價値のものとして棄てられた、謂はゞ現象世界の屑物である。しかし皆様の批評は、外見上華々しく見えることゝ、問題の大さとを混同して居ないでせうか。或る事情や或る時に於て、極めて重要なることが、極めて些細なることのやうに見ゆることの出來ないものであるか。これに關する幾多の例證を私は容易に擧示することが出來る。例へば聽衆の中の若い人達は、一人の婦人の愛を得たといふことをどんな些細の證候からして類推するか。それには告白や情熱的な抱擁を豫期するか或は他人には殆ど認知し難い一瞥や一時的の身振や一秒位の握手でその目的が達せられなかつたか。又殺人者の調査に從事する探偵であると假定せよ。殺人者は犯罪の場所に自分の名前と宿所とを記した寫眞を殘すと豫期するか。或は汝の捜索する人の薄弱な不確實な痕跡を以て、致し方なく滿足するか。實に僅かの證候を低く評價してはならない。恐らく之より一層大なる事柄の跡を發見することが出來るかも知れない。世界並に科學の大なる問題が最初に吾々の興味を惹いたといふことは皆さんと同感である。しかしこの又はその大問題の研究に自己を沒頭しようと明かに決心をする上には、問題の大きいといふことは大體に於て何等の用をなさない。吾々はこれからどの方向に次の步を取るべきかを知らないことが屢々ある。科學的作業に於ては、その研究の方に道が開けて居れば、如何なることでも自分の目の前にあるものを取上げることが利益である。而して若し何等の偏見や豫期なくして徹底的にそれをやり遂げて行くと、幸福にも一々の事柄は他の事柄と關聯し、小事が大事に關係を有するやうになり、價値のない作業からして大問題の研究への道路を發見することが出來るのである。

健康體の人が行ふ所の外見上些細な誤謬に就ての考察に皆さんの興味が向くやうにと希望して、私は前記のお話をした。精神分析學に就て少しの知識もない人は、これ等の出來事を如何に解釋するかを先づ尋ねて見よう。

その人は『あゝそれは說明の價値がない。些細な偶發的の事項である』と第一に答へるのは確かである。その人はそれで何を意味するか。それはこの世の中の因果關係の下に立たないで、それがあるよりも以外のものであるかも知れない程些細の出來事であるといふ意味であるか。かやうに彼は自然的運命論を何れの單獨の場合にも徹底さ

せて、凡ての科學的世界觀を投倒してしまつた。「神が欲するにあらざれば一羽の雀ですら家根から落ちて來ない」といふ事を強く主張する所の宗教的世界觀を、その人がどの位確實に承認するかを非難してよい。吾々の友人は彼の第一の答から結論を引出すことを欲しないと思ふ。卽ち彼が若しこれ等の事を研究するならば、直ぐにそれに就ての說明を發見すると言ふであらう。それは些細の機能的障碍、精神的行動の不精密の事柄に相違ない。而してそれ等の條件は發見され得るに相違ない。人は（一）疲勞したり、病氣したりして居る時、（二）興奮して居る時、（三）注意が或る他の事柄に集中して居る時に、言誤りをするが、さうでなければ正しく話し得るのである。これは容易に確證することが出來る。言誤りは實に疲勞した時、頭痛のする時、又は偏頭痛の發作を感ずる時に最も屢々起るのである。固有名詞を忘れることも此の場合に屢々生ずる。多くの人は固有名詞が思出せなくなつた事から、偏頭痛の發作の初まりを警戒する樣に慣れて居る。興奮して居る場合も亦言語や事物を間違へ誤つた行爲をする。決意したことを忘れたり、計畫しない他の行爲をしたりすることは、吾々が注意を他に向けて居る時、卽ち轉向の場合に著しく現はれる。かやうな轉向に就て、有名な例は、Fliegende Blätter の中にある一教授の話である。同教授は次の著書に取扱ふべき問題を考へて居た爲に蝙蝠傘を忘れたり、帽子を取違へたりした。何か計畫や約束をしてから、その後吾々の心を奪ふやうな何事かゞ起ると、その爲めに前の計畫や約束の實行を全く忘れることのあるのは吾々自身の經驗から熟知する所である。

以上の事實は全く誰も理解する所、何等異論のない所であるやうに思はれる。尤もそれは恐らく極めて無興味のもので、吾々の豫期した程に無いかも知れない。是等の誤謬に於て今少しく精密に考察して見よう。是等の現象の發生に必要として列擧した種々の條件は凡て同種類のものでない。病氣と血行障碍とは正常の機能が害を被つたもので、生理的のものである。興奮と疲勞と注意の轉向とは精神生理的のものとして記述し得る異つた種類のものである。是等の後のものは容易に原理に飜譯される。疲勞並に轉向、或は一般興奮も亦注意の分散を生ずる。從つて企てゝ居る仕事に對して十分の注意が向かないやうになる。是等の行爲は容易に障碍を被り、不精密に實行せられる。少しの疾病や神經中樞器官に於ける血行障碍の變化も同一の結果を生じ、主要なる要素たる注意の分散を引起

するものである。之は何れの場合も、注意障碍の影響を取扱ふもので、只その障碍が有機的原因から來たか或は精神的原因から來たかの差に過ぎない。

しかしこれだけの事では精神分析學の研究に對する興味を引起すに足りないやうで、この題目を棄てゝ仕舞ひたい氣がするかも知れない。實に是等の事實に今少しく立ち入つて見ると、この種の誤謬に就ての注意説と全く一致しないし、又尠くともその學説から何等の演繹も出來ないやうに見える。吾々は疲勞や興奮を感じないで、全く平常の狀態にある時でも、如上の誤謬や忘却は起る事を經驗して居る。只誤謬をした後に恐らく其は興奮の結果から生じたのであるに相違ないと、自分には知らないでも誤謬の原因を興奮に歸するに過ぎない。行爲は注意が強くその方に向けられたから保證が出來、注意が弱く向けられたから危險であると言ひ得る程簡單な事柄でない。蓋し多くの行爲は全く注意が向けられないで純粋に自動的に行はれ、しかも極めて確實に行はれることがあり得る。散歩を試みて居る人は、どこを歩いてるかを知らないで、尙且つ正しき道を取り、少しも迷はないで目的の所に止まることが出來る。これは尠くとも普通に起る事柄である。熟練した彈琴家は少しも考へないで正しい所を彈く。勿論彼は時々誤るかも知れない。しかし自動的に彈くことが誤謬を增加するとすれば、熟達者程誤謬を多くする事になる。蓋し熟達者は不斷の練習によつて全く自動的になつて居るからである。所が事實は反對で、特にその事物に注意を集中しない時が最もよく成功し、誤つてはならぬと熱望して居る時、卽ち必要な注意が動搖しない時却つて誤謬が起つて來る。この際それを興奮の結果であると言ふかも知れない。しかしそんなに興味を有した計畫に對して何故に其の興奮が注意の集中を強めなかつたか理解するに苦む所である。又重大なる演説中に自分の考へと全く反對なことを口ばしることがあるのは、精神生理的説明や注意説によつて解釋することは出來ない。

かやうに吾々の理解に苦しむ所であり、又是等の説で説明の出來ない誤謬と連關する尙幾多の些細な現象がある。例へば一時人の名前を忘れた時には大にそれを氣に病み、それを思ひ出さうと決心し、且つその企を捨てることは出來ない。この苦行に拘らず『舌の先まで』來て居るがなどゝ言ひ乍ら彼の望む通りに注意を向けることが出來ず、一寸敎へられると直ぐに認知するに至るのは何故であるか。又他の例を取つて見ると、誤謬が多樣になり、

一所に結び付いたり、或は相互に置き換はるといふやうな場合がある。最初の時は約束を忘れる。次の時はそれを忘れまいと時に決意したので、今度は日と時間とを間違へたことを發見する。或は忘れる言葉を記憶する爲めに迂路を求める。所がかやうにして、第一の名を想ひ起すに利用される第二の名が想ひ起されない。若し又第二の名を思ひ起す爲に第三の名を求めると、これも亦念頭から去つて仕舞ふ。同樣な事が印刷の誤りにも起る。これは勿論植字者の側の誤謬である。この種の頑强な誤謬が嘗て一新聞 (Sozialdemokratisches Blatt) に表はれた。その新聞の祭禮に關する記事の中に次のやうな語が印刷されてあつた。『出席者の中に Kornprinz (譯者曰、皇太子のことにて Kronprinz とすべきもの) が居られた』その翌日、正誤が出て、『その語は勿論 Knorprinz と讀むべきである』と。かやうな頑固な誤謬は精神生理的に説明の出來ない所で實に植字器械に住む惡魔の所業かも知れないやうに思はれる。

言ひ誤りが又暗示によつて引起される場合を、皆さんが熟知して居られるかどうか私は知らないが、一の珍談がそれを説明して居る。舞臺に初めて立つ者が『オルレアンの少女』の中で王に向つて『Connétable sein Schwert zurückschickt』(警部が劍を送り返した) と言上すべき役割に當つた。稽古の時に舞臺の主役が面白半分に語呂が似てる所から『Der Komfortabel schickt sein Pferd zurück』(一頭馬車がその馬を送り返した) と數回反復して敎へた。所が眞の演劇になつた時に、間違ふまいと非常に注意して居たに拘らず、否寧ろ餘り注意して居た爲に、この不幸の新參者はやはり間違つた臺詞を言つて仕舞つた。

凡て是等の誤謬の小さい特質は注意轉向の原理で十分に説明することが出來ない。しかしその原理が必ずしも不正であるとは言へない。それには何か足りない所がある。それを補ふと完全なる原理となり得るかも知れない。しかし多數の誤謬その者は他の見地から考へることが出來る。

吾々の目的に最も適當する誤謬の型として言誤りを捕へて説明しよう。之と同じく書き誤りや讀み誤りをも擧げることが出來る。何時又如何なる事情の下に言誤るかといふ疑問を發し、只それに對する答をも得たことを先づ玆に述べて置かなければならぬ。興味は何れの方面に向つても差支ないが、只何故に言ひ誤りが起るかを知りたいと

思ふ。即ち言ひ誤りの本質は如何といふ問をこの際考察することが出來る。この問題が解答されず、又誤謬の結果が説明されないで居る間は、この現象は假令生理的説明が發見されても、心理的方面からは純粹の偶然的出來事として止まることを皆さんはお分りになるであらう。私がある語を偶々言誤るとすると、私は種々の仕方に言誤る事が出來るやうである。即ち正しき語の代りに他の幾千の語の中の一つを用ゐる事が出來て、正しき語を幾樣にも言ひ枉げることが出來るやうに思はれる。所が言誤りはかやうに任意的且つ偶然的に起り、何等合理的の解釋が出來ないものであるか、それとも特殊の場合には特殊の言誤りをするやうに吾々に強ふる所の何物かゞ存するか。

メリンガー（Meringer）とマイヤー（Mayer）の二人（言語學者と精神病學者）は實に千八百九十五年に言誤りの問題をこの方面から研究しようと企てた。彼等は種々の例を蒐集して、純粹の記述的見地から先づ是等を取扱つた。勿論これは何等の解釋を與へてないが、しかしその方に向つて來たと言へる。二人は語句が豫め考へて居た通り出ないで變化する場合を分類して、交替・取越・執着・複合（汚染）・置換とした。今是等の分類に就ての例を示さう。若し誰かゞ Die Venus von Milo といふべきを Die Milo von Venus と言つたとすれば、其は交替（語の位置の）現象である。Es war mir auf der Brust so schwer.（それが私の胸に重く感ぜられた）といふべきを、Es war mir auf der Schwest といふ場合は取越しである。乾盃の際に Ich fordere Sie auf, auf das Wohl unseres Chefs aufzustossen.（吾々の主人の健康を祝する爲に乾盃を乞ふと言ふ意味で auf が餘り度々反復されて居る）といふ如きは執着である。是等三種の言誤りは餘り普通に起らない。所が複合とか混合といふやうな言誤りの現象は屢々現はれて來る。例へば一人の紳士が途上で貴婦人に向つて Wenn Sie gestatten, mein Fräulein, möchte Ich Sie gern begleit——digen.（貴女を御見送りしませうの意味）と言つた。之は明かに begleiten（見送り）と beleidigen（侮辱）とが複合して居る。序でだが、若い者がこんなことを言つたら婦人に嫌はれるに相違ない。又某氏が他の某氏に向つて Ich gebe die Präparate in den Briefkasten……（私は孵卵器の中にプレパラートを置いたの意）と言つたが、Briefkasten（手紙箱）は勿論 Brutkasten（孵卵器）の間違ひで、之は置換の例である。

二人の著者が蒐集した例を基礎として企てた解釋は全く不十分である。語の音と綴とは夫々異つた價値を有して

居るもので、高い價値を有する音の神經力が低い價値の音を妨害することが出來ると、是等の著者は主張した。彼等は餘り屢々生じない取越と執着の現象に如上の結論を用ひた。所がこの音の優越作用は他の言ひ誤りの中に、假令あるにしても、之を不問に附した。最も屢々起る言誤りは、或る語をそれと似た語に誤ることで、多くの人は之を說明するに類似といふことで滿足して居る。例へば一教授が就任演說の際に Ich bin nicht geneigt (geeignet), die Verdienste meines sehr geschätzten Vorgängers zu würdigen.(私は前任者の功績を評價しようとは思はない)と言ひ、他の教授は Beim weiblichen Genitale hat man trotz vieler Versuchungen……Pardon: Versuche……(婦人の生殖器の場合には多くの誘惑に拘はらず……いや多くの硏究があるに拘はらず……)と言つた。

しかし言誤りの中で最も普通であり、最も著しいものは、言はんと欲する所と全く反對なことを言ふ場合である。是等の場合は音の間の價値關係や類似によつて言誤るとは考へられない。それでその代りに、反對といふことは概念的に强く相互に結合して居るもので、心理的には極めて密接に聯合して居るからであると說明するかも知れない。例へば吾々の國會議長が嘗て議會を開くに當つて『諸君! 定數の人が出席して居ます。それでこれから閉會します』と宣言した。

他の普通の聯想が又この反對聯合のやうに誘惑的に働き、往々間の惡い結果に導くことがある。それには次のやうな逸話が傳はつて居る。有名な發明家で且つ大工業家である W. Siemens の子供と H. Helmholstz の子供との結婚式に招かれて、有名な生理學者 Dubois-Reymond が演說を求められた。所が『新配偶者 Siemens と Halske との萬歲を祈る』といふ言葉で彼の立派な演說を終つた。Siemens und Halske といふことは勿論古い商館の名であつた。恰もウィンナ市の住民には Riedel und Beutel といふ有名の商館の名の如くにベルリンの住民は誰も知つて居た商館の名であつた。

音の價値や語の間の類似といふことに又語の聯想の影響をも附加しなければならぬ。しかしそれで十分でない。言誤りの適當の解釋に達する前に既に述べたり、又は單に考へたりした一の場合を考察しなければならぬ。それはメリンガーの主張した執着現象である。尤もこれは言誤りの理解から大分離れて居るやうな氣がする。

しかし、前述の例を調査して行つた際に、尙多くの注意を向けてもよいと思はれるものがあつたと私が言ふ時に私を誤解されないことを希望する。吾々は言誤りの起る一般的條件や言誤りを生ずる影響等を考察して居たが、しかしその起原を離れて、只言誤りの結果その者だけを調査しなかつた。かやうに結果のみを取扱つたならば、上述の例の中で言誤りその者が意味を有することを斷言しなければならなくなる。然らばその『意味を有する』とは何であるか。それは言誤りの結果が自己の目的を遂行する心的過程であつて、內容と意味とを有する表現であると承認される權利があるといふ意味である。これまで吾々は誤謬といふことのみ述べたが、しかし今はその誤謬は時として豫期した行爲の代りに入つてくる全く正當の行爲であるやうに見える。

かやうな特殊の意味を有する言誤りは或る場合には全く明瞭で何等誤解を生じないやうに見える。議長が閉會に當つて、これから閉會しますと言誤つた時に、その誤謬を引起した事情を知るといふことが、その誤謬の意味を吾々に告げるやうに見える。彼は閉會によつてよき結果を豫期しないので、これきり解散にすることが出來れば好ましいことゝ考へた。かやうにして言誤りの意味を容易に發見することが出來る。一人の婦人が、他の人に向つて、Diesen reizenden neuen Hut haben Sie sich wohl selbst aufgepatzt? （譯者曰、これは「この新しい奇麗な帽子を急度お捨てになつたのでせう」の意であるが、實際は aufgeputzt （捨てる）と言ふつもりでなく aufgeputzt (手入れなすつたでせう)と言ふ積りであつたに相違ない）と言つた。この帽子は素人の製作物(Patzerei)であるといふ輕蔑の考がその婦人の言誤りの中に表はれて居ることは、如何なる世界の科學的原理も否定することは出來ない。意志の強い人として有名な一婦人が言ふには『私の夫はどんな食物を食べるとよいかを醫者に尋ねた。その醫者さんは特別な食物を必要としない。私の選むものなら何でも食べても飮んでもよいと言つた』と他の人に話した。(譯者曰く、これは私でなく彼といふべきである）この言誤りの中に强固な綱領が明かに表現されて居る。

言誤りや一般的誤謬の一二ばかりでなく、尙大多數の誤謬が意味を有することを假定すると、今度は從來何等の注意を拂はれなかつた誤謬の意味が、吾々の最大の興味をひくものとなることは不可避的のことで、凡ての他の考へ方を撤回することも正當になつて來るであらう。かくして凡ての生理的並に精神生理的の條件を無視して、純粹

に意味又は意向の心理的研究に沒頭することが出來るであらう。この希望を證明するために尙大なる觀察材料を等閑に附しないであらう。

しかしこの企をなす前に、皆さんが私と共に他の手掛りに從つて來るやうに誘はうと思ふ。詩人は藝術的表現の爲に言誤りやその他の誤謬を利用することが屢々ある。この事實はその詩人が誤謬例へば言誤りに意味があると考へて居ることを證明して居る。蓋し詩人は故意にその誤謬をするからである。詩人は偶然的に筆の誤りをすることを許さない。筆の誤りはその役を演ずるものが言誤るやうに仕組んで居る。彼はこの誤謬によつて何かを表現しようと欲する。而して其は何であるか、恐らく其の人物が不注意であるか過勞して居るか、又は頭痛がしさうになつて居るかを表現しようと欲してるかも知れない。詩人が彼の意味を表現する爲めに誤謬を利用するとしても、其の重要なことを勿論誇張してはならない。實際に於ては誤謬は精神世界に偶然的に生じて意味を有しないかも知れない。只時々意味を有するかも知れない。尙詩人は自己の目的の爲に、その中に意味を注入して生氣化する權利がある。故に若し言誤りに就て、言語學者や精神病學者よりも詩人から一層多く聞くを得るとしても、それは決して驚くべきことではない。

この種の言誤りの例としてシルレルの著ワーレンシュタインの中から引用しよう。（ピコロミニー第一幕第五場）前の幕で若きマックス・ピコロミニーは熱心にワーレンシュタイン侯の味方になり、熱情的に平和の祈禱をして居た。彼はワーレンシュタインの美しい娘を陣屋に伴れて來る旅であることに氣がついた。彼が舞臺を去つた時に彼の父（オクタビオ）と廷臣クェステンベルヒとが吃驚して居る。第五場が續く。

クェステンベルヒ。嗚呼、そんなになつたか。友よ。彼がこんな狂氣になつたのをそのまゝにするか。吾々から離れて彼方に行かしむるか。直ぐに呼び歸して彼の目を覺ますやうにしないか。

オクタビオ。（深き思から甦り乍ら）彼は今私の目を開いてくれた。そして私は自分の喜ぶ以上のものを見て居る。

クェステンベルヒ。それはどういふことか。友よ。

オクタビオ。この旅への呪詛よ！
クェステンベルヒ。しかしどうしてか。それは何といふことか。
オクタビオ。來れ友よ！　私は直にこの不吉の兆に從はなければならぬ。而して私自身の眼で見なければならぬ。來れ友よ！
クェステンベルヒ。何を言つてるのか。汝はどこに行くのか。
オクタビオ。（急ぎ乍ら）彼女の所へ！
クェステンベルヒ。彼女の所へ……
オクタビオ。（訂正して）侯の所へ！　サア行かう。

オクタビオは「彼の所へ、ワーレンシュタイン侯の所へ」と言はうとして居たが、「彼女の所へ」と言ひ誤つた。この若き戰士が夢中になつて平和を祈るに至つた影響を彼が明かに認知した事を、「彼女の所へ」の言誤りが尠くとも吾々に表はして居る。

尙遙に印象を與へる例はシェクスピアーの中からランクが發見した事柄である。之は「ヴェニスの商人」の中にあるもので、好運の求婚者が三つの小箱の中から選擇するといふ有名な場面の中に發見される。今玆にランクの述べたことを簡單に紹介することが皆さんの理解に最も都合がよいと思ふ。

「シェクスピアーのヴェニスの商人の中にある言誤りは、全く詩人的感情によつて美しく表はされ、且つ方法の上からも立派に利用されて居る。之はフロイドが『日常生活に於ける精神病理學』の著書中に述べたワーレンシュタインの言誤りと同じく、詩人はかやうな言誤りの機構と意味とをよく理解し、觀察も亦それを理解すると考へて居ることが分かる。ポルシャは父の遺言に基き抽籤によつて夫を選ぶやうになつて居たが、好ましからぬ求婚者から幸運にも脫れて居た。最後にバッサニオが求婚者として表はれたが、彼女はその男を愛して居る爲めに、彼が小箱を間違へはしないかと恐れて居た。彼は彼女の愛を信頼してよいとポルシャは彼に言ひたかつた。しかし誓約の爲めに之を控へて居た。この內的闘爭を示す爲に、詩人は彼女をしてその求婚者に次のやうなことを言はしめた。

どうかゆつくりして下さい。あなたがやつて見るまで一日でも二日でも休んで。
若し間違つたのを選んだら私は友達を失ふことになります。だから暫く御辛抱なさい。
何者かゞ私に告げる（しかし其は愛ではない）
私はあなたを失ひたくない……
どちらを選んだ方が正しいかを敎へることが出來る。しかしさうすると誓を破ることになる。
決して誓を破りたくない。しかしさうするとあなたは私を失ふかも知れない。
しかし私が誓を破つた罪を負つてもよいとあなたが欲するならば。
あなたの眼を呪ひ倒せ。目が私を見渡し、私を二分した。
私の半分はあなたのもの、他の半分もあなたのもの、――いや私自身のものと言はう。
しかし若し私のもので、それからあなたのもので、そして全部があなたのもので。
彼女は全くその事を彼に隱さなければならなかつた爲に、只靜かに意中をほのめかしたかつたこと、並に誓約のあるに拘はらず、彼女は彼のものであり彼を愛して居たことを示す爲に、詩人は美しき心理的感情を以て彼女をして言誤らせるやうにしたのである。又この藝術的工夫によりて愛人の堪へ難き不安と、選擇の結果に對する觀客の緊張とを靜めることが出來る。』

尙注意して貰ひたい點は、ポルシャが言誤りの中にあつた二つの陳述を如何にも旨く一致させ、それ等の間の矛盾を解き、最後にその言誤りを是認して、

……しかし若し私のもので、それからあなたのもので、

さうして全くあなたのもので。

と言つた點である。

醫者の方面以外の思想家の中で、かやうな誤りの意味を觀察によつて發見し、この方面に於ける吾々の努力を豫想して居るものが時々あつた。皆さんは諷刺家のリヒテンベルヒ（一七四二――九九年）を御存じと思ふが、その

人のことをゲーテが次の如く述べて居る。「彼が滑稽を言ふ時には其の問題は隱されてある」。而して時々その問題の解決が滑稽の中に表はれる。リヒテンベルヒは滑稽的及び諷刺的記事の中に「彼は angenommen（譯者曰、これは動詞で、許されたの意）とよむべきを Agamemnon（古代希臘の傳說的英雄）と讀んだ、その位彼はホーマーに精通して居た。」

と書いて居る。これは實に讀み誤りの原理に外ならない。

次の講話に於て心理的誤謬の意味が詩人の考へとどの位一致するかを調べて見ようと思ふ。

第三講　誤謬の心理――續き――

前回の講話に於て、誤謬はそれが關係して居る計畫的行爲に對する關係から考へないで、誤謬それ自らかによつて考ふべきこと、又或る場合にはそれ自身の意味を裏切るやうに見えることを知つた。尙又誤謬がそれ自身の意味を有するとの結論が廣い範圍に於ても主張し得るとすれば、誤謬の生ずる條件の研究よりもその意味の研究の方が一層興味を引くことが直に分かることをも述べた。

吾々が精神過程の「意味」を何と理解するかに就て今一度意見の一致をして戴きたい。意味といふことはその場合に働く意向と、精神系列に於けるそれの態度とに外ならない。吾々の調査する多くの場合に於て「意味」の語の代りに「意向」とか「傾向」とかの語を用ふることが出來た。所がそれは、その中の意向を見ることが出來ると信ぜられる誤謬の欺瞞的外見や詩的高上に過ぎなかつたか。

吾々は尙言誤りの例を引き續いて取扱ひ、かやうな尙多數の表はれを一瞥しよう。かやうにして言誤りの意向や意味の極めて明白なる場合の全部の種類が分かるやうになる。殊に自分が考へて居たことゝ反對なことを言ふやうな場合をも分かるやうになる。議長が開會に當りて「私は閉會を宣言す」と言誤つたが、その意味は極めて明白なことである。卽ちこの言誤りの意向及び意味は彼が閉會を欲して居たといふことである。或人は「彼は獨言を言つた」と言ふかも知れないが、吾人は彼の言葉によつてのみ彼を理解する。しかし之は不可能であるとか、或は彼が閉會

を望んで居たことをよく知つてるとか、或は彼自身の意向の最良判斷者と認められる彼自身が、閉會を欲して居たと確言するとか等の反駁をされないことを私は希望する。若し右樣の反駁を皆さんがするとすれば、誤謬その者を考察することに意見の一致を求めたことをお忘れになつたことになる。意向が障碍を被る關係に就ては後になつて述べることにしよう。英語で begging in question（先づさうとして置かう）と言つた問題を議論することは論理的誤謬の罪を犯すことになるであらう。

　言誤りの形式が意向したことゝ全く反對になつて居ない場合でも、尙矛盾の意味が表はれることが往々ある。「私は先任者の功績を評價する意向は無い」(geneigt) の例に於て、「意向」(geneigt) は「適する」(geeignet) ことの反對でないが、それは演說者が言はなければならぬ地位と全く反對した考が明かに告白されて居る。

　尙他の場合には、言誤りが意向した意味に第二の意味が單に附加される。この場合の文章は多數の文章が一に集約・省略・凝縮されたやうに聞える。意志の强い婦人が「彼は私の選擇したものを食べたり、飲んだりしてよい」と言誤つたが、それは次のやうな風に言つたやうに思へる。卽ち「彼は彼が選擇したものを飲み且つ食べることが出來る。しかし彼が選ぶといふことは一體どうしたことか。選擇の權利は私にある」と。言誤りは屢々この種の省約の印象を與へる。例へば解剖學の敎授が鼻腔に關する講義を終つた後、その組が、彼の言つたことを十分に理解したか否かを尋ねたが、よく分つたとの答を得た。それで言葉をつゞけて言ふには「恐らく分らなかつたと信ずる。蓋し鼻腔を完全に理解し得る人は數百萬の人口ある都市の中でも一の指で數へることが出來る。否一の手の指で數へることが出來るから」と。この省約された文章の意味は「この事項を理解する者が唯一人居る」といふことである。

　言誤りの意味が容易に發見の出來るやうな前述の種類に對立して、その意味が明白でなく、吾々の豫期に强く反抗する他の一群の言誤りがある。固有名詞を誤つて發音したり、無意味の音を發したりすることは、凡て是等の誤謬が果して意味を有するかとの疑問を直に發するやうに見える程、屢々生ずるものである。しかしかやうな例を一層精密に考察して見ると、その誤謬を容易に理解し得るといふことが分かる。實に是等の明白してないものと、前述の容易に理解の出來るものとの間の相違はそれ程大なるものでない。

馬の所有者が、馬はどんな風かと尋ねられた時に Ja, das *draut*……das dauert vielleicht noch einen Monat. と答へた。(譯者曰、draut は dauert の言誤りで、この答の意味は、も一月かゝるかも知れないの意である) これは實際彼が言はんと欲して居た事を尋ねられ、それは悲しむべき事柄 (traurige Geschichte) であると考へて居たことを答へたのである。即ち言誤りの draut は dauert (かゝる) と traurig (悲むべき) とが結合したものである。(メリンゲルとマイエル氏による)

又他の人が自分の氣に食はない出來事を物語つて居た際に、Dann aber sind Tatsachen zurn *Vorschwein* gekommen. と言つた。(譯者曰 Vorschwein を Schweinerei といふべきで、その意味は「是等の事實は卑しくなつた」の意) それはどんなことかと尋ねられて、彼はそれは言誤りで「この出來事が卑しむべきことになつた」と言ふ積りであつたと述べた。この言誤りの Vorschwein は Vorschein (表はれる) と Schweinerei (卑褻) とが結合したものである。

前に述べた一人の若い男が未知の婦人に向つて begleitdigen することを申出たことを、皆さんは記憶するであらう。その語は begleiten (隨伴する) と beleidigen (侮辱する) との二つに分けることが出來、且つこの解釋は證明を要せずして確實であると信じた。これ等の例からして一層不明瞭の場合は、話の二つの異つた意向の結合或は干渉として說明し得ることが分る。只言誤りの第一の型式に於ては、反對のことをいふやうに一の意向が全く他の意向に置換はるのであるが、第二の型式に於ては一の意向が他の意向を變化させ、その爲に多少無意味の外觀を呈する結合が生ずるといふ差異があるのみである。

多數の言誤りに就ての祕密を吾々は發見したと信ずる。若しこれを心の中に明瞭に保てば、從來不思議とされた他の種類までも理解することが出來るであらう。例へば名前を取違へる場合にそれが二つの似ては居るがしかし異つた名前の間の爭から生じたと考へられない時でも、倘第二の意向が容易に認知される。名前が變ることは、言誤り以外に極めて普通に起るものである。之は惡く響いたり、野卑に響くやうに企てるもので、敎育を受けた人ですら、之を避くべきことを知り乍ら倘且つ喜んで棄てない所の惡口の普通の形式である。それは又往々頓智と考へら

れることがあるが、勿論それは極めて低級のものである。かやうな名前の歪みに就ての厭はしき例を引用すると、フランスの大統領ポアンカレー(Poincaré)の名前が近頃 Schweinskarré に變つたことである。之は言誤りの背後に惡口的意向のあることが容易に推定される。かやうな考へ方を進めて行くと、同樣の說明が又滑稽や不合理の結果を生ずる言誤りの場合を暗示するやうになる。「私は皆さんに吾々の首領の健康を排斥することを要求する」と言へば、豫期しない言葉が闖入した爲めに、眞面目な氣分が妨害され、飾り氣のない表象が表はれた。この無作法な言葉は强ひられた尊敬に激しく抵抗しようとする傾向の表はれであると推測する外はない。かやうなことは、全く罪のない語が下品な語に變形した言誤りにも、適用が出來るのである。例へば Apropos (序に) が Apopos に Eiweisscheibchen (蛋白の小片) が Eischeissweibchen に變つて居る。

ある人に於ては、罪の無い言葉を娛樂の爲に下品な言葉に故意に變へる傾向のあることを吾人は熟知して居る。而してそれは頓智として許されて居る。實にかやうなことを聞くと、直ちに其は冗談として言はれたのであるか、或は何等の意向なく、單に言誤りとして言はれたかを尋ねなければならない。

所がこの誤謬の謎は比較的に何等の面倒もなく解答が出來るやうに見える。その誤謬は偶然的出來事でない。それは眞面目な精神的行爲である。それは意味を有し、二つの異なる意向の協力——寧ろ相互影響によつて生ずる。しかし吾々の努力のこの第一の結果を得たことを喜び得る前に、解答し決定しなければならぬ多數の問題と疑惑を私に浴せかけることをよく知つて居る。私は急いで結論を皆さんに强ふるといふ意志は毛頭無い。吾々は一々の事物を順々に冷靜に考察しようと思ふ。

皆さんは私に何を言はうと思ふか。この說明は言誤りの全部を說明すると私は思ふか、それとも或る一部を說明すると考へるか。この解釋は誤謬の多くの他の形式、誤讀、書誤り、忘却、やり損ひ、置忘れ等に適用し得るか。疲勞、興奮、自失、注意の障碍等が誤謬の心的性質に就て如何なる役目を演ずるか。尙又言誤りに於ける二つの相對立する意味の中、一つは常に表はれ、他は常に表はれて來るとは限らないことが明白に見られる。然らばこの後の意味を如何にして知ることが出來るか。若しそれを推測することが出來るとしても、その意味は蓋然的のもの

なるのみならず、眞實の意味であることの證據を如何にして發見するか。―皆さんはこの他尙何か質問すべきことがあるか。若し無ければ私の話を進めよう。吾々はこの誤謬その者に餘り價値を置かず、只精神分析學の見地上何等かの價値をそれ等の研究から知らうと希望したことを、玆に想起して貰ひたい。從つて私は次の質問を提出する。他の意向に干渉するやうな意向は如何なる種類の目的又は傾向であるか。又その干渉する意向と他の意向との關係は如何なるものであるか。この問題の解決に對して吾々の任務が新に初まつて來る。

然らばそれが言誤りの凡ての場合の說明になるか。私は說明になると大に思つて居る。蓋しその一の場合を吟味すれば、此種の解釋が得られるからである。しかし言誤りはこの機構なくしては生ずることが出來ないといふことは證明出來ない。この機構なくしても言誤りは生ずるかも知れないが、それは吾々の目的に對しては理論上無頓着である。蓋し精神分析學の紹介の爲に引用せんと欲する結論は、假令言誤りの現象の一部分のみが說明し得られるとしても――慥かにさうでないが――尙價値があるからである。この說明が他の形式の誤謬にも適用出來るかとの第二の疑問に對しては、豫見的に「然り」と答へ得ると思ふ。書損ひややり損ひ等を考察する時に、これのことを皆さんは確信することが出來る。しかし言誤りその者も一層徹底的に考察するまで、方法上の根據から、之を行ふことを延期しようと思ふ。或著者は血行の障碍、疲勞、興奮、注意の散漫等を重要視したが、それ等の要素は吾々に對して如何なる意義を有し得るかの質問は、若し吾々が言誤りの心的機構を前述の如く許すならば、一層詳細なる解答を要求する。吾々がこれ等の要素を拒斥しないことに皆さんは氣付くであらう。他の領分で主張された事物に對して精神分析學が爭をするやうなことは一般に度々起らない。通常精神分析學はこれまで言はれてある事柄に何物かを附加するだけである。而して從來看過された所のものが、今精神分析學によつて供給され、それがその事柄の最も主要なる部分となるといふことは慥かに屢々起つてくる。輕い病氣、血行障碍、疲勞狀態等が言誤りに及ぼす生理的影響は日常の經驗から皆さんはよく知つて居られるから、玆に尙多くをいふ必要はない。しかしその事實に就て殆んど說明されてない。就中それ等は誤謬を生ずる必然的條件でない。言誤りは又完全なる健康並に正常の狀態にも同樣に生ずる。故に是等の身體的要素は、單に言誤りを生ずる特殊の精神的機構を容易にし且つ有利にす

る價値を有するに過ぎない。此關係を明かにする爲に、別に適當の用例を知らないから、嘗て述べた說明を玆に繰返すことにする。ある暗い夜に寂しい所を散步して居た所が追剝に襲はれて私の時計と錢を取られたと假定せよ。而して追剝の顏を明瞭に見ることが出來なかつたので、警察署に行つて次のやうな訴をした。「寂しさと暗がりとから私は價値あるものを失つた」と。それで巡査は次のやうな答をするかも知れない。「あなたは極端な機械的說明を不正にも抱くやうに見える。吾々は寧ろその事件を次のやうに敍述する。暗がりの上に無人であつた爲めに、未知の追剝が出て、あなたの價値のあるものを奪ひ去つたと。吾々が追剝を追跡するといふことが、あなたに取つて主要なる事柄のやうに見える。恐らく吾々はその品物を追剝から取返すことが出來るであらう」。

興奮、自失、注意の散逸等の精神生理的要素は說明の目的に何等の用をなさない。それ等は單に言句であり、壁に過ぎない。而してその壁の後方を見ることを思ひ止まつてはならぬ。興奮や特殊の注意の散逸は何から生ずるかが寧ろ疑問である。音の價値、語の間の類似、一定の語に結合した普通の聯想等の影響も亦重要事として認めなければならぬ。是等はその行くべき道を指示するので言誤りをして容易ならしめて居る。しかし吾々の前に道があるからと言つて、必ずその道を行かなければならないのであるか。私は又私の選擇を決定する動機を要求し、尙且つ私を前方に推進する或る力を要する。故に音の價値とか語の聯想とかは、恰も身體的條件と同樣に言誤りを容易ならしめるもので、言誤りその者の眞の說明を與へることは出來ない。試みに私の話に用ひて居る語が、音の類似とか、反對の意味との聯想とか、屢々聯合的に使用されたとか等の爲に障碍を被つたやうに見えない數多の場合のあることを考へて見よ。尙哲學者ヴントと同じやうに、聯合の傾向が身體的疲勞の爲に、本來の意向を壓服する際に言誤りが生ずると考へることも出來る。若し多くの場合に身體的原因が缺如したり、又他の多くの場合に聯想の優越性が發見されなかつたりする事實が無いといふ吾々の經驗に矛盾しなければ、前述の主張は全く眞理らしく見えるやうである。

しかし相互に干渉する二つの傾向が如何なる手段によつて確定されるかの第二の疑問が特に私に興味がある。この疑問が如何に重大であるかを皆さんは恐らく疑はないであらう。二つの傾向の中で、妨害を被つた方は明白に表

はれ、言誤りをした人はそれを知り且つ承認する。之に反して妨害を與へる方の傾向に就ては、疑惑や躊躇が表はれる。或場合にはこの他の傾向が一樣に明白に表はれることを吾々は既に聞いて居るし、皆さんも確かにそれを忘れて居ないことゝ思ふ。若し言誤りの結果を生ぜしめる勇氣があれば、その結果からして如上の事は證明される。自分の思つて居たことゝ反對したことを言つた議長は議會を開くことを望んで居たことは明かである。しかしそれと同時にそれを閉ぢることを欲して居たことも明白である。之はそれ以上の説明を要しない程明瞭である。しかし妨害を與へる傾向がそれ自身を十分に表はさないで、單に本來の言葉を歪むといふ場合には、その干渉する傾向をその歪みの中から如何にして發見し得るか。

それは干渉を被つた傾向を發見すると同じく極めて安全に且つ簡單なる方法で發見することが出來る。話者が言誤りをした後に、彼が最初考へて居た語を言直す場合を考察して見よ。例へば Das draut, nein, das dauert vielleicht noch einen Monat.（この譯は第二四頁にあり）の場合に、干渉する傾向は彼によつて表白されて居る。「何故に汝は最初 draut と言つたか」と尋ねて見よ。彼は「traurige Geschichte（悲しき出來事）といふ積りであつた」と答へる。又 Vorschwein と言誤つた時に尋ねると、「それは Schweinerei（不潔の事）といふ積りであつたがそれを抑壓して他の言葉で置換へた」と答へる。かやうに干渉する傾向の發見は、干渉される傾向のそれと同じく確實に達せられる。是等の起原やその説明が私自身や或は私の支持者によつて與へられなかつたものを用例として選んだのは特に考があつてしたことである。是等の言誤りとその説明との二つの間に或る質問を挿入することは、説明を得るに必要である。吾々は先づ話者に向つて何故に言誤りをしたか、どんな説明をそれに對して與へ得るかを尋ねなければならぬ。さうでなければその説明を求むることなくして言誤りを其のまゝにして置くかも知れない。しかし尋ねられると、彼は答として思ひついた第一の考を述べる。而してこれの中間に少しく尋ねてみることゝ、その結果とが既に精神分析學を構成すること、並にこれは後に説明しようとして居る精神分析的研究の見本であることを皆さんは御分りになるであらう。

皆さんが精神分析學を少しく了解し初めた、この瞬間に於て、皆さんの心中にそれに對する反對が直に生ずるで

あらうと推測することは、餘り皆さんを疑ひ過ぎたことであるか。言誤りをした人に尋ねて得た報告は完全に信頼し得る證據となり得るか、と反對するを好まないであらうか。彼は言誤りの說明に對する皆さんの要求に副ふやうに望むことは自然で、その說明に必要に見えるならば、思ひついた最初のことを言ふであらう。言誤りが實際にどうして起つたかの何等の證據は無い。故にその通りであつたかも知れないが、又それと同じく他の通りであつたかも知れない。尙又その場合により適合し、或は一層よく適合する如き或る他の事柄が彼の心中に生じたかも知れない。

皆さんが精神的事實に對して如何に尊敬を拂はないかは注意すべきことである。今或る人が或物質の化學的分析を企て、その一原素は何々ミリグラムの重量があると決定したと假定せよ。かやうにして得た重量から或結論を引出す事が出來る。所がこの原素はその他の重量を有するかも知れないとして化學者を皆さんはこれまで疑つたか。何れの者もその重量を信じて、その上に尙他の結論を建設する。所が質問を發した人がこの考へが生じて、その他の考へは起らなかつたと答へる場合の精神的事實に就ては、それを價値あるものとして承認せず、或は他の事柄が生じたかも知れないと疑ふのである。捨てることを欲しない精神的自由といふ錯覺に皆さんが囚はれて居ることは眞理である。この點に於て私は皆さんの見地に對して最も鋭き反對を言はなければならぬことを遺憾とする。

皆さんは他の點に於ける攻擊をなす爲に、此處で前のことは打切りにして、次のやうなことを述べられるであらう。卽ち分析した人をして「其の問題の解決を言はしめることが精神分析學の特殊の方法であるといふ事を理解する。今一例を取つて見よう。食後の一演說者が主人の健康に嘔氣を催す(aufstossen)やうに會員に求めた。この場合の干渉傾向は惡口であつて、之は健康を祝福すると言はんとする意向に反對した傾向であると、汝は說明する。しかしそれは言誤りから離れて行はれた觀察に基いた、汝の側の說明に過ぎない。若しこの場合に言誤りの原動に尋ねることが出來れば、惡口の意向であるとする汝の見解を支持しないで、寧ろ反對に激しく之を否定するであらう。この明白なる否定に對して、汝は何故に證明し難き解釋を棄てないのであるか」と。

この時に於て皆さんは幾分恐るべき事柄を捜し出した。私はその未知の演說者を自身に描き出すことが出來る。

彼は恐らく祝福される主人の助手であつたであらう。而して恐らく若い教授でしかも最も將來ある青年であるに相違ない。その者が主人の祝福に對して幾分反對の感情を抱いて居なかつたと確言し得るか否かを、私は彼に强ひて尋ねて見たい。茲に於て彼はひどい目に逢ふやうになる。卽ち彼は我慢が出來なくなつて突然私に突擊して來て、「汝は既に尋問に窮したのであらう。然らずんば私は不愉快に堪へない。汝の嫌疑で私の經歷は破壞せられるであらう。私は anstossen (祝福する)の代りに aufstossen (嘔氣を催す)の字を用ひただけで、其は auf の接頭語をその前に二回も使用したからである。それはメリンゲルの所謂執着現象で、それ以上その言葉の中に何等の意味はない。分りましたか。それで澤山」と言ふであらう。實に之は驚くべき反動であり、眞に有力なる否認である。私はその青年をどうすることも出來ない。しかしその男は自己の言誤りが何等の意味を有しないことに就て、强き個人的興味を有することを裏切つて居るやうに思はれる。恐らく皆さんはこの純粹の理論的研究に對して、青年がそんな無禮なことをいふのは正しくないことに同意されるであらう。而して結局その青年は自分が言はんと欲した事、並に言ふまいと思つた事を知つて居るに相違ないと。皆さんは考へられるであらう。

彼は自身に果して知らなければならないか、それには尙疑問がある。

皆さんは私を手で捕へたとお考へになる。而して皆さんは次のやうなことを言はれる。「それが汝の手段である。言誤りをした人が、汝の見地に適するやうな說明を與へた時に、その事項に對する最後の證據であるやうに宣言する。彼も亦自分でその通り考へる。しかし若し彼の言つた事が汝の書物に一致しないならば、汝は直ちに彼の言つたことは價値のないもので、それを信ずる必要がないと斷言する」と。

それは慥かにその通りである。しかし私は同樣に著しき場合の他の例を示すことが出來る。被告が自分のした事を告白すると判事は彼を信じ、之を否定すると彼を信じない。さうでなければ法律の保護が得られなかつた。而して時々の誤りはあつても、大體に於てその組織は旨く行はれて居ることを、皆さんは許すであらう。

「そんなら汝は判事であるか。言誤りをした人は汝の所に訴へられるか。言誤りは犯罪であるか。」

吾々はこの比較ですらも恐らく排斥する必要はない。併し明かに害のない誤謬の問題を研究する吾々の企が、ど

の位深く立ち入つた區別をなし得るかを見よ。而してその區別はこの狀態ではどうして一致させるかを吾々は全く知らない。故に判事と罪人との類推をした根據に就ては、當分の間そのまゝにして置く事を皆さんに願つて置く。誤謬の意味は分析を受けた人がそれを承認する時に疑もなく許容されることを、皆さんは私に許すであらう。その代りに、疑問になる意味に對する直接の證據は、その者が吾々に報告を拒む時には得られることの出來ないことを皆さんに許すであらう。これはその本人が吾々に報告しに來ない時にも適用されるは勿論である。又法律上の手續と等しく、判決をなす爲には證據物に賴るのであるが、その證據物の眞實は時として多く、時として少き蓋然性を有して居る。法律に於ては犯罪は實際的根據からして情況證據によつて決定されなければならぬ。こゝではそんな必要はない。しかしかやうな證據を考へることを禁ずるやうに拘束されない。科學は嚴密に證明された命題のみから成り立つと信ずるのは誤謬であるし、又そんなにあらなければならぬと要求するのも不正である。この要求は宗教的問答を他の科學的のものによつて置換へることを必要とする典據熱求者によつて高上される。宗教問答に於ては科學は只僅かの明白なる教規を有し、その他は蓋然性の種々の程度に發達した主張から成り立つて居る。若し人が確實性に近いものを以て滿足したり、最後の確證が缺けて居るに拘らず構成的作業を續け得るならば、それは科學的思考方法の一の表號である。

　しかし、被驗者が分析の際誤謬の意味を何も說明しない場合には、吾々の解釋の出發點卽ち吾々の證據に對する證明を何處に發見するか。それは種々の方面から發見する。先づ第一に誤謬によつて生じなかつた所の一樣の現象から類推する。例へば誤つて名前を言ひ損ねたことが、故意に名前を間違へたと同樣な輕蔑の意向を有すと主張する。それから誤謬の生じた心的狀態から類推し、誤謬をした人の特質に就ての吾々の知識から類推し、又誤謬の前にその者が受けた印象から類推する。一般に吾々は一般的原理によつて誤謬の意味を發見することをする。しかしそれは最初の間は推測、試驗的解決で、心的狀態の研究によつて後に發見される證據である。時としては、吾々の推測を確實のものと發見する前に、誤謬によつて豫示された其の後の發達を待つ必要がある。

　幾つかの好適例を有すとは言へ、言誤りの方面のみに說明を限定するとせば、前述の證據を容易に汝に示すこと

は出來ない。婦人を begleitdigen しようと言つた靑年は實際極めて臆病である。夫をして妻の好む通りに飲食せしめるやうな婦人は家庭に於て夫を支配する意志の强い婦人であることを知つて居る。或は次の好例を示さう。或る倶樂部の總會に於て一人の靑年會員が烈しき反對演說を試みた。その話の中に、彼はその會の委員の名を Herrn Ausschussmitglieder（委員諸君）と言はずして Herren Vorschussmitglieder（貸主諸君）と言つた。それは一見 Vorstand（總理）と Ausschuss（委員）との二語が結合したやうに見える。しかし尙深い事情が伏在する。彼の反對演說の中に或る妨害的傾向が生じて、それが委員の觀念と或る仕方に於て結合したと考へなければならぬ。その事情を知つた一人が私に告げるのに、その靑年は絕えず金錢に缺乏し、その時錢を集めようと企てゝ居たと。從つて妨害を加へた傾向は實際次のやうな思想に飜譯が出來る。卽ち「今少しく溫和に反對せよ。それ等の人々は汝に借金（Vorschuss）をなさしめようと欲して居る」と。

若し他の方面の誤謬を擧げるとすれば、かやうな證據の多數の例を皆さんに示すことが出來る。熟知して居る人の名前を忘れて、假令努力してもその記憶を保つに困難を感ずるならば、その人はその名の持主に對して何か反感を有するか、或はその名を思出したくないといふことを推察するに難くない。この種の誤謬をした心的狀態の曝露を次に述べよう。

Yは一人の婦人を愛して居たが、しかしその婦人は彼を愛せず、暫くの後Xと結婚した。YとXとは知り合の間で、且つYは商業上の關係で、時々Xの名宛を書くことがあるが、しかし何時もよりXの名を忘れる。Xに手紙を書く必要にせまられる場合には、他の人に尋ねなければならぬことが往々あつた。之は明かに幸福なる愛の競爭者のことを全く忘れて仕舞ひたい爲である。

又或る婦人は、處女時代の姓のみが思ひ出されて結婚先の姓を忘れる傾向があつた。所がその婦人はその結婚に烈しく反對し、夫を非常に嫌つて居ることを自白した。

名を忘れることに就ての他の關係に就ては、後に多くを述べようと思ふ。そこで玆では只忘却に表はれる心的狀態のみを述べることにする。

決意したことを忘却することは、その意向に反對して働く感情の流に一般に歸着せしめることが出來る。しかしこの見解を有するものは單に精神分析者ばかりでない。この原理を拒む所の人々の日常事項に於ける普通の態度である。保護者が被保護者の要求を忘れたことの言譯をする場合に、只忘れたといふ言譯では被保護者は滿足しない。被保護者は直に次のやうに考へる。「それは彼に取つて何等の利益がない。彼は約束はしたが、それをしたくないのである」と。或る關係に於ては、忘却は人生に於て禁止される。かやうにこの誤謬に就ての通俗的考へと精神分析者の考へとの差は驅逐されるやうに見える。來客があつた時に主人が「今日どうして御出ですか。あゝ私はあなたを今日招待したことを全く忘れて居た」と言つたり、又靑年が愛人と前に約束した日を全く忘れたりする場合を想像せよ。その者は決してそれを恕することをしないであらう。而してその瞬間から、最早尋ねて行くまいといふやうな疎隔を生じたり、或はその日から彼女は通信を拒絶するであらう。軍隊では忘却の言譯は無價値で、罰を免れないといふこと、並にその仕方は正當のこととして認められることを吾々は凡て知つて居る。茲では孰れの人も或る誤謬には意味があり、又その意味は何であるかに就て意見が急に一致する。處が他の誤謬にまで、この見解を適用して、明かにそれを承認する程、孰れの人も徹底的でないのは何故であるか。之に對する答は又自然にある。

決意を忘れることの意味を普通人が疑はないとすれば、詩人が同樣の意味で誤謬をすることに皆さんは驚かないであらう。ショウの書いた「シーザーとクレオパトラ」を見又は讀んだ人は、シーザーが最後の幕の處で出立する際に、何かしようと思つて居たが、今それを思ひ出せないで居ることを御記憶になるであらう。遂にシーザーはそれが何であるかゞ想ひ出された。それはクレオパトラに別辭を告げることであつた。この少しの工夫によつて詩人は偉人シーザーに優越の感を歸せしめようと企てた。尤もシーザーは優越の感を有して居なかつたし、且つ其の優越を希望しても居なかつたのである。シーザーはクレオパトラにローマの方へ從つてくるやうにし、シーザーが弑せられ、その後ローマを逃れるまでクレオパトラは彼女の子供のシーザリオンとローマに住んで居たといふ史的典據から、前の詩人の企を知ることが出來る。

決意の忘却の場合は極めて明白で、誤謬の意味の指標を心的狀態の中から發見しようとする吾々の目的に對して

何等の用をなさない位明瞭である。故に吾々は事物を置忘れたり失つたりするやうな、極めて不明瞭な誤謬の形式に移つた説明を試みよう。屢々苦痛の出來事である所の事物の忘失に何等かの目的があるといふことを皆さんは俄かに信じないであらう。しかしそれには無數の實例がある。一人の靑年が大變に氣に入つて居た一本の鉛筆を失つた。二三日前彼は次のやうな言葉で結ばれた手紙を義兄から受取つた。『汝の輕薄と怠惰を勵ますやうな時間も趣味も目下の處有して居ない。』所がこの鉛筆はその義兄からの贈物であつた。この適合が無かつたならば、吾々はこの忘失がその贈物から免れようとの意圖があつたと、勿論主張することは出來ない。同樣な事件は尙多數ある。若し贈與者と爭をして、その人のことを思ひ出したくないと望む時には、その贈物を失つて仕舞ふ。又その人に厭氣が生ずると、それよりも異つたもの或はより善きものを求めようとして種々の口實を要求する。事物を落したり破つたり壞したりすることも、亦同樣の目的に勿論使用される。子供がその所有物例へば時計やカバン等を、誕生日の前に失つたり壞したりするのは、單に偶然的のこと考へることが出來るか。

自分で何處かに置いて、それを搜し出すことが出來ず、困難を十分感じた經驗のある者は、かやうな置き忘れに對して何等かの意向があつたと容易に信じないであらうことは確かである。しかし置き忘れの行爲に隨伴して居る事情は、その物を一時的又は永久的に捨てようとの傾向を示すことは決して稀有のことでない。この種の最も好き例は恐らく次の事實であらう。

一靑年が次の話を私に告げた。『數年前私と妻との間に誤解があつた。彼女は餘り冷淡であると考へた。假令彼女の卓越した性質を認めては居たが、全く愛なくして同棲した。一日散步から歸つて來て、彼女は一册の本を持つて來た。それを彼女は私が興味がると考へたのである。彼女の些少の心付きに謝辭を述べ、讀むことを約束して私の品物の中に入れたが、それ以後全く發見することが出來なかつた。數ケ月經過して、時々その見棄てた本のことを思出し、それを搜したが無效であつた。約六ケ月の後、遠方に住んで居た私の親愛する母親が病氣になつた。妻は私の母を看病するために家を出發した。母は病氣が非常に重くなつたが、その看病によつて妻の最良の性質が表はれて來た。一夜私は妻に對して、熱誠と感謝とを抱いて家に歸つて來た。机の方に步いて行つて、その中の或る

抽出しを開けたら、度々捜して見えなかつた本が其所にあつた。尤もこの抽出しを開けることは何等の意向もなく、單に一種の夢遊的確實を以て一定の抽出しを開けたに過ぎない』。

動機の消失と共に、失はれた事物の發見の不可能も消失して仕舞つた。

私はかやうな例を無數に集めることが出來た。しかし今は左樣なことをしないことにする。拙著『日常生活に於ける精神病理學』（一九〇一年初版）を御覽になれば、誤謬の研究に關する幾多の例を發見されるであらう。凡て是等の例は同じ事を再三再四說明して居る。是等の例は、誤謬には意味のあることを信ずるやうにし、又それに伴ふ事情から其の意味が如何にして推測され確證されるかを示すであらう。吾々は今日精神分析學の序論を取扱つて居るから、玆では是等の現象の研究に制限を加へようと思ふ。只私が言はねばならぬ二種の事項がある。それは累積され結合された誤謬と、その後の出來事によつて吾々の解釋を確實にすることゝである。

累積され結合された誤謬は慥かにこの種類の中の最高の花である。若し吾々が誤謬には意味があることを證明するだけであれば、この種の誤謬のみを取扱つた方がよい。蓋しこの場合の意味は最も鈍い智慧の者にも間違を生じないし、且つ最も多くの批評的判斷を强ふる程、明瞭に知られるからである。誤謬の出來事が反復されることは、何か固執して居るものがあることを示し、それは偶然の性質を帶びることなく、計企の觀念によく適合した出來事である。一種の誤謬が他の種の誤謬と取變ることは、誤謬に於ける最も必要なる要素が何であるかを示すものである。卽ち誤謬の行はれた形式とか手段でなく、それを行つた傾向が示される。而してその傾向は種々な方法でその目的を達することが出來るものである。今反復された誤謬の一例を示さう。ジョーンスは嘗てその理由を知ることなく、數日間机の上に手紙をそのまゝにして居たことを述べて居る。結局彼はそれを投函したが、宛名が書いて無いので郵便局から戾つて來た。それで今度は名宛を書いて投函したが、今度は切手を貼らずに出して仕舞つた。遂にこの事から彼はその手紙を出すことを好んで居なかつたことを白狀しなければならなかつた。

他の例に於ては、誤つて事物を取上げることゝ、それを置き忘れることゝ結合して居る。一人の貴婦人が有名なる藝術家の義兄とローマに旅行した。所がローマ在住の獨逸人から歡待されて、種々の贈物を貰つたが、その中に

古代の金牌もあつた。義兄はその貴重な參考品を餘り賞玩しないので、その婦人は當惑して居た。妹が來たので、その婦人はローマを去つて歸宅した處が、間違へて自分の包みの中に金牌を入れて持歸つたことに氣がついた。そして如何にしてそれを入れて來たか少しも知らなかつた。その婦人は直ぐに義兄の方に手紙を書き、次の日その盜んだ品を返送する旨を言ひ送つた。所が翌日になると、其の金牌の置き所を忘れて、どうしても發見することが出來ず、從つて義兄に返送することが出來なかつた。而して遂に彼女は自分のうつかりした行爲はその品を手離したくないといふ欲求に基いて居ることに氣付き初めた。私は既に忘却と誤謬との結合の一例として、第一には約束の時間を忘れたことを述べた。第二にはそれを忘れないやうにと堅く決心して居たに拘らず、約束の時でない時に想ひ出したことを述べた。科學と文學とに興味を有する一友人が、自分の經驗談として、之と全く相似た例を私に告げた。曰く『二三年前或る文學會の幹事に選任されたことを諾承した。蓋しその會に關係して居れば、自分の作品を上演するに都合のよい時もあらうと思つたからである。餘り興味は無かつたけれど、毎金曜日には規則正しく其の會合に出席した。數ヶ月前自分の劇がFにある一劇場で演ぜられるといふ確證を得た。それ以來、その會に出席することを何時も忘れるやうになつて仕舞つた。この種の誤謬に就ての貴下の論文を讀んだ時に、自分の缺席の意味は、最早それ等の人々に用はないといふことであると考へて、自分を非難し、次の金曜には必ず出席しようと決心した。その決心を實行して、會議室の戸の所に立つたまで、この決心を常に反復再生して居た。所が驚くべきことには、戸が閉ぢられて會議は既に終つて居た。即ちその週の日を間違へて土曜の日に行つたのであつた』と。

かやうな例を澤山集めることは興味のあることであるかも知れない。が、之を措いて次に吾々は、吾々の說明が將來に於ける確認を待たなければならぬ場合を一瞥しよう。

是等の場合の主要な條件は、その當時の心的狀態が不明で、吾々の檢察に遠ざかつて居ることは勿論である。故にその當時は吾々の說明は餘り重きを置くことの出來ない假定に過ぎない。併し後になつて、吾々の以前の說明が正しかつたことを證明すべき事件が起つてくる。私は嘗て若い夫婦のお客になつた時に、笑ひ乍ら彼女の最近の經驗を語るのを聞いた。即ち新婚旅行から歸つた後、或る日主人が用務に出かけたあとで、彼女の妹を呼んで、以前

のやうに共に買物に行つた。不意に向側の通りを歩いて居る一人の男に目が留まり、妹をつゝきながら『御覧、あすこにKさんが居るよ』と言つた。彼女はその男が數週間彼女の夫であつたことを忘れて居た。その話を聞いた時に、私は身震ひがした。しかし推論を敢てしなかつた。數年後この結婚が最も不幸な終りを告げた時に、この小さき出來事を想ひ起した。

メーデルは一人の婦人が結婚の前日晴着を着てみることを忘れて、仕立屋を失望させ、結婚の當夜遲くなつて想ひ出した例を述べて居る。而して氏は、この事實と結婚後間もなく夫から離婚されたこととを關係せしめて居る。私は夫から離婚された一人の婦人を知つて居る。その婦人は何か金錢上の取引をする場合に、何時も舊名で證書に自署をして居た。私は又新婚旅行に結婚の指輪を失つた婦人を知つて居る。而してその婦人も遂にこの出來事に意味を與へるやうになつてしまつた。尙著しき例は一層よき結果を以て終つて居る。一人の有名な化學者は、結婚式の時間を忘れて、教會堂に行く代りに實驗室に行つた爲に結婚することが出來なかつた。しかしこの人は一度の試みで諦めてしまつて、老年まで獨身で死んだ程賢くあつた。

是等の例に於ける誤謬が、古代の緣起とか前兆の代りをするやうに見えるとの考を、恐らく皆さんは持たれたことゝ思ふ。前兆の或るものは、例へば倒れたり躓いたりする時のやうに、誤謬に外ならなかつた。他の種類の前兆は主觀的行爲よりも客觀的出來事の特質を有することは眞實である。しかし或る出來事が、第一の種類に屬するか或は第二の種類に屬するかを決するに、時々困難を感ずることを皆さんは信じないであらう。行爲は受動的經驗としてそれ自身を變裝することの屢々あることが分かる。

人生の可なり長い經驗を顧みることの出來る所の孰れの人も、他人との交際に於ける僅かの誤謬を前兆として解釋し、潛在せる傾向の徵候と認める程の勇氣と決心とを有するならば、多數の失望や苦痛の驚愕を避けることが出來たかも知れないと恐らく言ふであらう。しかし大抵の人は之をなすことを敢てしない。而して科學の廻り路によつて再び迷信的になるやうな印象を得る。實に凡ての前兆が必ず眞でない。吾々の原理からしてその前兆が、凡て眞であることを要しないことが分かるであらう。

第四講　誤謬の心理――續き――

誤謬が意味を有するといふことは、これまで縷々陳述して來た努力によつて確定的のものと考へることが出來、又この結論を基礎として、今後の研究を進めて行つてよいかも知れぬ。孰れの單純な誤謬も意味があることを、私は眞實であると考へて居るけれども、しかし之を主張しないことを――吾々の目的に對して主張するを要しないことを――今一度强調しようと思ふ。只吾々は種々の形式の誤謬には比較的屢々意味の存することを證明するだけで十分である。しかしこの點に於て種々の形式が或る差異を示して居る。言誤り、書記の誤り等の如き場合は、純粹に生理的原因の結果かも知れない。しかし姓名や計企を忘れたり、置き忘れたりする等の忘却に基く誤謬は、純粹に生理的原因の結果と私は信ずることが出來ない。所有物を失ふことは、或る場合には偶然のことゝ認められることが甚だ眞實らしく見える。吾々の見解は日常生活に生ずる誤謬の或る範圍にのみ適用が出來る。誤謬は二種の意向の相互の干渉から生ずる心的行爲であるとの假定の下に議論を進めて行く際に、是等の制限のあることを、皆さんは心に保持して居なければならぬ。

之が吾々の精神分析の第一の結果である。從來の心理學はかやうな干渉に就て少しも知らず、かやうな干渉がこの種の現象を生ずることの可能に就て少しも敎へなかつた。吾々は心的現象の領域を非常に著しく擴げることが出來、且つ以前には心理學の現象に歸しなかつた部分までも心理學の領域に歸することが出來た。

誤謬は心的行爲であるとの主張に暫らく止まることにしよう。之は誤謬が意味を有するとの以前の主張以上に何かを意味するのであるか。私はさやうに考へない。反對にそれは一層不定的の主張で、一層誤謬を引起し易い。精神生活中に觀察され得る何れの物も、時々精神現象として示されるであらう。しかし特殊の精神現象は直接に身體的・有機的・物質的作用に基き、その場合の研究は心理學に屬しないこともあるし、或は又他の精神過程から直接に生じて、有機的作用の系列は、その後方の或る點に於て初まつて居ることもある。吾々が一現象を精神過程と認める場合には、この後の場合を眼中に置く。從つて吾々の言說を次の形に表はすことが一層都合がよい。即ち現象は

意味を有すると。この意味といふことは意義・意向・傾向・心的連鎖の系列に於ける一の位置といふことである。

誤謬と極めて密接に關係して居る他の一群の出來事がある。但しそれは、誤謬といふ名を與へるに適當して居ない。それで吾々はそれ等を偶發的の前兆的行爲と名づける。これ等は一方にその行爲に反對し、妨害する第二の意向が存在しない點から誤謬と區別することが出來る。これ等は又何等の意向も無く無意味で無價値のやうに見え、剰へ明かに無用のことのやうに見える。他方には又情緒の表現として認められる容貌や運動に混入して、その間に何等の區別を見出すことが出來ない。遊戯に於ける如く明かに目的の無い凡ての行爲、例へば着物・身體の一部、手の屆く所にある事物を取扱ふ際の無目的の行爲、或はかやうな行爲の省略、又は獨りで唸る所の歌のやうなものも亦偶發的行爲の中に屬する。凡て、是等の行爲は意味を有し、誤謬と同じく說明が出來、且つそれ等は他の一層重要なる心的過程の僅かの指標であり、純粹の精神的行爲であることを私は主張する。しかし私は心的現象の是等の方面に低徊することを止めて再び誤謬に歸ることにする。蓋し誤謬を考察することによつて、精神分析學の硏究に於ける重要なる問題が一層明白に解決が出來るからである。

誤謬を考察する際に提出した最も重要なる問題で、しかも未だ解決を與へて居ないものは疑も無く次の樣な問題である。卽ち誤謬は二つの異なる意向の干渉から生ずといふ事で、その一方は干渉される意向で、他は干渉を與へる意向である。干渉される意向は、それ以上の疑問が起らないが、他の干渉する意向に就て吾々の知らんと欲する點は、第一に他を妨害するものは如何なる種類の意向であるか、第二に干渉する意向と干渉される意向との間に如何なる關係があるかといふことである。

言誤りを全部の系列の代表物として再び採用し、且つ第一の疑問の前に第二の疑問に先づ答へることを許されたい。

言誤りに於ける干渉傾向は被干渉傾向と、意味に於て聯關して居る場合がある。卽ち前者が後者と矛盾して居るか、或は後者を訂正するか、又は補充する。或は尙一層不明瞭であるが、しかし一層興味のある事例は、干渉意向が被干渉意向と意味に於て何等の聯絡のない場合である。

是等の二種の關係の中の第一の方に對する證據は、既に研究した例、又はそれに似た他の例によつて容易に發見することが出來る。自分の意味したことゝ反對なことを言ふやうな誤謬の殆ど大部分は、干涉意向が被干涉意向の意味に反對した意味を言表はしたもので、その言誤りは二種の互に相容れざる衝動間の闘爭を表はして居る。『予は閉會を宣言するが、しかしそれが閉會になることを欲する』といふことが議長の言誤りの意味である。收賄に就て非難された一政治新聞が、辯護の論說の中に次の意味のことを述べる積りであつた。『讀者は吾々が公共の利益に對し最も利己的でない仕方に於て常に努力しつゝあつたことを證明するであらう』と。所がかやうな辯護の言葉を書くことを委託された記者は『最も利己的の仕方に於て』と書いて仕舞つた。『予はこれを書かなければならぬが、しかし實際はさうでないことを知つて居る。』と彼は考へたのである。人民の一代表者がカイゼルに向つて rückhaltslos（腹藏なく）眞實を言はなければならぬと要求する際に、カイゼルの大膽さに恐れて居るとの內部の聲を聞き、且つ rückhaltslos（腹藏なく）といふべきを rückgratslos（背骨の無い、無效に）と言ひ誤つた。

短縮とか省略とかの印象を生ずる所の既に述べたる例の中には、訂正、附加、繼續の作用が行はれて居る。之は第二の傾向が第一の傾向と相並んで表はれて居るのである。『その事物がその時發見（Vorschein）された。しかし明らさまに言へばその物は不潔（Schweinerei）であつた』といふことが『その事はその時 Vorschwein された』（譯者曰く發見と不潔との二語が集つて一語となつて居る）と言誤られ、又『この事項を理解する人は一方の手の指で數へる位のものである。否實際それを理解するものは只の一人である』といふ意味が『一本の指で數へることが出來る』との言語の中に表はれて居る。『私の夫は自分の好む通りのものを飮み且つ食ふことが出來る。しかし私はこれを好んだり、あれを好んだりすることを彼に許さない』といふことが、『彼は私の好む所のものを食べることが出來る』と言誤られた。凡て是等の場合の言誤りは、干涉された意向の內容から起るか、或はそれと直接に聯關して居る。

二つの干涉する意向の間の關係の他の種類は不思議に見えるのがある。若し干涉傾向が被干涉傾向の內容と關係が無い場合には、どこからその干涉傾向が表はれるやうになり、又如何にして表はれるやうになるか。この間に對

し回答を與へ得る觀察によると、干渉意向は少し以前にその人を占領して居た思想の系列から表はれ、それが言葉に言表はされて居るか否かに拘らず、干渉意向に基く方法に於て、後に殘す影響によつて分かる。故に之は執着現象と名づけられる。尤も之は必ずしも話された言葉の執着とは限らない。この場合に干渉意向と被干渉意向との間の聯合關係は缺けて居ない。しかしそれは內容の中に發見されないで、寧ろ人工的に且つ屢々强行的に聯合が構成される。

玆に私自身が觀察した單純な例がある。嘗て綺麗なドロミッテで旅行に出立しようとして居る二人のウインナの婦人に逢つた。途中少しの間連れになつて、旅行家の生活の愉快や苦痛に就て議論を闘はした。一人の婦人は、かやうにして日を暮すことは多くの不愉快を惹起すと述べた。『一日中太陽の照る中を歩くと襯衣や……下着が全く汗に汚れるので、餘り愉快でありませぬ』この言葉の中で一箇所少しく躊躇するのを抑制しなければならなかつた。婦人はつゞけて言ふには『しかしそれから Hose に行くと取換へることが出來ます』(譯者曰く、此處では Hause (即ち家) に行くと言ふべきのを Hose (ヅボン) に行くと言誤つて居る)。吾々はこの言誤りを分析しなかつた。しかし皆さんは容易に之を理解されることゝ思ふ。婦人の意向は彼女の着物に就て、尙完全に其の品々、例へばシャツ、下着、ヅボンと列擧する積りであつた。しかし禮儀の動機から、ヅボンといふことだけが省略された。所が次の文章に於て、それの內容は全く獨立して居るに拘らず、前に言はなかつた言葉 Hose が、發音の似た言葉の Hause を變形させせて表はれて來た。

吾々は長い間繰延べて來た主要なる問題、即ち他の意向に干渉することによつて、この異常の仕方にそれ自らを發表しようとする意向は、如何なる種類のものであるかの問題に歸つて述べることにしよう。これ等の傾向は明かに多種であるが、しかし吾々の目的は是等の凡てに共通せる或る要素を發見することである。この目的の爲に一群の例を調べて見ると、それ等が三種の群に分類されることが直ちに發見されるであらう。第一群には干渉意向が談話者に知られて居て、且つ言誤りの前に自分に氣がつく場合である。例へば Vorschwein と言誤つた際に談話者はその出來事を不潔なこと (Schweinerei) と批評したことを許したのみならず、尙その言葉の中にこの考へを言表

はさうとの意向を有して居たことを許して居る。第二の群は干渉意向が談話者自身によつて認知されては居るが、言誤りの前にそれが心の中に働いて居たことを氣付かない場合である。從つてその人は吾々の解釋を承認する。但し或る程度までは驚くのである。この種の態度の例は言誤りよりも他の誤謬の中に一層容易に發見される。第三の群は干渉傾向の解釋が談話者によつて強く否定される場合で、言誤りの前にその傾向が働いて居たことに反對するのみならず、それは全く彼には無關係であることを主張する場合である。あの「嘔氣」の場合を回想して御覽なさい。それは干渉傾向の發見によつて私は烈しく反對を受けた。これ等の場合に對する吾々の態度に就て、私と皆さんとの間に未だ一致して居ないことは御存じの通りである。私は食後の演說者の否定を無視して私の解釋に固執するであらう。然るに皆さんは、演說者の熱心さに感動して、かやうな解釋を棄てゝはならぬといふことを怪み、分析しない前と同樣に純粹の生理作用として仕舞はれることゝ私は推察する。皆さんは、驚かすことは何であるかを想像することが出來る。談話者の何も知らない意向が彼の言葉によつて表はれること、又その意向を種々の指標によつて推定し得ることを私の解釋は假定して居る。かやうに新奇に且つ意味深重なる結果を有する結論に對して、皆さんは躊躇されることゝ思ふ。それが正當であると皆さんが理解するに至るまでは、皆さんの躊躇を許すことにしよう。しかし只一事を明白にしたい。若し皆さんが多くの例によつて確められた誤謬の觀念を、その論理的結論にまで運ぶ意志があれば、この驚くべき假定を作るやうに決心したに相違ない。若し皆さんが之をなすことが出來なければ、今丁度獲得し初めかけた誤謬に就ての理解力を再び放棄しなければならぬことになるであらう。

三種の群が結合し、言誤りの三種の機構に共通なる點を暫らく說明しよう。この共通要素は幸にも明白である。最初の二群に於ては干渉意向が談話者によつて承認されて居る。就中第一群に於ては言誤りの前にそれが表はれて居るといふ附加的事實がある。しかし兩者の場合に「推し返す」(Zurückdrängen)といふことがある。談話者はその觀念を話の中に入れないやうにと決心して居るが、舌が滑つて仕舞ふ。詳言すればその推し返された傾向が彼の意志に反して表はれて來る。それは彼に許されて居る意向の表現を變化し、或はそれと混合し、或は全くその代りになつて表はれて來る。これが言誤りの機構である。

私の見地から見ると、第三群に於ける過程を玆に述べた機構と完全に調和せしめることが出來る。只第三の群は意向の推し返すことの行はれる程度の差によつて夫々區別されて居るといふことを假定しなければならぬ。第一群に於ては意向が表はれ、言葉が話される前に旣に認知される。その時になつて初めて意向は拒否を被り、言誤りの中にそれに對する補償を行ふのである。第二群に於てはこの拒否が尙遠く後方に達し、意向が談話の前には少しも認知されない。而してその意向が言誤りに關與することを少しも妨げられないといふことは著しきことである。しかしこの狀態が第三群に於ける過程の説明を簡單にする。この意向は永い間表はれることを禁ぜられ、恐らく極めて永い間全く認知されず、從つて談話者はその存在を否定するとは言へ、私は誤謬の中に意向が表はれて居ることを大膽に假定する。しかし第三群の問題を離れて、他の場合からして次の結論を下さなければならぬ。卽ち或ることを言はんとする以前の意向の抑壓（Unterdrückung）は言誤りを生ずることに免るべからざる條件であると。

今吾々は誤謬の理解に對して一層進歩したと主張することが出來る。誤謬は意味や目的が認知され得る精神現象であり、又二つの異つた意向の相互干涉より生ずることを知るのみならず、尙その上に、この意向の一は他の意向と干涉することによつてそれ自からを表はし得るが、そのために、その表現に對して或る妨害を被らなければならぬことをも知つて居る。他の者に干涉をなし得る前に、先づそれ自身が干涉を被らなければならぬ。勿論之は吾々が誤謬と名づける現象に就ての完全なる説明を與へない。吾々は直ちに尙多くの疑問が起つてくるのを見る。蓋し一般に吾々が理解の方に進むに從つて、新しき疑問の發生が一層多くなることを豫知する。例へばその事項は何故に一層簡單に進行しないかといふ疑問が起る。若し或る意向がそれを實行することの代りに或る傾向を制限することが心中に起るとすれば、その制限はその傾向の何物たりとも表現の出來ない程成功するかも知れないし、或は制限された傾向が十分に表現し得る程失敗するかも知れない。しかし誤謬は妥協の產物である。それは二種の傾向の名に對し、一部の成功、一部の失敗を表はして居る。威嚇する意向は全く抑壓されないし、又或る場合を除いてはそのまゝ强行されることもない。かやうな干涉或は妥協の結果を生ずる際に、特殊の條件が存在しなければならぬことを想像することが出來る。しかしその條件は如何なる種類のものであるかを推測することが出來ない。又誤謬

の研究に尙深く進んで行くことによつて、是等の未知の事情を發見し得るとも考へない。精神生活の他の不明の方面を完全に吟味することが第一に必要である。而してその場合に遭遇する類推が、誤謬の一層深き說明に必要なる假定を構成する勇氣を吾々に與へてくれる。尙一の他の點がある。この方面に於て吾々が常になすやうに、僅かの指標から作業を進めることは危險を伴はないとは言へない。複合的偏執病といふ精神疾患があるが、この場合には僅かの指標を使用することが無制限に行はれる。而してかやうな基礎の下に建設された結論は、完全に正當であると論爭することは無論しない。只吾々の觀察を擴大することによつて、又精神生活の最も多く異なる形式から類似の印象を蒐集することによつて、この危險から免れることが出來るのである。

さて吾々はこゝで誤謬の分析を止めることにする。しかし吾々がこの現象を硏究した方法を、代表的のものとして記憶して置かれんことを要求する。吾々の心理學の目的は何であるかを是等の例から知ることが出來る。吾々の目的はその現象を記述し分類するのみならず、尙相互に共同し或は反對して働く所の心內の力の作用の指標として、又は目標の方へ努力する傾向の表現として、その現象を認めることである。吾々は精神現象の動的概念を得ることを努めつゝあるのである。吾々の努力する傾向は吾々の知覺する現象よりも、この概念の中に一層著しく表はれて居る。

故に吾々は誤謬の中にこれ以上深く入つて行かない。しかも單にこの全體の廣がりの上に一瞥を與へることにする。その道程に於て、吾々は既に知られた事物に再會し、又新しき方面を追跡するであらう。この際吾々は、硏究の始めになした言誤りの三つの種類、並にそれに加へるに書き損ひ、讀み誤り、聞き誤り、或は忘れた事項によつて、二次的に分類される各種の忘却（固有名詞・外國語・決意・印象の忘却）及び事物の置き誤り、取り損ひ、紛失等を離れないで話を進めることにする。吾々の關係する限りの是等の誤謬は一部は忘却の項目の下に分類され、一部は誤れる行爲の下に分類される。

吾々は既に言誤りの事を詳細に述べたが、尙少しく附加しなければならぬ。少しの情緖的表現が言誤りに關係して居る場合があるが、それは全く無興味のものでない。誰れも言誤りをしたと考へることを好まない。又自分で言

誤つた時に往々それを聞き落すが、他人が言誤つた時は決して聞落すことをしない。言ひ誤りは或る意味に於ては傳染性である。自分で言誤りを仕出かすことがなければ、それを說明するに全く容易のことでない。極僅少の言誤りの形式に於ても、其が隱れたる精神過程に特殊の光明を與へないとは言へ、その動機を發見することは困難でない。例へば或る人が長い母音を短く發音するならば、その動機が何れにあるに拘らず、その語の上に障碍を來す爲に、その次の短い母音を長くする。卽ち最初の誤りに對する補償をする爲に、新しき言誤りを行ふものである。例へば eu や oi の二重音を ei の如く不明瞭に且つ不注意に發音する場合にも同樣のことが生ずる。卽ちその次に來る ei を eu や oi に變化して、前の誤りの補償をする。之は談話者が母國語を取扱ふのに無頓着であると考へるのは許すべからざることで、聽衆に關する或る考察がその言誤りを規定して居るやうに見える。次に來る補償的の言誤りは、初めの誤りに聽衆の注意を引く目的を有し、又談話者の注意をも脫れなかつたことを聽衆に確證する目的を有して居る。最も屢々起る、餘り重要でない簡單の形式の言誤りは短縮されたもので、談話の不明瞭の部分の中に豫示される。例へば長い文章に於ける言誤りの場合は、意向を有する最後の言葉が以前の言葉の發音に影響を及ぼすものである。この最後の言葉は文章を完成するに堪へられないやうな一種の印象を與へ、文章の通信或は一般に談話に對して一定の抵抗を一般に示して居る。かやうにして吾々は言誤りの精神分析的概念と、通常の生理的概念との相違が混合して居る境界線に來た。これ等の場合には干涉意向が企圖した談話に反抗しつゝあると假定する。しかしそれは反抗の存在を示すのみで、その目的が何であるかを示さない。干涉意向によつて生ずる干涉は、音の影響や聯想的結合が生じ、企圖せる談話から注意が外れたものとして認められる。しかしこの注意の動搖の中にも、又影響を受けた聯想傾向に於ても、その出來事の本質は表はれて居ない。その本質は寧ろ企圖した談話に干涉する他の意向の存在の暗示として表はれて居る。故にこの場合には一層明白なる言誤りの場合に於ける如く、干涉意向の性質をその結果から發見することは出來ない。

これから述べんとする書き誤りは、之より新しき見解を豫期することが出來ない位に、言誤りとその機構が相似て居る。恐らく吾々はこの種類から少しく知識が附加されることで滿足するであらう。極めて有りふれた僅かの書

誤り、短縮、後の語、特に最後の語の豫示の如きは、書くことに對する一般的無興味や、之を行ふに堪へ無くなつたことを示して居る。書損ひに於ける一層明白なる結果は、干渉傾向の性質や意向が認知される。しかしその際に何が生じたかに就ては、吾々は常に確定することが出來ない。書誤りも亦言誤りと同樣に、誤りをする本人に少しも氣付かれないことが屢々である。次のやうな觀察はこの際著しきことである。何れの手紙も送る前に常に再讀する習慣の人があるのは勿論である。所が或る人は之をしない。しかしこの人が若し例外の行爲として、その手紙を再讀しようとすれば、その驚くべき書誤りを發見し訂正する機會を常に有して居る。然らば之を如何に說明すべきか。恰もかやうな人は字を書くに、これまで誤謬をしたことを知つて居るかの如く見える。しかし彼等がそれを知つて居ると吾々は信ずべきであるか。

書損ひの實際的意義と連關した興味ある問題がある。皆さんは殺人者Hの事件を回想するかも知れない。その人は細菌學者たることを主張して、科學的施設から非常に危險な病原菌の知識を得ようと望んだ。しかしその知識は彼の周圍にある人々をこの最も新しい方法で殺すことに使用された。この人は自分の受けた知識の無效なことに就て、それ等の施設の一當局者に對し、嘗て不平を述べたことがある。その際次のやうな書き誤りをした。卽ち『鼠とモルモット(Mäusen und Meerschweinchen)に就ての實驗では』と書くべきを『人(Menschen)に就ての實驗では』と明かに書いた。この書き誤りがその施設の醫師連の注意を惹いた。しかし私の知る限りでは、彼等はそれから何等の結論をも導き出さなかつた。偖て皆さんは之を何と考へるか。若し醫師連がこの書き誤りを告白と解して調査を初め、殺人者の行爲を未前に抑止する如き處置を取ることは一層善い事ではなかつたらうか。この場合に誤謬に就ての吾々の解釋を知らなかつた事が、實際に極めて重要であつたことの原因を忽せにしなかつたか。かやうな書損ひは慥かに私には大なる疑を引起すことを知る。しかしそれを告白と認めることに對しては重要なる反對がある。事件はそんなに簡單でない。書誤りは慥かに一の指標である。しかしそれだけでは調査を開始するに不十分である。その男が人間に病毒を傳染せしめようとの思想を有して居たことは、その書誤りの中に表はれて居る。しか

しその思想が害を加へんとの確定的計畫であるか、或は實際上重要でない單なる空想であるかを確實に示さない。かやうな書損ひをした人は最も强固なる主觀的確證を以て、かやうな空想の存在を否定し、その思想は全く未知のことに屬すと主張するのは可能である。後章に於て吾々が心理的實在と物質的實在との差を考察するに至つて、是等の可能性を一層よく理解することが出來るであらう。しかし之は又誤謬がその後に明白なる意義を有することを發見された一例である。

讀み誤りは言誤りや書き誤りと明かに異つた心的狀態に吾々を導く。こゝでは二つの矛盾する傾向の一が感官的興奮によつて置換へられる。從つて固執する程度が恐らく少い。吾々が讀んで居る所のものは、書かんとして居るときの如き吾々自身の心の産物でない。從つて大多數の場合に於て、誤讀は完全なる置換から成立する。文章とその誤讀の結果との間に、內容の連絡が必然的に存することなく、通常は語の類似によつて、異つた語が讀まれる語に置換へられる。リヒテンベルヒの述べた angenommen を Agamemnon と讀み誤つたことはこの種の好例である。誤謬を引起した干渉傾向を發見するには吾々はその讀まれた原文を全く棄てゝ差支ない。而して分析的研究は次の二種の疑問から初まる。即ち誤讀の結果に最も密接して表はれた最初の觀念は何であるか。又如何なる事情の下に誤讀が生じたか。この後の知識が誤讀を說明するに十分なる場合が往々ある。例へば或る人が知らない町を步いて居た所が非常に尿意を催した。第一階の所に Klosethaus といふ看板が出て居るのを發見した。しかし何故にこんな高い所に便所があるのかと怪しんで居る中に、その看板は Korsethaus と書いてあることに氣が付いた。本文と誤讀との間の內容の連絡がない場合には、完全なる分析が必要で、之は精神分析の技術を修得することなく、且つ之に對する確信の無い者には不可能である。しかし誤讀の場合の說明を習得することは通常困難なことでない。Agamemnon の例では、その置換へられた語が障碍を引起した思想を容易に示して居る。例へば目下戰時に於て、町や大將の名又は軍隊的表現語が、自分の知つて居る名前や表現に似て居る場合は、常にその通りに讀み誤るのである。即ち之は興味のあるもの、心を占領して居るものが、未知であり無興味であるものに置き換はつたのである。單言すれば思想の影が新しき知覺を暗くしたのである。

他の種類の誤讀は本文そのものが干渉傾向を喚起する場合に生ずる。この場合は通常その反對に變化される。自分の嫌ひなものを讀むことを要求される場合に誤讀するが、それを分析して見ると、讀むことを強く拒否することが誤讀の原因であることが分る。

最初に述べた、一層屢々起る誤讀の場合に於ては、誤謬の機構に對し最も重要なものとした二つの要素が明白に表はれない。卽ち二種の傾向間の爭鬪と、誤謬を生ずることによつて償却する所のそれ等の傾向の一を「推し返す」ことゝの二つの要素が著しくない。誤讀の際に何かそれに反對して生ずるといふのでなく、誤謬を生ずる思想内容の强行が、以前に行つた推し返しよりも遙かに明白である。これ等の二つの要素は忘却によつて生ずる誤謬の場合に最も明瞭に觀察される。

決意の忘却は全く一義的で、それの解釋は通俗の人ですら拒否しない。決意に干渉する傾向は常に反對の見地、卽ち不同意である。之に就てはその傾向が何故に異つた、或は少しく變形した形に表はれて來ないか、といふ疑問が一つだけ殘つて居る。蓋しこの反對傾向の存在に就ては、疑問を超絶して居るからである。時としては、この不同意を隱す必要のある何かの動機を發見することが出來る。その反對が明かに宣言されると、慥かにそれは非認されたものと解せられるのに、狡猾にも誤謬によつてその目的を達する。精神狀態に於ける重要なる變化が、決意の構成とその實行との間に生ずる時には、その結果として實行は最早要求されない。若しもその後その決意が忘れられる場合には、それは最早誤謬の種類に屬さなくなつてくる。而して誤謬に就て少しも怪しまなくなり、その決意を記憶することは不用のことであつたと考へる。かやうにして決意は永久的に又は一時的に抹消されて仕舞ふ。決意を實行することの忘却は、かやうな抹消が生じたと信ずることの出來ない場合にのみ誤謬と名づけることが出來る。

決意忘却の場合は吾々の研究に對して何等の興味もない位に、通常一様で、且つ見え透いて居る。しかしこの種の誤謬の研究から新しく學び得る二つの點がある。決意を忘却して之を實行しないことは、それに反對する傾向を指示して居るといふことを吾々は前に述べた。これは慥かに眞實である。しかし吾々の研究によると、この反對意志に直接と間接との二種がある。間接の方は一つか二つの例によつて十分說明が出來る。保護者が被保護者のことを

第三者にいふ場合には、その保護者に對して實際興味を有せず、又代つて願つてやる事を面白く思つて居ない爲めであるかも知れない。被保護者は兎角、保護者の失言をかやうに解釋するであらう。しかしこの事項は一層複雜である。決意の實行に對する反感は、保護者に於ける他の原因から來るし、他の點に向けられるかも知れない。保護者はその被保護者と關係する必要が全くないので、推擧しなければならぬ第三者の人の方へ向つたのである。玆に於て、吾々の研究を實際に適用する場合に如何なる反對があるかを皆さんは了解されるであらう。誤謬を正當に解釋するに拘らず、被保護者は餘り疑ひ深くなり過ぎる危險があり、保護者に對して重大なる不正を働く危險がある。又若し約束して出席することを決意したに拘らず、その約束を忘れるならば、その最も普通の原因は慥かに其等の人に面會することを好まないことである。しかし分析者はその干渉傾向が人間に關係せず、會合の場所と關係して居ることを證明するかも知れない。卽ちその場所と聯合した或る苦き經驗を避けるために忘却するかも知れない。或は手紙を投函することを忘れる場合に、その反對傾向は手紙の內容と關係してるかも知れない。しかしそれは手紙その者は無害であるが、その手紙からして、以前に書かれた他の手紙の筆者を回想し、それが反感の直接原因となつて居るかも知れない。卽ち何等實際に反對を有して居ない現在の手紙の方へ、以前の手紙の反感が轉移したと言ふべきである。かやうに吾々の是認した解釋を適用するには、制限と注意とが必要なること、並に心理的には同一であつても、實際には多樣の意味を有することを皆さんはお分りになつたことゝ思ふ。

かやうな現象は皆さんに不思議に見えるに相違ない。間接的反對意志は病的出來事の特質のやうに恐らく考へるであらう。しかしそれは健康で正常の者にも發見されることを私は斷言する。玆に於て又皆さんが私を誤解されないことを希望する。私は吾々の分析的解釋を信頼することの出來ないことを告白するのではない。計畫を忘れる事は多くの意味を含むことを旣に述べたが、それは一の分析も企てられない場合、或は吾々の一般的原理によつて說明しなければならぬ場合にのみ言へることである。若しその場合の人の分析が出來れば、その反感が直接的のものであるか、或はその原因が他のものであるかを確實に言ふことが出來るのである。

第二の點は次の如くである。執意の忘却は反對意志によつて先行されることを大多數の事實によつて證明し得る場合に、この結論を他の場合、卽ち分析された本人が吾々の分析して得た反對意志の存在を否定する場合にも適用し得る勇氣を得る點である。屢々起るこの種の例として、借りた本や借金を返し忘れる場合を取つて見よう。これはその人に、其の本を手元に置きたいとか借金を返したくないとかの意志あることを、大膽に吾々は述べるであらう。それに對してその人はその意志を否定するが、しかし彼の行爲に就て他の說明を與へることが出來ないであらう。彼はその意志を有して居たが、只それを意識しないのであると吾々は主張する。而してその意志は忘却の結果によつてそれ自らを表白して居るといふことで吾々は滿足する。彼は單にそれを忘れたといふことを再三反覆するかも知れない。今この狀態は、一度以前に吾々を置いた狀態であることを皆さんは認められるであらう。多くの事實によつて證明した誤謬の解釋を種々の場合に適用しようとすれば、必然的に次の假定を承認しなければならぬ。卽ち人間に於ける或る傾向は、その存在を意識する事なくして結果を生じ得ると。しかしこの假定からして、吾々は人生並に心理學に於て行はれる凡ての見解に對して反對する位置に吾々を置くやうになる。

固有名や外國の名や語を忘れることも同樣に、その名に對して直接又は間接に反抗する傾向を追跡することが出來る。私は既にこの種の直接的反抗に就て多くの例を擧げた。しかし玆には間接的原因の場合が澤山あり、且つそれを說明するに注意深き分析が一般に要求されて居る。例へば多くの愉快を中止することを餘儀なくした現時の大戰に於て、固有名詞を回想する能力が最も不思議な結合によつてひどく惱まされた。私は最近に Bisenz の Moravia 人の町名を記憶することが出來なかつた。而して分析の示す所によると、私はその事項に對して直接の反感を有して居ない。しかしそれが Orvieto の Palazzo Bisenzi の名に似て居た爲である。蓋しこの處で、私は以前に度々愉快な時を過したことがあつたのである。この名の再生に反抗する傾向の動機として、玆に初めて一の原理に遭遇する。卽ち再生すると、不快をも再生されるやうな不快と結合せる經驗を再生することに反對する所の記憶の嫌忌といふことである。之は神經的症候の原因に重大なる意義を有することが後になつて分るであらう。この回想又は他の精神過程より不快を避けるといふ傾向、卽ち不快に對する心理的恐怖は、名の忘却のみならず、多くの他

の誤謬、省略、錯誤の最も奥底に働く動機になつて居る。

しかし名の忘却は精神生理的に特に容易になるやうに見える。從つて不快の動機の干渉が生ずることの出來ない場合でもこの忘却が表はれる。誰でも名を忘れる傾向を有する時に、その名を好まないためとか、それに聯關して何か不快なことを回想するためとかばかりでなく、尙その名が一層親密なる聯想の或る他の連鎖に屬して居るために、名を忘却するといふことが、分析的研究によつて確證することが出來る。名は恰もそこに錨を下ろしたかの如く、その瞬間に働く他の連想に拒絶される。若し皆さんが記憶系統の技術を回想するならば、名を忘れないやうにするために、人爲的に持來した同樣の聯想の爲に却つて名が忘られて居ることを認知して驚くであらう。この種の最も著しき例は、人の固有名詞によつて與へられる。勿論固有名詞は異つた人に對して全く異つた價値を有して居る。例へば Theodor といふやうな第一の名を取れ。この名は或る人に對しては特殊の意義を有しない。所が他人に對しては父・兄弟・朋友或はその人自身の名となるかも知れない。分析的經驗によると、前の場合には或る他人がこの名をもつて居る事を忘れる危險がない。所が後の場合には、親密なる關係を維持するやうに見える名を未知の人に用ひることを絶えず嫌ふ傾向がある。今もこの聯想による禁止が不快の原理の作用並に間接的機構と聯合すると假定せよ。然らば名の一時的忘却の原因の複雜に就て、適當の觀念を形作ることが出來るであらう。しかし事實を公平に取扱ふ所の適當の分析によつて、この複雜なことは全く闡明せられるものである。

印象や經驗を忘却することも亦不快なる記憶を防ぐ傾向の作用であるが、それは名の忘却の場合よりも一層明白に且つ不變的である。勿論その全部の範圍が誤謬に屬しない。しかし其の忘却が一般的經驗の見地より判斷して著しきもの、又は不正當のものと見える限りに於てのみ誤謬の範圍に屬する。例へば最近の又は重要なる印象が忘れられ、或はよく記憶して居る系列の中から只一つだけ忘れるといふ場合はこの誤謬の範圍に屬する。吾々が一般的に忘却する能力を何故に又如何に有するか、又特に吾々の幼時の出來事のやうに最も深き印象を吾々に殘した經驗を如何にして忘れることが出來るかといふやうな問題は、不快の聯想を防ぐことが主要素となつて居る問題と全く別である。歡迎しない印象が容易に忘却されることは疑ふべからざる事實である。多くの心理學者は之に氣付いて居

た。偉才ダーウィンも之を氣付いて居たので、自分の學說に不利益な觀察は忘れ易いといふことを知り、特別の注意を拂つてそれを書留めることを金科玉條とした。

忘却は不快の記憶に對する防禦であるといふ原理を初めて聞いた人で、これに反對しないものは殆ど無い。即ち彼等の經驗によると、例へば悲哀とか侮辱とかのやうに、吾々の意志に反して吾々を苦しめるやうに、再生されて來て、不快の者は却つて忘れることが困難であると反對する。この事實は全く正當であるが、その反對は正鵠を失して居る。精神は相反する衝動の爭鬪する場所であるといふ事實を早く考へ初めることが大切である。或は動的の術語を用ひないとすれば、精神は矛盾と對になつた相反物とから出事上つて居ることを考へ初めることが必要である。一つの特種の傾向の證據は少くともその反對傾向を排除しないで、是等兩者の共存する餘地がある。茲に於て次のやうな問題が生じて來る。即ち是等の反對する者が如何にして相互に對立して居るか、又その中の一から或は他の者から如何なる作用を生ずるかとの問題が起つてくる。

事實を失つたり、置忘れたりすることは、それが種々の意味を有するために、且つ又この誤謬を生ずるに役立つ傾向の複雜なるがために、特に吾々の興味を惹く。是等の凡ての場合に共通して居ることは何かを失はんとの欲求である。只その欲求の理由や目的によつて、事柄が異つて來る。品物が破壞した時、或はもつと良いものと取換へようとの衝動を有する時、或はその者に注意するを止めた時、或はその物が不快を生ずるやうな人から來た時、或は考へようと欲しない事情の下にその品を得た時には、その品物を失ふものである。品物を落したり、汚したり、又は壞したりすることも同一の傾向から生ずる。社會生活に於ても、歡迎されない私生兒は、幸福な公生兒よりも往々非常に弱いと言はれて居る。この結果は育兒院の所謂取扱の粗暴なることから來たといふ意味でなく、子供の監督に於ける或る程度の不注意といふことで十分說明がつく。事物を保存するか忘失するかは、この子供の場合と全く同一の徑路に從ふものである。

尙又その價値を失ふことなくして忘失される運命を有する事物がある。換言すれば或る他の恐るべき損失を避けるために、或る物を犧牲に供する動機がある。分析的發見によると、吾々の亡失は屢々有意的犧牲である位、かや

うな運命の魔術は吾々の中に極めて普通である。亡失は反抗或は自己刑罰と等しき務をする。短言すれば、亡失によつてある物を取去らうとする傾向の遙か裏面に横はる動能は、容易に觀測することは出來ない。

事物を間違へたり、誤つた行爲をすることも亦他の誤謬と等しく、拒否しなければならぬその欲求を滿たすために屢々利用される。この際意向が好機會として變裝する。かやうなことが一度私の一人の友人に起つた。その友人は非常にいや〳〵乍ら、郊外に住む友人を訪問するため汽車に乘つた。或る分岐點で汽車を乘換へなければならぬが、乘換の際誤つて町へ歸る汽車に乘つて仕舞つた。卽ち吾々は堅い約束をして居るために、その場所以外に下車することが出來ないに拘らず、他の所で下車し、そこで乘換を間違へたり、或は乘換に遲れたりして、恰も要求して居た破約を强いられるやうにする。私の患者の一人は、愛して居る婦人に電話をかけることを私から禁じられて居たが、一日私に電話をかけようとして全く無意識に誤つて、他の番號を呼出し、不意にその婦人につないで仕舞つた。次に述べる一技師の例は物質的損害を受けた好例で、直接の誤謬行爲の實際的意義を說明して居る。

『以前に私は數人の同僚と共に、高等學校の實驗室で電氣に就ての複雜なる實驗をして居た。その作業を吾々は自ら進んで企てたのである。しかし吾々の豫期した以上に多く時間を要し初めた。或日友人のFと實驗室に行つたら、彼は今日家庭で多くの用事があるのに、實驗の爲に多くの時間を費されるのは、非常に苦痛であると言つた。私も彼に同情するを禁じ得なかつた。而して半ば冗談に、その前週に起つた出來事を考へながら、「機械が壞れゝばいゝね。さうすると作業を止めて、早く歸宅が出來るが」と言つた。作業に從事するに當つて、Fは壓の瓣を調整することをして居た。詳言すれば、彼は水壓機の方へ徐々と水力溜から液體の壓を與へる爲に注意深く瓣を開けて居た。壓力計の側に立つて實驗をして居た一人が、適度の壓が來た時に「止め」と聲高く叫んだ。この命令によつてFは瓣を取つて全力を注いで左の方へ扭ぢた。(瓣は凡て例外なく右方に廻すと閉ぢられるやうになつて居る)その爲めに水力溜の全部の壓が水壓機の方に突然來て、それに連結せる管は不意の張力の爲に、その中の一が直ちに破裂した。それは全く惡意の無い偶然の出來事であつた。しかしそれに拘らず、吾々は仕事を止めて歸宅を餘儀なくされて仕舞つた。その後間もなく、吾々はその出來事に就て議論をして居た時に、私は私の言つた事に就て確實

に再生し得たのに、Fはそれを少しも覺えて居なかつたことは、この事件の特質である。』

かう言ふことを言ふと皆さんは、傭人の手が臺所の仕事に對してかやうに危險なる敵意を示すことは、常に單なる偶然の事でないと疑ひ初められるかも知れない。尙又人が自己を傷け又は危險に曝らされる時、それは偶然であるか否かとの疑問を起すであらう。而してこの疑問は、機會があれば分析をして、その眞否を檢査したいと思はれるであらう。

之は誤謬に就て言ひ得る凡てのものでない。そこに尙探究したり議論したりする多くのものがある。若し吾々の研究によりて、皆さんが以前に懷いて居られた事を幾分なりとも捨てられて、新しきものを承認するやうに或る程度の用意が出來られたならば、それで私は滿足するであらう。その他の事は未だ解決して居ない他の問題と共に、皆さんに殘すことを以て私は滿足しなければならぬ。吾々は誤謬の研究によつて、吾々の凡ての原理を證明する事は出來ないし、又この材料にのみ賴つて證明するものでない。吾々の目的に對して誤謬の大なる價値は、それ等が日常の出來事であつて、容易に各人自身に觀察が出來、且つその出來事が病氣を假定して居ない點に存して居る。私は結論に達する前に、未解決の問題を今一つ述べることにする。『多くの例から見る如くに、若し人が誤謬を理解するやうになり、且つその意味を洞見したかの如く屢々行爲するならば、その人は、誤謬が一般に偶然的で無意味であると考へ、それ等の精神分析的說明に強く反對するといふことが、如何にして可能であるか』

皆さんの質問は正當である。それは著しきことで、說明を要するものである。しかし私は說明を與へないことにする。寧ろ私からの補助なくして、自づと說明が與へられるやうに強いられるやうな聯絡の方に、徐々と皆さんを導かうと思ふ。

第二篇　夢の心理

第五講　困難と本問題への最初の接近

ある神經病患者の疾病の徵候に意味があることがブロイエルによつて發見された。處治に於ける精神分析的方法は實にこの發見に基礎を置いて居る。この治療に於て患者がその徵候を話す際に偶々彼等の夢を述べることがあつた。而して是等の夢も亦意味を有するといふ疑が生じた。

しかし吾々はこの歷史的方面の道を辿らないで、寧ろ之と反對の途を進むことにしよう。卽ち吾々は神經病の硏究の準備として夢の意味を說明しようと思ふ。この反對の方向を取つて說明するには正しき理由がある。蓋し夢の硏究は單に神經病の硏究の最良の準備たるばかりでなく、夢その者が神經病的徵候であるからである。その上その夢は、凡ての健康の人々の中にも生ずるといふやうに、吾々に取つて非常の價値を有して居る。若し人が健康で、夢のみを見るとしても、神經病者を硏究することによつて得た夢から、殆ど凡ての知識を得ることが出來る。

かやうに夢は精神分析的硏究の對象となつて居る。夢は普通無價値の出來事で、誤謬程外見上實際的價値がなく、健康の人にも一般に生ずるものである。しかしその他の點に於ては吾々の硏究に對する條件は寧ろ有利でない。誤謬は單に科學から看過されて居て、人々の頭がそのために餘り惱まされなかつた。少くともその誤謬を取扱つても別に不名譽のことでもなかつた。實に人は誤謬よりも尙一層重要なことがあるが、しかし尙何物かゞ恐らくそれから生ずるかも知れないと言つた。所が夢を取扱ふことは、單に非實際で皮相的であるばかりでなく、尙積極的に羞づべきことである。それは非科學的の汚點を運び、神祕主義への個人的傾向の疑を生ずる。醫學生が精神生活を壓縮する林檎大の腫瘍・出血・顯微鏡の下で組織の變化を證明し得る慢性炎症的狀態等を取扱ふやうに、神經病理學や精神病學に於て夢を眞面目に取扱ふものが何處にあるか。否夢は全く無價値で科學的硏究の對象となるには餘りに

些々な事である。

精密なる研究の凡ての要求に反抗する尙他の要素がある。夢を研究するに當つて、その研究の對象が不確實である。例へば妄想はその輪廓が明白に確實である。卽ち汝の患者が『僕は支那の皇帝である』と曰ふ。所が夢の場合は如何。それは大部分敍述されない。人が夢を話す時に、彼がそれを少しも變化することなく、又回想の不明の所を創作することを强いられずに、正しく物語るとの保證を有するか。大多數の夢は全く回想されず、極く僅かの斷片以外は忘られて仕舞ふ。然るにかやうな材料の說明を基礎として、科學的心理學や病氣の處置の方法が建設さるべきであるか。

批評に於ける或る種の誇張は吾々の疑を生ずるかも知れない。夢を科學的研究の對象とすることに反對する議論は明かに極端である。吾々は旣に誤謬の場合に無價値であるとの反對を受けた。しかし重大なる事が往々僅微の指示によつて表はれるかも知れないといふことを述べた。夢の不確實なることは他の者と同じく一の特質である。吾々はそれ等の事物の特質を記述することは出來ない。その他又明白で確實なる夢もある。尙又不確實の性質を有する精神病的研究の他の對象がある。例へば多くの場合の强迫觀念は然りであるが、それに拘らず有名の且つ地位ある多數の精神病學者がその硏究に沒頭して居る。私が醫者の仕事に從事して居た際に生じた、この種の最後の場合を私は回想する。一人の婦人患者が次のやうなことを私に告げた。『私はある生物——恐らく子供で、——いや犬を傷づけたやうな、或は傷づけようとしたやうな一種の感じがする。恐らく私はその者を橋から突き落したか、或はその他何かをしたやうな氣がする』と。夢の不確實なる回想より生ずる不利益は、夢を見た者が言つた所のものを夢として取扱ひ、彼が回想の際忘れたものや變化させたものを無視することによつて救濟することが出來る。最後に吾々は夢は無價値のものであると一般に主張することは出來ない。吾々が夢から覺めた時の氣分はその日一日中つゞくかも知れないことを經驗上知つて居る。精神病が夢と共に始まり、妄想が固執する夢にその源を發することは醫者によつて觀察された。尙又偉勳をする衝動が夢から來ることは歷史的人物に就て言はれて居る。從つて玆に吾々の疑問となるのは、夢が科學世界に輕視されるのは何故であるかといふことである。

それは古代に於て餘り評價し過ぎた反動であると私は考へる。過去を改造することは容易の事業でないことは能く知られて居る。しかし三千年以前又はそれ以上の太古に於ける吾々の祖先も吾々が現在夢みるやうに夢を見たといふことは確實である。——どうか私の戯言をお許し下さい。——吾々の知る限りに於ては、凡ての古代人民は夢に大なる意義を附與し、實際的價値のあるものとして之を認めた。彼等は夢からして將來の暗示を得、又夢の中に前兆を捜した。希臘人や他の東洋人に於ては往々夢の解釋者なくして戰爭を企てる事は不可能と考へられた。恰も今日に於て空中偵察隊なくして戰爭が出來ないとすると同樣である。アレキサンダー大帝が遠征を企てる時には、最も有名なる夢の解釋者がお伴をした。その當時島の上にあつたテイルスの町が頑强に抵抗したので、大帝はその圍を解かうとした。その時一夜大帝は半人半山羊の神が勝利をして踊つて居るといふ夢を見た。この夢を解釋者に話した所が、それはその市を降伏せしむる事の出來る前兆であると告げた。それで彼は攻擊を命じてその市を占領した。エトラリア(伊太利中央部の古國)人やローマ人の中には、將來を豫言する他の方法が用ひられた。しかし希臘羅馬の時期には夢の解釋が行はれ、非常に尊重された。この事項に關する文獻の中で主要なる著作は、兎も角も吾人に傳はつて來た。卽ちダリヂイスのアルテミドロスの書物がそれで、この人はハドリアン帝の時代に住んで居たと言はれて居る。夢の解釋の方法がその後廢れ、夢が信用を失つた理由に就て、私は言ふことは出來ない。文化の進步がこの事に多くを顧る餘裕がなかつた。蓋し中世紀の暗黑時代に於ては、古代の夢の解釋以上に矛盾した多くの事項が忠實に保留されたからである。かくして夢に對する興味は漸次迷信の域に沈み、無敎育者の間にのみ、その位置を保つことが出來た。現代に於ては、夢の解釋の方法の最後の墮落として、富籤の當りの番號を夢から發見するといふことが殘つて居る。一方に現時の精密科學が夢を再び取扱ふやうになつたが、しかしそれは生理的原理を說明する目的にのみ使用して居る。勿論醫者の方では夢は心的過程として認められず、身體的刺戟に對する心的表現として取扱はれた。一八七六年にビンツは夢を以て身體的過程たることを主張し、夢は無用で、且つ多くの場合に病的で、かの世界的精神とか不滅とかの概念が夢に對するのは、恰も蒼空が雜草の生えた低い砂地に對すると同一であると述べて居る。モーリーは夢を以て舞踏病の無秩序の痙攣と比較し、正常人の共同運動と對立せしめた。

るとして居る。
玆にいふ「解釋」とは隱れたる意義を發見することである。しかし、この夢の行爲の評價に就ては勿論何等の疑問も生じ得ない。ヴント、ヨードルその他の近世の哲學者の著書の中に與へられた夢の說明を見よ。彼等は夢を輕視する見地からして、夢の生活が覺醒せる思想と相違することを單に枚擧することを、以て滿足して居る。彼等は夢に聯想の連絡が缺けて居ること、批評力の中止、凡ての知識の除去、或はその他の機能の減退せることを強調する。夢に就ての吾々の知識に貢獻する唯一のものは、睡眠の際に働く身體的刺戟が夢の內容に影響するといふ研究である。卽ちそれは近頃死んだノルウェーの研究家ムーリー、フォルトの夢の實驗的研究に就ての二册の著書である。それは殆ど凡てが手足の位置の變化によつて得た結果を述べて居る。是等の研究は夢の事項に就ての精密なる研究の模範として推擧されて居た。吾々が夢の意味を發見しようと試みるに當つて、精密科學は何とそれに就て言ふであらうかを皆さんは想像することが出來るか。恐らくそれは旣に言はれた所のものであらう。しかしその爲めに吾々は落膽して中止しようとは思はぬ。若し誤謬行爲が意味を有することが可能であれば、夢も亦意味を有することが可能である。而して誤謬は極めて多くの場合に精密科學の研究が見逃して居る意味を有して居る。今、古代人や原始民族の假定を採用し、古代の夢の解釋を階段として話を進めて行かう。
先づ初めにこの企に於ける吾々の位置を定め、且つ夢の範圍を大觀しなければならぬ。然らば夢とは何か。簡單なる言葉で之を定義することは困難である。各人が熟知せる材料を十分に指示する時は、最早定義を求むる必要はない。しかし吾々は夢に於ける主要素を摘出しなければならぬ。然らば如何にしてその主要素を發見し得るか。吾々が這入つて行く領域の境界內には、何れの方向を取つても、それそれ非常に異つたものが包含されて居る。しかし凡ての夢に共通的に表はれる所のものが恐らく主要のものである。
そんならば凡ての夢に共通なる第一の特質は何であるかといふに、それは吾々が眠つて居る時に夢を見るといふことである。明かに夢は睡眠の際の精神生活で、それは覺醒せる生活と或る點に似ては居るが、それと同時に極め

て相違した生活である。これは已にアリストテレスが定義した所である。恐らく夢と睡眠とは相互に密接なる關係に立つて居る。吾々は夢によつて目を覺ますことが出來る。又自發的に目を覺したり、無理に睡眠が妨げられる時に夢を有することが屢々ある。かやうに夢は睡眠と覺醒との間の中間狀態であるやうに見える。從つて吾々の論旨は睡眠の方に向つてくる。然らば睡眠とは何であるか。

睡眠は生理學的問題であるか、生物學的問題であるか、今尙議論が一定しない。吾々は之に對して決定的答辯を與へることが出來ない。しかし私は睡眠の心理的特質を研究し得ると考へる。睡眠は外界に就て何も知る事を欲しないで、吾々の興味が外界から退去して居る狀態である。外界から退却して、外界の刺戟を遠去ける事によつて吾々は眠に就く。尙又世界に就て疲れる時にも眠るのである。吾々は眠りに就かんとする時には「靜かにして吳れ、私は眠りたいから」といふ。所が子供はそれと反對なことをいふ。即ち「僕は眠りたくない。僕は疲れて居ない。もつと何かやりたい」と叫ぶのである。かやうに睡眠の生物學的目的は恢復であるやうに見え、その心理的特質は外界に對する興味の中止である。吾々が好まないで這入つた世界に對する關係は、中休みをすることによつてのみ堪へ得るやうに見える。故にその世界に這入る前の狀態即ち母胎生活 (Mutterleib-existenz) に時々歸つて行く。兎も角この際は母胎生活と同一の狀態、卽ち暖くて暗く且つ刺戟のない狀態を作ることを試みる。或る人の如きは母胎内の狀態に似たやうに丸まつて寢るものもある。吾々成人は恰も世界に全部が屬せず、只三分の二だけ屬し、吾々の三分の一は未だ生れて居ないかのやうに見える。吾々が朝に於て目を覺ます時には、恰も新しく生れ出たかのやうに思へる。實に吾々は睡眠から目の覺める時の狀態を次の言葉で話すのである。即ち「恰も新に生れたやうな氣がする」と。これは新に生れた子供の一般感覺に就て吾々が誤つて考へて居るためである。初生兒は反對に非常な不愉快を感ずると推定すべきである。尙又吾々は出生のことを「世界の光を見る」と言つて居る。

これが睡眠の性質であるとすれば、夢はその仕組の中に全く無く、寧ろそれは睡眠に對し歡迎されない補充物であるやうに見える。吾々は實に夢の無い睡眠は最上のもので、唯一の正しき睡眠であると信ずる。睡眠中は何等の心的活動もあつてはならぬ。若しありとすれば、それだけ平和の眞の母胎的狀態に達することが出來ない。しかし

心的活動の殘滓は全く除去されることは出來ない。而して夢の行爲はこの殘滓に過ぎない。そのために夢は實に意味を有することを要しないやうに見える。誤謬の場合は之と全く相違して、少くとも覺醒生活に於て表はれる。しかし若し私が眠つて、抑壓することの出來なかつた或る殘滓以外の精神活動を全く防止したとすれば、この殘滓が意味を有しなければならぬといふことは全く必然的のものでない。實際に私は心の殘餘の部分が眠つて居るのを見て、何れの意味も使用することが出來ない。それは實際に痙攣的反應を取扱ふに過ぎないのである。卽ち身體的刺戟にその起原を有する心的現象を取扱ふのである。故に夢は覺醒生活の心的活動の殘滓で、睡眠を妨げるものに相違ない。而して吾々は精神分析學の目的に不適當なる事項を直ちに捨てることを決心しなければならぬ。

夢は無用のものであるかも知れないが、しかし存在する。而して吾々は夢の存在の說明を試みることが出來る。何故に精神生活は全く眠つて仕舞はないか。恐らくそれは精神が平安になれない何物かゞあるためである。刺戟が精神に働いて居り、精神はその刺戟に反應するやうになつて居る。故に夢は睡眠の際に働く刺戟に對して反應する精神の一樣式である。吾々は夢の理解に近寄ることの可能性がこの點にあることに氣がつく。睡眠が妨げられ、且つそれに對する反應が夢の形式を取る所の刺戟は何であるかを、種々の夢の中に發見することを求めることが出來る。之を行ふことによつて、吾々は凡ての夢に共通せる第一の特質を明かにすることが出來た。

然らば尙他の共通的特質があるか。然りそこに誤ることなき他の特質がある。しかし理解するにも記述するにも極めて困難である。睡眠の際の心的過程の特質は覺醒の際のそれとは全く相違して居る。夢に於ては吾々は十分に信ずる多數の經驗を有する。所が覺醒狀態では單一の妨害刺戟を經驗するに過ぎない。吾々の經驗は大部分視覺像の形を取る。それに又感情や思想がその心像と結合し、他の感官が引入られるかも知れない。しかし夢に於ては大部分視覺像から成り立つて居る。夢を記述することの困難の一部は、吾々が是等の心像を言語に飜譯しなければならぬ事實から來て居る。夢を見た者は屢々次のやうなことを吾々に告げる。『私はそれを描くことは出來るが、言葉にそれをどう言表はしてよいか分らぬ』と。しかし之は低能者と天才者との對立に見られるやうな心的能力の低減ではない。その差は寧ろ質的のもので、それがどこに存するかを精密に言ふことは困難である。フェヒネルは嘗

て、夢の劇が演ぜられる舞臺は覺醒せる觀念生活のそれと異つて居ると述べた。吾々はそれを理解しないし、又その際何を考へなければならぬかを知らない。がしかし奇異の印象を生ずる。之は多くの夢が吾々に生ずる印象である。こゝに於て夢の行爲と、音樂に於ける不熟練の手の作業との比較は全く破壞される。蓋しピアノはある鍵盤に偶然觸れると、旋律は生じないが、それに相當する音を以て何時も反應するからである。吾々は理解することは出來ないが、夢に於けるこの第二の共通特質を注意して眼中に保持しようと思ふ。

凡ての夢に共通な他の性質があるかといふに、私はそれに就て何も考へることは出來ない。只凡ての方面に於ける相違を發見することが出來る。例へば外見的の繼續、明確さ、情緒性を帶びること、心の中に固執すること等、何れの點に於ても相違がある。しかし是等の凡ての特質は、刺戟を防止せんとする貧しく且つ痙攣的の强迫的計企の場合に自づから豫期しなければならぬやうな特質ではない。夢の長さに就ても、ある夢は極めて短く、只一つか二つかの心像、又は單純な思想或は單純な語を含むことがある。所が他方には內容が極めて豐富で、全部の物語を作り、長い間繼續するやうに見える。又夢の中には實際の經驗のやうに明確なものがあつて、時々吾々は目が覺めた後、それが全く夢であつたかを認めることの出來ない位明白なものもある。之に反して他の夢は非常に薄弱で、不明である。又同一の夢でも或る部分は非常に明白で、或る部分は全く捕へ所のない位不明瞭である。又ある夢は全く意味が深重であるか或は兎も角も聯絡があるか、又は機智に富み或は空想的に美しいが、之に反して他の夢には混雜したり、明かに白痴的であつたり矛盾したり、且つ往々全くの精神錯亂的であるものがある。又夢の中には全く吾々を冷靜ならしめるものもあるし、又情熱を感ぜしめるものもある。即ち涙の出る位不快であつたり、目が覺める位烈しく恐怖を感じたり、或は驚愕や喜悅等を感ずる夢がある。大多數の夢は目が覺めると直ぐに忘れて仕舞ふ。が、中にはその日の間固執し、日が經つに從つて漸次その回想が弱く且つ不完全になるものもある。或は又子供時代の夢のやうに何時までも明白で、三十年後の今日までも、最近の經驗であるかの如く記憶されて居る夢もある。夢も人間と同樣に、一度來て再びやつて來ないものもあるし、又同じ事を同一の形や或は少し變形させて幾度も反復して夢見ることもある。單言すれば、この夜に於ける精神活動は莫大なる貯藏物を支配し、精神が日中創作

し得る凡てのものを、全く同一ではないが創作することが出來るのである。

しかし是等の狀態は、睡眠と覺醒との中間の種々の異つた狀態、卽ち不完全の睡眠の種々の階段に相當すると假定して、夢に於ける多樣性を說明せんと企てる者があるかも知れない。それは結構なことである。しかし精神が覺醒狀態に近寄るに從つて、夢の行爲の價値、內容、明瞭が增加するばかりでなく、それは夢であるとの觀念が明かになつてくる。又夢の中で、明白で有意味の要素が不明瞭な無意味のものと並存し、その後善き作業が再び生ずるといふやうなことは起らない。精神がそれ程急速に睡眠の深さを變ずることの出來ないのは確實である。從つて前述の說明は何等の補助にもならず、又解答の捷徑でもない。

吾々は先づ夢の意味に於て說明することを止めて、夢に於ける共通要素より出立して、夢の本質が一層よく理解され得るやうにしようと思ふ。夢が睡眠に對する關係からして、吾々は夢が睡眠を妨げる刺激に對する反應であると結論した。吾々が聞いた通りに、これは又精確なる實驗心理學が吾々を補助し得る唯一の點である。卽ち實驗心理學は、睡眠の際に與へられた刺激が夢の中に表はれるとの事實を證明して居る。この方面に就て多數の研究が行はれ、前に述べたムーリー、フォルト(Mourly, Vold)の研究に至つて最高に達した。吾々は是等の人々の結果を吾々自身の時々の觀察によつて確めることが出來る。私は以前の觀察の二三を選んで玆に述べようと思ふ。モーリー(Maury)はこの種の研究を自分自身に行つた。眠つて居る際にケールンの水(Kölnerwasser)を嗅ぐやうにした。そのためにカイローに居て、ヨハン、マリア、ファリナの店に居り、それから狂氣の探險家に追跡された夢を見た。又他の者が彼の首を輕く抓つた。所が彼は子供の時に治療を受けた醫師と發疱膏との夢を見た。又彼の額に一滴の水を落した所が、彼は直ちにイタリーにあつて非常に汗をかき Orvieto の白葡萄酒を飮んで居る夢を見た。

實驗的條件の下に生じた此等の夢に就ての著しき特質は、刺激の夢（Reitztraum）の說明の場合に尙明白になるであらう。明敏なる觀察者ヒルデブラント（Hildebrandt）によると、刺激の夢は三種に分類される。而してこの三つは凡て、一の目覺時計の音に對する反應である。

『私は春の朝散步に出かけた。丁度綠になりかけた野原をぶらついて居る。それから隣の村に來たが、そこでは住

民が祭日の美服をつけて、大勢で教會に行つて居る。彼等は手に讃美歌の本を持つて居る。勿論それは日曜日である。而して朝の禮拜が丁度始まらうとして居る。私もその仲間に入らうと決心した。しかし最初私は餘り熱苦しく感じたので、教會を取圍む庭に下りて、涼まうと思ふ。そこで二三の墓誌を讀んで居る中に、鐘つき男が塔に上つて行くのが聞える。高く上の方に、小さき村の鐘のあるのに氣がつくと、それは今や禮拜の始まる合圖を與へようとして居る。しかし暫らくの間靜止し、それから振り初める。而して突然鐘が鳴り初め、その音が明かに突き徹る位であつた。そのために私は目が覺めて仕舞つた。所がその鐘の音は目覺時計から來て居る。』

玆に他の心象の結合の例がある。『晴れた冬の一日に雪が深く道路に積つて居る。私は橇に乘つて出かける約束をした。しかし橇が戸の所にあると告げられるまで、大變長く待たなければならなかつた。それから橇に乘る準備をする。毛皮が擴げられ、足にかけるものが置かれ、最後に自分の座席に乘つた。しかし又長い間待つて、漸く馬が出かける合圖が與へられた。その時手綱が引かれ、小さき鈴が烈しく振られ、聞き馴れた土耳古國往時の親衞兵の音樂が初まる。それが餘り高聲なために夢の網の目が破れた。又それは目覺時計の甲高い音に外ならなかつた。』

尙第三の例がある。『私は下女が一ダースの皿を積上げて持ち乍ら廊下を通つて食堂の方に行くのを見る。彼女の手にある瀨戸物の尖塔がひつくりかへりはしないかと思はれる。それで「氣を付けなさい、全部が落ちますよ」と警告を與へた。勿論私は何時もの答を得た。卽ち彼等は何時もそんな風にして瀨戸物を運ぶに慣れて居ると。私は女中が注意して行くのを目を離さず見て居る。その時私は考へた。卽ち次に起ることは閾に躓き、陶器が落ちて、數百の片に壞れて仕舞ふであらうと。しかし私が直ぐに氣付いたことは、無限につづく音が、急激の壞れる音でなく規則正しく鳴つて居ることであつた。而してこの鳴る音は、單に目覺時計の鳴る音であつたことを、目覺めてから後知るに至つた。』

是等の夢は大變に奇麗で完全なる意味を有し、通常の夢のやうに無秩序でない。吾々はそれ等の根據に就て爭ふ餘地がない。それ等凡てに共通なることは、孰れの場合も、その狀態が噪音から生じて居ることで、夢を見た者は目覺めて後、其は目覺時計の音であつたことを認知して居る。玆に於て吾々は夢が如何にして生ずるかを見るが、

しかしそれ以外に何物かを發見する。夢に於ては時計の認知が無く、叉夢の中に時計が表はれても來ない。所が、時計の音は他のものゝ音に代つて居る。睡眠を妨げる刺激は解釋されるが、しかし各の場合に異つて解釋される。然らばそれは何故であるか。それに對する答がない。只それは任意的のものゝやうに見える。しかし夢を解釋するには、何故に目覺時計の刺激を選擇して、その他の刺激を持つて來なかつたかを吟味することが出來なければならぬ。之と全く相似た仕方で、モーリーの實驗に反對しなければならぬ。卽ち睡眠者に與へられた刺激が夢の中に表はれたことは明白であるが、しかし彼の實驗は何故にそれがその形にて表はれたかを說明しない。それは睡眠を妨げた刺激の本質によつては說明が出來ないやうに見える。尙叉モーリーの實驗では、刺激の直接の結果に結び付いた他の一群の夢の材料がある。例へばケールンの水の夢に於ける狂氣の探險家の如きは、吾々はそれに對して何等の說明を與へることも出來ない。

目を覺ますやうな夢の種類は、外部の妨害刺激の影響を生ずるに最もよき機會を與へると皆さんは考へられるであらう。所が多くの場合にはそれが一層困難になつてくる。卽ち吾々は凡ての夢から目を覺ますことは無い。而して朝になつて前夜の夢を記憶するとすれば、如何にしてそれを夜間に生ずる妨害刺激に歸することが出來るか。私は一度かやうな音刺激のあつたことを後になつて知ることに成功した。しかしそれは單に特殊の事情の下に成功したことは勿論である。私は一朝チローレルの山の所で目を覺ましたことがある。その時法王が死んだといふ夢を見たことを知つた。しかしそんな夢をどうして見たかを說明することが出來なかつた。その後になつて私の妻が『あなたは今朝凡ての教會堂や禮拜堂の鐘が恐ろしく烈しく鳴り渡つたのを、お聞きになりましたか』と尋ねた。いや私は何にも聞かなかつた。ぐつすり寢込んで居た。しかし妻のこの問を感謝した。お蔭で私は自分の夢を理解した。かやうに刺激の原因が、後になつて聞かれることなくして夢の中に入つてくる事がどの位屢々あるであらうか。恐らく其は屢々あるかも知れない。或は恐らく全く無いかも知れない。若し吾々がその知識に就て少しく知らせる者が無ければ、何等それの證據を得ることは出來ない。吾々は睡眠を妨害する外界刺激の評價に就てはこの位で中止しようと思ふ。蓋し、之は單に夢の一部分を說明するに過ぎないで、凡ての夢の反應を說明することが出來ないか

らである。

そのために吾々は原理を全く棄てる必要はない。他の仕方に於て、尙それに從ふことが出來る。何が睡眠を妨げ、心をして夢を生ぜしむるかは、明かに無關係の事柄である。感官の一に刺激として働く所の何か外部のものが常に存在しないとすれば、その刺激は內部器官から生ずる所謂身體的刺激（Leibreiz）であるかも知れない。この推定は極めて眞に近いもので、且つ夢の起原に關する通俗の見解に一致する。蓋し通俗の見地では夢は胃から來ると言はれて居るからである。甚だ多くの場合に、夜の間に働く內部刺激を覺醒後知ることが出來ないで、之を證明するに不可能であると、不幸にも推定しなければならぬ。しかし吾々は夢が身體的刺激から生ずるかも知れない所の見解を支持する多數の信頼すべき經驗を看過しようと思はない。內部器官の狀態が夢に影響し得るといふ事は、一般に疑ひもない事である。膀胱の擴大や生殖器官の興奮の狀態が多くの夢の內容に關係することは、誤ることの出來ない位に明白である。かやうな明白なる場合から、身體的刺激が夢の內容に働くと云ふ何等の推測も出來ない場合に移つて說明しよう。蓋し後の場合には、是等の刺激の推敲・描寫・解釋として見らるべき何物かゞ夢の內容に發見されるからである。夢の研究者シェルネル（Scherner）は夢の起原を有機的刺激に求めることの見地を強く主張し、それに對する二三の卓越せる例を與へた。例へば彼は次の夢を見た。『奇麗な髮と優しい顏付をして居る美しい子供の二列があつて、相互に爭をするために向ひ合ひ、それから爭を初め、相互に取組み合つた。それから離れて以前の位置を取つた。再び又前の仕方を繰返した。』彼が二列の子供を齒として說明したことは眞實らしくある。その光景の後、夢見者は『彼の顎から長い齒を引き拔いた』時に、その說明は十分な確實を得るやうに見える。又『長い、狹い、曲つた通路』を內臟の內に生ずる刺激によつて暗示されたものと解釋したことは、正當のやうに見え、且つ夢は最初刺激を生ずる器官をそれに似た事物によつて代表せしめることを求むる、とのシェルネルの主張を確實にして居る。

故に吾々は、內部刺激が外部刺激と同一の役目を夢に對して演じ得ることを許すやうに用意して居なければならぬ。不幸にもこの要素の評價は同一の反對に遭遇する。大多數の場合に、夢を內部刺激に歸することは、不確實に

止まるか或は證明が出來ないのである。凡ての夢でなく、只二三の夢が内部器官の刺激から生じたのではないかとの疑が生ずる位である。最後に内部の身體的刺激は外部刺激と同樣に、それに對する直接反應以外の夢の内容を說明するに不十分である。夢に於ける殘りの凡ての起原は尙不明瞭に止つて居る。

しかし今吾々は是等の刺激の作用を硏究する際に表はれる夢の生活の或る特性に注意を向けることにしよう。夢は單に刺激の再生するばかりでなく、尙それを精錬し、飜弄し、連鎖の中に置き或は他の者によつて之を置換へたりする。之は吾々の興味を引かなければならぬ所の夢の作用の方面である。蓋し之は夢の眞の本質へ一層近く吾々を導くかも知れないからである。吾々の創作は、直接その創作を引起した事情に必ずしも制限されない。例へばシェクスピアが書いたマクベス劇は、三つの天國の天位を初めて結合した王の卽位に關する一の出來事に就ての演劇として書かれた。しかしこの歷史的出來事は劇の全部の內容を包括するか、或はその偉大さ又は不可思議を說明するか。恐らく之と同樣に夢見者に働く內外の刺激は單に夢の皷舞者であつて、その眞の內容に就ては之によつて何にも明かにされない。

凡ての夢に共通なる他の要素、卽ち精神生活に於ける是等の特異性は、一方に之を捕へることが極めて困難であり、他方に又それ以上の硏究の手掛りを與へないやうに見える。夢に於ける吾々の經驗は大部分視覺像の形式を取る。是等は刺激によつて說明することが出來るか。吾人の經驗する所のものは實に刺激であるか。若し然りとすれば、何れの刺激が、吾々の眼に働くことは極めて僅かの場合であるのに、何故に夢の經驗は視的であるか。又吾々が會談の夢を見る時に、その談話や音聲が睡眠中吾々の耳に入る會話に似て居るといふことを證明することが出來るか。私は敢て何等の躊躇なく、かやうなことの可能を放棄する。

若し吾々が夢の一般的特質をこれ以上追求することが出來なければ、夢の相違點の硏究から出發しよう。夢は屢々無意味で、混雜して居て、矛盾して居るが、しかし又有意味で、眞面目で、合理的である。この後の眞意味の夢が、無意味の夢を說明する補助となり得るかを見てみよう。私は最近に告げられた一靑年の合理的の夢をお話しよう。『私はケルントネル街を步いて居た所が、X君に逢つた。暫く彼と共に步いた後に料理店に入つた。二人の貴

女と一人の紳士とが來て私の食卓についた。最初私は腹が立つて、彼等を見ようとしなかつた。しかし直に彼等に一瞥を與へた所が、彼等は大變に上品であることを發見した。』夢見者はこの點に就て註釋を加へて言ふには、その夢を見る前の晩に彼は實際ケルントネル街を歩いて居た。そこは何時も行きつけの道であるが、その時X君に逢つた。しかしその他の夢の部分は直接に記憶にない。只少し以前にそれに似た出來事があつた。吾々は玆に又一婦人の告げた他の夢の例を有する。『彼女の夫が、「お前は、ピアノを調律しなければならぬ」と思ふかと尋ねたので、「それは無駄です。琴槌に新しい皮をつけなければなりませぬから」と答へた。』この夢はその前日之と殆ど同じ言葉を彼女の夫と言ひかはした。是等二つの無趣味の夢から吾々は何を學び得るか。夢の中に生ずるものは單に日常生活の出來事か又はそれに連關したことの再現であるといふことである。之が凡ての夢に於て確め得たとしても亦それ以外に何物かゞ存して居る。しかもそれは問題外としてもこの特質は少數の夢にのみ屬するものである。大多數の夢に於ては、前日のことゝの連絡を發見することが出來ず、それ等の事項は無意味や不合理の夢に對して何等の光明を與へない。只吾々は新しい問題に遭遇したことだけを知つて居る。而して吾々は夢が何を意味して居るかを知らんと欲するばかりでなく、尙吾々の例に於ける如くそれが全く明白であれば、その最近に起つたことや、より知つて居ることが何故に、又は何の目的で夢の中に反復されるかを知りたいのである。

吾々がこれまで續けて來たやうな研究の話は私と同様に皆さんも聽かれたことゝ思ふ。吾々は解決に到達する爲に採用する或る通路を知らなければ、世界に於ける凡ての興味を以てしても、一の問題の解決に不十分であるといふことが分る。今迄吾々はこの通路を發見しなかつた。實驗心理學は夢の發生に於ける刺戟の意義に就て、二三の價値ある知識以外に何にも貢献しなかつた。哲學も亦吾々の目的が下賤であるとの非難の反復以外に何物をも豫期することが出來ないし、祕學（錬金、神通、占星術等の稱）から借りてくるものも一つもない。歷史や人民の意見によると、夢は意味を有し、重要なもので、又豫言的意義を有するとする。しかし之を承認することは困難で、それに對する證據も無い。かやうにして吾々の最初の努力は全く途方に暮れるやうになる。

しかし吾々がこれまで眺めなかつた方面から少しも豫期しないで暗示が來るのである。偶然的でなく、謂はゞ古

代の知識の蓄積である所の、通俗的言語が――餘りそれに重きを置いてはならないが――晝夢の名を與へた所の何物かの存在を認めて居る。晝夢は空想(空想の產物)である。之は極めて普通の現象で、健康者に於ても亦疾病者に於ても見られる。而して晝夢を見る者自身で容易に研究することが出來る。この空想的創作に就ての最も著しきことは、それが晝夢の名を得たことである。何となれば、晝夢は夢に於ける二つの一般的特質に缺けて居るからである。その名が睡眠狀態に對する何れの關係にも矛盾する。第二の一般特質として、その中に經驗や幻覺が起ることなく、吾々は單に何物かを表象する。吾々はそれを想像の働によるとし、それを見てるのではないが考へて居るとするのである。晝夢は靑年期の前に表はれるが、又往々兒童期の終り頃から表はれ、それが成人になつてそれを棄てゝ仕舞ふまで續き、或は一生涯繼續することもある。是等の空想の內容は、極めて透徹的動機によつて支配される。それは大望の自己的欲求や勢力の熱望又は色情的欲望等を滿足せしめる光景や出來事である。靑年男子には大望の空想が盛んであり、婦人に於てはその大望が愛の成功に向ひ、色情的空想がある。しかし色情的欲求は、男子に於ても背景の方に往々十分に發見される事が出來る。彼等の凡ての英雄的行動や成功は、實に只婦人の賞讚と寵愛とを獲得しようとの意向を含んで居る。その他の點に於ては是等の晝夢は非常に相違し、その運命も區々である。その多くは短時間で棄てられ、又新しい晝夢に代つて行く。或は永く續いて長い物語を作り上げ、人生に於ける變化的事情に適從するやうになる。晝夢は時代と共に推移し、新しき狀態の影響を示す所の「日附」がその上に捺される。それは詩的創作の素材を形成する。蓋し詩人は晝夢を變形し、變裝し、省略することによつて彼の物語・小說・劇の中に挿入する狀態を創作するからである。しかし晝夢の主人公は常に晝夢者自身で、直接に自身を想像するか又は他人を自己と同一視するかである。

恐らく晝夢といはれるのは、その內容が夢のそれと同じく、實在として承認されないといふことを示す爲であらう。しかし晝夢は未だ吾々の知らない所で、これから追求しようとして居る所の夢の特質を有するから、晝夢と言はれて居ることは可能である。他方に又名稱の類似を重大視することの正當でないことも可能である。それは只後に至つて解決し得る所の問題である。

第六講　解釋の假説と方法

かやうに吾々は夢に對する研究に一歩を進めんとせば新しい方法を必要とすることが分る。今私は手近い暗示を示さうと思ふ。先づ今後の研究全部の基礎として次の如き假定を承認しよう。即ち夢は身體的現象でなくして精神現象であるといふ假説である。皆さんはこの假説が何を意味するかを知る。しかしこの假説を吾々が承認するのは何によるのであるか。それに就て吾々は何にも知らない。しかし又その假説を妨げるものも吾々は有しない。事實は次の如くである。若し夢が身體的現象であれば、それは吾々に無關係である。それが精神現象であるとの假説に於てのみ吾々の興味を引くことが出來る。若しこの假説を取れば如何なることが生ずるかを見る爲めに、この假説が眞であると假定しよう。而して吾々の作業の結果からして、吾々がこの假説に固著してよいか否かを見、又その結果が正當に推論されたかを決定しよう。偖吾々の研究の對象は精密に何であるか。即ち吾々は何に向つて努力してゐるか。吾々がこの科學に於て努力してゐる所のものは現象の理解と、現象間の關係を設定すること、最後にその現象の上に吾々の力を擴大することの可能である。

かやうに夢は精神現象であるとの假定の下に吾人の仕事をつゞけることにする。而して夢は夢見者の行爲であり表現である。しかし其は吾々に何物をも示さないし且つ吾々は之を理解しないのである。今皆さんの理解しない何事かを私が言つたと假定して御覽なさい。皆さんはどうしますか。私に質問されることゝ思ひますが、如何ですか。所が吾々は之と同樣に何故に夢見者に對して夢の意味を尋ねないのであるか。

吾々は既に同樣の位置に吾々自身を置いたことを想起して御覽なさい。それは或る誤謬の研究をして、言誤りの例を取扱つて居た際であつた。誰かゞ『ある事物が　Vorschwein　になつた』といつた。吾人はそれに就て尋ねなかつたが、幸にも精神分析に携はらぬ他の者が、この不可解の言葉の意味を尋ねた。彼は直ちに『それは不潔のこと（Schweinerei）である』といふ積りであつたが、それが抑壓されて他の溫和の言葉で置換へられて、『その事が表はれた（Vorschein）』と言つたと説明した。この質問は凡ての精神分析的研究の模型であることを私は皆さんに

説明した。而して精神分析の方法は、分析される人をして出來るだけ彼自身の問題に解答を與へしめるやうに努めることであることを、皆さんは今理解する。かやうに夢見者は吾々の爲めに自分の夢を解釋しなければならぬ。

しかし吾々が凡て知つてる如くに夢は簡單に行かない。誤謬の場合には、その方法は多くの場合に可能である。しかしそれとても、質問された人が何かを言ふことを拒み、時としては彼に暗示された解答を怒つて否認することがある。夢の場合は第一の場合が全く缺けて、夢見者はそれに就て何も知らないと言ふのが常である。吾々は彼に暗示すべき何物も有しない爲めに、吾々の解釋を否認することも出來ない。然らば吾々の企てを棄てなければならないか。彼も知らないし、吾々も何事も知らないし、第三者も慥かに何も知らないから、解答を發見する見込があり得ない。若し皆さんが好むならば企てを中止されてよい。しかし若し中止したくないとの意志であれば私と共に研究を進めることが出來る。何となれば私はその企が全く可能であるばかりでなく、夢見者は實際彼の夢の意味を知ることは非常に眞實らしくあることを斷言する。夢見者は只彼が知つて居るといふことを知らない。故に彼は知らないと考へるのである。

この點に於て、私は又一の假定を導き入れようとして居ること、並にそれを行ふことによつて、信頼すべき方法に對する私の要求が非常に低減されることを皆さんは私に注意されるであらう。その假定といふのは夢は心的現象であること、尙自分では知つて居ることを知らないで、知つて居る所のある事柄が吾々の精神の中にあること等である。皆さんはこの二つの假定が眞にありさうにも思へないと考へられるに相違なく、又その假定から引出された結論に對する凡ての興味を容易に捨てるかも知れない。

私は皆さんを欺くために、或は皆さんに隱す爲に、此處まで來て貰つた譯でない。實に私は精神分析學の序論の講義をすることを宣言した。しかし凡ての困難な點を隱し、空隙を埋め、疑はしき點を滑かにして、今何か新しい事を學んだと喜んで信ずるやうにする爲に、事實の容易なる系列を皆さんに示す事を宣言することを私は目的として居ない。否寧ろ種々の不用の處や未熟の所があつて、要求や批評をなされるやうな吾々の科學を、ありのまゝに皆さんに示さうと私が熱望するのは、實に皆さんが神學者であるといふ事實からである。これは何れの科學に於て

も同一であることを私は知つて居る。それが特に初步の場合には、それ以外に出ることは出來ない。私は又他の科學を敎ふる際に、最初是等の困難と不完全の所を學習者に隱蔽するといふ事も知つて居る。しかしこれは精神分析學の場合には行ふことが出來ない。そこで私は二つの假定を定めた。而して若しそれを以て餘りに面倒であるとする人、餘りに不確實であるとする者、或は非常に確實なものとしたり、又は一層立派な演繹をしたりする人は、私と一緒にこれから行くを要しない。只私はその人に心理的問題を全く棄てゝ仕舞はれることを忠告しなければならぬ。何となればこの學は、その人が歩むやうに準備する程精密に且つ確實なる通路にまでの入口を發見することの出來ない方面であることを私は恐れるからである。人をして耳傾けしめたり、信者を得ようと努力することは、知識に對し眞の貢献をなし得る科學に對しては全く餘分なことである。それが受容されることはその結果に基かなければならぬ。而してその結果が注意を强ひるやうになるまで待つことが出來る。

この事に就て私に從つて來る人に對して、私の述べた二つの假定は一樣に大切でないといふことを警戒することが出來る。第一の夢は心的現象である。その假定は吾々の仕事の結果によつて證明されることを希望する。第二の假定は既に種々の方面で既に證明した所で、私は只そこから吾々の問題に轉移するの自由を取ることにする。

自分で知らない知識を有し得るといふことは、夢見者に就て吾々が假定した所であるが、それはどこで或は如何なる範圍に於て證明さるべく想像されるか。確かにそれは精神生活に就ての吾々の考を變化させるやうな驚くべき事實で、且つそれは何等の祕密を要しない所のものである。その事實は眞實のものであるが、偶然にもその敍述をしなかつた事實である。從つて何も隱蔽されたといふことは無い。世人が之に就て無知であるとか無興味であるとかを、その事實の罪に歸することは出來ない。それと同樣に凡ての是等の心理的問題が決定的の觀察や實驗から遠ざかつて居る人々によつて判斷されたことも亦吾々の罪でない。

私の述べる證據は催眠現象の範圍の中に發見された。一八八九年に私は、ナンシーに於けるリエボール及びベルンハイムの最も印象深き指示敎授に出席し、次のやうな實驗を目擊した。一人の男が睡眠狀態に導かれて、各種の錯覺的經驗をするやうにされた。目が覺めた時に、彼は催眠中に起つた凡ての事を少しも知らないやうに最初は見

えた。ベルンハイムは催眠狀態中の出來事を話すやうに種々と質問した。その男は何にも記憶することが出來ないと主張した。しかしベルンハイムはその男に向つて、知つて居るに相違ない事を强く主張し確證した。所が見よ。その男は逡巡して囘想し初めた。而して彼に暗示された最初の出來事を幽かに憶起した。その後少しづゝ思ひ起して漸次に明瞭に完全になり、遂に少しの空隙のない位に全部明かになつた。この知識は外部から敎へられることは無いから、吾々は結局是等の知識が最初から彼の心の中にあつたとの結論を承認した。しかしこの最初から知つて居たことを彼は否認した。彼が知つてゐた所を知らないで、彼はそれを知らないと信じたのである。この場合は吾吾が夢見者の場合に假定し得る場合と全く相似て居る。

この事實が旣に確定されたことであることに皆さんが驚かれて、次のやうな質問を發せられんことを私は希望する。『吾々が誤謬の考察をして居た時に、それは談話の背後に、言誤つた者の意向が存して居ること、而してその事を談話者は知らないで、意向のあることを拒斥するといふことを述べた際に、何故にあなたはこの夢のことを述べなかつたか。又若し記憶して居るに拘らず、それに就て少しも知らないとすれば、何にも知らない所の他の精神過程が行はれて居ることを考へるのは不適當のやうに見えない。確かに吾々はこの主張によつて印象を受け、誤謬の理解に都合がよくなつた』と。私は確かにその際この證據を擧げることが出來た。しかしそれに對して一層必要なる後の場合の爲めにそれを控へて居たのである。一部分の誤謬は自から說明が出來、その他の誤謬はその現象間の連絡を理解する爲めに、誤謬者の全く知らない精神過程の存在を假定することが、都合がよいやうに見えたのである。夢の場合には何處か他の所から吾々の說明を求めるやうに强ひられた。それで私は催眠現象からの證據が、その關係に就て皆さんの理解を得るに最も容易と考へたのである。誤謬を行ふ狀態は皆さんには正常のやうに見え、催眠のそれと同一でないやうに思はれる。之に反して催眠狀態と睡眠、卽ち夢を見ることの主要なる狀態との間には明白なる關係が存して居る。催眠は實際に人工的の睡眠と言はれる。而して催眠に導く場合に、その人に向つて『お眠りなさい』と言ふ。彼に與へた暗示は自然の睡眠の夢と比較し得るものである。精神狀態は兩者の場合全く類似して居る。睡眠に於ては外界全部に對する吾々の興味を中止する。催眠に於て催眠を施す者卽ちラッポール

(rapport は被催眠者と催眠術者の間に行はるゝ和合關係をさす佛語である。故に以下原語を使用する)に止まる人以外には凡ての外界から退却する。又所謂『お守りの眠り』に於ては、お守りが子供に對してラッポールを有し、その者によつてのみ目覺まさせ得るといふことは催眠現象と全く符合するものである。故に催眠狀態にあるものを睡眠狀態に適用する事は、それ程不法なことでないやうに見える。卽ち夢に就ての知識を夢見者は持つて居ること、又その知識を有することを夢見者は信じない位に、その知識は夢見者に對して承認し難きものである事の假定は、決して亂暴な發見ではない。この場合に吾々は夢の硏究に近寄る第三の道が吾々に開かれて居ることを見るのである。卽ち吾々は睡眠を妨げる刺激の道を辿り、又晝夢の道を通り、今又催眠によつて暗示された夢の道を辿つて、夢の硏究を進めて行くことが出來る。

今吾々は非常な確信を以て吾々の仕事に戾ることが出來る。夢見者は自分の夢に就て何かを知つて居ることは眞であるやうに見える。しかし玆に問題となるのは、如何にして夢見者をしてそれを知らしめ又それを吾々に知らせることが出來るかといふことである。吾々はその夢が何を意味するかを直接に彼から聞き得るとは豫期しない。しかし如何なる種類の思想や興味からその夢が出て來たかの其の原因を、彼は發見することが出來ると吾々は考へて居る。誤謬の際に述べたことを皆さんは記憶されて居られるであらう。Vorschwein と何故に言誤つたかを尋ねられた時に、彼の最初の聯合によつてその意味が明了になつた。夢の場合に用ひられる方法は極めて簡單で、この例に倣つてよい。この際又吾々は夢見者に向つて如何にしてこの夢を見たかを尋ねる。而して彼の言葉はこの場合の說明を與へるものと認めなければならぬ。彼がそれに就て知つて居ると考へるか、或は知らないと考へて居るかに就ては、吾々は無頓着で兩者とも一樣に處置するのである。

この方法は最も簡單である。しかしそれは皆さんから烈しき反對を蒙むることを恐れて居る。皆さんは言ふであらう。『それは他の假定である。卽ち第三の假定である。しかも今までの中で最も疑はしき假定である。若し私が夢見者に向つて、夢に就て心に浮んで來る觀念を尋ねる時に、彼の第一の聯想が豫期した說明を與へ得るとあなたは言ふのであるか。所が彼は確かに聯想を全く有しないかも知れない。彼が如何なる聯想を有するかは神のみが知つ

て居るかも知れない。如何なる根據の下にかやうな說明を下すか、想像するに苦しむ所である。それは神の意志に餘りに賴り過ぎて居る。この場合は批評能力を大に働かすべき所である。尙又夢は單純なる言誤りとは異つて居て、多くの要素から成立つて居る。故にこの場合に吾々は如何なる聯想の上に賴るべきであるか』と。

主要點でない所では皆さんの疑問は正當である。夢と言誤りとは種々の點に相違することは眞である。その事は吾々の方法の上に於て考慮に入れなければならぬ。それで私は先づ夢を種々の要素に分けて、その一々の要素を檢査し、然る後再び構成して言誤りと比較する方がよいといふことを皆さんに忠告する。皆さんの言ふ通り眞實である。又夢見者が夢の單純なる要素に就て質問された時に何等の觀念をも有しないと答へることも、後になつて皆さんにお話しようと思ふ。只不思議なことは、一定の觀念を有する場合である。而してかやうな答は如何なる場合に起るかは後になつて皆さんにお話しようと思ふ。只不思議なことは、一定の觀念を有する場合である。勿論夢見者は一般に何等の觀念を有しないと宣言する。しかし吾々は彼に反對して答へることを强ゆる。而してある觀念を有するに相違ないと確める。而して後これが正當であることを吾々は發見するであらう。彼も兎も角何か一の聯想を生ずる。それが何であるかは全く關係しない。彼は特に吾々が歷史的と名づける所の報告を容易に行ふ。彼は『それは昨日起つた事です』とか『それは最近に起つた事が回想される』とか言ふのである。かやうにして吾々は最初考へたよりも一層屢々前日の印象に夢が關係して居ることに氣が付くであらう。最後に夢を出發點として一層遠い出來事を回想するやうになる。

しかし主要なる點に於て皆さんは誤つて居る。夢見者の第一の聯想が丁度吾々の求めて居る所のものを與へるとか或は兎も角吾々の求める所に導くとか考へたり、或は聯想は全く移り氣のもので、吾々の求める所のものと何等の關係がないと考へ、若しその聯想に信賴するとせば、それは餘りに神の意志を盲目的に信ずると同じだと考へたりすることは非常な謬見である。皆さんの中に心的自由と選擇に就ての根底深き信仰があること、並にこの信仰は非科學であること、尙それは心的生活を支配する運命論の要求に屈從しなければならぬことを、旣に皆さんに指摘した。只私は夢見者に質問をすると、一つの聯想が彼に浮んでくるといふ事實を皆さんが顧慮せられんことを要求す

る。勿論私は他の信仰に反對して一の信仰を建設しようとするものでない。かやうにして與へられた聯想は選擇した事項でもなく、又非決定的のものでもなく、尙吾々の求めつゝある所のものと無關係のものでもないことは證明することが出來る。實に私は實驗心理學が同樣の證據を——尤もその事實に餘り重きを私は置いて居ないが——持ち來したといふことを近頃知つた。

この事柄は重要であるから特に注意を拂はれんことを希望する。夢の中のある要素に關係した事で何か思ひ起したことを言へと私が夢見者に求める際には、ある最初の觀念を心中に有して居る時に生ずる自由聯想の過程に彼の身を委すやうに命ずる。これは反省から全く異つた注意の特殊の態度を必要とする。否寧ろ反省を排斥するやうな注意の態度を要する。大多數の人は困難なくして「この種の態度を取り得るが、中にはそれを困難とするものもないではない。その場合には尙一層自由な聯想を命じ、特殊の手がゝりになるやうな觀念を棄てゝ、私の要求に應じて或る種の聯想をなさしめるやうにする。例へば彼の心中に起つた固有名詞か數字を言へと命ずる。この種の聯想は吾々の方法に用ふるものよりも一層任意的で無責任のものではないかと皆さんは批評するかも知れない。それに拘らず之は何れの場合にも、精神の重大なる內部狀態によつて嚴密に決定されることを示すことが出來る。尤もこの心內の狀態はその當時は吾々には分らないもので、恰も誤謬の際の妨害意向と同じく、所謂偶然的行動を生ずる意向の如く不明である。

私並に私の研究に從つた多數の者が、出發點として一定の觀念を有することなく、只固有名や數字を喚起せしめるやうな實驗を度々行つた。これ等の實驗の或る者は旣に公にされて居る。その方法は次の如くである。聯想の系列が喚起された名によつて生起して來る。而してこの聯想は御覽の通りに最早や全く自由のものではない。しかしその聯想が夢の種々の要素に關係して居る範圍に於て關聯して居るといふべきである。而してその聯想の系列は衝動から生じた思想が無くなるまでは繼續する。しかしその時に至つて、名に伴ふ自由聯想の動機や意義が明白になるであらう。實驗は再三同一の結果を生ずる。その實驗の示す知識によると材料が極めて豐富で、尙一層多く分岐するを必要として居る。自發的に生じた數の聯想は、恐らく最も明白なものである。その聯想は相互に急速に進行

し、驚くべき確實を以て隱れたる目的に達することが出來る。今私は一例として名の分析を示さうと思ふ。これは左樣に多くの材料を取扱はないで濟んだ一例である。

嘗て私が一人の靑年を治療して居た際に、偶然この問題に話が移つて、次のやうなことを私は主張した。卽ち自由の聯想を行ふに拘らず、吾々は直接の事情、被驗者の特質、その當時の彼の事情等によつて狹く決定されない所の名前を聯想することは出來ないと述べた。所がその靑年はそれを信じ兼ねたので、私はそんなら彼自身で實驗をして見たら分ると言つた。私は彼が多數の婦人や娘と種々の關係を有することを知つて居るので、もし私が彼にその婦人の中から一人の名を囘想するやうに命じたらば、それは困難で多數の名が出てくるであらうと思ふが、如何かと私は彼に尋ねた。彼は然りと答へた。所が實際囘想して見ると、驚くべきことには——寧ろ彼自身が驚いたのであるが——多數の婦人の名は表はれて來ないで、暫時沈默をつゞけた後、只一人の名が心の中に浮んで來たことを述べ、それは Albine であると告白した。『それは奇態だ。この名に何を結び付けたか。幾つの Albine を知つて居るか』と私は尋ねた。所が不思議にも彼は Albine の名前を有する婦人は誰も知らないし、又その名に就ては何の聯想をも生じないと言つた。恐らく皆さんは、玆に於て分析が失敗したと思はれるかも知れない。しかしさうでなく、分析は之で完全に出來上つて居る。それ以上何等の聯想をも必要としない。この靑年は非常に色が白いので、分析の際冗談に私が albino (白血病) と屢々言つたことがある。その上又彼の性格の中に女性的要素を發見しようとする際であつた。彼は又彼自身で、その當時最も興味を有して居る婦人卽ちこの albino そのものであつたのである。

同樣に吾々の頭の中に急に表はれて來る旋律も、亦その旋律の屬する思想の系列によつて規定されると見ることが出來る。尤もその思想が何故に吾々の心を占領して居るかを知らないが、或る理由の下に心の中に存して居るのである。而して旋律と思想との關係は旋律に附屬した言葉によつて示されるか、或は旋律の生じた原因によつて示すことが容易である。しかし私は眞の音樂家の場合に就ては一人の經驗もないから、如上のことを主張し得るか否かは玆に控へて置かなければならぬ。眞の音樂家には旋律の音樂的價値は、それが突然意識の中に表はれてくる點

に存して居るかも知れない。しかし前に述べた音樂家でない場合は極めて普通に生じてくる。私はパリの歌の極めて感激的な Schönen Helena の旋律によつて一時頭を占領されて居た一人の青年を知つて居る。所が分析の結果、その當時彼の興味が Ida と Helena との間に爭をして居たことに氣づいた。

然らば全く自由に生じた聯想がかやうに規定されたり、又は或る一定の脈絡に附屬したりするとすれば、この單一なる最初の刺激觀念に結び付いた聯想は一樣に狹く條件づけられて居ると結論することが確かに正當である。聯想は第一にそれを生じた刺激觀念と結合して居るばかりでなく、尙第二に强き情緖的價値を有する思想や興味の範圍卽ち錯綜（Komplex）に關係を有して居ることが實驗上事實として表はれてくる。尤もこの錯綜の影響はその當時少しも知られないで、謂はば無意識活動に止まつて居る。

かやうに結合した聯想は、精神分析學の歷史に重要なる部分をなして居る、極めて敎訓的實驗の主題となつて居た。ヴント派は所謂聯想實驗を始めた。之に於ては被驗者は與へられたる刺激語に對し、如何なる語でもよいが心に浮んだ反應語を出來るだけ早く答へるやうに命ぜられる。而して次のやうな點がこの實驗に注意された。卽ち刺激語と反應語との間に費される時間、反應語の性質、同一實驗が反復される時に生ずる誤謬等を調べた。ブロイラーやユングの指導の下にチューリッヒ派の人々は、聯想が不思議に見える場合にはその次に來る聯想を被驗者に命じて、その不思議の聯想を明白にするやうに、聯想實驗に於ける反應の說明を行ふやうになつた。この方法によつて、是等の異常の反應はその人の錯綜によつて最も著しく決定されて居ることを明白にした。この發見によつてブロイラーとユングとは實驗心理學と精神分析學との間に最初の橋渡しをしたのである。

この話をすると皆さんは恐らく次の質問を發せられるであらう。『自由聯想は決定的のもので、吾々が最初考へた程隨意的のものでないことを今了解した。而して之は又夢の要素に於ける聯想の場合にも同樣であると了解した。しかし吾々の疑問とする所はそれでない。あなたは夢の要素に就ての聯想はその特殊の要素の背後にある吾々の知らない或る精神作用によつて決定されるといふことを主張する。處がその證據に就て吾々は何にも見ることは出來ない。夢の要素に於ける聯想は夢見者の錯綜の一によつて規定されるやうに示されることゝ吾々は豫期して居る。

しかしそれが吾々に如何やうに役立つか。それは夢を理解するに役立たない。それは聯想實驗がなしたやうに、所謂錯綜の知識を齎すに過ぎない。所がそれは夢と如何なる關係を有するのであるか。』

皆さんのいふことは正當であるが、しかし主要點を看過して居る。即ちこの說明の出發點として、私が聯想實驗を選ばなかつた點を看過して居る。聯想實驗に於ては反應を規定する單一の語である刺激語は任意に選擇される。而してその反應はこの刺激語と被驗者の心中に起つた錯綜との媒介物になつて居る。所が夢に於ては刺激語は夢見者の精神生活の中から、彼に取つて未知の源泉から導き出された或物によつて置換へられる。故にその刺激語は恐らく錯綜の派生物（Komplexabkömmling）であるかも知れない。從つて夢の要素に聯關せるその後の聯想は、特殊の要素そのものを生じた錯綜によつて決定されること、又その聯想が錯綜の發見に導くことを推定することは決して空想でない。

夢の場合に於て吾々の豫期する如き事實を示すやうな他の例を皆さんに述べよう。固有名を忘れる事は、夢の分析に生ずる所のものゝ立派な模型である。只前者に於ては一人の人が關係して居るが、夢の解釋の場合には二人あるといふ點が相違する。私が一時名前を忘れる時に、私はそれを知つて居るといふことは確實である。所が夢見者の場合では、ベルンハイムの實驗による迂路を通つて同樣の確實に達することが出來る。私の忘れた名前は實際は知つて居るが、私を遠ざかつて居る。それを如何に努力して囘想しようとしても到底駄目である事は、吾々の經驗によつて直ぐ分かる。しかし私は忘れた名の代りに種々と異つた他の名を考へることが出來る。かやうな置換へた名が自發的に表はれてくる時に、その狀態と夢の狀態との同一なることが明かになつてくる。夢の要素は亦吾人が求めて居る所のものでなく、他のものによつて置き換へられたものである。而して眞實のものは吾々の知らない所で、夢の分析によつてそれを發見しなければならぬものである。又私が名を忘れた時には、その代置の名が正當のものでないといふことを知つて居るが、夢の場合には勞力多き研究の過程を通りて初めて夢の要素に達し得るといふ相違がある。尙又名を忘れた場合にはその置換へられた名を出發點として、その當時意識の中にない忘れた名に到達することの出來る方法がある。若し吾々が注意をこの代置的名に向け、吾々の心の中に生ずるその名に連關せ

る聯想を行ふと、短距離又は長距離の途を通つて兎も角忘れた名に到達する。かやうにすることによつて吾々が、自發的に生じた代置的名が忘却された名と關係を有し、又その忘れた名によつて限定されて居ることを發見する。

この種の分析の例を皆さんに示さう。私は Monte Carlo を首都とせる Riviera の小さい國の名を想起することが出來なかつた。大變に困つたが、どうも想ひ出せない。それでその國に就ての凡ての知識を穿鑿して見た。私は Lusignan 家の Albert 公爵のことを思ひついた。それから彼の結婚、海洋探險の熱愛等、私の思起せるだけの凡ての事を想起したが、少しも目的の名は浮んで來なかつた。そこで私は考へることを止めて仕舞つた。所が忘れた名を想起すことの代りに代置的名が私の心の中に浮んで來た。それは Monte Carlo そのもの、それから Piedmont, Albanien, Montevideo, Colico, といふ具合に急速に表はれて來た。Albanien は私の注意を惹いた第一のものであつた。それは直に Montenegro によつて置換へられた。蓋しそれは白と黑との反對聯想から來たのであらう。その時私は四つの代置的名が Mon といふ同一の綴を有して居ることに氣がついた。而して直に忘れた名を想起して Monaco と叫んだ。この代置名は忘れた名から生じて居ることを皆さんはお分りになるであらう。最初の四つは初めの綴から來て、最後の方は綴りの系列と終りの綴り全體とから來て居る。偶然にも私はその當時その名を忘れるに至つた理由を容易に發見することが出來た。Monaco は München といふイタリー語である。而してその名に於ては禁止作用を生ずべきある思想と聯想して居たのである。

これは極めて奇麗な例で且つ極めて簡單なものである。他の場合では代置名に就ての長い聯想をしなければならぬ。而して初めて夢の分析の類推が明白になるであらう。私は又その種の經驗を有して居る。未知人が私をイタリヤ料理店に案內して、葡萄酒を飮むことに誘つた。そこで彼は非常に愉快な回想を有する葡萄酒を命じようとしたが、その名を忘れて居た。數多の似もつかぬ代置名が彼の心の中に浮んだ。私は Hedwig と呼ばれる誰かの思想が、その酒の名を忘れさしたことを彼の代置名から推定することが出來た。彼が最初その葡萄酒を飮んだ時に、その Hedwig と名のついたものが一緒に居たことを私に話したのみならず、この發見から直に彼の要求して居た酒の名を想起することが出來た。彼は今結婚して幸福な生活を送つて居るが Hedwig の名は回想することを好まない昔

時のことに屬して居たのである。

名の忘却の場合に可能であることは、又夢の解釋の場合にも可能でなければならぬ。代置物から出發して聯想の系列を辿つて吾々の求める眞の目的に到達するに相違ない。尙又名を忘れた事例から類推して、吾々は夢の要素に於ける聯想はその要素によつて決定されるばかりでなく、意識の中に無い眞の思想によつても亦決定されるといふことを推定することが出來る。若し吾々が之をなすことが出來れば、吾々はこの方法を是認する方へ數步を踏み出したと言はなければならぬ。

第七講　顯在內容と潜在思想

誤謬に就ての吾々の硏究は不必要でなかつたことに皆さんはお氣附になつたことゝ思ふ。この方面の努力によつて、皆さんの熟知せられる假說から類推して二つの結果を得たことを感謝する。卽ち夢の要素と夢の解釋の方法との了解である。夢の要素の了得は次の如くである。卽ち夢の要素その者は主要なる思想でなく、恰も誤謬の際の潜在的意向の如くに夢見者に知られない他の思想の代置である。而して他の物によつて代置されたことは夢見者は知つて居るが、しかし彼に承認されないものである。吾々はかやうな了解を、かくの如き多數の要素から成り立つ夢全體の上に應用することが出來ることを希望する。而してこの要素に就ての自由聯想を行はしめて、代置物を明かにし、それによつて隱れたるものを推測することが出來る點に、吾々の方法は存して居る。

吾々の術語を一層可動的にする爲に、用語の變改を行はんことを皆さんに今私は提議する。「隱れたる」「承認し難い」「固有的でない」等の語を用ふる代りに、尙一層精密なる敍述である所の、夢見者の意識に承認されないとか無意識とかの語を用ひようと思ふ。その語によつて、忘れた語の場合又は誤謬行爲に於ける妨害刺戟の場合の關係を包括するに過ぎない。換言すればその當時無意識であるのである、之に反して夢の要素その者及び聯想過程によつて到達した代置的觀念は、意識的であることは勿論である。それ以上の理論的意義が是等の術語に含まれて居ない。適當で且つ容易に理解し易い敍述として「無意識」の語を使用することは非難すべきことではない。

單純なる要素に就ての吾々の理解を夢全體に轉移することによつて、夢は或る他の者の變形した代表物であること、又無意識であること、夢の解釋の仕事は是等の無意識の思想を發見することが理解される。之よりして、夢の解釋をなすに當つて守らなければならぬ、三個の重要なる規則が導き出される。

一、夢の表面の意味が合理的か不合理か、明白か不明瞭かに少しも煩はされてはならぬ。蓋しその表面の意味は吾々の求めて居る所の無意識的思想を形作らないからである。(この規則の明白なる限界は後に至つて吾々に强いるやうになるであらう)

二、吾々は各の要素に對する代置的觀念を呼起すことに吾々の仕事を限るべきで、それ等が何か適當したものを包含するか否かを考へたり發見したりすることを試みてはならぬ。又是等が夢の思想からどれだけ吾々を導くかに就て煩はされてはならぬ。

三、私の述べた實驗に於ける、忘却した語の Monaco の場合に於ける如く、吾々の求めて居る所の隱れたる無意識的思想が、自から表はれて來るまで待つて居なければならぬ。

偖吾々は夢を多少記憶して居るか否か、就中夢を精密に記憶し居るか否かは全く無關係であることを理解する。記憶された夢は全く眞實のものでなく、變化した代置物である。之は他の代置的觀念を呼起すことによつて、固有の思想に近寄る手段を吾々に與へ、夢の中に横はる無意識的思想を意識に持參す方法を吾々に提供するものである。吾々の回想が不正であれば、その生起した凡ては代置物の歪曲が尙起つて居ることを示し、その歪曲そのものも亦動機なくしては生じ得ないものである。

吾人自身の夢や他人の夢を解釋することが出來る。しかし吾々自身の夢から、より多くを學び、その過程は一層多くの確信を得るやうになる。若しこの方面の實驗をすると、吾々に反對して何物かゞ働いて居ることに氣が付く。聯想は生ずるが、その凡てを許さないで、之を批評し選擇するやうにすることは眞である。吾々に或る聯想が浮んで來るとする。『いやそれは不適當である』『他の聯想が浮ぶと『それは餘りに不合理である』第三の聯想が生ずると『全く要點を外れて居る』といふやうにする。かやうに反對することによつて、聯想が明白となる前に息を止

め、遂に之を放逐して仕舞ふことを吾々は觀察することが出來る。かやうに一方には最初の觀念卽ち夢の要素そのものに餘りに固執し過ぎ、他方には選擇を許すために、自由聯想の過程の結果を破壞する。若し吾々が自身で解釋を企てないで、その解釋を他人に許すならば、この選擇に吾々を强ゆる所の他の動機を明白に認知することが出來る。蓋しその動機はそれを知ることを禁ぜられて居るからである。時々吾々は『いやこの聯想は餘りに不快である。私はそれを彼に告げることは出來ない、或は告げることを欲しない』と考へて居ることを發見する。

是等の反對は吾々の仕事の成功を明かに妨げるやうに威嚇して居る。その反對に警戒して、それに從はないやうに確乎と決心して吾々の夢を解釋しなければならぬ。又私が前に列擧した四つの反對、卽ちそれは餘りに不必要で不合理で、不適當で、話すのが不快であるとの四つの中一つでも、聯想を告ぐるのに妨げしないやうにするとの嚴格なる規則を置いて、他人の夢を解釋しなければならぬ。その者も亦この規則を守る事を約束する。而して吾々はその約束を彼が十分果さなかつた事を後になつて發見する時に、大に惱まされるかも知れない。先づ初めに吾々の權威ある確言に拘らず、自由聯想の過程がその結果によつて正當と認められるに至ることを彼は信じないことの說明を與へる。而して後吾々の原理に屈伏するやうに、本を讀ませたり講演をして聞かせたりして、彼をして吾々の意見に改宗せしめるやうにする。しかし疑ひの餘地あり得ない所の吾々自身に於てすら、或る聯想に對して同一の批判的反對をなし、その後二次的思想であるかの如くそれを打破し得ることを觀察することによつて、上述の如き謬見から免れることが出來る。

夢見者の服從しないことに苦しめられる代りに、この經驗を何か新しいことを彼から學ぶ手段であると善意に解することが出來る。卽ち吾々が一層勘く豫期すればする程、一層重大な事になるのである。夢の解釋の仕事はこの批評的反對の形によつて表はれてくる抵抗に對抗して行はれることが分かる。この抵抗は發見者の理論的確信とは無關係である。吾々は實にこれ以上に學ぶことが出來る。經驗の示す所によると、この種の批評的反對は決して正當と考へられないといふことである。之と反對にこの仕方で抑壓せんと欲する聯想は、例外なく最も重要なることが證明され、無意識的思想の發見に對し決定的のものであることが分かる。若し聯想が、この種の反對によつて伴

はれる時には、それは全く特殊の注意に値するものである。

この抵抗は全く新しいもので吾々の假定を基礎として發見した一の現象である。吾々が重要視することのない要素によつて不愉快な驚きを感ずる。何となれば、それが吾々の仕事をして少しも容易ならしめることのないことを既に懸念して居るからで、夢に對する努力を全く棄てゝ仕舞ふやうに吾々を誘ふかも知れない。夢のやうな些細な仕事を取上げて、しかも吾々の技術を滑かに行ふ代りに、かやうに多くの面倒なことをしなければならない。しかし他方にこれ等の困難が吾々を興奮させ、その仕事が面倒に値すると考へるやうになるかも知れない。夢の要素によつて與へられた代置物よりして、隱れたる無意識の思想を洞察する時に、必ずこの抵抗に遭遇する。故にその代置物の背後に何か重要なものが隱されてあると想像してよい。何となれば若し抵抗の目的が隱蔽でないとすれば、何故に吾々はかやうな困難に遭遇しなければならぬか。子供が手の中のものを示せと言はれた時に、拳を開かうとしないのは、持つてはならないものを持つてる爲であることは確實である。

吾々の取扱ふ主題に、この抵抗の動的概念を導き入れるや否や、この要素は量的に相違するものであることを銘記して居なければならぬ。卽ち大なる抵抗もあり小なる抵抗もある。吾々の仕事を進めて行く中に、その差が表はれてくるのを容易に發見することが出來る。吾々は恐らく之を以て夢の解釋の過程に於て遭遇した他の經驗に結び付けることが出來る。時として只一の或は二三の聯想が吾々をして夢の要素から、その背後の無意識の思想に導くに十分なこともある。之に反して他の場合には、長い聯想が必要で、多くの批評的反對に打勝たなければならぬこともある。而して多數の聯想は必然的に種々の程度の抵抗力を有すと考へることが出來る。而してその考へは恐らく正當であらう。若し僅かの抵抗がありとすれば、代置物は無意識的思想から餘り離れて居ない。所が他方に強き抵抗は無意識的思想を大に變化させる。從つて代置物から無意的思想に來るには長い路を戻らなければならぬ。

今や吾々の期待が實現されるか否かを見るために、一の夢を選擇して、それに吾々の方法を試みる時期であるやうに見える。然りその時期であるが、しかし如何なる夢を選ぶべきか。皆さんは、その決定に如何なる困難があるかを知らないであらう。又それが如何なる困難であるかを皆さんに未だ明かにすることは出來ない。勿論僅かの變

化をした夢があるに相違なく、皆さんは、それから始めた方が最もよいと考へられるであらう。しかし、どれが最も僅かの變化を被つた夢であるか。私は已に述べた二つの例が、よい意味を有し且つ最も僅かに變化された夢であるか。若しかやうに考へるとすれば吾々は非常な誤謬に陷るやうになる。蓋し研究の結果、此の夢は非常に高い程度の變化を被つて居ることを示して居る。私が今特殊の條件を置かず任意に夢を選擇するといふことを皆さんが想像されたら、恐らく大に落膽されるであらう。吾々は單純なる夢の要素に對して、全體の仕事が全く不明瞭になる位多數の聯想を觀察し記錄しなければならぬ。若し吾々が夢を書き下し、それの生じた凡ての聯想をその夢と比較したならば、其の聯想の方が夢の長さの數倍になることを發見するであらう。故に最も實際的の方法は、尠くとも或る觀念を與へ且つ或る假定を確め得る如き種々の短い夢を選んで、分析する方がよいといふことが分かる。極めて僅かの變化を被つて居る夢をどこで搜すべきかの手掛りを經驗が與へない間は、如上の道程を取るやうに吾々は決心するより外はないのである。

しかし私は吾々の行く途に橫はる事項を簡單にする他の手段を暗示することが出來る。全體の夢の解釋を企てることの代りに、簡單なる夢の要素を取扱ふことにし、且つ一群の實例を取つて吾々の方法の適用が、その實例を如何に說明するかを見ることにしよう。

（a）一人の婦人が子供の時に、神がその頭に尖つた紙の帽子を被つて居たといふ夢を屢々見たと告げた。皆さんは夢見者の助なくして、如何にそれを理解しようとするか。その夢は全く無意味のやうである。しかし其の婦人が次の話をしたので、不合理の點が無くなつた。卽ちその婦人が幼少の時分、食卓につく際に兄や姉が自分よりも多く貰つては居ないかと、皿を見ることを止めないので、その節夢で見るやうな帽子を常に被せられて居たといふことである。この帽子は明かに目かくしの目的をもつて居た。尤もこの歷史的報告の一片は何等の困難なくして與へられた。この要素の說明並に短き夢全部の說明は、夢見者のその他の聯想によつて極めて容易に出來た。卽ちその婦人は『神は何者でも知り、何物でも見るといふことを私は告げられて居るので、私も神と同樣に、假定彼等が私を妨げやうとしても、何れの物をも知り且つ見るといふことを、夢は意味する』と言つた。この例は恐らく餘りに

簡單である。

（b）一人の懷疑的の婦人患者が長い夢を見た。その夢の中で或る人が私の著書『頓智』のことを話し、大變にそれを稱讚して居た。その後何か海峽のことが話された。それは恐らく他の本であつたかも知れない。その本の中に海峽の語が表はれ、或はその他海峽に關係した何かゞ表はれた。……彼女は何にも知らなかつた。……それは全く曖昧であつた。

さて皆さんはこの夢の中の海峽は、その曖昧なために解釋を不可ならしめると慥かに考へられるであらう。皆さんが困難を豫期されることは正當である。しかしその困難は、夢の曖昧のために生じない。寧ろ反對に、この解釋の困難は、その他の何物かによつて生ずる。即ち要素を不明瞭ならしめるものと同一物によつて生ずる。夢見者は『海峽』の語に就て何等の聯想を有しない。從つて私は何と言ふべきかを知らなかつた。その後暫くして、恐らく次の日と思ふが、彼女は恐らくそれと關係したと思はれる一の聯想が心に浮んで來たと私に告げた。それは或る人が彼女に告げた滑稽的の言葉であつた。ドーバーとカレーとの間を船に乘つて居る時、一人の著名なる著者が一人の英人に向つて、或る特殊の對話の中に次の語を引用して話して居た。Du sublime au ridicule il n'y a qu'un pas. その著者は Oui, le Pas-de-Calais と答へた。即ち彼は佛蘭西は高尙で英吉利は滑稽的と言ふ積りであつた。勿論 Pas-de-Calais とは海峽である。詳言すれば Canal la Manche — 英國海峽である。さてこの聯想が何等か夢と關係があると、私は考へるかと皆さんは尋ねられるであらう。それに對して私は然りと答へる。即ちその聯想は、謎の如き夢の要素の眞の意味を與へる。皆さんはその滑稽が既に夢の前に存在して居て、要素の『海峽』の背後に無意識的思想があつたと疑ひ、聯想は其後の創見であつたと主張しようと思ふか。その聯想は無遠慮な稱讚の下に變裝して居る懷疑を表はして居る。而して抵抗が疑もなく、彼女の心中に長い間生じた聯想の原因ともなり、又、その夢の要素を曖昧ならしめる原因ともなつて居る。夢の要素とその下に横はる無意識の思想との關係を觀察せよ。それは恰も思想の斷片であり又隱喩である。かやうに孤立せしめることによつて、夢の思想は全く理解の出來ないやうになつて仕舞ふのである。

(c)一人の患者が可なり長い夢を見た。その一部は下の如くである。彼の家族の種々の人々が特種の形のテーブルに坐つて居た云々。夢見者はこのテーブルはある家族を訪問した時に見たものと同種であることを想出した。その事から彼の思想は次の如くになる。即ちこの家族に於ては父と息子との關係が特殊のものであつた。而してその患者自身と父との關係が、やはりその家族と同一の性質であつたと直ちに附言した。かやうにしてテーブルは、この並行論を示すために夢の中に入つて來たのである。

この夢見者は夢の解釋の要求に就て長い間熟知して居た人である。然らざればテーブルの形のやうな些細な事を考察の對象とする考へに反對するかも知れない。吾々は夢の中の何れの物も偶然のものとか無頓着のものとかする事を否定する。即ちかやうな些細な且つ外見上動機のないやうに見える事項を精細に探究することによつて吾々の結論に到達することが出來る。皆さんは夢の作業が『吾々の關係も丁度彼等の關係と同一である』といふ思想を言表はす爲に、テーブルを選ぶに至つたことを又驚かれるかも知れない。しかしその家族の姓が Tischler(Tisch テーブル)であることを知る時に、この說明がつく。彼の家族をそのテーブルに坐らせることは『彼等も亦 Tischler である』といふ夢見者の意味に外ならない。而してこの種の夢を解釋することによつて無分別に陷ることに皆さんは氣が付くであらう。この點に於て私の述べた困難の一つが例を選ぶに當つて存して居る。この例の代りに私は他の例を容易に示すことが出來る。しかし恐らく私はその代りに、他のことを行ふやうに無分別を避けなければならぬ。

玆に於て吾々は、旣に使用したかも知れない二つの新術語を紹介するに都合のよい時が來たやうに思ふ。即ち吾々が夢といふのは顯在的夢の內容と名づけ、聯想を辿ることによつて知られる隱れたる意味は潛在的夢の思想と名づけようと思ふ。而して後吾々は、上に述べた例のやうな顯在內容と潛在思想との關係を考察しなければならぬ。是等の關係は場合によつて種々と相違する。(a)と(b)との例に於て、顯在的要素は潛在思想の成分である。しかしその斷片に過ぎない。無意識的夢の思想に於ける非常に複雜なる心的組織の一小部分が顯在的夢にその途を見出し、斷片的に或は電信文に於ける通用語や省略文字の如き、暗示の形に於て表はれてくる。解釋はこの拔萃又は

暗示の屬する全部を完全にしなければならぬ。(b)の例に於て最も完全に之を行つた。故に夢の作業である變形作用の一方法は、斷片や暗示によつて置換へる作用である。尙又(c)の例に於て、吾々は顯在內容と潛在思想との間の他の關係があることに氣がつく。その關係は次の例に於て一層平易に且つ明瞭に表はれて居る。

(d)夢見者が床から彼の知つて居る或る婦人を引上げて(Vorziehen)居た。彼はこの夢の要素の意味を最初の聯想によつて發見した。卽ちそれは彼が彼女を選んだ(Vorzug)といふことを意味する。

(e)他の一人は彼の兄が箱の中に居るといふ夢を見た。第一の聯想によつてその箱は戶棚(Schrank)に置き換はり、第二の聯想によつて、その兄が儉約をして居る(einschränken)といふ意味が明かになつた。

(b)夢見者が山に登つた。そこは非常に見晴のよい所であつた。この夢は最も合理的で、恐らく何等の解釋をも生じないやうである。從つて吾々は只如何なる回想がその夢に關係して居るか、何がそれを生じたかを發見しなければならぬやうである。しかしそれは誤つて居る。この夢も亦他の夢と同じく解釋を要するもので、只それが一層複雜になつて居るのである。何となれば夢見者は山登りに就て少しも記憶して居ない。しかし彼の知人が Rundschau(評論)を發刊して居り、それは世界の最も遠い地方と吾々との關係を論じて居ることを想ひ出した。卽ち潛在思想は、夢見者が自身をその Rundschauer(評論家)と同一視して居るといふことを表はして居る。

玆に於て皆さんは夢に於ける顯在要素と潛在要素との新しき形式の關係を發見する。前者は後者ほど變化して居ない。後者の發現に於ては、語の發音にその源を爲して居る成型的具體的心象の一片である。之も亦實に變化に相當するものである。蓋し語の生じた具體的心象を吾々は忘れて居るから、その心象が語の代表となる時に、それを認知することが出來なくなるからである。顯在的夢が視的心象から成立することが非常に多く、思想や語から成立することが極めて稀であることを考へる時に、顯在と潛在とのこの種類の關係が夢の組織の上に特殊の意義を有することを容易に理解するであらう。尙又この仕方に於て長い系列の抽象思想が、祕密の目的に役立つ所の代置的心象を顯在的夢の中に生ずることの出來ることが理解される。これが又謎繪を作る仕方になつて居る。この種の表現をなす所の滑稽の外見が如何にして生ずるかは、吾々が玆に觸れることを要しない特殊の問題である。

顯在要素と潛在要素との第四種の關係がある。しかしそれは吾々の方法の說明上必要なる時期の來るまで、之を述べないことにする。加之その他の可能的關係の凡てをも述べないことにする。蓋しこれで吾々の目的に十分であるからである。

全部の夢の解釋を敢てする程皆さんは勇氣があると思ふか。吾々はその仕事に對し既に用意が出來て居るか否かを調べて見よう。勿論私は最も不明瞭のものを選ばないで、寧ろ夢の特質が最も明かに表はれて來るものを選ばうと思ふ。

既に數年間結婚して居る一人の若い婦人が次のやうな夢を見た。彼女は夫と共に劇場に居た。而して特別席の一方が全く空席であつた。夫は彼女に次のやうなことを言つた。Elise L. とその約婚の男も亦茲に來ることを欲して居たが、只惡い座席を得ることが出來たに過ぎなかつた。一フローリン半で三つ、而して勿論その座席を取ることが出來なかつたと。彼女は、その事は別に不幸なことでもないと考へた。

夢見者が吾々に告げた最初のことは、夢を生じた出來事が顯在的內容の中に暗示されて居るといふことである。Elise L. は彼女と殆ど同年位の知人であるが、その女が約婚をしたといふことを彼女の夫が告げた。夢はその報知に對する反應である。多くの夢に於て、それが前日の出來事に關係して居ることを容易に指摘し得、且つ夢見者も屢々何等の困難なくこれに追跡することの出來ることは、既に吾々の知る所である。その夢見者は尙顯在的夢の他の要素に就て同様の報告を與へた。特別席の空虛なことは何から生じたか。それは一週間以前の出來事に關係して居る。彼女がある芝居に行かうと思つて早くから座席の豫約をした。その爲に切符を買ふに割增しをしなければならなかつた。所がその芝居に行つて見ると、その座席の一方は空虛であつたので、彼女は餘り急ぎ過ぎたといふことが分かつた。實際行く日に切符を買つても十分に間に合つたので、彼女は餘りに心配し過ぎたといつて、夫にからかはれた。次に一フローリン半の錢は何であるか。之は前の事項と全く關係のない他の事柄に屬して居ることが分かつた。卽ちそれは前日に起つた或る出來事に關係して居る。彼女の義妹が夫から百五十フローリンを貰ひ、恰も馬鹿な鵞鳥のやうに大急ぎに寶玉商の所にかけつけて、その金の凡てゞ寶石を買つて仕舞つた。數の三は何に關

係して居るか。その約婚の女 Elise L. は、結婚してから十年になる彼女より、僅かに三ヶ月だけ年下であるといふことなくしては、この三の數が生じないといふことに就て彼女は何にも知らなかつた。次に二人に對して三枚の切符といふ不合理のことは何であるか。彼女はこれに就て言ふべき何物もなかつた。而してそれ以上の聯想や報告を與ふることを拒んだ。

それに拘らず、彼女の二三の聯想が夢の潛在的思想を發見するに十分な材料を吾々に提供した。彼女の言葉の中に時間の事が多くの點に表はれて居るのに氣がつく。卽ち時間が是等の種々異つた材料に共通した基調を形作つて居る。彼女は餘り早く切符を買つた。その切符に對して餘分の金を拂はなければならぬ位に餘り急ぎ過ぎた。彼女の義妹は何もかも失ふかも知れない位に大急ぎで寶石商にかけつけて寶石を買つた。餘り早くとか餘り急ぎ過ぎるとかの異常に强調された語が夢に時々關係せること、彼女よりも僅かに三ヶ月だけ若い友人が今や善き夫を見出したといふ話と、彼女の義妹に就ての批評卽ち餘り急ぎ過ぎることの馬鹿げて居ること、等を綜合して考へると、吾々は自然的に次の如き潛在思想の組織が心に浮んで來る。而して顯在的夢はその思想の非常に變化した代表物であることが分かる。

『私のやうに急いで結婚することは實に馬鹿げて居た。エリゼの例によると、後になつても夫を發見することが出來たことが分かる』(餘り急ぎ過ぎたといふ事は、彼女が切符を買つた行爲や、義妹が寶石を買つた行爲によつて表はされて居る。芝居に行くといふことは嫁に行くことの代置である。)これが主要な思想であらう。この場合の分析は夢見者の言葉によつて斷念すべきものでないから、幾分不確實ながらも、吾々は分析を續ける。『而して私は金錢を得るにも百倍も良かつたかも知れない。』(百五十フローリンは一フローリン半の百倍である。)若し吾々が金錢に對して持參金を代置させ得るとすれば、それは持參金で夫も買へるといふことを意味する。寶石も惡い座席も夫の代りになつて居る。若し『三枚の切符』と夫との間の或る關係を發見することが出來れば、尙一層好ましいことであらう。しかし吾々の知識はこれ以上に及ばない。吾々は只この夢は彼女の夫を輕視することを示し、そんなに急いで結婚したことを後悔してることを示して居ることを發見した。

夢の解釋に就ての吾々の最初の企の結果によつて、吾々は滿足されるよりも寧ろ驚かされ且つ當惑するに至るであらうと私は思つて居る。餘り多數の觀念が一度に吾々の上に無理に生じて來る。而もそれは習熟し得るよりも遥かに多くの觀念である。この夢の解釋が吾々に敎へ得る所のものは、之で最後でないといふことを旣に吾々は知つて居る。明確に新しい見地として知り得る諸點を吾々は直ちに捕捉することにしよう。

第一に吾々の氣付く點は、潜在思想の中の主要なる强調は急ぎの要素に置かれて居ることである。而してそれは顯在的夢に於て何も發見されない所のものである。分析をしなければこの思想が入つて居ることに就て、少しの疑念も生ずることが出來なかつた。從つて無意識的思想の主要點は顯在的夢の中に全く表はれないことが可能であるやうに見える。全部の夢によつて受ける吾々の印象はこの事實によつて全く變へなければならぬ。第二に夢の中には觀念の無意味の結合がある。(一フローリン半で三つ)夢の思想の中には意見もある。『それは馬鹿げて居る』(餘り早く結婚することは)。『馬鹿げて居る』との思想は、矛盾の要素が顯在的夢の中に入つてくることによつて代表されて居ることを誰が拒むことが出來るか。第三に顯在的要素と潜在的要素との關係は單純なものでないといふこと、卽ち顯在要素は常に潜在要素の代表でないことが、兩者を比較することによつて分かる。兩者の關係は二つの異つた團體間の關係の性質を帶びて居る。顯在要素は多くの潜在思想を代表し得るか、或は潜在思想は多くの顯在要素によつて置換へられ得るといふやうに全く異つた團體間の關係を有して居る。

夢の意味や、それに對する夢見者の態度に關しては、又言はなければならぬ多數の驚くべき事實を發見するかも知れない。婦人は慥かにこの解釋を是認した。しかしその解釋を不思議がつた。自分の夫を輕視する考を有して居ることに少しも氣付いて居なかつた。彼女は何故に夫を輕視しなければならぬかを知らなかつた。故にそこには尙多くの理解し難い點が存して居る。まだ吾々は夢を解釋するに適當な準備が出來て居ないこと、並に尙多くの知識と準備とを先づ必要とすることを私は實に考へるものである。

第八講　子供の夢

吾々は餘り進み過ぎたやうに感じる。それで今少し後戻りをして見ようと思ふ。吾々は吾々の方法によつて夢の變歪の困難を征服するために最後の試みをなした前に、若し少しも變歪してゐないか、或はほんの僅かしかしてゐないやうな夢があるならば、さういふ夢に注意を向けて取扱ふのが最上の策であると言つた。かうすることによつて吾々は、再び吾々の知識の進路から離れつゝあるのである。何故ならば、實際に於て人は夢の解釋方法を絶えず使用し、變歪した夢を徹底的に分析した後に於いて始めて變歪しない夢のあることに氣が附くやうになつたのだからである。

吾々の求めてゐるやうな夢は子供に見出される。子供の夢は短くて、明白で、筋が通つてゐて、理解し易く、曖昧でないが、しかも紛ふべくもない夢である。けれども子供の夢はすべてこの型のものであると考へてはならない。夢の變歪は少年時代の極めて早い頃から現はれ始める。さうして五歳乃至八歳の子供の夢にも旣に後年に於けるすべての特質を示すものが記錄されてゐる。けれども若し諸君が認め得べき心的過程の黎明期から四五歳までの間の夢を取扱ふならば、幼稚と名づくべき特質を持つた一聯の夢を見出すであらう。もつと大きくなつた子供にもこれと同じ種類の夢が見出される。實際、成年に於ても、ある場合には、代表的な幼稚な夢と少しも違はない夢が生じることがある。

吾々はこの子供の夢によつて極めて容易にまた確實に夢の本質を說明することが出來る。吾々はこの說明が決定的で普遍的に妥當なものであることを望むものである。

（一）　この夢を理解するためには何等の分析の要も、方法を用ひる要もない。自分の夢を物語る子供に質問する

ころの經驗が前の日になされてゐるものである。夢は前日の經驗に對する睡眠中の心的生活の反應である。必要はない。けれどもその子供の生活に就いて少しばかり知らなくてはならない。何時でもその夢を說明するとこ

吾々はこれ以上の推論を支持するために二三の例を考察しようと思ふ。

（イ）一年十ケ月の子供は誕生祝として櫻實の入つた籠を人に贈らなくてはならなかつた。彼は、その櫻實を少しばかり貰ふ約束ではあつたが、明かに非常に厭々ながらそれをした。翌朝彼はこんな夢を見たと言つた。「ヘルマンは櫻實をみんな喰べてしまつた。」

（ロ）三年四ケ月の女の子が始めて湖水を渡つた。陸へ着いた時、彼女はボートを離れるのを厭がつて烈しく泣いた。舟に乘つた時間が餘りに早く過ぎ去つたやうに彼女には思はれたのである。翌朝彼女は言つた。「昨夜私は湖を舟で渡つてゐた。」こゝで言ひ足して置きたいことは、この乘舟はかなり長く續いたといふことである。

（ハ）五年三ケ月の男兒がハルシュタットに近いエシャンタールへの遠足に連れて行かれた。彼は以前にハルシュタットはダハシュタイン山の麓にあることを聞いてゐて、非常にこの山を見たがつてゐたのであつた。アウスゼーの家からダハシュタインは美しく見えた。さうして望遠鏡で見ると、その頂上のシモニーヒュッテを見分けることが出來た。その子供は幾度も望遠鏡でそれを見ようと苦心したが、見えたかどうかといふことは誰も知らなかつた。遠足は樂しい期待に滿ちた氣分で始まつた。新しい山が見える每にその子供は「あれがダハシュタイン山か」と尋ねた。その度にさうでないと答へられたので、彼はだん〳〵不機嫌になり、軈て默り込んでしまひ、一寸上の方にある瀧まで一緖に行くのは厭だと言つた。人々は彼が疲れ過ぎたのだらうと思つたが、翌朝彼は嬉しさうに言つた。「昨夜私は私達がシモニーヒュッテにゐる夢を見た。」だから彼はそれを見たくてその遠足に加つたのであつた。彼が說明したことは「六時間步いて登らなくてはならない」といふことだけであつた。さうしてこれは以前に人から聞いたのである。

この三つの夢だけで必要なだけの材料は手に入るであらう。

（ニ）これらの子供の夢は無意味なものではないことが分る。それは理解の出來る、完全な心的作用である。こ

ゝで私が前に述べた夢の醫學的判斷と、ピアノの鍵の上を動く未熟な指の比較とを想起していたゞきたい。諸君はこれらの子供の夢が如何にこの解釋と相容れないものであるかといふことを見落されないであらう。けれどもまた睡眠中に大人は痙攣的な反應で滿足してゐるのに、若し子供が完全な心的活動をすることが出來るならば、それこそ不思議であらう。それにまた、子供は大人よりもよく、また深く眠ると信ずべき理由は十分にある。

（三）これらの夢は變歪されてゐない、從つてまた解釋する必要はない。こゝでは顯在夢と潛在夢は合致してゐる。從つて、夢の變歪は夢の本質に屬するものではない。この説明は諸君の心を輕くしたことゝ私は思ふ。しかしながら、更に詳しく考察して見ると、これらの夢にも少しばかりの變歪のあることゝ、顯在內容と潛在せる夢の思想との間に或る相異のあることを許さゞるを得ないのである。

（四）この子供の夢は失望、憧憬、滿たされなかつた欲望を後に殘したところの前日の經驗に對する反應である。ところが夢ではこの欲望は直接に、變裝されずに實現されてゐる。こゝで睡眠の擾亂者、夢の刺戟者としての內的或は外的の身體的刺戟の演ずる役割に就いての吾々の議論を考へていたゞきたい。吾々は確實な事實によつてそのことを知つたのであるが、それでは少數の夢しか説明することが出來なかつた。これらの子供の夢にはかゝる身體的刺戟が影響したと思はれるところは少しもない。その夢を誤解することは出來ない。それは完全に理解出來るし、また容易に全體を見渡すことも出來るからである。しかしながらさうかと言つて刺戟は夢の原因であるとする吾々の考へを放棄する必要はない。吾々はたゞ、睡眠を擾す身體的刺戟の外に心的刺戟があるといふことを最初から何故忘れてゐたのであるか、と尋ねさへすればよいのである。確に吾々は大人の睡眠を擾すものは主としてこの刺戟であることを知つてゐる。即ちそれは睡眠に必要な心的狀態を彼に得させない、即ち彼が外界に興味を持たないやうになることを妨げるのである。彼は生活を斷絶させようと欲しない。寧ろ彼のしてゐる仕事を續けようと思ふ。そこで彼は眠ることが出來ないのである。從つて、眠りを擾すかゝる心的刺戟は子供にとつては滿たされぬ欲望であり、彼は夢でそれに反應する。

（五）こゝからして吾々は最も近道を通つて夢の機能を解決することが出來る。心的刺戟に對する反應としての

夢の價値はこの刺戟を除去し、その睡眠を續かしめるところに存するに相違ない。この除去が夢によつてどういふ風に行はれるかといふことは吾々はまだ知らない。けれども夢は、人が非難するやうに、睡眠の擾亂者ではなくて、睡眠を擾亂させるものを防ぐものであり、除去者であることを知るのである。吾々は夢を見なければよく眠れるであらうと考へ勝であるが、これは間違つてゐる。實際に於いて、吾々は夢の助けを借りずには眠ることが出來ないであらう。吾々がこんなによく眠ることの出來るのは夢のお蔭である。夢が吾々を多少擾すことは止むを得ない。それは吾々を眼ざまさうとする安眠妨害者を追拂ふ時に、巡査が時として少しの騷ぎをせざるを得ないのと同じである。

（六）欲望が夢の刺戟者であるといふこと、その欲望の實現が夢の內容であるといふこと、これが夢の主要特質である。も一つの不變の特質は思想を表現せしめるばかりではなく、幻覺的經驗としてそれを實現されたものとして表現することである。「私は湖水で舟に乘りたい」といふのが夢を刺戟した欲望である。ところが夢そのものゝ內容は「私は湖水で舟に乘つてゐる」である。從つて、かゝる單純な子供の夢にもなほ顯在夢と潛在夢との間の差異、潛在せる夢の思想の變夢は存してゐる。卽ち思想が經驗に置換されてゐる。夢を解釋するに當つて吾々は先づ第一にこの變化された部分を元通りにしなくてはならない。若しこれが夢の最も普遍的な一特質であると考へらるべきであるならば、私が前に擧げた「私は兄が金庫の中にゐるのを見る」といふ夢の斷片は從つて「私の兄は節約してゐる」とではなく、「私は兄に節約してほしいと思ふ、」「兄は節約すべきだ」と飜譯しなくてはならない。こゝに擧げた二つの普遍的な特質の中で、第二の方が第一の方よりも明かに反對なしに認容されさうである。吾々は廣汎な研究によつて始めて夢の刺戟者は常に欲望であるに相違ない、さうして不安や計畫や非難である筈がないといふことを確めることが出來る。けれども、も一つの特質、卽ち夢はその刺戟を再現させるばかりではなく、一種の體驗によつて取除けられ、片付けられ、解放されるといふことはこの研究ではまだ分つてゐない。

（七）夢のこの特質と關聯して吾々は再び夢と誤謬とを比較することが出來る。後者に於いては吾々は擾亂する傾向と擾亂されるものとを區別する。さうして誤謬はこの兩者の折衷物であつた。夢もまたこれと同じ範疇に屬し

てゐる夢にあつては擾亂される傾向は無論眠らうとする傾向である。擾亂する傾向は心的刺戟、即ちその解放を強要するところの欲望であるとして置く。何故ならば、吾々は今のところでは睡眠を擾すこれ以外の心的刺戟を知らないからである、夢はまたこゝでも妥協の結果である。吾々は眠るが、しかも欲望の充足を經驗する。欲望を滿たすと同時に眠りを續ける。どちらも一部分は實現され、一部分は放棄される。

（八）ある極めて透明な空想が「晝夢」と呼ばれてゐる事實からして、夢の問題を理解する一つの道が發見されるかも知れないと、ある場所で吾々が言つて置いたことを諸君は覺えて居られるであらう。さてこの晝夢は實際に欲望の實現である、野心的なまた色欲的な欲望の實現であつて、吾々はさうであることをよく知つてゐる。けれどもそれは、どんなに鮮明に描き出されても、たゞ思想のうちに行はれるだけであつて、決して幻覺的に體驗されることはない。從つてこゝでは夢の二特質のうちで、確實でない方が保有されてゐるに反して、睡眠狀態に依存して覺醒生活に於いては實現され得ない方のは全然缺如してゐる。だから晝夢といふ用語のうらに、欲望の實現は夢の主要特質であるといふことは暗示されてゐるのである。更にまた、夢に於ける經驗は單に睡眠狀態といふ特殊な條件の下に於いてのみ可能な變形された想像――從つて、「夜の晝夢」――に外ならないならば、吾々は直ちに夢を形成する過程がどうして夜の刺戟を取り除いて滿足を齎し得るかを理解することが出來る。何故ならば、晝夢もまた欲望の滿足と密接に關係した活動である、否たゞそのためにのみなされるものだからである。

けれども、この外にも、これと同じ意味を現はしてゐる用語がある。誰でも知つてゐる諺にかういふのがある。「豚は椕實の夢を見、鵞鳥は玉蜀黍の夢を見る。」「鷄は何の夢を見る、黍の夢。」この諺は、從つて、吾々がしたよりも更に下へ降つて、即ち子供から動物にまで降つて、夢の內容は欲望の充足であることを確言してゐる。これと同じことを意味してゐるやうに思はれる言葉は非常に澤山ある。「夢のやうに美しい。」「そんなことは夢にも思はなかつた。」「そんなことは夢にも思ひ付くまい」等がそれである。この俗語の判斷は明かに偏頗である。苦悶の夢もあれば、苦痛な或は何でもない內容を持つた夢も無論あるが、それらの夢はかう日常語を作り上げなかつた。實際吾々は「惡い」夢のことを語りはする。けれども夢は普通にはたゞこの上ない欲望充足の意味に使はれる。また

豚や鷺鳥が殺される夢を見ると主張するやうな諺は一つもない。

夢のこの欲望充足の特質が夢に就いての著者たちに見落されたといふやうなことは、無論、考へ得ないことである。その反對に彼等は屢々これに注意した。けれども彼等のうち一人としてこの特質を普遍的なものとして認め、夢の說明の鍵とするといふことには思ひ付かなかつた。何故彼等がこれを思ひつかなかつたかといふことは容易に考へることが出來る。このことは後に論じようと思ふ。

けれども吾々は子供の夢の研究によつて、如何に多くの知識を得たことであらう。しかも殆ど何の面倒もなしに！　吾々は夢の機能は睡眠を保護するにあること、夢は二つの相爭ふ傾向によつて生ずること、その傾向の一つは眠らうとする欲求であつて絕えず存し、も一つの方は心的刺戟を滿足させようとすること、夢は意味の豐富な心的作用であつて、その二主要特質は欲望の實現と幻覺的經驗であることを知つた。さうしてその際に吾々は今精神分析を研究してゐるのであることを殆ど忘れることが出來た。夢と誤謬とを關係させたことを除けば、吾々の仕事は別に變つたことをしなかつた。精神分析法の假定に就いては何も知らない心理學者も、子供の夢に就いてのこの說明を與へることは出來るであらう。それならば何故誰もそれをしなかつたのであるか。

若しすべての夢がこの幼稚な型式のものであつたならば、夢を見た人に質問しなくても、無意識なものを引き出さなくても、また自由聯想法の助けを借りなくても、この問題は解決され、吾々の仕事は終つてゐたであらう。吾々の仕事は明かにこの方面に於いて續けられなくてはならないのである。吾々は、普遍妥當的であると言はれてゐる特質が、たゞある種のまた一定數の夢だけにしか通用しないことが後に分つたことを旣に屢々見出した。そこで吾々の決定しなくてはならない問題は、子供の夢から推論された一般的特質は確かなものであるかどうか、その特質はその意味が明瞭でなく、その顯在內容と前日から殘つてゐる欲望との關係が認められないやうな夢にも通用するかどうかといふことである。吾々はこの種の夢はひどい變歪を受けてゐるから、直ちにそれを判斷してはならないといふことを知つてゐる。吾々はまたこの變歪を明かにするために、今子供の夢を理解するためには用ひずに濟んだところの、精神分析法の助けを必要とするであらうと豫想する。

けれども變歪を受けてゐないで、子供の夢のやうに、欲望の實現であることが容易に認められるやうな今一種の夢がある。それは强制的な身體的必要——飢渴、性的欲望——によつて一生を通じて現はれるところの夢、即ち內部的身體的刺戟に對する反應であるといふ意味に於いて欲望の實現である。かうして私は一年七ヶ月の女の子の夢を書き止めて置いたが、それは彼女の名前と一種の獻立表とから成り立つてゐる。(アンナ・F…オランダ苺、ビルベリー(一種の苺)、卵、パン粥)。これはこの夢の中に二度現はれた果物を食ひ過ぎて胃を惡くしたので絕食させられた日に對する反應である。同じ時に彼女の祖母——孫の年を合はすと丁度七十歲であつた——は遊走腎が惡かつたので一日絕食したくてはならなかつた。さうすると彼女はその晚に、招待されて素晴らしい御馳走の出た夢を見た。飢ゑさせられた婦人、旅行或は探險をして食糧の缺乏に苦しんでゐる人々を觀察して見ると、かういふ狀態にある時には彼等はきつとその欲望の滿たされる夢を見ることが分る。かうしてオットー・ノルデンスクエルドは彼の『南極』(一九〇四年)といふ書物の中で、彼と共に越冬した人々のことに就いて次のやうに語つてゐる。(第一卷、三三六頁)

「吾々がどんなことを考へてゐるかといふことは夢が非常に明白に示した。この時ほど夢を屢々見たことも、鮮かに見たことも一度もない。いつもは滅多に夢を見ない仲間のものまでが、朝になつて空想世界の經驗を話し合ふ時には長い物語をした。夢はどれも今や吾々から隔絕してゐるところの外の世界に關するものであつたが、時としては現在の境遇に關したものもあつた。……その外に、飮食のことが夢の中心であつて、幾度となくその夢が見られた。眠つてゐる間に宴會に行くことに秀でゝゐる吾々の一人は、朝になつて「三品料理にありついた」と言へる時には大喜びであつた。も一人は煙草のことを、煙草の山を夢に見た。も一人は氷の解けた海の上を帆を上げてこちらへやつて來る船の夢を見た。も一人は語る價値のある夢を見た。郵便配達が手紙を持つて來て、何故その手紙がこんなに遲くなつたかを說明した。彼はその手紙を誤配達したので、それを取戾すのに非常に手數がかゝつたと言つた。無論人はもつと出來さうもないことを夢に見たが、私自身の夢や、他人の話すのを聞いた夢は殆ど皆著しく想像力が缺乏してゐた。これらの夢を全部書留めて置いたら、きつと心理學的に見て非常に興味のあるものであつたらうと思ふ。けれども夢は吾々の誰でもが一番欲しがつてゐるものを何でも與れるのだから、吾々が如何に睡

眠に憧れたかといふことは容易に理解出來よう。」今度はドウ・プレルから引用して見よう。「ムンゴ・パークはアフリカを旅行中餓死しかけた時、絶えず彼の故郷の水の湛へられた谷や野原の夢を見續けた。同樣にトレンクはマグトブルクの城の中で飢に苦しめられた時に、贅澤な御馳走に取り圍まれてゐる夢を見た。フランクリンの第一探險隊に參加したジョージ・バックは恐ろしい食糧缺乏のために餓死しかけた時、きまつて豐富な食事の夢を見た。」

夕食に鹽からいものを食べて夜渇を覺えたものは水を飮む夢を見勝ちである。無論夢を見ただけで激しい飢渴を醫することは不可能であるから、かういふ場合には喉が渇いて眼が覺め、起き上つて本當の水を飮まざるを得ない。この場合には夢の仕事は實際上の價値は少いが、それでもそれは吾々を眼覺し行爲するやうに強いるところの刺戟に對して、睡眠を保護するために呼び出されたのであることは矢張り明瞭である。その欲望がそれほど激しくない時には、この「滿足せしめる」夢は往々その目的に役立つものである。

同樣に性的欲望によつて生じた夢も滿足を齎す。がそれは語る價値のある特質を示してゐる。性的衝動は飢渴ほどその對象を必要としない、といふ特色を持つてゐるから、自瀆の夢に於いてはその滿足が實現されることがある。また對象との關係に於けるある困難（これは後に論ずる）のために現實的滿足は極めて屢々漠然とした、或は變歪された夢の內容と結びついてゐることがある。O・ランクが認めたやうに、自瀆夢のこの特性は夢の變歪の研究には極めて都合のよいものである。更に欲望の夢は、大人にあつてはこの滿足の外に全然心的な刺戟から生じて來て、それを理解するためには解釋を必要とするやうなものをも包含してゐるのが普通である。

しかしながら、私は大人の見る幼稚型の欲望充足の夢は所謂強制的欲望に對する反應としてのみ現はれると主張するものではない。吾々は同樣にこの種の短い、明白な夢が或る支配的な事情の下に於いて疑ひもなく心的刺戟から生ずることを知つてゐる。例へば「待ち切れない」夢がそれである。旅行や彼が非常に興味を持つてゐる劇の見物や講演や或は訪問の準備をしてゐる人は、それをしない中にその期待の實現された夢を見る。さうして實際の經驗の前夜に既に目的地に着いてゐたり、劇場に居たり、彼が訪問しようとする人と話してゐたりしてゐる自分を見出す。また「慰め」の夢と名づけるに適しい夢もある。即ちもつと眠つてゐたいと思ふ人は、實際には眠り續けて

ゐながら、自分は既に起きてゐる、顏を洗つてゐる、學校に居るといふ夢を見る。即ち實際に起きるよりも夢の中で起きてゐたいのである。吾々が夢の形成には必ず參加することを認めたところの眠りたいといふ欲望は、これらの夢では明白であつて、その夢の眞の形成者として現はれてゐる。眠りたいとの欲望が他の大きな身體的欲望に伍してゐるのは全く正當なことである。

私はこゝでミユンヘンのシヤツク繪畫館にあるシユインドの繪畫の複寫を諸君に示して、この畫家が夢は支配的事情から現はるといふことを如何に正しく理解してゐたかを注意したいと思ふ。この繪は「囚人の夢」と呼ばれてゐるものであつて、その內容は彼の脫出を表してゐるのに相違ない。囚人は窓から脫出すべきだといふのはよい思ひつきである。何故ならば、彼を夢から眼覺めさせる光は窓から差し込んで來るからである。乘り重つてゐる一寸法師は、確に彼が窓を攀ぢ登る時に順次にとるであらうところの姿勢を表はしてゐる。さうして、若し私が誤解してゐないならば、またこの藝術家に餘りに多くの意圖を讀み取つてゐないならば、鑢で鐵格子を切つてゐる(これは囚人自身がしたがつてゐることである)一番上の一寸法師の姿はこの囚人自身の姿によく似てゐる。

子供の夢及び幼稚型と一致する夢以外のすべての夢に於いては、前に言つたやうに、吾々は變歪の障碍に遭遇する。吾々はそれらの夢が、吾々の想像するやうに、欲望の充足であるかどうかを直ちに言ふことは出來ない。吾々はその顯在內容からしてどんな心的刺戟がそれを生じさせたか、を推定することが出來ない。またそれらは、他の夢と同じやうに、その刺戟を取除く、或は解放するために努めてゐるのであるといふことを證明することが出來ない。それらの夢は確に解釋、即ち飜譯されなくてはならない。幼稚型の夢に見出されたことが、あらゆる夢に通用するかどうかといふことの判斷を下す前に、吾々は變歪の過程を跡づけ、顯在內容を潛在思想に置き換へなくてはならない。

第九講　夢に於ける監視作用

吾々は子供の夢の研究によつて夢の起原、本質及び機能を知ることが出來た。**夢は、幻覺的滿足によつて、睡眠**

を擾すところの心的刺戟を取り除く手段である。大人の夢に就いては吾々は幼稚型と呼ばれる一群だけしか說明し得ないことは事實である。それ以外のものに就いては吾々はまだ何も知つてゐない、また理解もしてゐない。けれども吾々が今までに到達した結論は看過することの出來ない重要さを有してゐる。夢は、十分に理解された時には、常に欲望の充足である。この符合は偶然的でもまた些細なことでもある筈がない。

他の型式の夢は、多くの理由によつて、また誤謬の概念からの類推によつて、未知の內容の變歪された代用物であると想定される。從つて吾々の次の仕事はこの夢の變歪の跡を調べ、それを理解するにある。

夢を不思議な、理解し難いものに見せるものはこの變歪である。吾々はこの變歪に就いて二三のことを知る必要がある。第一、それは何處から來るか（その原動力）、第二、それは何をするか、最後に、變歪はどういふ風に行はれるか。吾々はまた變歪は夢の作業の所產であるといふことが出來る。こゝで夢の作業を叙述し、そのうちにはたらく力を調べて見たいと思ふ。

さて私は精神分析界にその名を知られてゐる＊婦人によつて記錄された夢に就いて語らうと思ふ。彼女の言つたところによると、その夢を見た婦人は敎養のある、人から尊敬されてゐる老婦人であつた。その夢は分析されなかつた。またその報告者の認めたところによると、精神分析者にとつて解釋する必要はなかつた。夢見た人自身もそれを解釋しなかつた。けれども彼女はその夢を判斷して、その夢の意味を知つてゐるかのやうにそれを非難した。「明けても暮れても自分の子供のことより外は何も考へない五十歲の女がこんな厭な變なことを夢みるとは！」と彼女は言つた。

＊フオン・フーク・ヘルムート博士夫人

その夢は「愛の勤務」に關するものであつた。「彼女は第一衞戍病院へ行つて、病院に勤務したいから院長（彼女は自分の知らない名前を言つた）に會はなくてはならないと門衞に言つた。それを言ふ時に彼女は「勤務」といふ語に力を入れたので、その兵卒はそれが「愛の勤務」であることを直ぐに悟つた。彼女は年を取つてゐたので、彼は一寸躊躇した後彼女を入れた。けれども院長のゐる所へは來ないで、彼女は大きい陰氣な部屋の中へ來た。さうし

てそこには大勢の士官と軍醫が長い卓子を圍んで立つてゐた。坐つてゐるものもあつた。彼女は一人の軍醫に向つてその來意を告げた。彼は彼女が何しに來たかを直ぐに了解した。彼女が夢の中で言つた言葉は次のやうなものであつた。『私やウインの他の無數の婦人や少女達は兵卒や士官に何時でも……』語尾ははつきり聞えなかつた。けれども彼女は士官達の困つたやうな、また意地の惡さうな表情によつて彼等は皆彼女の言はうとしてゐることを理解したことを悟つた。その婦人は言ひ續けた。『私は私達の決心が變に聞えることを知つてゐます。けれども私達は本當に眞劍なのです。戰場にゐる兵卒は彼が死を欲してゐるかゐないかを尋ねられないでせう。』暫く重苦しい沈默が續いた。その時軍醫は彼女の腰を抱いて言つた。『奧さん。あなたの仰言つてゐられることは……(呟き)』彼女は『誰も同じだ』と考へながら、彼の腕を押し退けて答へた。『まあ、私は年寄ですからそんなことは起りますまい。それから一つの條件が守られなくてはなりません。年齡のことを考へて、年取つた婦人と靑年とが……(呟き)それは恐しいことでせう。』軍醫は言つた。『それは十分解つてゐます。』けれども二三人の士官――その中の一人は若い時彼女に言ひ寄つたのであつた――は大きな聲で笑つた。そこでその婦人はこのことを片付けてしまふ爲に、彼女が知つてゐる院長のところへ連れて行つてほしいと頼んだ。その時、彼女の驚いたことには、彼女はその院長の名前を知らないことを思ひ出した。けれどもその軍醫はその部屋から直ちに二階に通じてゐる狹い鐵の螺梯を丁寧に指した。彼女はその梯子を登りながら、一人の士官が『若いにしろ、年を取つてゐるにしろ、大變な決心だ。彼女に光榮あれだ』と言ふのを聞いた。彼女はたゞ義務を盡してゐるに過ぎないと感じながら、無限の階段を登つて行つた。

*『愛の勤務』は『軍務』といふ語から造られた流行語である。――譯者。

この夢は二三週間のうちに二度繰り返されたが、この婦人の語つたところによると、ほんの些細な、全然無意味なところが二三ヶ所變つてゐたゞけであつた。

この夢の進み方は晝夢のそれに似てゐる。たゞ二三ヶ所で途切れてゐる。さうしてその內容の多くの個々の點は尋ねれば明瞭になつたであらうが、諸君の知つて居られる通り、それはなされなかつた。けれどもこの夢に於いて

とである。それは三ヶ所で、いはゞ、抹消されてゐる。その空所を生じた所は言葉が呟きになつてゐる。分析しなかつたのであるから、嚴密に言へば、吾々はこの夢に就いて何も言ふ權利は持つてゐないけれども、そこにはある推定をなさしめるやうなものがある。例へば「愛の勤務」といふ語がそれである。就中、呟きの直ぐ前の言葉はそれを完結するにはたゞ一つの構文よりない。さうしてそれを完結して見ると、それはこの婦人が愛國的義務を果すためにその身體を、士官たると兵卒たるとを問はず、軍人の性欲を滿たすことに捧げようとしてゐるといふことをその內容とする空想であることが分る。それは確かに嫌惡すべきもので、無恥な淫亂な空想の典型である。けれども——夢はこれに就いて何も語つてゐない。丁度このことを告白しなければならないところが顯在夢では呟きになつてゐる。何か、失はれてゐるか或は抑壓されてゐるのである。

私はかういふ風に抑壓されたのは、その文句が嫌惡すべき性質のものであつたからであると、推定するのは當然であると諸君に認めていたゞきたいと思ふ。さてかういふことは外で何處で行はれてゐるだらうか。現代に於いてはこれを遠くに索める必要はない。どれか一つの政治的新聞を手に取つて見ると、そこゝに脫漏があつて、そこが白紙になつてゐることが眼に着く。さうして諸君はそれが新聞檢閱官の仕事であることを知つてゐる。白紙のところには本來何かゞ書かれてあつたのであるが、檢閱官が許可しなかつたゝめに削除されたのである。諸君はこれを遺憾に思ふに相違ない。何故ならば、それは最も興味のある部分であり、その記事の精髓であるに相違ないからである。

檢閱官が文章を抹殺しないやうな場合もある。蓋し筆者はどの章句が抹殺されさうであるかといふことを豫見して豫め筆を撓め、少しばかり修正し、或は言はんと欲するところを暗示或は諷刺するに止めて置くからである。この場合には白紙はないが、婉曲な或は曖昧な表現樣式によつて、筆者は、執筆の際に、心の中に監視されてゐたことを推定することが出來る。

さて、この比較よりして吾々は、この夢に於ける脫漏された或は呟きによつて變裝された言葉もまた何等かの形

式の監視作用の犧牲になつたのであると言ひたい。吾々は實際に夢の監視作用といふ語を使用する。さうして夢の變歪は一部分はこの作用に歸せらるべきである。一般に顯在夢に空所があればそれは監視作用の結果である。更に進んで、他のものと明白に憶ひ出される諸要素のうちにあつてある一つの記憶だけが特にぼんやりしてゐて疑はしい時には、それは監視作用のはたらいてゐる證據であることを認めなくてはならない。けれどもこの「愛の勤務」の夢の場合のやうにこの監視作用が歴然と現はれることは稀である。監視作用はもつと屢々私が言つた第二の型式で行はれる。卽ち本當の意味が弱められる。

夢の監視作用には第三の方法があるが、新聞の檢閲にはこれと比較すべきものがない。けれども私はこれを今までに吾々が分析した唯一の夢によつて實證することが出來る。諸君は「三シルリングの三枚の下等な芝居の切符」の夢を覺えて居られるであらう。この夢の潛在思想に於いては「急ぎ過ぎた、早や過ぎた」といふ要素が主點であつた。その意味はかうであつた。「そんなに早く結婚するのは馬鹿げてゐた。切符をそんなに早く買ふのも馬鹿げてゐた。小姑があんなに大急ぎて寶石のために金を費すのは滑稽なことであつた。」夢の思想のこの中心的要素は顯在內容には少しも現れてゐない、こゝでは芝居に行くといふこと、切符を買ふといふことが中心になつてゐた。この中心點の置換と夢の諸要素の配合し直しによつて、何人も顯在內容の背後に潛在思想の存在することに氣付かないほどまでに、兩者は異つたものになされるのである。この中心點の置換が夢を變歪させる主要な手段であり、夢みる人自身がそれを自分の精神の所產であることを認めたがらないほどまでに、その夢に奇異な性質を與へるものはこれである。

從つて材料の脫漏、修正、配合のし直しは夢の監視作用の活動樣式であり、變歪に使用される手段である。この監視作用自體が變歪の創作者である、或は創作者の一つである。また吾々の今の探究の主題である。修正或は配置の變更を、吾々は普通また「置換」といふ語で包括する。

夢の監視作用に就いてこれだけの叙述をして置いてから、吾々は注意をその原動力の方に轉じたいと思ふ。私は諸君が「監視作用」といふ表現を餘りに擬人的な意味に取つて、その監視者を頭腦の小室の內に住んで彼の職務を

行ふてゐるところの小さな、嚴格な侏儒であるといふ風に考へないことを冀ふ。諸君はまたそれの位置を餘りに嚴密に局限して、監視的勢力は「腦中樞」から出て來るのであつて、その中樞が損傷されるか消失するかすればその勢力が無くなると考へてはならない。今のところでは吾々はそれを單に動的關係を表現するに都合のよい語として考へたい。この語は吾々がどんな種類の傾向がこの勢力を揮ふのであるか、どんな傾向に揮ふのであるかと尋ねることを妨げはしない。また吾々は既に恐らくは自ら識ることなしに既にこの監視作用に觸れたことがあることを知つても驚くには當らない。

實際その通りである。吾々は自由聯想法を應用し始めた時に、驚くべき經驗をしたことを憶ひ出していたゞきたい。吾々は夢の諸要素を押し分けて無意識的要素――前者はこれの代用物である――に到達しようとする努力が一の抵抗に遭遇したことを見出した。この抵抗の力は多樣であつて、ある時には非常に強く、ある時には極めて弱いと言つた。弱い場合には解釋するのに少しの中間連鎖を通過しさへすればよい。けれども抵抗が強い時には、吾々は最初の觀念から吾々を遠ざからせるところの長い聯想の連鎖を通り拔け、その途中で聯想に對する批判的抗議のあらゆる困難に打勝たなくてはならない。解釋に際して抵抗として現はれたものに、吾々は今や夢の作業に於ける監視作用として再び出會ふのである。抵抗は單に監視作用の客觀化されたものに外ならない。この抵抗はまた監視の力は夢の變歪を生ぜしめるに盡き、それと共に消滅するものではなくて、監視は永續的な制度であつて、その目的は一度なされた變歪を維持するにあることを證明する。更に、解釋の際の抵抗力は各要素によつて變化すると同じやうに、監視作用によつてその夢に生ぜしめられた變歪の程度もまた各要素によつて非常に異るものである。顯在夢と潜在夢とを比較して見れば、ある潜在的要素は全然除去され、ある要素は多かれ少かれ修正され、もう一つの要素は少しも變更されずに、否寧ろ強めさへされて顯在內容に現はれてゐることを知るであらう。

けれども吾々の目的ほどの傾向がこの監視を行ふのであるか、どの傾向に對して行ふのであるかを見出すにあつた。さて、夢の、否恐らくは人間生活の理解の根柢たるこの疑問は、吾々がその解釋に成功したところの一群の夢を通覽すれば容易に答へられる。監視を行ふところの傾向はその夢を見る人の醒時の判斷によつて認められるとこ

の傾向であり、彼がそれと一體であると感ずるところの傾向である。若し諸君が諸君自身の夢に就いての根據ある解釋を認めないならば、諸君は夢の監視を行はしめ變歪を生ぜしめ、解釋を必要ならしめる動機と同じ動機からして、さうするのであることを確めるであらう。あの五十歳の婦人の夢を考へて見るがよい。彼女はその夢を、解釋されなかつたにも拘らず、嫌惡した。さうして若しフオン・フークーヘルムート博士夫人がその本當の意味に就いて少しでも語らなかつたならば、彼女はもつと憤つたことであらう。さうしてその夢の嫌忌すべき部分を呟きに置き換へさせたのは、正にこの非難の態度であつた。

次に吾々は夢の監視を受ける諸傾向をこの內的な批判的見地から記述しなくてはならない。さうする時には吾々はその諸傾向は常に不快な、倫理的、美的或は社會的見解と相容れない性質を有し、吾々がそれに就いて考へることを避け、或は厭々ながら考へるやうなものであると言ひ得るだけである。就中夢の中に變歪されて表現されるところのこれらの監視される欲望は、飽くことなき冷酷な利己主義のあらはれである。蓋し夢見る人自身の自我は、たとへ顯在內容に於いては自分を安全に變裝することを知つてゐるとしても、あらゆる夢に現はれて、主要な役割を演じるからである。この夢の「神聖なる自我」(Sacro egoismo) は確に睡眠に必要な心的態度、卽ち全外界から興味を取り去ることゝ關係がないことはない。

一切の倫理的羈絆から解放された自我はすべての性的衝動、長らく吾々の美的訓練によつて非難されてゐたところの、また道德によつて課せられたあらゆる拘束に反するところの性的衝動の要求に合致すると感ずる。快樂の追求——吾々の所謂リビド——は何等の禁止作用にも妨げられずに禁止されてあるところの對象を好んで選ぶ。他人の妻ばかりではなく、傳統によつて神聖化されたところの近親相姦的對象——男は母や姉妹を、女は父や兄弟を選ぶ。(あの五十歳の婦人の夢も近親相姦的のものであつて、リビドは明かにその息子の方に向つてゐる。) 人間性から遠いと信じられてゐるところの諸欲望は、夢を生ぜしめるに足るほど力強いことを自ら證してゐる。憎惡もまた自由に現はれる。自分の最も親しい、最愛の人々——兩親、兄弟、夫、妻、或は自分の子供に對して復讐しようといふ欲望、死ねばよいといふ欲望も決して稀有ではない。これらの監視されてゐる欲望は本當の地獄から出て來る

やうに見える。その意味を知れば、醒時に於いてはどんなに嚴しく監視しても足りないやうに思はれるのである。

けれどもこれらの悪い內容のために夢自體を非難してはならない。諸君はきつと夢は睡眠の擾されるのを保護するといふ無害な、否有用な機能を有してゐる事を忘れては居られないであらう。かゝる卑劣は夢の本質ではない。事實、正當な欲望と切迫した身體的必要を滿足させると認め得るやうな夢もある。是等の夢には變歪のない事は事實であるが、その時にはそれらの夢は自我の倫理的及び美的傾向に抵觸する事なしにその機能を盡すことが出來るから、その必要がないのである。また變歪の程度は二つの要素に比例することを思ひ出していたゞきたい。一方では監視される欲望が不快なものであればあるほど變歪は大きい。けれどもまたそれは監視の要求が嚴格であればあるほど大きい。かうして若い、嚴格に敎育された內氣な少女は、嚴しい監視作用によつて吾々醫者ならば、また彼女自身でさへも十年後には、許さるべき、無害な性的欲望と認めるであらうやうな夢の刺戟を變歪するであらう。

けれども吾々はまだ吾々の解釋の仕事の結果に就いて憤慨してもよいほどまでには進んでゐない。吾々はまだそれを本當に理解してゐないと私は思ふ。けれども吾々は何よりも先づあり得べき反駁に對して備へなくてはならない。解釋の仕事に缺點を見出すことは決して困難ではない。吾々の夢の解釋は前に採用したところの假說、卽ち、夢は一般に一の意味を有してゐるといふ、催眠的睡眠の際にはその時には意識されない心的過程が存在するが、これは常態的睡眠に於いても考へ得るといふ、及び一切の聯想は規定されてゐるといふ假說に基いてゐる。若し吾々がこの假說から推論して、正當と思はれる夢の解釋に達するならば、この假說は正しかつたと結論しても不當ではあるまい。けれども若しこれらの發見が、私の記述したやうな種類のものであるならばどうであるか。その場合には確に次のやうに言ふのが當然であるやうに思はれる。「さういふ解釋は不可能であり、不條理である、少くとも極めてあり得べからざることである。從つてその假說には何か誤つたところがあるに相違ない。夢は結局心的現象でないか、或は常態に於いては無意識といふやうなものはないか、或は吾々の方法に缺陷があるかである。吾々が吾々の假說から演繹したと公言するところの不快な一切の結論を受け入れるよりも、かう假定する方が簡單でもあり、都合よくもないか。」

その通り！ その方が一層簡單でもあり、都合よくもある。けれどもそれだからと言つて必ずしも正しいとは限らない。吾々に時間を與へてほしい。判斷するにはまだ早い。先づ第一に、吾々は吾々の解釋に對する批判を更に鋭くすることが出來る。吾々の解釋が不快なものであるといふ事實は恐らくは大したことではない。それよりも有力な反駁は、夢を見た人がその夢を解釋して、吾々が彼になすりつけようとした處の欲望傾向を力を籠めて、十分な根據によつて拒否することである。ある人は言つた。「何ですつて。あなたは私の夢によつて私が妹の結婚や弟の教育のために費した金を惜しがつてゐることを證明しようとなさるのですか。だがそれは間違つてゐます。私はたゞ妹や弟のために働いてゐるのです。さうして私の唯一の興味は私の義務を盡すにあります。何故ならば、私は、長兄として、死んだ母にさうすることを誓つたからです。」またある婦人は言ふ。「私は夫が死ねばよいと思つてゐるんですつて。そんな馬鹿なことがあるものですか！ あなたはお信じにならないかも知れませんが、私達の結婚生活は非常に幸福であるばかりではなく、若し彼が死ねば私がこの世で持つてゐるものは皆なくなつてしまふでせう。」もう一人の人は答へるであらう。「あなたは私が私の妹に對して性的欲望を抱いてゐるとお言ひなさるのですか。それは滑稽です。彼女は私にとつては何でもありません。私達は仲が惡くて何年も言葉を交したことがありません。」けれどもたとへこれらの夢見た人達が、彼等に與へられた傾向を容認しないにしても、拒否しないにしても、大して驚かないであらう。その傾向は正に彼等が全然意識しないところのものであると言ふことが出來よう。けれども若し彼等がかういふ風に解釋された欲望と正反對の欲望を彼等の心のうちに見つけ出して、彼等の全行爲によつてこの反對欲望の優勢であることを證明し得るならば、吾々は確に當惑せざるを得ない。今や吾々は夢の解釋の仕事を歸納法に導いたものとして全然放擲すべき時ではないか。

否。今でさへもさうではない。この有力な反駁でさへも批判的に檢討すれば粉碎されてしまふ。心的生活には無意識的傾向が存在することを假定すれば、意識的生活に於いてそれと反對の傾向が優勢であるといふ事實は何事をも證明しない。恐らく心のうちには相反する傾向が兩立し得るだけの餘地があるのであらう。否、一傾向の優勢といふその事が、それと反對の傾向の無意識の一條件であるらしいのである。從つて第一の反駁は結局夢の解釋の結

果は簡單でなくて極めて不愉快であると言ふに過ぎないことになる。さうしてこの第一の抗議に對しては、如何に簡單といふ事が氣に入つても、それによつては夢の問題は一つも解決することが出來ない、複雜な關係の事實を最初から受け入れなくてはならない、と答へることが出來よう。さうして第二の點に關して言へば、否恥づべき、嫌惡すべきものでさへあるとしても、それが何であるか。夢の解釋の結果が不快なものであるとしても、好惡を科學的判斷の動機たらしめる事は明かに不當である。これと似た場合に私の恩師シャルコーは「事實だから仕方がない」と言つたのを、私は若い時に聞いた事がある。若し吾々がこの世界に於ける眞實なるものを知得しようと欲するならば、心を謙虛にして同情と反感とを十分に差し控へなくてはならない。若し一人の物理學者が地球上の生物は遠からず絕滅する運命にあるといふことを證明し得るならば、諸君は彼に向つてもまた「そんなことはある筈がない、私はそんな豫想は好まない」と言ふだけの勇氣があるか。他の物理學者が出て來て、前の物理學者はその前提或は計算を誤つてゐるといふことを證明するまでは、諸君は默つてゐることと私は思ふ。若し自分の趣味に合はないものは何でも拒否するならば、それは夢を理解し征服するのではなくて、寧ろ夢の機構を繰返してゐるのである。

從つて、恐らく諸君は監視される夢の欲望の嫌惡すべき性質のことは看過しようとするであらう。さうして人間の構成のかくも大きい部分が邪惡の入るまゝにされなくてはならないといふことは、確にありさうもないことであるといふ議論を振りかざすであらう。けれども諸君自身の經驗は諸君にこの立言の正しいことを證明するか。私は諸君が諸君自身の眼にどう映じるかといふことに就いては何も言はうとは思はない。けれども諸君は人性の利己的卑劣が演ずる役割に就いて抗辯する義務があると感じるほどまでに、善意に滿ちた先輩や競爭者、義俠心に富んだ敵、嫉心の少い知人を諸君は有してゐたか。性的生活に關して普通の人間は如何に手に負へない、また當にならないものであるかといふことを諸君は知らないのであるか。或はまた吾々が夜中に夢みるあらゆる放恣は、實際に眼をあけてゐる人々によつて日々犯されてゐる罪惡であることを知らないのであるか。精神分析學者がこの點に就いて爲すところは、善人は惡人が實行することを夢みるだけで滿足してゐる人である、といふプラトーンの古い言葉を確證してゐるだけではないか。

今度は眼を個人から今もなほ歐洲を破壞しつゝあるあの世界大戰の方に轉じて、今や文明諸國に擴がりつゝある蠻行、殘酷、虛僞のことを考へて見るがよい。諸君は一部の無主義な侵略家達や人類の惡化者達が、若し彼等に從ふ幾百萬人も彼等とその心を同じうしてゐないならば、この一切の潛在せる邪惡を解放することに成功したであらうと眞に信ずるのであるか。諸君はかゝる環境のうちにあつても、なほ人間の心的構造のうちに邪惡は存在しないと主張するだけの勇氣を有するか。

諸君は私が戰爭に就いて一面的な判斷を下してゐることを非難して、戰爭は人類に於ける最も美しい、最も高貴なるあらゆるもの、眞勇、自己犧牲及び公共的精神を喚起したと言ふであらう。それはその通りである。けれどもこゝで精神分析學は邪惡を主張してゐるが故に美德を否認してゐるといふ、精神分析學がこれまで屢々受けたところの不當な非難をしてはならない。吾々は人性に於ける高貴なる努力を否定しようとは考へてゐない。またその價値を低めるやうなことは何もしたことがない。その反對に、私は監視される邪惡な欲望ばかりではなく、その欲望を抑壓し、認め難いやうにするところの監視作用をも示した。吾々はたゞ他の人々が人間に於ける邪惡を否定し、それによつて人間の心的生活をより善くしないで、却つて理解し難いものたらしめてゐるが故に、それを强調したのである。從つて、若し吾々が一面的な倫理的評價を斷念するならば、人間性に於ける善に對する邪惡の關係の正しい公式を見出し得ることは確かである。

かくして事は明白である。たとへ奇異に感ぜさるを得ないとしても、吾々は夢の解釋の仕事の結果を放棄する必要はない。多分後になつて他の方面からこれの理解に近くことが出來よう。現在のところではたゞ次のやうに言つて置きたい。夢の變歪は自我の或る認められたる傾向が夜睡眠中に吾々のうちに動くところの不快な欲望刺戟に對して、監視作用を行ふところから生ずるのである。無論、これらの赦し難い欲望は何故丁度夜になつて現されるのであるか、それは何處から生じて來るのであるかと問へば、これに對してはなほ多くの問題と研究とが殘つてゐる。

けれども茲でこれらの諸研究のも一つの結果を指摘することを閑却するならば、それは誤つてゐる。睡眠を擾す夢の欲望は吾々には知られてゐない。吾々はそれを解釋して始めてそれを知るのである。從つて、その欲望は「そ

の瞬間には無意識的」――前に用ひた語義に於いて――と呼ばるべきである。けれどもそれはまたその瞬間には無意識的であるといふよりも以上のものであることを認めなくてはならない。蓋しその夢を見た人は、屢々見出したやうにその夢の解釋によつてその欲望を知つた後に於てさへも、それを否認するからである。吾々が最初に出會つたこれと同じ例は、「吃氣する」といふ失言を解釋した時に、その食後の演說者はその時にも、またそれ以前にも彼の長官に對して侮辱の感情を意識したことは嘗てないと、むつとしながら斷言したことである。吾々はそれにも拘らずこの斷言の價値を疑つて、彼はいつもこの感情が彼の中に存してゐたことを知らなかつたのであると假定した。吾々はひどく變歪した夢を解釋する度毎に、これと同じやうな事に出會ふ。さうしてこのことは吾々の見解を重からしめる。かうして今や吾々は心的生活のうちには吾々のそれに就いては何も知らない、長い間知らなかつた、恐らくは決して意識しなかつたところの過程と傾向が存すると假定することが出來る。これによつて**無意識的**といふ語は新しい意味を有するやうになり、「瞬間的」とか一時的とかいふことは最早それの本質的屬性ではなくなる。その語はまた「その瞬間に潜在せる」だけではなくて、**永久的**無意識をも意味することが出來る。この點に就いては後に詳說するつもりである。

第十講　夢に於ける象徴主義

夢の理解を困難ならしめるところの夢の變歪、は不快な意識されない欲望衝動に向けられる監視作用の結果であることを吾々は見出した。けれども無論監視作用は夢を變歪せしめる唯一の因子であるとは斷言しなかつた。また事實一層廣汎な研究によつて變歪を生ぜしめる他の原因のあることが發見された。これはたとへ監視作用は除かれるとしても、吾々はなほ夢を理解することは出來ない、顯在夢は夢の潜在思想と同一ではないと言ふに等しい。

夢を朦朧たらしめる他の原因、夢の變歪のこの新しい分擔者は、吾々が吾々の方法に一つの缺陷あることを知る時に見出される。被分析者は時として實際彼等の夢のどの要素からも少しの聯想もしないことがあるといふことを私は既に言つて置いた。これは彼等が言ひ張るほど屢々起らないことは確かであつて、多くの場合聯想は辛抱強く

やれば抽き出すことが出來る。しかしながら全然聯想されない、或は聯想されても期待したやうなものでない場合はかなりにある。これが精神分析的治療中に起れば、それはある特別の意義を有してゐるが、そのことはこゝでは關係がない。けれどもそれは常態人の夢を解釋してゐる途中に、或は自分自身の夢を解釋してゐる時に起ることもある。若しかゝる場合には無理やりに強いても何の役にも立たないといふことを悟れば、吾々は最後にこの望ましからぬ偶然事は、ある特殊の夢の要素には規則正しく現はれて來ることを發見し、最初は吾々の方法が偶々失敗したのだとのみ思はれてゐたところに、新しい法則を認め始めるのである。

かうして吾々はこの「沈默せる」夢の要素を解釋し、吾々特有の方法によつてそれを飜譯したくなる。この置換を行へばどんな場合にも滿足な意味を見出し得るのに、この方法を利用しようとしない限りは、夢は支離滅裂何等の意味をも持つてゐないまゝであるといふことは、吾々を驚かさずには置かない。從つてこれと酷似の例を多く蒐集すれば、最初は極めて臆病になされた吾々の實驗の確實なことが證明されるであらう。

私はこれらすべてのことをいくらか概說的に記述してゐるが、これは理解を易からしめるために外ならない。またさうしても事實を誤り傳へないで、たゞ一層簡單ならしめるだけである。

かうして吾々は夢に關する通俗書が夢の中で起るあらゆる事柄に不易の意味を見出すと同じやうに、一群の夢の要素に不易の意味を見出すに至るのである。諸君は吾々が自由聯想法を使用する時、夢の要素のかゝる不易の意味は決して現はれ出ないことを忘れてはゐないであらう。

さてこの解釋方法は、前の自由聯想法よりも遙かに不確實で非難さるべきものであるやうに思はれると諸君は直ちに言ふであらう。けれどもそれは違ふ。實際經驗からかゝる不易の意味を十分多數に蒐集した時には、吾々自身の知識によつてこの部分を解釋し得るであらうといふこと、その部分はその夢を見た人の聯想を用ひることなしに理解され得るであらうといふことを吾々は最後に知るのである。どうしてその意味が知られるかといふことは吾々の議論の後半に於いて取扱はるべき問題である。

夢の要素とそれの飜譯との間のこの種の不易的關係を、吾々は象徵的關係と呼び、その夢の要素自體を無意識的

な夢の思想の象徴と呼ぶ。諸君は私が前に、夢の要素とその底に横つてゐる本當の思想との間に存する種々の關係を調べた時に、三つの關係、即ち部分を全體に代用すること、諷刺、比喩の三つを區別したことを覺えてゐられるであらう。さうしてその時第四の關係のあり得ることは言つたが、それが何であるかは言はなかつた。この第四がこれから述べる象徴的關係である。これに關聯して極めて興味のある議論があるから、この主題の特殊研究に入る前に、この點に注意を轉じて見たいと思ふ。象徴主義は恐らく夢の學說に於ける最も注目すべき部分であらう。

第一に、象徴と象徴される觀念との關係は不易的であつて、前者はいはゞ後者の飜譯であるから、象徴はその方法に於いては吾々のとは非常にかけ離れてゐる所の古代的及び通俗的夢の解釋の理想を、ある範圍内に於いて實現してゐる。象徴はある場合には、その象徴に就いては何も知らない夢見る人に質問することなしに夢を解釋することを可能ならしめる。若し普通に現はれる夢の象徴に加ふるに、夢みる人の人格、彼の境遇、その夢を起させた印象を知つてゐるならば、吾々は屢々夢をいはゞ一見して直ちに飜譯することが出來る。かゝる藝當は夢の解釋者を自惚れさせ、夢見者に強い印象を與へる。それは夢見た人に質問するといふ骨の折れる仕事と面白い對照をなしてゐる。けれどもこゝで思ひ違ひをしてはならない。技巧を弄するのは吾々の仕事ではない。また象徴に就いての知識を基とする解釋方法は、決して自由聯想法に取つて代り得べき方法ではない、比較し得る方法でさへもない。それは後者の補足物であり、それの與へる結果は後者と關聯して應用された時に初めて有用なのである。更に、夢見る人の心的狀態に就いての吾々の知識に關して言へば、諸君は諸君の熟知してゐる人々の夢ばかりを解釋するのではないこと、通例、夢を刺戟したところの前日の出來事に就いては何も知らないといふこと、また被分析者の聯想そのものが所謂心的狀態に就いての吾々の知識の源泉であること等を考へて見なくてはならない。

更に、夢と無意識との間には象徴的關係が存するといふ問題――これは後に述べる――に關して烈しい反對論がこゝで再び唱へられてゐるといふことは特に注目に値する。他の點では長い間精神分析に賛してゐた聰明有力な人々でさへも、この點ではそれに從ふ事を拒んでゐる。この行動は、第一に、象徴は夢に特有なものでもなく、夢を特色づけるものでもなく、第二に、夢に於ける象徴作用は決して精神分析法によつて初めて發見されたものではな

い――この科學は驚嘆すべき發見に乏しくはないけれども――から、いよ〳〵奇妙なものである。夢に於ける象徴作用の發見者を近代に求めるならば、吾々はK・A・シェルナーの名を擧げなくてはならない。精神分析は彼の學説を、ある重要な諸點に於いて修正はしたけれども、確證してゐる。

さて、諸君は夢の象徴作用とその實例に就いて何かを聞きたいと欲して居られるであらう。私は喜んで私の知つてゐることをお話しようと思ふ。けれどもこれに就いての吾々の知識は、まだ滿足なものではないことをこゝで告白して置く。

象徴的關係の本質は對比である。けれども任意の對比ではない。この對比はある特殊の條件に從ふものとは想像されるが、その條件が何であるかは言ふ事が出來ない。ある對象或は事件と對比し得るものなら、何でもそれの象徴として夢に現はれるといふ譯ではない。またその反對に、夢は何でもかでも勝手に象徴化するのではなくて、夢の潛在思想のある定つた要素だけを象徴化するのである。かうしてどの方面にも限界がある。吾々はまた現在では象徴の概念を嚴密に限定し得ないことをも認めなくてはならない。それは代置、表象等から明確に區別されてゐない。諷示にさへも近づいてゐる。ある組の象徴にあつてはその底に横つてゐる對比は明瞭である。が、さうでない象徴もある。そこでは吾々はあると想像される對比の共通要素、卽ち第三物を索めなくてはならない。その時にはそれは熟考によつて見つけ出されることもあるし、全然隱されてゐることもある。また、若し象徴は眞に對比であるとすれば、この對比が自由聯想の方法によつて暴露されないといふこと、夢見る人がそれに就いて何も知らないこと、しかも知らずしてそれを利用するといふのは妙な話である。否、それが彼に示された時にも彼がその對比を認めることを欲しないのは更に奇妙である。從つて諸君はこの象徴關係は、その性質はまだ吾々に十分はつきりと解つてゐないところの全く特殊な對比であることを知るであらう。この未知の性質に就いては後に論ずるつもりである。

夢に於いて象徴的に表現される事物の數は多くない。全體としての身體、兩親、兄弟、姉妹、生、死、裸體――それからもう一つのものがそれである。全體としての人體の唯一の典型的、卽ち規則正しい表現は、シェルナーの

認めたやうに、家としての表現である。但し彼はこの象徴に實際あるよりも遙かに多くの意味を與へようとした。人々は家の前面を、時には喜びながら、時には恐怖を感じながら、降りる夢を見る。その壁が全然滑かな時には男である。けれども摑まへる事の出來る突出や露臺がある時にはそれは女である。兩親は夢では皇帝、皇后、王、女王、その他の貴顯として現はれる。從つてこゝでは夢は頗る敬虔である。子供や兄弟姉妹はこれほど柔和には取扱はれないで、小動物や小虫として象徴される。出產は殆ど常に水と關聯して表象される。水の中へ陷るか、水から這ひ上るか、誰かを水から救ひ上げるか、誰かに救ひ上げられるかである、卽ち母と子の關係が象徴されてゐる。死は出發或は汽車旅行によつて表はされ、死の狀態は種々のぼんやりした、臆病な比喩によつて、裸體は着物と制服によつて表はされる。諸君はこゝで象徴的表現と諷示的表現との限界が如何に漠然としてゐるかを知るであらう。

この列擧の貧弱なのに較べて、他の部類に屬する對象と內容は極めて豐富な象徴によつて表現されるといふ事實は吾々を驚かさずには置かない。性的生活、生殖器、性的行爲、性交に關するもの卽ちこれである。夢に於ける象徴の大多數は性的象徴である。かうしてこゝに著しい不均衡が生ずる。卽ち表現される內容は極めて少いのに引き代へて、それの象徴の數は異常に多く、從つてこれらの事柄は多數の、殆ど實際には差異のない各々の象徴によつて表現されることが出來る。そこでそれを解釋するに當つて誰もが不快を感じる。何故ならば夢の表現の多樣なのに較べて、その象徴の解釋は極めて單調だからである。これは象徴に就いて知らうとする人々には面白いことではない。けれどもこれは如何ともし難いことではないか。

この講義に於いて性的生活のことに觸れるのは今が始めてゞあるから、私はこの問題をどういふ風に取扱はうと思つてゐるかといふ事に就いて、一應說明して置く義務を感じる。精神分析法は隱蔽や諷刺の理由を認めない。この重要な材料を取扱ふことを恥ぢる必要があるとは思はない。一切のものをその正當な名前で呼ぶことは正しいと考へてゐる。さうしてこの方法によつて煩はしい暗示的思想を一層容易に避け得られることを望んでゐる。私が男女の聽衆の前で講演してゐるといふ事實も、これを變へる事は出來ない。神託のやうな科學は一つも存しないと同じやうに、女學生に適當した科學も存しない。さうしてこゝに居られる婦人達はこの講堂に出席する事によつて男

子と同様に遇せられることを、暗默のうちに表白して居られるのである。

男の生殖器は夢では種々の風に象徴的に表現されるが、それらを對比せしめる共通觀念は大抵極めて明瞭である。第一に、聖數3は男の生殖器全體を象徴する。それの最も眼につき易い、また、男女兩性にとつて、最も興味のある部分なる陰莖は、主として形のそれに類似してゐるもの、即ち杖、雨傘、竿、樹等のやうな長い、上向いてゐるものによつて象徴される。更に、象徴されるものと同様に、身體の中へはひる、從つてそれを傷ける性質を持つたもの、即ちあらゆる種類の尖つた武器、ナイフ、短刀、槍、劔によつても象徴される。銃器、即ち鐵砲、ピストル及び形のよく似た連發拳銃も同様に使用される。少女はナイフかピストルを持つた男に追跡される苦しい夢を屢々見る。これは恐らく最も屢々起る象徴であるが、諸君は今や自分で容易にこれを飜譯することが出來よう。男の生殖器が呑口、鑵水器、泉のやうな水の流れて出る物や、吊ランプ、芯の出し入れ出來る鉛筆等のやうに伸ばすことの出來る物で象徴されることもまた容易に理解出來る。鉛筆、ペン軸、槌その他の道具が疑ひもなく男の生殖器の象徴であることは、同様に容易に悟ることの出來るこの器官に就いてのある觀念に基いてゐる。

陰莖は、重力に反して上向くことが出來るといふ特異性、即ち勃起現象のために、輕氣球、飛行機、最近にはツエッペリン飛行船によつて象徴される。けれども夢は勃起を象徴するもつと印象的な一つの方法を知つてゐる。夢は生殖器を身體中の最も肝腎な部分にして夢見る人自身を飛ばせる。屢々あれほどまでに美しい、誰もが知つてゐるあの飛行の夢が、一般的な性的刺戟の夢、勃起の夢として解釋されなくてはならないといふ事を聞いても驚くには及ばない。精神分析學者の一人たるP・フエダーンはこの解釋の眞であることを確證した。この外に、その愼重な判斷のために賞讃されてゐるムウレー・フォルドは腕と足とを人爲的の位置に置いて實驗して見て、彼自身の調査によつて、これと同じ結論に到達した。しかも彼の學說は精神分析學とは非常に異つたものであつた。否、恐らくはそれに就いては何も知らなかつたであらう。諸君はまた婦人も飛行の夢を見ることが出來るといふ理由からして、これに反對してはならない。寧ろ夢の目的は欲望の充足であること、男でありたいと思ふ欲望は、婦人の心のうちに、意識的にもせよ無意識的にもせよ、存することを憶起すべきである。更に、解剖學に通じてゐる人は誰で

も、婦人はこの欲望を男のと同じやうな感覺によつて實感し得ないと思ひ違ひすることはないであらう。蓋し婦人の生殖器には陰莖に似た小さいものがあつて、この小器官、卽ち陰核は子供の間及び性交前には陰莖と同じ役割を演じるからである。

これほど理解し易くない男の生殖器の象徴には爬虫類と魚がある。特に有名な象徴は蛇である。帽子や上衣がどうして同じやうな風に使用されるのかは解り難いが、その象徴的意味は疑ふべくもない。最後に、男の生殖器が手、足といふやうな身體の他の部分で表はされる時には、これを象徴的表現であると言ひ得るかどうかといふ疑問が生ずる。私は前後の關係や女の方にもこれと同じことのあるところから見て、さうであると信ぜざるを得ない。

女の生殖器は何かを入れることの出來る穴を有してゐる物によつて象徴的に表現される。凹地、洞穴、瓶、壺及びあらゆる種類と大きさの箱、袋その他がそれである。多くの象徴は生殖器よりも寧ろ子宮に關係してゐる。戸棚、ストーヴ、就中、部屋が象徴となるのはこのためである。部屋の象徴はこゝでは家の象徴と關聯してゐるが、戸及び門はそれと反對に陰門を表してゐる。更に、種々の種類の材料、木、紙、及びそれから作られたもの、例へば、テーブル、本などが婦人の象徴になる。動物では少くとも蝸牛と貝が疑ふべからざる女の象徴として擧げられなくてはならない。身體の部分では口が陰門の象徴であり、建築物では教會と禮拜堂が女の象徴である。これらすべての象徴が同じやうに理解し易いものでないことは諸君の見られる通りである。

乳房も生殖器のうちに數へられなくてはならない。これは林檎、桃及び一般に果物によつて表現される。陰毛は兩性とも夢では森と叢林によつて示される。女の生殖器が岩や森や水のある地景によつて現はされる事は、その器官の複雜な構造によつて說明することが出來る。一方男の生殖器が極めて複雜な機械によつて象徴されるのはその構造が大層らしいからである。

女の生殖器のも一つの注意すべき象徴は寶石箱である。ところが「寶石」と「貴重品」は夢では愛人を表はす。珍味は屢々性的快感を意味する。自分の生殖器による滿足はあらゆる種類の遊戲及びピアノの彈奏によつて示される。自瀆の象徴的表現では滑走と木の枝を折ることがその代表的なものである。特に面白い夢の象徴は齒の拔ける

こと或は齒を拔くことである。これは主として自瀆の罰としての去勢を意味してゐる事は確かである。性交に特有な表現は、今まで述べたところから豫期されるほどに豐富ではないが、舞踏、乘馬、登昇のやうな律動的活動を擧げることが出來る。轢かれるといふやうな亂暴な經驗もさうである。ある手仕事もこれに加へることが出來よう。武器で脅迫されることは言ふまでもない。

これらの象徴は全く單純に使用或は飜譯されるものであると想像してはならない。豫期に反するやうなことがあらゆる方面で生じて來る。例へば、これらの象徴的表現に於いては性の區別は屢々極めて漠然としてゐるが、これらは殆ど信じ難いことのやうに見える。多くの象徴は一般に男性のと女性のとに論なく一般に生殖器を表してゐる。例へば、小さい子供、或は小さい息子や娘がそれである。時としては一般に男の生殖器を表はす象徴が、女の生殖器を表示するのに使用されることも、その反對に使用されることもある。これは人間の性に關する觀念の發達に就いての知識を獲得した後に於いて、初めて理解し得ることなのである。多くの場合象徴のこの二義性は、單に外見的なものに過ぎないやうに思はれる。武器、袋、箱のやうな最も顯著な象徴は、決してこのやうに兩性に通じて使用されるやうなことはない。

私はこゝで、象徴される物體からではなく象徴そのものから出發して、性的象徴は大部分何處から由來したかといふことを略敍し、特に象徴されるものと共通な屬性を見つけ出すことの困難な象徴に關して注意したいと思ふ。この種の曖昧な象徴の一例は帽子や或は恐らくは一般に頭の被り物である。これは普通男性的意味を有してゐるが、時としては女性的意味にも用ひられる。同樣に上衣は「常に生殖器に關するとは限らないが、男を意味する。何故さうであるかといふことは諸君の考へに委して置く。上からぶら下つてゐて女の着けないネクタイは明かに男性的象徴である。これに反して下着類は一般に女性を意味する。着物と制服は、前に言つたやうに、裸體及び身體の形を表はす。靴とスリッパは女の陰門を象徴する。テーブルと木は譯は分らないが確に女の象徴であることは前に述べた。梯子、坂、階段を昇る行爲は疑ひもなく性交を象徴してゐる。十分考へて見ればこの登昇の律動的性質、また恐らくは高く昇るに從つてだん／＼昂奮し、息がはづむといふことも、兩者に共通な點であることが分るであら

う。

地景が女の生殖器を表はすことは既に述べた。山及び岩は陰莖の象徴である。庭園は屡々女の陰部を象徴する。果物は子供をではなく乳房を意味する。野獸は肉感的になつた人間、從つて邪惡な衝動、情慾を意味する。花は女の、特に處女の生殖器を意味する。さうして花は實際植物の生殖器であることを、諸君は忘れてゐられないであらう。

部屋が象徴として用ひられることは既に知つてゐる。この表現は更に擴大されて、窓、部屋の出入口は身體の孔を意味するやうになる。部屋は開かれる或は閉ざゝれるといふ事實もこの象徴作用に合致する。それを開く鍵は確かに男性的象徴である。

これは夢の象徴作用の二三の材料に過ぎない。これではまだ完全ではない。さうして擴げることも廣めることもしようと思へば出來る。けれども諸君はもう滿腹されたことゝ私は思ふ。恐らく嫌惡して居られるかも知れない。諸君は問はれるであらう。「それならば私は實際夢の象徴のうちに生活してゐるのであるか。私の周圍にあるあらゆる物體、私の着てゐる着物、私の手に持つあらゆる物は常に性的象徴であつて、それ以外のものではないのか。」實際吃驚した質問を出すだけの理由は十分にある。さうしてその最初の質問は次のやうなものであらう。「夢見た人自身でさへも、それに就いて少しも或は殆ど知るところのない夢の象徴の意味を、一體吾々はどうして知り得ると揚言するのであるか。」

これに對して私は、色々の方面、童話、神話、洒落、諧謔、民間說話、卽ち種々の民族の風俗、習慣、格言や歌謠から、また詩語や俗語から吾々の知識を得て來るのである、と答へる。これらの分野の到るところで、これと同じ象徴作用が現はれてゐて、吾々はそれに就いて何等教へられることなしに、それらを理解し得る場合が多い。若し吾々がこれら種々の方面を個々に考察するならば、夢の象徴と並行するものを多數に見出して、吾々の解釋の正しいことを容認せざるを得ないであらう。

身體は、前に言つたやうに、シェルナーに從へば夢に於いては屡々家によつて象徴される。この象徴作用を押し

進めて行つて、窓、扉、門は身體の孔への入口を意味するやうになる。さうしてその家の前面は滑かなこともあれば摑へることの出來る露臺や突出のあることもある。けれどもこの象徴作用は俗語にもある。例へば、親しい人に呼びかける時には「古い家」といふ。また「あいつは頭が變だ*」といふ。また解剖學では身體の穴のことを「門」と呼んでゐる。

夢では兩親が皇帝、皇后となつてゐるのを見て吾々は最初は大いに驚く。しかし童話ではこれと同じことが行はれてゐる。多くの童話は「昔々あるところに王樣と女王樣とがありました」といふ言葉で始まつてゐるが、これは「昔々あるところにお父さんとお母さんがありました」といふことを意味してゐるに過ぎない。家庭では吾々は戲談に子供のことを王子、長子のことを皇太子と呼ぶ。皇帝自身は國民の父と呼ばれる。小さな子供のことを吾々は戲談に「小蟲」と呼び、さうして同情的に「この可愛さうな蟲」といふ。

再び家の象徴に立歸らう。吾々は夢で家の突出を摑まへる物の意味に用ひるが、これはよく發達した乳房を持つた婦人のことを話す時に用ひられるところの、誰もが知つてゐる俗語、「彼女は摑まへる物を持つてゐる」といふのを想起しないであらうか。かういふ場合には俗語で「彼女は彼女の家の前に澤山の木を持つてゐる」ともいふが、これは木は女性的、母性的象徴であるといふ吾々の解釋を助けようと思つてゐるかのやうである。

木に就いてはもつと言ふべきことがある。何故木が女性、母性を表はすやうになつたかといふことを理解するのは容易でないが、こゝで種々の言語も比較して見るのは有用なことゝ思はれる。ドイツ語の木（Holz）といふ語は材料、粗材を意味するギリシヤ語 ὕλη とその語根を同じうしてゐると言はれてゐる。材料といふ一般名詞が、ある特殊材料にだけ用ひられるやうになる例は決して稀有ではないやうである。さて、大西洋中に Madeira と呼ばれる島があるが、この名はポルトガル人がこの島を發見した時に與へたのである。蓋し發見當時この島は深林に覆はれてゐたからである。ポルトガル語では Madeira は木を意味してゐる。けれどもこの Madeira はラテン語 Materia の少し變化したものに過ぎず、このラテン語はまた材料一般を意味してゐる。ところでこの Mateira は Ma-

*ドイツ語では頭のことを俗に "Oberstübchen"（二階）といふ。

ter（母）から由來したものである。さうして何かをそこから造り出す材料は、それを産むものと考へられる。從つて、木を婦人或は母の象徴として使用するのは、この古い考へ方が殘つてゐるのである。

分娩は夢ではいつも水と關聯して表現される。人は水に陷るか水の中から出て來るが、これは分娩或は誕生を意味する。さて吾々はこの象徴が進化の實際の事實に二樣に關係を有してゐることを忘れてはならない。人類の祖先たるすべての陸上哺乳動物は、水中に住んでゐる生物から出て來てゐる――これは吾々に關係の薄い方の事實である――ばかりではなく、個々の哺乳動物、人間は各々その生存の最初の時期を水の中で過してゐる――卽ち、胎兒として母の胎內の羊水の中に生存し、分娩によつて水から出て來る。けれども私はその夢を見た人がこのことを知つてゐると主張するものではない。その反對に彼にはそれを知る必要はないと言ひたい。彼は恐らく子供の時に話されて、ある他のことを知つてゐるであらうが、私はこれさへも象徴の形成には與つてゐないと主張したい。子供はその子供部屋で鸛が赤兒を連れて來たのであると話される、けれどもそれならば鸛は何處から赤兒を連れて來たのであるか。他からである、泉からである。從つて水の中からである。私の患者の一人は子供の時（當時彼は伯爵の子であつた）この話を聞いてから午後中何處かへ行つてしまつた。漸く見つけ出された時には、彼は城の池の緣に橫になつて、鏡のやうな水の上に彼の小さな顏を突出しながら、水の底に小さな子供がゐるかどうかを見ようとして熱心に眺めてゐた。

英雄の誕生に就いての神話（ロ・ランクはこれを比較硏究した）――その最古のものは紀元前二八〇〇年頃のアカドのサルゴン王の神話である――に於いては、水の中に遺棄すること、水から救ひ上げることが主要な役割を演じてゐる。ランクはこれがいつもの夢に於いて用ひられるのと同じやうな風に、誕生を象徴してゐるのであることを見出した。人が夢の中で誰かを救ひ上げた時には、彼はその人を彼の母にする、或は少くともたゞの母にする。さうして神話に於いては、子供を水から救ひ上げた人は、自分はその子供の眞の母親であると告げる。次のやうな有名な笑話がある。ある賢いユダヤ人の子供がモーゼの母親は誰であるかと問はれた時、彼は言下に「女王です」と答へた。「いや違ふ、彼女はモーゼを水から引き上げたゞけだ」と言はれた時、彼は「彼女はさう言つたのです」と

答へて、彼がその神話の正しい解釋を見出したことを示した。

出發は夢では死を意味する。同樣に、子供が誰か死んだ人或は他所へ行つた人の所在を尋ねる時には、その子供はきつと「あの人は行つてしまつた」と敎へられる。けれどもこゝでもまた私は、この夢の象徵の起源は子供に對するこの迯口上にあるといふ考へに反對したい。詩人はこれと同じ象徵を用ひて「他界は未知の領域であつて、そこから戾つて來た旅人は一人もない」と言ふ。吾々はまた「最後の旅」といふ言葉を日常用ひてゐる。古代の祭儀――例へばエジプトの宗敎に於ける――に就いて知つてゐる人は誰でも、死の國へ旅立つといふ觀念が如何に嚴肅なものであるかを知つてゐる。最後の旅に持つて行くやうに、木乃伊に與へられた『死人の書』が殘存してゐる例は數多い。埋葬地が住居の場所から遠く離れてからは、死人の最後の旅行は實際に本當のことになる。

性的象徵もまた夢にのみ屬するものではない。諸君は皆恐らく嘗ては失禮にも、多分性的象徵を使つてゐるといふことは知らないで、婦人を「古箱」と呼ばれたことがあるであらう。新約聖書には「女は弱き容器なり」と書かれてある。その文體の極めて詩的なユダヤ人のこの聖典は、性を象徵した表現に滿ちてゐるが、それは常に正しく解釋されてゐるとは限らない。さうしてそれの、例へばソロモンの歌の註釋は多くの誤解を導き入れた。後年のヘブライ文學に於ては、極めて屢々女は家として表はされてゐて、扉は陰門と意味してゐる。かうしてある女が最早處女でないことを知つた時、男は「戶は開かれてゐた」と言つて歎く。この文學に於いては女はまたテーブルによつて象徵されてゐる。女はその夫のことを話して、「私はテーブルを整へたけれども彼はそれをひつくり返した」と言ふ。跛の子供は男が「テーブルをひつくり返した」報いとして生れるのだと言はれる。私はこゝでブリュンに於けるL・レヴイの論文『聖書とユダヤ法典に於ける性的象徵』の名を擧げて置く。

船は夢に於いては女を意味するが、このことは船（Schiff）は元來土製の容器の名前であつて、桶(Schaff)と同じ語であると主張する語原學者を支持するやうに思はれる。竈は婦人或は子宮を意味することは、コリントのペリアンデルとその妻メリサに就いてのギリシヤの物語によつて確證されてゐる解釋である。ヘロドタスの語るところによると、この僭主は熱愛はしてゐたが、嫉妬のために殺した彼の妻の亡靈を、その身上話を聞くために呪ひ出し

たが、その時この死んだ婦人は他の人は誰も知ることの出來ない事情を暗語的に、彼、ペリアンデルは「彼のパンを冷い竈の中に押し込んだ」と述べてその身元を證明した。F・S・クラウスによつて出版された "Anthropophyteia" ――これは諸民族の性的生活に關することに就いては缺くべからざる原書である――のうちに、ドイツのある地方では子を産んだ婦人のことを「彼女の竈は微塵に碎けた」と言ふと書いてある。點火及びそれに關聯するものは、何でも皆性的象徴になる。焰は常に男の生殖器を、爐は女の子宮を意味してゐる。

若し地景が夢に於いて極めて屢々女の生殖器の象徴として用ひられることを不思議に思ふならば、古代の觀念と祭儀に「母なる大地」が如何に大きな役割を演じてゐるか、また農業に關するすべての見解が如何にこの象徴作用によつて決定されてゐるかを神話學者から學ぶがよい。夢では部屋は婦人を表はすといふ事實はドイツの俗語では Frauenzimmer（直譯すれば、婦人の部屋）といふ語が婦人の意味に用ひられる事に由來し、從つてその人はその住居に宛てられた場所によつて代表されるのである、と諸君は考へたく思はれるであらう。同様に Hohen Pforte（高い門）といふ語を吾々はトルコ皇帝或はその政府の意味に用ひる。また古代エジプトの支配者の名 Pharaoh は「中庭」といふ意味に外ならない。（古代東洋に於いては都市の二重門の間の中庭は、ギリシヤやローマ時代の市場と同じく、集會の場所であつた。）けれども私はこの推論は餘りに淺薄であると思ふ。部屋が婦人を象徴するやうになつたのは、それが人をそのうちに容れるといふ性質を持つてゐるからである、と見る方が眞に近いやうに思はれる。家がかゝる意味に用ひられることは吾々は既に知つてゐる。神話や詩では更に都市、城、防塞が婦人の象徴となつてゐる。この問題はドイツ語を語りもしなければ理解もしない人々の夢を考へ合せば容易に決定されるであらう。近年私は主として外國の患者を取扱つてゐるが、彼等の國語にはドイツ語の Frauenzimmer に類似した語がないにも拘らず、彼等の夢では同様に部屋は婦人の意味を表はすことを思ひ出すのである。象徴が言語の境界を超越することを示すものは他にもある。さうしてこの事實は古い夢の解釋者たるシュベルトが既に一八六二年に主張してゐる。しかしながら、私の患者にはドイツ語を全然知らない人は一人もないから、私はこの問題の決定を、他國にあつて一國語だけしか話せたい人々から材料を集め得る精神分析家に俟たざるを得ない。

男の生殖器の象徴的表現のうちで戯談、或は俗語、詩句、特に古典的な詩に現はれないものは殆どない。けれどもこゝでは夢に現はれるやうな象徴ばかりでなく、新しい象徴、例へば種々の仕事に用ひられる道具、特に犂が象徴として用ひられる。更に、男性の象徴的表現に至つては極めて範圍が廣く、また多くの議論のあるものであるが、私は時間を浪費しないために、それに就いては語らないことにする。たゞそれらの象徴とは異つてゐる一つの象徴、即ち3といふ數に就いて少しばかり述べたいと思ふ。3が聖數とされてゐるのはこの象徴的意義によるものであるかどうかは未決の問題である。けれども多くの三部分から成る自然物、例へば、クローバの葉が紋章或は徽章に用ひられるのは、かゝる象徴的意味に由來することは確實らしく思はれる。また三つの部分を持つてゐる所謂フランス百合や、シシリイとアイル・オブ・マンのやうに非常に隔絶した二島のあの奇妙な紋章「トリスケル」（一中心點から出た三本の曲つた脚の紋様）は、男の生殖器の變形に外ならないらしい。陰莖の形像は古代に於いては、惡魔を追拂ふ最も有力な手段であると信じられてゐた。さうしてこのことは今日幸運を齎す護符がすべて生殖器の或は性の象徴として容易に認められるといふ事實と關係がある。四葉のクローバ、豚、松茸、蹄鐵、梯子及び煙突掃除人などの形をした小さな銀の垂飾の護符に就いて考察して見よう。

四葉はこの象徴にはもつと適當な三葉のクローバに代つたものである。豚は昔は多産の象徴であつた。松茸は疑ひもなく陰莖の象徴である。蹄鐵は陰門の輪郭を再現してゐる。さうして梯子を持つた煙突掃除人は、彼の職業が俗に性交にも譬へられてゐるが故にこの部類に屬してゐる。（Anthropophyteia 參照）かの梯子が夢に於いて性的象徴と認め得べきことは既に言つた。ドイツ語の用法は Steigen （乘る）といふ語が如何に完全な意味で性的に用ひられてゐるかといふことを示してゐる。例へば人は Den Frauen nachsteigen（女の後を追つかける）とか、ein alter Steiger （昔からの遊冶郎、直譯すれば、古い乘手）などゝ言ふ。フランス語では梯子段のことを la marche といふが、こゝでも遊冶郎のことはドイツと全く同じやうに un vieux marcheur といふ語で表はされてゐる。大多數の動物の性交には、雌に乘る或は攀ぢ登ることが必要であるといふ事實は、多分この觀念の聯想に關係を持つてゐるやうに思はれる。

枝を折取ることは自瀆の象徴とされるが、これは自瀆の行爲の通俗な表現に一致するばかりではなく、これの類似のことは神話にも多く見出される。けれども特に注目すべきは自瀆、もつと適切に言へば、自瀆の罰としての去勢が、齒の脫落或は齒を拔くことによつて表現されることである。何故ならばこれと同じことは民間說話に見出されるが、これを知つてゐる人は極めて少いだらうからである。多くの民族の間に行はれた割禮は去勢の代用であり、減刑であることは一點疑ひのないことのやうに私には思はれる。さうして最近吾々は、オーストリアのある原始的部族では、靑年期に達した印の儀式として割禮を行ふが、その極く近くに住んでゐる他の部族では、その代りに齒を拔くといふことを知つた。

私はこれらの實例を以て私の敍述を終らうと思ふ。これらはたゞの實例に過ぎない。吾々はこの主題に就いてもつと多くのことを知つてゐる。さうしてこの種の蒐集が私達のやうな素人によつてゞはなく、神話、人類學、言語學及び民間說話の本當の專門家によつて行はれるならば、遙かに豐富な、また遙かに興味のあるものとなるであらうことは、容易に想像出來よう。こゝで吾々は、徹底的ではないが、吾々に多くのことを考へさせるところの、ある斷定を下さゞるを得ない。

第一に、夢見る人は、彼が覺醒中には少しも知りもしなければ認めさへしないところの象徴的表現樣式を、自由に使驅し得るといふ事實に吾々は面接する。これはボヘミヤの片田舍に生れて、サンスクリット語などはまだ一度も聞いたことのない女中が、その言葉を理解してゐることを發見した時と同じほどに驚くべきことである。この事實を吾々の心理學的見解によつて說明し盡すことは容易でない。吾々はたゞこの夢見る人の象徴作用に就いての知識は無意識的のものであり、彼の無意識的心的生活に屬すると言ひ得るだけである。しかしこの假定も餘り役には立たない。今までは吾々は一時的に或は永續的に、吾々に知られない無意識傾向の存在を假定しさへすればよかつたが、今や問題は一層大きくなつて、吾々は一の觀念を常に他の觀念の代用たらしめ得るところの無意識的知識、思想關係、異つた事物間の比較に就いて論じなくてはならない。この比較作用は一度毎に新しくなされるものではなくて、何時でも用ひられるやうに準備されてゐるのである。これは異つた人々が、恐らく言語的差異にさへも拘

らず、同じ比較をするといふ事實から推定される。

この象徵作用の知識は何處から由來するのであらうか。言語の用法はそれの一小部分に過ぎない。他の方面にある多樣の類似物に就いては、夢見る人は大抵知つてゐたい。吾々自身が非常な骨折の後始めてそれを關聯させることが出來たのである。

第二に、これらの象徵的關係は夢見る人、或は象徵がそれによつて表現されるところの夢の作業に特有なものではない。蓋しこれと同じ象徵作用は神話にも、童話にも、諺にも、俗謠にも、俗語にも、また詩的空想にも行はれてゐるからである。象徵化の領域は異常に廣く、夢は單にその一部分たるに過ぎない。この全問題を夢によつてのみ解決しようとするのは決して策の得たものではない。他の方面では普通に用ひられる象徵の多數は、夢では全然現はれないこともあり、稀にしか現はれないこともある。この反對に夢の象徵の多數はどの方面にも見出されるのではなく、前に言つた如くたゞそこに見出されるだけである。この象徵は古代の、しかしながら今では廢れてゐる表現樣式、その斷片が種々の方面に、あるものはこの方面に、あるものは他の方面に、第三のものは恐らく少しづゝその形を變じて、種々の分野に殘存してゐる表現樣式であるやうに感じられる。私はこゝでこれらすべての象徵の殘存してゐた「原始語」を想像した、極めて興味ある精神病者の空想を想起せざるを得ない。

第三に、象徵作用は私の擧げた方面では決して性的象徵に限られてゐないのに反して、夢に於いては象徵は殆ど性的事物との關係にのみ行はれるといふことは、諸君を驚かすに相違ない。これを說明することもまた容易ではない。最初は性的な意味を持つてゐた象徵が、後に他の表現にも使用されるやうになつたのであつて、象徵的表現から他の表現に變つたことは、恐らくこれと關係があらうと想像すべきであるか。吾々が夢の象徵ばかりを取扱つてゐれば、この問題に答へることは明かに不可能である。吾々はたゞ眞の象徵と性慾との間には密接な關係が存すると想像し得るに過ぎない。

最近この點に關する重要な手掛りが吾々に與へられた。一言語學者たるスペンサー（ウプサラの）――彼は精神分析學とは獨立に研究した――の主張するところによると、性的必要は言語の發生と發達に重大な役割を演じてゐ

る。最初に發せられた言葉は傳達と性的相手を呼ぶ手段であつた。さうしてこの語根は原始人の種々の仕事に伴つて發達したのである。それらの仕事は共同的に、韻律的に聲の調子を合せて行はれたが、その效果は性的興味をその仕事に移させるにあつた。原始人はいはゞ彼の仕事を性的行爲の代用のやうに取扱つて、それを愉快なものにした。共同作業中に用ひられた言葉は從つて二つの意味を持つてゐた。即ち一つは性的行爲に關し、他はその代りに置かれた勞働に關してゐた。時と共に言語は性的意味を持たなくなり、その仕事にのみ適用されるやうになつた。幾世紀の後にも、これと同じことが新しい言語に起つた。性的意味を有するその言葉は新しい種類の仕事に應用された。かうして多數の語根が生じたが、これらは皆性的起源を有してゐて、後に性的意味を失つたのである。若しこゝに略說された解釋が正しいとすれば、少くとも夢の象徵作用を理解する可能性は、吾々の前に開かれる譯である。吾々はこれら原始的狀態のあるものを保有してゐる夢に於いては、かくも異常に多くの性的象徵が存するのは何故であるか、さうして常に武器や道具は一般に男性を、材料と働きかけられる物は女性を意味するのは何故であるかといふことを理解し得よう。從つてこの象徵的關係は古代の言葉の同一性の殘存したもので、嘗て生殖器と同じ名前を持つてゐた事物は、夢に於いてそれの象徵として現はれ得るのであらう。

けれどもまた諸君は夢の象徵作用に類似した諸現象を觀察することによつて、それらの問題を心理學も精神病學もなし得なかつたやうな風に、一般的興味の問題たらしめた精神分析學の特質を評價し得るであらう。精神分析學の仕事は、その硏究が最も價値ある結論を期待させる他の多くの精神科學、神話學、言語學、民間說話、民族心理學、宗教硏究と密接な關係を有してゐる。精神分析學の土壤から、これらの科學との關係を豐富たらしめることを唯一の目的とする、定期刊行物、即ちハンス・ザックスとオットー・ランクの編輯で、一九一二年に始めて發行された『イマゴー』(Imago)が生れ出たと聞いても驚くことはない。精神分析學はこれらの諸科學から受取つてゐるよりも、寧ろ與へてゐる。成程精神分析學はその奇妙に思はれる結果を他の分野に於いて再び確證するといふ利益は得てゐるが、全體から見てその適用が、他の分野に有用な結果を齎すに相違ない硏究方法と見地を供給するものは、精神分析學である。個人の心的生活を精神分析的に硏究することによつて、吾々は人間の集團生活に於ける多くの謎を

解決することが出來る、或は少くともそれらの問題を正視することが出來る。

私はまだどういふ場合に吾々はあの想像的「原始語」に就いて最も深く理解し得るか。それが最も多く保有されてゐるのはどの領域にであるかといふことを諸君に語らなかつた。これを知らない限りはこの問題の全意義を評價することは出來ない。さうしてその領域といふのは精神病の領域であり、その材料は精神病者の症候と表現様式である。然り精神分析法はこれの説明と治療のために案出されたのである。

私の第四の見地は吾々をその出發點に連れ戻り、吾々が旣に發見した路の方へ導いて行く。吾々はたとへ夢の監視作用が少しもないとしても、夢を解釋することはなほ困難である、蓋しその時吾々は夢の象徴語を覺醒時の思想に飜譯しなければならないからであると言つた。從つて象徴作用は監視作用と共に存在するところの夢の變歪の第二の獨立せる要因である。けれども象徴作用を利用するのは監視作用に適してゐる。何故ならば、兩者とも夢を奇妙な、理解し難いものたらしめるといふ同じ目的に役立つからである。

夢の研究を更に進めることによつて夢の變歪に參加する新しい要因を見出し得ないかどうかといふことを吾々は直ちに示さなくてはならない。けれども私は夢の象徴作用の問題から離れるに當つて象徴作用は神話、宗教、藝術、言語に遍在してゐるにも拘らず敎養ある人々の間に强い反對を呼び起すことが出來たといふ謎の事實を指摘して置きたい。こゝでもまたその理由は象徴作用の性慾に對する關係のうちに見出さるべきではなからうか。

第十一講　夢の作業

夢の監視作用と象徴的表現を十分に理解しても、それで諸君は夢の變歪を全體征服したとは言へないが、しかしながら大部分の夢を理解することは出來よう。さうするに當つて諸君は二つの補角的方法を利用する。卽ち代用物から本當の思想を洞見するに至るまでは夢見た人の聯想を呼び起し、また象徴の意味をそれに就いての知識から引き出す。この際に生ずる二三の不確實な點に就いては後に論ずるつもりである。

吾々は以前夢の要素とその底に横つてゐる本來の思想との間の關係を研究して、四つの主要關係、卽ち部分と全

體との置換、暗示或は諷示、象徴的關係及び可塑的言語表現を擧げたが、その時には準備が十分でなかつた。今や吾々は全體としての顯在內容を吾々の解釋によつて見出された潜在思想と比較することによつて、この問題をもつと大規模に論じて見ようと思ふ。

私は諸君がこの二つのことを混合しないことを希望する。若し諸君が兩者を識別し得たならば、諸君は夢の理解に於いて、恐らくは私の『夢の解釋』の讀者の大部分より數歩を進めてゐるのである。こゝで私は潜在夢を顯在夢に轉ぜしめる作業は、夢の作業と呼ばれてゐることを今一度憶ひ出してほしいと思ふ。これと逆の過程、即ち顯在夢から潜在夢に達しようとする過程は、吾々の解釋の作業である。從つて解釋の作業は夢の作業を粉碎しようとする。明白な欲望の充足と認められる幼稚型の夢に於いてもこの夢の作業はある程度にはたらいてゐる、即ち欲望は現實に變形され、大抵の場合、思想は幻覺的心像に置換されてゐる。こゝでは解釋は少しも必要ではない。たゞこの二つの置換を元通りにさへすればよいのである。けれどもこれ以外の夢に見られるやうな夢の作業のこれ以上のはたらきを吾々は夢の變歪と呼ぶ。さうしてこゝでは元の思想は吾々の解釋の作業によつて跡づけられなくてはならない。

多數の夢の解釋を比較する機會を持つてゐたから、私は夢の作業は潜在的思想の材料をどういふ風に取扱つたかといふことに就いて、包括的な說明を與へることが出來る。けれども諸君はこれによつて餘りに多くのものを理解し得るとは期待しないで頂きたい。それは靜かに、注意深く聽かるべき敍述の一片である。

夢の作業の第一に成就することは壓縮である。これは顯在夢の內容は潜在思想の內容より少いといふこと、從つて後者の省略された飜譯であるといふことを意味する。壓縮は時としては缺如してゐるが、通例は存在してゐる。さうして屢々極めて高い程度に行はれる。壓縮はこの反對に行はれることは決してない。即ち顯在夢の方が潜在夢よりもその範圍が廣く、內容が豐富であるといふやうなことは決して起らない。壓縮は次のやうな風に行はれる。(一)ある潜在的要素は全然省略される。(二)潜在夢の多くの複合體のうち一斷片だけが顯在夢に現はれ出る。(三)何等かの共通性を有する潜在的要素は顯在夢に於いては一緖にされ、一統體に融合される。

若し欲するならば、諸君は「壓縮」といふ語をこの最後の過程にだけ使用してもよい。この過程の影響は特に容易に立證される。諸君は諸君自らの夢からして、種々の人物が一人の姿に壓縮されてゐる例を苦もなく思ひ出すことが出來よう。かゝる混合人は、姿はAに似てゐるがBの着物を着てゐる。さうしてCを思ひ出されるやうなことをしてゐる。しかもその夢の間中、それはDであることが知られてゐる。かゝる複合像に於いては、この四人に共通なある特徴が特に顯著であることは言ふまでもない。同樣に人物によつてと同じやうに、事物或は場所によつても、若し個々の事物なり場所なりが潛在夢の强調するところのものを共有してゐるといふ條件さへ滿たされるならば、複合像は形成される。それは共通屬性を中核とする新しい刹那的な概念のやうなものである。互に壓縮された個々の部分を重ねると、一枚の乾板の上に撮された數個の寫眞と同じやうに、通例、ぼんやりとした像が生じる。

かゝる複合像の形成は夢の作業に於いて極めて重要なものであるに相違ない。何故ならばこの形成に必要な共通的性質は一見してはありさうにも見えぬところに故意に、例へばある考へに就いての言語的表現の選擇によつて、作り出されたものであることを證明し得るからである。この種の壓縮、複合形成のことに就いては吾々は既に知つてゐる。それは多くの言ひ損ひを生ぜしめるのに重要な役割を演じたものである。諸君は一婦人を begleitdigen (beleidigen 侮辱する、begleiten 同伴するの複合語) しようとした青年の事を覺えて居られるであらう。この外にもその技巧がこの種の壓縮から來てゐるところの戯談がある。けれどもこのことを除けば、この過程は全く異常な奇妙なものであると斷言してもよからうと思ふ。夢に於ける複合像の形成と同樣のことは多くの空想的產物にも見出される。そこでは、例へば、古代神話やベツクリンの繪の人馬や寓話的動物のやうに、現實に於いては相互に關係のない構成部分が、空想に於いては一體に合一されてゐる。實際、「創造的」空想は何等新しいものは發見し得ないで、たゞ種々の異つた要素を合一し得るだけである。けれども夢の作業の方法に特有なものは次の通りである。即ち、その材料は思想であつて、その思想のうちには嫌惡すべきもの、不快なものもあるが、しかもそれらは正しく形成され、表現される。これらの思想は夢の作業によつて他の形に變形される。さうしてこの飜譯――いはば他の文字或は言語への轉化――の過程に於いて、混合、結合の方法が使用されるのは奇妙なことでもあり、理解し難

いことでもある。他の場合に於いては飜譯者は原書に見られる區別を尊重し、類似はしてゐるが同一でないものを區別しようと努める。ところが夢の作業は、これと反對に、戯談と同じ風に、二つの思想を暗示する曖昧な言葉を選んで、二つの異つた思想を壓縮しようとする。吾々はこの特徴を一擧に理解しようと豫期してはならない。けれどもこれは夢の作業を理解する上に極めて重要なものとならう。

壓縮は夢を朦朧ならしめるけれども、それは夢の監視作用の結果であるといふ印象は與へない。寧ろそれは機械的或は經濟的要因から來るものであると考へたい。けれども監視作用はそれによつて利益を得るのである。

壓縮作用は時として異常な程度に達し、その助けによつて時としては二つの全然異つた潜在的思想の聯鎖が一顯在夢に合一され得て、そのために吾々は一見その夢を適當に解釋したと考へて、第二のあり得べき意味を見落すことがある。

壓縮作用が潜在夢と顯在夢との間の關係に與へる影響は、兩者の要素間の關聯を決して簡單なまゝであちらこちらに殘して置くことはないといふことである。その組合せの種類に從つて一顯在的要素は數個の潜在的要素を同時に表はし、逆に、潜在的要素は數個の顯在的要素に參加し得る。また夢を解釋するに當つて一の顯在的要素に對する聯想は、必ずしも順序よく現はれて來るとは限らない。夢が全部解釋されてしまふまで待たなくてはならないことが屢々ある。

從つて、夢の作業は夢の思想を極めて異常な風に轉寫する。それは逐語的な飜譯ではない。また、ある語の母音を省略して子音だけを再現させるといふやうな選擇の過程でもなく、また他の數要素を代表するために一要素だけが摘出されるといふやうな代表過程とも呼ばるべきものでもない。それはそれらとは異つたものであり、遙かに複雜なものである。

夢の作業の第二の作用は**置換**である。幸ひこれに就いては既に多少の豫備知識を有してゐる。實際、吾々はそれが全然夢の監視作用の結果であることを知つてゐるのである。この置換には二つの形式があつて、第一に、潜在的要素はそれ自體の一部分によつてゞはなく、それとは緣の遠いもの、從つて諷示によつて置換される。第二に、心

やうに見える。

的高調點は重要な要素から重要でない要素の方へ移される。從つて夢の中心點が變つて、元のとは緣のないものゝ

諷示による置換は覺醒時の思想にもよくあることであるが、そこには相異が存する。覺醒時の思想に於いては、諷示は容易に理解されるものでなくてはならない。また置換されたものゝ內容も、元のものと關聯してゐなくてはならない。諷示はまた戯談にも屢々使用される。こゝでも內容上の關聯といふ條件はなくてもよく、同音とか多義とかいふやうな餘り用ひられない聯想によつて置き換へられる。けれども、理解し得るといふ條件はこゝでも必要である。若し戯談がそれの諷示してゐる本當のことを何の苦もなしに悟らせ得ないやうなものであれば、それは失敗である。ところが夢に於いては置換による諷示は、この何れの制限にも束縛されてゐない。それは置換する要素と最も外面的に、最も微かに關聯してゐる。從つてそれは理解し難い。さうしてその關係が見出された時には、その解釋は失敗した戯談、或は無理な、牽强附會な諷示といふ感じを與へる。諷示から本當の思想に遡ることを不可能ならしめることに成功した時、始めて夢の監視作用はその目的を達するのである。

高調點の置換は思想發表の手段としては珍らしい。但し覺醒生活に於いても喜劇的效果を生じさせるために、時としてこれが許されることがある。こゝで一寸脫線するやうであるが、私は諸君に次の逸話を憶ひ出していたゞきたいと思ふ。ある村に一人の鍛冶屋がゐたが、彼は死罪に當る罪を犯した。裁判官は彼を有罪であると判決した。けれどもその村では鍛冶屋は彼一人で、從つて無くてはならぬ男であつたに反して、その村には三人の仕立屋がゐたので、その中の一人が彼の代りに死刑になつた。

夢の作業の第三の作用は心理學的に見て最も興味あるものである。それは思想を視覺的心像に變形することである。こゝで明かにして置くべきことは、夢の思想に於いてはすべてのものがこの變形を受けるのではないといふことである。多くのものは元の形を保有し、思想或は知識として顯在夢にも現はれる。またその思想は視覺的心像にのみ變形されるとは限らない。けれどもそれは、それにも拘らず夢の形成に於ける根本特徵である。夢の作業のこの部分は、もう一つの場合を除けば、吾々の旣に知つてゐるやうに最も變化の少いものである。さうして個々の夢

の要素にとつては「可塑的言語表現」は既に吾々が知つてゐるところの過程である。

この作用が容易なものでないことは明白である。これの困難に就いての概念を得る爲には、諸君が新聞の政治的社說を圖解しなくてはならないと想像して見るのが一番である。諸君は普通の文字の代りに造形文字を用ひなくてはならないであらう。その社說のうちに語られてゐる人物や具體物は、容易に寧ろ一層よく繪によつて表現する事が出來よう。けれどもあらゆる抽象語や從屬詞、接續詞のやうな思想關係を示す品詞を表現する時には、困難が諸君を待つてゐる。抽象語に對しては諸君はあらゆる工夫を凝らすであらう。例へば、その社說の原文を恐らくは一層見慣れないものではあるが、一層具體的な、從つてかゝる表現に都合のよい部分から成り立つてゐる他の言葉に作り變へるであらう。そこで諸君は最も抽象的な語も元來は具體的なもので、その褪色したものであることを憶起し、出來るごとにこれらの語の最初の意味を利用するであらう。從つて一物體を「所有する」といふことを、實際に身體をその上に置くといふことで表現出來ることを喜ぶであらう。さうしてこれは正に夢の作業の爲すところのことである。かゝる事情の下にあつて表現の精確さを要求するのは無理である。從つて、若し夢の作業が、例へば、姦通（Ehebruch——夫婦關係の破損——）のやうな繪に再現し難い要素を、他の破損、例へば挫骨(Beimbruch——脚の破損——）に置き換へられるのは止むを得ないことである。*かういふ風にして諸君は、普通の文字を象形文字に置き換へる時に、幾分かその不手際を避けることが出來よう。

*本書を校正してゐる間に私は偶然次のやうな新聞記事を讀んだ。私はこれを今述べたことの思ひ掛けない確證としてこゝに轉載する。

神罰

姦通の報いとしての挫骨

一豫備兵の妻、アンナ・M夫人は姦通罪でクレメンチン・K夫人を訴へた。彼女の訴へによればK夫人は彼女の夫が戰線にあつて彼女に每月七〇クロンを送つてゐる間に、カール・Mと不義の關係を結んだのである。この外に彼女は旣に彼女（M夫人）の夫から多額の金を受取つてゐた。しかるに彼の妻子は飢と悲慘のうちに日を

送らなくてはならなかつた。彼女の夫の同僚が彼女に告げたところによると、彼とK夫人は二人連で酒屋にはひり込んで、夜遲くまで酒を飮んでゐたといふことである。被告は實際數人の兵士達の面前で、原告の夫に早速あの「婆」を棄てゝ自分のところへ來る氣はないかと尋ねた。さうしてK夫人の家の留守番は原告の夫が丸裸でKの部屋にゐるのを屢々見た。

昨日、K夫人は判事の前でMは少しも知らないと言ひ張つた。二人の間の親交などは問題外であると彼女は言つた。

けれども證人のアルバーチン・MはK夫人が原告の夫と接吻してゐるのを見て驚いたと證言した。

證人として呼び出されたMは前の辯證の時には被告との親しい關係を否定したのであつたが、昨日判事に一通の手紙が手渡されてその中で證人は以前の否定を取消し、この六月までK夫人と不義の關係を續けてゐたことを告白した。前の辯論の時に彼が被告との關係を否定したのは、單に訴訟が起された前に彼女がやつて來て彼女を救ふために何も言はないでほしいと跪いて賴んだからであつた。彼はかう書いた「私は裁判官の前に一切を告白せざるを得ないやうに感じます。何故ならば私は左の腕を挫いて、これが私には私の罪に對する神罰のやうに思はれるからです。」

裁判官はこの犯罪事件は時效に罹つてゐると判決したので、原告は告訴を撤回し、被告は釋放された。

思想の關係を表示するところの品詞、例へば、「何故ならば」「從つて」「しかしながら」等を表現しようとする時には、かういふ補助手段はない。從つて原文のこの部分は、これを繪に飜譯する場合には、喪失される。同樣に夢の思想の內容は、夢の作業によつて物體と活動とから成り立つてゐる粗材に分解される。若しそれ自體では表現され得ないある關係をどうにかして精巧に繪に現はすことが出來るならば、諸君は滿足してよからう。丁度これと同じやうに夢の作業は潛在思想の內容の多數を顯在夢の形式の特異性によつて、卽ちそれの明瞭、朦朧によつて、夢を數部分に分割すること等によつて表現することに成功する。分割された部分の數は通例その夢の主要な題目、潛在夢に於ける思想の列の數に一致する。短い序夢はそれに續く詳細な主夢に對して、序論的或は原因的關係に立

つてゐる。また從屬的な夢の思想は、顯在夢に場面の變化を挿入することによつて表現される。從つて夢の形式は決して無意味なものではなくて、形式そのものが解釋される必要がある。同じ夜に見る數個の夢は往々同じ意味を持つてゐて、ますく烈しくなつて來る刺戟と、いよく完全に征服しようとする努力とを表示することがある。特に困難な要素は一つの夢の中でそれを「二重にする」、即ち一つ以上の象徴によつて表現されることがある。

若し吾々が夢の思想とその思想を表現する顯在夢との比較を續けて行くならば、吾々は何處でゞも思ひも設けなかつたことを發見する、例へば、不條理で馬鹿げたことでさへも夢では意味を持つてゐることを見出す。實際この點に於いて夢に就いての醫學的見解と精神分析的見解との對立は、他の處に於いてよりも一層著しくなる。醫學的見解に從へば、夢を見てゐる間は吾々の心的活動はその機能を放棄するが故に夢は不條理なのである。この反對に、吾々の見解に從へば、夢の思想に包含されてゐるところの批判、「それは不條理である」といふ判斷を表現しなくてはならない時に、夢は不條理になるのである。前に話した觀劇の夢(三シルリングの三枚の下等な芝居の切符)はこれの適例である。かうして表現された判斷は「そんなに早く結婚するのは不條理であつた」といふのであつた。

同樣に夢を解釋する時に、吾々は屢々夢見た人が語る處の、ある要素は實際夢に現はれたかどうか、實際かうであつてあゝではなかつたか、といふやうな疑問や不確實の眞の意味は何であるか、といふことを知るのである。通例潛在思想のうちには、これらの疑問や不確實に對應するものは一つもない。これらは全然監視作用によつて生じたもので、十分成功しなかつた抹消に比すべきものである。

吾々の最も驚くべき發見の一つは、夢の作業はどういふ風に潛在夢の中にある反對の事物を取扱つてゐるかといふことである。吾々は既に潛在的材料に於ける一致點は顯在夢に於いては壓縮によつて置き換へられることを知つてゐる。さて、反對のものは一致するものと同じやうに、好んで同一の顯在的要素によつて表現される。顯在夢に於ける要素のうちで反對を表はし得るものは、從つて自體を意味することもあり、それの反對を或はその兩者を意味することもある。それが如何に飜譯さるべきかといふことは、ひとりその意義によつて決定される。夢に於いては「否」といふ表現が見出されない、或は少くとも曖昧でないものゝないことは、この事實と關係がある。

この夢の作業の奇妙な振舞によく類似したものは言語の發達に見ることが出來る。多くの言語學者は最古の言語に於いては強い——弱い、明るい——暗い、大きい——小さいといふやうな反對のことは、同一の語根によつて表現されたと主張してゐる。（原始語の對偶的意味。）かうして古代エジプトに於いては ken といふ語は最初「強い」と「弱い」の兩方を意味してゐた。話をする時には人は誤解を避けるために抑揚や身振を用ひた。書く時には所謂「限定符」即ち發音されないところの繪を附加した。從つて ken が「強い」といふ時にはこの字の後に直立してゐる小さな人の繪が書かれ、ken が「弱い」ことを意味した時にはのろ〳〵して蹲つてゐる小さな人の繪が附け加へられた。後になつて始めてこの同じ原始語の二つの相反する意味は、最初の語を少しばかり修正して二様に表示されるやうになつたのである。かうして ken から「強い——弱い」を意味する二語が生じ ken、は「強い」を kan は「弱い」を表はすに至つた。最初の發達階段に於ける言語ばかりではなく、もつと近代の、今日も使はれてゐる言語さへも、二つの反對の事物を意味し得る初期の言語の面影を保存してゐるものは多數にある。私はC・アベルの著作（一八八四年）からこの例證を引用しようと思ふ。

ラテン語では今でも次のやうな二義語がある。

altus（高い、或は深い）sacer（聖なる、或は呪はれたる）

原語の修正の例としては、

clamare（叫ぶ）clam（靜に、默つて、こつそりと）。siccus（乾ける）succus（汁）。

ドイツ語では、

Stimme（聲）stumm（默せる）

同系語を比較すれば多數の實例を得ることが出來る。

lock（英、閉める）Loch（獨、穴）Lücke（隙間）cleave（英、裂く）kleben（獨、附着する）

英語の without は元來は with（共に）と out（なしに）の二義を有してゐるのであるが、今日では後者の意味にのみ用ひられてゐる。けれどもwithは「加へる」といふ外に「引き去る」といふ意味を有してゐることは with-

draw（引き込ます）、withhold（差し控へる）といふ複合語から考へて明かである。ドイツ語の wieder もこれに似てゐる。

夢の作業のもう一つの特異性に類似したものも言語の發達に見出される。古代エジプト語に於いても、またそれ以後の他の言語に於いても、同じ意味を持たすために發音の順序が逆にされた。英語とドイツ語との間に於けるこの種の例を擧げれば、

Topf - pot（壺）、Boat—tub（ボート）、Hurry（急ぐ）——Ruhe（休息）、Balken（梁）——Kloben（丸太）、wait—täuwen（待つ）

ラテン語とドイツ語との間では、

capera—packen（摑む）ren—Niere（腎臟）

こゝで單語に起つたやうな轉位は夢の作業によつて種々の風になされる。意味の顚倒、即ち反對の事物による置換のことに就いては吾々は既に知つてゐる。けれどもこの外に夢に於いては、恰も「あべこべの世界」の出來事であるかのやうに、二人の人物の位置、關係が逆になつてゐることがある。夢では兎が獵師を擊つことは幾度となくある。更に出來事の順序が顚倒して、夢では結果の次に原因が來ることもある。これは下手な芝居では、時々主人公が倒れてから彼を殺す彈丸が舞臺側から發射されるのと似てゐる。また要素の順序が全然逆になつてゐて、從つて、少しでも意味を引き出すためには、それを解釋する時には最初のものを最後に、最後のものを最初にしなければならないやうな夢もある。諸君はまた夢の象徵に就いての吾々の研究からして、水の中に跳び込む或は陷るといふ行爲は水から出て來る行爲と同じ意味を有する、即ち生む或は生まれるといふ意味を有すること、また階段や梯子を昇ることは、降りるのと同じ意味を有することを覺えて居られるであらう。かゝる表現の自由によつて夢の變歪がどんな利益を得てゐるかは言ふまでもないことである。

夢の作業のこれらの特徵はこれを古代的と呼ぶことが出來よう。それは言葉或は文字の原始的表現樣式に固執し、同じ困難を伴つてゐる。この困難に就いては、この問題を批判的に觀察する際に述べることにする。

今度は他の二三の點に就いて考察して見よう。夢の作業が成し遂げなくてはならないことは、言ふまでもなく言葉で表はされた潛在的思想を感覺的、主として視覺的性質の、心像に變形するにある。さて吾々の思想はかゝる知覺的形式に於いて生じたのである。それの最初の材料と最初の階段は感覺印象、もつと正しく言へば、その印象の記憶心像から成り立つてゐた。言語がこの印象に結びつけられ、それから思想と緊密な關係を持つやうになつたのはもつと後のことである。從つて、夢の作業はその思想に退行的過程を經驗させ、それの發達の道程を遡らさせる。さうして、この退行の際に記憶心像が思想にまで發達する間に得られた新しい獲得物は、必然的に脫落せざるを得ない。

從つて夢の作業とはこのことを言ふのである。吾々が夢の作業の際に知つた過程とは反對に、顯在夢に對する吾々の興味は遠く背景のうちに退かなくてはならない。私は、しかしながら、吾々が直接に知り得る唯一の部分たる顯在夢に就いて今少し述べて見たいと思ふ。

顯在夢が吾々から見てその意義を著しく失ふべきは當然である。その夢がうまく組合されてゐやうが、連絡のない個々の場面に分れてゐやうが、そんなことは大したことではないと吾々には思はれるに相違ない。また夢が一見意味深い外形を有してゐるやうな場合に於いてさへも、これは夢の變歪作用によつて生じたものであり、それの夢の內容に對する有機的關係は、イタリー風の敎會の前面がその構造や原圖に對して有してゐるのと同じほどに僅かであることを吾々は知つてゐる。けれども夢のこの前面もまた時としては、潛在思想の重要な部分を殆ど或は少しも變歪することなしに再現するが故に、意味を有してゐる。けれども夢を解釋して變歪がどの程度に存在するかといふことに就いての判斷を得るまでは、吾々はこれを知ることが出來ない。これと同樣の疑問は二つの要素が密接に關聯してゐるやうに思はれる場合にも起つて來る。かゝる關聯は、潛在夢に於けるこれに對應する要素も同樣に關係してゐることを暗示してゐることもあらうが、思想に於いては關聯してゐるものが、夢に於いては遠く分離されてゐることもあることを信ぜざるを得ない。

一般に吾々は、夢が矛盾なく作られた實用的な表現であるかのやうに、顯在夢の一部分をその他の部分によつて

説明することを差し控へなくてはならない。夢は大抵の場合寧ろ、セメントで固められた種々の石の斷片から出來てゐるがために、その表面に生じた色合は、原初の斷片のそれとは異つてゐるところの角礫岩に比せらるべきである。事實夢の作業には第二次的加工として知られてゐる一機構があつて、それの目的はその作業の直接の諸結果を單一な、かなり統一のある一統體にするにある。この際にその材料は屢々全然誤解されるやうな風に配列され、必要と思はれる時には挿入も行はれる。

一方、吾々は夢の作業を高く評價し過ぎたり、眞價以上のものをそれに與へたりしてはならない。それの活動はこゝに列擧した作用に盡きてゐる。壓縮、置換、可塑的表現及び全體の第二次的加工が、それの成し得るすべてゞある。夢に現はれるやうな判斷の表現、批判、驚嘆、推理は夢の作業によつて爲されたものではない。極めて稀にはその夢に就いての反省の表現であることはあるが、大抵は潜在思想の斷片が多少修正され、適合するやうにされて顯在夢に現はれたものである。また夢の作業は夢の中で會話を作ることが出來ない。二三の例外的場合を除けば、夢の會話は夢見た人が前の日に聞いた或は自分で話した會話を模倣したものであり、それから作られたものである。その會話は材料として卽ち夢の刺戟者として潜在思想のうちに入り込んでゐたのである。夢の作業はまた計算することも出來ない。顯在夢に現はれる計算らしいものは大抵數の組合せであり、似而非計算であり、計算としては全く無意味なものである。またそれは夢の潜在思想に於ける計算の複寫に過ぎない。事情かくの如しとすれば、夢の作業に向けられてゐた興味が直ちに顯在夢を通じて、多かれ少かれ變歪された形でその姿を現はす潜在思想の方に向けられるやうになることは驚くに足らない。けれどもこの問題を理論的に考察してゐる際に、潜在思想を夢全體に置換へて、後者にのみ妥當する事を前者に就いても斷言するほどまでに脫線することは正當ではない。精神分析の成果がかゝる混同を生ぜしめるやうな風に誤用されるのは不思議である。「夢」といふ語はたゞ夢の作業の結果、卽ち潜在思想が夢の作業によつて變形されたその形式以外のものに使用されてはならない。

夢の作業は全く特異な型式の過程であつて、心的生活のうちにこれに類似したものは今までに知られてゐない。この種の壓縮、置換、思想を心像への退行的飜譯は新奇なものであつて、それを認識したといふことだけで吾々の

精神分析的努力は既に報いられてゐる。諸君はまた再び夢の作業の相似物からして、精神分析的研究とそれ以外の研究、特に言語と思想の發達の分野との間に現はされた關係を認めるであらう。この見解の更に深い意味は、諸君が夢の形成のこの機構が精神病的徵候の發生樣式の雛形であることを知る時、始めて悟り得るのである。

私はまたこれらの勞作によつて心理學に附加された新しい收獲物の全體を見渡すことは、吾々には不可能であることを知つてゐる。吾々はたゞこれによつて無意識的活動——これは夢の潛在的思想に外ならない——の存在に對する新證據が提示されたこと、夢の解釋は無意識的心的生活への認識への、今まで知られなかつた大道を見出しつゝあることを指摘して置きたい。

けれども今や諸種の小さな夢の例を一つ一つ諸君に示すべき時が來たと私は思ふ。その例は私が既に諸君に講義した諸點を例證するであらう。

第十二講　夢の諸例の分析

諸君は若し私がこゝで再び夢の解釋の斷片を示して、面白い長い夢を諸君と共に解釋しないからといつて失望してはならない。諸君はもうこんなに豫備知識を得たのであるから、確にそれを豫期する權利があると言はれるであらう。さうして幾千もの夢を解釋したのだから、夢の作業と夢の思想に就いての吾々の斷定を實證するやうな著しい夢の例を澤山蒐集することは、ずつと前に出來た筈であるといふ確信を表白されるであらう。その通りである。しかしながら諸君のこの欲求を實現するには餘りに多くの困難がある。

第一に、私は夢の解釋を主な仕事にしてゐる人は一人もないことを告白しなくてはならない。それならばどうして吾々は夢を解釋するやうになるのであるか。時としては吾々はこれといふ譯もなしに友人の夢を解釋したり、精神分析の仕事に慣れるために長い間自分の夢をいぢくつて見たりする。けれども吾々は主として精神分析的治療を受けてゐる精神病者の夢を取扱はなくてはならない。精神病者の夢は立派な材料であつて、健康人のとはどの點に於いても劣つてはゐないが、治療上の必要からして吾々は夢の解釋を治療の目的に從屬させ、その治療に有用なも

のがそこから引き出してしまへば多數の夢を解釋することを止めることを餘儀なくされる。治療中思ひ浮べられる多數の夢は、一般に十分に解釋されないでほつて置かれる。それらの夢は吾々にまだ知られてゐない全心的材料から生ずるものであるから、治療が終るまではそれを理解することは不可能である。それにまたかゝる夢のことを委しく語るためには、精神病者のすべての祕密を赤裸々にしなくてはならない。ところが吾々は精神病者を研究する準備として夢の問題を捉へたのであるから、それは出來ない。

さて諸君はこの材料は止めにして、健康人の或は自分自身の夢の說明を聽きたがつて居られる事と私は思ふ。しかしこれはその夢の內容から見て出來ない相談である。人は自分自身を、或は自分の祕密を知つてゐる誰かを、徹底的な夢の解釋に必要なだけ無頓着に赤裸々にすることは出來ない。蓋し、諸君が既に知つて居られる通り、それはその人の最も內密なものにまで觸れるからである。この材料の性質から來る困難の外に、夢を委しく語るにはもう一つの困難がある。御承知の通り夢はその夢を見た當人にさへ不思議なものに思はれるのであるから、彼の人柄を知らない他人にとつては尙更さうである。立派な、詳細な夢の分析に就いての精神分析派の文獻は決して少くはない。私自身もある病歷の一部分をなすところの二三の分析を發表したが、夢の解釋の最も立派な例は恐らくO・ランクが發表した或る少女の互に關係のある二つの夢の分析であらう。その夢は約二頁に印刷されてゐるに對して、その分析は七十六頁に亙つてゐる。こんな大きい仕事を諸君に紹介しようと思へば、一學期位はかゝるであらう。若し吾々がかなり長い、非常に變歪された夢を選んで分析するならば、一回の講義では到底その夢全體を滿足に見渡すことの出來ないほどに多くの說明を與へ、聯想や記憶の多くの材料を引用し、多くの岐路に入らなくてはならないであらう。そこで私は諸君に精神病者の夢の斷片を語ることだけで、辛抱して下さるやうにお願ひしなくてはならない。この夢の斷片のうちには夢の特徵のそれこれが認められるが、その證明の最も容易なのは夢の象徵である。次は夢の表現の退行的性質である。私は、私が次に擧げる夢がそれ〴〵語るに値するものであると考へてゐる理由を諸君に語りたいと思ふ。

（一）たゞ二つの短い場面から成る夢。**土曜日だのに彼の伯父は煙草を喫つてゐる**——**一人の婦人が彼を自分の子**

供であるかのやうに愛撫する。

第一の場面に關しては、この夢見た人(ユダヤ人)は彼の伯父は非常に信心深い人で、安息日に喫煙するやうな罪深いことは嘗てしたこともないし、またしもしないであらうと言つた。第二の場面の婦人に就いては、彼は彼の母のことだけしか聯想しなかつた。この二つの場面或は思想は互に關係のあることは明かであるが、一體どういふ風にであるか。彼は伯父が夢に現はれた行爲を實際に行ふといふやうなことはないと明言してゐるのであるから「若しも……するならば」といふ語が挿入されるのは當然である。「若しも信心深い私の伯父が安息日に喫煙するやうなことがあれば、私も母から愛撫されることが許されるであらう。」これは母から愛撫されることが、篤信なユダヤ人が安息日に喫煙するのと同じほどに嚴禁されてゐることを意味してゐることは明白である。諸君は私が、夢の作業に於いては夢の思想間の關係はすべて消失してしまふ、その思想は粗材にまで分解される、從つて夢の解釋に當つて吾々のなすべきことはこの脫落した關係を再び元通りにするにある、と言つた事を記憶して居られるであらう。

(二)夢の問題に就いて著書を公にしたので、私はある點では夢の事件の公衆顧問の格になつてゐて、數年來私に夢を通知して吳れたり、私の意見を求めたりする手紙を各方面から受取つてゐる。さうして私は無論私に解釋させるために、或は自分で解釋した夢に就いてのかくも多くの材料を私は與へて下さつた人々に感謝してゐる。一九一〇年からミユニツヒで學んでゐる醫學生の次の夢もこの種のものである。私がこの夢を擧げるのは、一般に言つて、夢を理解することは、その夢を見た人がそれに就いて知つてゐることを語るまでは如何に困難なものであるかを示さんがためである。卽ち私は諸君が心の底では、象徵を解譯することが夢の觸釋の理想的方法であると考へて、自由聯想法を無視しようとして居られはしないかと考へるので、諸君がかゝる有害な誤謬に陷られないやうにしたいのである。

一九一〇年七月十三日朝頃私は次のやうな夢を見た。私はチウビンゲンの街路を自轉車に乘つて走つてゐる。その時褐色のダツクス種の犬が私を追掛けて來て私の踵に嚙みつく。私はそれから少し走つて自轉車を下り、階段に坐つて私に嚙みついてゐる動物を毆り離さうとする。(犬に嚙まれたことも全體の場面も私に不快を起させなかつ

た。）二人の老婦人が向側に坐つてゐて笑ひながら私を眺めてゐる。そこで私は眼を覺ます。さうして、前にも屢々あつたことだが、眼を覺ます瞬間にその夢全體は私にはつきりしてゐる。

この例に於いては象徴は餘り役に立たないが、この夢を見た人は次のやうに語つてゐる。「最近私は街で出會つた少女を戀したが、彼女に近づく方法がなかつた。私は自分自身が犬の動物好きで、彼女もさうであることを知つてゐたので、彼女の犬を媒にして近づきになるに限ると思つた。」彼はこれに附言して、彼は犬の喧嘩を、時には見物人が驚くほどに手際よく、引分けたことが數回あつたと言つた。從つて吾々は彼の氣に入つた少女は、常にこの種の犬を連れて街を歩いてゐた事を知るのである。けれども顯在夢にはその少女は現はれないで、彼女と共に聯想された犬だけが現はれてゐる。恐らく彼に笑ひかけた老婦人が彼女を表はしてゐるのではあらうが、彼がこの外に語つたことはこの點を明かにしてゐない。夢では彼は自轉車に乘つてゐるが、これは彼の思ひ出した狀態がそのまゝ再現されたのである。彼は犬を連れてゐる少女には自轉車に乘つてゐる時にしか會はなかつた。

（三）人が自分に親しい人を喪つた時にはその後長い間一種特別な夢を見る。卽ちそこではその人は死んでゐるといふ知識と、「生き返らせたいといふ欲望とが奇妙に折衷されてゐる夢を見る。時としては死んだ人は死んでゐるが、しかも彼は死んだことを知らないからまだ生きてゐる、恰もそれを知つた時始めて本當に死ぬかのやうに。時としては彼は半分死んで半分生きてゐる。さうしてその狀態は特有の標を持つてゐる。吾々はこの種の夢を單に無意味なものとして片付けてしまつてはならない。何故ならば夢では生返るといふことは決して許されないことでないからである。これは童話に於いても同樣であつて、童話では蘇生はありふれた運命である。私がこの種の夢を分析し得た限りに於いては、それを合理的に說明することは出來るやうに思はれるが、死んだ人を生き返らせたいといふ敬虔な欲望は奇妙な風に現はれ勝ちである。こゝで私はこの種の奇異で全く意味をなさないやうに思はれる夢を諸君に示さうと思ふ。この夢の分析は既に諸君が吾々の理論によつて知つてゐる多くのことを實證するであらう。その父を數年前に失つた一人の人は次の夢を見た——

私の父は死んでゐるが、掘り出されて氣分が悪いやうに見える。彼はそれ以來生きてゐる。さうして私は彼がそ

のことに氣付かないやうに全力を盡す。(それから夢はこれとは極めて緣の薄いやうに思はれる他のことに移る。)

父が死んでゐるといふことは吾々は知つてゐる。けれども彼が發掘されたといふことは事實に反してゐる。實際その外のことは一つとして事實とは關係がない。けれどもこの夢を見た人は、父の葬式から歸つてから歯が痛み出した、と語つてゐる。彼はその歯を、「若し汝の歯痛まばそれを拔き去るべし」といふユダヤの敎に從つて處置するつもりで歯醫者のところへ行つた。けれどもその歯醫者は、歯は拔いてはいけない、辛抱が肝腎だと言つた。「歯の神經を殺すために何か中へ詰めませう。さうして三日目にいらつしやればそれを取り出してあげます」彼は言つた。

「この『取り出す』ことが發掘である」とこの夢を見た人は突然言つた。

彼は正しかつたか。これは大體正しいが全然正しいとは言へない。何故ならば取り出されたのは歯でなくて、その死んだ部分だからである。しかしながら他の經驗から考へて、これ位の不精確は夢の作業にはあると見てよからう。そこで吾々はこの夢を見た人は、壓縮の過程によつて、死んだ父と、死んではゐるがまだ殘つてゐる歯とを一緒にしたと想像しなくてはならない。從つて、歯に就いて言はれたことは全部は父に適用され得ないのだから、顯在夢に不條理なことが現はれたとしても驚くには當らない。それならば父と歯との比較を可能ならしめるところの共通要素は何であるか。

かゝる要素は存在してゐるに相違ない。何故ならばその夢を見た人は、歯を拔ける夢を見れば家族の誰かを近いうちに失ふといふ諺を知つてゐると述べたからである。

吾々はこの通俗な解釋が誤つてゐること、或は少くとも滑稽な意味に於いてのみ正しいといふことを知つてゐる。從つて、こんな風に探しあてられた主題が、この夢の內容の他の要素の背後にも見出されるといふことは、ます〱驚くべきことである。

今度はこの夢を見た人は、それ以上求められることなしに、父の病氣と死、及び父と彼との關係に就いて語り始めた。父は長い間の病氣で、その病人の看護と治療のためにその息子たる彼には澤山の金が要つた。けれども彼はこれに堪へた。早く死んでくれゝばよいといふやうな欲求は彼には少しも起らなかつた。彼は自分が孝行であるこ

と、ユダヤの掟を嚴格に遵守することを誇りとした。こゝで夢の思想のうちにある矛盾のあることを吾々は見出さないか。彼は齒と父とを同一視した。彼は痛む齒は拔き去るべしといふユダヤの掟に從つて、その齒を處置したいと思つた。彼はその父をもユダヤの掟に從つて取扱はうと思つたが、その掟はこゝでは費用と面倒とを意に介するなかれ、重荷を自ら負へ、煩勞を生ぜしめる者に敵意を抱くなかれと命じた。若し彼が病父に對しても死にかけてゐる齒に對すると同じやうな感情を實際に抱くやうになれば、換言すれば、若し彼が役に立たない、苦痛な、金のかゝる父が早く死んでくれゝばよいがと願つたならば、兩者の一致はもつと確かではなからうか。

私はこれが、實際には、長患ひの間の父に對する彼の態度であつたこと、孝行であるとの彼の高慢な確信はこの種の思ひ出を避けるために作られたものであることを疑はない。かういふ場合には、父が死ねばよいといふ欲望が起り、さうしてその欲望が「死んだ方が極樂だらう」といふやうな同情のある考への假面をかぶせられることは稀ではない。けれども私は潛在思想そのものゝうちでは、一の障壁が破壞されてゐることに特に注意してほしいと思ふ。その思想の第一の部分は確に單に一時的に、卽ち夢の作業の行はれてゐる間だけしか意識されなかつたのに反して、父に對する敵意は恐らく子供の頃から少しも意識されないで、時々、父の病氣の間に、こつそりと變裝して意識內に忍び込んだのであらう。この夢の內容に確に關係のある他の潛在思想に就いては、吾々は更に確實にことを主張することが出來る。父に對する反感が夢のうちに見出されないことは確である。けれどもかゝる反感の起源を子供の生活のうちに尋ねる時、吾々はそこに父に對する恐怖の存することを思ひ出すのである。蓋し父は旣に幼年時代に於いて子供の性的活動を妨げるからである。(彼は普通靑年時代にも社會的動機からこれを再びすることを餘儀なくされる。)こゝで述べてゐる夢を見た人のその父に對する關係もまたこれであつた。父に對する彼の愛情には、幼時の性的威嚇の源から流れ出た尊敬と恐怖とが混淆してゐた。

吾々は今や顯在夢に現はれたその次の文句を自瀆複合體によつて說明することが出來る。「彼は氣分が惡いやうに見える」は、そこの齒を拔くと具合が惡いやうに見えるといふ齒醫者の言葉を暗示してゐるが、同時にそれはその靑年の思春期に於ける過度の性的行爲を洩らしてゐる、或は洩しはしないかと怖れられてゐるところの「氣分の惡さ

うな顏」にも關聯してゐる。顯在夢に於いて本人が氣分の惡さうな顏を自分から父に轉移したのは、諸君が既に知つてゐる夢の轉移作用の結果であつて、それによつて彼の心は輕くされるのである。「彼はそれ以來生きてゐる」は父を生き返らせたいといふ欲望にも、齒は拔かなくてもよいといふ齒醫者の約束にも一致する。「私は彼がそのことに氣付かないやうに全力を盡す」は、「彼は死んでゐる」といふ語を完結させるために極めて巧に工夫されたものであるが、これも自瀆複合體から來てゐると見ると始めて筋が通る。卽ち青年がその性的行爲を父から隱蔽するために全力を盡すのは當然のことだからである。最後に、所謂「齒痛の夢」は常に自瀆とそれに對する所罰とに關係してゐるといふことを告げて置きたい。

今や諸君はこの理解し難い夢はどうして作られたかを知られたことゝ思ふ。奇妙な誤解され易い壓縮作用によつてゞある。潛在思想の核心をなす一切の思想を脫漏することによつてゞある。また最も深い、遠い昔のこれらの思想を表現するために多樣に解釋の出來る代用物を持つて來ることによつてゞある。

(四)無味乾燥で筋の通つてゐる夢に就いては吾々は既に幾度もその說明を試みたが、この夢は「一體何故こんな詰らぬことを夢に見るのであるか」といふ疑問を起させる。そこで私はこの種の夢の新しい例を引用しようと思ふ。この夢は互に關係のある三つの夢から成つてゐるもので、ある若い婦人が一晩のうちに見たのである。

(A)彼女は家の廣間を通つて行く。さうして垂れ下つてゐるシャンデリアに酷く頭を打ちつけて血を出す。

彼女はこんな事實は一つも思ひ出さなかつた。彼女はまるで方角違ひのことを言つた。「私の髮の毛はそれはひどく拔けるのです。昨日もお母さんから、『ね、お前、そんなに拔けては今にお前の頭は尻のやうに禿げてしまひますよ』と言はれました。」從つてこゝでは頭は身體の他端を意味してゐるのである。シャンデリアの象徵を理解するにはこれ以上何の助けも要らない。何でも長くすることの出來るものは陰莖の象徵である。從つてその夢は陰莖との接觸によつて起つた身體の下端の出血に關するものである。この夢は、まだこの外の意味も持つてゐるやうである。彼女の他の聯想が示してゐるところによると、この夢は月經は男との性交によつて生ずるものであるといふ確信——この考へは若い娘には決して稀ではない——と關係がある。

(B)彼女は葡萄畑の中で一つの深い穴を見る。彼女はそれが樹を引拔いた跡であることを知つてゐる。彼女はこれに註釋して「その樹を何處かへやつてしまつた」と言つたが、これはその樹を夢で見なかつたといふ意味なのである。けれどもこの文句は同時にこの夢を象徴的に解釋させるところの他の思想を表現してゐる。この夢は性に關するも一つの幼時の考へ、即ち少女は元來少年と同じ生殖器官を持つてゐるのであるが、去勢(樹を拔くこと)によつて今のやうな形になつたといふ確信に關聯してゐる。

(C)彼女は机の抽出の前に坐つてゐるが、その中のことは知り拔いてゐるから、若し誰かゞそれに觸れば直ぐに氣がつく。この机の抽出はあらゆる抽出、箱と同じやうに女の生殖器の象徴である。彼女は性交(或は、彼女の考へたやうに、接觸も)をすれば生殖器で分るといふことを知つてゐて、長い間さう言はれはせぬかと恐れてゐた。この三つの夢で最も高調されてゐることは「知つてゐる」といふ觀念であると私は思ふ。彼女は子供の頃に性のことを調べたことゝ、當時その結果を誇つてゐたことを記憶してゐた。

(五)象徴作用の例をも一つ擧げよう。しかし今度は夢を見た時の心的狀態に就いて先づ簡單に述べて置かなくてはならない。ある男が情婦と一夜を一緒に送つた。その情婦は、彼の書いたところによると、母性的な性質の婦人で、抱擁中に子供を持ちたいといふ欲望がどうにもならないほど強くなるやうな婦人の一人であつた。けれども事情があつて、精液を子宮の中へ入れないやうに注意する必要があつた。翌朝眼を覺した時その婦人は次のやうな夢を見たと言つた。

赤い帽子を被つた一人の士官が街路で彼女を追掛ける。彼女は逃げて階段を走り上る。彼は何處までも追つて來る。彼女は息を切らして自分の部屋へ跳び込み、扉をピシャリと閉めて錠を下す。彼女が鍵穴から覗いて見ると、男は外でベンチに腰掛けて泣いてゐる。

赤い帽子を被つた士官に追跡されること、息を切らして階段を昇ることは、性交の象徴であることを諸君は認められるであらう。その婦人が追跡者を閉め出したことは夢では屢々用ひられる轉移作用の一例である。何故ならば實際に於いては性的行爲を中途で止めたのは男だからである。同樣に彼女の悲嘆は男の方に轉嫁されてゐる。即ち

夢の中で泣いたのは男であつて、同時に彼の涙は精液を意味してゐる。

諸君は精神分析に於いては、夢はすべて性的意味を有してゐると主張されてゐることを、きつと聞かれたことがあると思ふ。諸君は今やこの非難の誤りに就いて、自ら判斷すべき地位に居られるのである。夢には最も明白な要求――飢渴、自由の熱望――と關係のある欲望實現の夢、快樂の夢、待遠しい夢、明かに貪慾な利己的な夢があることは前に述べた。けれども酷く變歪された夢は主として――こゝでもまた全部ではない――性的欲望を表現するものであることは、精神分析的研究の結果として確に記憶して置いてよい。

（六）私が夢に於ける象徵の使用例を多數に引用するのには、ある特別の理由がある。私は第一講に於いて私の解釋を實證し、それによつて精神分析の敎ふるところを確信せしめることが、如何に困難であるかといふことを訴へた。さうして諸君はそれ以來確に私に同意されたのであつた。けれども精神分析の個々の主張は極めて緊密に關聯してゐるから、その理論の一點を信ずれば直ちにその大部分をも信ぜざるを得ない。小指を觸れゝば手を摑んでしまふといふ事は、精神分析に就いても言へよう。若し諸君が誤謬の解釋を正しいものとして受入れるならば、論理上またそれ以外のものをも信じないでは居られない。さて夢の象徵作用はこの容認へ近づく第二の場所を提供するものである。私は前に一度發表したことのある一婦人の夢を再び引用したいと思ふ。彼女は番人を夫とする貧民階級の婦人であつて、夢の象徵作用や精神分析の話を一度も聞いた事がなかつたことは確かである。從つて性的象徵の助けを借りてするその解釋が、獨斷的なものであるか必然的なものであるかは諸君自ら判斷していたゞきたい。

「……その時誰かゞ家の中に侵入したので彼女は驚いて一人の番人を呼んだ。けれどもその番人は二人の浮浪人と一緒に數段の階段を上つて敎會の中へ入つて行つた。敎會の後には山があつてその頂上には深い森があつた。その番人は兜、喉當、外套を着け、褐色の髭を一杯生やしてゐた。彼と仲好く連立つて行つた二人の浮浪人は前掛を袋のやうに腰に捲きつけてゐた。敎會から山へは小徑が通じてゐて、その兩側はだん〱茂つて行く草や灌木に覆はれてゐた。さうして山の頂上には整つた森があつた。」

諸君はこゝに使用された象徵を何の苦もなしに認めるであらう。男の生殖器は三人で表はされ、女の生殖器は敎

會や山や森のある地景で表はされてゐる。こゝでも階段を昇ることが性的行爲の象徴となつてゐる。夢の中で山と呼ばれてゐるものは、解剖學に於いてもさう呼ばれてゐる、即ち Mons veneris と呼ばれてゐる。

(七)私は象徴作用によつて説明することが出來るも一つの夢を諸君に語りたいと思ふ。この夢はこれを夢見た人が、夢の解釋に就いての理論的知識を持つてゐなかつたにも拘らず、自分でその象徴を全部飜譯したといふ事實によつて注目に値するものであり、また證據を提示するものである。これは極めて稀なことであつて、どういふ風になされたかといふことは十分知られてゐない。

「彼は父と一緒にある場所を散歩する。圓形家屋のあるところを見るとそこはプラーター(ウィンにある大公園)であるに相違ない。その家屋の前に小さな建物があつて、それにかなり弛んだ繫留氣球が結びつけられてある。父は彼にあれは何をするものだと尋ねる。彼はこの質問に驚いたけれども、それを説明する。それから彼等はブリキ板の擴げてある庭へ來る。彼の父はそれの大片を切り取りたいと思ふが、先づ誰も見てゐないかどうかを確めるために周圍を見廻す。彼とその息子に向つて、お前は番人が來るかどうかを見てさへ居ればよい、さうすれば直ぐに盜むことが出來るからと言ふ。その庭から鑛坑へ階段が通じてゐて、その坑の四方は革の臂掛椅子のやうに何か柔かいもので被裝されてゐる。この坑の底にかなり長いプラットホームがあつて、その向ふにまた新しい坑が始まつてゐる。」

夢を見た人はこれを次のやうに解釋してゐる。「圓形家屋は私の陰部で、その前の繫留氣球は私がその衰弱に困つてゐる私の陰莖である。」もつと詳しく解釋すれば、圓形家屋は臀部——子供はこれをきつと生殖器のうちに入れる——であり、その前の小さい建物は陰囊である。夢では父はそれは何をするものか、即ちその生殖器の機能と目的とを尋ねてゐるが、彼が尋ねるやうにその位置を轉倒するのが當然である。さうしてこの父の質問は實際にはなされなかつたのであるから、吾々はその夢の思想を欲望と考へなくてはならない。或は條件的の意味に取らなくてはならない。即ち「若し私が父に性的説明を求めるならば」である。この思想の續きは直ぐ次に出て來る。

ブリキ板の置いてある庭は第一に象徴的に説明さるべきではない。寧ろそれは父の商賣の場所と關係がある。私

は用心して彼の父が賣つてゐる本當の品物の代りに「ブリキ」を用ひたが、その他の點では夢の言葉使ひは少しも變へなかつた。彼は父の商賣に從つて非常に利益のある不正な取引に不快を感じたのであつた。從つて前述の夢の思想の續きは、「(若し私が彼に尋ねたら)彼は顧客を欺いたやうに私を欺いたであらう。」といふのであらう。商賣上の不正を表現してゐるところのブリキ板の切取には、その夢を見た人自身が證明を與へて、それは自淫を意味してゐると言つた。これは吾々がずつと前から知つてゐることであるばかりではなく、自淫の祕密はそれと反對の觀念(おほつぴらにやつてもよい)によつて表現されるといふ解釋とよく一致してゐる。從つて、自淫を行ふといふことも、第一の場合に於ける質問と同じく、父に轉移されてゐるのは當然である。彼は鑛坑を、その四壁が柔かいもので被裝されてゐることから考へて、直ちに膣であると解釋した。さうして坑の昇降も性交を意味してゐるといふことを、私は自分で附け加へて置く。

第一坑の底に長いプラットホームがあること、その向ふに新しい坑のあることを彼は自分の經歷によつて解釋した。彼は暫く性交を行つてゐたが、障碍があつてそれを止めたけれども、治療して再び行へるやうになりたいと望んでゐるのである。

(八)夢にはそれを見た當人が、たとへ顯在夢に於いては變裝されてゐる時でも、必ず現はれてゐるものであるといふ立言を立證するために、多妻的傾向のある一外國人の次の二つの夢を引用する。夢に出て來るトランクは女の象徵である。

(A)彼は旅をしてゐる、彼の荷物は車で停車場まで運ばれる。そこには澤山のトランクが積み重ねられてあつて、そのうちに見本箱のやうな大きい、黑い箱が二つある。彼は慰めるやうに誰かに言ふ。「これはたゞ停車場まで持つて行かれるだけです。」

彼が澤山の荷物を持つて旅行することは事實である。けれども彼はまた治療の際に女の話も澤山した。二つの黑いトランクは現在彼の生活に主要な役割を演じてゐる二人の黑婦人を意味してゐる。そのうちの一人は彼に隨いてウインへ旅行しようとしてゐたが、彼は私の忠告に從つて拒絕の電報を打つた。

（B）税關に於ける一場面――一人の旅行仲間が彼のトランクを開いて、煙草を喫ひながら「內には何もありません」と平氣な顔をして言つた。税關吏は彼を信じてゐるやうに見えたが、もう一度內を調べて見て、嚴禁されてある物品を發見した。そこでその旅行者は諦めたやうな風に言つた。「いや、仕方がない」この夢を見た人自身が旅行者で私が税關吏である。彼はいつもは私に極めて率直に告白するが、最近に成り立つたある女との關係を、私が彼女を知つてゐると考へて――その通りであつた――私から隱さうと決心したのであつた。彼は見破られるといふ苦しい立場を他人に轉嫁したために、彼自身は少しも夢に現はれてゐないやうに見えるのである。

（九）こゝに私が今までに述べなかつた象徴の一例がある。彼は二人の友達（この二人も姉妹である）と一緒にゐる自分の妹に出會ふ。彼はその二人とは握手するが、自分の妹とはしない。

これは實際には起らなかつたことである。却つて彼は、何故あの少女の乳房は發達が遲いのだらうと訝かしく思つた時のことを思ひ出した。從つて、この二人の姉妹は乳房を意味してゐる。彼は若しその乳房が妹のでさへなかつたならばそれを掴みたく思つたであらう。

（一〇）こゝに夢に於ける死の象徴化の一例がある。彼はその名前は知つてゐたが眼を覺ましてから忘れてしまつた二人の人と一緒に非常に高い急な鐵橋を渡る。突然その二人は消えてしまつて、帽子を被り麻の服を着た幽靈のやうな男が現はれた。彼は彼に電報配達ではないかと尋ねる……否。そんなら馭者であるか……否。そこで彼は行つてしまつた。夢の中でも彼は非常な恐怖を感じた。さうして覺醒後にもその夢の續きを考へて、その鐵橋が急に折れて彼は深淵に落ちるやうに空想した。

夢の中でその人は知らないとか、その名前を忘れたとかいふことが高調されてゐる時には、その人は通例極めて親しい人である。この夢を見た人には二人の兄弟があつた。若し彼がこの二人が死ねばよいと思つたことがあつたとすれば、彼が死の恐怖に襲はれたらうと見るのは少しも不當ではなからう。電報配達に關しては、彼等は何時も凶報を持つて來ると彼は言つた。その制服から考へて彼は、死の精が生命の火を消すと同じやうに、ランプを消す

點燈夫であつたのかも知れない。馭者に關しては彼はカール王の航海のことを歌つたウーランドの詩を聯想し、二人の友達と一緒に危險な航海をして、その時彼が詩中の王の役割を演じたことを思ひ出した。鐵橋のことは彼に最近に起つたある出來事と、「人生は吊橋である」といふ馬鹿げた諺とを思ひ浮べさせた。

(一一)次の夢は死の夢のも一つの實例と見ることが出來よう。

知らない紳士が黑枠のついた名刺を彼のところへ置いていつた。

(一二)種々の見地から諸君に興味を與へるも一つの例を引用しよう。この夢の假定には確に精神病的なところがある。

彼は汽車に乘つてゐる。その汽車は野原の眞中で停る。彼は何か事件が起りつゝあるのだから逃げ出さなくてはならないと考へて、車室を全部通り拔け、出會ふ人々を、車掌も機關手もその他の人も皆殺してしまふ。

この夢は一友人が彼に語つた話を思ひ出させる。イタリーのある線で一人の狂人が小室に入れられて運搬されてゐたが、ある間違から一人の旅行者がその室に入ることを許された。さうすると狂人はその旅行者を虐殺したといふのである。かうして彼は自分をこの狂人と同一視したが、この理由は時々彼は「自分のことを知つてゐる奴を片附け」なくてはならないといふ強迫觀念に困しめられるといふにある。けれども彼は次でこの夢のもつとよい誘因を見附け出した。前の日に彼は結婚したいとは思つてゐたが、彼は嫉妬を起させるやうなことをしたので思ひ切つた少女と劇場で會つたのであつた。彼の嫉妬が非常に強いところから考へて、若し彼が結婚したと思へば、彼は本當に狂氣になつたことであらう。換言すれば、彼はその少女を少しも信用してゐないから、彼の邪魔をする男は嫉妬心のために片端から殺したことであらうといふのである。いくつもの部屋――こゝでは車室――を通り拔けることが結婚の象徵であることは吾々の既に知つてゐるところである。(反對の法則に從つて一夫一婦を表現してゐる。)

汽車が原の眞中で停つたことゝ遭難の恐怖とに關しては、彼は「ある時停車場でないところで汽車が急停車した時、同室の若い婦人が、衝突するのかも知れない、若しさうなら足を高く擧げるのが一番よい、と言つた」と語つた。ところがこの「足を擧げる」といふ語が、またあの少女と共に始めて愛し合つたころに屢々一緒に田舍を散歩

したことを彼に聯想させた。これは彼が今彼女と結婚すれば氣が狂ふに相違ないといふことに就いての一つの新しい證據である。さういふ風にして狂氣になりたいといふ願望は、しかしながら今もなほ彼に存してゐることは、彼の境遇から考へて確實であると私は思ふ。

第十三講　夢に於ける古代的及び幼兒的特徴

吾々が今までに到達した結果によれば、夢の作業は監視作用の影響によつて潛在思想を他の表現樣式に變形する。この思想は覺醒時に於ける普通の意識的思想と同性質のものであるが、その表現樣式は、多くの特徴を有してゐるがために、吾々には理解することが出來ない。この樣式は吾々がずつと前に通り過ぎて來たところの知的狀態——象形文字、象徴的關係、恐らくは思想の言語の生ずる以前に存在した狀態の頃のものであることは既に述べて置いた。從つて吾々は夢の作業の表現樣式を古代的或は退行的と名けたのである。

このことからして夢の作業を更に深く硏究すれば、現在では殆ど知られてゐない所の人間の知的發達の初期に關して、價値ある說明に達し得るに相違ないと考へることが出來よう。私はさうなることを望んでゐる。しかしながら本書ではそこまでは硏究されてゐない。夢の作業が吾々を連れ戾す時代は二樣の意味に於いて「原始的」である。第一にそれは個人の原始時代——幼時であり、第二に、各個人は子供の間に人類發達の全過程を何等かの短縮された形で繰返すといふ限りに於いて、この原始時代はまた系統發生的である。潛在的心的過程のどの部分が個人的原始時代から、どの部分が系統發生的原始時代から來てゐるか、といふことを決定するのは不可能ではないと私は思ふ。例へば、どの個人も習得したことのない表現樣式たる象徴作用は、人類的遺傳と見做されてよいやうに私には思はれる。

しかしながら、これが夢に於ける唯一の古代的特徴ではない。諸君は實際の經驗によつて特異な幼時の記憶喪失のことをよく知つて居られるであらう。五歲、六歲或は八歲までの數年は記憶のうちにそれ以後の經驗と同じ痕跡を殘さないといふ事實を私は言つてゐるのである。無論極めて幼時から現在までの續いた記憶を誇り得る人もある

ことはあるが、その反對に記憶の缺如してゐる人の方が比較にならぬほど多い。私はこの事實に對して人は餘りに平氣であり過ぎると思ふ。子供は二歳になれば十分話をすることが出來、複雜な心的狀態に順應する能力のあることを示し、さうして、何年か後に人から話されると自分では忘れてゐたことを述べる。しかも記憶力は幼時の方が後年よりも覺えることが少いからよいのである。また記憶作用を特に高度な、困難な心的活動であると考へるべき理由もない。その反對に優れた記憶は極めて低い知力を持つた人々に見出されるのである。

しかしながら第二の特徴――これは第一の特徴に基いてゐる――として、よく把住された、大抵は可塑的な形の記憶が、把住される充分な理由のないやうに思はれるにも拘らず、幼時の數年を覆ひかくしてゐる忘却の雲の間から現はれ出ることを私は擧げなくてはならない。吾々の記憶は後年に受け入れられた印象の材料を取扱ふ時には、それを選擇して、重要なものを把住し、重要でないものを脫漏する。ところが把住された子供の時の記憶はさうでない。それは必ずしも幼時の重要な經驗、子供の立場から見て重要と思はれたに相違ないやうな經驗とは一致しない。何故こんなことが忘却されなかつたのだらうと驚かざるを得ないやうな事柄が屢々記憶されてゐる。私は、精神分析の助けを借りて、幼時の記憶喪失とそれを破つて現はれる憶起の斷片との問題を討究して、子供の時にもたゞ重要なものだけが記憶に把住されるのであるが、たゞ重要なものは前に述べた壓縮作用、特に轉移作用によつて重要でないやうに見える他のものゝ形で憶起されるのであるといふ結論に達した。そこで私は幼時の記憶を**被覆憶起**と呼んでゐる。徹底的に分析すれば忘却されたものをすべてそこから引き出すことが出來る。

精神分析的治療に於いては幼時の記憶の空想を滿たすのが普通である。さうしてその治療がいくらでも成功する程度に應じて、從つて極めて屢々、吾々は長い間忘却されてゐた幼時の生活內容を明かにすることが出來る。幼時の印象は決して本當に忘れられたのではない。たゞ近づくことが出來なかつたのである。潛在してゐたのである。無意識の一部分になつてゐたのである。しかしながら時としてはそれは自然に無意識から現はれ出ることがある。この時にそれは夢と關聯して起る。夢の生活がこの潛在せる幼時の經驗に遡る道を知つてゐることは明かである。このことは精神分析的文獻のうちに十分例證されてゐる。私自身も、この種の例を提供することが出來る。ある時私は

確に私の用事をしたことのある、さうして私がはつきりと見たことのある誰かの夢を見た。その人は片目で、背が低く、肥つて肩が張つてゐた。前後の關係から見て彼は醫者であつたと私は推斷した。幸ひ私の母がまだ生きてゐたので、私が三歳の時に去つた私の誕生地の醫者の風采を尋ねたら、彼女はその醫者は片目で背が低く、肥つて肩が張つてゐたと私に言つた。その時私はまたこの醫者に助けてもらつて私が忘れてしまつてゐた怪我のことも敎へられた。幼時の忘却された材料を自由に使用するといふことは、從つて夢の一つの古代的特徵である。

このことは吾々が今まで解決し得なかつた他の問題とも關聯してゐる。諸君は私が夢を起させるものは極めて邪惡な、或は過度の性的な欲望であつて、それが夢の監視作用と變歪を必要ならしめたのであると述べた時の驚きを記憶して居られるであらう。吾々がこの種の夢を解釋して、その夢を見た人が幸ひその解釋に反駁しない時にでも彼はきつと尋ねるのである。そんな欲望は全く私に緣遠いものゝやうに思はれ、その正反對の欲望を意識してゐるのにどうして私の心に現はれたのであらうか、と。吾々はこの欲望の起源を指摘することを躊躇する必要はない。この邪惡な衝動は過去から、屢々餘り遠くない過去から來てゐるのである。ある人は、當時十七歳になる一人娘が、眼の前で死んでゐるのを見たといふ意味の夢を見たが、彼女は吾々の指導によつて、一時この死の欲望を抱いてゐたことを見出した。その子供は間もなく離婚に終つた不幸な結婚によつて生れたのであつた。その子供がまだ腹の中にゐた頃、烈しい夫婦喧嘩の後の腹立ちまぎれに、彼女は胎內の子を殺すために、拳を固めて自分の身體を打つたのである。今日ではその子供を熱愛、恐らくは溺愛してゐる如何に多くの母親が、その懷姙を喜ばず、胎內の生命がそれ以上發育しなければよいがと願つたことであらう。否彼等はこの欲望を、幸ひにも無害なものではあつたが、種々の行爲に變へたのである。愛兒が死ねばよいといふ後年の不可解な欲望は、かうしてずつと前の子供に對する關係から來てゐるのである。

ある父はその夢の解釋によつて彼の寵愛せる長子の死を欲してゐることを示されたが、彼もまたこの欲望を知らなくはなかつた時のあつたことを思ひ出すことを餘儀なくされた。この子供がまだ乳吞兒であつた頃に、その結婚

に失望したこの人は、彼には何の意味もないこの小さいものさへ死ねば彼は再び自由になつて、その自由をもつとうまく使用したであらうがと屢々考へたのであつた。多數のこれに似た憎惡の衝動はこれに似た起源を有してゐる。それは過去に屬してゐる或ること、嘗ては意識され、心的生活にその役割を演じた或ることの憶起である。このことからして諸君は、二人の關係にこの種の變化がない時には、換言すれば、その關係が始めから同じ性質のものである時には、かゝる欲望、かゝる夢は現はれないであらうと結論したく思はれるであらう。私はこの推論は容認する。けれどもたゞこゝで諸君に注意して置きたいことは、夢の表面の意味ではなくて、解釋された後の意味を諸君は考察しなくてはならないといふことである。愛する人が死ぬといふ顯在夢が單に恐ろしい被面として使はれたものであつて、本當はそれと全然異つたことを意味したり、その愛する人は誰か他の人の代りに用ひられてゐたりすることはあり得ることである。

この事情は、しかしながら、諸君に更に重大なも一つの疑問を起させるであらう。諸君は言ふであらう。「この死の欲望が嘗て實際に存在して、そのことが憶起によつて確證されたとしても、なほそれは眞の說明ではない。その欲望はずつと以前から克服されて居り、現在に於いてはそれは、强力な衝動としてゞはなくて、單に情緒を伴はぬ記憶として無意識內に存在してゐるに過ぎない。衝動として存在するといふ證據は一つもない。從つて、その欲望は何故夢のうちに起憶されるのであらうか。」これは確かに問ふに値する疑問である。これに答へようと思へば、吾々は主題から離れて、夢の理論に於ける最も重要な點に關する吾々の立場を決定せざるを得なくなる。けれども私は吾々の探究の範圍內に止つて、その問題に答へることを差控へなくてはならない。それで當分の間はその問題には觸れないことにして、この克服された欲望は夢の刺戟者であることは證明され得るといふ實際の證據を示すことだけで辛抱し、他の邪惡な欲望もまたこれと同じやうに過去から出て來たものであるかどうかといふ吾々の探究を續けて行かうと思ふ。

大抵は當人の飽くなき利己心から確に出て來てゐる死の欲望を續けて調べて見よう。この種の欲望は極めて屢々夢を形成する作用となつてゐる。誰かゞ自分の生活を邪魔する每に——さうして他人に對する吾々の關係が複雜な

時には如何に屢々かういふことが起ることであらう——その人を、たとへそれが父であつても母であつても、兄弟、姉妹、夫妻であつても、片付けてしまはうといふ夢が直ちに用意される。吾々は人間性のこの邪悪には非常に驚いて、更に多くの證據がなければ、夢の解釋のこの結果を正しいとは確かに思ひたくなかつたのである。しかしながらこの種の欲望の起源は過去に索めらるべきであることを一度悟つた時、吾々は直ちに最も親しい人にさへもかゝる欲望、かゝる利己心が向けられることは少しも不思議でない時期が、個人の過去に存することを發見したのである。幼年時代（これは後年忘却の雲に覆はれてしまふ）の子供はこの種の利己主義を屢々極めて大瞻に現はすが、この種の明白な性向、もつと精確に言へばそれの殘片は常に子供のうちに認められる。蓋し子供は何よりも先づ自分を愛するものであつて、他人を愛し、他人のために自我の一部を犧牲にすることは後になつて始めて學ぶのだからである。最初から子供が愛してゐるやうに見える人々でさへも、最初は彼がその人を必要とするが故に、その人なしにはやつて行けないが故に、從つてこゝでもまた利己的動機から、愛するのである。愛の衝動が利己主義から離れるのは後年のことである。實際子供は**利己主義によつて愛することを學ぶのである。**

こゝで序に子供の兄弟に對する態度と兩親に對する態度とを比較することは無益ではなからう。小さい子供は必ずしもその兄弟を愛しない、さうして往々そのことを公言する。彼はその兄弟を敵視して彼等を憎むのであることは疑を容れない。さうしてこの態度が如何に屢々少しも中斷されることなしに大人になるまで、否その後までも續くかといふことは、世人のよく知つてゐるところである。無論その態度は更に優しい態度に取つて代られる（或は寧ろ積み重ねられるといふべきであらう）ことは屢々あるが、普通敵對的態度の方が早いやうに思はれる。この態度は新しい兄弟が生れた時の二歳半から四歳までの子供を見ればよく分る。その赤兒は普通極めて不親切な待遇を受ける。「私は嫌いだ。鸛はそれをも一度連れて行くべきだ」といふやうな言葉は極めて普通である。その結果この新來者を陷れるやうな機會は悉く利用される。彼を傷けようとしたり、實際に毆つたりすることも決して無いことではない。若しその年齢の差が少い時には、その子供は心的活動がもつと十分に發達するまでに既にその敵手が眼前に居るのを見て、その境遇に自分を順應させる。若しその差が大きい時にはその新しく來た子供は最初から興味の

對象として、一種の生きた人形として或る同情を起させる。年齢が八つかそれ以上も違ふ時には、特に大きい方が少女である時には、保護的な、母性的な働動がはたらく。けれども、本當のことを言へば、兄弟が死ねばよいといふ欲望の夢に潛在してゐることが見出されたとしても當惑することはない。吾々はその起源が幼時に、一緒に生活してゐる時には屢々更に後年にも、存することを容易に見出すのである。

そこに住んでゐる子供達の間に烈しい爭鬪のなかつたやうな子供部屋は恐らく一つもあるまい。その爭ひは兩親の愛、共通の所有物、その部屋の廣い場所を得るための競爭から起るのである。この敵對的感情は兄姉に對しても弟妹に對しても向けられる。「若し英國の若い婦人がその母以上に憎む人があるとするならば、それは彼女の姉である」と言つたのはバーナード・ショウであつたと私は思ふ。さてこの言葉のうちには吾々にしつくり來ないものが何かある。兄弟姉妹間の憎惡と競爭を理解することも吾々にはかなり困難である。けれども母と娘、親と子の間の關係に憎惡の感情はどうして入り込むことが出來るのであらうか。

この關係は疑ひもなくまた子供の見地から考へて更に生じ易いものだからである。從つてこの關係もまた生ずるものと吾々は豫期しなくてはならない。吾々は親子の間に愛の缺けてゐる事を、兄弟の間に缺けてゐるよりも嚴しく非難する。いはゞ、吾々は親子の愛は神聖化してゐるが、兄弟の愛はさうしない。しかも日常の觀察は、兩親と成長した子供との間の感情關係は如何に屢々社會が求める理想から遠いものであるか、如何に屢々敵對心が兩者の間に燻つてゐて、親に對する義務と愛情的衝動とがそれを抑へつけないならば直ぐにも發火しようとしてゐるか、といふことを示してゐる。この敵對の動機は誰も知つてゐることであつて、同性のもの、父と息子、母と娘とは互に離れようとする傾向がある。娘はその母が彼女の意志を制限し、社會が要求する性的自由の自制を彼女に强いることをその任務とする權威者であること、場合によつてはなほ排斥されまいと努める競爭者であることを見出す。同じことは更に烈しく父と子との間にも行はれる。息子にとつては父は彼が厭々ながら從つてゐる社會的强制の具現者である。父は彼がその意志を行ふこと、子供の時に性的快樂に耽ること、財產がある場合には、それを自由に使用することを妨碍する。父が死ねばよいといふ待遠しさは王冠繼承者の場合には悲劇的高潮に達する。父と娘、母

と息子との間の關係はこれほど危險ではないやうに思はれる。この後者の關係は何等利己的考察によつて擾されざる不變の愛情の最純の例である。

何故に吾々はこんな平凡な、誰も知つてゐることを語るのであるか。人々の心のうちには實生活に於けるこれらのことの重要性を否定し、社會的理想は實際に實現されてゐるよりも更に屢々實現されてゐると言ひたがる傾向があるからである。しかしながら眞理を語ることは詭辯家に委せて置くよりも心理學がやつた方がよい。親子間の敵對關係の否定は確に實生活にのみ適用され得ることであつて、物語や戲曲はこの理想が擾された時に暴露される動機を自由に利用してゐる。

從つて多くの人々の夢にその兩親、特に同性の親を無いものにしようといふ欲望が現はれたとしても驚くには及ばない。この欲望は覺醒生活にも、時としては、吾々の第三例の夢を見た人が彼の本當の思想を父の無用な苦しみに對する同情で覆ひ隱したやうに、その欲望が他の動機によつて隱蔽され得る時には、意識內にさへも存在すると見てよい。敵對心だけがこの關係を支配してゐることは稀であつて、大抵は愛情的衝動の背後に退き、遂にはそれに抑壓される。さうして、いはゞ夢がそれを孤立させるまで待たなくてはならない。この孤立作用によつて夢が吾々に擴大して見せたものは、吾々の解釋によつて、その人の生活と適當に關聯させられた時に元通りの大きさになる。(H・ザックス)しかしながら吾々はこの夢の欲望はそれが實生活に見出されないところにも、また大人が覺醒生活に於いてそれを抱いてゐると告白してはならないやうなところにも存することを見るのである。このことの理由は親子、特に同性の親子間の離反の最も深い、また最も普通な動機は旣に幼年時代に働いてゐたことに存する。

私は性的要素が明かに顯著なあの愛の競爭のことを言つてゐるのである。息子は旣に小さい子供の時から母に對して特殊な愛情を抱き始め、母を自分のものと考へ、彼にそれを獨占させまいとする父を競爭者と見做すやうになる。同樣に小さい娘は母を彼女の父に對する愛情的關係を擾し、彼女が十分よく滿し得る地位を占有してゐる人であると考へる。吾々がエディパス複合體と呼んでゐるこの態度——何故ならばエディパスの神話に於いては息子といふ境遇から生ずる二つの極端な欲望、父を殺し母を妻としようとする欲望がほんの少し變つてゐるだけで實現さ

れてゐるからである――が、如何に早い頃から始まつてゐるかといふ事は觀察の示すところである。私は親子間に存在する關係はエディパス複合體に盡きてゐるとは主張しない。その關係はもつと複雜であらう。またこのエディパス複合體が多かれ少かれ強く現れゝば、その複合體自體が逆に用ひられる事もあらう。しかしながらそれは子供の心的生活に必ず存在する極めて重要な要因である。さうして吾々はその複合體の影響とそれから生ずるものゝ影響を、高く評價し過ぎるよりも寧ろ低く評價し過ぎる危險がある。その上、兩親自身がエディパス的態度を以て反應するやうに子供を刺戟することも屢々ある。蓋し兩親は往々性の差異に從つて子供に對する好惡を定め、從つて父は娘を、母は息子を偏愛したり、夫婦間の愛の冷却した場合には子供を興味のなくなつた愛の對象の代りにしたりするからである。

世間は精神分析がこのエディパス複合體を發見したことに對して感謝してゐるとは言ふことが出來ない。その反對に、この觀念は大人の間に烈しい反對を喚起した。さうしてこの觸れる事を禁じられた感情關係の存在を一緒になつて否定しなかつた人々は、曲解によつてその複合體の價値を奪つて、後で埋合せをした。けれども私自身の變らざる確信に從へば、そこには否定したり、胡魔かしたりするやうなものは何もない。吾々はギリシヤも神話が免れ得ない運命である事を認めたところの事實を正視すべきである。また實生活から放逐されたエディパス複合體が物語に貶謫されて、そこで縱横に使驅されたのも興味のあることである。O・ランクはこの問題を周到に研究して、このエディパス複合體が無數に變化し、變裝されて、從つて吾々が既に夢の監視作用の仕事である事を知つてゐるところの變歪を受けて、劇詩に如何に多くの題材を供給したかといふことを示した。從つてエディパス複合體は幸ひにも後年になつて兩親と爭ふことを免れた人々の夢にも現はれると言へよう。さうして所謂去勢複合體、即ち父の仕事たる性に就いての威嚇、幼時の性的活動の抑止に對する反應は、これと密接な關係のあることを吾々は見出すのである。

吾々を子供の心的生活の研究に導いた今までの確證によつて、今や吾々は嚴禁された夢の欲望の他の部分、即ち過度の性的欲望の起源も同じやうに說明されると豫期することが出來よう。從つて吾々は子供の性的生活の發達を

も研究せざるを得ない。さうしてこゝで種々の證據から次のことを知るのである。第一子供は性的生活はしないと想像し、性慾は思春期になつて生殖器が成熟した時に始めて現はれると考へるのは非常な謬見である。その反對に子供は最初から內容豐富な性的生活をしてゐる。無論それは後年の常態的性的生活と考へられてゐるものとは多くの點に於いて異つてはゐるけれども。大人の所謂「性慾倒錯」は次の諸點で常態のとは異つてゐる。（一）種類の制限（人間と動物との間の）を無視する。（二）嫌厭物の制限を、（三）近親相姦の制限（近親者によつて性的滿足を求めることの禁止）を、（四）同性であることを無視する。（五）生殖器の役割と他の器官、或は身體の他の部分に移す。これらすべての制限は最初から存在するものではなくて、發達と敎育との進むに從つて始めて徐々に形成されるのである。小さい子供はこれらのものに束縛されない。彼はまだ人と動物との間の廣い深淵などは見ない。人を動物から分離した人間の傲慢は後年になつて始めて現はれたのである。彼はその生活の初期に於いて排泄物に對する嫌惡を示さない。敎育の影響によつて徐々にその感情を習得したのである。彼は性の相異に多くの價値を置かない。寧ろ彼は兩者は同じ生殖器官を持つてゐると考へる。彼はその最初の性的欲望と好奇心とを彼に最も近い人々、或は他の理由で最も愛せられてゐる人々——兩親、兄弟、乳母に向ける。最後に吾々は子供が後年戀愛關係の高潮に達した時に再び現はれる所の特徵を有してゐることを見るのである——卽ち子供は生殖器にのみ滿足を求めないで、身體の多くの他の部分も同種の感受性を有してゐること、同じやうな快感を與へることが出來、從つて生殖器の役割を演じ得ることを知つてゐる。從つて子供は「多樣倒錯的」であると名付けることが出來よう。さうして若しこれらすべての衝動が痕跡的にしかはたらかないとすれば、それは一方ではその衝動が後年のよりも弱いからであり、他方では敎育が子供の一切の性的行爲を直ちに力強く抑壓してしまふからである。この抑壓はいはゞ理論にも及んでゐる。何故ならば大人は子供の性的行爲の一部分を見逃し、他の部分は曲解してその性的性質を隱蔽し、さうして最後に全體を否定しようと努めてゐるからである。最初子供部室に於ける子供の性的不作法を罵り、それから机の前に坐つて、その同じ子供の性的純潔を辯護するのは屢々かういふ人々である。子供は一人でほつて置かれるか誘惑されるかすると、倒錯的な性的行爲を著しい程度に示すことが屢々ある。無論大人はこれを「子

供のすること」、「遊び」と見て眞面目に取らなくても構はない。何故ならば子供は彼が大人で十分責任があるかのやうに道德や法律によつて判斷さるべきではないからである。けれどもそれにも拘らずこれらの事は存在する。それは生得的傾向の證據としての、また後年の發達の原因及び助長者としての意義を有してゐる。それは子供の性的生活、それによつてまた全體としての人間の性的生活を說明する鍵を與へる。從つて若し吾々が變歪された夢の背後にこれらの倒錯的欲望を再び見出すとしても、それは單に夢はこの點に於いてもまた幼稚狀態へ完全に退行したことを意味してゐるに過ぎない。

これらの嚴禁された欲望のうちでも近親相姦的欲望、即ち兩親や兄弟と性交しようといふ欲望は特に顯著である。諸君はかゝる性交に對して社會は如何に嫌厭を感じてゐるか、或は少くとも感じてゐると言つてゐるか、それの禁止が如何に力說されてゐるかを知つて居られるであらう。この近親相姦の恐怖すべきものである事を說明する爲に、話にもならぬほど不合理な努力がなされてゐる。ある人はこれを禁止しようとする心の生ずるのは種を存在するための自然の用意である。何故ならば近親相姦は人種を退化せしめるからであると臆斷する。ある人は幼時から接近によつて性的欲望はその近親者には向けられないと主張する。しかしながら、この何れの場合に於いても、近親相姦は自ら避け得られる筈であらうから、吾々は寧ろ强い欲望の存在することを示してゐるところの嚴酷な禁止が何故に必要であるかを理解するに苦しむのである。精神分析的研究は近親的な愛の選擇は寧ろ最初の、必ずされる選擇であること、それに對する何等かの反對が現はれるのは後年のことであつて、その反對の原因は個人の心理に求めらるべきではないことを殆ど決定的に證明してゐる。

子供の心理の硏究が夢の理解に齎したところの結果を概括して見よう。吾々は夢は忘却されたる子供の時の經驗を材料とすることが出來ることを見出したばかりでなく、また利己主義、近親相姦的な愛の對象の選擇のすべての特徵を有する子供の心的生活は、夢のうちに、從つて無意識內になほ存續してゐること、夢は吾々を每晚この幼稚な階段に連れ戾すことを知つた。このことは無意識は幼時の心的生活であるといふことを確證する。さうして、これによつて人間の性質の中には非常に多くの邪惡が潛んでゐるといふ不快な印象はいくらか薄らいで來る。この恐怖

すべき邪惡は單に最初の、原始的な、幼時の心的生活に見出されるものであつて、吾々はそれが子供の心のうちではたらいてゐることを見出しはするが、一部分はその範圍が狹いために看過し、一部分は子供に高い道德的規範を要求しないがためにそれを眞面目に考へない。この幼稚的階段にまで退行して夢はその邪惡を吾々の心の表面に持出して來るやうに見える。さうして吾々はそれに驚きはするけれども、その外觀は虛僞に過ぎない。吾々は夢の解釋が想像させるほどに邪惡ではない。

若し夢に現はれる邪惡な衝動は單に幼時のものであり、吾々の道德的發達の初期への復歸であるならば、夢は吾々を思想や感情に於いて再び子供にするのであるから、この邪惡な夢を恥づるのは確に合理的な事ではない。けれども合理的であることは心的生活の一部に過ぎない。その外に合理的でないものが澤山ある。從つて、不合理なことではあるが、かゝる夢を恥ぢるといふやうなことが起るのである。吾々はかゝる夢を監視するが、その欲望の一つがそれを認めざるを得ないほどに變歪されない形で意識に現はれて來る時には、恥ぢ且つ憤る。否、時としては變歪された夢をもそれを理解してゐるかのやうに恥ぢることがある。「愛の勤務」の夢を見たあの品行方正な老婦人が、その夢の解釋を聞かなかつたに拘らず、それを憤慨したことを考へて見るがよい。從つてこの問題はまだ解決されてゐない。さうして、夢に於ける邪惡の問題を更に研究することによつて、人間性に就いての他の判斷と評價に達することはなほ可能である。

吾々は全體の研究の結果として二つのことを理解し得たが、これは新しい問題と新しい疑問を生ぜしめるに過ぎない。第一に、夢に於ける退行は單に形式だけではなくて、實質に於いてもさうである。それは吾々の思想を原始的な表現樣式に飜譯するばかりでなく、また吾々の原始的心的生活の諸特徵――自我の優越、性的生活の最初の衝動を、否、吾々の昔の知的所有物さへも（若し象徵的關係をさう理解してよいならば）再び眼覺めさせる。第二に、一時は精神を支配し、獨裁してゐたこれらの昔の幼稚的特徵は、今日では無意識內にあると見なくてはならない。さうしてそれに關する吾々の觀念を變更し、擴大しなくてはならない。無意識は最早一時的に潛在するものゝ名ではない。無意識は獨自の欲望と、表現樣式と、それに特有な他の所では作用しない心的機構を有する特殊な一領域

である。けれども夢の解釋によつて暴露された潛在思想はこの領域に屬するものではない。寧ろそれは吾々が覺醒時に於いても考へ得るやうなものである。けれどもそれは矢張り無意識的である。この矛盾は如何に解決さるべきであるか。吾々はこゝで兩者を區別しなくてはならないことを感じ始める。吾々の意識的生活にその起源を有し、それの特徴を分有してゐるところの或もの――吾々はこれを前日の殘留物と呼ぶ――と無意識から來る或ものとは融合して夢を構成する。さうして夢の作業はこの兩要素に對して行はれるのである。この殘留物に與へつゝある無意識の影響が恐らく退行作用の條件となつてゐるのであらう。吾々が更に深く心の領域を探究するまでは、これが夢の本質に就いて持ち得る最も深い見解である。けれども夢の潛在思想の無意識的特質を、幼稚の領域から來てゐる無意識的材料から區別するために、それに別の名稱を與へる時は間もなく來るであらう。

無論吾々はなほ次のやうに問ふことが出來る。睡眠中の吾々の心的活動にかゝる退行を必要ならしめるものは何であるか。何故にその活動は睡眠を擾す心的刺戟を退行することなしには處分し得ないのであるか。さうして若し夢の監視作用のために心的活動は、昔の、今では理解することの出來ない表現樣式に變裝しなくてはならないのならば、昔の、今ではその力を失つてゐる心的衝動、欲望、特徴の再生は何の役に立つのであるか。約言すれば、形式的退行と共に實質的退行の效用は何であるか。これに對する唯一の滿足な答は、これが夢を構成し得る唯一のあり得べき方法である。動的に考へて、夢を起させる刺戟を取り去ることはこれ以外の方法では不可能である、といふのであらう。しかしながら、現在のところでは、吾々はかゝる答を與へる十分な論據を有してゐない。

第十四講　欲望の充足

私はこゝで吾々が今までに辿つて來た道を今一度諸君に思ひ出していたゞきたいと思ふ。吾々は精神分析的方法を用ひて夢の變歪を探究した時に暫くそれを避けようと決心し、夢の本質に就いての決定的な知見を得るために眼を幼兒の夢の方に轉じた。次に、この研究の結果を武器として、吾々は夢の變歪を直接に攻擊した。さうして私は徐々にそれを征服して來たことゝ思つてゐる。けれども今や吾々はこの二途に於いて發見されたことは十分に合一

してゐないと言はざるを得ない。この二つの結果を結合し、相關せしめることが吾々のこれからの仕事である。

夢の本質的特徴は思想を幻覺的經驗に變形するにあることは兩方面から明かにされた。これがどういふ風に行はれるかといふことは中々理解し難いが、これは一般心理學の問題であつて、こゝで取扱はるべきではない。吾々は子供の夢からして夢の作業の目的は、ある欲望を滿足させることによつて、睡眠を擾す心的刺戟を取除くにあることを知つた。變歪された夢に關しては、如何にそれを解釋すべきかを理解し得なかつた間は、これと同じことを言ふことは出來なかつた。けれども變歪された夢も幼兒の夢と同じやうに見ることが出來るであらうとは、最初から豫想してゐた。この豫想は吾々がすべての夢は本質に於いては子供の夢であつて、幼時の材料を使用し、子供の心的衝動と機構をその特色とすることを知つた時に始めて實現された。夢に於ける變歪作用を理解し盡したと感じたならば、吾々は進んで、夢は欲望の充足であるといふ觀念は、變歪された夢にも通用するかどうかを探究しなくてはならない。

吾々は少し前に一聯の夢を解釋したが、その時には欲望充足の問題を少しも勘定に入れなかつた。私はその解釋の際に「夢の目的であると考へられてゐる欲望の充足は一體どうなつたのであるか」といふ疑問が、諸君の心のうちに幾度も思ひ浮べられたことゝ確信する。これは重要な疑問である。何故ならば、これは素人批評家が必ず尋ねる疑問だからである。御承知の通り、人類は知的新事實に對して本能的反感を有してゐる。この新事實が現はれた時には直樣それを最小範圍に縮め、出來るならば一標語に壓搾してしまふのはこの反感の一つの現はれである。「欲望の充足」は夢の新學說の標語となつた。素人は夢は欲望充足であると聞くと、直ぐに「何處に欲望は充足されてゐるか」といふ疑問を出して、それに否定的な答を與へる。彼等は時としては恐怖にまで達する不快を伴ふところの無數の自分の夢のことを直ぐに思ひ浮べて、精神分析の主張する夢の學說は到底あり得べからざることだと考へる。これに對して變歪された夢に於いては、欲望の滿足は明らさまに表現されてゐるものではなくて、探さなくてはならないものである、從つて夢が解釋された後でなければ分るものでないと答へることは容易である。また變歪された夢の奥に潜んでゐる欲望は禁止された、監視作用によつて拒まれた欲望であり、その欲望の存在そのことが變

歪の原因であり、監視作用を受ける理由であることも吾々は知つてゐる。けれども夢を解釋した後でなければ夢に於ける欲望の滿足のことを尋ねてはならないといふことを素人の批評家に理解させることは困難である。彼等はきつとこれを忘れてしまふ。欲望充足の學說に對する彼の反感的態度そのものが本來夢の監視作用の結果に外ならない。彼はそのために監視された夢の欲望を他のものに置き換へ、それに對する嫌惡を示すのである。

無論吾々もまた何故苦痛な內容を持つた夢が澤山にあるのであるか、特に、どうして苦悶の夢は存在するのであるかといふことを說明すべき必要を感ずる。吾々はこゝで始めて夢に於ける情緒の問題に面接するのである。これは特別の研究に値する問題であるが、不幸にして吾々は今それに係つてゐることが出來ない。若し夢が欲望の充足であるならば、苦痛な感情が夢の中に入つて來ることは不可能である筈である。この點に於いては素人批評家は正しいやうに見える。けれどもこれには彼等が看過してゐる三つの複雜な事情がある。

第一に、夢の作業が欲望を滿足させることに十分成功しなかつたがために、潛在思想に於ける苦痛な感情が顯在夢のうちに取殘されるやうなことが起るかも知れない。その時には夢の思想は、これによつて形成されたその夢よりも遙に苦痛なものであることが、分析によつて示されなくてはならないであらう。さうしてこれはあらゆる場合に證明される。その時には夢の作業は、丁度渴の刺戟によつて呼び起された水を飮む夢がその渴を醫し得ないのと同じやうに、その目的を達してゐないことを吾々は容認する。その夢を見た後にもなほ咽喉が乾いてゐて、水を飮むために眼を覺まさなくてはならない。けれどもそれにも拘らずそれは正眞正銘の夢である。その夢はその本質を少しも棄てゝはゐない。"ut desint vires, tamen est laudanda voluntas"（酒を廢止する目的は稱讚すべきだ）と吾々は言はなくてはならない。その志向は少くとも明瞭に認め得られるほどにうまく殘存してゐる。かゝる失敗は決して稀なことではない。夢の作業にとつては內容よりも感情を必要な通りに變化させる方が、遙に困難であるといふこともこの失敗の一理由である。從つて夢の作業の際に潛在思想の苦痛な內容は、欲望を充足させるやうに變形されたが、苦痛な感情は變化されないで持續するといふやうなことが起る。かゝる場合にはその感情はその內容と全然調和しない。そこで吾々の批評家は、夢に於いては有害でない內容でさへも苦痛な感情を伴ふことがある程

までに欲望の充足からは遠いものであると言ふ機會を與へられるのである。この譯の分らない批評に對しては、夢の作業の欲望充足的傾向は正にこの種の夢に於いて最も明瞭である、何故ならば、こゝではそれは孤立して現はれてゐるからである、と吾々は答へる。この謬見は精神病に通じてゐない人は內容と感情との關係を餘りに密接なものであるやうに想像し、從つて內容はそれに伴ふ感情が變化しないでも、變換することがあるといふことを理解し得ないところから生じるのである。

第二の遙かに重要深刻な、しかしながら同じく素人には看過されてゐる要素は次のやうなものである。欲望の滿足はある快樂を齎さなくてはならないであらう。けれども、誰にであるか。無論その欲望を持つてゐる人にである。けれどもその夢を見た人のその欲望に對する態度は、極めて奇妙なものである事を吾々は知つてゐる。彼はそれを却ける。監視する、約言すれば、それを欲しない。從つてその滿足は彼に快樂を齎すことが出來ない。寧ろその反對である。さうしてこの反對——これはなほ說明さるべきものである——が苦悶の形を取ることは經驗の示してゐるところである。夢を見た人は從つて、彼の夢の欲望に對する關係に於いては、ある重要な共通物によつて結びつけられた二人の別々の人のやうなものである。これに就いてはこれ以上に說明する代りに、私は誰も知つてゐるお伽噺を諸君に話さうと思ふ。諸君はこのお伽噺のうちにこれと同じ關係を再び見るであらう。ある妖精が貧しい夫婦に三つだけの望みは滿たしてやると約束した。二人は大層喜んで、その望みを十分考へて選ばうと決心した。けれども妻君は隣りの小屋で料理されてゐる腸詰の匂に誘惑されて、あんな腸詰が二人前欲しいものだと思つた。さうすると、見よ、腸詰はそこにあつた。さうして第一の望みは滿たされたのである。これで男はすつかり機嫌を惡くして、憤慨の餘り、その腸詰が女房の鼻の先にくつつけばよいと思つた。さうするとこれも望み通りになつて、腸詰は何としてもその場所から離れなかつた。これで第二の望みは滿たされたのであるが、これは男の方の望みであつた。女にとつてはこの欲望の滿足は非常に不快なものであつた。諸君はこれから後の話を知つて居られるであらう。彼等は結局夫婦であつたから、その第三の望みは腸詰が女の鼻の先から離れるやうにといふのでなくてはならなかつた。このお伽噺はこの他のところでも色々利用出來ようが、こゝでは、二人が全然一體でないならば、一

人の欲望の滿足が、他の人には極めて不快であり得るといふことを例證する役に立ちさへすればよいのである。

今や苦悶の夢を更によく理解することは困難ではないであらう。吾々は今一つの觀察を利用して、それから種々の觀察によつて支持されてゐる一の假說を立てようと思ふ。その觀察は、苦悶の夢は屢々變歪されない內容を持つてゐる、いはゞ、監視から免れてゐる、といふのである。この種の夢では欲望は屢々變歪されずに滿たされてゐる。さうして、その欲望は言ふまでもなくその本人に受け入れられるものではなくて、却けられるものである。監視の代りに苦悶が現はれてゐるのである。幼兒の夢は許されたる欲望の明らさまな滿足であり、普通の變歪された夢は抑壓された欲望の變裝された滿足であると言ひ得るに對して、苦悶の夢は抑壓された欲望の明らさまな滿足である。苦悶は、抑壓された欲望は監視作用を受けるには餘りに強いことを證明してゐる印であり、監視作用にも拘らずその欲望を充足させた、或は將にさせようとしてゐたことの印である。抑壓された欲望の滿足は、それを監視する方の側にある吾々にとつては、單に苦痛な感情と擯斥の機會となり得るに過ぎないことを吾々は理解することが出來る。その際夢に現はれる苦悶は、若し諸君が定義したいと思ふならば、他の時ならば抑へつけられてしまふ欲望の力が強いために經驗される苦悶であると言つてもよい。何故にこの擯斥が苦悶の形を取るかといふことは、夢の研究だけでは明かにすることは出來ない。言ふまでもなく吾々は苦悶を他の場所で研究しなくてはならない。

苦悶の夢に就いて妥當な假說は、またある程度の變歪を受けた夢にも、恐らく苦悶に近い不快を伴ふ他の種類の不快な夢にも假定することが出來よう。苦悶の夢は普通吾々を眼覺めさせる。抑壓された夢の欲望が監視に打勝つて十分な滿足を得るまでに吾々は急に眼を覺ますのが常である。かゝる場合には夢はその目的を達しないが、しかしながら夢の本質はそれによつて少しも變化されない。吾々は前に夢を吾々の睡眠が擾されないやうに保護する夜番に譬へた。夜番もまた、擾亂や危險を獨力で追拂ふには力が足りないと感じた時には、夢と同じやうに、眠つてゐる人を起さゞるを得ないやうになる。しかしそれにも拘らず、時としては夢が不安を與へ、苦悶に變じ始めた時にさへも、吾々は睡眠を續けることに成功するのである。吾々は眠つたまゝで、「何だ夢か」と言つて、また眠り續ける。

夢の欲望が監視作用に打勝つといふやうなことは何時起るのであるか。この起る條件は夢の欲望の側からも監視作用の側からも滿たされる。ある未知の理由から時には欲望が強くなり過ぎるといふやうなこともあらう。けれども力の比例を變へることに就いては、監視の態度の方に一層屢々責任があるやうに吾々には感じられる。監視の强さは個々の場合によつて異り、その取扱ひの寛嚴は個々の要素によつて異るといふことは既に前に聞いた。今や吾々は監視作用は一般に極めて變じ易いものであつて、同じ不快な要素に對してもいつも同じ嚴しさを示すものではないと附け加へることが出來よう。若し監視作用が自分を倒さうとしてゐる或る夢の欲望に對して無力であると感じるやうなことがあると、その時には監視作用は變歪の代りに自分に殘された最後の武器を使用する。卽ち苦悶が現はれて睡眠を妨げるのである。

こゝで吾々を驚かすことは、何故にこの邪惡な擯斥された欲望は吾々を睡眠中に煩はす爲に丁度夜間に現はれるのであるか、といふことに就いてはまだ何も知つてゐないといふ事である、これの答は恐らく睡眠の本質にまで及ぶ一の假說のうちに見出さるべきであらう。晝間は監視作用の重壓がこれらの欲望を壓迫して、普通それの現はれ出ることを不可能ならしめる。ところが夜間にはこの監視作用は、心的生活の他のすべての興味と同じやうに、睡眠といふたゞ一つの欲望に都合のよいやうに中止される、或は少くとも非常にその力を弱められるらしいのである。從つて禁止された欲望が再び活動し得るのは、監視が夜間には緩められるからである。不眠症に罹つてゐる精神病者のあるものは、不眠は最初は有意的なものであると私に告白した。彼等は自分の夢を恐れて——換言すれば、監視作用の緩くなることを恐れて、敢て眠らうとしなかつたのである。けれどもさうであるからと言つてこの監視作用の減退が決して非常な輕卒を意味しないことは容易に理解することが出來よう。睡眠は吾々の運動機能を減殺する。吾々の邪惡な志向は、たとへ動き始めたとしても、實際的には無害な夢を生ぜしめるだけのことしか出來ない。さうしてかういふ安心な事情があればこそ、眠つてゐる人は「何だ夢か」といふ夜間になされはするが夢の生活には屬してゐないところの極めて合理的な註釋をして、また眠り續けるのである。

第三に、若し諸君が自分の夢の欲望に反對してゐる人は別々ではあるが、而もどうにかして緊密に結びつけられ

た二人の人に似てゐるといふ吾々の見解を思ひ起されるならば、どうして欲望の充足によつて極めて不快なもの、即ち罰を課し得るかといふことを理解することが出來るであらう。こゝでもまた三つの望みのお伽噺が說明の役に立つ。食卓の上の腸詰は第一の人、即ち女の欲望の直接の充足である。彼女の鼻の先の腸詰も第二の人、即ち男の欲望の充足であるが、それは同時に女の馬鹿な欲望に對する罰である。かゝる處罰的傾向は人の心的生活には多數に存してゐる。吾々はこのお伽噺で殘された唯一の望みである所の第三の望の動機を、神經病に見出すであらう。さうして吾々の苦痛な夢の一部分は、この傾向から生じるものであると考へることが出來る。諸君は今やこれでこの有名な欲望の充足に就いては殆んど言ふべきことはないと考へられることであらう。けれども更に詳しく觀察して見ると、諸君の考の誤りであることが分る。夢のあり得べき――二三の著者に從へば、實際にあるところの――多態(このことは後に論ずる)に較べれば、欲望の充足、苦悶の充足、所罰の充足といふこの說明はなほ極めて狹隘なものである。それに苦悶は欲望の正反對であり、正反對は極めて聯合され易いものであり、また、前に言つたやうに、無意識に於いては合致してゐる。更に、處罰もまた一の欲望の、即ち監視してゐる人の欲望の充足である。

從つて全體から見て私は欲望充足說に對する諸君の反駁には少しも讓歩してゐない。けれども吾々は變歪されたどんな夢にでもそれが存在することを實證する義務がある。さうして吾々は確にこの仕事を回避しようとは思はない。吾々は旣に解釋されてゐるところのあの一フロリン半の三枚の下等切符の夢――この夢のことは旣に幾度も話した――に戻らうと思ふ。諸君はまだあの夢を覺えて居られるであらう。ある日夫から彼女より僅に三ヶ月若い友達のエリゼが婚約した話を聞いたある婦人が一つの夢を見た。彼女は夫と一緒に劇場にゐる。棧敷の片側はから空きである。彼女の夫はエリゼとその許婚も芝居を見に來たがつてゐたが、三枚一フロリン半の下等切符しか手に入らなかつたので來ることが出來なかつたと彼女に言ふ。彼女はそれは少しも損ではなかつたと思ふ。吾々はこの夢の思想は餘りに急いで結婚したといふ煩悶と、夫に對する不滿とに關するものであると推測した。この憂鬱がどうして欲望の充足に變形されたか、その痕跡は顯在內容の何處に見出されるかを調べて見よう。「早過ぎる」、「急ぎ過

ぎる」といふ要素は、監視作用によつてその夢から除去されたことは、吾々は既に知つてゐる。空の棧敷はこれを暗示してゐる。三枚で一フロリン半といふ謎のやうな句は今や前よりも、その後に得た象徴作用に就いての知識によつて、よく理解することが出來る。* 三といふ數は一人の男を意味する。そこで吾々はこの顯在要素を容易に「男(夫)を持參金で買ふ」。(私は十倍も立派な夫を私の持參金で買ふことが出來たらうに)と飜譯することが出來る。芝居を見に行くことは明かに結婚を意味してゐる。「切符を早く買ひ過ぎ」は「早く結婚し過ぎる」の代りに用ひられてゐる。けれどもこの代用は欲望充足の作用である。この夢を見た婦人は自分の早婚のことを、彼女が友達の婚約の話を聞いた日ほどに何時も不滿に思つてゐたのではなかつた。當時彼女はその結婚を誇り、彼女の友達よりも幸福であると思つてゐた。無邪氣な娘は、婚約すると間もなく、今まで禁じられてゐた芝居を見に行つたり、何でも彼でも見たりすることが出來るやうになることの喜びを屢々洩らすさうである。こゝに明瞭に現はれてゐる好觀癖或は好奇心は確に最初は性的好觀癖であつて、性的生活、特に兩親の性的生活に向けられたもので、それから娘に早く結婚したがらせる誘因となつたのである。かういふ風にして觀劇は結婚してゐるといふことの象徴になる。從つて早婚に就いての彼女の現在の懊惱は、その早婚が好觀癖を滿足させたが故に、欲望の滿足であつた當時への復歸である。さうしてこの昔の欲望衝動に導かれて觀劇を結婚に代用したのである。

*この子供のない婦人の夢に現はれた3といふ數には今一つの解釋があり得るが、この分析はそれを例證するやうな材料を齎さなかつたから、こゝでは語らないことにする。

隱された欲望を實證するために選んだこの實例は最も適當なものではないと言へようが、吾々は他の變歪された夢を取扱ふ時にもこれと似た方法を使用せざるを得ないであらう。私は今こゝでそれを爲し得ないから、單にかゝる方法によれば必ず成功するであらうといふ確信を述べて置くに止めようと思ふ。けれども私はこゝで欲望充足說を今少し詳說しようと思ふ。經驗の敎へるところによると、これは夢の全學說のうちで最も危險な一つであつて、多くの反駁や誤解を受けてゐる。その上、諸君は恐らく夢は滿足された欲望であることもあればその反對、即ち實現された苦悶或は處罰である事もあるといふ私の言葉によつて、私は既に一歩讓歩したものであるとの印象をまだ受

けてゐて、今が私に、これ以上の制限を强要する好機會であると考へて居られることであらう。私はまた私自身には明白であるらしい事物を餘りに簡單に、從つて十分に信ぜしめることが出來ないやうな風に表現したと言つて非難されてゐる。

誰でも夢を解釋してこゝまで進んで來て、この點までの吾々の結論を悉く容認した時、屢々この欲望充足の問題のところで立止つて尋ねる。「夢はどれでも一つの意味を有するものであり、その意味は精神分析法によつて發見され得るものであることは容認するとしても、何故に夢はあらゆる證據に反して、常に欲望充足といふ公式に押し込められなくてはならないのであるか。何故にこの夜間の思想の意味は晝間の思想の意味のやうに多樣であつて、時には夢は欲望の充足であり、時には、あなた自身が言はれるやうに、その反對、即ち恐怖の實現であり、また時には決心、警戒、養否を決するための熟慮、或は非難、良心の囁き、成すべき仕事に對する準備、その他の表現であつてはならないのか。何故に何時も欲望と、精々のところ、それの反對ばかりを表現するのであるか。」

この點に就いての意見の相異も、他のすべての點で一致しさへすれば、大したことではない、夢の意味とそれを認識する方法とを發見したゞけで十分ではないか、この意味を餘り嚴密に定めようとすれば却つて逆戻りしてしまふであらうと人は思ふかも知れない。けれどもさうではない。この點に就いての誤解は夢に就いての吾々の知識の本質に觸れて、精神病を理解するに當つてこの知識が有する價値を脅かす。その上、商賣上ではその價値を有する「如才なさ」は、科學的な仕事には適當でないばかりでなく、寧ろ有害である。

夢は何故に多くの意味を持つてならないのかといふ質問に對する私の第一の答も、かういふ場合に普通なされるのと同じものである。私は何故さうであつてはならないのかは知らない。私はさうであるとしても少しも反對しようとは思はない。私にはさうであつても構はない。たゞ夢に就いてのこの廣汎な、便利な見解には一寸した障碍がある——即ち實際にはさうでないのである。第二に夢は多樣な思想樣式や知的作用に對應するといふ假定は決して私自身に珍らしい考へではないといふことを高調したい。嘗て私は三晩續いて現はれたがその後は一度も現れなかつた或る病人の夢を記錄して、この夢は實行されてから後は再び現はれる必要のなくなつた決心を表現してゐる

と說明したことがある。もつと後には告白を現はしてゐる夢を發表した。それならばどうして私は夢は常にたゞ欲望の充足に外ならないといふ矛盾した主張をなし得るのであるか。

私は夢に就いての吾々の努力の成果を、臺なしにしてしまふかも知れないところの馬鹿げた誤解、夢を潜在思想と混合して、後者にのみ屬することを前者に就いて言はうとするやうな誤解を許して置きたくないから、これをなすのである。夢は一寸前に列擧したところの思想樣式、決心、警戒、反省、行爲に關するある問題を解かうとする準備と試み、その他をすべて表現し、それらによつて置き換へられ得ると見るのは無論全然正しい。けれども若し諸君が正しく注視されるならば、これらはたゞ夢に變形されてゐる潜在思想にのみ通用するものであることを認められるであらう。諸君は夢の解釋によつて人類の無意識的思想は、かゝる決心、準備、反省等に關係のあるものであつて、夢はこれを材料として夢の作業によつて構成されるものであることを知つて居られる。若し諸君がその解釋の時に夢の作業に興味を持たないで、人類の無意識的思想過程に非常に興味を持つて居られるならば、夢の作業のことは無視して、夢は警戒、決心、その他を表現すると、實際的には全然正しいことを、述べられるであらう。精神分析的仕事に於いてもこれと同じことが屢々なされる。大抵の場合、吾々は夢の形式を打毀して夢を生ぜしめた潜在思想をその代りに置かうと努めるものである。

かうして吾々は潜在思想の眞相を探らうとして全然偶然に、前に擧げた極めて複雜な心的作用は無意識的に行はれ得る、といふ驚くべき、また途方もない結論に達したのである。

けれども少し後戻りして言へば、夢は種々のこれらの思想樣式の表現であるといふ諸君の見解は、若し諸君が省略された表現樣式を使用してゐるのであるといふことをはつきりと知つて居られるならば、また諸君の言はれる多樣性が夢の本質の一部分であると信じて居られないならば、全く正當なものである。「夢」といふ語は顯在夢、即ち夢の作業の所産の意味か或は精々のところその作業自體、即ち潜在思想から顯在夢を構成する過程の意味かに用ひられなくてはならない。この語をこれ以外の意味に用ひるのは觀念の混亂であつて、たゞ有害なばかりである。若し諸君の主張が夢の背後にある潜在思想に關するものならば、明かにさう言つて、どうでも取れるやうな表現樣式

を用ひて夢の問題を曖昧にしないがよい。潜在思想は夢の作業によつて顯在夢に變形されるところの材料である。何故に諸君は常に材料とその材料を取扱ふ作業とを混同しようとされるのであるか。若しさうされるならば、諸君はその作業の所産だけを知つてゐる、何處からそれが來るか、どうしてそれが形成されるかといふことを説明し得ない人々よりも、何處が優つて居られるのであるか。

夢に於ける唯一の本質的なものは思想の材料にはたらきかける夢の作業である。吾々はこの作業を、たとへ或る實際的狀態に於いては閑却してもよいとしても、理論に於いて無視する權利は少しも持つてゐない。更に、分析的觀察の示すところによると、夢の作業は單に潜在思想を前に言つた古代的或は退行的表現樣式に飜譯するだけに止まらないで、晝間の潜在思想には屬してゐないが、夢を形成せしめる本當の動力であるところの或物を必ずそれに附加する。この不可缺の構成要素もまた無意識的な欲望であつて、これを滿足させるために夢の內容は變形されるのである。從つて、若し諸君が諸君に理解の出來る思想だけを考察されるならば、夢は譯の分るもの——警戒、決心、準備その他であるかも知れない。けれども夢はまた常に或る無意識的欲望の充足である。若し諸君が夢を夢の作業の結果として考へられるならば、夢はたゞこの充足だけである。從つて夢は單なる決心、警戒の表現ではなくて、決心その他が無意識的欲望の助けによつて古代的表現樣式に飜譯され、この欲望を充足させるやうな風に變形されるのである。欲望の充足といふこの一つの特質だけが不變なものであつて、他の特質は變化することがある。夢はまたそれ自體が一の欲望であり得る。さればこそ夢は晝間からの潜在的欲望を無意識的欲望の助けを借りて滿足されたものとして表現するのである。

このことはすべて私自身には極めて明瞭である。けれども私は諸君にも同樣に理解の出來るやうになし得たかどうかは知らない。またこれを諸君に證明することも困難である。何故ならば、一方に於いて、證明するためには多數の夢の周到な分析によつて得られた證據を必要とするし、他方では、夢に就いての吾々の見解のうちで最も至難な、最も重要なこの點を得心の行くやうに表現するには、吾々がまだ觸れてゐない諸考察に論及しなくてはならないからである。一切の現象が密接な關聯を有してゐる場合に、一現象の性質を、それと類似の性質を持つた他の諸

現象を研究することなしに、深く究め得ると考へることは出來まい。吾々は夢と同系の現象、精神病的症候に就いてはまだ何も知らないのであるから、こゝでもまた今までに得たゞけのことで辛抱しなくてはならない。私は今一つの例を説明して、新しい考察に入らうと思ふ。

今一度あの三枚一フロリン半の切符の夢を例に取らう。私は最初この例を選ぶに當つて何等後のことを考へてゐなかつたと斷言することが出來る。諸君はこの夢の潛在思想を知つて居られる。友達が婚約したと聞いた時に生じたところの早く結婚し過ぎたといふ懊惱である。夫の價値の輕視と、待つてさへ居ればもつと立派な夫を持てたらうにといふ觀念である。吾々はまたこの思想から夢を造り上げたところの欲望は、芝居を見に行くことが出來るといふ好觀癖――恐らくは最後に結婚後に起ることを知りたいといふ昔の好奇心から來てゐるところの欲望であつた事も既に知つてゐる。子供の時には誰も知つてゐるやうに、普通兩親の性的生活に向けられるこの好奇心は、從つて幼時の衝動であり、それが後年の生活にも存在する時には、その根を幼時に有してゐる。けれども夢を見た前の日に聞いた話はこの好觀癖を喚起す原因とはならなかつた。それは懊惱と後悔を喚起したゞけである。この欲望衝動は最初はこの潛在思想とは關聯してゐなかつたのであるから、これを少くも考慮に入れなくても、分析の際に夢の解釋のこれらの結果を利用する事が出來たであらう。けれどもまた懊惱はそれだけでは夢を生ぜしめる力がなかつた。「こんなに早く結婚するのは馬鹿げてゐた」といふ思想からは、若しその思想が結婚すれば起る事を、最後には見たいといふ幼時の欲望を眼覺めさせなかつたならば、夢は生じなかつたであらう。從つてこの欲望が觀劇を結婚の代りに用ひてこの夢の內容を形成して、それを幼時の欲望「それで私は今まで見ることの許されなかつた芝居に行つたり、あらゆる物を見たりすることが出來るが、あなたは出來ない。私は結婚してゐるが、あなたは待たなくてはならない」といふ欲望の充足の形式で現はしたのである。かういふ風にして實際の事情はその反對に變形され、昔の勝利が最近の敗北に代用されてゐる。さうしてその際に好觀癖の滿足と利己的競爭心の滿足とがうまく混和されてゐる。さて夢の中では彼女は實際に劇場の內に居るのに、彼女の友達は入場出來ないのであるから、この顯在夢の內容を決定してゐるものはこの後者の滿足である。背後に潛在思想を今もなほ隱してゐるあの部分の夢の內

容を修正して、不適當な、理解し難い形式に組立てたものはこの滿足である。夢の解釋の仕事は何よりも先づ單に欲望充足の表現に使用されてゐるものを除外して、苦痛な潜在思想を再び構成するにある。

私がこゝで述べようとする一考察は、諸君の注意を今明かにされたこれらの潜在思想に向けさせる事を目的としてゐる。私が諸君に忘れないやうにお願ひしたい事は、第一に、その思想は夢を見た本人に意識されてないといふことであり、第二に、その思想は全く合理的な統一のあるものであつて、從つて吾々はそれを夢を生ぜしめた刺戟に對する理解し得べき反應であると考へることが出來るといふことであり、第三に、それは心的刺戟としての或は知的作用としての價値を持ち得るといふことである。私もこの思想を以前よりも一層嚴密に定義して「前日からの殘留物」と呼ばうと思ふ。夢を見た人はこれを知つてゐることもあらうし、ゐないこともあらう。そこで私は「殘留物」と夢の潜在思想とを區別して、今までずつとして來たやうに、夢の解釋によつて知り得るすべてのものを「夢の潜在思想」と呼び、「前日からの殘留物」はその潜在思想の一部分に過ぎないとしようと思ふ。從つて吾々の見解は、前日からの殘留物に何物かゞ、それもまた無意識に屬する強い、しかしながら抑壓された欲望が附加されてゐる、さうしてこれらのみが夢の形成を可能ならしめるのである、といふのである。「殘留物」にはたらきかける欲望衝動が、吾々の覺醒生活から見て最早合理的で理解し得るやうには思はれないところの、あの部分の潜在思想を生ぜしめるのである。

殘留物と無意識的欲望との關係を例證するために私は前に一つの比喩を用ひたが、こゝでもこの比喩を繰返すのが一番よいと思ふ。あらゆる企業には經費を支出する資本家と、その事業に就いての知識を有し、それを經營し得る企業家とが必要である。さて夢の構成に於いては資本家の役割を演じるものは常にたゞ無意識的欲望のみである。それは夢に必要な資本であるところの心的勢力を供給する。企業家はこの資本を如何に使用すべきかを決定する前日からの殘留物である。資本家自身がその事業に就いての觀念と特殊知識を持ち、企業家自身が資本を持つことは無論可能である。このことは實際の事情を單純にはするがその理論を困難ならしめる。經濟學に於いては吾々は同一人をその兩能力に從つて資本家と企業家とに區別する。さうしてこの區別によつて吾々はこの比喩をなさしめた

ところの根本事情に立戻る。卽ちこれと同じ區別は夢の構成にも見出されるのである。これ以上のことは諸君自ら考へていたゞきたい。

吾々はこゝでこれ以上に進むことは出來ない。何故ならば諸君は多分既に長い間ある意見を述べたいと思つて居られるであらうし、またそれは聞く價値があるからである。諸君は尋ねられるであらう。所謂『殘留物』は實際に夢の形成に不可缺な無意識的欲望と同じ意味に於いて無意識的であるか。」諸君の疑念は正當である。これは全體のうちで最も注意すべき點なのである。兩者は同じ意味に於いて無意識的ではない。夢の欲望は幼時にその起源を有し、特殊な機構を與へられてゐる他の型の無意識である。從つて兩型の無意識に別々の名を與へて區別すれば非常に便利ではあるが、吾々が精神病の諸現象に通ずるやうになるまでは、それを差控へようと思ふ。若しどちらかの無意識の存在が既に空想的であると非難されてゐるとするならば、吾々が二種の無意識を假定することによつてこの問題は始めて解決されると告げるならば、人々は何と言ふであらうか。

吾々はこれで止めようと思ふ。こゝでもまた諸君は不完全な說明を聞いたのである。けれどもこの知識は吾々自身によつて、或は吾々の後に來る人々によつて、更に深められるであらうと考へるのは希望に滿ちたことではなからうか。さうして吾々自身が新しい、驚くべきことを十分に學んではゐないか。

第十五講　不確實な諸點と批評

吾々は夢の領域を立去る前に、吾々が今までに得て來た新しい觀念や見解に關して生じる最も普通な疑問や不確實な點に就いて、論じて置きたいと思ふ。注意深い諸君はこの種の二三の材料を自ら集められたことであらう。

(一)吾々の夢の解釋の仕事には、その方法を嚴守してもなほ顯在夢を潛在思想に確實に飜譯する事を不可能ならしめるほどに、多くの不確實な點が存してゐるといふ印象を諸君は受けて居られるかも知れない。第一に、象徵として使用された事物は、さういふ風に使用される事によつてそれ自體でなくなるといふ事はないのであるから、人は夢のある要素をその通りの意味に理解すべきであるか、或は象徵として理解すべきであるかを知らない。若しこれを

決定すべき何等の客觀的證據がないとすれば、その點の解釋は解釋者の獨斷に委されるであらうと諸君は言ふであらう。第二に、夢の作業に於いては、反對の事物は一致するが故に、ある夢の要素は積極的意味に解釋さるべきか消極的意味に解釋さるべきか、それ自體として或はその反對物として理解さるべきかといふことが常に明確でない。これは解釋者に獨斷せしめるも一つの機會を與へるものである。第三に、夢ではあらゆる種類の置換が屢々用ひられるから、解釋者は自由に思ふ場所で置換が行はれたと假定することが出來る。最後に、そのなされた夢の解釋があり得べき唯一のものであることが確實なことは稀であつて、その同じ夢の十分に容認し得べき他の解釋を見落す危險があると聞いたといふことを諸君は指摘されるであらう。以上の觀察によつて、諸君は解釋者の獨斷は客觀的確實性を持つてゐない範圍にまで及ぶものであると結論されるであらう。或はまたその誤謬は夢の方に存するものではなくて、吾々の見解と假定とに存する何かの誤謬が、吾々の夢の解釋を不滿足なものならしめるのであると考へることも出來よう。

諸君の言は確に正しい。けれども私は諸君の二つの結論、即ち吾々の行ふ夢の解釋は解釋者の獨斷に委せられたものであるといふこと、またその結果の不滿足は吾々の方法の正しさに疑問を抱かしめるといふことを立證しはしないと私は思ふ。若し諸君が解釋者の獨斷と言ふ代りに彼の熟練、彼の經驗、彼の理解と言はれるならば、私は諸君と同意見である。この種の個人的要素は無論缺くべからざるもので、解釋が困難な時に於いて特にさうである。けれどもこれは他の科學的仕事に於いても同樣である。ある方法をある人は他の人よりも下手に用ひたり、上手に適用したりすることはどうにも仕方がない。例へば、象徵の解釋の際に受けた獨斷的であるとの印象は、通例夢の思想相互の關係、夢と夢を見た人の生活及び夢を見た當時の全心的狀態との關係は、唯一つの解釋だけが可能であつて、それ以外の解釋は無用であることを示してゐることを考へ合せて見れば消失するであらう。夢の解釋の不完全な性質は吾々の假定が誤謬であるところから生ずるといふ結論は、しかしながら、夢の曖昧或は不明瞭が寧ろ夢に必然豫期すべき性質であることを證明する時に、その力を失ふであらう。

吾々はこゝで夢の作業は夢の思想を原始的な象形文字に似た、表現樣式に飜譯するにあると言つたことを思ひ出

したいと思ふ。さてかゝる原始的表現體系は必然に曖昧と不明瞭とを伴ふものであるが、さうであるからと言つて吾々はそれらの實用性に疑惑を挾むのは正當でない。夢の作業に於いて反對の事物が一致するといふことは、最古の言語に於ける所謂「原始語の反對意味」と似てゐることは諸君の知るところである。言語學者のR・アベル（一八八四年）――彼から吾々はこの見解を得たのである――は、人がこの種の多義語で他人に話をしたからと言つて、その話が曖昧であつたと考へてはならないと言つた。その反對に、語調、身振、前後の關係はその反對の意味のどちらを傳へようとしてゐるかといふことに、少しの疑問も殘させなかつたのである。身振を示すことの出來ない文字の場合には、その代りに、發音を示すためのではない繪畫的記號が附加された。例へば、象形文字の "ken" が「強い」或は「弱い」といふ意味を持つに從つて、小さな直立してゐる人や蹲つてゐる人を描いた。從つて發音と記號との多義性にも拘らず誤解されることはなかつた。

古代的表現體系、例へば古代語で書かれた書物には、今日吾々の著作の中にあれば到底我慢の出來ないやうな不明瞭なところが多數に見出される。例へば多くのセミ族の著作に於いてはたゞ子音だけが書かれてある。省略された母音はそれを讀む人が彼の知識によつて、また前後の關係から、補はなくてはならない。全然同しではないが、象徵文字もこれに似た原則に從つてゐる。古代エジプト語の發音が少しも知られてゐないのはこのためである。エジプト人の聖書にはこの外にも一つの不明瞭がある。例へば、その繪を右から左へ並べるか、左から右へ並べるかは書く人の自由に委されてゐる。それを讀み得るためにはそこに書かれた人、鳥等の顏の方向に從はなくてはならないことを覺えてゐなくてはならない。けれども筆者はまた繪を縱に書いてもよかつた。さうして小さい物體に書き込む時には、釣合や書き込むことの出來る場所やを顧慮して記號の順序をもつと他の風にする事もあつた。象形文字で書かれた文書で最も困ることは、恐らく文字の切れ場所の分らないことである。繪は皆同じ間隔を置いて頁の上に描かれてあるので、ある記號が前からの續きであるか、或は新しい文字の發端であるかを知ることは一般に不可能である。ペルシヤの楔形文字に於いては、これに反して、斜に書かれた楔が句讀點として用ひられてゐる。

極めて古くからあり、今もなほ四億の人々に用ひられてゐる言語と文字は支那語である。私がこの國語を少しで

も理解してゐると思はれては困る。私は夢に現はれる不明瞭に類似したものがそのうちにあるかどうかを知りたいと思つて調べて見たゞけである。さうして私のこの期待は裏切られなかつた。支那語は吾々を驚かすやうな不明瞭に滿ちてゐる。支那語は誰も知つてゐるやうに多數の字音から成り立つてゐるもので、その字音は單獨で發音し、或は他のものと結合して發音される。ある主要な方言はこの種の音を四百ばかり持つてゐる。さてこの方言の單語は四千ばかりあるのであるから各音が平均十の――もつと少いものも多いものもある――意味を持つてゐることは明かである。從つてこの曖昧を避けるためにあらゆる手段が工夫されてゐる。何故ならば前後の關係からだけでは話手がその綴字の十の意味のうちのどれを對者に傳へようとしてゐるかを示すことが出來ないからである。この手段のうちには二音を結合して一語にしたり、四つの異つた「音」でこの綴字を話したりするのがある。吾々の比喩にとつて更に興味のあることは、この國語には文法が無いと言つてもよいことである。ある一綴語が名詞であるか、動詞であるか、形容詞であるかを言ふことは不可能である。また性、數、格、時、法を示す語の變化もない。從つてこの國語は、いはゞ、粗材から成り立つてゐる。丁度吾々の思想語が夢の作業によつてその關係の表現を省略されてその粗材に分解されるやうに、支那語に不明瞭な點がある場合にはその意味の決定は聽者に委され、聽者は前後の關係によつてそれを定めるのである。私は一つの支那の諺を書き留めて置いたが、これを逐字的に飜譯すれば、“Wenig was sehen, viel was wunderbar” となる。これを理解するのは難しくない。「見聞の少い人は多くのことに驚く」とも取れゝば、「見聞の少い人にとつては驚くべき物が多い」とも取れる。たゞ文法の構造だけが異つてゐるこの二つの飜譯のどちらを選ぶかは、無論大した問題ではない。これらの不明確にも拘らず、吾々は支那語は極めて優れた表現の手段であることを斷言する。從つて不明確は必ずしも曖昧を導き出すものでないことは明白である。

さて、事態は夢の表現樣式の方がこれらの古代の言葉や文字よりも遙に不利であることを吾々は確に容認しなくてはならない。何故ならば後者は元來思想傳達の手段として工夫されたものである。即ち、それに用ひられる方法や手段は何であつても、理解されることをその目的としてゐるからである。けれども夢には丁度この性質が缺如し

てゐる。夢の目的は誰かに何かを語ることではない。夢は思想傳達の手段ではない。その反對に理解されないでゐるといふのが重要なことなのである。從つて夢に於いて多くの曖昧な點や不明確な點が決定され得ないことが分つたとしても、驚いたり思ひ誤つたりしてはならない。この比較によつて分つた唯一の確實な點は、人々が吾々の夢の解釋の精確でないことの證據としたがつてゐるところの不明確性は、寧ろあらゆる原始的表現體系の普通の特色である、といふことである。

夢は實際にどの程度にまで理解され得るかといふことは、たゞ練習と經驗によつてのみ定めることが出來る。私は非常に廣い範圍にまで可能であると思ふ。さうして適當に敎へられた分析家の結果を比較すれば、私の見解は確證される。俗人の聽衆は、科學的社會に於いてさへも、科學的事業が困難や不確實な點に遭遇した時には、卓越せる懷疑說を振廻すのを喜ぶことは人のよく知るところである。私はこれは間違つてゐると思ふ。諸君は恐らくこれと同じことがバビロン・アッシリヤの碑文が解讀された當時にも起つたことを少しも知つて居られないであらう。一時輿論は、楔形文字を解讀してゐる人々は空想家であり、その全業蹟は「欺詐」であるとまで絕叫したことがあつた。けれども一八五七年に王立東洋協會は決定的な試驗をした。協會は最も有名な四人の楔形文字學者――ロウリンソン、ヒンクス、フォクス・タルボート、オパート――に最近發見された碑文を別々に飜譯し、それを密封して送ることを提言した。さうして、この四つの飜譯によつて、これらの飜譯は今までの成果に對する信用と未來の進步に對する確信とを十分保證するほどまでに一致してゐると公表することが出來た。素人の知識階級の嘲笑は徐々に消滅して、楔形文書を讀むことの確さはそれ以來著しく增進した。

（二）第二の反對意見は諸君もきつと受けられたことゝ思はれる印象、即ち、吾々の夢の解釋の方法でなされた解決の多數は、見掛倒しの、索强附會な、從つて無理な、或は滑稽で愚弄的でさへあるやうに見えるといふ印象と密接な關係を持つてゐる。かういふ批評は幾度となくなされるものであるから、私は最近に聞いたのを手當り次第に擧げて見よう。それはかうである。あの自由なスイスで最近或る師範學校長は精神分析學に興味を持つてゐるといふ理由で辭職を求められた。彼は抗辯した。さうしてバーナーの一新聞はこの事件に就いての學校當局の決議を發表

した。私はその記事から精神分析に關係のある部分を少し引用しようと思ふ。「更に、チューリッヒのプフイスター博士の該書に擧げられた多數の實例の曲解と虚構とは驚くべきものがある……一師範學校の校長が輕卒にもこれらの見解とかゝる見掛倒しの證據を受入れるとは實に驚くべきことである。」この文章は「冷靜なる判斷者」の最後の意見ださうである。私は寧ろこの「冷靜」が虚構であると言ひたい。吾々は多少の反省と事物に就いての知識とがまた「冷靜な判斷」に少しも害を齎すものでないといふことを期待して、この發表を今少し詳しく調べて見よう。

誰もが彼の第一印象によつて如何に急速に且つ間違ひなく深遠な心理學の難問題に判斷を下し得るかといふことを見るのは實に愉快なことである。その心理學の解釋は彼には虚構であり、無理であるやうに見える。彼の氣に入らない。從つてそれは誤りであり、その索强附會の解釋は何の役にも立たないものである。かゝる批評家はその解釋がさういふ風に見えるには立派な理由があり得るといふことは考へても見ない。この立派な理由は何であるかといふ疑問には觸れようともしない。

この批評を生ぜしめたものは、主として諸君が夢の監視作用の最有力な手段であることを知つてゐる所の轉移作用である。この轉移作用の助けを借りて、監視作用は吾々が諷示と呼んでゐるところの代用化を行ふのである。けれどもこの諷示を諷示として認めることは容易でなく、その諷示から遡つて原思想を發見することも容易でない。それは原思想とは極めて奇妙な、異常に外面的な聯想によつて結びつけられてゐる。けれどもこれはすべて隱蔽さるべき事物、隱蔽しようとする事物に關聯してゐる。さうしてこれが正に夢の監視作用の目的なのである。けれども吾々は隱匿された何かを、それのありさうな場所を探せば見出すことが出來ると豫期してはならない。今日の國境監視の官憲は、この點ではあのスイスの學校當局者よりも遙かに悧巧である。彼等は文書や備忘錄を探し出さうとする時には、紙挾や本箱を調べるだけでは滿足しないで、スパイや密賣者は嚴禁品を最も見つけ出し難い、確にそんなものゝありさうもない場所に、例へば、靴の二重底の間に隱してゐるかも知れないと考へる。若し隱匿品がそこに見出されたとすれば、それは確に「無理に」取出されたのであるが、それでも矢張り極めて立派な「見つけ物」である。

吾々が夢の潛在思想とそれの顯在物との間の極めて緣の遠い、異常な、時には滑稽とも愚弄的とも見える關聯が可能であると認めるのは、通例自分ではその意味を見出し得なかつた多くの實例に就いての豐富な經驗によつてゞある。自分だけの努力ではかゝる解釋に達することは屢々不可能である。正氣の人ならばこの關聯を推測することが出來ないであらう。その夢を見た人は直接聯想によつて――彼がそれをなし得るのはこの代用化は彼によつて行はれたからである――直ちにそれを吾々に飜譯して見せるか、或はそれを解くのに特別の鋭さは要らないで、どうしても解けざるを得ないほどに多くの材料を供給する。若し夢を見た人がこの二つの方法のどちらかで吾々を助けないならば、その顯在要素は永久に理解される事はない。私は最近に起つたこの種の例をも一つ擧げさせていたゞきたいと思ふ。私の患者の一人は治療中に父を喪つた。それ以來彼女は父の夢を見るやうな機會を少しも逃さなかつた。ある夢で彼女の父は外のことゝは少しも關係なしに現はれて「十一時十五分だ、十一時半だ、十二時十五分前だ」と言つた。この奇妙な事に就いて彼女のなし得た聯想は、彼女の父は大きくなつた息子達が晝食の時間を守れば非常に喜んだといふ事だけであつた。これは確にこの夢の要素とは關係はあるが、これによつてその起源を見出す事は出來なかつた。けれども當時の治療の狀態から考へて、彼等が熱愛し尊敬してゐた父に對する周到に抑壓された反抗が、この夢にはたらいてはゐないかといふ十分根據のある疑念が生じた。彼女は一見この夢とは何の關係もないやうな聯想を續けて、昨日心理學的問題に就いての長い論爭を聞いたが、その時一人の親戚が「吾々皆のうちには原始人（Urmensch）が生き續けてゐる」と言つたと語つた。今が吾々は理解出來る。このことは彼女の死んだ父が生き續けてゐると考へる絕好の機會を彼女に與へたのである。そこで彼女は彼を時計番人（Uhrmensch-en）にして、正午までの十五分づゝの時を告げさせたのである。

諸君はこの例に於ける洒落を否定することは出來ないであらう。さうして實際夢を見た人の洒落が解釋者の洒落であると間違へられることは屢々あるのである。この外にも洒落と見てよいか夢と見てよいか容易に決定し得ないやうな例もある。けれども諸君はこれと同じやうな疑惑は、ある言ひ損ひの場合にも生じたことを記憶して居られるであらう。ある人は彼と彼の伯父とが、伯父の自動車（Auto-mobile）の中に坐つてゐて、伯父が彼に接吻した

夢を見たと語り、直ちに自分でその解釋を附け加へた。即ちその夢は自己色情（auto-erotism）――リビドー說に於いて、相手なしに得られる性的滿足の意味に用ひられてゐる語である――を意味してゐると解釋した。さてこの人は吾々を茶化して、ふと思ひ浮んだ洒落を夢だと伴つたのであらうか。私はさうでないと思ふ。彼は實際その夢を見たのである。けれども夢と洒落とのこの紛はしい類似は何處から來たのであるか。一時この疑問はいくらか私を脇道に逸らせたことがあつた。何故ならばそれには洒落そのものを徹底的に研究する必要があつたからである。この研究によつて私は洒落は次のやうな風に發生するのであると結論した。即ち、以前に意識された一思想過程が一時無意識的加工に委ねられ、そこから洒落の形で現はれて來るのである。この無意識の影響の下にある間に、それはそこにはたらいてゐる機構の作用、即ち壓縮作用と置換作用を受ける。換言すれば、吾々が夢の作業に見出すのと同じ過程の作用を受ける。時として夢と洒落との間に見出されるこの類似はこの共通性に基いてゐる。けれども故意でない「夢の洒落」は普通の洒落のやうには吾々を娯ませない。何故さうであるかといふことは洒落を更に深く研究すれば分るであらう。「夢の洒落」は吾々には下手な洒落のやうに思はれる。それは吾々を笑はせない。吾々は何とも感じない。

さてこれは古い夢の解釋法の辿つた道である。これは吾々に多くの無用なものと共に吾々の解釋し得なかつた多くの價値ある解釋の實例を殘して置いた。私はこゝで歷史的意味のある一つの夢を話さうと思ふ。これはアレキサンダー大王の見た夢で、プルタークとダルチスのアルテミドラスによつてほんの少しばかり異つた言葉で物語られてゐる。大王が頑強に抵抗してゐるチルスの町を包圍してゐた時、（紀元前三二二年）ある晩森の神（Satyr）の踊つてゐる夢を見た。軍に從つてゐた占夢者のアリスタンドロスは“Satyros”といふ語を σὰ Τύρος（チルスは汝のものなり）に分割してこの夢を解釋し、これによつて大王がこの町を征服すべきことを豫言した。この解釋はアレキサンダーにその包圍を續ける決心をさせ、町は終に降伏した。この解釋はこぢつけのやうに見えるが、確に正しい解釋であつた。

（三）夢に就いての吾々の見解に對して、精神分析家として長い間夢の解釋に從事してゐるやうな人々さへも反對

の聲をあげてゐるといふ事を聞かれたならば、諸君は變に思はれるであらう、といふ事を私は十分想像することが出來る。實際誤謬へのかゝる絶好の機會が利用されないであつたならばそれこそ不思議であらう。事實觀念の混亂と不當な一般化によつて誤つてゐる點に於いては、夢の醫學的見解にも劣らない多くの主張がなされてゐる。これらの主張の一つは、諸君の既に知つて居られるやうに、夢はその瞬間の事情に順應しようとする企と未來の諸問題の解決とに關係のあるものである、換言すれば、「未來的傾向」を追ふものである。といふのである。(A・メーデル)この主張は夢と夢の潛在思想との混同に基くものであり、從つて夢の作業の過程を看過してゐるものであることは既に實證した。「未來的傾向」が夢の潛在思想の屬してゐる無意識的心的活動の特色を意味するならば、その主張は新しいものでもなく、また全部を盡してゐるものでもない。蓋し無意識的心的活動は未來に對する準備以外の多くのことにも從つてゐるからである。あらゆる夢の背後には「死の文言」が見られるといふ斷言にはもつと酷い混同があるやうに思はれる。私はこの説が言はうとしてゐるところは何であるかを十分には知らないけれども、その背後に於いて夢と夢を見た人の全人格とが混同されてゐるのではないかと思ふ。

あらゆる夢はこれを二通りに解釋出來る、その一つは吾々が述べてゐる所謂精神分析的解釋であり、他は本能的傾向を無視し、それよりも高度の心的機能の表現をその目的とする所謂「靈的」解釋である、とする主張(M・ジルベラー)は少數の顯著な實例を不當に一般化したものである。この種の夢は確にある。けれどもこの見解は多數の夢に及ぼすことさへも出來ないであらう。これらのことを聞いた後では、夢は兩性的に、男性的女性的と呼んでもよい二傾向の結合として解釋さるべきであるといふ主張(A・アドラー)は、諸君には全然理解し難いものと思はれるであらう。この種の夢も無論存在する。さうしてその構造があるヒステリー的症候に似てゐることは後に述べよう。私が夢の新しい一般的特質に就いてのこれらの諸發見のことを述べるのは、諸君にこれらの說に對して警戒してもらひたいからである、少くともそれらに對する私の意見を明白にして置くためである。

(四)一時夢の研究の客觀的價値は、精神分析的治療を受けた患者は、あるものは主として性的衝動の夢を見、あるものは支配衝動の、更に他のものは再生の夢(W・ステッケル)をさへ見て、彼等の醫者の奉じてゐる理論にそ

の夢の內容を適合せしめるのであるといふ觀察によつて疑問視されたことがある。しかしながら人々は彼等の夢に影響を及ぼす精神分析的治療といふやうなものがなかつた前から旣に夢を見てゐること、また今治療を受けてゐる患者もまた治療前に夢を見慣れてゐたことを考へれば、この觀察は決して有力なものではない。この新觀察と思はれてゐる事實が自明のことであり、夢の學說の結果でないことは直ぐ分る。夢を生ぜしめる前日からの殘留物は、覺醒生活の强烈な興味の殘つたものである。若し醫者の言葉や彼の與へる刺戟が患者にとつて重要なものになればそれらのものは前日からの殘留物のうちに入つて、心的刺戟として消えてしまはなかつた前日の感情的價値を持つた他の諸興味と同じやうに夢の形成に參加し、睡眠中に睡眠者にはたらきかける身體的刺戟と同じやうな風に作用することが出來る。夢を刺戟する他の諸要素と同じやうに、醫者によつて喚起されたこれらの思想もまた、夢の顯在內容に現はれたり潜在思想のうちにあることが證明されたりすることが出來る。吾々は夢を實驗的に生じさせる、もつと精確に言へば、夢の材料の一部分を實驗的に導入し得ることを知つてゐる。從つて分析者は被驗者の四肢をある一定の場所に置かせたムーリー・フオルトのやうな實驗家のと同じ役割を演じてゐるのである。

吾々は屢々人が何に就いての夢を見るべきかを決めることは出來るが、何の夢を見るかを決めることは出來ない。何故ならば夢の作業の機構と無意識的な夢の欲望は、どんな外的影響をも受入れないからである。身體的刺戟から生ずる夢を考察した時、吾々は夢の生活の特異性と獨立性は身體的或は心的刺戟に對する夢の反應のうちに明かに示されてゐることを認めた。夢の研究の客觀性に就いて疑問を抱くことに論じた批評は、これもまた混同――夢とその材料との混同――に基くものである。

諸君、私は夢の問題に就いてこれだけのことを諸君に語らうと思つてゐた。諸君は私が多くのことを看過してゐると考へ、私は殆どあらゆる點で議論を未完結のまゝにして置かなくてはならなかつたことを、自分で知つて居られることであらう。けれども、これは夢の現象は精神病現象と密接に關聯してゐるからである。吾々は夢を精神病學の序論として研究した。さうしてこれはその逆に始めるよりも確に正しかつた。けれども夢は精神病の理解に缺くべからざるものであると同じやうに、夢の正しい評價は精神病の現象に就いての知識が獲得された後に至つ

て始めてなされ得るのである。

諸君はどう思つて居られるか知らないが、私は夢に關する諸問題の考察に、かくも多くの諸君の興味と時間とを費したことを、自分で後悔してゐないと斷言することが出來る。私は精神分析の死活に關するこれらの立言の正しさを、こんなに早く確信せしめる他の方法を知らない。神經病患者の症候はある意味を有してゐる、ある目的に役立つてゐる、患者の生活經驗から來てゐる、といふことを實證するためには幾月もの、否、幾年もの努力が必要である。これに反して、最初は全然混亂した理解し難いやうに思はれる二三の夢によつて、これらの事柄を證明し、それによつて精神分析の一切の假說――無意識的心的過程の存在、その過程が從ふところの特殊な機能、その過程のうちに表現される衝動力を確證するには、僅か數時間の努力で十分である。さうして夢の構造と神經病的症候との著しい類似と、夢を見つゝある人が目覺めた、理性的な人間に變ることの速さとを對比する時、吾々は神經病もまた心的生活のうちにはたらきつゝ、ある力の平衡の變化に基くものに過ぎないことを斷言し得るのである。

第三篇　神經病學概說

第十六講　精神分析と精神病學

私は一年後に吾々の講義を續けるに當つて再び諸君にお目にかゝることを喜ぶものである。昨年私は誤謬と夢の精神分析的取扱に就いて講義したが、今年は、諸君が間もなく發見されるやうに、この兩者と多くの共通なものを持つてゐる神經病的現象に就いて諸君に理解していたゞきたいと思ふ。けれども前以てお斷りして置かなくてはならないことは、今度は私に對して昨年と同じ態度を執つてもらふ譯には行かないといふことである。昨年は私は諸君の判斷と一致しないうちは一歩も進まないやうに努めた。諸君と多く論爭した。諸君の反駁に聽いた。否、諸君と諸君の「健全なる常識」を決定的判決と認めた。これからはさうする譯に行かない、さうしてその理由は簡單である。誤謬や夢は諸君に珍らしくない現象である。諸君はこれらに就いては私と同じ程の經驗を持つてゐるとも、供給出來るとも言ふことが出來よう。けれども神經病的現象は諸君には未知の領域である。諸君自身が醫者でない限りは、諸君は私の說明による以外にその領域に近づく手段を持つて居られない。さうして判斷さるべき材料に就いての知識がないならば、最秀の判斷力も何の役に立たう。

しかしながらこの宣言を私が獨斷的講義をしようとしてゐるのであるとか、諸君の無條件的容認を要求するものであるとかいふやうな風に取つてもらつては困る。それは甚だしい誤解である。私は確信を喚起さうとは思つてゐない。私の目的は探究心を刺戟し、偏見を拂ひ落すにある。若し諸君が材料に就いての無識のために判斷することが出來ないならば、諸君は信じても否定してもならない。たゞ私の語ることを傾聽すべきである。確信といふものはそんなに容易に得られるものではない。若し何の苦もなしに得られたとすれば、間もなくそれは無價値な、直ぐに崩れる底のものであることが分つて來る。私と同じやうに幾年もこの材料を取扱ひ、私と同じ新しい、驚くべき

發見を經驗した人のみがこの確信の權利を持つてゐるのである。それならば知的な事柄に就いて突然の確信、迅速な改說、瞬間的な否認はどうした譯であるか。諸君は「第一印象の愛」は極めて種々な、感情的領域から來るものであることをお認めにならないのであるか。吾々は決して吾々の患者に向つて精神分析法を確信せよともそれに味方せよとも要求しない。吾々はさういふことをする人を信じない。彼等の一番よい態度は好意的懷疑を持つことである。從つて諸君もまた精神分析的見解を通俗な或は精神病學的見解と共に靜かに發展するまゝにして置き、將來れば兩者を取捨し、融合して決定的な意見を立てるやうに試みていたゞきたい。

けれども諸君は私が講義するところの精神分析的見解を、思辨的觀念體系であるとは一瞬間も想像してはならない。その反對に、それは直接の觀察に、或はその觀察から得られた推論に基く經驗の結果である。この推論が十分な、正當な風になされたかどうかは科學の未來の進步によつて證明されるであらう。但し殆ど二十五年間の研究の後に、私もかなり年老いた今では、この觀察に達することは極めて困難な、潛心を要する仕事であつたと言つても少しも思ひ上つてはゐないと思ふ。吾々の論敵は、吾々の主張のこの出所が誰でも自分の好きなやうに論ずる事の出來る主觀的聯想に存するとでも思つてゐるのか、少しもそれを考察しようと欲してゐないやうに私には思はれることがある。この論敵の態度は私には全然理解することが出來ない。この態度は恐らく醫者が神經病者を取扱ふことが少く、彼等の言ふことを注意して聞かないために、彼等の言動に何等の意義を見出すことも、從つて徹底的な觀察をすることも出來ないところから來るのであらう。私はこの機會に於いて、私はこの講義中に殆ど論爭しない、特に個々人とはしないことを諸君に約束して置きたい。私は「爭ひは萬物の父なり」といふ句の眞理をどうしても信ずる事が出來ない。私はそれはギリシヤの詭辯哲學から來たもので、この哲學と同じく、辨證を過重視したために誤謬に陷つてゐると思ふ。私にはその反對に、所謂科學的論爭は全體的に見て、殆ど常に極めて個人的に行はれるといふ事實を除けば、少しも效果がないやうに思はれる。私も數年前まではたゞ一人の研究家、ミュウニッヒのレーヴエンフエルトと一度科學的論爭をやつたことを誇ることが出來た。その結果二人は友人になり、今もさうである。けれども私は長い間論爭を繰返さないでゐる。何故ならば同じやうな結果が得られるかどうかは分らな

いからである。
かゝる公開的論爭の拒絶は批評を許さないこと、頑固なこと、もつと上品な科學界の俗語を用ひて言へば「頭が固い」ことを證するものであると諸君はきつと判斷されることであらう。これに對しては私は、若し諸君がかゝる困難な研究によつて一の確信に到達されたならば、諸君もまたその確信を固守する權利を有せられるであらう、と答へたい。更に私は私の研究の進むに從つて二三の重要な點で私の見解を變化し、修正し、新しいものと代へた、さうして言ふまでもなくその度毎にその事實を公表したことを確言して置く。この率直の結果はどうであつたか。ある人は私の自己訂正を全然無視して、今日でもなほ私にはずつと前から同じ意味を持つてゐない見解によつて私を批評する。ある人は私が說を變へたそのことを非難し、そんなことでは信用が出來ない、自分の見解を數回變へたものは信用される價値はない、何故ならば彼はその最近の主張に於いてもまた誤つてゐるかも知れないからであると言ふ。しかも一度發表したことは誤つてゐないと主張するもの、或は容易にその見解を棄てないものは、頑固で頭が固いのである。この互に相容れない批評に對しては自分が最もよいと考へる通りに行動する外はないではないか。從つて私はさうすることに決心した。さうして私のそれ以後の經驗が要求するに從つて私の說を修正し、訂正するに躊躇しないものである。根本的見解に就いては私は今まで變更する必要を少しも認めなかつた、さうして今後もその必要のないことを冀つてゐる。
さてそこで私は神經病的症候に就いての精神分析的見解を諸君に語らなくてはならない。そのためには吾々が旣に考察した現象と關聯のある例を取るのが、類似と對照のために、一番簡單である。私は私の診察室で多くの人々がやる症候的行爲を例に取らうと思ふ。長い間の不幸を十五分の間に物語るために醫者の診察室を訪ねて來る人々に對して、分析者は實際どう手をつけてよいか仲々分らないものである。彼の深い知識は他の醫者のするやうに「別にどこも惡くありません、暫く水療法をやつてごらんなさい」といふやうな診斷をすることを困難ならしめる。吾々の同僚の一人は、診察を受けに來た患者をどういふ風に取扱ふかと問はれた時に、肩を聳かして、「私を遊ばせたからいくらくの罰金を取つてやつた」と答へた。かういふ譯であるから、最流行の精神分析家のところへでも診察

を受けに來るものは、何時もそんなに多くはないと聞いても諸君は驚かれないであらう。私の待合室と診察室との間には普通の扉があるが、それは二重になつてゐて、フエルトで覆はれてゐる。この小さな仕掛の目的は言ふまでもない。さて私が人々に待合室から內へ入るやうにといふと、その人は扉を閉めることを忘れる、扉を兩方とも開放しにして置くことが絕えず起る。私はそれを見るとかなり無愛想な調子で入つて來た人に、その人がどんな立派な紳士であつても、どんなにめかした婦人であつても、後へ戾つて扉を閉めて下さいと要求する。このことは厭に威張つてゐるといふ印象を與へる。時としては扉の把手を持つことの出來ない人にこの要求をして失策をやることがある。かういふ時には連の人が代りに閉めて吳れゝば嬉しく思ふ。けれども大多數の場合には私の見るところは誤つてゐない。何故ならば醫者の診察室の扉を開放しにして置くやうな人は下層階級の人で、冷淡な取扱をされてもよい人だからである。諸君はこれから述べることを聞かないで今偏見を抱かないやうにしていたゞきたい。患者が扉を開放しにするのは彼一人が外の部屋で待つてゐて、從つて待合室に他の人を殘して來なかつた時にのみ起ることであつて、他の彼の識らない人と一緒に待つてゐる時には決して起らない。後者の場合には彼は彼が醫者に話をしてゐる間に立聞されないことは自分の利益であることをよく承知してゐるから、兩方の扉を用心深く閉めることを決して忘れない。

かうして患者の等閑は偶然的なものでも無意味なものでもない、些細なことでさへもない。何故ならばそれは患者のその醫者に對する態度を示してゐるからである。患者は世俗的權威者を索めて、眩惑され威嚇されることを欲してゐるあの大衆に屬してゐる。恐らく彼は何時に行けれぱ一番都合よく診察してもらへるかを電話で問合させ、戰時の食料品店のやうに、群集で一番になつてゐると豫期してゐたことであらう。ところが彼は誰もゐない部室に案內される。おまけに部屋には何の裝飾もないので呆然としてしまふ。彼は醫者に示さうとしてゐた早まつた尊敬の埋合せをしなくてはならない。そこで彼は待合室と診察室の間の扉を閉めないのである。彼はかうすることによつて、「フン、一人もゐやしない、何時まで待つてゐても來ないのだらう」と醫者に言はうと思つてゐるのである。彼は、若し最初に嚴しい忠告によつて愼まされなかつたならば、會談中にも無作法に、傲慢に振舞ふことであらう。

この一寸した症候的行爲の分析によつて諸君の見出されるものは既に知つて居られることばかりである。即ちその行爲は偶然なものではなくて、一の原因、意味、志向を持つてゐるといふことである。それは一定の心的關聯體に屬してゐるといふこと、更に重要な心的過程の小指標であるといふことを示してゐる。けれども就中それはかうして指示された過程はその行爲をした當人には意識されてゐないといふことである。何故ならば兩方の扉を開放しにして置いた患者のうちで、自分は開放しにすることによつて彼の輕侮の念を示さうとしたのであるといふことを容認し得るものは一人もなからうからである。彼等の多くは誰もゐない待合室に入つた時の失望の感じを思ひ出すことは恐らく出來やうが、この印象とそれに續く症候的行爲との間の關聯は確に彼等に意識されないである。

さて私は一症候的行爲のこの小分析をある患者に就いてなされた觀察に當篏めて見ようと思ふ。私がこれを選んだのは、これが私の記憶に新しいものであり、また比較的簡單に叙述することが出來るからである。かゝる事柄を叙述する場合にはかなりの詳說は是非必要である。

短い休暇を得て歸鄕してゐた一人の靑年士官は私にその姑を治療してもらひたいと言つて來た。彼女はこの上もない幸福な境遇にゐたのであるが、しかも不條理な觀念によつて自身及び家族の生活を苦しめてゐた。私は彼女が五十三歲で、溫和な、純朴な性質の人であることを知つた。彼女は少しも厭がらずに次の話をした。彼女の結婚生活は極めて幸福で、大工場を持つてゐる夫と共に田舍で暮してゐる。彼女は夫の親切と思ひやりをどう賞めてよいか知らない。彼等は三十年前に愛によつて結婚したのであつて、それ以來二人の間には少しの暗影も爭ひも一瞬間の嫉妬もなかつた。二人の子供は幸福に結婚したが、夫たり父たる彼は義務感からして休まうとはしなかつた。一年前に信ずる事の出來ない、彼女には理解することの出來ない事が起つた。彼女は夫が若い女と一緒になつてゐる事を告げた一通の匿名の手紙を受取つて、卽座にそれを信じてしまつた――さうしてそれ以來彼女の幸福は破壞されてゐるのである。その成行はほゞ次のやうなものであつた。彼女には一人の女中があつて、その女中とは祕密な事柄をかなり親しく話をした。この女中はある一人の娘が、素性は彼女よりよくはなかつたが、彼女よりも出世してゐたのを非常に憎んでゐた。この娘は、商業上の素養があつたので、女中をする代りに工場の方へ連れて行かれ、

召集で人手が足りなくなつたのでよい位置に引上げられた。彼女は今は工場の内に住んでゐて、あらゆる紳士に交際し、「孃」と呼ばれさへもした。出世出來なかつた方の娘は無論この以前の同級生を出來る限り惡く言はうと待ち構へてゐた。ある日吾々の患者はこの女中とこの家を訪問して來た老紳士のことに就いて話をしてゐた。この紳士は細君と別居して妾を置いてゐるといふ噂であつた。彼女はどういふ譯だか知らないが、突然「私は私の夫が情婦を持つてゐるといふことより恐ろしいことは考へることも出來ない」と言つた。その翌日彼女は彼女が考へた丁度そのことを書いてある擬筆の匿名の手紙を受取つたのである。彼女はこの手紙はあの腹の黒い女中の細工であると推測した――恐らくさうに違ひなかつたであらう――何故ならば彼女の夫の情婦として名されてゐた婦人はこの女中が憎んでゐたその少女だつたからである。けれども彼女はこの計略を直ぐに看破し、近所の例によつてかゝる卑怯な誹謗は少しも信用するに足りないことを十分に知つてはゐたけれども、それにも拘らずこの手紙は彼女を打負かしてしまつた。彼女は恐しく昂奮して、直ぐに夫を迎へにやつて、非難の雨を浴せ掛けた。彼女の夫は笑ひながらこの誹謗を否認し、出來るだけのことをした。彼はかゝりつけの醫者（彼は工場にも勤めてゐた）を呼びにやつて、この不幸な婦人の心を鎭めようとした。その次に二人がしたことも至極理に合つてゐた。女中は暇を出されたが、情婦と想像された婦人は解雇されなかつた。その時以來この患者はあの匿名の手紙の內容を最早信じないほどに幾度も心を鎭めようとしたが、根底からは鎭らず、また長く續かなかつた。あの若い婦人の名を聞いたゞけで、或は彼女と街で出遭つたゞけで疑惑と苦惱と非難の發作が新しく起つて來た。

以上がこの善良な婦人の病歴である。彼女は、他の神經病者とは反對に、彼女の症候を餘りに控へ目に述べた――吾々の言葉で言へば隱蔽した――こと、彼女はあの匿名の手紙に對する信用を本當は決して征服しなかつたことを認めるのには、餘り多くの精神病學的經驗を必要としない。

さて、精神病治療者はかゝる症例に對してはどんな態度を執るであらうか。待合室の扉を閉めない患者の症候的行爲に對してどう言ふだらうかといふことは吾々は既に知つてゐる。彼はそれを心理學的興味のない偶然であると說明して、それ以上深く究めようとしない。けれども彼はこの嫉妬深い婦人の症例にもこの態度を續けることは出

來ない。この症候的行爲は餘り重要なものでないやうに見えるが、その症候は重大な事柄として注意を要求する。主觀的にはそれは烈しい苦惱を與へ、客觀的には家庭生活を脅威する。從つてそれが精神病學的興味の對象となるのは議論のないところである。そこで治療家はある根本的性質によつてこの症候を特色づけようと努める。この婦人が惱んでゐる觀念そのものは無意味なものとは言へない。年取つた夫が若い女と關係することは實際にあることである。けれどもそこには不條理な、理解し難いことが一つある。卽ちこの患者もあの匿名の手紙以外には彼女の愛してゐる、また忠實な夫が情婦を持つてゐると想像する根據は絕對に持つてゐないのである。彼女はこの通知が一の證據をも示してゐないことを知つてゐる。彼女はこの手紙が誰から來たかを十分說明することが出來る。從つて彼女はその嫉妬には何の根據もないと言へた筈である。さうして實際言ひさへもした。けれどもそれにも拘らず彼女はその嫉妬に十分な根據があるかのやうに惱んでゐる。論理も現實からなされる議論も近づくことの出來ないこの種の觀念は一般に妄想と呼ばれる。この善良な婦人は從つて嫉妬妄想に惱んでゐるのである。これは明かにこの症候の根本的特徵である。

この第一の點が確められると吾々の治療的興味は非常に增して來る。妄想は現實の事實によつて取り去られないものであれば、それは恐らく現實から生じたものではなからう。それならばそれは何處から生ずるのであるか。妄想は極めて種々の內容を有してゐる。何故にこの症例の妄想の內容は嫉妬なのであるか。どういふ種類の人々が妄想、特に嫉妬妄想を抱くのであるか。さて吾々はこゝで治療家の語るところを傾聽したいと思ふのであるが、彼はこゝで吾々を置去りにしてしまふのである。彼は吾々の疑問のうちの一つだけを考察する。彼はこの婦人の家系を調べて、恐らく妄想はその家族に同じやうな或は異つた障碍が幾度も起つた人々に現はれるのであると答へるであらう。換言すれば、この婦人が妄想を起したのはそれを起す遺傳的傾向を持つてゐたからであるといふのである。これは確かに無意味なものではない。けれどもこれが吾々の知りたいと思ふ一切であるか、これが彼女の病氣の唯一の原因であるか。嫉妬妄想が他の妄想の代りに現はれたといふ事は些細な、獨斷的な、說明出來ないことであると假定して滿足すべきであらうか。また吾々は「遺傳的影響は決定的である」といふ命題を、消極的の意味に、卽

ち生活がどんな經驗と情緒を齎しても彼女はやはり何時かは妄想を起すべく運命づけられてゐたといふ意味に理解してよいのであるか。諸君は科學的精神病學は何故にこれ以上の説明を與へようとしないのであるかを知りたく思はれるであらう。けれども私は答へる「自分が所有してゐるより以上のものを與へるものは詐欺師だけである」と。精神病治療者はかゝる症例をこれ以上説明する方法を知らないのである。彼は診斷だけで、また豐富な經驗にも拘らず將來の病狀に就いては極めて不確實な豫後だけで、滿足するの外はない。

けれども精神分析はこれ以上のことを爲し得るか。然り、確かに。私はこの例のやうなはつきりしない症例に於いてさへもより深い理解を可能ならしめるところのあるものを發見することは可能であるといふことを諸君に示したいと思ふ。第一に、私は次の理解し難い事柄に諸君の注意を向けていたゞきたいと思ふ。即ち彼女の妄想の基礎となつてゐる匿名の手紙はこの患者自身が書かせたのである。彼女はその前日この奸策を弄した女中に夫が情婦を持つてゐると聞くより恐ろしいことはないと話して、女中にあの匿名の手紙を送らせる考へを始めて吹き込んだのである。從つてあの妄想はその手紙によつてのみ生じたのではない。既に以前から恐怖として――或は欲望として？――患者の心のうちに存在してゐたのである。これ以外に、たゞの二時間の分析によつて見出されたこの外の小症候も注目に値する。患者は彼女の物語が終つた後に、その外の思想や聯想や記憶を私に語るやうに要求された時には極めて厭さうに應答した。彼女は何も心に浮んで來ません、何もかも言つてしまひましたと言つた。さうして二時間後にはこの試みは斷念されなくてはならなかつた。彼女はもう具合がよくなつたやうに感じる、さうしてこの病的觀念は二度と起らないと思ふと告げたからである。彼女がかう言つたのは無論抵抗とこれ以上の分析に對する恐怖のためである。けれどもこの二時間のうちに彼女は一の解釋を可能ならしめるやうな、否さうとより解釋の出來ないやうなことを二三うつかりと話した。さうしてこの解釋は彼女の嫉妬妄想の原因を十分明かにしたのである。實際彼女の心のうちにはある靑年、私の診察を受けるやうに彼女に奬めた婿子その人に對する強い戀情が存してゐたのである。この戀情の存在を彼女は少しも知らなかつた、或は多分ほんの少しゝか知らなかつた。彼等のやうな近親關係の場合にはこの戀情が情愛の假面を被ることは容易であつた。吾々が既に知つてゐることからしてこ

の五十三歳の貞淑な妻、優れた母親の心的生活を見拔くことは困難でない。かゝる戀情は奇怪なあり得べからざるものとして彼女の意識に入ることは出來なかつた。けれどもそれは存在し續けて無意識的に強く彼女を壓迫した。何かゞ起らざるを得なかつた。何かの救濟法が求められざるを得なかつた。さうして最も簡單な緩和法は嫉妬妄想の構成にはきつと働くところのあの轉移の機構が提供した。若し老人たる彼女が若い男に戀してゐるだけではなくて、彼女の年取つた夫も若い女と關係してゐたならば、彼女は不貞であるといふ良心の苛責から逃れることが出來たであらう。從つて夫が不實であるといふ空想は彼女の傷口を冷す膏藥であつたのである。彼女自身の愛に就いては彼女は少しも意識しなかつた。けれども彼女にかゝる利益を齎したところの愛の反映は、强制的に、妄想的に、意識的になつた。それに對するあらゆる反駁が役に立たなかつたのは當然であつた。何故ならばその反駁はたゞ反映にのみ向けられて、それに力を與へ、無意識內に攻擊されることなしに隱れてゐたところの愛に向けられなかつたからである。

さて今度はこの症例を理解するためになされた精神分析的努力の結果を集めて見よう。この調査が正しかつたといふことは無論假定されてゐる。さうしてこれは私が諸君の判斷を乞ふことの出來ない點である。第一に、この妄想は最早無意味な理解し難いものではなくて、十分意味のある、論理的な動機のあるものであつて、この患者の感情的經驗と關聯してゐる。第二に、この妄想は他の徵候によつて曝露されたある無意識的心的過程に對する反應として必然的に現はれたものであつて、それの妄想的特徵と論理的及び現實的反駁に對する抵抗は正にこの他の心的過程との關係のために生じたのである。それは欲求されたあるもの、一種の慰藉でさへある。第三に、この妄想は嫉妬妄想であつてそれ以外のものでないといふことは、病氣の奧に潜んでゐる經驗から見て疑ふべくもない。諸君は彼女が前の日にあの手紙を出した女中に向つて、夫が私に不實であるほど恐しいことはないと言つたことを記憶して居られるであらう。諸君はまたこれが吾々が分析した症候的行爲と二つの重要な點、卽ち意味或は意圖の發見とその狀態に於ける無意識的なものとの關係に於いて類似してゐることを見逃されないであらう。

無論これだけでこの症例から生ずるすべての疑問に答へられてゐる譯ではない。その反對に、この症例はまだ解

決されてゐないやうな、或はある都合の悪い事情のために解くことの出來ないやうな疑問に滿ちてゐる。例へば、何故に幸福な結婚生活をしてゐるこの婦人は養子を戀するやうになつたのであるか。また何故に他の救濟法も可能であるのに、彼女自身の心的狀態を夫に投射するこの反映の形式で救濟法が講じられたのであるか。こんな疑問を提出する事は馬鹿げた、無用なことであると考へてはならない。吾々は旣にこれにあり得べき答を與へるに足るだけの材料を手許に持つてゐる。この婦人は突然に望ましくない性的欲望が婦人に增加する危險年齡に達してゐた。これだけでも十分であつたらう。或はその上にこの善良な、忠實な夫は數年來なほ强烈なこの婦人の欲望を滿たすに足るだけの性的能力を有してゐなかつたかも知れない。觀察の示すところによると、その妻を非常に優しく遇し、妻の神經的疾患を異常に氣遣ふのはこの種の人——彼が忠實であることは無論である——である。更に、この變態的戀情の對象が娘の聟であつたといふことも些細なことではない。娘に對する强い愛著——これの究極的根據は母の性的構造にある——はかゝる變形によつて維持されることが屢々ある。私はこゝで姑と養子との關係は太古から人類によつて感覺的なものと考へられてゐて、そのために原始民族には極めて强力なタブーと忌避とが生じたこと*を諸君に思ひ出していたゞきたいと思ふ。消極的方面に於いても積極的方面に於いてもそれは屢々文明社會が適當と考へる制限を超えてゐることがある。これらのあり得べき三要素のうちでその一つが吾々の症例にはたらいてゐたか、或はその二つ、或は全部が參加してゐたかどうかは私は諸君に語ることが出來ない。けれどもそれはたゞその分析を二時間以上續けることが出來なかつたがためである。

＊『トーテムとタブー』參照

今私は諸君がそれを理解する準備のなかつたことばかりを話してゐたことを認める。私は精神病學と精神分析とを比較するためにさうしたのである。けれども私はこゝで諸君に一つ尋ねたいと思ふ。諸君はこの兩者の間に何か矛盾するやうなものを認められたであらうか。精神病學は精神分析法を使用しない。妄想の內容を調べようとしない。さうして第一に特殊な、直接な病源を示す代りに、遺傳を擧げて極めて一般的な間接的な病源を吾々に指摘する。けれどもこのうちには何等かの矛盾、反對が存してゐるか。寧ろ相互に補足するものではなからうか。遺傳的

要素は經驗の重要さと相容れないものであるか。寧ろ兩者が一緒になつて更に有效に作用するのではなからうか。諸君は精神病學の仕事には精神分析的研究と對立し得るものは一つもないことを容認されるであらう。從つて精神分析に反對するものは精神病學者であつて精神病學そのものではない。精神分析學は精神病に對して組織學が解剖學に對すると似たやうな關係に立つてゐる。一方は有機體の外形を研究し、他方は組織と構成要素からその構造を研究する。一方が他方に續いてゐるこの研究の二分野の間に矛盾があると考へることは容易でない。諸君は今では解剖學は科學的醫學の基礎をなしてゐることを知つて居られるであらう。けれども身體の內部構造を知らんがために屍體を解剖することが、今日人間精神の內的機構を發見するために、精神分析を使用することが非難されてゐるやうに見えると同じく、嚴禁されてゐた時代もあつたのである。さうして科學的に徹底した精神病學は、心的生活に於ける深いところに橫はつてゐる無意識過程に就いての知識なしにはあり得ない、といふことを認められる日は必ず近いうちに來ることであらう。

恐らく諸君のうちにはかくも屢々攻擊されてゐる精神分析に好感を抱いて、それが他の方面、即ち治療的方面に於いてもその存在を立證することを望んで居られる人があることであらう。精神病學的治療は今までのところでは妄想に對しては全然無力である。精神分析はその症候の機構を透見するが故にそれに成功し得るであらうか。否、それは出來ない。精神分析は妄想に對しては、少くとも今のところでは、他のどんな治療法とも同じやうに無力である。吾々は患者のうちに起つたことを理解することは出來る。けれども患者自身にそれを理解させる方法がない。前に話したやうに私はこの妄想の分析を第一回の診察以上に續けることが出來なかつた。それならばかゝる症例の分析は無效であるが故に、望ましくないものであらうか。私はさうは思はない。吾々は直接の效果を得るといふ事には顧慮せずに、研究を續ける權利、否、義務がある。何時、何處でだかは知らないが、何時かはこの知識の斷片が力に、治療的な力に變ずる日が來るであらう。たとへ精神分析學が妄想に對すると同じやうに他のあらゆる形式の神經病や精神病に對して效果のないものである事が分つたとしても、それはなほ科學的研究の獨特の一方法として存在の價値を有してゐる。實際吾々は精神分析を實際に行ひ得るやうにはならないかも知れない。吾々が學ばう

とする人間的材料は生きてゐる。それ自身の意志を持つてゐる。吾々の仕事に加はるためには自ら進んで來なくてはならない、さうして彼はそれを拒むかも知れないのである。從つて私は今日の講義を終るに際して、吾々の進んだ知識によつて實際に治療することの出來る多くの神經病があるといふこと、吾々はこのさもなければ頑强なこれらの病氣に對して、ある條件の下に於いては、この內的治療の領域內に於けるどの結果にも劣らないやうな結果に達し得ることを述べて置かうと思ふ。

第十七講　症候の意味

私は前講に於いて、臨床精神病學は個々の症候の現はれてゐる形式と內容とに殆ど注意しないが、精神分析學はこれを出發點として、症候は意味を有するものであり、患者の生活經驗と關聯を有するものであることを確めた、と說明した。神經病的症候の意味はJ・ブロイエルが一ヒステリー患者を硏究し、その治療に成功して始めて發見したのである（一八八〇―一八八二年）。この症例はそれ以來非常に有名になつた。P・ジャネーが彼とは獨立に同じ結果に達したことは事實である。否、ブロイエルがその觀察を發表したのは十年も後（その間私と共に硏究した）であつたから、（一八九三―一八九五）發表したのはこのフランスの硏究家の方が早かつた。しかしながら誰がこの發見をしたかといふことは大して重要なことではない。何故ならばどんな發見でも一度以上なされるものであり、また發見は一擧に成し遂げられるものでもなく、結果は功績によつて定あられるものではないからである。アメリカはコロンブスによつて命名されたのではない。ブロイエルやジャネーよりも前に精神病學の大家リュレーは、狂人の妄想でさへも、若し吾々がそれを如何に飜譯するかといふことを知つてさへ居れば、何等かの意味を持つてゐることが分るに相違ない、といふ意見を述べた。正直に言へば、私は長い間神經病的症候を說明したジャネーの功績を非常に高く評價したいと思つてゐた。彼はその症候を患者を支配してゐる「無意識思想」の顯現であると考へてゐたからである。けれどもジャネーはそれ以來餘りに用心し過ぎて、無意識は單なる便宜上の用語、「une façon de parler」に過ぎないで、現實的なものではないと考へてゐるかのやうな言ひ振りをしてゐる。爾來私はジャネーの見解に理

解が持てないのであるが、しかしジャネーは餘りにむざ〳〵と彼の偉大な功績を損つてしまつたやうに私には思はれてならない。

神經病的症候は、從つて誤謬や夢と同じやうに、意味を有し、またそれを現はす人々の生活に關聯してゐる。これは非常に重要な事柄であるから、私は二三の例によつて實驗しようと思ふ。あらゆる場合にさうであると私は證明することは出來ない、單に主張し得るだけであるが、自ら觀察する人はこのことを確信するであらう。けれどもある理由のために私はその例をヒステリーからではなくて、最も顯著な、ヒステリーと密接な關係のある起源を有する神經病から取らうと思ふ。この神經病に就いては私は一寸解說して置かなくてはならない。この所謂「强迫觀念的神經病」は誰も知つてゐるヒステリーほどには知られてゐない。これは、若しさう表現してもよいならば、そんなに騒々しく外に現はれるものではなくて、寧ろ患者の私事であるかのやうであつて、殆ど外部には顯はれず、その症候をすべて心的領域内に生ぜしめる。精神分析が始めて創始されたのはこの二種の神經病、强迫觀念的神經病とヒステリーの研究によつてゞあり、その治療が奏效したのもこれを取扱つた時に於いてゞあつた。けれども心的なるものから身體的なものへのあの神祕な飛躍の缺如してゐる强迫觀念的神經病は、精神分析的研究によつてヒステリーよりも更に理解し易い、透見し易いものとなつてゐる。さうして吾々はこの神經病は神經病者のある極端な特徴を遙かに著しく現してゐることを認めるやうになつた。

强迫觀念的神經病の形式はかうである。卽ち患者は實際には少しも興味のない思想に心を奪はれる。彼は彼には何の關係もないやうに思はれる衝動を感ずる。さうして彼は彼には少しも滿足を與へないが、しかもそれを止めてしまふことの出來ない行爲を實行せざるを得なくなる。その思想(强迫觀念)はそれ自體何の意味もないこともあれば、その當人に少しも興味のないものであることもある。話にならぬほど馬鹿げたものであることも屢々ある。さうしてあらゆる場合に於いて强制的な思考作用の出發點となり、患者はそれに沒頭する。しかも厭々ながらそれを續けるのである。彼は彼の意志に反してそれを思ひ廻らさなくてはならない。恰もそれが生死に關する重大事件であるかのやうに。患者が身内に感ずる衝動もまた子供らしい、無意味なものと見えるかも知れないが、大抵は例へ

ば重罪を犯したいといふやうな恐怖すべき內容を持つてゐる。從つて患者はそれを自分には無關係なものとして否認するばかりではなく、驚いてそれを避け、禁止や用心や自由行動の制限によつてそれを實行しないやうに努める。事實彼は決して、實際たゞの一度もそれを實行はしない。いつも逃避と用心の方が勝つにきまつてゐる。患者が實行すること、所謂强迫觀念的行爲は極めて無害な、確に些細な事柄であり、大抵は日常行爲の反覆であり、形式であるけれども、それによつてこれらの必要な行爲——床に就くこと、洗ふこと、着物を着ること、散步すること等はこの上もなく厭な、困難な仕事になる。この病的觀念衝動及び行爲は强迫觀念的神經病の個々の型式及び場合に決して同じ割合に混合してゐるのではなくて、寧ろそれらの要素のどれかゞ病狀を決定し、その病氣に名前を與へるのが通則である。けれどもこれらすべての型式に共通な要素は見誤るべくもない。

確かにこれは狂氣である。どんなに奔放な精神病學的空想でもこれと同じやうなことを構想することは出來ないと私は思ふ。また吾々が自分の眼で每日これを見てゐないならば殆どこれを信じ得ないであらう。けれども諸君はかゝる患者に注意を轉ずるやうに、またそんな馬鹿げた考に囚はれず、そんな詰らぬことをせずに何か必要なことをするやうに忠告すれば、何かの役に立つかも知れないと想像してはならない。それは彼自身がしたいと思つてゐることなのである。何故ならば彼は彼の狀態をはつきり知つてゐるからである。彼は彼の强迫觀念的症候に關する諸君の意見に同意し、自ら進んでさうしようとする。たゞ彼は自分でどうにもならないのである。强迫觀念的神經病者の行爲は常態心的生活には恐らく見當らないやうな種類の勢力によつて支持されてゐる。彼のなし得ることはたゞ一つ、卽ち置換し、交換することだけである。ある馬鹿げた考の代りに彼はそれほど酷くない他の考に移る事は出來る。ある用心や禁止から他の用心や禁止に進むことは出來る。ある形式的行爲の代りに他の形式的行爲を實行することは出來る。彼は强迫觀念を轉移することは出來るが、それを廢棄する事は出來ない。一切の症候を最初の形とは全く異るやうに轉移し得るこの能力は、この病氣の主要特徵である。もう一つ顯著なことは心的生活のどこにも存する兩極性がこの病狀に於いては特に著しく分化してゐることである。消極的及び積極的內容を持つた强迫觀念と共に知的領域內に疑惑が現はれ、徐々に擴がつて終に、普通確實と思はれてゐるものまでを侵すやうにな

る。さうしてこれらすべてのことが患者をますく優柔不斷にし、精力を失はせ、自由を制限する。しかもこの種の患者は元來は精力絶倫な、時としては異常に我儘な、さうして通例普通人以上の知力を持つた人なのである。彼は大抵かなり高い道德的標準に達してゐる。良心が强過ぎる、さうして普通以上に廉直である。諸君はこの矛盾に滿ちた性質と病症との正しい關係を見出すことは非常に困難な仕事であると考へられるかも知れない。けれども今のところでは吾々の目的はこの病氣の二三の症候を理解し、解釋することだけにある。

恐らく諸君は前の批評から考へて現代の精神病學は、强迫觀念的神經病の問題をどういふ風に取扱つてゐるかを知りたく思はれるであらう。けれどもそれは殆ど何物をも寄與してゐない。精神病學は種々の强迫觀念に名前を附けたゞけである。それ以外のことは何もしてゐない。それはかゝる症候を持つてゐる人は「變質者」であると斷定する。これは決して滿足な答ではない。これは說明ではなくて評價であり、非難である。吾々は變質者にはあらゆる奇妙なことが現はれると考へたがるものらしい。さて吾々はかゝる症候を現はす人々はその性質がいくらか他の人々とは異つてゐるに相違ないと信ずる。けれども彼等は他の神經病患者、例へばヒステリー患者や狂人よりも更に、「變質的」であるかどうか。吾々はこれを知りたく思ふ。けれどもこの疑問も餘りに一般的である。實際かゝる症候は天才的な、その時代に卓越した男女にも現れると聞いた時、それが本當であるか否かを疑つて見ることさへも出來よう。彼等自身の沈默と傳記者の虛僞のお蔭で、吾々は吾々の代表的偉人の內的生活に就いては普通殆ど知るところはないが、時としてはエミル・ゾラのやうな眞理の狂信者から、彼がその全生涯を通じて如何に多くの異常な强迫觀念的習慣に苦しめられたかといふことを知るのである。

精神病學はかゝる人々に「優良變質者」といふ名前を與へてこの困難を切り拔けてゐる。結構である——けれども精神分析學はかゝる異常な强迫觀念的症候は、他の病氣と同じやうに、また變質者でない人に於けるやうに、永久的に取除かれることを證明してゐる。私自身屢々さうすることに成功した。

私は强迫觀念的症候の分析の實例を二つだけ述べようと思ふ。一つはずつと前に觀察したものであるが、これよりよい例はまだ見つからない。一つは最近のものである。私がこの二つだけに制限した理由は、この種の敍述は明

細を必要とするからである。

三十歳に近いある婦人が極めて酷い强迫觀念的症候に苦しんだ。さうして若し私の仕事が運命の氣紛れによつて駄目にならなかつたならば――このことに就いては後に述べようと思つてゐる――恐らく私は彼女を助ける事が出來たことであらう。彼女は一日のうちにきつと他の行爲もしたが、次のやうな奇妙な强迫觀念的行爲を幾度も實行した。卽ち彼女は彼女の部屋から隣の部屋へ走つて行き、その部屋の中央にある机の側のある一定の場所を占め、鈴を鳴らして女中を呼び、何でもない用事を命ずるか、或は命じないで女中を去らせて、それから自分の部屋に走り戻る。これは確に苦痛な症候ではないが、好奇心を刺戟するには十分である。この說明は最も簡單に醫者の方から少しも手を出さないで不意に得られた。私はこの强迫觀念的行爲の意味を推測し得たか、その解釋を思ひつき得たか、どうかさへも知らない。私が患者に「何故さうするのですか」「それは何の意味ですか」と尋ねる毎に、彼女は知りません」と答へるのであつた。けれどもある日彼女の主義に關するある非常な躊躇に私が打ち勝つた時、彼女は突然思ひ出して强迫觀念的行爲に關することを物語つた。彼女は十年以上も前に多分年上の男と結婚したが、その結婚の當夜に彼の陰萎であることが分つた。彼はそれを試みるためにその夜幾度となく彼の部屋から彼女の部屋へ走つて行つたが、一度も成功しなかつた。翌朝彼は腹を立てながら「これでは床を敷く女中に恥をかゝなくてはならない」と言つて、近くにあつた赤インクの瓶を取つて、敷布の上へ注いだ。けれどもインクはかゝる汚點があるべき筈の所へはつかなかつた。最初私はこの憶起が問題の强迫觀念的行爲とどんな關係があるのか理解することが出來なかつた。何故ならば部屋から走つて出ることゝ、さうして恐らくは女中が現はれるといふことの外には類似したところは少しもなかつたからである。それから患者は私を隣室のテーブルの所へ案內した。さうして私はそのテーブル掛に大きい汚點を見出した。彼女は更に進んで、彼女は呼ばれた女中がこの汚點を見落すことの出來ないやうな風にテーブルの側に場所を占める、と說明した。このことが分れば、あの結婚當夜の出來事と今日の彼女の强迫觀念的行爲との間の關係は最早疑ふことは出來ない。但しそれに就いて學ぶべきことはまだ澤山ある。

第一に、患者が彼女の夫を自分と同一視してゐることは明かである。一つの部屋から他の部屋へ走つて行つて彼

女は夫の役割を演じてゐる。この比較を續けるためには、吾々は彼女はテーブルとテーブル掛とをベットと敷布とに代用したと假定しなくてはならない。これは獨斷に過ぎるやうに見えるかも知れないが、吾々の夢の象徴作用に就いての研究は徒勞ではないのである。夢ではベットは極めて屢々テーブルで表はされる。テーブルとベットは共に結婚を意味するから、一方は容易に他方を意味するのである。

以上のことはこの强迫觀念的行爲が意味に滿ちたものであることを十分證明するであらう。それはあの重要な場面の表現であり、反覆であるやうに見える。けれども吾々はこの類似を見出したゞけに止まる必要はない。若しこの兩者の關係を更に徹底的に調べるならば、吾々は恐らくこれ以上のもの、この强迫觀念的行爲の目的を見出すであらう。この行爲の核心が女中を呼んで、「これでは女中に恥をかゝなくてはならない」といふ夫の言葉とは反對に、その汚點を彼女に見せつけるにあることは明かである。從つて、吾々は彼女があの場面を單に反覆してゐるのではなく、彼女は夫の役割を彼女が演じてゐる――は女中の前で恥ぢない、汚點はそのあるべき所にある。かうして彼――彼の役割は彼女が演じてゐる――は女中の前で恥ぢない、汚點はそのあるべき所にある。けれどもまた彼女はこれによつてあの夜て、それを續け、訂正し、あるべきやうに變形したことを知るのである。けれどもまた彼女はこれによつてあの夜をあんなにも苦痛なものにし、赤インクを必要ならしめたもう一つのこと、夫の陰萎をも訂正してゐるのである。かうして强迫觀念的行爲は「否、それは本當ではない、彼は女中の前で恥をかゝなかつた。彼は陰萎ではなかつた」と言つてゐるのである。彼女は夢に於けると同じやうな風に、この欲望を現在の行爲に於いて滿足されたものとして表現してゐる。卽ちこの行爲は彼女の夫のあの不幸な出來事からの彼の信用を恢復しようとする目的に役立つてゐるのである。

更にこの婦人に就いて私の語り得るこれ以外のすべてのこと、もつと正確に言へば、彼女に就いて吾々の知つてゐるこれ以外のすべての事は、それ自體は不可解なこの强迫觀念的行爲に就いての吾々の解釋の正しいことを示してゐる。彼女は夫と數年來別居してゐて、正式に彼と別れたものかどうかと考へてゐたのである。けれども彼女は彼から離れられる見込がなかつた。彼女は彼を守らざるを得なかつた。彼女は誘惑されないために社會から全然退いて、空想によつて彼を赦し、彼を理想化した。實際彼女の病氣の本當の祕密はこれによつて夫を惡評されないや

うに庇ひ、彼女の別居の正しい事を證明し、彼の獨身生活を出來るだけ愉快なものにしようとするにあつた。かうして無害な強迫觀念的行爲の分析は吾々を直ちに一病例の最奥の核心に到らしめると同時に、一般の强迫觀念的神經病の多くの祕密を曝露する。この實例はどんな例にも必ず豫期する譯には行かないところの諸條件を具備してゐるから、私は諸君がこの例を更に詳しく研究されんことを心から欲するものである。この症候の解釋は患者自身によつて、分析者から指導されることも干涉されることもなしに、一擧にして發見された。さうしてその解釋は普通あるやうに忘却されてゐる子供時代に屬してゐる事件とではなくて、患者の成年時代に起つた、さうして明かに記憶されてゐた事件と關聯して現はれた。批評家が吾々の症候の解釋に對して常に提起するこれらすべての反駁は、この症例には少しも當嵌らない。確に、何時もこんなに都合よく行くものではない。

もう一つ言ふことがある! この目立たない强迫觀念的行爲からして、この婦人の內密な事柄を知るに至つたのは驚くべきことではなからうか。結婚當夜の出來事は婦人の恐らく最も語ることを欲しない祕密である。吾々が直ちに彼女の性的生活の祕密を知り得たのは偶然で、何等それ以上の意味のないものであらうか。これは確に私が當時爲したところの選擇の結果であると思はれる。けれども吾々はこれに就いて餘り急いだ判斷を下さずに、第二の例に轉じようと思ふ。この例は第一例とは全然趣が異つてゐて、屢々現はれる種類に屬するものである。卽ち睡眠前の儀式的行爲の例である。

患者は十九歳のよく發達した賢い少女である。彼女は兩親の一人娘で、敎育と知的活動に於いては兩親に優つてゐて、子供の頃には活潑で元氣があつたが、後には外部的原因は少しもないのに非常に神經質になつた。彼女は母に對して特に怒り易く、不滿で憂鬱であつた。ますます優柔不斷に懷疑的になり、しまひには一人では廣場や大通りを步くことが出來ないと言つた。吾々は少くとも二つの症候、卽ち臨場苦悶と强迫觀念的神經病を有してゐる彼女の複雜な病狀を詳しく調べることは止めにして、この少女にも現はれて兩親を心配させた睡眠前の儀式的行爲の方に注意を轉じようと思ふ。ある意味に於いてはどんな常態人でも睡眠前に儀式的行爲をする、少くともさうしなければ眠れないやうなある狀態を必要とすると言ふことが出來よう。彼は每晩同じやうな風に繰返されるあるき

まつた事をして眠りに入るのである。けれども健康人が睡眠の條件として要求するものはすべて合理的に説明のつくことである。さうして若し環境がそれの變更を必要ならしめた時には、彼は容易にまた躊躇せずにさうする。ところが病的な形式的行爲は頑强で、どんな犧牲を拂つても續けられる。またそれは合理的な理由によつて變裝されてゐて、一寸見たところでは常態的なのとは、たゞそれが過度の細心を以て行はれるといふ點に於いてのみ異つてゐるやうに見える。けれども更に詳しく調べて見ると、この變裝は十分でないこと、その行爲は合理的には説明のつかない、時としてはそれと矛盾するやうな行爲を包含してゐる事が分る。吾々の患者はこの夜の用意の理由として、彼女は眠る時には靜かで、少しの騷音も入つて來ないやうにしなくてはならないといふことを擧げる。彼女はこの目的のために二つのことをする、即ち彼女は彼女の部屋の中の大時計を止め、ありたけの時計を部屋の外へ出してしまふ。彼女の小さな腕時計でさへも、內へ置かない。色々の花瓶は夜の間に落ちて割れて彼女の眠りを擾さないやうに一所に机の上へ置かれる。彼女はこの處置が靜寂を欲するといふことの本當の理由にならないことを知つてゐる。何故ならば小さな時計の音はそれがベットの側の机の上に置いてあつても聞えないし、また時計の規正しい音は決して眠りを擾さず、却つて眠りを誘ふものであることは誰も知つてゐるからである。彼女はまた花瓶を夜もそのまゝに置けば落ちて碎けるかも知れないといふ彼女の怖れも、あり得べからざるものであることを認めてゐる。その他の行爲に至つては靜かでありたいといふ要求とは何の關係もない。否、彼女の部屋と兩親の部屋との間の戸を半分開けさせて置くのは(彼女はそれを確かならしめるためにその開かれ戸のところに色々のものを置く)その反對に騷音を立てさせる原因であるやうに思はれる。けれども最も肝腎な行爲はベットそのものに關聯してゐる。ベットの上部にある枕敷はベットの木の臺に觸つてはならない。枕は枕敷の上に丁度對角的に置かれなくてはならない。それから彼女は頭を縱にこの菱形の眞中に置く。羽蒲團は彼女がそれを被る前に、その羽根が下の方に溜るやうに振られなくてはならない。けれども彼女はその溜つたのを壓しつぶして元の通りにすることを決して忘れない。

私は彼女の準備のこれ以外の小さい事柄は見ないで置かうと思ふ。それらのことは別に新しいことも敎へない

し、また吾々の目的から餘り離れ過ぎるからである。けれどもこれらのことは皆すら〳〵と行はれると想像してはならない。都合よく行つてないといふ心配が常に伴ふのである。それは吟味され、遣り直されなくてはならない。彼女はこれが間違つてゐないか、あれが間違つてゐないかと疑つて見る。その結果彼女自身が眠れるやうになるまでには、またおど〳〵してゐる兩親を眠らせるのには、二時間も掛るのである。

この苦惱の分析は前の强迫觀念的行爲のやうに簡單には行かなかつた。私はこの少女に止むを得ずその解釋の暗示を與へたが、彼女はその度にそれを絕對的に否認するか、或は輕蔑的な疑惑を以て受取つた。けれどもこの最初の否認的反應に次いで、彼女自身が彼女に暗示されたことの可能性を考へるやうになつたところの時期が來た。彼女はその暗示によつて生じた聯想を書き留め、記憶を提供し、關聯をつけて、終に彼女自身でしたすべての解釋を受入れるに至つた。彼女がこれをなした割合に比例して彼女の强迫觀念的行爲は減じて行き、治療が終つた頃には彼女はそれをすつかり止めてしまつた。こゝで言つて置かなくてはならないことは、今日吾々が行つてゐるやうな分析を施す際には、ある症候の意味が十分明白になるまでその症候にばかり絕えずかゝはつてゐるのはよくないといふことである。寧ろある症候の分析を幾度も中止して、他の點から改めてそれに立戻ることが必要である。私がこれから諸君にお話しする症候の解釋は從つて幾週にも幾月にも亙つて、他の仕事の間に、得られた結果の綜合である。

この患者は徐々に彼女が夜になつて時計を部屋から取り去るのはそれが女の生殖器の象徵だからであるといふことを理解するやうになつた。時計は、この外の象徵的意味を持ち得ることを知つてゐるが、その週期的過程と規則正しい時隔によつて女の生殖器を象徵するのである。婦人は彼女の月經が時計仕掛のやうに規則正しく起ることをいくらか誇つてもよい。さてこの患者は時計の音が睡眠を擾すことを恐れたのであつた。時計の音は性的昂奮の時の陰核の勃起に比較することが出來る。彼女を惱ますこの感覺によつて彼女は實際幾度も眠りから醒まされたのであつた。さうして今や陰核が勃起するといふ恐怖は夜間にはすべての動いてゐる時計を近くに置かないやうに命ずる命令となつて現はれたのである。花瓶もまた、すべての容器と同じく、女の生殖器の象徵である。從つてそれが

てゐることを知つてゐる。そこに出席した人は各自その破片を自分のものにするのであるが、これは一夫一妻制度の立場から、その花嫁には以來何等の要求をしないといふ事を意味してゐるものと思はれる。患者はこの行爲に就いても多くの記憶と聯想とを持つてゐた。彼女は子供の時にガラス瓶或は磁器の瓶を落して、指を切り、酷く血を出したことがあつた。大きくなつて性交の話を聞いた時、彼女は結婚當夜に出血しないで處女でないことが分りはしまいかと心配し始めた。花瓶を割るまいとする彼女の用心は、從つて處女性と始めての性交の際の出血の問題に關する全複合體の否認、出血するだらうといふことゝ出血しないだらうといふことの心配の否認を意味してゐる。實際この用心は騷しくないやうにすることゝは餘り關係のないことであつた。

ある日枕敷をベットの背板に觸らせないといふ規則を理解した時、彼女はこの儀式的行爲の中心觀念をはつきりと知つた。彼女の話によると、枕敷は彼女には何時も婦人のやうに、立つてゐる木の背板は男のやうに見えたのであつた。從つて彼女は、いはゞ魔術的に、男と女とを離して置かうと欲したのである。換言すれば、兩親を離して××をさせまいとしたのである。この目的を彼女はこの形式的行爲を行ふやうなる數年前にもつと直接な方法で達しようとしたことがあつた。彼女は彼女の寢室と兩親の寢室との間の戸を閉めさせないためにわざと怖がつた、或は恐怖の傾向を利用した。この要求は今の彼女の儀式的行爲にも存續してゐた。かうして彼女は兩親のことを立聞きする機會を得たのであるが、これを利用して一ヶ月間眠れなかつたことがあつた。彼女はかうして兩親の眠りを妨げるだけでは滿足しないで、當時は時々兩親の寢床で彼等の間に寢ることにさへ成功した。「枕敷」と「ベットの背板」とはその時實際一緒になることが出來なかつたのである。しまひに、兩親と一緒に寢るのが氣持よくないほどに大きくなつた時には、彼女はわざと怖がつて母に場所を交換させ、彼女が父の傍で寢ることを斷念させてその同じ目的を達した。この出來事が空想の出發點となつたことは疑ふことが出來ない。さうしてそれの結果はその儀式的行爲に明かに認められたのである。

若しも枕敷が女であるならば、羽蒲團を振つて羽根を下部に溜め、そこに隆起をつくるといふことにも意味があ

る。それは婦人の懷姙を意味してゐた。けれども彼女はこの姙娠をなくしてしまふことを決して忘れなかつた。何故ならば彼女は幾年もの間、兩親の性交によつて子供が出來、彼女の敵手が現はれはしないかといふことを恐れてゐたからである。また一方、大きい枕敷が母を表はしてゐるものならば、小さな枕は娘を表はすの外はない。何故にこの枕は枕敷の上に菱形に置かれ、彼女の頭は縱にその眞中に横へられなくてはならなかつたか。彼女は壁に描かれた菱形は屢々開いた女の生殖器を意味することを直ぐに思ひ出した。彼女自身が男、即ち父の役割を勤めて、男の生殖器を彼女の頭で代用したのである。(斬首が去勢の象徵となることを參考せよ。)

少女の心にそんな淫逸な考が浮ぶだらうか、と諸君は言はれるであらう。私もそれは認める。けれどもこの考は私が造り出したものではなくて、單に解釋して得たものであることを忘れないやうにしていたゞきたい。またこの種の睡眠的の儀式的行爲は實に奇妙なもので、諸君はこの解釋によつて示された行爲と空想との間の對應を否定することは出來ないであらう。更に重要なことは、しかしながら、この儀式的行爲は唯一つの空想の結果ではなくて、無論何處かにその中心點を有する多くの空想の結果であることに留意していたゞきたいことである。またこの儀式的行爲は、時には積極的な時には消極的な性的欲望を反映してゐること、一部分はその欲望の現はれとして、一部はそれに對する防禦として役立つてゐることにも注意してほしい。

この儀式的行爲を患者の他の症候と關聯させて分析すれば、更に多くの結果を得ることは出來ようが、それは吾吾の今の目的ではない。諸君はこの少女は子供の時から父に對して色情的愛着を持つてゐたといふことを知るだけで滿足しなくてはならない。彼女が母に對して親切でなかつたのは恐らくはこのためであらう。吾々はまたこの症候の分析もまた患者の性的生活に繫つてゐることを看過することが出來ない。神經病的症候の意味と目的に就いて更に多くの知見を得れば、このことはそんなに驚くに足らないことが明かになるであらう。

私はこゝに選んだ二つの實例によつて、神經病的徵候は誤謬や夢と同樣に意味を有すること、患者の生活と密接な關係を有することを示した。私は諸君がこの二實例によつてこの極めて重要な立言を信じられると豫期してもよいであらうか。否。けれども諸君は十分に得心の行くまで私に多くの實例に就いて語るやうに要求してもよいであ

らうか。それも出來ない。何故ならば個々の症例を詳細に取扱へば神經病學のこの一點を考察するために一週五時間づゝ一學期を費さなくてはならないからである。されば私は私の主張を實例によつて證明したことで滿足しようと思ふ。これ以上のことはこの問題に關する文獻――ブロイエルの最初の患者（ヒステリー）の症候の代表的解釋や、C・G・ユングがまだたゞの精神分析學者で豫言者たることを欲してゐなかつた頃にした所謂早發性痴呆の極めて朦朧とした症候に就いての驚くべき説明や、爾來吾々の雜誌に滿載されてゐる論文等を參照されたい。確に吾々はこの種の研究にも事を缺かない。神經病的症候の分析、解釋、飜譯に精神分析學者が興味を持つてゐることは、神經病の他の諸問題を彼等が最近比較的に閑却してゐるのを見ても分る。

諸君のうちでこの問題の研究に必要な努力をされた人はきつとその證據材料の豐富なことに驚かれるであらう。けれどもまた一の困難にも遭遇されるであらう。症候の意味は、既に言つたやうに、患者の生活と關聯してゐるものである。症候が個性的に形成されて居れば居るほど、その關聯は明白に確證されると豫期してよい。從つてその仕事は結局、無意味な觀念や無目的な行爲のために、そこではその觀念が正當なものであり、その行爲が有用な目的を有してゐるやうな過去の事情を探し出すにある。机の所へ走つて行き、鈴を鳴らして女中を呼ぶ患者の强迫觀念的行爲はこの種の症候の適例である。けれどもこれとは全然異つた種類の症候もある。しかも極めて屢々。この所謂病氣の「同型的」症候はどの病例に於いても殆ど同一であつて、個々の差異は消失してしまふ、或は少くとも殆ど見られなくなつてしまふ。從つてそれを患者の生活と關聯させること、或は彼の過去のある事情と關係させることは極めて困難になる。强迫觀念的神經病を今一度考へて見よう。第二の患者の睡眠前の儀式的行爲は多くの點に於いては同型的ではあるが、また所謂「經歷的」解釋を可能ならしめるに足るほどの個性的特徴をも示してゐる。けれども强迫觀念的神經病者はすべて或る行爲を反覆し、他の行爲から離して、律動的に實行する傾向がある。大抵の患者は餘りに洗ひ過ぎる。臨場苦悶（場所恐怖症）――これは今日では强迫觀念的神經病の中には入れられないで、苦悶ヒステリーとして分類されてゐる――に惱んでゐる患者は同じ病的特徴を、屢々實に單調に、反覆する。彼等は閉された場所、廣場、長く延びてゐる街路、並木路を恐れる。彼等は同伴者があるか、車が後から

各自他とは全然異つた彼特有の狀態、いはゞ氣分ともいふべきものを有してゐる。例へばあるものは狹い街路だけを、他のものは廣い街路だけを恐れ、あるものは街路に殆ど人がゐないときにのみ、他のものは多くの人が居る時にのみ步くことが出來る。同樣に、ヒステリーも豐富な個性的特徵の外に、常に多くの共通な同型的症候を持つてゐて、それが經歷的解釋を困難ならしめるやうに見える。けれども實際吾々が診斷の方向を決定し得るのは、これらの同型的症候によつてゞある事を忘れてはならない。若し吾々があるヒステリーの症例に於いてある同型的症候の原因はある經驗或は一聯の類似の經驗であることを、例へばヒステリー性嘔吐は嘔吐させるやうな印象の結果であることを見出したとすれば、他の嘔吐の症例を分析して全然異つた種類の一聯の經驗が原因らしいことを發見した時には困惑せざるを得ないであらう。その時にはヒステリー患者は、何か未知の原因によつて嘔吐するのであつて、分析によつて曝露された經歷的誘因は、それが偶然現はれた時に內的必要によつて使用される、單なる口實に過ぎないかのやうにさへ見えるのである。

從つて、吾々は個性的な神經病的症候の意味はそれを患者の經驗に關係させて十分に說明することは出來るが、同じ症例に更に屢々現はれる同型的症候に對しては、吾々の方法は無力であるといふ悲觀的結論に到達する。その上、私は諸君に症候の經歷的意味を一貫的に追求する際に生ずる困難に就いては殆ど少しも言及しなかつた。またさうしようとも思はない。何故ならば、私は諸君から何事をも隱蔽しようとも胡魔化さうとも考へてはゐないが、吾々の研究の最初に當つて諸君を困亂させる必要はないからである。吾々はまだ症候の意味を漸く理解し始めたに過ぎないことは事實であるが、今までに獲得された知識を基礎として一步一步未知の領域に踏み入りたいと思ふ。されば私はある種の症候と他種の症候との根本的差異は、殆ど假定し得ないといふ考が諸君を元氣づけんことを望むものである。若し個性的症候が必ず患者の經驗と關聯を有するものならば、同型的症候がそれ自體同型的な、人類に共通な經驗と關聯してゐる事はあり得べきことである。例へば强迫觀念的神經病者の反覆や疑惑のやうな、神經病者には必ず再現する他の特徵は、普遍的な反應であつて、患者にはそれが病的變化の性質によつて誇張的に現

はれるのかも知れない。要するに、吾々は慌てゝ斷念する理由は少しも持つてゐない。これ以上に見出されるものを見ようではないか。

夢の理論にもこれと似た困難が存するが、私は夢を論じた際にこれに言及することが出來なかつた。夢の顯在內容は極めて多樣な、個々に異つたものであつて、吾々はこの內容から分析によつて手に入れることの出來るものを詳細に說明した。けれども夢にも同型的と名けらるべきものがある。このあらゆる人に同じやうな風に現はれ、同じ內容を持つた夢の解釋にも同じ困難が生ずる。飛行、墜落、浮揚、水泳、幽閉、裸の夢、その他の苦悶夢がそれであつて、これらの夢はその夢を見た人に從つて種々に解釋されるが、何故それが何時も同じやうに現はれるかといふことは少しも說明されてゐない。けれどもこれらの夢にも吾々は個々の異つた材料によつて彩られた共通な下層を認めるのである。さうして恐らくこれらの夢もまた、吾々が他種の夢の研究によつて獲得したところの夢の生活に就いての知識によつて、牽强附會的にではなく、吾々の知見が廣くなるに從つて、解釋されるやうになるであらう。

第十八講　外傷への固着、無意識

前講に於いて私は吾々の疑惑をではなくて今迄に得たところの知識を出發點としてこの研究を續けて行かうと思ふと言つた。前になされた二實例の分析から生ずる二つの最も興味ある推論を吾々はまだ語りさへもしてゐない。

第一に、この患者は二人共過去のある一點に固着させられ、如何にそれから脫すべきかを知らず、その結果現在からも未來からも遠退いてゐるかのやうな印象を吾々に與へる。彼等は、昔の人が不幸な運命の餘生を僧庵に退いて送るを常としたやうに、いはゞ、病氣のうちに隱遁してゐるのである。第一の患者にとつてはこの非運を彼女のために準備したものは實際に於いてずつと前に終りを告げた彼女の夫との結婚であつた。この症候によつて彼女は彼との關係を續けることが出來た。吾々はこの症候のうちに彼を辯護し、赦し、稱揚し、彼を失つたことを悲しんでゐるところの聲を聞くのである。彼女はまだ若く、他人に愛着を感じはしたけれども、彼に對する貞實を續ける

ためにあらゆる現實的の、及び想像的（魔術的）の用心をした。彼女は他人の前に出ようとしなかつた。容姿を氣に掛けなかつた。更に彼女は坐つてゐる椅子から容易に立上ることが出來なかつた。また署名することを拒み、贈物をすることが出來なかつた。何故ならば彼女は彼女の物を誰にも持たれたくなかつたからである。

若い娘である第二の患者にとつては、彼女の生活にこの役割を演じたものは、思春期以前に彼女が父に對して抱いてゐた色情的愛着である。彼女もまたこんなに病氣では結婚出來ないと考へてゐたのであつた。彼女は結婚出來ないでゐるために、また父の側にゐるためにこんなに病氣になつたのではないかとも考へられる。

どうして、どういふ風に、またどんな動機からして人は生活に對してかゝる異常な、不利な態度を執るに至るのであるか。若しもこの態度がこの二人の患者だけの特徴ではなくて、神經病の一般的特徴であるとするならば、吾々はかう問はざるを得ないのである。さうしてその態度は實際はあらゆる神經病の一般的な、極めて重要な實際的意義を有する特徴なのである。ブロイエルの最初のヒステリー患者も、これと同じやうな風に、彼女が危篤な父を看護した時に固着されてゐた。彼女の病氣は囘復したにも拘らず、爾來彼女はある點では生活から離れてゐた。何故ならば彼女は健康で活動することは出來たのに、普通の女の道を進まなかつたからである。吾々のどの患者も症候とその結果によつて彼の生活の過去のある時期に連れ戻されてゐることを、吾々は分析によつて知ることが出來る。しかしてこの選ばれた時期は大抵は少年期である。あり得ないことのやうに思はれるかも知れないが、乳呑兒時代のことさへもある。

吾々の神經病患者の此行動に最もよく似たものは、最近大戰によつて人々に噲炙するやうになつたところの疾病——所謂外傷的神經病に見出される。無論かゝる病例は戰前にも鐵道事故の後とか、生死に關する恐ろしい經驗の後とかにも起りはした。外傷的神經病は根柢に於いては吾々が何時も分析的に研究し治療する自發的神經病と同じものではない。またそれを吾々の見解によつて說明することもまだ出來ない。兩者の限界は何處にあるかといふことは後に示し得ることゝ思ふ。けれどもある一點に於いては兩者は完全に一致してゐることを指摘したい。外傷的神經病患者はその根柢に外傷的出來事の瞬間への固着の存することを明かに示してゐる。彼等の夢には外傷を受け

た當時のことが反覆して現はれる。分析の可能なヒステリー性發作の現はれる場合には、その發作は當時の狀況の完全な再現であることが分る。これらの患者は外傷を起させた事情を適當に處理し得ないかのやうである。それはまだ結末のついてゐない實際問題として彼の前にあるかのやうである。吾々はこのことを眞面目に理解する必要がある。それは心的過程をいはゞ經濟的に考察する道を吾々に指示してゐる。「外傷的」といふ語は實際かゝる經濟的意味しか持つてゐないのである。吾々が外傷的と呼ぶところの經驗は心的生活を短時間のうちに、常態的方法ではそれを脫却し、取除くことの出來ないほどに强く刺戟し、そのために心的勢力の活動が持續的に障碍される經驗のことである。

この類似からして吾々は吾々の患者が固着させられたやうに見えるあの經驗をも外傷的と呼びたく思ふ。かうすれば神經病的疾患の條件は簡單になることであらう。神經病は外傷的疾患と同じく餘りに强い情緖的體驗から脫却し得ないところから生ずるものとなるであらう。また實際ブロイエルと私とが、一八九三―九五年に、吾々の新觀察から得たところの理論の最初の敍述もこれに似てゐた。前に述べた第一の患者たる、彼女の夫から別れた若い婦人の例は丁度この見解に妥當する。彼女は有名無實の結婚を超越してしまふことが出來ないで、何時までもその外傷に執着した。けれども彼女の父に固着した少女の第二例はこの敍述の十分包括的でないことを明かに示してゐる。一方かゝる少女の父への愛着は、若しそんなものに適用すれば、「外傷的」といふ語は全然その意味がなくなつてしまふほどに、あり觸れた、屢々忘られてしまふ經驗であり、他方ではこの患者の病歷は、この最初の色情的固着は、始めは見たところ少しの害もなしに經過し、數年後に至つて始めて强迫觀念的神經病となつて現はれたことを示してゐる。從つて吾々は神經病の決定條件は極めて豐富であり、複雜であることを豫見するのである。けれども吾々はまた外傷的見解が誤つたものとして廢棄される必要もないと思ふ。この見解は他の更に包括的な見解の一部分をなすべきものであらう。

吾々はこゝで再び吾々が辿つた來た道を棄てなくてはならない。このまゝではこれ以上に進むことが出來ない。この研究を滿足に續け得るためには他の多くのことを學ぶ必要がある。けれども吾々は外傷への固着の問題から離

れる前に注意すべきことは、かゝる現象は神經病以外にも廣く現はれるといふことである。あらゆる神經病はかゝる固着を包含してゐるが、あらゆる固着は神經病を引起すとは限らない。また神經病と結合してゐるとも、神經病の進行中に生じるとも限らない。憂愁は過去のあるものへの情緒的固着の代表例であり、神經病と同じやうに、現在及び未來からの完全な隔絶の狀態をさへも伴ふものである。けれども憂愁は素人考へでさへも神經病とは全然異つてゐる。けれども憂愁の病的狀態と見ることの出來る神經病はある。

また人々が彼等の生活を根柢から攪亂した外傷的經驗のために完全な停滯狀態に入り、現在にも未來にも少しの興味を感ぜず、たゞ絶えず回想にのみ耽るといふやうなことも起るが、これらの不幸な人々が必ず神經病者になるとは限らない。從つて吾々はこの一特徵を、それが他の場合には如何に常在な、重要なものであらうとも、神經病の特質として過重視しようとは思はない。

今度は吾々の分析から得られる第二の推論の方に轉じよう。これは何等の追加的制限を必要としない推論である。吾々は第一の患者が行つた無意味な强迫觀念的行爲と、それに關聯して彼女が思ひ出した內密な記憶のことを語つた。また吾々は兩者の關係を考察して、それの記憶に對する關係から强迫觀念的行爲の目的を明かにした。けれども吾々はその時吾々の十分な注目に値する一要因を全然看過した。卽ち患者はこの實行を續けてゐた間は、それが過去のあの經驗と關聯してゐることを知らなかつたのである。兩者の關聯は隱されてゐた。彼女が何故こんなことをするのか知らないと考へたのは本當である。ところが治療の效果によつて彼女は突然この關聯を發見し、それを物語ることが出來るやうになつた。けれどもその時に於いてさへも彼女はその行爲の目的、過去の苦痛な事件を訂正し、彼女の愛した夫を高く評價しようとする目的に就いては何も知らなかつた。彼女がかゝる動機のみがこの强迫觀念的行動の衝動力であり得たらうといふことを理解し、私に告白するまでに可成り長い時間と非常な努力とが必要であつた。

不幸及び結婚の夜の後の場面との關聯と患者自身の夫に對する愛情とが一緒になつて、吾々の所謂强迫觀念的行爲の「意味」を生ぜしめてゐる。けれども彼女はこの行爲を實行してゐる間は、この意味の兩方面、卽ちその行爲は

觀念的行爲を生ぜしめたところの心的過程がはたらいてゐたのである。彼女はその過程の結果を常態的心理狀態で意識してはゐた。けれどもその結果の心的先行條件は少しも意識されなかつた。彼女はベルンハイムから覺醒後五分經てば病室の內で洋傘を開くやうに命ぜられてそれを實行した被催眠者と同じく、その行動の動機に就いては何も知つてゐなかつた。吾々が無意識的心的過程と呼ぶのはこの種の狀態である。吾々はこの事柄に就いてもつと正しい科學的說明を與へる人があるならば、喜んで無意識的心的過程は存在するといふ假定を撤回しようと思ふ。けれども誰かゞそれをなすまではこの假定に固執する。さうして若し誰かゞ「無意識」は科學的な意味に於いては實在しない。それは遁辭であり、une façon de parler であると反駁するならば、吾々はそんな言葉は理解し得たいと諦めるの外はない。實在はしないが、それにも拘らず强迫觀念的行爲のやうな現實的なものを生じ得るやうなものがあるであらうか！　この過程は第二の患者にも確に見出される。彼女は枕敷はベツトの背板に觸れてはならないといふ規則を造り上げて、それを實行したが、彼女はそれが何處から來たか、何を意味するか、それに力を供給するものは何であるかといふ事に就いては何も知らなかつた。彼女がそれに無關心であつたか、反抗したか、怒つたか、打勝たうと決心したかどうかは、彼女の實行には何の關する所もない。彼女は其規則に從はざるを得たいのである。彼女が何故と尋ねる事は徒勞である。何も何處から生じたかを知らず、また他の常態的心的生活のすべての影響にかくも頑强に反抗し、患者自身にさへも他界からの强力な訪問者、人間の渦卷のうちに紛れ込んだ不死の存在者の仕業ではあるまいかと思はせる强迫觀念的神經病のこの症候、この觀念、この衝動は、ある特別な、他のものから分離した心的活動の領域の存在することの最も明白な證據である。この症候から考へれば、吾々は心のうちに無意識的なものゝ存在することを確信せざるを得ない。さうして意識の心理學のみを認める臨床的精神病學が、この症候をある特殊な變質の標徵であると言ふ外には爲す所を知らないのは正にこの理由によつてゞある。無論强迫觀念と衝動自體が無意識でないことは强迫觀念的行爲の實行がさうでないのと同樣である。若しそれが意識に入らなかつたならば、それは症候とはならなかつたであらう。けれども分析によつて明かになつたその症候の心的先

要條件、吾々が解釋して見出した關聯は無意識的である、少くとも分析によつて吾々が患者にそれを意識させるまではさうである。

さて、この二實例によつて確證された事實はあらゆる神經病的疾患のあらゆる症候によつて確證されること、症候の意味は常にまた何處に於いても患者には意識されないこと、分析の示すところによれば症候はきつと無意識的心的過程から出て來るものではあるが、種々の好條件の下に於いては意識的になることを考へるならば、吾々は精神分析に於いて心の無意識的な部分を無視し得ないこと、その部分を現實的なものと同じやうに扱ひ慣れてゐることを諸君は理解されるであらう。恐らくまた諸君は、無意識をたゞ概念としてのみ知り、一度も分析したこともなく、夢を解釋したこともなく、神經病的症候をその意味と目的に飜譯したこともない人々が、如何にこの問題に就いて判斷を下す資格に缺けてゐるかといふことをも認められるであらう。このことを銘記して貰ふために繰返して言へば、分析的解釋によつて神經病的症候にある意味を見出すことが出來るといふ事實は、無意識的心的過程の存在することの、或は、若し諸君が好まれるならば、さう假定せざるを得ないことの、確かな證據である。

けれどもこれでしまひではない。ブロイエルの第二の發見――これは彼が共働者なしに得たもので、第一のよりも重要なものと私は思ふ――のお蔭で、吾々は無意識と神經病者の症候との關係に就いて、更に多くのことを學んだ。症候の意味は常に無意識的であるばかりではなく、兩者の間には代用的關係がある。即ちこの無意識的活動によつてのみ症候の存在は可能となるのである。諸君は私の言つてゐることを直ちに理解されるであらう。私はブロイエルと共に次のやうに主張したい。一の症候を見出す毎に吾々はその症候の意味を包含するある無意識的過程が患者の心内に存在してゐると推定することが出來よう。けれどもまたこの意味はその症候が生ずるまでは無意識的でなくてはならない。意識的過程からは症候は形成されない。關係のある無意識的過程が意識されゝば症候は消失する。諸君は直ちにこゝに治療への通路、それによつて症候を消失されることの出來る方法を認められるであらう。さうしてブロイエルが實際に彼のヒステリー患者を癒したのは、即ち症候から解放したのは、この方法によつてゞあつた。彼は症候の意味を包含してゐるところの無意識的過程を意識に上らす方法を發見した。さうすると症候は

消失したのである。

ブロイエルのこの發見は何等思索の結果ではなくて、彼の患者との共働によつてなし得た幸運な觀察の結果であつた。さて諸君はこれを諸君が既に熟知してゐる何かと比較して理解するために心を勞してはならない。寧ろそのうちにそれによつて他の多くのものが說明されるところの根本的に新しい事實を認めなくてはならない。さればこのことを他の言葉で反覆することを私に許していたゞきたい。

症候は潜在してゐるあるものゝ代用として形成されるのである。常態に於いてはある心的過程は發展して當人に意識されるやうになるであらう。けれどもさうならないでその代りに遮斷された、どうにかして阻碍されて無意識のまゝである過程から、症候が現はれることがある。從つて交換のやうなあることが起つてゐる。若し吾々がこの過程を退行させることに成功すれば、神經病的症候の治療は成就されてゐるのである。

ブロイエルの發見は今もなほ精神分析的治療の根柢となつてゐる。症候はそれの無意識的先行條件が意識された時に消失するといふ命題は、これを實行しようとすれば異常な、豫期しない複雜に遭遇しはするけれども、それ以後の研究によつて確證されてゐる。吾々の治療法は無意識的なあるものを意識的なあるものに變形するにある。さうしてこの變形をなし得た限りに於いてのみその治療は成功する。

こゝで諸君がこの治療は極めて容易であると想像されることのないやうに、一言して置きたいことがある。諸君は考へられるであらう。吾々が今までに達した結論によれば、神經病は一種の無知の、知らるべき筈の心的過程を知らない結果である。これは罪惡でさへも無知の結果であるといふ、あの誰も知つてゐるソクラテスの學說に近似したものである。さて分析に經驗のある醫者にとつては、その患者にはどんな心的活動が無意識のまゝであるかといふことを推量するのは通例極めて容易であらう。從つて醫者は患者にそれを敎へて、彼を無知から解放する事によつて彼を癒すのは困難な事ではなからう。少くとも症候の無意識的意味の一面はかうして容易に明かにされるであらう。無論、分析者は患者の經驗を知らないから、他の一面、卽ち症候とその經驗との間の關係に就いては殆ど推量することが出來ず、患者がそれを憶起し、彼に語るまで待たなくてはならないであらうけれども、しかしな

がら多くの場合には、これにさへも代理者を見出すことが出來よう。彼の過去の生活に就いては彼の友人や親戚に尋ねることが出來る。彼等は屡々どの事件が外傷的に作用したかといふことを知つてゐることがある。恐らくは子供の時に起つたがために患者自身さへも知らないことを語ることが出來よう。この二方法を兼用すれば、患者の病源となつてゐるところの無知は、短時間に多くの勞を盡すことなしに取除かれるやうに思はれる。

若しさういふ風に行きさへすれば！　けれども吾々は最初に氣がついた。知識はいつも同じものではない。心理學的に見て決して同一の價値を持つてゐない種々の種類の知識がある。モリエールが言つたやうに「馬鹿にも色々な種類がある」である。醫者の知識は患者の知識と同じものではなく、また同じ效果を現はすことは出來ない。醫者が自分の知つてゐることを患者に語つたところが何の效果もない。否、かういふのは正しくない。そのことは症候を消散する效果を持つてゐないで、却つて分析を始めさせる。さうしてその結果は屡々先づ抗辯となつて現はれるのである。患者は今まで知らなかつたこと、卽ち症候の意味を知つたが、しかもなほ前と同樣にそれに就いては何も知つてゐない。かうして吾々は不知にも一種以上あることを知るのである。その差異が何から成立つてゐるかといふことを示すためには、吾々の心理學的知識を更に深くする必要があらう。けれども症候はその意味が知られると共に消失するといふ命題は、それにも拘らず矢張り眞である。たゞこゝで必要なことは、その知識は一定の目的を持つた心的作用によつてのみ引起され得るところの患者の內的變化なくしては無效であるといふことである。こゝで吾々は間もなく症候形成の力學の形で現はれるところの諸問題に面接してゐるのである。

こゝで私は諸君に尋ねなくてはならない、私が諸君に語つてゐることは餘りに曖昧複雜ではなからうか、私は屡々後戾りしたり、限定したり、言ひかけてはまた止めたりすることによつて諸君を困惑させてはゐたいだらうか、と。若しさうであれば私は遺憾に思ふ。けれども私は眞理を犧牲にしてまでも簡單にすることは大嫌ひである。この問題が多面的で錯綜してゐると感じ切つても私は構はない。また一々の問題に就いて諸君がその瞬間に同化し得るよりも多くのことを述べるのは有害なことではないと思ふ。聽者や讀者は誰でも彼に提供されたものを整頓し、縮め、簡單にし、覺えてゐようと思ふものだけを抽出することを私は知つてゐる。ある程度までは說明が豐富であ

ればあるほど記憶されることも多いといふことは事實である。されば私は話は詳細に過ぎたが、諸君が症候の意味、無意識及び兩者の關係に就いて私が述べたことの要點を、明白に理解して居られることを望むものである。諸君はまた吾々のこれからの努力は二方向に進むであらうことをも理解して居られるであらう。卽ち、第一は人々はどうして病氣になるか、どうして彼等は神經病的な生活態度を執るか、何が臨床的問題であるかといふことを知るために、第二はどうして神經病的諸條件から病的症候が現はれ出るのであるか、心的力學の問題として殘るものは何であるか、といふことを知るために。さうしてこの兩問題はどこかで接觸するに相違ない。

今日はこれで止めようと思ふが、まだ時間が餘つてゐるから吾々の二つの分析のもう一つの特色、卽ち記憶の間隙或は記憶喪失（このことも後に詳說する）に諸君の注意を促したいと思ふ。さて精神分析的治療の仕事は要約すれば、無意識內にあるあらゆる病原的なものを意識內に置き換へるにある、といふことは諸君の既に聞かれたところである。今若しこれを、患者の記憶の間隙を滿たし、彼の記憶喪失を取除くにあるとも言ひ換へることが出來ると聞いたならば、諸君は恐らく驚かれることであらう。この兩者は結局同じことを意味する。從つて神經病者の記憶喪失は、彼の症候の發生と重要な關係を有してゐるといふ事になる。けれども若し諸君が吾々の最初に分析した症例を考察されるならば、記憶喪失に就いてのこの評價は不當なものであることを見出されるであらう。この患者は强迫觀念的行爲の原因となつた場面を忘れてはゐなかつた。その反對にそれを鮮かに記憶してゐた。また彼女の症候の形成には忘却された他の如何なる要素も參加してゐない。これほど明かではないが、第二の患者、强迫觀念的行爲をした少女に於いても事情は全く似てゐる。彼女もまた前年の自分の行動、卽ち兩親と自分との間の戶を開けて置くと言ひ張つた事實も、母を兩親の寢床から追ひ出した事實も本當には忘れてゐなかつた。躊躇しながら、また厭々ながらではあつたが、そのことを極めてはつきりと思ひ出した。こゝで不思議なことは第一の患者は、その强迫觀念的行爲を幾度となく實行したにも拘らず、それと結婚の翌日の場面との類似を一度も思ひ出さず、彼女の强迫觀念的行爲の起源を探すやうに明かに求められた時にもそれを思ひ出さなかつたことである。これは儀式的行爲ばかりでなく、それを生ぜしめた事情も每晚同じやうに繰返された少女の場合にも同じである。どちらの場合

にも記憶は本當に脱落してはゐたかつた。けれども記憶の再現、憶起を生ぜしむべき關聯が中斷されてゐた。この種の記憶の障碍は强迫觀念的神經病を引起すに十分である。但しヒステリーの場合はちがふ。ヒステリーは大抵もつと大規模な記憶喪失をその特色とする。通例個々のヒステリー的症候を分析すれば以前の印象の全連鎖が現はれて來る。さうしてこの復歸によつてそれらは今まで本當に忘却されてゐたことが明瞭になる。またこの連鎖は最幼時にまで達してゐるから、ヒステリー性記憶喪失は、すべての常態人の心的生活の最初期を隱蔽する、幼時性記憶喪失から直ちに續いてゐるものであることが分る。ところが驚くべきことには、患者の最近の經驗もまた忘却され勝なもので、特にその病氣の勃發或は憎惡の誘因となつたところの刺戟は、その記憶が全然喪失はされないとしても、少くとも一部分は抹消される。通例、かゝる最近の記憶の全體からは重要な事項が消失してゐるか、或は誤つた記憶によつて置き換へられてゐる。實際、分析が殆ど終りに近づくまで最近の經驗のある記憶が表面に現はれて來ないで、その記憶に著しく脈絡が缺けてゐることは、幾度も、殆ど必ず、ある。

かゝる記憶能力の障碍は、前に言つたやうに、ヒステリー病の特色であつて、その病氣に於いてはその痕跡を必ずしも記憶に殘さないやうな狀態でさへも、症候(ヒステリー性發作)として現はれることがある。强迫觀念的神經病に於いてはかうでないから、諸君はこれらの記憶喪失はヒステリー性變化の心理學的特色であつて、神經病一般の普遍的特徵ではないと結論されるかも知れない。この差異の重要さは次のことを考察すれば減少するであらう。症候の「意味」は二つのものから構成されてゐる。「何處から」と「何處へ」或は「何のために」、即ちそれからその症候が生じて來た所の印象或は經驗とそれの目的とがそれである。症候が何處から來たかといふことは、外部から來た、さうして一時は必ず意識されたがそれ以後忘却されて無意識になつたかも知れないところの諸印象と一緒になつてしまふ。けれども症候の目的、傾向は心內的過程であつて、最初は意識されたかも知れないが、また決して意識されないで、始めから無意識內に隱されてゐたかも知れない。從つて記憶喪失がヒステリーに於いて起るやうに、その症候を誘致したところの印象、即ち「何處から」を侵したとしても餘り重要なことではない。强迫觀念的神經病に於いてもヒステリーに於けると同じほどに、その症候を無意識のまゝに置くものはその症候の傾向、即ち「何

處へ」である。

けれども心的生活に於ける無意識的なるものを高調したがために、吾々は精神分析に對する最も悪意ある批評を喚び起した。諸君はこれに驚くことはない。またこの反對は無意識を理解することの困難から、或はそれの存在を證明する證據を比較的手に入れ難いところからなされてゐるのであると考へてはならない。私はその反對にはもつと深い理由があると信じてゐる。人類はこれまでに科學の手によつて彼等の素朴な自愛に對して與へられた二個の非常な侮辱を堪へ忍ばなくてはならなかつた。その最初は人類が、地球は宇宙の中心ではなくて、殆ど想像を超える宏大な世界體系中の一小點に過ぎないことを知つたときであつた。これは、アレキサンドリアの學說も似たことを教へてゐるけれども、吾々にコペルニクスの名を聯想させる。その第二番目は生物學的研究が、人類から特別に創造されたといふ特權を奪つて彼を動物界に貶謫し、彼のうちにある動物的性質は滅し得べくもないことを示した時であつた。この價値轉換はチャーレス・ダーウイン、ワーレス及び彼等の先驅者達の影響によつて現代に於いて成されたのであるが、彼等の同時代人の激烈な反對を受けないことも無かつた。けれども人類の偉大を望む心は、今や現代の精神分析的研究によつて第三の、最も苦痛な攻撃を受けてゐるのである。即ち精神分析は、「自我」は自分の家の主人でさへもなくて、彼の心の中に無意識的に行はれてゐることに就いての貧弱な報告に頼る外はないといふことを證明しようと努めてゐるのである。吾々精神分析學者は、人類に內觀を提唱した最初のものでも、唯一のものでもない。けれどもこのことを最も強く主張し、各人が近づき得る經驗的材料によつてそれを確證することは、吾々の任務であるやうに思はれる。精神分析に對する一般の反感、論爭の際に於ける禮儀の完全な無視、公平な論理の一切の拘束を脫した反對はこゝから來てゐるのである。この外に、吾々は世界の平和を他の方法でも擾すの止むなきに至つたが、このことは次講に述べようと思ふ。

第十九講　抵抗と抑壓

吾々は神經病に就いての理解を進めるためには新しい觀察が必要である。吾々は二つの觀察をしようと思ふ。兩

者とも極めて奇妙なもので最初は極めて驚くべきものであつた。無論諸君は前年の私の講義によつて兩者に對しては十分な準備を有して居られる筈である。

第一、吾々が患者の症候を治療しようとする時に、彼はその治療中吾々に頑強抵に抗する。これも多くの人々には信用されさうにもないけれど奇妙な事實である。患者の親戚にはこのことを言はないに限る。何故ならば彼等はきつとこれを治療の長引く、或は失敗した口實であると考へるからである。患者もまたそれが抵抗であるといふことを認めないでこの抵抗を現はす。若し彼にこの事實を悟らせ、これを勘定に入れさすことが出來れば、そのことが既に一大成功である。その症候にあんなにも自ら惱み、その症候を取除くためには多くの時間、金錢、努力及び自制の犧牲をも厭はない周圍の人々をも惱ませてゐる病者が、その病狀のために彼の助力者に敵對するといふことを考へて見るがよい。そんなことは噓のやうに聞えるに違ひない！　しかもそれは事實なのである。若し誰かゞそんなことはあり得べからざることであると非難するならば、吾々はたゞそれに類似したことが無くもないと答へさへすればよい。恐ろしい齒痛のために齒醫者のところへ駈け付けた人は、醫者が痛い齒に鉗子を近づけようとする時には彼は抵抗するものである。

患者の現はす抵抗は極めて多樣で、微妙で、屢々それを認めることが困難であり、それの現はれる形式は刻々に變化する。分析者は常に疑を抱き、それに欺かれないやうに用心しなくてはならない。吾々は精神分析的治療に當つては夢の解釋によつて既に諸君の熟知して居られるところの方法を使用する。吾々は患者に冷靜な自己觀察の態度を執り、何等の成心なしに、彼が内的に意識するあらゆるもの、感情、思想、憶起をそれの現はれた順序に物語るやうに求める。吾々はその際彼が何等かの動機によつて聯想のどれかを、それを語るのは餘りに「不快」だとか、餘りに「無分別」だとか、或は語る價値のないほど「些細なこと」だとか「無關係なこと」だとか「無意味なこと」だとかいふどんな理由によつても、選擇したり、除外したりする事のないやうに警戒する。吾々は彼に意識の表面に現はれたものゝみに注意し、彼の見出す批判は、それがどんな形のものであつても、すべて斷念するやうに印象せしめる。さうして治療の成功は、時に治療の長さは、彼がこの分析の方法の根本的規則を守る誠意がある

かどうかによつて定まるものであることを告げる。吾々は夢の解釋の方法からして、無數の疑惑や抗議を生ぜしめるところの、これらの聯想にこそ、通例無意識の發見に導くところの材料が包含されてゐることを知つてゐる。

この方法的根本規則の制定によつて現はれる第一の結果は、それが抵抗の攻擊點となることである。患者はこの規則から免れるためにあらゆる手段を用ひる。最初は何も思ひ浮ばないと言ふ。次には餘りに多くのことが浮んで來るので一つも把握することが出來ないといふ。次には彼がある時には一の、ある時には他の批判的抗議に耳を傾けることを吾々は不快と驚きを以て觀察する。そのことは彼が談話中に長く躊躇ふので分る。最後に彼は本當のことを言ふことは出來ない、恥しいと告白して、その感情によつて彼の約束を破る。或は、あることを思ひ浮べはしたが、それは自分に關することではなくて他人に關することだから言ふ譯に行かないと言ふ。或は今考へてゐることは實際餘りに些細な、馬鹿げたことであると言ふ。この外言ひ盡せないほど色々ある。これに對しては、すべてを言ふことは實際すべてを言ふことを意味すると答へなくてはならない。

自分の思想のある部分を、分析によつて曝露されたくないために、その部分のことを言ふまいと試みいふやうな患者は殆ど一人もない。聰明な一人の患者は彼の祕密な戀愛事件を幾週間も私に隱して、この神聖な規則を侵したことを詰られた時に、彼はこの事件は自分の私事であると信じてゐたと言つて辯護した。分析的治療がかゝる避難の權利を許し得ないことは言ふまでもない。これはウインのやうな町の市場や或は聖ステッヘン寺院近くの廣場のやうな部分で逮捕することを禁ずることを許して置いて、それから犯人を捕へようとするやうなものである。犯人がこの避難所以外の場所では見つけられないであらうことは言ふまでもない。嘗て私は彼の作業能力の囘復が社會的に重要なものであつたところの一人にかゝる除外權を許したことがあつた。何故ならば彼はある服務宣誓のためにある事柄を他人に語るのを禁じられてゐたからである。彼は確かにその結果に滿足してゐたが、私は出來なかつた。私はかゝる條件の下では二度と分析をしないと決心した。

强迫觀念的神經病患者は實に巧みに彼等の餘りに用心深さと疑惑とによつて、方法的規則を殆ど無用に歸せしめることを知つてゐる。苦悶ヒステリーの患者は時としてはたゞ求められてゐるものとは全然かけ離れた、分析に

何等の手掛りをも與へないやうな聯想をすることによつて、この規則を何の役にも立たぬものにすることに成功する。けれども私は諸君に治療に於けるこれらの方法的困難を紹介しようとしてゐるのではない。最後には、決心と忍耐によつて、患者をこの方法の根本的規則にある程度に從はすことが出來ることを知れば十分である。抵抗はこの時その方向を變ずる。抵抗は今度は知的抵抗となつて現はれる。議論をその武器とする。常態的ではある無教育な人々が、精神分析學に見出されると考へるところのその困難と、ありさうもないことを指摘して抵抗する。吾々はその患者の口から科學的文獻のうちに鳴り響いてゐる一切の批評や反駁を聞かなくてはならない。從つて批評家が外で吾々に對して叫んでゐることは決して新しいことではない。それは實際井戸の中の蛙の喧嘩である。それでも患者は吾々の言ふことには耳を傾ける。彼は吾々が彼に教へ、導き、辯駁し、彼が更に深く學び得るやうに文獻を紹介することを非常に喜ぶ。彼は、若し自分自身が分析されることさへないならば何時でも精神分析の支持者とならうとしてゐるのである。けれども吾々はこの知識慾が抵抗であり、吾々の當座の仕事からの回避であることを認めて、さうすることを拒む。强迫觀念的神經病者は特殊な、抵抗方法を使用することを吾々は豫期しなくてはならない。彼は屢々その分析を少しの障碍もなしに進ませるので、その症候の謎はだん〳〵明かになつて來る。けれども吾々は最後に、これらの説明がそれに對應する症候に何故實際的效果を及ぼさないか、何故その症候を減退せしめないかと訝り始める。さうして抵抗は强迫觀念的神經病に特有な疑惑にまで退却して、そこで吾々の攻擊を巧に與へてゐることを發見する。患者はふと次のやうなことを言つた。「これは實に面白い。私はもつとやつてもらひたいと思ふ。若しこれが本當なら私の病氣を善くすることだらうが、私は一寸もそれを信じない。また私が信じない以上はそれは私の病氣を善くすることは出來ない。」從つて吾々が最後にこの保留的態度に對して決戰を始めるまでには長い時間がかゝる。

知的抵抗は最も取扱ひ難いものではない。それにはきつと打勝つことが出來る。けれども患者はまた分析の範圍內にあつて如何に抵抗すべきかといふことを知つてゐるから、それに打勝つことはこの方法の最も困難な仕事の一つである。患者は憶起する代りに彼の以前の生活のうちの、所謂「轉移作用」によつて、醫者及び治療に對する抵

抗として利用し得るやうな感情や心的態度を反覆する。若し彼が男である時には、彼はこの材料を通例彼の父——彼はその醫者を父の地位に置く——に對する關係から取り、さうして彼の人格と判斷の獨立を得ようとする努力から、父と同等にならうとする、或はそれを凌がうとすることをその最初の目的としたところの彼の功名心から、感謝の重荷を再び自分で背負ひたくないといふ彼の意志から、抵抗を造り上げる。そこで分析者は患者の分析者を誤らさうとする、彼の無力を感ぜしめようとする、彼に打勝たうとする意圖が病氣を癒さうとするもつと價値ある意圖を放逐してしまつたのではないかと感ずるほどになる。婦人は抵抗の目的のために分析者への愛情的な、色情的なところのある轉移を利用する天才を持つてゐる。愛着がある强さに達すると、治療の成績に就いての興味も、治療を始める時に彼女に課せられた義務も消え失せてしまふ。さうして已むを得ざる拒絶（それが如何に注意深くなされようとも）に對して必ず現はれて來る嫉妬と憤恚は、醫者に對するその患者の人間的關係を損ひ、從つて分析の最も强い原動力を使用出來ないやうにしてしまふ。

この種の抵抗は一概に非難さるべきではない。それには患者の過去の生活の多くの最も重要な材料が含まれて居り、またそれがはつきりと現はされてゐるから、それを巧みに利用することが出來れば、分析の非常な助けになる。たゞ注意すべきは、これらの材料は最初は常に抵抗に役立ち、治療を妨げるやうな假面を被つてやつて來ることである。それは變化せしめようとする企てに敵對せんがために動員された自我の特性であり、心的態度であるとも言へよう。吾々はこの抵抗からしてこの特性が精神病の諸狀態と關聯して、またその要求に對する反應によつて形成されるものであることを知り、抵抗がなかつたならば現はれない、少くともこれほど明瞭には現はれない、潜在的とも呼ばるべきこの特性の特徵を認めるのである。諸君はまた吾々はこれらの抵抗の現はれを吾々の分析的影響を脅かす豫知し難い危險であると見做してゐると考へてはならない。否、吾々はこれらの抵抗の現はれざるを得ないことを知つてゐる。吾々はその抵抗を十分明瞭に現はさせて、患者にそれが抵抗であることを認めさせ得ない時にのみ不滿を感じるのである。實際、吾々は終にこれらの抵抗に打勝つことが分析の主要な仕事であり、この部分の仕事のみが、吾々が患者に何物かを齎し得ることを保證するものであることを理解するに至つた。

更に、患者は治療中のあらゆる偶然的出來事、彼を分析から離させるやうなあらゆること、彼の社會にあつて彼が權威者であると考へてゐる人々のあらゆる反對的な意見、偶然の、或は神經病を錯雜たらしめる肉體的疾患等をその分析を妨げるために利用すること、否、彼の病狀の快方に向つてゐることをさへも、彼の努力を弛める理由に利用することを忘れてはならない。さうするならば諸君はあらゆる分析の際に遭遇し打勝たねばならない所の抵抗の形式と方法を、完全にではないまでも、大體心に描くことが出來よう。私がこの點をこんなに詳説したのは、神經病患者が彼等の症候の治療に對して示す所の抵抗に就いての吾々の經驗は、神經病に就いての吾々の動的見解の基礎となつてゐるからである。ブロイエルと私とが始めて催眠的方法によつて精神病を治療したのはブロイエルの最初の患者は始めから終りまで催眠的被暗示狀態に於いて治療された。私も最初はこの例に從つた。正直に言へば、當時私の仕事は今よりも更に容易にまた愉快に進み、時間も餘りかゝらなかつた。けれどもその結果は一定せず、また持續的でなかつた。それで私は到頭催眠術を斷念した。さうしてその時催眠術を使用してゐる限りは、これらの疾患の動的機構を理解することは不可能であることを知つた。この狀態に於いては抵抗の存在そのことが醫者に觀察されないのである。催眠狀態は抵抗を押し退けて或る領域内の分析作業を自由ならしめるが、その境界のところで、强迫觀念的神經病者の疑惑がすると同じやうに、それ以上進めないやうに堰き止めてしまふ。從つて眞の精神分析は催眠狀態の助けを借りなくなつた時に始めて始まるものであると言つてもよからう。

若しもこの抵抗の確認がかくも重要なものであるならば、抵抗は存在するといふ吾々の假定は餘りに輕卒になされてはゐないかどうかといふことを愼重に疑つて見るのは確かによいことである。恐らく他の理由で聯想のなされないやうな神經病の症例も實際に存することであらう、恐らく吾々の見解に對する批判は實際に十分な注意に値するもので、患者の知的批判を自分の都合のよいやうに抵抗であると片付けてしまふのは不當であらう。その通りである。けれども吾々は決して輕卒にこの判斷に達したのではない。吾々はこれらの批判的患者を屢々抵抗の現はれた時にも、消え去つた後にも觀察したが、その抵抗の强度は治療中絶えず變化する。それは何時も新しい題目が取扱はれかけると增加し、取扱はれてゐる間は最も强くなり、取扱はれてしまふと再び消え失せる。また、何かの不

手際を仕出かさなければ、患者がなし得る限りの抵抗を取扱はなくてはならないやうなことも決してない。かうして吾々は同一人は治療中に幾度も〳〵批判的態度を執つたり棄てたりすると斷定することが出來よう。吾々が新しい、さうして特に彼に苦痛な無意識的材料を意識内に齎す時に彼は最も批判的になる。たとへ彼が旣に多くのことを理解し、容認してゐるとしても、それらの習得物はその時無くなつてしまふかのやうである。彼がどんな犧牲を拂つても反對しようとしてゐる時には全く情緒的精神薄弱者のやうに振舞ふ。若し吾々がこの新しい抵抗に打勝つやうに彼を助けることに成功すれば、彼は再び彼の知見と理解力を取戾す。彼の批判力は決して獨立的に作用してゐるものではなく、從つてさういふ風に考へらるべきではない。それは彼の情緒的態度の助手で、彼の抵抗によつてどうにでも使用されるものである。若し何かゞ彼の氣に入らなければ、彼は最も巧妙にそれに反對することが出來る。けれども若し何か氣に入つたものがあれば、彼は直樣それを信ずることが出來る。吾々は大抵誰でもさうである。被分析者は知力は情緒的生活に依存するものであることを極めて明かに示してゐる。何故ならば彼は分析中非常に壓迫されるからである。

患者は彼の症候を治癒し、彼の心的過程を常態的に作用するやうに囘復することに對してかくも力強く反抗するといふ事實はどういふ風に說明さるべきであるか。吾々は今やこの狀態のどんな變化にも反對する强烈な力を探し出すべき場所へ來たのである。この力は最初この狀態を生ぜしめた力と同じものであるに相違ない。症候が形成される際には吾々がその症候を消失させる際に認め得るある過程が行はれてゐたに相違ない。ブロイエルの觀察によつて旣に知られてゐるやうに、症候が存在するのは何等かの心的過程が常態的に行はれて意識的になることが出來なかつた結果である。症候は無意識内に殘つてゐるものゝ代用物である。さて、吾々はこの作用してゐると推定された力を何處に置くべきかを知つてゐる。問題の心的過程が意識に現はれることを防ぐためには烈しい努力がなされたに相違ない。その努力の結果としてその過程は無意識内に殘つたのである。さうして無意識としてそれは症候を形成する力を持つてゐたのである。この同じ努力は分析的治療中にも作用して、無意識を意識内に齎さうとする企てにも反抗する。抵抗によつてその存在を證明されてゐるところのこの病源的過程を吾々は**抑壓**と呼ぶ。

今や吾々はこの抑壓過程に就いて更に明確な概念を持つ必要がある。その過程は症候の形成される先要條件ではあるが、それはまた吾々がそれに類似した物を知らないところのあるものである。一例として、行爲となつて現はれようと努める衝動、心的過程を取つて見よう。吾々はそれが吾々が「非難」或は「否認」と呼ぶところの拒絶を受けることのあることを知つてゐる。さうするとその過程の自由に使用し得るエネルギーは減退し、無力になるがしかしそれは記憶として存在し續けることが出來る。その過程を決定する全過程は自我によつて知られてゐる。ところがこの同一の衝動が抑壓されると想像すると事情は全然異つて來る。その時にはその衝動はエネルギーを保有し、少しも記憶を後に殘さない。また抑壓の過程は自我に知られることなしに完成される。從つてこの比較によつては吾々は少しも抑壓の本質に近づくことが出來ない。

私はそれのみか、抑壓の概念に更に明確な形式を與へるのに有用なことが分つた所の理論的見解を、諸君に說明しようと思ふ。そのためには第一に吾々は「無意識」といふ語の全然記述的な意味から、それの體系的な意味にまで進む必要がある。換言すれば、一心的過程の「意識」或は「無意識」は單にその過程の一性質であつて、必ずしも決定的なものではないと考へなくてはならない。かゝる過程が無意識のまゝで殘つてゐるとすれば、それが意識に現れることを阻止されてゐるのは、その過程が受けた運命の單なる一標章であつて、その運命そのものではない。この運命を更に具體的に理解するために、あらゆる心的過程——一つだけ例外があるが、これは後に述べる——は、丁度寫眞が最初は陰畫であつてそれから陽畫にする過程によつて畫になるやうに、最初は無意識的狀態に於いて存在し、後に始めてそこから意識的狀態に發展するものであると假定しよう。さて、すべての陰畫が陽畫になるとは限らないと同樣に、すべての無意識的心的過程は意識的心的過程に變じられるとは限らない。卽ち、個々の過程は最初は無意識的心的體系に屬してゐて、それから場合によつては意識的體系內に進むことが出來るのである。

この體系に就いての最も粗雜な觀念はこれを空間的に考へることによつて得られる。かうして無意識的體系はそのうちに多くの心的刺戟が個人に於けるやうに群つてゐる大きな控室に譬へられる。それに續いて第二の小さい部屋、一種の應接室があつて、そのうちにも意識が住つてゐる。けれども兩室の閾のところには番人が立つてゐて、種

々の心的刺戟を檢査し、監視し、彼の氣に入らないものは應接室の中に入れない。諸君はこの番人が個々の刺戟を閾の所で追返しても、一度それが應接間に入つてから追ひ出しても、大した相異はないことを直ちに知られるであらう。それは彼の警戒と認識の敏活の程度の問題に過ぎない。さてこの比譬を續けて行けば、吾々の用語を更に發展させることが出來る。無意識内に、控室にゐる刺戟は無論他の室にゐる意識の目には入らない。從つてそれは先づ第一に無意識のまゝにある。それが閾の所まで押し寄せて行つて番人に追ひ返された時には、それは意識的になることが出來ないのである。吾々はその時その刺戟は抑壓されたといふ。けれども閾の内に入ることを許された刺戟でも必ず意識的になるとは限らない。意識の目に入つた時にのみそれは意識的になるのである。從つてこの第二の部室はこれを先意識的體系と呼ぶのが適當であらう。かうして意識的になる過程はその純記述的の意味を保有してゐるのである。けれども抑壓されるといふことは、それが個々の刺戟に適用された時には、その過程が、番人のために無意識的體系から先意識的體系に入ることを許されないことを意味する。吾々が分析的治療によつてこの抑壓を取除かうとする時に抵抗となつて現はれるのはこの番人である。

さて、私は諸君がこの觀念は粗雜でもあり空想的でもあつて、科學的表現としては決して許さるべきものではないと言はれるであらうことをよく知つてゐる。私はそれが粗雜であることをよく知つてゐる。否、私はそれが間違つてゐることも知つてゐる。さうして若し私が誤つてゐないならば、吾々はそれよりも立派な代用物を既に用意してゐる。その時にでもなほ諸君にそれが空想的なものに見えるかどうかは私は知らない。今のところではそれは、電流のうちに泳いでゐるアンペラの小人と同じく、理解の助けになる。さうして理解を助ける限りに於いてはそれは輕視さるべきではない。更に私はこの二つの部屋、兩室の閾のところにゐる番人及び第二室の端に見物人としてゐる意識のこれらの粗雜な假定は、極めて現實に近いものを指示してゐるに違ひないことを斷言したい。私はまた吾々の無意識、先意識、意識といふ名稱は、他の提唱されてゐる或は使用されてゐる名稱、例へば潛在意識、副意識、共存意識等ほどに偏見的でもなく、更に是認され得べきものであることを諸君に認めていたゞきたいと思ふ。

されば若し諸君が、私が神經病的症候を説明するために假定した所のかゝる心的裝置は、たゞ一般に妥當するも

のであつて、從つて常態的機能をも説明するものでなくてはならないと指摘されるならば、それは更に重要なものとなるであらうと私は思ふ。諸君のこの言は無論全然正しい。私は今この推論に就いて論ずることは出來ないけれども、若し病理學的狀態の研究によつて今まで神祕に閉されてゐた常態的心的作用を明かにする見込がついたならば、症候形成に就いての心理學に對する吾々の興味は異常に增加するに相違ない。

更に諸君は、この兩體系とそれらの意識との關係に就いての吾々の觀念を支持してゐるものが何であるかを認められるであらう。無意識と先意識との間の番人は吾々が顯在夢の形成に干渉することを見出したところの監視作用に外ならない。吾々が夢の刺戟者であることを見出した所の前日の經驗の殘留物は、夜間睡眠中に無意識的な抑壓された欲望と刺戟に影響され、それらと聯合して、それらのエネルギーによつて、潛在夢を形成することの出來たところの先意識が材料であつた。この無意識的體系の支配の下にあつて、この材料は、常態的心的生活、卽ち先意識體系に於いては知られてゐない、或は例外的にしか許されないやうな風に加工——卽ち壓縮と置換——されたのであつた。兩體系を區別するものはこの作用樣式の相異である。先意識の時徵であるところの意識への關係は兩體系のうちの一の屬性を示すに過ぎない。夢もまた病理學的現象ではない。どんな健康な人でも眠れば夢を見る。夢の形成と神經病的症候の形成との兩者を吾々に理解せしめるところのあの心的構造に就いての假定は、また常態的心的生活にも適用され得ると考へらるべき確かな權利を持つてゐる。

今のところでは抑壓に就いてはこれだけに止めて置く。けれども抑壓は症候形成の先要條件に過ぎない。症候は抑壓によつて現はれることを妨げられたある過程の代用物であることを吾々は知つてゐる。けれども抑壓から代用物形成の過程の理解へ達するには道はまだ遠い。抑壓の問題を確認するためには、どういふ種類の心的刺戟が抑壓されるか、抑壓を行ふ力は何であるか、どういふ動機からであるか、といふやうな諸疑問に答へられなくてはならない。これに就いて吾々が今までに知つてゐることは一つだけである。吾々は抵抗を研究した時に、それは自我から、認め得べき或は潛在せる性格特性から來るものであることを學んだ。從つて抑壓を行はしめた或は少くともそれに參加したのもまたこの力である。これ以上のことはまだ何も知られてゐない。

さてこゝで私が前に述べた第二の觀察は更に吾々の助けになる。分析になつて吾々は常に神經病的症候の背後に目的を發見することが出來る。これは無論諸君の旣に知つて居られるところである。私は神經病の二症例に於いてこれを示して置いた。けれども無論二例ぐらゐでは十分ではなからう。諸君はそれが二百回も、否、何百回となく證明されることを要求する權利を持つて居られる。けれども私は今この要求に應ずることは出來ない。そこで諸君はそれを自ら經驗して見るか、或はこの點に於いてはすべての精神分析學者が一致して提示してゐるところの證據を信じるかするの外はない。

諸君は、その症候を吾々が徹底的に調べた所の二症例に於いては、分析がその患者の最も內密な性的生活に達したことを記憶して居られるであらう。第一例に於いてはその症候の目的或は傾向は特に明白に認められた。第二例に於いては症候は後に述べる他の要素によつていくらか覆はれてゐたやうである。さてこの兩例に於いて見出されたものは分析されたどんな例にも見出されることであらう。吾々は分析によつてあらゆる病例に患者の性的經驗と欲望を見出すであらう。あらゆる症候は常に同じ目的のために用ひられてゐることを認めざるを得ないであらう。その目的は性的欲望の滿足である。症候は患者の性的欲望の滿足のために用ひられる。それは現實に於いて得ることの出來ない滿足の代用物である。

第一の患者の强迫觀念的行爲を考へて見よう。この婦人は彼女が熱愛する夫なしに暮して行かなくてはならなかつた。彼の缺陷のために彼と共に生を樂しむ事が出來なかつた。彼女は彼に忠實でゐなくてはならなかつた。他の誰かを彼の地位に置くことが出來なかつた。彼女の强迫觀念的症候は彼女に彼女の熱望するものを與へてゐる。それは彼女の夫を稱讃してゐる。彼の缺陷、特に彼の陰萎を否認し、訂正してゐる。この症候は根柢に於いては欲望の滿足であつて、この點では夢に酷似してゐる。特にそれは性的欲望の滿足である。但し夢は必ずさうとは限らない。第二の症例に於いては彼女の形式的行爲の目的は兩親の性交を妨げる、或はそれから他の子供の生れるのを妨げるにあつたことを諸君は認められた。諸君はまたそれは根柢に於いては彼女を母の地位に置かうと努めてゐるのであることをも知られたであらう。從つてこの症候もまた性的欲望滿足の障碍を取り去り、彼女自身の性的欲望を

満足せしめるために形成されたのである。第二例にあると言つた複雜に就いては直ぐ後に述べるつもりである。

私は後でこの主張の普遍性に就いて保留することを前以て避けるために、私が抑壓作用、症候の形成、症候の解釋に關してこゝで述べてゐることは、三種の神經病、卽ち苦悶ヒステリー、轉化ヒステリー、强迫觀念的神經病の研究によつて得られたものであり、今のところではこの三種にのみ妥當するものであることを諸君に注意していたゞきたいと思ふ。この三種の疾患は、何時も「轉移神經病」といふ項目に一括されてゐるが、それはまた精神分析的治療の可能な領域を構成してゐる。他の神經病は精神分析的にはまだ餘り研究されてゐない。ある一群の神經病に於いては治療が不可能であるといふことが確にこの閑却の一理由である。諸君は精神分析學がまだ極めて若い科學であること、それの研究には多くの努力と時間とが必要であること、また餘り遠くない以前にはたゞ一人の人がそれを實行してゐたことを忘れてはならない。しかも吾々はあらゆる方面から轉移神經病でないところの他の諸疾患の理解に近づきつゝある。私は吾々の假定と結論とがこの新しい材料に適用されて如何に展開したかといふことを諸君に語り、この更に進んだ研究は矛盾には陥らないでより高い合一に達したことを證明し得ることを望むものである。從つて今までに言はれたことはすべてこの三種の轉移神經病に妥當するものである。私はもう一つの新しい事實を述べて、この症候の意味を更に明瞭にしたいと思ふ。

この疾患の誘因の比較研究によつて次のやうな形で言ひ表はされるところの一の結論が生ずる、卽ち、これらの人々は現實が彼等の性的欲望の滿足を阻んだ時に受けた何等かの拒絕のために病氣になつたのである。諸君はこの二つの結論が如何に立派に相互に補足するかを認められるであらう。かうして症候は現實に於いて滿たされなかつた欲望の代用滿足であると考へられた時に、始めて正しく理解されてゐるのである。

神經病的症候は性的滿足の代用物であるといふ命題に對しては確にあらゆる種類の反對論が可能である。私は今日はそのうちの二つを論じて見ようと思ふ。若し諸君のうちの誰でもが、多數の神經病患者を自ら分析されたならば、その人は多分頭を振つて言ふであらう「ある症例に於いてはこの命題は少しも適用され得ない。その症候は寧ろその反對の目的、卽ち性的滿足を拒む、或は斷念するといふ目的を持つてゐるやうに見える」と。私はこの解釋

が正しいかどうかを論じようとは思はない。精神分析に於いては事態は屢々吾々が欲するよりも複雜である。若しもつと簡單であるならばそれを明白にするために精神分析を必要とすることはないであらう。實際吾々の第二の患者の儀式的行爲のある特徴は、この禁慾的な、性的滿足には有害な性質のものであると認めることが出來よう。例へば夜間の勃起を妨げるといふ魔術的な意味で時計を片付けることや、處女性を保護する意味で花瓶を落ちて碎けないやうにすることがそれである。私が分析した他の睡眠前の儀式的行爲の諸例に於いては、この消極的性質は更に著しかつた。その全行爲が性的憶起や誘惑を防衞する規則から成り立つことが出來た。けれども吾々は既に屢々精神分析によつて對立は決して矛盾を意味するものでない事を知つてゐる。吾々は吾々の命題を更に擴大して、症候は性的滿足或は滿足の防衞を目的とするものであつて、大體から見てヒステリーには積極的な欲望を滿足せしめる性質のものが、強迫觀念的神經病に於いては消極的な禁慾的な性質のものが、優勢であると言ふことが出來よう。症候は性的滿足にもその反對のことにも役立つが、これはこの兩面性がその機構の一要素――これに就いてはまだ述べる機會がなかつた――を確實な根據としてゐるからである。實際症候は、後に言ふやうに、相反する二つの傾向の干涉によつて生じた折衷の結果であつて、抑壓されたものをも、抑壓してその症候を生ぜしめる仕事に參加したものをも代表してゐる。この代表が二要素のどちらか一方に偏することはあるが、その一つが全然缺如してゐることは殆どない。ヒステリーに於いては普通兩傾向は同じ症候のうちに共働する。強迫觀念的神經病に於いては兩傾向は屢々分離してゐる。從つて症候は二重性のものであつて、相殺的な二個の繼起的行爲から成り立つてゐる。

第二の意見を片付けることはこんなに容易ではなからう。若し諸君が更に多くの症候の解釋を考察されたならば、恐らく先づ第一に性慾の代用滿足の觀念はその最廣範圍にまで擴げられなくてはならないと判斷されるであらう。諸君は必ずこれらの症候は現實には何物をも滿足せしめないこと、實に屢々性的複合體から生ずる感覺を興奮させるか、空想をはたらかさせるに過ぎないことを指摘されるであらう。更に、所謂性的滿足とは極めて屢々子供らしい、大したことでもない、恐らく自瀆的行爲に似たもの、或は人が既に子供の頃に禁じられ、止めたところの不潔な惡習であることを指摘されるであらう。更にまた殘忍な、戰慄すべき不自然とさへも名づけらるべき情慾の

滿足としてのみ考へ得られるやうなものを性的滿足のうちに入れるとは驚くべきことであると諸君は言はれるであらう。實際この最後の點に就いては、人間の性的生活を徹底的に研究して、正當に性的と呼ばれてもよいものは何であるかといふことを決定した後でなければ、吾々は決して一致した意見を持つことは出來ないであらう。

第二十講　人類の性的生活

人はきつと「性的なこと」とは何を意味するかといふことに就いては少しの疑問もないと考へるであらう。それは第一に、言ふまでもなく、「淫猥なこと、」話してはならないことを意味する。私はこんな話を聞いたことがある。ある有名な精神治療家の學生達がその師にヒステリーの症候は屢々性的なことの表現であることを信じさせようとして、彼を一人のヒステリー婦人の寢臺の傍へ連れて行つた。彼女の發作は疑ひもなく出產の模倣であつたが、彼は「否、出產には少しも性的なところはない」と反對した。確に出產は常に「淫猥なこと」であるとは限らない。

諸君は、私がかゝる眞面目な事柄に就いて洒落を言ふことをよく思はれないことゝ思ふ。けれども、これは全然洒落といふ譯ではない。眞面目に言つて、「性的なこと」といふ概念の內容を確定するのはそんなに容易ではないのである。兩性間の差異に關聯する一切のものと考へるのは恐らく唯一の適切な方法ではあらうが、これでは餘り一般的で漠然としてゐる。若し性的行爲を中心點にすれば、性的なものとは異性の肉體（特に性的器官）から快感を得ることに關聯する一切のもの、最狹義に於いては、生殖器の合一と性的行爲の實行に關係のある一切のものを意味することにならう。けれどもさうすることは「性的なこと」と「淫猥なこと」とを同一視するのと殆んと同じであつて、出產は性とは何の關係も持たなくなるであらう。若し生殖作用を性の中心とすれば、自瀆や接吻のやうに生殖には關係ないが、しかも確に性的なものであるところのもの全部を除外しなくてはならなくなる。けれども吾々は定義しようとする試みは常に困難に遭遇するものであることを既に知つてゐる。でこれ以上に完全な性の定義をすることは斷念しようと思ふ。「性的なこと」の概念の發達に連れて、H・ジルベラーの所謂「包括の誤謬」を生ぜしめるやうなことが起つたのではないかと思はれる。實際、全體的に見れば、吾々は「性的なこと」の意味をかな

りよく知つてゐる。

性的なことゝは性の相異、快感の獲得、生殖作用及び祕密にする必要のある淫猥な觀念に關することであるといふ通俗な見方で日常生活の實際的必要には十分である。けれどもこれは科學にとつては最早十分ではない。何故ならば吾々は周到な、犧牲的な克己心によつて始めてなされたところの研究によつて、その「性的生活」が普通人のとは著しく異つてゐる人々の存在する事を知つてゐるからである。この「變質者」のあるものは、いはゞ、性の相異を彼等の生活表から削除してしまつてゐる。彼等と同性の人だけが彼等の性慾を刺戟することが出來るのであつて、異性（特に異性の生殖器）は彼等にとつては一般に性的對象とならない。極端な例に於いては嫌惡の對象とさへもなることがある。かうして彼等は、言ふまでもなく、生殖作用には少しも參加しようとしない。かゝる人々は同性愛者或は性慾倒錯者と呼ばれる。彼等は、常にではないまでも、屢々他の點では十分敎養のある、知的にも道德的にも高い標準に達してゐる男女であるが、たゞこの運命的な特異性に惱まされてゐるのである。彼等は彼等の科學的代言者の口を通じて人類の一變種であり、「第三性」であつて、他の兩性と同一の權利を有するものであると主張してゐる。吾々は後にこの主張を批判的に檢討する機會があると思ふ。言ふまでもなく彼等は、彼等が好んで主張したがるやうな、「選ばれたる」人間ではない。少くとも彼等のうちにも性的に異つた人々のうちに見出されると同じほどに、多くの劣等な價値のない人々がゐる。

この變質者は少くとも大抵は常態人が彼等の性的對象によつてその目的を達しようとすると同じやうに彼等の性的對象によつて達しようとする。けれども彼等に續いて多くの變態型があつて、その性的活動は理性的な人々の興味を惹くと思はれるものとはますく離れて來る。多態な、奇異なこの變態型は聖アントニースの誘惑を表はすためにG・ブリユゲルが描いた怪物に、或はG・フラウベルが彼の敬虔な懺悔者の前に長い列をつくつて通り過ぎて行くことを示したところの、衰へた神々や信者達に比較し得るばかりである。吾々は、全然混亂されたくないならば、この混沌とした群集を整理する必要がある。吾々は彼等を、同性愛者のやうに、その性的對象の變化してゐる人々と、その性的目的が第一に變化してゐる人々とに分類する。第一類には生殖器によつて××しないで性的行爲の相

手の一人の生殖器の代りに身體の他の器官或は部分（膣の代りに口或は肛門）を用ひる人々が屬する。彼等はその際解剖學的困難をも嫌惡の抑壓にも顧慮しない。その次に來る人々は、なほ生殖器を對象とはするが、それは生殖器が性的機能を有してゐるからではなくて、それが解剖學的の、或は隣接してゐるといふ、理由によつて參加する他の機能のためにである。子供の教育の際に淫猥なことゝして却けられたあの排泄作用は性的興味を十分惹き得るものであることを彼等は實證してゐる。更にその次に來る人々は生殖器を少しも對象としなくなつてゐる。彼等は生殖器の代りに身體の他の部分、女の乳房、足或は辮髮を興味の對象にする。更に他の人々にとつては身體の部分も無意味なものとなり、着物の端、靴、下着の一片が彼等のすべての欲望を滿たす。彼等は拜物教徒である。更に他の人々は對象全體を要求するけれども、その要求は極めて特殊な、奇妙な、或は恐ろしい性質であつて、それを抵抗力のない屍體にしようとまでする。彼等はそれを享樂するために犯罪的な强迫觀念に促されてさうするのである。けれどもこんな恐ろしいことに就いてはもう十分である。

第二類には先づ第一にその性的欲望を常態的ではあるが、しかし豫備的な行爲によつて滿たさうとする變質者がある。彼等は他人を眺めること、觸れることによつて、或は他人の最も祕密な行爲を見ることによつて滿足を求める。或は彼等自身の肉體の隱すべき部分を曝露して、かうすれば他人も同じやうな反應をして報いて吳れるであらうと漠然と期待する。次には不可解なサディストが來る。彼等の愛情は彼等の對象を苦しめ惱ますより外の目的を知らない。さうしてそれには他人を壓服する傾向を示すものから重傷を負はすものまでである。次には彼等を補足するかのやうにマゾヒストが來る。彼等の唯一の快感は愛する對象から、象徵的に或は實際に、壓服と苦痛を受けるにある。更に他のものにはこの種の變態的諸特徵が相互に結合し、交錯してゐる。最後に、吾々はこれらの各類に屬する人々はまた二つに分類されることを知らなくてはならない。卽ち彼等のあるものはその性的滿足を現實に求め、他のものはそれを想像するだけで滿足する。彼等には少しも現實的對象を必要としないで、空想をそれに代用することが出來る。

この狂氣じみた、奇妙な、戰慄すべきことが實際にこれらの人々の性的活動を構成してゐることは少しも疑ふ餘

いて常態的性的滿足が吾々の生活に於いて演じてゐると同じ役割を演じてゐるものであり、彼等はそのために吾々と同じほどの、屢々それ以上の、犧牲を拂つてゐるものであることを認めざるを得ない。この變態型が常態型と何處で合一し、どこで分離するかといふことを廣く且つ詳細に跡づけることは可能である。また性的活動には必ずくつついてゐるところの淫猥性は、こゝでも再び見出されることを諸君は看過されないであらう。けれどもそれらの大抵は有害の點にまで達してゐる。

さて、この異常な種類の性的滿足に對して吾々は如何なる態度を執るべきであるか。憤慨や吾々の個人的嫌惡の表現や、吾々はかゝる情慾を分有してゐないといふ斷言は明かに何の役にも立たない。吾々はそんなことを尋ねてゐるのではないのである。結局これは他のものと同じやうに現象の一領域である。それは稀有な、珍らしい現象に過ぎないといふやうな逃口上は容易に反證されるであらう。反對に、これは極めて一般的な、廣く擴がつてゐる現象である。けれども若しこの現象はすべて性的衝動の脫線したものであるが故に、人の性的生活に就いての吾々の見解はこのために訂正される必要はないといふ人があるならば、眞面目な答が必要であらう。若しこの性慾の病的型を理解してそれを常態的な性的生活に關聯させることが出來ないならば、吾々はまた常態的性慾を理解することも出來ない。約言すれば、前に述べたすべての變質者のあり得ることゝ、それの所謂常態的性慾との關聯を十分理論的に說明することは吾々の避け難い義務である。

一の見解と二個の新しい觀察とが吾々のこの仕事を助ける。その第一のものはイワン・ブロッホの見解である。彼に從へば、變質はすべて「墮落の標徵」であるといふ見解は誤謬である。何故ならば性的目的からのかゝる逸脫、性的對象とのかゝる不定な關係は昔から、吾々に知られてゐるあらゆる時代を通じて、最も原始的なものから最高度に發達したあらゆる民族のうちに現はれ、時としては寬容され、一般に行はれたといふ證據が存してゐるからである。二個の觀察は神經病患者の精神分析的研究の際になされた。これらの觀察は吾々の性質變質者に就いての見解に決定的影響を及ぼすに相違ない。

吾々は神經病的症候は性的滿足の代用物であると言ひ、私は症候の分析によつてこの命題を證明するには多くの困難に出會ふであらうといふことを示して置いた。實際、この命題は所謂「變質的」性的欲求が性的滿足のうちに包括された時に於いてのみ正しいのである。何故ならば吾々は症候を驚くべきほど屢々かういふ風に解釋せざるを得ないからである。同性愛者或は性慾倒錯者の人々は人類の選ばれたる階級であるといふ要求は、同性愛的傾向の證據はあらゆる神經病者に現はれてゐるといふ事、症候の大部分はこの潜在せる倒錯の表現である事を知れば、直ちに不當なものであることが分る。公然自分は同性愛者であるといふ人は單にその倒錯を明かに意識してゐる人に過ぎない。彼等の數は潜在的同性愛者の數に較べれば無にも等しいほどである。實際、同性を對象として選擇することは戀愛生活の普通の一型式であると考へざるを得ない。さうしてそれが特に重要なものであることをます〳〵知るのである。顯在的同性愛と常態的態度との差異がこれによつて無くなつてしまふことは確にない。それらの實際的意義は前と同じであるが、それの理論的價値は甚しく減少する。吾々は、最早轉移神經病のうちには入れられないある特殊な精神病、卽ち偏執病は常に壓倒的な同性愛的衝動を鎭めようとするところから生ずるものであるとさへも考へるのである。吾々の患者の一人はその强迫觀念的行爲に於いて男性の、彼女自身の別れた夫の役割を演じたことを諸君はまだ記憶して居られるであらう。男性の役目をするかゝる症候は婦人の神經病患者には極めて普通のことである。たとへこれが同性愛のうちには入れられないとしても、それの起源とは確に密接な關係を有してゐる。

諸君も多分御存知であらうが、ヒステリー患者はその症候をあらゆる有機的組織の上に現はし、それによつてあらゆる機能に障碍を與へることが出來る。分析の示すところによると、倒錯的と呼ばれ、生殖器を他の器官で代用しようとするところのあらゆる衝動はこれらの症候に現はれ出る。それらの器官はその時には生殖器の代用物としてはたらくのである。肉體的器官はそれの機能的役目の外に性的意義をも有してゐると認められなくてはならないといふ、また若し後者の要求が餘りに强い時には前者の仕事が障碍されるといふ見解に吾々が達したのは正にヒステリーの症候の研究によつてゞある。ヒステリー的症候に於ける、一見性慾とは何の關係もない器官の無數の感覺

や神經作用は、從つてその本質に於いては倒錯的性的衝動の滿足であり、それによつて他の器官が生殖器の機能を奪つたのである事が分る。かうして吾々はまた榮養器官と分泌器官とが如何に色々な風に性的衝動に關聯し得るかを知るのである。從つてそれは性慾倒錯症に現はれるのと同一物である。たゞ異るところは、後者に於いてはそれは容易に、紛ふべくもなく認められるが、ヒステリーに於いては吾々はその症候を解釋するのに迂路を取らなくてはならず、それから問題の倒錯的性的衝動をその當人の意識に歸しないで、彼の無意識內に存すると見ることだけである。

强迫觀念的神經病の特色を有する症候の多くの型式のうちで最も重要なものは、異常なサディズム的な、從つてその目的に於いて倒錯的な性的衝動の壓迫によつて現はれたものであることが分る。これらの症候は、强迫觀念的神經病の構造に應じて、主としてこれらの欲望の防禦に役立つか、或は滿足と防禦との間の鬪爭を表現する。けれどもまた滿足はさう急には現はれない。それは迂路を取つて患者の行動に現はれることを知つてゐて、好んで患者に反對し、彼を自責せしめる。この神經病のもう一つの型式は瞑想的なものであつて、これは普通には常態的性的滿足の準備となるところの行爲、見たい、觸れたい、調べたいといふ欲求の過度の性慾化を表現してゐる。接觸の恐怖、潔癖症が重要な意味を持つてゐることはこれによつて說明される。强迫觀念的行爲のうちの思ひもよらぬほど多くの部分は自瀆の變裝された反覆であり、修正であることが分る。自瀆は誰も知つてゐるやうにあらゆる種類の性的空想を伴ふ唯一の同型の行爲である。

性慾倒錯と神經病との關係を更に詳細に示すことは困難ではないけれども、吾々の目的のためには今までに述べた事だけで十分であらうと私は思ふ。けれども吾々は症候の解釋に就いてのこの說明を聞いた後に、人間の倒錯的傾向の屢々現はれることゝ强いことゝを餘りに高く評價しないやうに心しなくてはならない。常態的性的滿足が拒まれたゝめに人が神經病になることのあることに就いては既に述べて置いた。現實に於けるこの拒絕の結果としてその要求は變態的な性的刺戟に向はざるを得なくなる。これがどうして起るかといふことに就いては後に述べるであらう。兎に角かゝる「傍系的」壅塞によつて倒錯的衝動が常態的性的滿足が現實的障碍に出會はない時よりも更

倒錯は、いはゞその當人には常態的な性的生活なのである。

非常に困難となつた時に起るのである。無論倒錯的傾向が全然かゝる事情に基かないこともある。かゝる場合には

にも認められる。多くの場合顯在的倒錯は、性的衝動の常態的滿足が一時的事情か或は永久的な社會組織によつて

に強くなつて現はれるに相違ないことは理解されるであらう。しかしながらこれに似た影響はまた顯在的性慾倒錯

恐らく諸君は吾々は常態性慾と變態性慾との關係を說明してゐるよりも寧ろ混同してゐるといふ印象を一時持たれることであらう。けれども次の考察を忘れないやうにしていたゞきたい。若し常態的性的滿足の現實に於ける困難或は缺乏が、さもなければ現はれないであらうところの人に於ける倒錯的傾向を表面に齎したといふ事が正しいとするならば、これらの人々のうちには旣にこの倒錯を迎へる何物かゞあつたに相違ない。或は、その傾向は潛在的な形で彼等のうちに存してゐたに相違ない。かうして吾々は私が言つた第二の新しい觀察に達するのである。卽ち精神分析的硏究は、症候分析の際には憶起と聯想とは常に幼時にまで遡るものであるが故に、子供の性的生活をも調べることの必要を見出したのである。吾々がさうして發見したことは爾來一點一點子供の直接觀察によつて證明されてゐる。かうして一切の倒錯的傾向は幼時に培はれたものであること、子供はその傾向への一切の性能を具へてゐて、年齡相應の程度にそれを實行すること、約言すれば倒錯性慾は幼時の性慾の擴大された、個々の要素に分離されたものに外ならないことが明かになつた。

今も諸君は性慾倒錯を今までとは異つた風に考へられるであらう。さうして最早それの人間の性的生活に對する關係を無視されることはないであらう。けれどもこの驚くべき、怪奇な說明が如何に諸君の心を擾したことであらう！ 最初は諸君は一切を――子供は性的生活とも呼ばるべきものを持つてゐるといふ事實も、吾々の觀察の正しいことも、子供の行爲には後に倒錯的なものとして非難されるものとの關聯が見出されるといふ吾々の主張の正當なことをも否定したく思はれるであらう。されば私は諸君の許しを得て第一に諸君の反對の動機を說明し、それから吾々の觀察を槪說したいと思ふ。子供は少しも性的生活――性的昻奮、欲求及び一種の滿足――を持つてゐない、十二から十四歲までの間に突然それを獲得するのであると言ふのは、觀察上の事實は言はないとしても、生物學的

に見て、子供は生殖器なしに生れて來たのであつて、思春期に至つて始めて成長し始めたのであるといふのと同じほどにありさうもない、否、不條理なことである。思春期に彼等のうちに成長するものは生殖機能であつて、それはその目的を達するために既に存在してゐる身體的、心的材料を利用するのである。諸君は性慾と生殖とを混同するの誤謬を犯し、さうしてそれによつて性慾、倒錯、神經病の理解の道を塞いで居られるのである。けれどもこの誤謬は成心的になされてゐる。この誤謬の源泉は、不思議なことだが、諸君が嘗ては皆子供であり、子供の時に敎育の影響を受けられたところにある。卽ち社會は性的衝動が生殖的欲求の形で現はれる時にはそれを拘束し、制限し、個人の意志に服從させる。卽ちその意志を社會的命令と一體ならしめることを最も重要な敎育事業と考へてゐる。社會にとつては子供が或る知的階級に達するまでは子供の完全な發達を壓へつけるのが利益なのである。蓋し性慾の完全な發現と共に實際上敎育は不可能となるからである。若しさうしないならばこの本能はあらゆる堤防を破壞して、努力して建設された文化的事業を押し流してしまふことであらう。またこれを拘束するといふ仕事も決して容易ではない。少しも成功しないこともあれば、餘りにし過ぎることもある。人間社會の動機はその根柢に於いては經濟的なものである。社會はその成員に彼等が働かないで與へるだけの生活材料を持つてゐないが故に、成員の數を制限し、彼等の性的活動に向けられる精力をその仕事の方に轉ぜしめなくてはならない。卽ち永久的な、昔から現代まで續いてゐる生活難がある。

次の時代の性的意志を敎導する仕事は敎育的影響を、靑春の嵐を待たないで、極めて小さい時に與へ始め、子供の性的生活に干渉する時にのみ成功することを敎育家は經驗によつて敎へられてゐるに相違ない。この見地からして殆どすべての子供の性的活動は禁止され、不愉快なものとなされた。人は子供の生活を無性的たらしめることをその理想とした。さうして時の經過と共に人は子供を實際無性的であると信ずるまでに至り、科學さへもさうであると言ひふらした。そこでこの既成の信仰と目的とに矛盾しないやうに人は子供の性的活動――これは決して小さいことではない――を看過し、科學に於いては他のやうに說明して滿足する。子供は純潔無邪氣であると考へられ、さうでないと言ふものは人間の優しい、神聖な感情を汚す冒瀆者として非難される。

子供のみがこの傳統に囚はれない。彼等は極めて無邪氣に彼等の動物的權利を主張し、純潔のことはまだ學んでゐないことを不斷に實證する。不思議なことには、子供に於ける性慾を否定する人々はそのために教育を忽にしないで、彼等が「子供の無作法」といふ名目でその存在を否定した所のものゝあらゆる顯現を、この上もなく嚴しく取締る。更に、理論的に見て極めて興味のあることは、子供は無性であるといふ偏見に最も著しく矛盾する時期、卽ち五六歲までの少年時代は大抵の人にあつては忘却の帳に覆はれてゐることである。この帳は分析的研究によつて始めて完全に切り開かれるのではあるが、しかしながら既に夢の形成の際には透見されてゐる。

こゝで私は子供の性的生活のうちで最も明白に認め得られることに就いて語らうと思ふ。便宜上リビドーの概念に就いて少し述べて置きたい。リビドーとは、飢餓と全然同じやうに、それによつて衝動、飢餓の場合には食慾であるやうに、こゝでは性慾が自らを顯現するところの力である。性的昂奮や滿足のやうな概念に就いては說明を要しない。この解釋を最も必要とするのは幼時の性的活動に就いてゞあることは諸君自身が容易に認められるところであらう。或は恐らくはこれを反駁に利用されるかも知れない。この解釋は症候を遡源的に調べる分析的研究に基いてなされたものである。幼兒の最初の性的昂奮は他の生活に重要な機能と關聯して現はれる。幼兒の第一の興味は、諸君の知つて居られるやうに、食物の攝取に向けられる。飮み飽いて乳房の傍で眠つてゐる時には、彼は後年性的恍惚の後に再び現はれるやうな幸福さうな滿足の表情をしてゐる。しかしこれだけでは結論を引出すには餘りに不十分であらう。けれども幼兒は少しも乳が欲しくない時にもこの乳を吸ふ行爲を繰返さうとする。從つて彼はその時には食慾のためにさうしようとするのではないのである。吾々はこれを「吸つてゐる」と言ふ。さうして彼がこの行爲によつて再び幸福さうな表情をして眠りに入るといふことは、この「吸ふ」といふ行爲がそれだけで彼に滿足を與へてゐるものであることを示してゐる。間もなく彼はかうして吸はなければ眠らうとしないことは誰も知つてゐるところである。この行爲が性的性質を持つてゐると始めて主張したのはブダペストの老小兒醫、リンドナー博士であつた。子供の世話をする人々は、理論的態度は執らないけれども、この種の吸ふ行爲を同じやうに解釋してゐるやうである。彼等はそれがたゞ快感を得るためになされるものであることを疑はないで、それを子供の惡

習であるとし、幼兒自身がそれを止めようとしない時には、嚴しい手段を取つて無理に止めさせる。從つて吾々は幼兒は快感を得ること以外には何の目的もない行爲をすることを知るのである。思ふに、この快感は最初は乳を飮む際に經驗するのであるが、幼兒は直ぐにその條件から離れてそれを樂しむことを知るに至るのであらう。この滿足はたゞ口と脣の部分にのみ關係してゐる。從つて吾々は身體のこの部分を色情帶と呼び、吸ふ事によつて得られる快感を性的快感と名づける。この命名の正しいことに就いては後に論じなくてはならない。若し乳飮兒が自分の考を表現することが出來たならば、きつと母の乳房を吸ふ行爲は生活の最も重要なことであることを認めるであらう。これは誤つてゐないと思ふ。何故ならば彼はこの行爲によつて同時に二つの最大の生活欲求を滿してゐるからである。吾々は精神分析によつてこの行爲の心的意義の如何に多數のものが生涯を通じて保有されてゐるかといふことを聞いて驚くのである。母の乳房を吸ふといふことはすべての性的生活の出發點であり、後年のあらゆる性的滿足の達し難い雛形であつて、必要な時には空想は屢々これにまで遡る。母の乳房は性的衝動の最初の對象である。私はこの第一の對象が、後年の對象の決定にとつて如何に重要なものであるか、その變形作用、代用作用によつて、心的生活の最も遠いところにまで如何に深い影響を及ぼしてゐるかといふ事を、どういふ風に諸君に傳へてよいか知らない。けれども先づ第一に子供は乳房を吸ふことを止めて、自分の身體の他の部分をそれに代用する。彼は自分の親指や舌を吸ふ。かうして彼は快感を得るために自己を外界との一致から獨立させ、その上に、昂奮の領域を更に擴げてそれを強くする。色情帶はどれも同じ程度に快感を與へるものではない。從つて、リンドナー博士が述べてゐるやうに、乳兒が自分の身體を撫で廻して、その生殖器の特に昂奮し易い場所を發見するのは極めて重要な經驗である。彼はかうして吸乳から自瀆への道を見出すのである。

吸乳に就いてのこの考察によつて吾々は既に幼兒の性慾の二つの決定的特色を知つたのである。その性慾は重大な有機的必要に關聯して現はれ、また自己色情的である。換言すればその對象を自分の身體のうちに求め、また見出す。食物攝取の際に最も明白に現はれることはまた一部分排泄の際にも現はれる。吾々の見るところによると、幼兒は大小便の排泄の際に快感を感じ、直ぐにこの行爲が粘膜の色情帶を昂奮させて出來るだけ多くの滿足を彼に

齎すやうな風に工夫するやうになる。直覺力に富んだル・アンドレーが指摘したやうに、外界はこゝに於いて始めて障碍的な、彼の快感の欲求に敵對する力となつて彼の前に現はれ、彼をして後年の内的及び外的闘爭を豫想させるのである。卽ち彼は排泄を自分の思ふ時にしてはならないで、他人の定めた時にしなくてはならない。彼をしてこの快感の源泉を斷念させるために、この機能に關することはすべて尾籠なことであり、隱蔽さるべきであると彼に説明される。彼はこゝで始めて快感を社會的品位と交換しなくてはならない。排泄に對する子供自身の態度は最初から全然これとは異つてゐる。彼は自分の便を少しも嫌惡しない。彼はそれを自分の身體の一部分であると考へて、容易にそれから離れようとしない。さうして彼が最も尊敬してゐる人を明かにする最初の「贈物」としてそれを使用する。敎育が彼をこの傾向から離すことに成功した後にさへも、彼は便は「贈物」であり、「金」であるといふ評價を續ける。また放尿中の動作を彼は特に自慢するやうに思はれる。

私は諸君がもう長い間私の言葉を遮つて、かう叫びたがつて居られることを知つてゐる。「そんな變なことはもう澤山だ。排泄作用が性的快感の源泉であつて、幼兒でさへもそれを得てゐるといふのか！　便は値打のあるもので、肛門は一種の生殖器だといふのか！　吾々はそんなことを信じない。小兒醫と敎育家が精神分析とその結論を強く拒否する理由は理解出來る。」さうではない、諸君は私が幼時の性的生活の事實と倒錯性慾の事實との關聯を示さうとしてゐるのであることを一寸忘却されたのである。多くの成人は、同性愛者も異性愛者も、××の時に肛門を實際に生殖器の代りにすることを知られないことはなからう。また生涯を通じて排泄を感じ、その快感は決して何でもないものではないと言つてゐる人も多くあることを知つて居られるであらう。諸君は子供自身の口から、彼がもう少し大きく、このことが話せるやうになつた時に、排泄の行爲に彼がどんな興味を持つてゐるか、他人の排泄行爲を見てどんな快感を感じるかといふことに就いて聞くことが出來るであらう。但し以前にそんなことを言つてはならないと子供を嚇して置いたならば、それをよく覺えてゐて、沈默するのは言ふまでもない。諸君が信じる事を欲しない他の事柄に就いては、分析によつて得られた證據と子供の直接觀察によつて考へてもらふことゝして、私はこれらすべてのことを見まいとするには、或は別の見方をするには、かなりの技巧を要する事を述べて置く。ま

た私は諸君が子供の性慾と倒錯性慾との關聯は實に驚くべきものであると考へられることにも少しも反對しない。それは本來當然のことである。子供が少しでも性慾を持つてゐるとすれば、それは倒錯的なものでなくてはならない。何故ならば子供には一二の漠然とした徴候の外には性慾を生殖作用ならしめるものが缺けてゐるからである。ところで一切の倒錯性慾の共通性は、生殖をその目的としないことである。吾々は性的行爲が生殖をその目的としないで、快感の獲得をそれから獨立した目的として追究する場合にそれを倒錯的と呼ぶのである。從つて性的生活の發達の中斷點と轉向點はそれが生殖の目的に隷屬する點にあることを諸君は理解されたであらう。この轉向前に起つたあらゆること、及びそれに從はないで快感の獲得にのみ役立つすべてのことは「倒錯性慾」といふ不名譽な名前を與へられて、蔑視される。

されば私は幼兒の性慾に就いて今少し簡單に述べようと思ふ。私は二個の器官組織に就いて述べたことを他の器官組織を研究することによつて補足した。子供の性的生活は全然一聯の部分的衝動の活動から成り立つてゐて、その衝動は相互に獨立的に、あるものは自身の身體に、あるものは既に外界の對象に快感を求めるが、これらの器官のうちで生殖器が急速に第一位を占めるやうになる。世には快感を他人の生殖器或は對象を借りることなしに自分自身の生殖器で滿足させ、乳兒の時の自瀆から思春期の必要な自瀆まで中絶させずに續け、それからずつと何時までもさうする人々がある。けれども吾々は自瀆の問題をさう簡單に片附ける譯には行かない。それは多方面から考察さるべき材料を包含してゐる。

私はこの問題をもつと制限したいのであるが、それにも拘らず、なほ子供の**性的好奇心**に就いて二三言を費さゞるを得ない。それは省略たれるには餘りに子供の性慾の特色を示して居り、また神經病の症候形成にとつて餘りに重要である。子供の性的好奇心は極めて早くから、時としては三歳以前に始まる。それは性の差異には向はない。子供にとつてはそれは何の意味も持つてゐない。子供は、少くとも男の子は兩性とも男の生殖器を持つてゐると考へる。それで若し男の子が小さい妹の、或は遊友達の××を發見すると、最初は彼の眼で見た證據を否定しようとする。何故ならば彼は彼と同じやうな人間で彼にはあんなに重要な部分を持つてゐないものがあるとは考へること

が出來ないからである。後年になつて、彼は彼のなし得べきことを知つて吃驚する。彼が餘りに烈しく××を×ぶことに對してなされた幼時の威嚇の影響がだん〳〵感ぜられて來る。彼は去勢複合體に支配されるやうになり、それが、彼が健康であれば、彼の性格の形成に、病氣になれば、彼の精神病に、分析治療を受けてゐる時には、彼の抵抗に重要な役割を演ずるやうになる。少女は自分が大きい、眼に見える××を持つてゐないことを損であるやうに感じ、男の子がそれを持つてゐるのを羨望することを吾々は知つてゐる。男でありたいといふ欲望――これは後年彼女が女として不幸であつた時に神經病に再び現はれる――は主としてこの源泉から生ずるのである。けれども少女の××は子供の間は全然××と同じ役割を演じるものである。それは最も昂奮し易い場所であつて、自己色情的滿足はそこに於いて達せられる。少女が一人前の女になるのはこの感受性が陰核から膣口に、適當な時に、完全に移されるといふ事實に依ることが多い。所謂不感性の女にあつては、この感受性が頑強に陰核に止つてゐるのである。

子供の性的興味は寧ろ第一に子供は何處から來るかといふ、テーベのスフインクスの謎の背後に横つてゐるのと同じ問題に向けられる。この好奇心は主として子供がもう一人生れるといふ利己的恐怖から出て來るのである。子供は鸛が連れて來るといふ乳母の極り文句は小さい子供でさへも、吾々が想像してゐるよりも遙かに屢々、信用しない。大人に欺かれたといふ感情は子供の孤獨感と獨立感を非常に助長させる。けれども子供は自分の力でこの問題を解くことが出來ない。彼の理解力は彼の性的に未發達の體質によつて制限されてゐる。最初彼は子供は食物に何か特別のものを混合して造られるのだと考へ、女だけが子供を持ち得るといふことも知らない。後になつて子供を生むのは女ばかりであることを知ると、彼は子供は食物で造られるといふ、お伽噺には今も殘つてゐるところの、觀念を棄てる。少し大きくなつた子供は父も子供を生むのに何か關係があるに違ひないといふことは認めるが、それが何であるかを見出すことは出來ない。偶然性交を目撃した時には、彼はそれを女の征服であり、喧嘩であると考へる。卽ち交接をサデイズム的に誤解する。最初は彼は性交を子供の生れることゝ關聯させない。母の寢床や下着に血の着いてゐることを見ても、彼はそれを父から傷を受けた證據であると考へる。更に大きくなると彼は男の

生殖器は子供の生れるのに重要な役割を演じることは推測するだらうが、身體のこの部分が放尿以外の機能を有してゐるとは考へることが出來ない。

子供は最初から誰でも出産は腸で行はれるものである、換言すれば赤兒は大便と同じやうに出て來ると信じる點に於いては一致してゐる。この見解が棄てられ、臍が開くのだとか、二つの乳房の間の部分が子供の生れるところだとか想像されるのは、肛門に對する興味がすつかりなくなつてからのことである。かういふ風にして好奇心を持つた子供はだん〳〵性的事實に就いての知識を得るやうになるか、或は彼の無識に誤られて、大抵は思春期以前に不完全な、碌でもない説明を聞くまでは――この説明が外傷的效果を及ぼすことは稀ではない――性に就いて何も知らないでゐる。

諸君は「性的なこと」の概念は精神分析の手によつて、神經病の性的原因と症候の性的意義に關するその主張を支持せんがために、不當に擴大されてゐるといふことを多分聞いて居られるであらう。今や諸君は自らこの擴大が不當なものであるかどうかを判斷することが出來る。吾々は性慾の概念を變質者及び子供の性的生活をも包括し得る限りに於いて擴大したのである。換言すれば、吾々は性慾に再び正常な範圍を與へたのである。精神分析以外で性慾と呼ばれてゐるものは生殖機能に隷屬し、常態的と呼ばれてゐるところの制限された性的生活に適合するに過ぎない。

第二十一講　リビドーの發達と性的組織

私は吾々の性慾の概念に對する倒錯性慾の重要さを十分諸君に確信させることが出來なかつたやうに感じる。されば私は、私のなし得る限り、私の前に言つたことを補正したいと思ふ。

さて、激烈な反對を惹起したところのあの性慾の概念の變更には倒錯性慾だけが必要であつたのではない。幼兒の性慾の研究はそれ以上にさへもその變更に寄與するところがあつた。さうして兩者の合致は決定的なものであつた。けれども幼兒の性慾の顯現は、少年時代の後期に於いてはどんなに明瞭であるとしても、その初期に於いては

漠然として消え去つてゐるやうに見える。進化と分析によつて得られた關聯とに注意を拂はうとしない人は、それに性的性質を與へることを欲しないで、何か他の未分化の性質をそれに認めようとするであらう。こゝで忘れてはならない事は、吾々は一現象の性的性質に就いては、それが生殖機能に關聯してゐるといふ事の外には——さうしてこれは餘りに狹隘な定義として吾々の拒まざるを得ないものである——一般に認められた標準を有してゐない事である。W・フリースが提唱した二十三日と二十八日の週期性のやうな生物學的判斷條件は、まだ十分議論の餘地あるものである。性的過程の標準ではないかと思はれる化學的特性は今後の發見に俟つの外はない。成人の性的倒錯はこれに反していくらか明確である。それの一般に受入れられてゐる名稱が既に示してゐるやうに、それの性慾であることは疑ふべくもない。人がそれを墮落の標徵であると呼ぶか他の名で呼ぶかは兎に角、それを性的生活の現象でないと言ふほどに大膽な人はまだ一人もない。これによつてのみ性慾と生殖器とは同一物ではないといふ吾々の主張は正當なものとなるのである。何故ならば倒錯性慾はすべて生殖の目的を拒むからである。

私はこゝで興味なくもない類似を見出す。大抵の人にとつては「心的」といふことと「意識的」といふことゝは同一のことを意味するが、吾々は「心的」といふ概念を擴大して、意識的でない心的狀態をも包括する必要を認めた。これと丁度同じやうに、大抵の人は「性的なこと」と「生殖に屬すること」——更に簡單には「生殖器的」——とを同一視するに反して、吾々は性的なことは「生殖器的」なことではなく、生殖作用とは何の關係も持つてゐないことを認めざるを得ない。これは單に形式上の類似であるがもつと深い意味を持つてゐないこともない。

けれども若し性的倒錯がこの問題に就いてのそんなに有力な證據であるならば、何故にその效果をずつと前に現はして、その問題を解決しなかつたのであるか。私は實際言ふべきことを知らない。私にはこの性的倒錯はある特別の監視をうけ、その監視が理論の上に及び、その問題に就いての科學的判斷にまで干涉したものと思はれる。誰もが性的倒錯は嫌惡すべきものであるばかりではなく、怪奇な、危險なものであることを忘れることが出來なかつたかのやうである。それは誘惑的で、それを享樂する人々に對するひそかなる羨望は眞に克服されなくてはならないかのやうである。有名なタンホイゼルの中で審判に坐して、

陰阜の前では良心も義務も忘れられる、――誰かゞさうでないならば、それこそ不思議である！

と懺悔した伯爵のやうに。

實際倒錯性慾は寧ろ哀れな悪魔である。彼は漸くにして得た滿足のためにこの上もなく慘めな贖ひもしなくてはならない。

その對象と目的との不自然であるにも拘らず、倒錯的活動をかくも明かに性的なものたらしめるものは、倒錯的滿足の行爲は普通射精を伴ふ十分な恍惚狀態を生ぜしめるといふ事實である。これはその當人が大人になつた結果であることは言ふまでもない。子供に於いては恍惚狀態と生殖器の分泌は十分可能ではなくて、それに似たことで代用される。しかしてその似たこともまた確に性的であるとは認められないものである。

性的倒錯を完全に考察するために、私は更に附言しなくてはならないことがある。性的倒錯は嫌惡されてゐるかも知れない、また人はそれを常態的性的活動から峻別するかも知れない。けれども冷靜に觀察すれば、どれかの倒錯的特徵を持つてゐない常態人の性的生活は極めて稀である事が分るであらう。二つの生殖器の代りに、色情帶であるところの二つの口を合す接吻が、既に倒錯的行爲と呼ばるべき機利を持つてゐる。けれども接吻を倒錯的であると言つて批難する人は一人もない。その反對に舞臺に於いては性的行爲のあつさりとした暗示として許されてゐる。けれども接吻は容易に完全な倒錯性慾となることが出來る。卽ち直接に恍惚狀態と射精とを伴ふほどに强烈に行はれた時がさうであつて、これは決して稀なことではない。更に、對象を見たり觸れたりすることがある人にとつては性的享樂の不可缺の條件である事、あるものは性的昂奮が高潮に達すると引搔いたり嚙んだりすること、またある愛人は常に生殖器によつてゞはなく、その對象の身體の他の部分によつて最も昂奮すること、その他これに似たことをいくらでも見聞することが出來る。この種の特徵の一つを持つた人々を常態人から除外して變質者のうちに入れるのは全然意味のないことである。寧ろ性慾倒錯の本質を成すものは性的目的に違反することでも、生殖器を他のもので代用することでもなく、また常に對象を變ずることでさへもなくて、ひとり排他性であることを人はますく明白に認めるやうになつた。排他性のためにこの變態的行爲は行はれ、從つて生殖的過程に役立つとこ

ろの性的行爲は斥けられるのである。錯倒的行爲が常態的性的行爲の準備として、或は補助として用ひられる以上は、それは最早實際に倒錯的ではない。常態的性慾と倒錯性慾との間の間隙がこの種の事實によつて狹められることは無論である。從つて吾々は次のやうに考へざるを得ない。即ち常態的性慾はその前に存在したあるものから生じたもので、この材料のある特徵を不要なものとして斥け、他の諸特徵を新しい目的、即ち生殖の目的に隷屬されるために結合したのである。

吾々は今や倒錯性慾に關して得た知識を子供の性慾の硏究を更に深めて更にそれを明視するために用ひることが出來る。けれどもさうする前に私は兩者の重要な差異に諸君の注意を惹かなくてはならない。倒錯性慾は通例著しく集中的であつて、全行爲は一つの——大抵は唯一の——目的に向けられる。一部分衝動が優越する。それが見分け得る唯一のものであるか、或は他のものはその目的に服從してゐるかである。この點に於いては倒錯性慾と常態性慾とは少しも異らない。たゞ指導的衝動、從つて性慾の目的が異るところが異るだけである。兩者とも組織の整つた專制國であつて、たゞ一切の權力を奪つた家族が異つてゐるのである。これに反して、この集中と組織とは子供の性慾には殆ど缺けてゐる。それの部分衝動はどれも同等のものであつて、その各々が自分勝手の快樂を追求する。子供にはこの集中が缺如し、大人には存在するといふ事は、常態性慾も倒錯性慾も共に子供の性慾から派生したものであるといふ事實とよく合致する。更に、倒錯性慾のうちには子供の性慾ともつと類似した例がある。即ちそれらの例に於いては目的を持つた多數の部分衝動が相互に獨立して出現する。或はもつとうまく言へば、繼續する。これらの例は倒錯性慾と呼ぶよりも性的生活に於ける幼稚性と呼ぶ方が適當である。

これだけの用意をすれば、吾々は言はれないでは置かれないであらうところの提議に應對することが出來るであらう。人はかう言ふであらう。「何故に君は後年にそこから性的なものゝ發達する小兒性の顯現——これの漠然としてゐることは君自ら認めて居られる——もまた既に性慾に屬してゐると固く主張するのであるか。何故に君はそれを生理學的に敍述して、乳を吸つたり、排泄物を溜めたりするやうな行爲は既に幼兒にも見られるが、それらの行爲は彼が器官的快樂を求めてゐることを示すものであるとのみ言ふことに滿足しないのであるか。かういふ風にす

れば幼兒の性的生活といふ吾々の感情を害する見解を避けることが出來るであらう。」然り、私は器官的快樂に就いては少しも反對するところはない。性交の最大の快樂もまたゞ生殖器の活動によつて得られる器官的快樂にあることを私は知つてゐる。しかしながら諸君は、最初は差別のないこの器官的快樂が何時性的性質――器官的快樂は發達の後期に於いては確にこれを持つてゐる――を得るのであるかを語ることが出來るか。吾々はこの器官的快樂に就いて吾々が性慾に就いて知つてゐるよりも以上のことを何か知つてゐるか。諸君は、性的性質は生殖器がその役割を演じるやうになつた時、それに附加されるものである、性慾は單に生殖器的なものだけを意味する、と答へられるであらう。倒錯性慾はといふ抗議に對してさへも、大抵の倒錯性慾には、生殖器による交接以外の手段によつてゞはあるが、生殖器的恍惚狀態が現れるものである、と諸君は應じられるであらう。若し諸君が性的なものゝ特色から倒錯性慾のために支持し得ないところの生殖機能との關係を除去して、その代りに生殖器的活動を高調されるならば、諸君は實際前よりもよい立場を執つて居られるのである。けれども若しさうとすれば、吾々の見解にも大した差異はない。それは單に生殖器官對他器官の問題に過ぎない。しかしながら生殖器は快樂獲得のために他の器官によつて代用され得るといふ多數の證據――例へば常態的接吻、倒錯的實行、或はヒステリーの症候に於けるやうな――を諸君はどうされるのであるか。この神經病に於いては、本來は生殖器に屬する刺戟現象、感覺、神經作用、勃起過程さへも他のそれとは隔つた身體の部分に轉移されるのは（例へば、顏或は頭に轉移される）普通のことである。かうして性慾の特色として固執され得るものは一つもないことが分つた。諸君は私の例に從つて、「性的なもの」といふ名稱を器官的快樂を追求する幼兒の活動にまで擴大するやうに決心せざるを得ないであらう。

さて、私はこの見解を立證するところのもう二つの考察を述べたいと思ふ。諸君の知つて居られるやうに、吾々が幼兒の快樂を求める漠然とした、はつきりしない活動を「性的」と呼ぶのは、症候を分析するうちに吾々は疑ひもなく性的な材料からその活動に到達するからである。無論、さうだからと言つて、その活動自體が必ず性的なものと限つたことはなからう。けれどもこれと類似した場合を考へて見よう。二つの雙子葉植物――林檎の木と豆――をその種子によつて觀察する方法はないが、その兩者の場合に於いて、その發達を十分に成長した植物から二つ

の胚子を持つた最初の萠芽にまで遡ることは可能であると假定する。この二つの子葉はどちらも全然同じものであるやうに見える。吾々はこれによつて兩者は實際に同じものであつて、林檎の木と豆との差異は後になつて始めてその植物の發達中に現はれたのであると假定すべきであらうか。或は、私はその子葉のうちに差異を見出すことは出來ないが、それは既に萠芽のうちに存在してゐると考へる方が、生物學的には一層正しくはないであらうか。吾吾が乳兒の行爲を性的と呼ぶ時には正にかうしてゐるのである。あらゆる器官的快樂が性的と呼ばれてよいかどうか、或は性的なもの丶外に他の性的の名に値しないものが存在してゐるかどうかといふことは、私はこ丶で論ずることは出來ない。私は器官的快樂とその條件に就いては餘りに少ししか知つてゐないのである。かうして分析の遡源的性質の結果として、私が最後に現在に於いては明確に分類し得ない要素に到達したとしても、少しも驚くには當らない。

もう一つある。諸君は諸君が熱心に支持しようとして居られるところの子供の性的「純潔」に就いて、たとへ幼兒の行爲は性的であると考へない方がよいといふことを、私に信じさせることが出來るとしても、全體から見て薄弱な證據しか持つて居られない。何故ならば三歳以上の子供には既に性的生活の存する事は疑ふべくもないからである。この頃には生殖器は既に昂奮し始める。幼時の自瀆、卽ち生殖器による滿足の時期は必ず現はれるらしい。性的生活の心的及び社會的顯現は最早見落される必要はない。對象の選擇、愛情によるある特定人の偏愛、否、兩性のうちのある性への愛着、嫉妬さへも公平な觀察によつて精神分析とは獨立的に、またそれ以前に確證されて居り、またそれを見ようと欲するあらゆる觀察者によつて確證され得るであらう。かう言へば諸君は愛情が幼時に覺醒することに就いては少しも疑ひはしない、たゞそれが性的性質を帶びてゐるといふことを疑ふのであると諸君は反對されるであらう。子供は三歳から八歳までの間は確にこの要素を隱蔽する事を學んでゐるけれども、注意深く觀察すれば、この愛情が「感情的」性質のものであることの證據を集めることは至難ではない。さうして周到な觀察をさへも逃れるものは豐富にまた容易に分析的調査によつて供給される。この年齡に於ける性的目的は、茲に述べたところの、同時期の性的好奇心と密接な關聯を有してゐる。この目的の二三の倒錯的特色はまだ性交の目的を

發見し得ない子供の身的未成熟の當然の結果である。

約六歳から八歳以後には性的發達の停滯或は退行が認められる。さうしてそれが敎養に最も好都合になつた場合には潜伏期といふ名で呼ばれてもよい。けれども潜伏期の缺如することもある。またそれと共に性的活動と興味とが全體に亙つて中斷されるとは限らない。潜伏期以前に起る大抵の心的經驗と昂奮はその時、前に述べた、幼稚性記憶喪失に襲はれ、その記憶喪失は吾々の幼年時代を隱蔽し、それを吾々から隔絕せしめる。あらゆる精神分析の仕事はこの忘却された時期を再び憶起させるにある。この時期に屬する性的生活の始まりがこの忘却を生ぜしめた誘因であるといふ、卽ちこの忘却は抑壓の結果であるといふ推定は否認すべくもない。

子供の性的生活は三歳以來成人のと合致するものゝ多いことを示してゐる。後者との差異は、既に言つたやうに、生殖器を優位に置く堅固な組織の缺如してゐるところにある。必然的な倒錯的特徵にある。また、言ふまでもなく、その全衝動の遙かに弱いところにある。けれども理論的に見て最も興味のある性的發達の、或は吾々の欲する名稱に從へば、リビドー發達の段階はこの時期以前に存してゐる。この發達は極めて急速に行はれるから直接觀察だけでは恐らくその急過的形像を把握することは決して出來ないであらう。神經病の精神分析的調査の助けによつて始めてリビドー發達の更に以前の段階を暴露することは可能となるのである。この段階は確に理論的に構成されたものに外ならない。けれども諸君は精神分析の實施に當つて、この構成が必要なまた價値あるものであることを見出されるであらう。病理學的狀態は吾々が常態的對象に於いては看過するに相違ないところのこの現象の發見を、どうして吾々に可能ならしめるかといふことは間もなく理解されるであらう。

かうして今や吾々は生殖器が優位に立つより以前に於ける子供の性的生活がどうして形成されるかを說明する事が出來る。生殖器の優位は潜伏期以前の幼兒期に於いて準備され、青春期以後には絕えず組織されるのである。この初期に存在してゐる組織は漠然としたものであつて、吾々はそれを**前生殖器的**組織と呼ばうと思ふ。蓋しこの時期に於いては最も優勢なものは生殖器的部分衝動ではなくて、**サディズム的**或は肛門の衝動だからである。**男性と女性**の對立はこゝではまだ何等の役割をも演じない。その代りに能動的と受動的の對立がある。これは性的兩極性

の先驅ともいふべきもので、後年に於いてまたその兩極性と繋つてゐる。生殖器的時期の見地から考へて、この時期に於いて男性的と見えるものは、實は支配せんとする衝動の表現であつて、その衝動は容易に殘酷なものになる。受動的目的を持つ衝動はこの時期に於いては極めて重要な色情帶たる直腸口に關聯してゐる。見ようとする、また知らうとする衝動は極めて力強くはたらく。生殖器は性的生活に於いては排泄器官としてその役割を演ずるに過ぎない。この時期の部分衝動には對象は存しないことはないが、これらの對象は必ずしも一の對象に集つてはゐない。サディズム的——肛門的組織は生殖器優位の直ぐ前の階段であるが、更に精細に研究して見ると、そのうちのどれだけが後年の終局的構成に保有されてゐるか、どういふ風にしてこれらの部分衝動は新しい生殖器的組織に參加せざるを得なくなつたかゞ分る。リビドー發達のサディズム的——肛門的組織の背後には更に原始的な發達階段、色情帶たる口が主要な役割を演じてゐる階段のあることを吾々は見るのである。吸乳といふ性的活動がこれに屬することは推定が出來よう。古代エジプト人はその藝術に於いて子供を、神聖なるホラスをさへも、表はすのに指を口に啣へさせたが、これは彼等の理解の深さを示すものである。アブラハムはその最近著に於いてこの原始的肛門期の痕跡は後年の性的生活にも殘存してゐることを示した。

性的組織に就いてのこの最後の話は諸君に知識を與へたよりも寧ろ負擔を荷はせたことゝ私は思ふ。恐らく私はこゝでも餘りに細項に入り過ぎた。けれども辛抱していたゞきたい。こゝで諸君が聞かれたことはこれを後に適用する場合には更に有用なものとなるであらう。たゞ今のところでは、性的生活——吾々の所謂リビドー發達——は最初から完全な形で現はれるのではなく、何時も同じやうな形式で發達するのでもなく、相互に異つた一聯の繼次的形相を通過して來るものであること、毛蟲が蝶に發達する場合と同じやうに、多くの變化が發達中に起るものであることを銘記して置いていたゞきたい。一切の性的部分衝動が生殖器の優位の下に從屬し、それと共に性慾が生殖機能に奉仕する時に、その發達は轉向するのである。それまでは性的生活は、いはゞ、分散してゐて個々別々の部分衝動の獨立した性的活動が各自勝手に器官的快樂を求める。この無政府狀態を緩和するものは前生殖器的組織の企てゞ、その第一のものはサディズム的——肛門的形相であり、その背後には、恐らく最も原始的な、口的形相

がある。この外にも一の組織階段をそれよりも後の、高い階段に轉移せしめる種々の過程があるが、それに就いてはまだ十分知られてゐない。リビドー發達に於けるかくも多くの階段の通過が、精神病の理解にどんな意義を有するかはこの次に述べるつもりである。

今日はこの發達の他の方面、卽ち性的部分衝動と對象との關係を調べて見ようと思ふ。寧ろ吾々はこの發達は通覽するに止めて、この發達のかなり後の結果に多くの時間を割きたいと思ふ。性的本能の部分衝動のうちには最初から對象を持つてゐて、それを持ち續けるものがある。支配衝動（サディズム）や、見たい知りたいといふ衝動がそれである。ある極つた色情帶にもつと明白に關聯してゐる他の衝動は、最初それが非性慾的機能に依存してゐる間は、對象を持つてゐるが、非性的機能から離れるやうになると、それを放棄する。かうして性的衝動の口的部分の最初の對象は乳兒の營養的欲求を滿足される母親の乳房であるが、乳を飮んでゐる間にそれと共に滿たされる色情的要素は獨立して、他人にある對象を放棄し、子供自身の身體の部分をそれに代用する。かうして口的衝動は自己色情的になる。但し肛門その他の色情的衝動は最初からさうである。それ以後の發達は、出來るだけ精確に言へば、二つの目的を持つてゐる。その第一は、自己色情を廢し、自分の身體に見出される對象を再び他人に於ける對象に變へるにある。その第二は個々別々の衝動の諸對象を結合して唯一の對象をそれに置き換へるにある。そのことが爲され得るためには無論その唯一の對象は完全な、本人のに似た身體でなくてはならない。また色情的衝動情緖のある部分が不用なものとして廢棄されなければ、このことは完成され得ない。

對象發見の過程はかなり錯綜してゐて、今までのところではこれを一覽的に書いたものはまだ見出されない。私は吾々の目的のために次の事を强調して置きたい。卽ち潜伏期以前の少年時代にこの過程がある點に達した時には、そこに見出される對象は、子供が賴りにしてゐるといふ理由によつて得られたところの、口の快樂衝動の最初の對象と殆ど同じものであることである。卽ちそれは、母の乳房ではないが、母である。吾々はこの母を最初の愛の對象と呼ぶ。「愛」とは吾々が性的衝動の心的方面を强調し、その衝動の根本的な身體的或は「肉感的」方面の要求を無視する、或は一時忘れようとする時に使ふ言葉である。母が愛の對象になる頃には旣に子供には抑壓といふ心

的活動が始まつてゐて、その子供から性的目的に就いての知識のある部分を奪ひ去つてゐる。さてこの母を愛の對象として選擇することに「エデイパス複合體」と名づけられてゐる一切のものは關聯を有してゐるのである。而してこの複合體は、精神病を精神分析的に說明するのに極めて重要な意義を有するものであり、また恐らくは精神分析に反對するためにもそれに劣らぬ役割を演じてゐるものである。

こゝに今度の戰爭中に起つた一小話がある。一人の精神分析學を奉ずる青年が醫者としてポーランドに於けるドイツ戰線に勤務してゐたが、彼は時々患者に豫期されないやうな影響を與へるといふので同僚の注意を惹いた。彼は尋ねられるまゝに自分は精神分析法を用ひて居るのであることを告げ、彼の知識をその同僚に分つことを快諾した。そこで晩になるとその軍隊の軍醫達は彼の同僚も上官も集つて精神分析學の手ほどきを受けた。暫くの間は萬事都合よく行つた。けれども彼がエデイパス複合體の話に入つた時に、一上官は立上つて、自分はそんなことを信じない、そんなことを祖國のために戰ひつゝある勇敢なる人々、家庭の父達に語る講演者の態度は實に唾棄すべきである、と言つて、その講義を續けることを禁じた。話はこれでおしまひである。その精神分析學者は戰線の他の部分へ轉勤した。しかしながら、若しドイツの勝利がかゝる科學の「組織」を必要とするものならば、それは實に厭はしいことであり、ドイツの科學はかゝる組織の下に於いては決して榮えないであらうと私は思ふ。

諸君はこのエデイパス複合體とは何を意味するかを聞きたいと待ち構へて居られるであらう。それはその名前が示してゐる。諸君はエデイパス王のギリシヤ神話を御存知であらう。彼はその父を殺してその母と結婚するやうに運命づけられてゐたのであつた。彼は神話によつて豫言されたこの運命を避けるために全力を盡したが、知らずしてこの二つの罪を犯したことを知つた時、彼は盲目となつて自分を罰した。諸君の多くはこの物語から脚色したソフォクレスの悲劇から深い感動を受けられたことゝ私は思ふ。このアテンの詩人の作品は、ずつと以前になされたエデイパスの行爲が巧にその穿鑿は延ばされるが、だん〳〵新しい證據が現はれて來て、徐々に明かにされる徑路を描いてゐる。この點に於いてはこれは精神分析と類似する所がある。その對話のうちで母たり妻たる欺かれたヨカスタはその穿鑿を續ける事に反對する。彼女は多くの人々は夢ではその母と同衾するが、夢は何でもないことで

あるといふことを指摘する。吾々にとつては夢は、特に多くの人々が見る典型的な夢は決して何でもないものではない。ヨカスタの語つた夢はあの神話の恐ろしい內容と密接な關係のあることを吾々は疑はない。

ソホクレスの悲劇がその聽衆の間に烈しい抗議を呼び起さなかつたのは驚くべきことである。この抗議の方があの單純な軍醫のよりも遙かに正當なものであるやうに思はれる。何故ならば根柢に於いてこれは不道德な戲曲だからである。それは人間の道德的責任を廢棄し、罪惡を命令する神の力と、罪惡に陷るまいとする人間の道德的衝動の無力とを示してゐる。この物語が神と運命とを非難することを意圖してゐることは容易に信じられる、さうして批判的な、神と仲の惡いユウリピデスならば恐らくその非難をなしたことであらう。けれども敬神家のソホクレスにはかゝる意圖は問題ではなかつた。神の意志には、たとへ彼が罪惡を命じようとも、從ふのが最高の道德であるといふ敬虔な詭辯が彼をこの困難から救つた。この道德がこの戲曲の長所であるとは私は思はない。それはこの戲曲の效果には何の關するところもない。聽衆が感動するのはこの道德にではなくて、この物語の神祕な意味と內容とにである。彼は彼が自己分析によつて自己のうちにエディパス複合體を見つけ出し、神の意志と神話とは彼自身の無意識の輝かしい變裝であることを認めたかのやうに、父を押し退けて母を自分の妻としようといふ慾望を思ひ出して、その考へに驚いたかのやうに感動する。この詩人の聲は彼には次のやうに言つてゐるやうに思はれるのである。「お前が責任はないと反對しても、この邪惡な意圖に反抗したと斷言してもそれは無駄なことだ。矢張りお前には罪がある。何故ならばお前はその意圖を滅してしまうことが出來なかつたからだ。それはまだお前の中に無意識的に殘存してゐるからだ。」これには心理學的眞理が含まれてゐる。人間は彼の邪惡な欲望を無意識內に抑壓して、さうして最早それに就いては責任はないと言つても、なほどういふ譯だか分らないが、罪の感じとして責任を感じざるを得ないのである。

精神病者を屢々惱ますところの罪の感じの最も重要な源泉はエディパス複合體に見出されることに就いては少しも疑ふ餘地はない。否、それ以上である。私が一九一三年に『トーラムとタブー』といふ表題で、宗教と道德の原始的形式の研究を發表した時、私は全體としての人類の罪の意識——これが宗教と道德の究極の源泉である——

はエディパス複合體から始まつてゐるのではなからうかといふことを述べて置いた。私はこのことに就いて語りたくは思ふけれども、止めて置いた方がよからうと思ふ。一度その話を始めればそれから離れることは困難であるから、吾々は個人心理學の方に戻らなくてはならない。

それならば潜伏期以前に於ける對象選擇時代の子供の直接觀察によつて、吾々はエディパス複合體に就いてどういふことを知り得るか。左樣、次のやうなことが容易に見られる、卽ち、子供は母親を專有したく思ふ。父の居るのが邪魔だと感じる。父が母親に愛情を示すことを好まない。さうして父が旅行するか家に居ないかすると滿足の意を表する。その感情を明らさまに表白し、母と結婚すると約束することも屢々ある。これはエディパスの行爲に比較すれば何でもないと思はれやうが、事實としてはこれで澤山である。兩者ともその本質に於いては變りはない。この觀察の價値を屢々疑はせるものは、この同じ子供がこの時期の他の場合には父親に非常な愛情を示すことがあるといふ事實である。けれどもかゝる對立的な――或は寧ろ並行的な――大人に於いてならば鬪爭を生ぜしめるやうな感情狀態も子供の心のうちでは相並んで長い間存在することが出來るのである、丁度後年に於いてそれらが永久に無意識内に共存するやうに。これに對してある人は次のやうに反駁するかも知れない。「小兒の行動は利己的動機に基くものであつて、それは性的複合體の存在を少しも立證しはしない。母親は子供の必要なすべての世話をするから、從つて彼女が他の誰にも構はないのは子供にとつて利益である。」これも確かに正しい。けれども、この場合には、他のこれと類似した場合にと同じく、利己的興味はたゞ性的衝動の據所を供給するばかりであるといふことは間もなく明白になるであらう。若し子供が最も明らさまな性的好奇心を母に對して示す時には彼は夜彼女と一緒に寢たかつたり、着更の時に部屋の內に居ると言ひ張つたり、誘惑的態度をさへも執ることがある。これは母親の屢々認め且つ笑ひながら語ることであつて、彼女に對するこの愛着が性的性質のものであることは確實疑ふべくもない。更に忘れてはならないことは、母親はその娘を同じやうに世話しても同じ結果を得ず、父親が母親に負けないやうに男の子の世話をしても母親と同じほどの重要さを子供に認められないことである。約言すれば性的選擇の要素は批判によつてその狀態から抹殺されることはないのである。子供の利己的興味の見地からすれば、子供が

若し一人に世話して貰ふよりも二人に世話して貰ふ方が我慢が出來ない時には、彼は馬鹿であらう。

私は今男兒のその父母に對する關係だけを述べたが、このことは女兒に就いても、その關係は必然的に反對であるが、全く同樣である。父に對する愛着、母を邪魔者にして押し退け、自分がその位置を占めようとする要求、早くから後年の女らしさを示す媚態、これらのものは少女に魅惑力を與へて、その眞面目さとこの幼時の狀態の背後に隱れてゐて後年に現はれるかも知れない重大な結果とを否々に忘れさせる。こゝで是非附け加へて置かなくてはならないことは兩親自身が屢々性的愛着心に驅られて、大勢の子供がある時には必ず父親は娘に、母親は息子に愛情を示し、それによつて子供にエディパス的態度を執らすやうな決定的影響を及ぼすことである。しかしながらこの要素でさへも子供のエディパス複合體の自發性を甚しく傷けることはない。他の子供が生れて來ると、このエディパス複合體は擴大されて家族複合體となる。利已心を新しく傷けられて強くなつたこの複合體は生れた赤兒に對する嫌惡の感情を高め、もう一度何處かへやつてしまひたいといふ躊躇しない欲望を生ぜしめる。この憎惡の感情は通例兩親複合體に關するものよりも遙かに明らさまに表現される。この欲望が實現されて死が間もなくこの望ましくない附加物を連れ去るならば、後年の分析によつて、この死が、必ず記憶されてゐるとは限らないが、その子供にとつて如何に重大な出來事であつたかといふことを示すことが出來る、他の子供が生れたために第二位に置かれ、始めて母親から殆ど全然離された時には、彼は自分を蔑ろにした母親を許し難くおもふ。大人に於いてならば憤激とも言ふべき感情が生じ、屢々持續的疎隔の原因となることがある。性的好奇心とそれの結果とが通例子供のこの生活經驗に關聯してゐることに就いては既に述べて置いた。この新來の弟妹が大きくなるに從つて彼の彼等に對する態度に最も重要な變化が起る。子供は彼に親切でない母親の代りにその妹を愛の對象にすることがある。さうして兄弟が大勢ある時には、妹を手に入れるために、既に子供部屋に於いてさへも、後年の生活に重要な意義を有するところの敵對的競爭が生じる。少女は最早幼い時ほど自分に優しくして吳れない父親の代りに長兄を選ぶ。或は彼女はその妹を父に望んで得られなかつた子供に代用する。

かういふことやこれに似たまだ〳〵多くのことが子供を直接に觀察することによつても、分析によつて憶起され

たのでない彼等の少年時代の明晰な記憶を考察することによつても示される。これからして色々のことが推定されるが、特に諸君は兄弟間に於ける子供の地位は後年の生活の形成にとつて極めて重要な意義を有するものであり、どの傳記にも看過し得ないものであると推定されるであらう。しかしながら更に重要なことは、かくも容易に得られる啓蒙的考察に面しては、諸君は近親相姦の禁止を説明するための科學的學説を微笑せずには想起し得ないであらうといふことである。この説明のためにはあらゆる工夫がなされてゐる！　性的愛着は子供の時から一緒に生活してゐるがために同じ家族の異性には向けられないのであるとも、同族結婚を避けようとする生物學的傾向が心理的に現はれては近親相姦に對する恐怖となるのであるとも説明されてゐる。けれども若し近親相姦への誘惑に對する何等かの確かな自然的防壁が存在するならば法律や慣習によつてそれを嚴禁する必要はないといふことがそこでは全然看過されてゐる。その反對こそ眞理である。人間の對象の選擇は最初は必ず近親相姦的なものであつて、男性ならば母と姉妹に向けられる。さうしてこの上もなく嚴格及び禁制はこの保有されてゐる幼時の傾向が實現されるのを防ぐために必要なのである。現存の野蠻人及び原始民族にあつては近親相姦の禁止は吾々に於けるよりも遙かに嚴格である。テオドル・ライクが最近その立派な著書に於いて示してゐるところによると、再生を意味する野蠻人の元服式は子供のその母に對する近親相姦的愛着心を取去り、その父と和解せしめるためである。

神話は表向きには人間にかくも恐怖されてゐる近親相姦が神々には躊躇なく許されてゐることを敎へてゐる。さうして古代史の語るところによれば姉妹との同族結婚は國王にとつては神聖な義務であつた（古代エジプト及びペリの國王）。從つてそれは普通人には禁じられてゐた特權であつたのである。

母親との結婚はエデイパスの一の罪で、他の一つは父親殺しである。常に言ふが、人類の最初の社會宗教的制度たるトーテミズムもまたこの二大罪惡を嚴禁してゐる。今度は子供の直接觀察から精神病に罹つてゐる大人の分析的調査の方に眼を轉じて見よう。この分析はエデイパス複合體に就いてこれ以上のどんな知識を與へるであらうか。そのことは直ぐに言はう。その分析はその複合體をあの物語と同じやうに示してゐる。卽ちこれらの精神病者はすべて彼等自身エデイパスであつたが、或は、同じ意味になるが、この複合體に反應する際にハムレットになつたの

である。さうしてエディパス複合體のこの分析的表現が幼年時代の略圖の擴大であることは言ふまでもない。父親に對する憎惡、彼が死ねばよいといふ欲望は最早單に諷刺されてゐるには止まらない、さうして母に對する情愛は彼女を妻にしたいといふ目的を自認してゐる。吾々は實際かゝる烈しい異常な感情があの優しい少年時代にもあると信じてよいのであらうか。その分析は他の要素を導入して吾々を欺いてゐるのであらうか。かゝる要素を見出すことは困難ではない。何時でも人が過去のことを記述する時には、たとへ彼が歴史家であつても、知らず識らずにその過去の時期に現代の或はその中間期のことを導入し、從つてそれを誤つたものにすることのあることを吾々は考慮に入れなくてはならない。精神病者の場合にはこの回顧が全然故意になされたものでないかどうかさへも疑問である。この回顧の動機に就いては後に述べるつもりであるし、またずつと以前の過去にまで遡る「回顧的空想構成」の事實を全體的に考察しなくてはならない。また父親に對する憎惡は後年に於いて他の關係から生じたる數の動機によつて强められてゐること、母親に對する性的欲望は子供には決して知られてゐないやうな形に變へられてゐることは容易に見出すことが出來る。けれどもエディパス複合體の全體を回顧的空想構成によつて說明し、後年の時期に關係させようとするのは徒勞である。幼時の核心は多少の附加物と共に、子供の直接觀察によつて確證されるやうに、そのまゝ殘存してゐる。

分析によつて確證されたやうな形のエディパス複合體の背後に存する臨床的事實は今では實際的に最も重要なものになつてゐる。思春期になつて性的衝動が始めて全力を以てその要求を主張する時には、幼時からの近親相姦的對象は再び取り上げられて、またリビドーに取り圍まれる。幼時の對象選擇はいはゞ思想期の對象選擇の微弱な、しかしながらそれに方向を與へる序曲であつた。思春期には極めて烈しい感情の流れがエディパス複合體の方に、或はそれに對する反應に向うが、しかしながらその先行心的狀態が堪へ難くなつてゐるから、この感情の大部分は意識に入ることが出來ない。思春期以來人間は兩親から離れるといふ大事業に身を委ねなくてはならない、さうしてこの事業に成功した時、始めて彼は子供ではなくなり、社會の一員となるのである。男性にあつてはこの仕事はリビドー的欲望を家族外の愛の對象に向けるために母から離し、さうして若し彼が父親と敵對し續けてゐるならば

彼と和解し、若し幼時の反抗への反動として彼に服從してゐるならば、その束縛から脱するにある。彼はこの事業萬人に課せられてゐる。けれどもこゝで注意すべきことはこの事業が理想的に、即ち心理學的にも社會的にも正しいやうな風に、實行されることは殆どないことである。精神病者にあつては、しかしながら、この兩親からの脱却は全然なされてゐない。息子は一生涯その父に隷屬し、彼のリビドーを新しい愛の對象に轉移することが出來ない。娘の運命も、その關係は逆になつてゐるが、同樣である。この意味に於いてエディパス複合體は精神病の核心であると考へても間違つてはゐない。

諸君はエディパス複合體に關聯する理論的にも實際的にも極めて重要な多數の事柄を私は餘りに輕く見過してゐると思はれるであらう。けれども私はその複合體の變形やあり得べき轉換の問題には入らないつもりである。この複合體の間接的な影響のうちからたゞ一つ、詩人の作品に廣汎な影響を、及ぼしたことに就いてだけ一言して置かう。オットー・ランクは彼の價値ある書物のうちで、劇作家はあらゆる時代を通じてその材料を主としてエディパス複合體、近親相姦複合體、それの變型及び變裝されたものから得て來てゐることを示した。更に言つて置かなくてはならないことは、エディパス複合體のこの二つの罪惡的衝動は精神分析の時代よりもずつと前から束縛されざる本能の眞の表現であると認められてゐたことである。百科全書學者のヂデローの著作のうちに "Le neveu de Rameau" といふ有名な對話がある。これはヂデローその人によつて獨譯されたが、そのうちに次のやうな注意すべき文章がある。"Si le petit sauvage était abandonné à lui-même, qu'il conservat toute son imbécillité réunie au peu de raison de l'enfant an berceau la violence des passions de l'homme de trente ans, il tordrait le cou à son père et coucherait avec sa mère."

こゝでもう一つ言つて置きたいことがある。吾々はエディパスの母たり妻たるヨカスタの言つた夢のことを無意味に聞き流してはならない。諸君は吾々のした夢の解釋の結果を、夢を形成する欲望は屢々倒錯的或は近親相姦的性質のものであるか、或は親愛な近親者に對する思ひも掛けぬ敵意を示すものであるといふことをまだ記憶して居られるであらう。その時には吾々はこの邪惡な衝動が何處から生ずるものであるかといふことを説明せずに置いた

が、今やその源泉は明白である。それは幼時の、長い間意識生活から忘れてはゐたが、夜間にはなほ存在し、ある意味に於いては活動し得ることを證明するところのリビドーの傾向であり、リビドーによる對象の包圍である。けれども精神病者だけではなくすべての人間がこの種の倒錯的、近親相姦的、殺人的な夢を見るのであるから。今日常態的な人々も性的倒錯、エディパス複合體の對象包圍の發達徑路を通つて來たとも、またこれが常態的發達であるとも考へることが出來よう。たゞ精神病者は常態人の夢の分析に於いても見出されるものを廓大して示すだけである。かうしてこれが吾々が夢の研究を精神病的症候の序論たらしめた理由の一つである。

第二十二講　發達と退行の諸相、病原論

前に述べたやうに、リビドー機能は所謂常態的に生殖の役目を爲すに至る前に廣い發達階段を通過するものである。私は本講に於いてこの事實が精神病の生起に對して如何なる意味を有してゐるかを明かにしようと思ふ。かゝる發達は二個の危險、第一には禁止の危險を、第二には退行の危險を伴ふと見る點に於いては吾々は一般病理學說と一致してゐると私は思ふ。詳言すれば、生殖學的過程に於ける變形せんとする一般的傾向によつて、これらすべての豫備的發達形相は必ずや同じ位にうまく經過せず、完全に生長しないといふやうなことが起るに相違ない。この機能のある部分はその初期の階段に停止して、一般的發達と共にある程度の發達の禁止が生ずるであらう。

この過程に類似したものを他の分野に索めて見よう。人間歷史の初期に於いて屢々起つたやうに、一民族全體が新しい國土を探すためにその居住地を棄てる時には、その全數は確かに新目的地に到達しなかつた。他の原因による落伍者は別としても、その移住民族の小群或は小隊は必ずや中途に止まつて、その地に定住し、その大部分は更に前進を續けるやうなことが起つたに相違ない。或は、もつと近い類似を索めるならば、高等哺乳動物に於いては最初は下腹部窩の內深く横つてゐるところの生殖腺は、子宮內發達のある時期に於いて移動を始めて殆ど骨盤下端の皮膚のところへ出て來ることを諸君は知つて居られるであらう。ところがある男性にはこの一對の器官の一つが骨盤窩のうちに止つてゐることや、或はそれが移動中に通過すべき筈の鼠蹊管のうちに固着してしまつたり、或は

少くとも普通ならば生殖腺が通過した後には密閉さるべき筈のこの管が開いたまゝであることがある。私は學生時代にフオン・ブリユツケの指導の下に私の最初の科學的研究をしてゐた時に、ある小さい、しかし古代的構造を持つた魚の脊髓に於ける神經根の發生に就いて調べた。さうしてこの根の神經纖維は灰色物質の後部突起にある大細胞から出てゐることを見出した。これは他の脊柱動物には最早見出されない狀態である。けれども私はまた間もなくかゝる神經細胞は灰色物質の外に後部神經根の所謂脊髓神經節の全範圍に亙つて見出されることを發見して、この神經節の細胞は神經根に沿うて脊髓から移動したものであると推定した。このことは進化の歷史もまた證明してゐるが、この小さい魚に於いてはこの移動の全行程は停止した細胞によつて明かにされてゐる。けれども更に考察を進めて行けばこの比較の弱點は直ちに明白になるであらうから、私は單に個々の性的衝動の一部分は、他の部分がその目標に到達した時にも、なほ發達の初期の階段に停止することはあり得ると言ふに止めて置きたい。このことからして吾々はかゝる各衝動を生命の初期以來不斷に流れてゐる一つの潮流であると考へてゐること、吾々はこの潮流をいくらか技巧的に個々の繼起的前進運動に分割したのであることを諸君は認められるであらう。この考へは更に詳細に說明される必要があるといふ諸君の印象は間違つてゐないが、その說明を試みれば餘りに脫線することになるであらう。けれども吾々はこゝで部分衝動の初期の階段に於けるかゝる停止を（衝動）の固着と呼ぶことに決めて置きたいと思ふ。

かゝる階段的發達に於ける第二の危險は、ずつと前進した部分が容易にその初期の階段にまで後戾りすることであつて、吾々はこれを退行と名づける。衝動は、後期の或は高級の階段に於いてその機能の使用を、從つて滿足を齎す、目標に達することを有力な外的障碍によつて阻止されるときには、容易にかゝる退行の機會を見出すであらう。固着と退行とは相互に獨立したものではないと見ることは決して困難ではない。發達の途中に於ける固着が激しければ激しいほどその機能は一層容易に外的障碍を避けてその固着の方に退行し、發達した機能はその發達途上に於ける外的障碍に對する抵抗力を愈々少くするであらう。若し一移住民族がその多數を途中の地に殘して來たとすれば、更に前進したものは攻擊されたり、非常に優勢な敵に遭遇した時にはその地まで退却することは明白であ

る。また、彼等が背後に殘して來た人數が多ければ多いほど彼等は容易にこの敗北の危險に陷るであらう。精神病を理解するためには固着と退行との間のこの關係を記憶して置く必要がある。さうするならば諸君は吾々が間もなく考察しようと思つてゐる精神病の原因、その病原の研究に堅固な足溜りを得られるであらう。

けれども今のところは退行の問題をもつと調べて見よう。リビドー機能の發達に就いて今まで述べたことからして諸君は二種の退行——最初にリビドーによつて占有されたところの對象（吾々はこれが近親相姦的性質のものであることを知つてゐる）この復歸と、全性的組織の初期の階段、この復歸とがある事を豫期されるであらう。この兩種とも轉移神經病には現はれて、その機構に重大な役割を演じる。特に、リビドーの最初の近親相姦的對象、この復歸は精神病にはきまつたやうに見出される特徴である。若し他の群の、ナーシズム的と呼ばれる、精神病をも勘定に入れゝば、このリビドーの退行に就いてはもつと言ふべきことがあるが、今は論じないことにする。この疾患はリビドー機能の他の、今までに述べたことのない發達過程を吾々に明らかにし、またそれに對應する新型式の退行を示す。けれどもこゝで私が何よりも諸君に注意して置きたいことは退行と抑壓とを混同してはならないといふことであつて、私は諸君がこの二過程間の關係を明白にされるのに助力したいと思ふ。抑壓は、諸君の知つて居られるやうに、意識的たり得るところの、卽ち先意識體系に屬するところの心的作用を無意識的ならしめ、無意識的體系のうちに押し込めるところの過程である。また、無意識的心的作用が隣の先意識的體系のうちに入ることを許されず、監視作用によつて閾のところで追ひ拂はれた時にも吾々はそれを抑壓といふ。されば抑壓の概念は性慾とは何の關するところもない。このことはよく覺えて置いていたゞきたい。抑壓は純心理學的な一過程であつて、位置的と呼ぶ方が一層よくその特色を現はしてゐると思はれる。何故位置的と呼ぶかと言へば、抑壓作用は精神內に假定されたところの空間的關係に、或は、この粗雜な補助的表象をこゝでも用ひないとすれば、個別的な心理的諸體系から構成された心的裝置に關するものだからである。

この比較によつて吾々は吾々が今まで「退行」の語を一般的な意味にではなく、全く特殊な意味に使用してゐたことを知るのである。若しこの語を一般的な意味に、卽ち高い發達階段から低い階段への復歸の意味に解するなら

ば、抑壓もまた退行の部類に入ることになる。何故ならば抑壓は心的作用の發達に於ける初期の低い階段への復歸と見ることも出來るからである。たゞ抑壓に於いてはこの退行的方向は少しも重要ではない。何故ならば一心理的作用が低い無意識の階段に停まつてゐる時にも吾々はそれを動的な意味で抑壓と呼ぶからである。かうして抑壓は動的位置概念であるに反して、退行は全然記述的概念である。吾々が今まで退行と呼び、固着と關係させて考察したものはリビドーのその發達階段の初期の停止點への復歸だけを意味したのであつて、抑壓とは全然その本質を異にした、またそれとは全然關係のない或物であつた。吾々はまたリビドーの退行を純心理的過程と呼ぶことも出來ないし、それを心的機構のどの場所に置くべきかも知らない。たとへそれが心的生活に最も深い影響を及ぼすとしても、それに於ける最も優勢なものは器官的要素である。

この種の議論はどうしても無味乾燥なものになり勝である。されば吾々は退行に就いてのものと鮮かな印象を得るために臨床的實例を擧げようと思ふ。諸君はヒステリーと强迫觀念的精神病が轉移神經病の主要代表者であることを知つて居られる。さて、ヒステリーに於いてはリビドーは最初の近親相姦的對象にまで退行するものであり、それも極つてするが、しかし全性的組織が初期の階段にまで退行することは決してない。從つてヒステリー的機構に於いては抑壓が主要な役割を演じる。若しこの精神病に就いて今までに得られた知識を纏めることを許されるならば、私はその狀態を次のやうに述べるであらう。生殖器の優位の下に部分衝動は統一される。けれどもこの統一の結果は意識と連結した先意識體系の抵抗を受ける。この生殖器的組織は從つて無意識には容認されるが先意識にはされない。さうしてこの先意識の方からの擯斥は生殖器の優位以前の狀態に酷似した光景を生ぜしめるが、實際にはそれと全然異つてゐる。――リビドーの二種の退行のうちでは性的組織の初期の發達階段への退行の方が遙かに異常である。この退行はヒステリーには缺如してゐるし、また吾々の精神病に就いての全見解は時間に於いて先に爲されたヒステリーの研究によつて今もなほ非常な影響を受けてゐるので、リビドーの退行の意義は抑壓の意義よりも非常に遲れて認められた。吾々の見解は、吾々がヒステリーや强迫觀念的神經病の外に他のナーシズム的精神病とを考察し得るやうになつた時には、必ずや更に擴大され、變更されるであらう。

一方、强迫觀念的精神病に於いては、リビドーのサディズム的肛門的組織の前の階段への退行は最も顯著な因子であつて、その徵候の形式を決定する。愛の衝動はそこではサデイズム的衝動の假面を被らざるを得ない。「私はあなたを殺したい」といふ强迫觀念は、若しそれを或る偶然的な、ではなくて不可缺的なその要素から離して考へるならば、「私はあなたを愛したい」といふ意味に外ならない。若し諸君がこれと同時に初期の對象への退行も始まり、從つてこの衝動は最も近い、最も親愛な人々にのみ向ふことを考へ合されるならば、この强迫觀念によつて患者の心に起された驚怖と、その觀念が彼の意識的理解には如何に說明し難いものに見えるかといふことに就いて多少の觀念を得られるであらう。けれども抑壓もまたこの精神病の機構に重大な役割を演じる。但しこの役割をこの講義のやうな構說に於いて說明することは確かに容易ではない。抑壓を件はないリビドーの退行は精神病を生ぜしめないで、性慾倒錯症を生ぜしめるであらう。このことからして抑壓は精神病に最初から特有な、精神病を最もよく特色づけるところの過程であることが分る。けれども性慾倒錯症の機構に就いては多分後に述べる機會があると思ふ。さうしてその時諸君はそこに於いてもまた事は吾々が考へたがつてゐるやうに簡單なものでないことを知られるであらう。

若しリビドーの固着と退行に就いてのこの說明が精神病の病原硏究の準備であることを考へ合されるならば、諸君は直ちにこの說明で辛抱されることゝ私は思ふ。私はこの問題に就いてほんの一部分を、卽ち、リビドーを滿足させる可能性が無くなつた時には、從つて、私の言葉を用ひて言へば、「拒絕」の結果として人は精神病に罹るといふこと、彼の徵候は正に拒絕された滿足の代用物であるといふことを話しただけである。このことは無論リビドーの滿足を拒絕された人は誰でも精神病に罹るといふことを意味するのではなくて、如何なる精神病者を調べて見てもこの拒絕の要素が見出されたといふことを意味するに過ぎない。從つてこの言葉は逆にされてはならない。この立言は精神病の病原のすべての祕密を曝露したものではなくて、一の重要な不可缺な條件を高調したものに過ぎないことを諸君は必ずや了解して居られることゝ思ふ。

さてこの立言を更に詳說するためには吾々は拒絕の性質から始むべきかそれによつて影響された人の特異性から

始むべきかを知らない。拒絶が多面的、絶對的であることは殆どない。病原となり得るためには、拒絶はその人が欲求する唯一の滿足方法、彼が爲し得る唯一の方法を攻撃しなくてはならない。一般にリビドー滿足の缺乏に堪へるのには病氣になる外にも多くの方法がある。吾々は自分を損ふことなしにかゝる缺乏に堪へ得る人々を知つてゐる。彼等はその時幸福ではない、滿たされざる渇望に苦しみはするが、病氣にはならない。されば吾々は性的衝動は、若しこんな言葉を用ひてもよいならば、可塑的であると考へざるを得ない。その衝動の一つは他のものに代ることが出來る。若しその一つの滿足が現實によつて拒絶されるならば、他の滿足が十分それを償ふことが出來るそれは互に通じた、水の漲つた運河の網のやうなものであつて、生殖器の優位の下に隷屬してはゐるが、それを一個の觀念のうちに入れてしもうことは困難である。更に、性慾の部分衝動は、それらを包容する性的衝動と同じく、その對象を變化する、他のものと卽ち、もつと手に入れ易いものと交換する非常な能力のあることを示してゐる。この置換の、代用物を何時でも受け入れる能力は拒絶の病原的影響に強く反抗するに相違ない。缺乏から生ずる病氣に反抗するこの過程の一つは重要な文化的意義を持つに至つた。それは性的衝動がその部分的衝動の滿足や生殖に伴ふ滿足に向けられた目的を棄てゝ、他の、發生的に見れば前の目的と關聯はしてゐるが、最早性的なものとは考へ得られない、社會的とも呼ばるべき目的に向ふ事である。この過程を吾々は社會的目的を根柢に於いて利己的な性的目的よりも上位に置くところの一般的評價に從つて、「昇華」と名づける。序に言ふが、昇華は性的衝動と他の性的でない衝動との結合した一特殊側に過ぎない。このことに就いては後にもう一度論ずる機會があると思ふ。

滿足の缺乏に堪へる手段がそれほどあるとすれば、それは少しも重要なものではないであらうと諸君は考へられるかも知れない。しかしながら、さうではない。それはなほ病原たり得るだけの力を有してゐる。それを處理する手段は常に十分であるとは限らない。普通人が堪へ得る滿たされざるリビドーの量には限りがある。リビドーの可塑性と自由な流動性は決してすべての人々のうちに十分に存してゐるのではなく、また昇華も、多くの人々は昇華する能力を微弱な程度にしか有してゐないといふことは考へないとしても、リビドーの一定量以上を放散せしめることは出來ない。これらの制限のうちで最も重要なものは明かにリビドーの流動性に關するものである。何故なら

ばそれは制限されて居ればその人は極めて少數の目的と對象によつてより滿足を得ることが出來ないからである。若し諸君がリビドーが不完全に發達した時にはそれは性的組織と對象選擇の初期の階段に、大部分は現實に於いては滿足され得ない、極めて豐富な、時としては多數のリビドーを固着させることを想起されるならば、リビドーの固着は拒絶と合力して病氣を生ぜしめる第二の有力な因子であることを認められるであらう。このことを簡約して吾々は、リビドーの固着を精神病の病原の內的素因、拒絶をその外的偶因である、といふことが出來よう。

この機會に私は諸君が淺薄この上もない議論に左袒されないやうに注意して置きたい。眞理の一面を捉へてそれを全眞理であると主張し、その部分を擁護するために殘りの全部を論難する事は科學界にあり勝ちである。かういふ風にして精神分析的運動に於いても既に種々の方面が取り去られて、そのあるものは自己的衝動だけを認めて性的衝動を否認し、他のものは現實生活の影響だけを認めて、當人の過去の生活の影響を看過する。さてこゝでこれに類似した次のやうな反對と疑問が提供されるかも知れない、精神病は內發的疾患であるか外發的疾患であるか、ある型式の體質の不可避的結果であるか或は生活に於けるある外傷的印象の產物であるか、この場合で言へば、精神病はリビドーの固着（及び他の性的構造）によつて生じるのであるか或は拒絶の壓迫によつてゞあるか。この兩刀論法は私には「子供は父の生殖作用によつて生れるのであるか、母の受胎によつてゞあるか」といふ質問と同じほどに馬鹿げたものと思はれる。兩方の條件が等しく必要なのである。精神病を惹き起す條件も、これと全然同じではないまでも、極めてよく似てゐる。原因の見地から見れば精神病患者は一系列を成してゐて、兩要素――性的構造と經驗された出來事、或はリビドーの固着と拒絶と言つてもよい――がその系列內で一方が優勢なところでは他方がそれに比例して劣勢なやうな風に現はれてゐる。この系列の一端には、「これらの人々は、その變態的なリビドーの發達のために、どんなことが起つても、どんなことを經驗しても、生活が彼等にどんなに慈悲深くあつても病氣になつたであらう、」と確信を以て言はれ得るやうな極端な患者が立つてゐる。その他端にはこの反對に、「若し生活が彼等にこれこれの重荷を負はさなかつたならば、きつと病氣には罹らなかつたであらう、」と判斷されるやうな患者がゐる。この系列の中間にゐる患者には多少の素因（性的構造）が多少の傷害的な生活の重荷と結び合つて

ゐる。彼等の性的構造は若し彼等がこれこれの經驗をしなかつたら精神病を生ぜしめなかつたであらうし、この經驗は若し彼等のリビドーが他の狀態にあつたならば彼等に外傷的影響を與へなかつたであらう。多分私はこの系列に於いて素因の影響の方に稍重きを置くことは出來ようが、しかしそれは神經質の限界線を何處に引くかによつて決まるものである。

こゝで私はかゝる系列を補全系列と名づけること、この種の系列を今一度見出す機會のあることを前以て注意して置きたい。

リビドーがある特定の傾向と對象に執着する强さ、いはば、リビドーの固執性は人によつて異つた獨立的因子であるやうに思はれる。それを決定する條件は吾々には全然知られてゐないけれども、精神病の病原論にとつてのそれの重要性は最早過少視されてはならない。けれどもまた同時に吾々は兩者の密接な關係を過重視してもならない。これと同じやうなリビドーの固執は、原因は分らないけれども、多くの條件の下に於いて常態人にも起り、またある意味に於いては精神病者の正反對の位置にある人々、即ち變質者の決定的因子であることもある。變質者は極めて屢々幼時の變態的な衝動傾向や對象選擇の印象を憶起すること、リビドーはそれに生涯を通じて固執することのあることは精神分析學以前の時代にも知られてゐた(ビネー)。その印象はどうしてそんなに强くリビドーを吸引したかは分らないことが多い。私は自分で觀察したこの種の實例を話さうと思ふ。ある男は生殖器にもその他の女の魅惑物にも興味を持たなくなり、たゞある形の靴を履いた足によつてのみ抵抗することの出來ない性的衝動を得たが、彼はこのリビドーの固着を決定したところの彼の六歲の時の經驗を想ひ出すことが出來た。彼は自分は英語を敎へる女家庭敎師の傍で腰掛に坐つてゐた。彼女は碧色の眼をした瘦せた美しくない老女で、獅子鼻であつた。その日彼女は足を怪我してゐたので天鵞絨のスリッパを履いてそれをクッションの上に延ばし、脚はちやんと覆うてゐた。後年、靑春期に普通の性交を一度おづ〳〵と試みて以來、その家庭敎師のに似た、瘦せたしつかりした足が彼の唯一の性的對象になつた。さうしてその人がこの外にこの英國の家庭敎師のやうな型の女を想ひ出させる他の特徵を持つてゐる時には、彼はどうにもならない愛着を感じた。このリビドーの固着は、しかしながら、彼を精

神病者ならしめずして變質者ならしめた。彼は所謂「足の愛着者」になつた。されば リビドーの過度の、その上早過ぎる固着は精神病の原因としては不可缺のものであるが、その影響は精神病の限界よりも遙かに遠くまで及ぶものであることを諸君は理解されるであらう。この條件は單獨では前に述べた拒絶と同じやうに決して決定的なものではない。

從つて精神病の病原の問題は一層複雜になるやうに思はれる。實際、精神分析的研究は吾々の病原的系列に於いてまだ考察されなかつた、さうして以前は健康であつたのが突然精神病に罹つた人に於いて最もよく觀察されるところの新しい一因子を吾々に示すのである。これらの人々には欲望衝動の對立、或は吾々の言葉で言へば、心的鬪爭の徴候がきつと見出される。人格の一部はある欲望に味方し、他の一部はそれに反對し、それを防衞する。かゝる鬪爭のないところに精神病はない。これは別に不思議でないやうに思はれるかも知れない。吾々の心的生活は不斷の鬪爭であつて、吾々はそれを決定しなくてはならないことは誰も知つてゐる。從つてかゝる鬪爭が病原となるには確かに特殊な條件が果たされなくてはならないやうに思はれるであらう。それならばこの條件は何であらうか。如何なる心的力の間にこの病原的鬪爭は行はれるのであらうか。この鬪爭は他の病原的諸要素とどんな關係を有してゐるであらうか。

私はこれらの疑問に對して、恐らく簡約してゞはあらうが、滿足な答を與へ得ることゝ思ふ。鬪爭は拒絶によつて生じるのであつて、拒絶によつて滿足を奪はれたリビドーは他の方法と他の對象とを求めることを强ひられる。鬪爭の一條件はこの他の方法との對象とが人格の一部に嫌惡を生ぜしめることであつて、これによつてそれは拒否され、新しい滿足方法は最初は用ひられることが出來なくなる。これが後に述べる症候形式の出發點である。けれどもこの斥けられたリビドーの渇望は迂路を取つて、無論變裝や變形によつて反對の目を晦ましてゞはあるが、その目的を達する。さうして、この迂路が症候形成の過程であり、症候は拒絶によつて必要となつたところの新しい或は代用的滿足である。

心的鬪爭の意義はこれとは異つた風にも定義され得る。即ち、病原的力を持つためには外的拒絶は内的拒絶によ

つて補足されなくてはならない。外的及び內的拒絕はされば無論異つた方法と對象とに關聯してゐる。外的拒絕はある滿足の可能性を奪ひ、內的拒絕は他の可能性を排除しようとする。鬪爭の根據となるものはこの第二の可能性である。私がこの表現形式を選んだのは、それがもう一つの意味を含蓄してゐるからである。卽ちそれは內的拒否は人間發達の初期に於いては現實的外的障碍から生じたものらしいといふことを暗示する。

しかしながら病原的鬪爭の一方の相手たるリビドーの渴望を禁止せしめるところの力は何であるか。一般的に言へば、それは性的衝動の力ではない。吾々はこれを「自我衝動」の名の下に總括する。轉移神經病の精神分析によつてはこれを十分研究することが出來ない。精々のところ分析に反對するところの抵抗によつて少々知り得るぐらゐである。病原的鬪爭は、從つて、自我衝動と性的衝動との間に行はれるところの鬪爭である。互に異つた純性的衝動間の鬪爭のやうに見えるものも全體のうちにはあることはあるが、しかし根柢に於いては同一である。何故ならば鬪爭してゐる二つの性的衝動のうちの一つは常に自我に是認されたものであり、他方は自我の排斥を受けてゐるからである。從つてそれは矢張り自我と性慾との間の鬪爭である。

精神分析學が心的出來事は性的本能の作用であると主張した時、人間は性慾から出來てゐるのではない、心的生活には性的衝動の外にも他の本能や興味が存してゐる「あらゆること」を性慾によつて說明してはならない、等の憤慨的な反對が幾度となく提起された。その通りである。反對者との意見の一致は非常に嬉しいことである。精神分析學は非性的本能もまた存在することを決して忘れてはゐない。精神分析學は性的衝動と自我衝動とを嚴密に區別することから出發して、あらゆる抗議に對して、精神病は性慾から生ずるのではなくて、その起源を自我と性慾との鬪爭に有してゐる、と主張してゐるのである。精神分析學は疾病及び一般に生活に於ける性的本能の役割を研究するが、自我衝動の存在或は意義を否定すべき理由は少しも持つてゐない。たゞ精神分析學が第一に性的衝動を研究するに至つたのは、轉移神經病に於いてはこれが最も研究し易く、且つ他のものが閑却したことを研究する必要を感じたが故に外ならない。

精神の分析學は人格の非性的方面を取扱はないと言ふのも正當でない。自我と性慾とを分離したそのことが自我

衝動もまた重要な發達、リビドーの發達と全然關係のない事もなく、それに影響を及ぼさない事もないやうな發達を成してゐる事を、吾々に極めて明瞭に示してゐる。確かに吾々は自我の發達をリビドーの發達ほどにはよく知らない。何故ならば吾々はナーシズム的精神病の研究によつて始めて自我の構造を多少洞見し得る見込を得たに過ぎないからである。けれども自我の發達階段を理論的に構成しようとする注目すべき試みは、既にフエレンチによつて爲されてゐるし、また少くともこの發達を更に進んで研究するのに二個の堅固な足場を吾々は有してゐる。吾々は人間のリビドー的興味は最初からその自己保存的興味とは相容れないとは少しも考へてゐない。寧ろ自我はあらゆる階段に於いてその時の性的組織と調和したまゝでゐようとし、それに順應しようとする。リビドー發達に於けゐ個々の階段の交替は恐らく前に述べた順序を追ふものと思はれるが、しかしながらこの過程が自我の方からの影響を受けることのあるのは否定されない。自我とリビドーとのある一定の平行、その發達階段の對應もあると見てよからう。否、この對應關係の破綻が病原的因子となることがある。吾々にとつて更に重要な問題はリビドーがその發達の初期に於いて強く固着してしまつた時には自我はどういふ風に振舞ふかといふことである。自我はその固着を是認して、その固着の程度に比例して變質的に、或は同じことであるが、幼稚的になることもあるが、しかしまたリビドーのこの固着を擯斥することもある。その時にはリビドーが固着したことを自我は抑壓する。

＊フエレンチ、『精神分析學に就いての諸論文』第三章、一八九頁。

かうして精神病の病原の第三因子たる闘爭的傾向は自我の發達にもリビドーの發達にも關聯してゐることを吾々は知るのである。精神病の病原に就いて吾々の知見はかうして擴大された。第一に、一般的條件として拒絶があり、次にリビドーをある一定の方向に强制するところの固着があり、第三に自我の發達によつて生じ、この種のリビドーの刺戟を擯斥するところの闘爭的傾向がある。從つて事實は、私の講義の進行中に恐らく諸君が考へられたであらうやうに、曖昧でも複雜でもない。無論、これだけではまだ十分ではないことは事實である。吾々はまだこれに新しいものを加へて、今までに言つたことを更に分析しなくてはならない。

自我の發達が闘爭の形成に、及びそれによつて精神病の發病に及ぼす影響を例證するために、一つの實例を擧げ

ようと思ふ。これは全然想像的なものではあるが、どの點に於いても正にありさうな事である。私はネストロイの笑劇の藝題に從つて『土間と二階』と名づけようと思ふ。土間には留守番が住んでゐて二階には金持で上品な家主が住んでゐるとする。二人とも子供を持つてゐて、家主の娘は自由にその貧乏人の子供と遊ぶ事を許されてゐたと假定しよう。さうすると彼等の遊びが猥褻な、卽ち性的性質を帶びたものに直ぐになつて來る。彼等は「お父さんとお母さん」遊びをやる。抱き合つて顏を見詰めたり、生殖器に觸れたりする。留守番の娘はそれを先にやるであらう。何故ならば五歲か六歲であつても彼女は旣に性に就いて色々のことを知つてゐるからである。これらのことは、ほんの暫くしか續かなかつたとしても、二人の子供に性的昂奮を起させるに十分であつて、この遊戲をしなくなつてから數年後に、自瀆の實行となつて現はれるであらう。こゝまでは二人の子供に共通であるが、その最後の結果は非常に異るであらう。留守番の娘は自瀆を恐らく月經の始まるまで續け、その時に少しの困難もなしに止めるであらう。數年後には戀人を見つけて、恐らく子供を生むであらう。それから何かの生活の道を選んで、恐らくは有名な女優になつて上流婦人として世を終るかも知れない。或はそんな華かな生活は送らないかも知れないが、どちらにしても彼女は子供の時の性的行爲には禍されず、精神病にも罹らないで生活するであらう。家主の娘にはこれとは全く異つた結果が生ずる。彼女は直ぐに、まだ子供の時に何か惡いことをしたと感じて間もなく自瀆による滿足を、恐らくは非常な努力によつてゞあらうが、止めるであらう。けれども何か壓迫されたやうな感じを持ち續けるであらう。後年、大きくなつて何か性交のことを聞いた時には、彼女は說明し難い恐怖を感じて それを避け、何も知らないでゐたいと願ふであらう。恐らく彼女はその時自瀆したいといふ抵抗し難い衝動に再び襲はれるであらうが、しかしそれを誰かに訴へることは敢てしないであらう。さうして彼女がある男から妻として選ばれた時に、精神病が勃發して、彼女の結婚と生活の希望を臺なしにするであらう。若し分析によつてこの精神病の病原が明かにされ得たならば、この育ちのよい、賢い、理想の高い娘は彼女の性的欲望を全然抑壓したといふことが、しかしこの欲望は、彼等に意識されないで、彼女の遊び友達と共にした少しばかりの經驗に固着してゐたことが見出されるであらう。

同じ經驗をしたにも拘らずこの二人の運命に差異を生じたのは、一方の娘の自我はある發達をしたが、他の娘のはしなかつたからである。留守番の娘にとつては性的行爲は子供の時と同じやうに後年になつても自然で無害であるやうに思はれた。家主の娘は教育の影響を受けてその教へるところに從つた。彼女の自我はこれに刺戟されて性的行爲とは相容れないところの女性の純潔と禁慾といふ理想を樹てた。彼女の知的教養は彼女をして彼女が爲すべき筈の女性の役割を蔑視せしめた。彼女の自我のこの高い道徳的及び知的發達によつて、彼女は彼女の性慾の欲求と闘爭せざるを得なくなつたのである。

私は今日は自我の發達に於けるもう一つの點に就いて述べて見ようと思ふ。何故ならばそれは眼界を更に廣くもするし、また吾々が自我本能と性的本能との間に常に說けるところの嚴密な、しかし自明ではないところの區別を證明するのにも極めて都合がよいからである。自我とリビドーの二つの發達に就いて考察する時、吾々は今まで餘り注意されなかつた方面に注目せざるを得ない。兩者とも根柢に於いては遺產であり、全人類がその先史時代から長い間かゝつて通過して來たところの進化の短縮された反覆である。リビドーの發達に於いてはこの系統發生的起原は何の苦もなく見ることが出來ると私は思ふ。ある類の動物に於いては生殖的機構は口と最も密接なる關係を有し、他の動物に於いては分泌器官と區別されて居らず、他の動物に於いては運動器官の一部を成してゐることを考へていたゞきたい。この事實はブエルシエの立派な書物のうちに面白く敘述されてゐる。動物はあらゆる種類の、いはゞ、變態的性的組織を示してゐる。たゞ人間に於いてはこの系統發生的方面が多少明かでなくなつてゐるが、これは根柢に於いては遺傳されるものが、恐らく最初それを獲得せしめたのと同じ條件が今もなほ各個人に影響を及ぼしてゐるが故に、各個人の發達中に新しく獲得されるといふ事情によつてゞある。最初には新しい反應を生ぜしめた條件が今はその素質を刺戟するのである、と私は言ひたい。このことは言はないとしても、前に述べた各個人の發達の行程が外部からの刺戟的影響によつて擾亂され變更されることのあることは疑ふべくもない。けれども人類にかゝる發達を强制し、今日までもそれを同じ方向に向けさせてゐる力は何であるかを吾々は知つてゐる。それもまた現實によつて課せられた拒絕である。もつと正しい偉大な名で呼べば、生活の必要である。Ἀνάγκη である。

必要は嚴しい教師であつて、吾々に多くのことを教へた。精神病者はこの嚴酷のために惡化した必要の子供であるが、その危險は如何なる教育にも避け難いものである。序に言ふが、生存競爭は進化の原動力であるといふこの見解は、「內的進化的傾向」――若しかゝるものが存在するとすれば――の意義を減殺する必要はない。

さて、性的衝動と自己保存の衝動とは現實生活の必要に面接した時には同じやうな風に振舞はないことは極めて注目に値する。自己保存の衝動及びそれに關聯する一切のものは一層容易に變形される。それらのものは早くから必要に從ひその發達の方向を現實の指圖に應じて決定することを學んでゐる。さうしてこれは理解の出來ることである。何故ならばそれはその欲する對象を他の如何なる手段によつても手に入れることが出來ず、且つこれらの對象なくしてはその個人は死なゝくてはならないからである。性的衝動はこれほど容易には變形され得ない。何故ならば最初それは對象の缺乏を知らないからである。蓋し性的衝動はいはゞ他の肉體的機能に寄生的に依存し、また自己色情的に自己の身體によつて滿足され得るから、最初は現實の必要の教育的影響を免れ、且つ、吾々が「無思慮」と呼ぶところのこの執拗性と影響を受けない性質とを、多くの人に於いては何等かの點で生涯を通じて持ち續ける。更に、少青年を教育することは、性的欲望が究極的な强さで眼覺めて來た時には、通例不可能になる。教育家はこのことを知つてゐて、これに從つて行動する。けれども恐らく彼等は精神分析學の成果によつて教育の主要時期は乳兒からの幼年期に置き換へらるべきであることを認めるであらう。子供は屢々四五歲の時に旣に完成されてゐるものであつて、旣に彼のうちに橫つてゐるものを後年に至つて徐々に現はすに過ぎない。

この二群の衝動の差異を十分に理解するために吾々は少しく脇道をして、經濟的と呼ばれる價値のある一考察に入らなくてはならない。こゝで吾々は精神分析の最も重要な一領域に入るのであるが、遺憾なことにはこれはまた最も不明な領域である。吾々は、心的機構のはたらきの主要目的は認められ得るかと尋ねる。さうしてこれに對しては先づ、この目的は快樂の獲得に向けられてゐると答へる。吾々は、全心的活動は快樂を手に入れ苦痛を避けることに向けられてゐるやうに、その活動は自動的に快樂原則によつて統整されてゐるやうに思はれる。さて吾々が何よりも知りたく思ふことは、快苦を生ぜしめる條件は何であるかといふことであるが、これがまた正に吾々の十

分知り得ない點である。吾々の敢へて言ひ得ることは、快樂は心的機構のうちに存する刺戟量の輕減、消滅と、苦痛はそれの增加と何等かの風に關聯してゐるといふことだけである。人間が爲し得る最も强烈な快樂、性的行爲の實行の際の快樂の硏究はこの點に就いては少しの疑惑も殘さしめない。この種の快樂の過程は心的機構の任務と作用を、量の分配に關してゐるのであるから、吾々はこの種の考察を經濟的と名づける。吾々は心的機構は內外から來る刺戟量を支配し放散することをその目的としてゐるとも言はれ得る。性的本能はその發達の最初から終りまで快樂の獲得を目的としてゐることは極めて明白であつて、その第一次的機能を少しも變化せずに持ち續ける。他の衝動、卽ち自我衝動も最初はこれと同じやうに振舞ふが、その敎師たる必要の影響によつて間もなく快樂原則が訂正されなくてはならないことを學ぶ。自我衝動にとつては苦痛を避けることが快樂を獲得するのと殆ど同じほど重要なものとなる。自我は直接的滿足を斷念すること、快樂の獲得を延期すること、ある程度の苦痛を忍ぶこと、ある種の快樂の源は全然廢棄することは避け難いことを知る。かういふ風に訓練されて自我は「思慮的」になり、最早快樂原則には支配されないで現實原則に從ふ。この原則も根柢に於いては快樂を求めるのであるが、しかし現實を顧慮して、たとへ遲くともまた小さくとも、確實な快樂を求める。

この快樂原則から現實原則への推移は自我の發達に於ける最も重要な進步の一つである。性的衝動は自我發達のこの階段を、後になつて厭々ながら通ることを吾々は旣に知つてゐる。彼の性慾が外界とのかゝる僅かばかりの關聯を以て滿足してゐることが、その人にどんな結果を及ぼすかは間もなく明かになるであらう。最後にこゝでもう一つだけ注意して置きたい。若し人類の自我がリビドーと同じやうな發達史を有してゐるとすれば、「自我の退行」が存在すると聞いても諸君は驚かれないであらう。さうして自我のこの初期の階段への復歸が精神病に如何なる役割を演じ得るかを知りたく思はれるであらう。

第二十三講　症候形成の徑路

普通人にとつては病氣の本質を成すものは症候であり、治療とは症候を除くことである。けれども醫者は症候と病氣とを區別することを重要視して、症候の消失は決して病氣の治癒とは同一でないと言ふ。しかしながら症候が取除かれた後にまで殘る病氣の要素は症候を新しく形成し得る能力だけである。されば吾々は當分の間は普通人の見解を採つて、症候の根據を知ることは病氣を理解するのと同じであると考へようと思ふ。

症候——吾々はこゝでは精神的（或は精神發達的）症候と精神病とを論じてゐるのであることは言ふまでもない——は全體としての生活に有害な、或は少くとも無用な作用であつて、病人は屢々それを厭なものであり、不快と苦痛を感ぜしめると訴へる。症候が與へる主要な損害は症候自らが心的勢力を浪費することゝ、その上症候と戰ふために浪費されることである。症候が十分に形成された時にはこの兩種の浪費は當人の使用し得べき心的勢力を異常に減殺せしめ、その結果彼は生活のすべての重要な仕事を行ふことが出來なくなる。この結果は主としてかうして取去られた心的勢力の量に依存するのであるから、從つて「病氣」はその本質に於いては實踐的概念であることが知られる。けれども若し理論的見地を採つて、この量の問題を度外視するならば、吾々はすべて病氣に罹つてゐる、卽ち精神病者であると容易に言ふことが出來る。何故ならば症候形成の必要な諸條件は常態人に於いてもまた見出され得るからである。

精神病的症候はリビドーが新しい種類の滿足を求める時に生ずる鬪爭の結果であることは、吾々は旣に知つてゐる。この相對抗した二個の力は症候に於いて再び合同し、いはゞ、症候形成作用の調停によつて和解する。症候があんなにも抵抗力を有するのはこの理由によつてゞあつて、それは兩方から支持されてゐるのである。吾々はまたこの鬪爭の二個の後援者の一方は現實によつてその滿足を妨げられた、さうして他の新しい滿足方法を求めることを餘儀なくされたリビドーであることを知つてゐる。若し現實が相變らず無情であれば、リビドーは、たとへ拒絕された對象の代りに他の對象を取るつもりであつても、最後には退行の道を選んで、その滿足を旣に通過して來た組織の一つに、或は初期に放棄した對象の一つに求めざるを得なくなる。而してリビドーをこの退行の道の方に誘ふものは、それがその發達の途中に於いて見棄てたところの固着である。

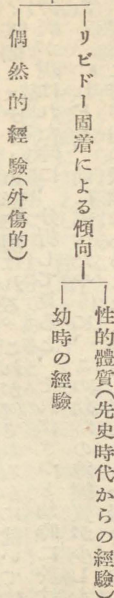
さて變態への道は精神病への道とは全然岐れてゐる。若しこの退行が自我の抗議を受けなかつたならば精神病は生じないで、リビドーは何等かの、常態的のではないとしても、現實的滿足を得る事に成功するであらう。けれども若し自我が、意識ばかりではなくて運動神經作用をも、從つて心的努力の實現をも支配するところの自我が、この退行に同意しないならば、そこに鬪爭が生じる。リビドーは、いはゞ、追ひやられる。それは快樂原則の要求に從つてその勢力を放散せしめるために何處かに迯路を索めなくてはならない。自我から迯れなくてはならない。而してリビドーにかゝる迯路を提供するものはその發達の途中に於ける固着——自我が以前抑壓によつて防衞したところの固着である。リビドーは今や後戻りしてこの抑壓された陣地を占領することによつて自我とその法則から迯れるが、しかし同時にまた自我の影響によつて習得した一切の教養をも棄てゝしまふ。リビドーはその滿足が達し得られさうに見える間は從順であつた。けれども内外からの拒絶の二重壓迫によつて、それは剛情になり、昔の幸福であつた時代を想起するやうになる。これがリビドーの根柢に於いては不變の特質である。今やリビドーがその勢力の重荷を轉移するところの觀念は無意識的體系に屬し、さうしてこの體系が爲し得るところの過程、特に壓縮と抑壓の過程に從ふ。かうしてこゝに述べられた狀態は夢の形成の狀態と精確に合致してゐる。或る（先）意識的活動は無意識内に於いて完成された潛在夢——これは無意識的欲望の空想の實現である——を監視して、その好みに從つて、折衷物としての顯在夢の形成を許容するのと同じやうに、無意識内に於けるリビドーの代表もなほ先意識的自我の力と爭はなくてはならない。自我のうちに生じたこれに對する反抗はリビドーの代表の「敵役」としてそれを追ひ、さうして自らも同時に表現され得るやうな表現法を選ぶべきことをそれに强制する。症候が互に相容れない二個の意義を有する曖昧な表現をわざと選び、さうしてリビドーの無意識的欲望の多樣に變歪された滿足として生起するのはこの理由によつてゞある。但しこの最後の點では夢の形成と症候の形成の間には一の差異が認められる。即ち、夢の形成の場合には先意識的目的は單に睡眠を保護して、それを擾亂するものを意識内に侵入させない事にあつて、無意識的欲望衝動に對して鋭く、「いや、その反對だ！」と叫ぶことにあるのではない。それは、眠つてゐる人の位置がそれほど危險でないために、もつと寬大であることが出來る。欲望が現實に實現されること

は睡眠狀態そのものによつて防止されてゐる。

かうして鬪爭狀態に於けるリビドーの逃避が可能であるのは固着が存在するからである。この固着への退行によつて抑壓作用は出し拔かれ、リビドーは放散――或は滿足――されるが、この際にも妥協の條件は維持されなくてはならない。この無意識とずつと前の固着への迂回によつてリビドーは終に、確に非常に制限されてそれと認め難いやうではあるが、現實的滿足を得ることに成功する。私はこの結果に就いて二個の注意をして置きたいと思ふ。第一に、一方に於いてはリビドーと無意識が、他方に於いては自我と意識と現實とが、本來は決して結合してゐなかつたにも拘らず、如何に密接に結合してゐるかといふことを注意していたゞきたい。さうして第二に、私がこの點に就いて言つたこと、これから言ばうとすることは、すべてヒステリー精神病の症候形成にのみ關するものであることを承知していたゞきたい。

リビドーは抑壓作用を切り拔けるのに必要な固着を何處に見出すであらうか。幼時の性的活動と經驗にである。子供時代に放棄されたところの部分衝動と對象にである。さればリビドーはこれらのものに再び後戻りする。この子供時代は二樣の意味に於いて重要である。卽ち一方に於いては子供が生得的素質として有してゐる衝動傾向はこの時代に始めて現はれ、他方に於いては外的影響と偶然的經驗によつて彼の他の衝動が始めて眼覺され、活動するやうになる。この二分には十分な根據があると私は思ふ。生得的素質の顯現は確かに疑はれ得ないであらうが、しかし分析的觀察は子供時代に於ける純偶然的經驗がリビドーの固着を生ぜしめ得ることを十分に示してゐる。またこの假定は理論的にも困難ではないと私は思ふ。體質的素質がずつと前の祖先の經驗の後影響であることは疑へない。それらのものもまた一度は習得されたのである。かゝる習得がなければ遺傳もまたないであらう。さうしてかゝる遺傳さるべき性質の習得がこの時代に於いて突然終止するといふことは考へ得られるであらうか。幼時の經驗の重要性は、しかしながら、屢々なされてゐるやうに、祖先の經驗の、或は自己の成年時代に於ける經驗の重要性のために全然看過されてはならない。その反對にそれは十分に評價される必要がある。それは發達の十分でない時に起るが故にいよ〳〵多くの結果を齎し、さうしてこの理由によつて外傷的影響を及ぼし勝である。發達の機構に

就いてのルウその他の人の研究の示すところによれば、細胞分割を爲しつゝある胚子への針の一突きは、發達に非常な障碍を生ぜしめる。ところがこれと同じ傷害は蛹蟲或は成長した動物には何の害も與へないであらう。

精神病の病原の構成要素の代表として述べたところの成人のリビドー固着は、從つて今や更に二要素に、遺傳的素質と幼時に習得された傾向とに分割される。圖式表現は常に學生の贊成を得るものであるから、吾々はこの關係を圖で表はさうと思ふ。

遺傳的性的體質はある部分衝動が單獨で或は他のものと合同して、特に強くなるに從つて極めて多様の傾向を示す。幼時の經驗と共に性的體質は前に述べたところの成人の素質と偶然的經驗から形成されるものと全く類似したもう一つの「補全的系列」を構成する。孰れの系列にも同じやうな極端な例があり、その要素の同じやうな關係がある。こゝで、性的組織の初期の階段へのリビドーの退行の最も顯著なものは、遺傳的な體質的要素によつて著しく條件づけられないかどうか、と尋ねることは極めて至當ではあるが、これに對する答は精神病の諸形式がもつと廣い範圍に亙つて考察され得るやうになるまで保留して置く方がよからうと思はれる。

吾々はこゝでは精神病者のリビドーは、分析的研究が示すところに從へば、彼等の幼時の性的經驗に固着するといふ事實をもつて詳しく考察して見ようと思ふ。分析見地から見ればこの性的經驗は人間の生活と病氣にとつて異常に重要な意義を有してゐるやうに見える。さうしてこの重要性は治療を眼中に置く限りは決して減退しない。けれども他の見地から見れば、こゝに誤解の危險が、生活を餘りに一面的に精神病的立場から考察するやうに迷はされる危險が存在することを認めるのは容易である。リビドーはその後期の位置から追ひ出された後に幼時の經驗の方に退行するのであることを考へれば、幼時の經驗の重要性は割引されなくてはならない。このことからして吾々

は反對に、リビドー經驗はそれが生じた時には何等の重要性を有してゐず、退行によつて始めてそれを獲得するのである、と結論することが出來よう。前にエディパス複合體を論じた際にも吾々はかゝる交替的態度を執つたことを諸君は記憶して居られるであらう。

この點を決定することも困難ではない。幼時の經驗のリビドーの占有、從つてその病原的重要性はリビドーの退行によつて著しくされるといふ解釋は疑ひもなく正しいが、しかしこの一面だけを決定的なものと見るのは誤りであらう。他の方向も考察されなくてはならない。先づ第一に、觀察が明白に示すところによれば幼時の經驗はそれ獨自の重要性を有し、それは既に少年時代にも見出される。實際、神經病は子供にもあるのであつて、この病氣は外傷的經驗の直接的結果として現はれるのであるから、そこでは時間的後退の要素は極めて短縮されてゐるか、或は全然缺如してゐる。子供の夢が成人の夢を理解する鍵を與へたと同じやうに、この子供の精神病の研究によつて成人の精神病に就いての多くの誤解の危險から免れることが出來る。子供の精神病は非常に多い。普通に考へられてゐるよりは遙かに多い。それは屢々看過され、不良性や惡習の現れであると考へられ、屢々子供部屋に於ける權威者によつて無理に押へつけられる。けれども後からの回顧によつてそれは常に精神病であることが容易に認められる。それは最も多く苦悶ヒステリーの形で現はれる。これが何であるかに就いては後に述べる機會があらうと思ふ。後年になつて精神病が現はれた時に、分析して見ると、それはきつと幼時に於ける、まだはつきりしない初期的な精神病の續きである。けれども、前に述べたやうに、この幼時の神經質が少しも精神病にまでならずに生涯續く場合もある。子供が實際に精神病の狀態にあることを分析し得るやうな場合も少しはある。しかし大抵の場合吾々は成年時に發病した人の幼時に遡つて、そこに子供の精神病を見出すことに滿足するの外はない。但しこの場合には精確と周到とが閑却されてはならないことは無論である。

第二に、若し子供時代にリビドーを惹きつける何物かゞ無いとすれば、それが必ずその時代に退行するのは確に不思議であると言はなくてはならない。吾々が假定するやうな發達階段の或る場所への固着は、若しそれが一定量のリビドー的勢力を惹きつけて置くものであると考へないならば、何等の內容を有しないであらう。最後に、こゝ

では幼時の及び後年の經驗の強度と病原的重要性との間に、前に研究した系列に於けると同じやうな補全的關係の存することを私は指摘したい。子供時代の性的經驗だけが病原になつてゐて、この印象が確實に外傷的影響を及ぼし、普通の性的體質とその未發達といふこと以外には何等の補足物を必要としないやうな例もあれば、後年の闘爭だけが病原となつてゐて、子供時代の印象が分析によつて明かにされるのは單に退行の結果であると思はれるやうな例もある。從つてこゝは二つの極端——「發達障碍」と「退行」があり、兩者の間にこの兩要素のあらゆる程度の結合がある。

このことは子供の性的發達に早くから干渉することによつて精神病を豫防しようとする敎育家にとつてかなり興味のあることである。幼時の性的經驗に主として注意を向けてゐる限りは、この發達を遲れさせ、子供にこの種の經驗をさせないやうにすれば、精神病の豫防には十分であると人は考へるであらう。けれども精神病を生ぜしめる條件はこれよりも複雜であること、一要素に注意するだけでは一般に效果のないことを吾々は知つてゐる。子供の嚴重な監視は無效である。何故ならばそれは體質的要素に對しては無力だからである。その上、これを實行することは敎育家が考へてゐるほど容易ではなく、且つ決して輕視することの出來ない二つの新しい危險を伴ふ。卽ちそれは嚴重に過ぎて、性慾を有害な結果を生ずるほどに強く抑壓したり、思春期に現はれるに違ひないところの性的欲求の突擊に對して抵抗力のない子供を世の中に送つたりする。從つて子供の時の豫防はどのぐらゐ利益があるか、現實に對する變化された態度は精神病豫防のよき着手點であるかどうかは矢張り極めて疑問である。

再び症候の考察に戾ることにしよう。症候は拒絕された滿足の代用を爲すものであつて、幼時へのリビドーの退行、對象選擇と性的組織の初期の發達階段と密接な關聯を有するところの幼時への復歸によつてこの目的を達する。精神病者は何等かの風に彼の過去と結びつけられてゐることは前に述べたが、今や吾々はそれが過去に於ける彼のリビドーが滿足を見出し得た、彼が幸福であつた時期であることを知るのである。彼は彼の生活歷史を振返つてかゝる時期を索める。さうしてそれを想起するのに、或は後年の影響に從つて想像するのに、彼の乳兒時代にまで遡らなくてはならなくても、それを索め續ける。症候は何等かの方法で幼時に於けるやうな種類の滿足を再現する。無

論それは闘爭から生ずる監視作用によつて變歪され、通例は苦惱の感情に變化され、また病氣の原因となるやうな要素と混合してはゐる。症候が齎すところのこの種の滿足は、その當人がそれの滿足であることを知らないで寧ろこの吾々が滿足と認めるものを苦惱と感じて訴へるといふ事實は言はないとしても、極めて奇妙なものである。この變形は心的闘爭の結果であつて、症候はその壓迫の下に形成されなくてはならなかつたのである。嘗ては滿足であつたものが、今では彼に抵抗を或は嫌惡の情を起させなくてはならないのである。吾々はかゝる感情の變化の地味な然しながら敎へるところの多い一つの例をよく知つてゐる。母の乳房から乳を貪り飮んだ子供が數年後には乳を飮むことを敎育によつても止めさせることの出來ないほどに酷く嫌惡するやうになる。この嫌惡は、若しミルクが或はそれの混つた飮物が皮で蔽はれてゐる時には、恐怖にまで强まる。この皮が前にはあんなにも好んだ母の乳房の記憶を喚び起すことは恐らくあり得ることであらう。外傷的な乳離れの經驗が確かにこの間にあつたのである。

症候を奇妙な、リビドーの滿足の手段として理解し難いものに見せるものはまだ他にもある。症候は吾々が普通に滿足と呼び慣れてゐるものを一つも吾々に想ひ出させない。症候は多くの場合對象を索めようとせず、從つて現實との關係を放棄する。これは現實原則を拒んで快樂原則に戻る結果であると思はれる。けれどもそれはまた性的衝動に始めて滿足を與へたやうな種類の範圍の廣い自己色情への復歸でもある。症候は外界を變化する代りに身體を變化する。外的行爲の代りに內的行爲を用ひる。行動する代りに順應する。これもまた系統發生的見地からは極めて重要な退行であるが、このことは症候形成に就いての分析的研究が後に敎へる筈の新しい一要素と關聯させて考察された時に一層よく理解されるであらう。更に吾々は症候の形成には、夢の形成にはたらいたのと同じ無意識の過程、卽ち壓縮と置換作用がはたらいてゐることを想起する。症候は、夢と同じやうに、實現されたものとしての或物を、子供のと同じやうな滿足を表現するが、しかし最も酷い壓縮によつてこの滿足はたゞ一つの感覺或は神經作用にまで押し縮められ、極端な置換によつてリビドー複合體全體のうちの一小項に限定されることがある。症候のうちにあると豫期されてゐるところの、而して常にあることが證明される所の、滿足を見出すことが屢々吾々

には困難であるとしても、少しも驚くには足らない。

私はまだ述べない新要素があると言つた。それは實際驚くべき奇妙なものである。吾々は症候の分析によつてリビドーは幼時の經驗に固着すること、症候はそれによつて形成されることを知つたが、驚くべきことにはこの幼時の場面は必ずしも本當ではないといふことである。否、多くの場合にはそれは間違つて居り、二三の場合には事實の正反對である。この發見は他の何よりもかゝる結論を導き出した分析か、或は分析が全體としての精神病の理解の根據とした患者の證言を疑ふに適した材料であると諸君は思はれるであらう。この外にもこれに就いては極めて奇妙なことがある。若し分析によつて明かにされた幼時の經驗がどの場合にも本當であるならば、吾々は堅固な根據を有してゐると感じるであらう。若しそれが必ず誤つてゐて、患者の發明であり空想であることが見出されるならば、吾々はこの薄弱な根據を棄てゝ他の根據に據らなくてはならないであらう。けれども事實はどちらでもなくて、分析によつて構成された或は憶起された幼時の經驗は、ある場合には疑ひもなく誤りであるが、ある場合には確に本當であり、多くの場合には眞僞が混淆してゐる。從つて症候は時には實際にあつた經驗の表現であつて、吾々はこれをリビドーの固着に影響したものと見ることが出來るが、時には患者の空想の表現であつて、言ふまでもなく病原的役割を演じたものではない。こゝで道を誤らないことは困難である。この混亂に於ける最初の手掛りは恐らくこれと同種の發見に見出されるであらう。卽ち、人々が常に、分析される前から、意識的に有してゐる幼時の斷片的の記憶も同じやうに誤つてゐることがある。少くとも眞僞が豐富に混淆してゐることがある。この誤謬を證明することは少しも困難ではないから、從つて少くともこの豫期しない失望の責任は分析がではなくて、何等かの風に患者が負ふべきものであるといふ安心だけは得られる譯である。

こゝで吾々を混亂させるものが何であるかは一寸反省すれば明白になる。それは現實の輕視である。現實と空想との差異の閑却である。吾々は患者が空想談で吾々の時間を浪費することに對して憤りたくなる。現實は吾々には空想とは天地の差があるやうに思はれ、吾々はこの兩者を全然異つた風に評價する。また患者自身も彼が常態的に考へてゐる時にはこれと同じ態度を執る。彼が症候の背後にあつて望みの狀態——子供時代の經驗の模寫であると

ころの――を生ぜしめるあの材料に就いて述べる時には、吾々は確かに最初にそれが現實であるか空想であるかを疑つてかゝる。この決定は後にある徵候によつて可能となるのであつて、この時吾々はこの結果を患者にも知らせなくてはならない。ところがこの仕事も決して容易ではない。若し最初に患者に向つて彼は今、あらゆる民族の初期の忘却された歴史が神話で覆はれてゐるやうに、彼の子供時代の歴史を覆うてゐる空想を語らうとしてゐるのであると告げるならば、その話題を更に續けようとする彼の興味は突然消えてしまふ事を吾々は認めるのである。彼もまた事實を探し出す事を欲して、一切の「想像」を蔑視する。けれども若しこの部分の仕事が終るまで患者に吾々は彼の子供時代に實際にあつたことを調べてゐるのであると信じさせて置くならば、彼をして後に吾々を誤解せしめ、吾々の外見的輕信を嘲笑せしめるの危險を吾々は冒さなくてはならない。現實と空想とは同樣に取扱はるべきであり、考察されてゐる子供時代の經驗がその孰れに屬するかを氣にかけてはならないといふ提言を彼に理解させるには長い時間がかゝる。しかもこれがこの心的所産に對する唯一の正しい態度である。この心的所産も一種の現實性を有してゐる。患者がこの空想を創作したといふことは一の事實である。而して精神病にとつてはこの事實は空想の內容が現實に經驗されたのに劣らず重要な意義を持つてゐる。物的現實に對してこの空想は心理的現實を有してゐる。さうして精神病の世界に於いては心理的現實が決定的要素であることを吾々は徐々に理解するのである。

精神病者の年少時に絶えず繰返され、無いことの殆どない出來事のうちに特に重要なものが二三ある。さればこれらのものに特に考察される價値があると私は思ふ。この種の標本として私は、兩親の性交の觀察、大人からの誘惑、去勢の威嚇を擧げたい。これらのことは實際には決して起らないと考へるのは非常な誤であらう。その反對に、これらのことは年取つた近親の證言によつて疑を容れないほどに確證されることが屢々ある。例へば、自分の陰莖を弄び始めるやうにはなつたがまだそれを隱すことを知らない小さな子供が、兩親や保姆からその陰莖か或は惡いことをする手を切つてしまふと嚇かされることは決して稀ではない。兩親は尋ねられゝば屢々この事實を認める。何故ならば彼等はこの威嚇を正しいやり方だと考へてゐるからである。多くの人々はこの威嚇に就いての精確な意識的記憶を有してゐる。稍大きくなつてから爲された場合に於いて特にさうである。若し母親か或は他の婦人

が威嚇する場合には、普通父か或は醫者に切つてもらうと言ふ。フランクフォルトの小兒科醫、ホフマンの有名な“Struwelpeter”——この書が流行したのは、彼が子供の性的その他の複合體に就いて深い理解を有してゐたに因る——に於いては、去勢のことは拇指をしつつこく吸ふ罰としてそれを切り取ることに書き換へられてゐる。けれども去勢の威嚇が精神病者の分析によつて示されるほど屢々爲されたとは到底信じられない。吾々は子供がかゝる威嚇を暗示によつて、自已色情的滿足は禁止されるといふ知識の力を借りて、さうして女の生殖器を見た時の印象によつて、空想するものであることを理解するだけで滿足する。同樣に、小さい子供が、少しの理解力も記憶も持つてゐないと信じられてゐる間は、貧乏人の子供でなくても、兩親や他の大人の性交を目擊することは決して無いことではない。さうして子供が後になつてこの印象を理解し、それに反應し得る事は否定さるべくもない。けれども若しこの性交が到底觀察され得ないほど詳細に述べられる時には、或は、極めて屢々爲されるやうに、背後からの性交であつたと言はれる時には、この空想は動物（犬）の交尾の觀察を基礎としたものであること、その原動力は思春期に於ける子供の滿たされざる觀察衝動であることは殆ど疑ふ餘地はない。この種の最も著しい空想になると、患者は兩親の性交をまだ生れないで母の胎內に居た時に目擊したと考へる。誘惑の空想は特に興味がある。何故ならばそれは餘りに屢々空想ではなくて、事實の憶起だからである。けれども幸ひなことには、それは分析の結果が最初思はせるほど屢々事實ではない。誘惑は大人によつてよりも年上の或は同年配の子供によつて爲される方が多い。而して子供時代のこの出來事を語る時には少女は大抵極つて父を誘惑者であるとするが、この非難が空想的のものであることも、その非難の動機も明白である。誘惑が少しも起らなかつた時には、子供は通例その空想を彼の性的活動の自已色情的時期に向ける。彼は自瀆に就いての羞耻心を厭へつけて、欲する對象は幼時にあつたと空想する。しかしながら男の最近親者による子供の性慾の濫用は悉く空想されたものであると想像されてはならない。大抵の分析家はかゝる出來事が實際にあつて疑ひの餘地なきまでに確證され得たやうな例を取扱つたことがあるであらう。但しこの場合に於いても幼時にあつたと考へられたことは、實際には子供時代の後期にあつたのである。

吾々はかゝる子供時代の經驗は精神病にとつて何等かの風に必然的に必要なものであり、その不變的內容であるとより外には考へることが出來ない。若しそれが現實に見出されるならば、それでよい。若し現實に見出されないならば、それは暗示によつて作り出され、空想によつて仕上げられたのである。孰れにしてもその結果は同一であつて、この子供時代の經驗に空想と現實の孰れが大きい役割を演じてゐようとも、今日に至るまで吾々はその結果に差異を見出すことが出來ない。こゝにもまた前に屢々述べた補全的系列の一つがある。これは確かに吾々が今まで知つたものゝ中で最も奇妙なものである。この空想の必要とその材料は何處から出て來るのであらうか。その衝動的源泉に就いては疑ふ餘地はないが、しかし同じ空想は何時も同じ內容を以て形成されてゐることは說明されなくてはならない。私はこれに對して一の答を有してゐるが、これは諸君には極めて大膽であると思はれるであらうことを私は知つてゐる。この原初的空想（私はこれ及び他の二三の空想をかう呼びたい）は系統發生的領地であると私は思ふ。こゝでは個人は、自己の經驗が不十分なものになれば、何時でもそれを超えて過去の時代の經驗を取入れるのである。今日分析に於いて空想であると言はれてゐるものはすべて、子供時代に於ける誘惑も、兩親の性交を目擊しての性的昂奮も、去勢の威赫も、或は寧ろ去勢そのものも、原始時代の家庭に於いては現實であつたといふことは、子供がその空想に於いて單に個人的事實の罅隙を先史的事實を以て充塡したのであるといふことは、私には十分有り得ることのやうに思はれる。人間發達の古代の形式が、他のどの分野によりも精神病者の心理狀態のうちにより多く保存されてゐるのではなからうかといふ疑念には吾々は、既に屢々到達したのであつた。

さてこゝに論じられてゐる事柄は、「空想」と呼ばれてゐるところの精神作用の起源と意義に就いて更に深く考察すべきことを吾々に要求する。空想は、諸君の知つて居られる通り、一般に高く評價されてゐるが、その精神生活に於ける位置は明白には理解されてゐない。私はこれに就いて知つてゐることを述べようと思ふ。御承知の通り、人間の自我は外的必要の影響によつて徐々に現實を尊重すべきこと、現實原則を追求すべきことを、さうして彼の快樂衝動の對象と目的――性的なものだけではない――を一時或は永久に斷念しなくてはならないことを教へられる。けれども快樂の斷念は人間には常に極めて困難なことである。彼は何等かの償ひがなければそれを實行し得な

い。そこで彼は一つの心的活動を發達させて、それによつて斷念された快樂の源泉と放棄された滿足方法に存在を、現實の要求と所謂現實の試驗から免れた形式に於ける存在を續けることを許した。あらゆる渴望は直ちに實現されてゐるといふ觀念に變へられる。この空想による欲望充足の感は、それが現實でないといふことは決して忘れられはしないが、なほ滿足を齎すことは疑ひない。從つて人は空想に於いて外界の强制からの自由、現實に於いてはずつと前に斷念されたところの自由を享樂し續けることが出來る。彼は漸くにして、同時に快樂を求める動物であり、理性的存在であることに成功する。彼は現實から引き出した貧弱な滿足では甘心することが出來ない。「補助的觀念なしに行はれるものは何もない」とフォンテインは嘗て言つた。空想といふ心的領域の創造は、農業や交通や產業の必要が、その本來の地表をそれと認め難いほどまでに急速に變化せしめようと脅かしてゐる場所に於ける「取置地」や「自然公園」のやうなものである。自然公園は他のあらゆる場所では必要のために悲しくも犧牲にされた舊い狀態を保有してゐる。そこではあらゆるものが、無用な、有害なものまでが、思ひのまゝに成長し、蔓ることが出來る。空想といふ心的領域もまた現實原則から離れたかゝる取置地である。

　空想の最もよく人に知られてゐる所產は前に述べたことのある所謂「晝夢」であり、現實が謙遜と忍耐に就いて忠告すればするほど愈々大きくなる野心的、誇大的、色情的欲望の想像的滿足である。空想的幸福の本質、即ち現實の制約を脫した快樂獲得の狀態への復歸は、この晝夢に紛ふべくもなく現はされてゐる。而してかゝる晝夢は夜の夢の中核であり雛形であることを吾々は知つてゐる。夜の夢は、その根柢に於いては、晝夢が夜間に於ける衝動作用の自由によつて使用され、夜間の心的活動形式によつて變歪されたものに外ならない。而して晝夢は必ずしも意識的ではなく、無意識的晝夢もまた存在するといふことに就いては吾々は旣に屢々述べて置いた。從つてかゝる無意識的晝夢が夜間の夢の源泉であると共に、また精神病的症候の源泉である。

　空想が症候形成にとつて重要であることは次の說明によつて明白になるであらう。吾々は前に、リビドーは拒絕された場合には退行して背後に殘して來た場所を占領するが、しかしその場所にはその勢力の幾分が附着したまゝであつた、と言つた。吾々はこの說明を取り消さうとも訂正しようとも思はないが、兩者を連絡するものを追加し

ようと思ふ。リビドーは固着點への歸路をどうして見出すのであるか。さて、リビドーの放棄されたすべての對象や傾向はあらゆる意味に於いて放棄されたのではない。それらのもの、或はそれから派生したものはある程度の强度に於いてなほ空想的觀念のうちに保有されてゐる。從つてリビドーは、すべての抑壓された固着への道を見出すためには、たゞこの空想を引き出しさへすればよい。この空想は或る種の寛容を受けた空想と自我との間には、兩者の對立が如何に烈しかつても、或る條件、量的性質を持つた一條件が嚴守されてゐる限りは、鬪爭は起らなかつた。この條件は、しかしながら、今やリビドーの流れの空想への復歸によつて破られる。この增援によつて空想の勢力は增加され、それによつて空想は自らを實現しようと努力し始める。このことは、しかしながら、空想と自我の間の鬪爭を避け難いものとする。空想は、たとへ以前には意識的或は先意識的であつたとしても、今や自我の方から抑壓を受け、無意識の方から引き寄せられるやうになる。今は無意識的な空想からリビドーは無意識内に於けるその源流の方に、空想自身の固着點の方に遡つて行く。

リビドーの空想へのこの復歸は症候形成の中間階段であつて、特に名稱を與へられる價値がある。C・G・ユングはこのために内向といふ極めて適切な名前を造つたが、しかしこれを彼は不當な風に他の意味にも使用した。吾々は内向といふ語を、リビドーが現實的滿足の可能性を避けて今まで無害なものとして寛容されてゐた空想の方に轉向すること、の意味にのみ限定しようと思ふ。内向された人はまだ精神病者ではない。彼は不安定な狀態に居るのである。さうして次に力の轉移が行はれた時に、若し彼がこの閉ぢ込められたリビドーのために他の出口をなほ見出すことが出來ないならば、症候が現はれるのである。精神病者の滿足の非現實的性質と、空想と現實の差別の無視は、既にこの内向の階段に於けるリビドーの滯留によつて決定されてゐる。

この最後の說明に於いて私は病原的連鎖と一つの新しい要素、卽ち、量を、こゝで考察された勢力の量を導入したことを諸君は必ずや氣付かれたであらう。吾々は常にこの要素をも勘定に入れなくてはならない。病原的諸條件の純然たる質的分析だけでは十分でない。他の言葉を以て言へば、これらの心的過程を單に動的に理解するだけでは不十分であつて、經濟的見地もまた必要である。相對立する二個の力の間の鬪爭はその占有勢力の量が一定の程

度に達しなければ、たとへその內容的諸條件はずつと前から存してゐても、起らないものであることを吾々は理解しなくてはならない。同樣に、構成因子の病原的重要性も部分衝動の一が他のものより如何に多くその性向を與へられてゐるかによつて決定される。質的には性向は萬人に同一であつて、たゞこの量的關係に於いてのみ異つてゐると考へることさへも出來よう。精神病に對する抵抗能力にとつてはこの量的要素も同じく重要である。それは放散されないリビドーのどれほどの量をその人は與へることが出來るか、彼のリビドーのどれほど多くの部分を彼は性的な方から昇華作用の目標の方へ向けることが出來るかによつて決まる。心的活動の究極的目的は、質的に言へば、快樂の獲得と苦痛の回避への努力であるが、經濟的見地からすれば、心的機構のうちに働いてゐる刺戟量の分配を司り、それが苦痛を生ぜしめるほどに累積することを防止するにあると言へる。

これで精神病に於ける症候形成に就いては述べ盡したつもりである。けれども今日述べたことはすべてヒステリーに於ける症候形成に關するものであることを私は重ねて注意して置きたい。强迫觀念的精神病でさへも、その本質には變りはないが、非常な差異を示してゐる。前にヒステリーに關しても述べたところの衝動の要求に對する自我の反對要求は、强迫觀念的精神病に於いては一層强く現はれ、所謂「反動形成」の形でその臨床的狀況を支配する。それと同じやうな、さうしてもつと酷い變態が他の精神病にも見出されるが、それらの症候形成の機構の研究はまだどの點に於いても完成されてゐない。

今日の講義を終る前に、私は一般的興味に値する空想的生活に就いて一言して置きたい。卽ち、空想から現實に戻る道が一つある、さうしてそれは藝術である。藝術家もまた內向的傾向を有して居り、その點では精神病者に遠くない。彼は非常に强い衝動の要求に壓迫される。彼は名譽、權力、富、名聲、婦人の愛を得ようと渴望するが、彼はそれを手に入れるだけの手段を有してゐない。そこで彼は、滿たされざる渴望を持つた他の人々と同じく、現實の世界から脫れて彼のすべての興味を、すべてのリビドーをも、空想生活に於ける欲望形成の方に向ける。これから精神病への道は遠くないのであつて、これが彼の發達の唯一の結果とならないのには、多くの要素が協同してゐるに違ひない。實際、藝術家が精神病のために、その活動力を一部分禁止されることの屢々あることはよく人の

知るところである。多分彼等の昇華能力は強く、闘爭を決定する抑壓作用は弱いのであらう。藝術家は現實へ戻る道を次のやうな風にして見出す。卽ち、彼は空想生活を營む唯一人ではない。空想の中間世界は人間の一般的同意によつて承諾されるのであつて、すべての飢ゑたる魂はそこから慰藉を得ようとする。けれども藝術家でない人々には空想の泉から汲み出すことの出來る快樂は極めて僅かなものである。彼等の假借なき抑壓作用は意識的になることを許された貧弱な晝夢を以て滿足すべきことを彼等に要求する。ところが眞の藝術家は更に多くのものを自由に使驅する。第一に、彼はその晝夢から他人に分らない部分を削り去つて、それを他人も樂しむことが出來るやうな風に彫琢する方法を知つてゐる。彼はまたその晝夢の嚴禁された源流を容易に見付け出されないやうな風にそれを變更することをも知つてゐる。更に、彼は彼の特殊な材料を彼の空想の觀念を忠實に表現するやうな風に造り上げる神祕な能力をも有して居り、また彼の無意識空想のこの表現によつて、少くとも一時抑壓作用を打ち負かし、追ひ拂ふことの出來るほどの快樂を獲得する道を知つてゐる。これらすべてのことを爲し得る時、彼は他人に彼等自身の無意識的な閉ざゝれたる快樂の源泉から慰藉を見出す道を示し、さうして彼等の感謝と讚美を得るのである。この時彼は、彼の空想によつて、以前にはたゞ空想に於いてのみ得ることの出來たもの――名譽、權力、婦人の愛を獲得するのである。

第二十四講　一般神經質

前講に於いて吾々が試みたやうな困難な仕事の後で、私は暫らく主題を離れて諸君に向ひたいと思ふ。何故ならば私は諸君が不滿を感じて居られることを知つてゐるからである。諸君は「精神分析學序論」はこんなものではないと考へて居られた。諸君は理論ではなくて、生命に滿ちた實例を聞くことを豫期して居られた。私の土間と二階に於ける二人の子供の話は、それが空想的物語ではなくて、事實的觀察であつてほしかつたといふ點を除けば、精神病の原因に就いて或物を吾々に理解させた、と諸君は言はれるであらう。或は、私が最初に二個――の症候を叙述して、それの解釋と、その患者の生活との關係を示これは想像的なものではなかつた筈である、

した時、症候の「意味」が急にはつきりしたと諸君は言はれるであらう。さうしてこのやうな風に講義を續けるべきであつたと思つて居られるであらう。ところが私はさうしないで、見渡すことの出來ないほどに廣汎な、まだ決して完全でない理論を述べて、それに絶えず新しいものを加へて行つた。まだ諸君に紹介しないやうな概念を取扱つた。叙述的説明を棄てゝ動的見解を採り、またそれを棄てゝ所謂「經濟的」見解を採つた。どれだけの術語が同じことを意味し、たゞ語調のために交用されたのであるかを諸君が理解することを困難ならしめた。快樂原則と現實原則や系統發生的發達の遺傳的所有物といふやうな廣汎な見解を持ち出し、さうして何物かを説明する代りに、それを諸君の眼から遠ざけてしまつた。

何故に私は精神病學の序論を諸君自身が知つて居られ、ずつと前から諸君の興味を惹いてゐた神經質から、神經質な人々の特異性、人間的交渉及び外的影響に對する彼等の理解し難い反應、彼等の昂奮性、彼等の移り氣、彼等の無能から始めなかつたのであるか。何故に諸君を一歩一歩神經質の單純な日常的形式から、それの不可解な極端な顯現の問題の方に導いて行かなかつたのであるか。

成程、私は諸君が誤つてゐると言ふことは出來ない。私は私の説明能力に、その説明の缺點が美しさを增させると考へるほどには、自惚れてゐない。他の風に講義した方が諸君にとつて利益が多かつたかも知れないと私も思つてゐる。またさうするのが私の意圖でもあつた。けれども人は考へて置いた計畫を何時も實行出來るとは限らない。材料そのものゝために最初の計畫を變更しなくてはならないことも屢々ある。よく知つてゐる材料を整理するといふやうな日常的の仕事でも、著者の思ひ通りには行かないことがある。材料は吾々の計畫には無頓着に現はれて來る。さうして人は後になつて何故かうい風になつて他のやうにならなかつたのであらうと驚き得るだけである。

この理由の一つは恐らく「精神分析學序論」といふ題目が最早精神病を取扱ふべきこの部分には適合しない事である。精神分析學序論は誤謬と夢の研究であつて、精神病學は精神分析學そのものである。私はかゝる短時間に於いては、この集約的な形式に於いてでなければ、精神病學の內容に就いての如何なる知識をも諸君に與へる事が出來なかつたと思ふ。私は症候の意味を症候形成の內的及び外的條件と機構と共に述べるつもりであつた。さうして

私はそれを試みた。これは精神分析學が今日教へ得ることの核心にかなり近いものである。これと共にリビドーとその發達、自我の發達の或物に就いても言ふべきことが澤山あつた。吾々の方法の主要原理や無意識の及び抑壓(抵抗)の廣汎な意想に對しては、諸君は既に序講によつて準備を有して居られる。次の講義の一に於いて私は、精神分析學の仕事がどの點でこれと有機的に續くかに就いて述べるつもりである。今まで私は吾々の結論はすべて精神病の一群、即ち所謂轉移精神病の研究からのみ引き出されたものであることを少しも隱さなかつた。症候形成の機構に就いてはヒステリー精神病からのみ推論しさへした。恐らく諸君は何等徹底した知識を獲得されず、またその詳細は覺えて居られないではあらうけれども、精神分析學が用ひる方法、取扱ふ問題、提供する結論に就ての一般的觀念は獲得されたことゝ私は思ふ。

諸君は私が精神病の說明を、精神病者の行動や彼がその病氣に惱み、抵抗し、順應する樣子の叙述を以て始めるべきであつたと欲して居られると私は言つた。これは確かに興味のある、また研究に値する題目であり、取扱ふことも餘り困難ではないが、この方面から始めないのには理由がある。即ちさうすれば無意識が看過され、リビドーの重要な意義が無視され、さうして一切の事態が精神病者の自我に現はれた通りに判斷される危險がある。さて、この自我が信頼するに足る公平な裁判官でない事は明白である。否、自我は無意識的なるものを否定してそれを抑壓するところの力である。自我がこの無意識的なるものを公平に取扱ふとはどうしても信じられない。この抑壓されたものゝうちには第一に性慾の拒まれたる要求がある。この性欲の要求の範圍と意義とを、自我の見地からは吾々は決して學び得ないことは言ふまでもない。抑壓の性質が吾々に明かになり始めてより以來、吾々は紛爭を裁定するのに相爭ふ二者の一方を、倘更勝つてゐる方を許すべきでないことを知つてゐる。吾々は自我の言分に欺かれないやうに準備してゐる。自我の言ふことを信ずれば、自我は何處までも能動的であつて、その症候はその意志によつて形成されたやうに見えるであらう。けれども自我はかなりの程度に受動的であること、その事實を隱蔽し、胡麿かさうとしてゐることを吾々は知つてゐる。無論自我は何時もこれを試みる譯ではない。强迫觀念的精神病の症候に於いては自我は未知の或物が彼に對立し、彼は極力それと戰はなくてはならないことを承認せざるを得ない。

自我の言ふことを眞に受ければ誤謬に陷るであらうといふ警告に耳を傾けない人は無論氣樂であり、また無意識、性慾、自我の受動性を高調することによつて精神分析學が受けなくてはならないところの一切の非難を免れる。彼はアルフレッド・アドラーと共に「神經質」は精神病の結果ではなくて原因であると主張することは出來る。けれども症候形成の一つの項目、一つの夢をも說明することは出來ないであらう。

神經質と症候形成に於いて自我の演ずる役割は、その際に精神分析學によつて發見された他の諸要素が無視されなくても、公平に取扱はれ得るものではなからうか、と諸君は尋ねられるであらう。確かにそれは可能であるに相違ない。さうして何時かは爲されるであらう。けれども精神分析の仕事をこのことから始めるのは適當でない。無論この問題が精神分析學によつて何時取扱はれるかを豫言することは出來る。吾々の所謂「ナーシズム的」精神病に於いては、自我は吾々が今まで硏究した精神病に於いてよりも遙かに大きい役割を演じてゐる。吾々はこの精神病の分析的硏究によつて、自我の役割を公平に適確に判斷することが出來るであらう。

自我がその精神病に對して有する關係の一つは、しかしながら、極めて明瞭であつて、最初から認めることが出來る。それが存在しないことは決してないやうである。けれどもそれは外傷的精神病——これに就いての吾々の理解はまだ極めて不完全である——に於いて最も明白に認められる。諸君はあらゆる形式の精神病の原因と機構には常に同じ諸因子が繰返し作用してゐて、たゞある型式にはある因子が他の型式には他の因子が症候形成に對してより重要な意義を有することだけが異るのであることを知つて居られる筈である。それは役者の一座に於けるやうなものである。彼等は各自極つた役割——英雄、腹心、陰謀家、その他——を持つてゐるが、しかし自分の演劇日には異つた役を選ぶであらう。かうして症候に變じた空想はヒステリーに於いて最も顯著であり、自我の反對要求或は反動形成は强迫觀念的精神病の症候を支配する。吾々が夢に於ける「第二次的加工」と呼んだものは偏執病の妄想の主要特徵である、等。

外傷的精神病、特に戰爭の恐怖から生じたものに於ては、防禦と自利に努める利己的動機が特に顯著である。これは恐らく單獨でこの病氣を生ぜしめることは出來ないであらうが、その病氣に支持を與へ、一度形成された時に

はそれを維持する。この動機はその威嚇が病氣を生ぜしめたところの危險から自我を防衞することを目的とし、その危險の再現が最早不可能であるやうに思はれるまでは、或はその危險に對する何等かの償ひを手に入れた後でなければ、健康の囘復を許さない。

自我は他のあらゆる形の精神病の發生と維持にも同じやうに興味を持つ。症候は、抑壓する自我傾向に滿足を與へる一面を有するが故に、自我からその支持を受けることに就いては吾々は既に述べた。その上、症候形成によつての鬪爭の解決は、最も便利なものが現實原則に最もよく合致する。何故ならばそれは疑ひもなく自我に困難な苦痛な內的作業をさせないからである。否、醫者自身でさへも精神病によつての鬪爭の解決が最も無害で、社會的に最も恕さるべき解決であることを認めざるを得ないやうな場合がある。醫者自身でさへも彼が攻擊してゐる病氣の方に味方することがあると聞いても、諸君は驚かされるに及ばない。實際、彼は如何なる生活狀態に對しても、健康信者の役割ばかりを演じなくてはならないといふ事はない。彼は世界には精神病的悲慘の外にも現實的な不可避的苦惱があることを、必要は人間に健康の犧牲を要求することのあることを知つて居り、また、一個人のかゝる犧牲が屢々多くの他の人々の無量の不幸に代ることのあることを承知してゐる。從つて、精神病者は何時も鬪爭から「病氣の中に逃げ込む」のであると言ふことは出來ようが、多くの場合この逃避は十分正當なものであることを吾々は認めなくてはならない。この事態を認めた醫者は事情を察して默つて手を引くであらう。

けれども吾々はこの例外の場合は度外視して更に探究を續けて行かうと思ふ。普通の場合には精神病への逃避によつて自我が或る內的な「病氣の利益」を得ることは明かである。或る事情の下に於いては外的な、多かれ少かれ現實に於いて價値ある利益もそれに附隨してゐる。この種の最もありふれた例を擧げて見よう。夫から虐遇され、無慈悲に利用された婦人は、若し彼女の素質がそれを許す時には、彼女が他の男と密かに娯しむには餘りに臆病で或は因襲的である時には、一切の外的障碍を排してその夫と別れるほどに強くない時には、もつとよく暮らして行けるか或はもつとよい夫を見付ける見込がない時には、さうして最後に、若し彼女が性的にこの獸のやうな夫に愛着を感じてゐる時には、大抵極つて精神病にその逃路を見出す。彼女の病氣はその優力な夫との戰ひに於いて彼女

の武器に、彼女が自分を防衞するために使用し、復讐のために濫用することの出來る武器になる。彼女は恐らくその結婚を訴へることは出來なかつたであらうが、その病氣を訴へることは出來るであらう。醫者は彼女の味方である。他の時には無情な夫は彼女を勞はり、彼女のために金を使ひ、外出の時間を、從つて結婚生活の壓迫からの自由を許さなくてはならない。病氣によつてのこの外的或は附隨的利益がかなり顯著であつて、その代用物が現實に於いて見出され得ない時には、諸君は諸君の治療法によつて精神病を治癒し得る可能性を餘り高く評價しない方がよいであらう。

かう言へば諸君は病氣の利益に就いての私の言説は私が排したところの見解――自我自らが精神病を欲しそれを生ぜしめるといふ見解を全然裏書するものであると非難されるであらう。だが暫く、恐らくそれは、自我はどうしても阻止することの出來ない精神病を喜んで受入れ、そのうちに何か利用出來るものがあれば出來る限りそれを利用する、といふことを意味するに過ぎないのであらう。これは事體の、確かに愉快な一面に過ぎない。精神病が利益を有してゐる限りに於いては自我はそれと和解するが、しかし精神病の有してゐるものは利益ばかりではない。通例は、精神病を受入れることによつて自我が損をしたのであることは直ぐに明かになる。自我は闘爭の輕減を餘りに高價に購つてゐる。症候に附隨する苦惱は恐らく闘爭の苦しみと同じほど惡いものである。それ以上にさへも惡いであらう。自我は症候の苦痛は避けたいと思ふが、その病氣による利益は棄てたくないと思ふ。さうしてこれが正に自我の爲し得ないことである。かうして自我は自ら信じてゐるほどに能動的でないことが證明される。このことはよく記憶して置いていたゞきたい。

若し諸君が醫者として精神病者に接しられるならば、諸君は自分の病氣を最も劇しく訴へる者は最も容易に諸君の助力を受入れ、また最も抵抗しないであらうといふ期待を直ぐに放棄されるであらう。正にその反對である。恐らく諸君は病氣の利益に寄與する一切のものは抑壓抵抗の力を强め、治療の困難を增加することを容易に理解されるであらう。而して、いはゞ、症候と共に生じたこの種の病氣の利益の外に、もう一つの、後に生じた利益を吾々は認めなくてはならない。この病氣のやうな心的組織がかなり長い間持續すると、それは最後に一つの獨立した實

體のやうになる。それは自己保存的本能のやうなものを顯はす。それは心的生活に於ける他の部分と、根柢に於いてはそれに敵對するものとさへも、一種の暫定契約を結び、さうして再び有用な便利なものとして顯現する機會を殆ど必ず見出す。いはゞ第二次的機能を獲得する。而してこれはその心的組織に新しい力を與へる。病理學から實例を擧げる代りに、日常生活に於ける顯著な例を考へて見よう。自分の生活費を稼ぎ出してゐる腕のある勞働者が、彼の仕事中の事故のために不具者になつたとする。この不幸な男は最早勞働する事は出來ないが、少しばかりの見舞金を貰ひ、また彼の不具を乞食として利用することを覺える。彼の新生活は、前のとは非常に劣つてはゐるが、しかし彼の舊生活を破壞したそのものによつて支持されてゐる。若し彼の不具を直さうと思へば、一時彼から生活の手段を奪はなくてはならなくなる。彼は再び前の仕事を始めることが出來るかどうかといふ問題が起つて來る。精神病に於いてかゝる病氣の第二次的利用に相當するものを、吾々は第一次的のものと並べて、病氣の第二次的利益と呼ぶことが出來る。

けれども私は諸君が一般的に病氣の利益の實際的意義を過輕視されないと共に、理論的にそれを過重視されないやうに注意したい。前に認めた例外を除けば、この要素は常にオーバーレンデルが『フリーゲンド・ブレッテル』に於いて擧げた「動物の智慧」の一例を吾々に思ひ出させる。一人のアラビア人が一方は峻險な山になつてゐる狹路を駱駝に騎つて行く。ある曲り角で突然獅子が現はれて、彼に跳びかゝらうとする。逃路はない。一方は切り立てたやうな山であり、一方は崖である。退却して逃げることは出來ない。彼は駄目だと觀念する。けれども駱駝はさうでない。駱駝は騎者と共に崖の下へ跳び下りる――さうして獅子はそれを傍觀するばかりである。通例、精神病による救濟法は患者によい結果を與へない。症候形成によつての鬪爭の解決が生活の要求に適しないことを自ら證明し、人間はその至上至高の力を用ひることを斷念せしめるのは、恐らくそれが自動的過程であるためであらう。若し一つの選擇があるとすれば、人は運命と堂々と戰ふことを選ばなくてはならない。

けれども私は精神病の說明に當つて、私が一般神經質をその出發點としないもう一つの理由を證明する義務がある。恐らく諸君は、さうすれば精神病の性的起源の證據を擧げるのが困難であるから私はそれを避けたのであると

思はれるであらう。けれどもそれは誤解である。轉移精神病に於てはこの結論に達する爲には、先づ症候の意味が解釋されなくてはならないが、普通の型式の所謂「現實的精神病」に於ては、性的生活が病原的意義を有することは觀察によつて明かなありのまゝの事實である。私は二十年以上も前に、ある日何故に吾々は精神病者を調べる際に定つて彼等の性的生活に關する事柄を考慮に入れずに置くのであらうかと自問した時、この事を知つた。性的生活の調査のために私の評判は惡くなつたが、しかし私は間もなく、性的生活が常態的であるところに精神病――私は現實的精神病のことを言つてゐるのである――は無い、といふ結論に達することが出來た。この結論が個人的差異を餘りに無視してゐることは、また「常態的」といふ言葉の內容が漠然としてゐることは事實であるが、その大體の意味は今日に於いてもなほその價値を有してゐる。當時私は或る型式の神經質と特殊の性的障碍との間に特殊關係の存することを確證することも出來た。さうして今日に於いても、若し同じやうな材料がありさへすれば、この觀察を繰返し得ることを私は疑はない。或る種の不完全な性的滿足、例へば、自瀆で滿足してゐる人は或る極つた型式の現實的精神病に罹ること、さうしてこの精神病は、若し彼が或る他の同じやうな型式の性的生活をすれば、他の型式の現實的精神病に進んで席を讓ることを私は幾度となく認めた。かうして私は患者の狀態の變化から彼の性的生活の樣式の變化を推定し得るやうになつた。當時私はまた何處までも私の推定を固執して、患者を言ひ拔け出來ないやうにし、どうしてもそれを確認させた。その結果彼等が性的生活に就いて私のやうに根掘り葉掘り尋ねない醫者の方へ行く方がましだと考へたことは事實である。

當時私はまた精神病の原因は、常に性的生活にあるとは限らないことを見逃さなかつた。ある人は確かに或る性的障碍のために病氣になるであらうが、他の人は財產を失つたがために、或は酷い器質的疾患に見舞はれたがために病氣になるであらう。この種々の型式の說明は後に、自我とリビドーとの間にあると思はれてゐた相關關係が明かにされた時についた。さうしてその說明はこの關係が明かにされるに從つて益々完全なものになつて行つた。人は彼の自我が何等かの風にリビドーを處理する能力を失つた時にのみ精神病になる。自我が强ければ强いほど、この仕事の完成は彼には容易になる。どんな原因によつてにもせよ、自我が弱くなればそれだけリビドーの要求は强

くなり、從つて精神病を可能ならしめるに相違ない。自我とリビドーとの間にはもう一つのもつと密接な關係が存するが、それはまだ吾々の眼界には入つて來ないから、こゝでは說明しないことにする。吾々にとつて肝腎な、得るところの多い點は、孰れの場合にも、病氣がどういふ徑路を取つたかを問はず、精神病の症候はリビドーによつて支持され、さうしてそれの變態的利用を明かに示してゐるといふことである。

今や私は現實的神經病の症候と精神神經病——この第一群、轉移神經病を吾々は今まで主として取扱つて來た——の症候との決定的差異を諸君に指摘しなくてはならない。現實的神經病と精神神經病の孰れの場合に於いても症候はリビドーから生じる。卽ちリビドーの變態的使用であり、滿足の代用物である。けれども現實的神經病の症候——頭痛、苦痛の感、或る器官の昂奮狀態、或る機能の衰弱或は障碍——は何等の「意味」、心理的意義を有してゐない。これらの症候は、例へばヒステリー的症候と同じやうに、主として身體に顯はれるばかりではなく、またその本質に於いて純然たる肉體的過程である。それは旣に述べたところの複雜な心的機構を必要としない。從つてこれらの症候は實際には長い間精神神經病的症候と思ひ違ひされてゐたのである。しかしながらそれならば、それらの症候はどうして吾々が心內に働いてゐる力であることを知るやうになつたところのリビドーの顯現であり得るのであらうか。この答は極めて簡單である。私はこゝで精神分析學に對して爲された第一の抗議を想起したいと思ふ。この抗議によれば、精神分析學は神經病的現象を心理學によつて說明しようとする學說であり、而して心理學說は如何なる病氣をも說明し得ないが故に、精神分析學は全然見込がないといふのであつた。この批評家は性的機能が單なる心的事物でもなく、單なる肉體的事物でもないことを好んで忘却したのである。性的機能は肉體的生活にも心的生活にも同じく影響する。精神神經病の症候がこの機能の心的作用に於ける障碍の顯現であることを知つてゐる以上は、現實的神經病が性的障碍の直接な身體的影響の結果であることを見出しても、吾々は驚くに及ばないであらう。

現實的神經病の理解に對して臨床醫學は吾々に價値ある、また種々の研究者達によつて認められた、一つの暗示を與へてゐる。その症候の細目に於いても、またあらゆる身體組織と機能とに及ぼす影響の特異性に於いても、現

實的神經病は體外にある毒素の慢性的影響によつて、またそれの急劇な除去によつて生ずる病理學的狀態――卽ち、中毒と禁慾狀態とに實によく類似してゐる。この二類の疾患の關係は、バセドー氏病のやうに、矢張り毒物の作用によつてゞはあるが、しかし體外から入つて來た毒によつてゞはなく、體內の代謝作用から生ずるやうな毒によつて現はれることが知られてゐるやうな狀態と比較すれば、一層密接になる。この類似からして吾々は神經病を性的代謝機能の障碍――それが當人の處分し得るより以上に產出された性的毒素に因るにせよ、或はこの材料の正しい使用に干渉する內的及び心的でさへもある狀態に因るにせよ――の結果であると考へざるを得ないやうに私には思はれる。性的欲望に就いてのこの種の假定は昔から人々の心には抱かれてゐたと見えて、彼等は愛を「酩酊」と呼び、愛を惚藥によつて生じさせることが出來ると思ひ、愛の作用の幾分を外界にあるものと見た。吾々はこゝで色情發生帶と、性的昂奮は種々の器官に於いて生じ得るといふ主張とを想起したいと思ふ。けれどもこの外には「性的代謝作用」或は「性慾の化學」といふ言葉は何の內容も有してゐない。吾々はそれに就いては何事も知らず、吾々は「男性的」「女性的」と呼ばるべき二個の性慾素を有してゐるのか、或はリビドーのあらゆる刺戟作用の作因としての一個の性慾素を以て滿足すべきであるかどうかを決定することさへも出來ない。吾々が建築したところの精神分析學の家屋は實際は一つの上層建築であつて、何時かはその有機體的基礎の上に建てらるべきものである。けれどもこの基礎は吾々にはまだ知られてゐない。

科學としての精神分析學は、それが取扱ふ材料によつてゞはなく、それが用ひる方法によつて特色づけられてゐる。この方法はその本質を損ふことなしに精神病學の研究にと同じく、文化史、宗教學、神話學にも適用されることが出來る。精神分析學が目的とし且つ成就する所は、心的生活に於ける無意識の發見の外にはない。その症候は恐らく、直接的中毒から生ずるらしいところの現實的神經病の問題は精神分析學に着手點を與へない。分析學は殆どこれを說明することが出來ず、この仕事を生物學的或は醫學的研究に委ねなくてはならない。今や諸君は私が何故に材料をかういふ風に整頓することを選んだかを一層よく理解されるであらう。若し私が「精神病研究序論」を書くつもりであるならば、現實的神經病の單純な型式から始めて、リビドーの障碍によつて生ずるものと、複雜な心理

的疾患とに進むのが確かに正しいであらう。私は前者に就いて知つてゐること、或は知つてゐると信じてゐる事をあらゆる方面から集め、それから精神分析學を精神神經病のこれらの狀態を透見する最も重要な手段として紹介しなくてはならないであらう。けれども私が志し且つ發表したものは「精神分析學序論」であつた。私は神經病に就いて何事かを敎へるよりも、精神分析學の觀念を諸君に與へる方が重要であると考へた。從つて私は精神分析學研究の役に立たない現實的神經病を先頭に置く譯に行かなかつた。私はまたこれが諸君のために賢明な選擇であつたと信じてゐる。何故ならば精神分析學はその深奧な假定と廣汎な關聯との故に、あらゆる敎養ある人々の興味に値するに反して、精神病學は醫學の一章を成すに過ぎないからである。

しかしながら吾々は現實的神經病にも少しは注意を向くべきであらうと諸君が期待されることは正當である。それの精神神經病との密接な關聯はさうすることを要求しさへもする。されば私は、現實的神經病を三個の純粹型式に分類することを諸君に語りたいと思ふ。三型式とは**神經衰弱**、**苦悶神經病**、**憂鬱症**である。この分類でさへも異論がなくはない。これらの名稱はすべて使用されてはゐるが、その內容は漠然として居り、まだ決定されてゐない。ある醫者達になると、混亂せる神經病的現象の世界に於けるあらゆる區別、疾患の臨床的個體或は型式のあらゆる分類に反對し、現實的神經病と精神神經病の區別さへも認めない。彼等は餘りに行き過ぎであり、彼等の選んだ道は進步を齎さないと私は思ふ。前に擧げた三種の神經病は時としては純粹な形で現はれる。これらのものが一層屢々相互とまた精神神經病的疾患と結合してゐることは確かに事實であるが、そのためにそれらの區別を無くしてしまふ必要はない。鑛物學に於ける鑛石學と岩石學の差異を考へて見るがよい。鑛石は個別的に分類されてゐるが、これは一部分は確かにそれらが屢々結晶としてその周圍のものから嚴に區別されて存在するからである。岩石は鑛石の合成物であるが、その鑛石は偶然的にではなくて、それを形成せしめる條件に從つて合一されたのである。精神病學に於いては吾々は岩石學に似たやうなものを創始するには、その發達過程に就いて餘りに僅かのことしか理解してゐない。けれども第一に個々の鑛石に比較さるべき吾々に認められた臨床的個體をその集塊から離すことは確に間違つた方法ではない。

現實的神經病と精神神經病の症候との間の注目に値する關聯は後者に於ける症候形成に就いて吾々にもう一つの重要な知識を與へる。卽ち現實的神經病の症候は屢々精神神經病的症候の核心と初期的階段である。かゝる關係は神經衰弱と轉化ヒステリーと呼ばれる轉移神經病との間に、苦悶神經病と苦悶ヒステリーの間に、また憂鬱症と後に述べる筈の型式の神經病、パラフレニイ（早發性痴呆と偏執病）との間に最も明白に觀察され得る。その例としてヒステリー性頭痛或は背痛を取つて見よう。分析の示すところによれば、それは壓縮と置換によつてリビドー的空想或は記憶の一全系列の滿足の代用物となつてゐるのである。けれども時としてはこの苦痛は現實的のものであり、性的毒素の直接的症候、リビドー的昂奮の身體的顯現であることもある。ヒステリー的症候はすべてこの種の核心を有してゐるとは吾々は決して主張しようと思はないが、しかし極めて屢々さうであることゝリビドー的昂奮が身體に與へるすべての——常態的であると病理學的であるとを問はず——影響はヒステリーの症候形成に特に適したものであることは矢張り事實である。それは牡蠣が眞珠母體のうちに望んだ砂粒の役割を演じる。性的行爲を伴ふところの性的昂奮の一時的徵候もこれと同じやうに、精神神經病によつて症候形成の最も便利な最も適當な材料として利用される。

特に診斷的及び治療的興味を惹くこれに類似した過程がある。神經病的素質は持つてゐるが、まだ神經病者にはなり切つてゐない人に於いては、ある病的な身體的變化——激昂や負傷によつてのやうな——が症候形成の機緣となり、後者の過程が現實によつて與へられた症候を、たゞ表出の機會のみを待ち構へてゐた無意識空想の表現のために、直ちに利用することは決して稀ではない。醫者はかゝる場合には、ある時にはある治療法を、他の時には他の治療法を用ひて、或はその器質的基礎を除去しようと努めて、それの騷がしい神經病的附加物を等閑視したり、或はこの機會を生ぜしめた神經病を攻擊して、それの器質的刺戟に注意を拂はなかつたりするであらう。さうして時にはある方法が、時には他の方法が成功するであらう。この種の混合的病例に對しては、一般的規則を設けることは出來ない。

第二十五講　苦悶

私が前講に於いて一般神經質に就いて述べたことは、私の講義の中で最も斷片的な、最も不完全なものであつたと諸君は必ずや考へて居られるであらう。私はさうであつたことを知つてゐる。さうして苦悶に就いて私が一言も述べなかつたことは最も諸君を驚かしたことゝ思ふ。苦悶は大抵の神經病者が訴へるものであり、彼等自身が最も恐ろしい重荷であると言ふものであり、また實際最も激烈になり得る、從つて最も氣狂ひじみた用心を爲さしめ得るものである。この事柄に就いてだけは、少くとも私は省略したくなかつた。その反對に、神經病者の苦悶の問題は、これを出來るだけ明瞭に諸君に示して、詳細に論究することを期してゐたのであつた。

苦悶そのものを說明する必要はない。この感じは、或はもつと正しく言へば、この感動的狀態は誰でも何時かに體驗してゐる。けれども神經病者は他の人々よりも、多くのまた激烈な苦悶に惱むのであるといふ問題は、決して十分に考察されてゐないと私は思ふ。恐らく人はそれを當然のことゝ考へてゐるのであらう。通例、人は「神經質的」と「苦悶的」の兩語を、恰も同意語であるかのやうに、互用するが、これは正當でない。他の點では少しも「神經質的」ではなくて苦悶的な人もあれば、多くの症候には惱むが、苦悶の傾向のない神經病者もある。

それは兎に角として、苦悶の問題が種々の重要な疑問の結び合はされてゐる交叉點であり、その解決は吾々の心的生活に大光明を投じるに違ひないやうな謎であることだけは確實である。私はこれを完全に解決し得るとは主張しないが、諸君はこの問題をも精神分析學は學校の醫學とは異つた風に取扱ふであらうと豫期して居られるであらう。後者に於いては興味は苦悶狀態を生ぜしめる解剖學的過程に集中されてゐる。延髓が刺戟されるのであると言はれ、患者は迷走神經の神經病に罹つてゐるのであると敎へられる。延髓は極めて不思議なまた美しい對象である。私も前にはこの研究に時間と勞力を費したことをよく覺えてゐる。けれども今日に於いては、私は苦悶の心理學的理解の爲には、その刺戟が通過する神經路の知識より以上に重要でないものは知らないと言はざるを得ない。

苦悶に就いては人は最初長い間神經質のことを考へないでも考察することが出來る。このことはこの苦悶を現實

的苦悶として神經病的苦悶に對立させれば直ちに理解されるであらう。さて現實的苦悶は吾々には極めて自然な合理的なものであるやうに思はれる。それは逃走反應と結びつけられて居り、自己保存本能の顯現であると見ることが出來よう。吾々はこれを外界の危險の卽ち豫期され豫知された傷害の知覺に對する反應と呼ぶことが出來る。どういふ機會に、卽ちどんな對象に對して、またどういふ事態に於いて苦悶が現はれるかは、言ふまでもなく大抵は外界に就いての吾々の知識狀態と力の感によつて定まるものである。野蠻人は大砲を或は日蝕を恐怖するに反して、その武器を取扱ひその現象を豫知することの出來る白人はこの同じ狀態の下にあつて少しも恐れずにゐるが、これは全く當然である。けれどもまた時としては苦悶を呼び起すものは知識である。蓋しそれは危險を一層速かに認めさせるからである。かうして野蠻人は、無知の白人には何事をも傳へないが、野獸の近くにゐることを彼に示してゐるところの森の中の足跡に恐怖し、老船夫は、旅客には何でもないもののやうに思はれるが、彼には暴風の襲來を敎へてゐるところの、地平線上の小黑雲を恐怖の眼を以て眺めるであらう。

現實的苦悶は合理的な合目的なものであるといふ見解は、しかしながら、更に深く考察すれば、根本的改訂を必要とすると吾々は言はざるを得ない。焦眉の危險に面接した時の唯一の機宜に適した態度は、先づ第一にその危險の大きさと自己の力量とを冷靜に比較評價し、次に逃走と防禦と出來るならば攻擊との孰れが一層よい結果を齎すであらうかを決定することであらう。ところが、苦悶はこゝでは何の役にも立たない。すべてのことは苦悶が現はれなくても同じほどに或は一層よく處理されるであらう。否、苦悶は、過度に烈しくなれば、この上もなく邪魔である。それはあらゆる行爲を、逃走の行爲をさへも麻痺させる。通例危險に對する反應は恐怖感と防禦行爲の混合から成立つてゐる。驚かされた動物は恐怖し且つ逃走するが、このうちで機宜に適したものは「逃走」であつて、「恐怖してゐること」ではない。

從つて苦悶の生起は決して目的に適したものではないと吾々は主張したくなるが、しかし苦悶狀態を更に詳しく分解すれば、必ずしもさうでないことが分る。第一に苦悶は危險に對する準備であつて、これは感覺的知覺が銳敏になることゝ運動的緊張に現はれる。この豫期的準備は明かに利益がある。否、それの缺如は重大な結果を惹起す

ることがあるかも知れない。次いでこれから一方では運動的行爲が、第一には逃走、よい高い階段に於いては防禦行爲が、他方では吾々の所謂苦悶狀態が生じる。苦悶の生起が少く短くあればあるほど、苦悶的準備狀態から行爲への轉移は障碍されることが少く、事件の全體は一層滑らかに進んで行く。從つて私には苦悶的準備は有利な要素であり、吾々が苦悶と呼ぶところのものへの苦悶的發達は不利な要素であるやうに思はれる。

苦悶、恐怖、驚駭といふ語は、日常の用法に於いては同じ物を意味するか或は異つたものを意味するか、といふ問題には私は立入ることを避けようと思ふ。たゞ私には苦悶は狀態に關聯して對象を度外視し、恐怖は對象に關聯してゐるやうに思はれる。これに對して驚駭は實際に特別の意味を有してゐるやうに思はれる。卽ちそれは危險が苦悶的準備に迎へられることなしに不意に現はれた時に生じる狀態である。されば苦悶は驚駭に對する防禦であると言つてもよからう。

「苦悶」といふ語の用法が曖昧であり、不定であることを諸君は見逃されないであらう。一般には苦悶といふ語は「苦悶の生起」の知覺によつて生じるところの主觀的狀態の意味に理解されてゐる。而してかゝる狀態は感動狀態と呼ばれる。さて、動的な意味に於いて、感動狀態とは何であるか。確かにそれは極めて複雜なものである。感動狀態は第一に或る運動的神經作用或は放出を、第二に或る感覺を、しかも二種、卽ち生起した運動的行爲の知覺と直接的な快不快の感――これが感動狀態に所謂主調を與へるのである――とを包含してゐる。無論私はこの列擧によつて感動狀態の本質を盡くしたものとは考へてゐない。二三の感動狀態に於いては、更に深く觀察すれば、その全構造を結びつけるところのそれの核心は或る極めて重要な經驗の再現であることが認められるやうに思はれる。この經驗は極めて一般的性質を持つた極めて古い時代の、個人のではなくて種族の以前の歷史に見出されるやうな、印象であつてもよい。更に理解し易く言へば、感動狀態はヒステリー的發作と同じ構造を有してゐる、卽ち記憶の沈澱物である。從つてヒステリー的發作は新しく構造された個人的感動狀態に、常態的感情狀態は一般的な、遺產となつたヒステリーの顯現に比較され得る。

私がこゝで感動狀態に就いて述べてゐることは常態心理學の定說であると考へないでいたゞきたい。その反對に、

これは精神分析學の土壤から生じた、そこにのみ適はしい見解である。心理學が感動狀態に就いて語るところのものは——例へば、ジエ・ムスーランゲ說——は吾々精神分析學者には全然理解し難い、また議論する事の出來ないものである。けれども吾々は感動狀態に就いての吾々の知識も究極的なものであるとは少しも思はない。それはこの朦朧たる領域を探る最初の試みに過ぎない。さて、前の考察を續けて行かう。苦悶的感動狀態に於いて再現されるところの以前の印象は何であるかを吾々は知つてゐると思ふ。それは出生の經驗であると吾々は言ひたい。この經驗は不快感、放出衝動、身體的感覺のやうな一群を包含して、生命に危險を及ぼす作用の雛形となり、さうしてその時以來苦悶狀態として吾々のうちに再現されるのである。血液の更新（內的呼吸）の中斷による刺戟の驚くべき增進がその時の苦悶的經驗の原因であつた——從つて最初の苦悶は中毒的苦悶であつた。苦悶（Angst—angustiae, Enge. ——狹い場所、狹路）といふ語は特に呼吸の細くなる性質を表出してゐるのであつて、これは出生の時には現實的狀態の結果として存在したし、今日に於いては感動狀態に於いて殆ど定まつて再現される。またあの最初の苦悶狀態が、母體からの分離の際に生じたといふこともまた極めて意味が深い。この最初の苦悶狀態を再現しようとの傾向は無數の時代を通じて深く有機體內に植ゑつけられ、そのために何人も、傳說のマクダッフのやうに「母の胎から切り取られ」、從つて自らは出生の經驗をしなかつた人でさへも、苦悶的感動狀態を免れることが出來ないのであるといふ吾々の確信は少しも不自然ではない。哺乳動物以外の動物に於いては、この苦悶狀態の原型はどうなつてゐるかに就いては吾々は何も知らない。また彼等に於いてはどういふ感覺複合體が吾々の苦悶に相當するかに就いても吾々は知るところがない。

　出生の經驗が苦悶の源泉であり原型であるといふやうな觀念に吾々はどうして到達し得たかを諸君は恐らく聞きたく思つて居られるであらう。思辨はこれに何の關するところもない。寧ろ私は普通人の素朴な思想から助けを借りた。ずつと以前に私達若い醫者達が料理屋で食卓を圍んでゐた時に、一人の產科臨床講義の助手が近頃行はれた產婆試驗に就いての面白い話をした。一人の被試驗者は、出產の際に羊水の中に胎糞があればどうしたのか、と質問された時、即座に、「胎兒が苦悶した結果です」と答へた。彼女は笑はれて落第した。けれども私は默つて彼女に

味方し、この可哀さうな婦人の誤らざる知覺は一の極めて重要な關聯を見出したのではなからうかと考へ始めた。

今度は神經病的苦悶の方に轉じよう。神經病者の苦悶にはどんな新しい現象と關係とが見出されるであらうか。こゝでは言ふべきことが澤山ある。先づ第一に一般的不安、所謂自由に浮動せる苦悶がある。これは少しでも適當などんな觀念内容にも附着し、判斷に影響を與へ、豫期を選擇し、自分の正しいことを證明するあらゆる機會を待ち構へてゐるものであつて、吾々はこの狀態を「豫期的苦悶」或は「苦悶的豫期」と名づける。この種の苦悶に惱まされてゐる人々は常にあり得べき最惡の結果を豫期し、あらゆる偶然事を凶兆であると解釋し、あらゆる不確實なことを最惡の意味に利用する。この種の不幸を豫期する傾向は、他の點では決して病人とは言へない多くの人々にも見出される特性であつて、吾々は彼等を「心配性」或は「悲觀性」と言つて笑ふ。けれども酷い豫期的苦悶は何時でも吾々が**苦悶神經病**と呼んで、現實的神經病のうちに入れたところの神經病的疾患に隨伴してゐる。

苦悶の第二の型式は今述べた型式に對立するもので、より多く心理的であり、或る定つた對象と狀況に結びついてゐる。これは非常に多樣な、さうして屢々奇妙な「恐怖症」の苦悶である。有名なアメリカの心理學者、スタンレイ・ホールは最近始めてこれらの恐怖症の全系列に素晴らしいギリシヤ語の名稱を與へた。それはまるでエヂプトの十の疾病の列擧のやうで、異る點は十以上あるといふことだけである。恐怖症の對象或は内容となり得る事物を一寸擧げて見よう。暗黑、戸外、廣い場所、猫、蜘蛛、毛蟲、蛇、二十日鼠、雷、尖端、血、閉ざゝれた場所、群集、獨居、橋を渡ること、陸或は船で旅すること、その他。この混沌のうちにあつて方向を定めるために先づ第一着手として吾々はこれを三群に分たうと思ふ。恐怖される對象と狀況の多くは吾々常態人にとつても何だか氣味の惡いものであり、危險と關聯を有してゐる。從つてこれらの恐怖症は、その強度は餘りに過度のやうには思はれるが、吾々にとつて全然理解し難いものではない。例へば、大抵の人は蛇に出會へば嫌惡を感じる。蛇恐怖症は人類に普遍的なものであると言ふことが出來よう。チヤレース・ダーウインは蛇が彼に向つて來る時には、彼は厚いガラス板で保護されてゐることを知つてゐるにも拘らず、恐怖の感を抑へることが出來なかつたことを極めて印象的に書いてゐる。第二群は矢張り危險には關聯してゐるが、その危險は常に輕視されて念頭に置かれないやうな狀況か

ら成つてゐるもので、この群には大部分の場所恐怖症が屬してゐる。吾々は家の中にゐるよりも汽車に乘つてゐる方が災厄——即ち衝突に遭ふ機會の多いことを知つてゐる。吾々はまた船が沈沒すれば人は大抵溺死することを知つてゐる。けれども吾々はこの危險のことは考へないで、平氣で汽車や汽船によつて旅行する。また渡つてゐる最中に橋が折れゝば吾々が河の中に墜落することは否定されないが、そんなことは危險と考へなくてもよいほどに稀にしか起らない。獨居もまた危險を有してゐて、吾々は或る場合にはこれを避ける。けれどもどんな條件に於いても一瞬間もそれに堪へ得ないといふやうなことは決してない。このことは群集、閉ざゝれた場所、雷、その他に就いても言へる。精神病者のこの恐怖症に於いて、吾々に不思議に思はれるものはその內容ではなくて、その強度である。恐怖症に伴ふ苦悶は全く筆紙を絕してゐる。神經病者は、或る條件の下に於いては吾々にも苦悶を起させることの出來る、さうして彼等が同じ名で呼んでゐるところの事物と狀況を、實際には少しも恐怖してゐるのではないと考へざるを得ないやうな場合も稀ではない。

この外に恐怖症の第三の群があるが、これは吾々には全然理解し難いものである。頑丈な大の男が彼の住んでゐる町の街路或は廣場を通ることを恐れたり、十分發達した婦人が着物の裾に猫が觸れたとか二十日鼠が部屋を走つたとかのために氣絕するほど恐怖したりするとすれば、吾々は彼等には明かに存在するところの危險を一體何に關聯せしむべきであらうか。この種の動物恐怖症は一般的な人間の反感の增加によつては說明され得ない。何故ならば猫を見れば呼んだり撫でたりしなくては居れない人が多數にゐるといふことが、その反對を證明してゐるからである。婦人からあんなに恐れられる二十日鼠は同時に最も親愛な呼名の一つである。多くの少女達は愛人から二十日鼠と呼ばれることを喜んでゐながら、この名前の可愛い小動物を見ると恐怖の叫聲をあげる。街路や廣場を恐れる男に至つては、彼等はまるで小さな子供のやうに振舞ふと言ひ得るばかりである。子供はかゝる場所は危險なものとして避けるやうに直接に敎へられる。さうしてかういふ場所恐怖病者もまた、誰かにこの場所に連れて行つて貰へば、その苦悶を和げられるのである。

今述べた苦悶の二型式、自由に浮動する豫期的苦悶と恐怖症に結びつけられてゐるものとは相互に無關係である。

一方が他方のより高い階段ではない。兩者は稀にしか結合せず、結合しても偶然的にである。最も烈しい一般的憂慮が必ず恐怖症になるとは限らない。その生涯を通じて臨場苦悶に惱まされる人が、悲觀的な豫期的恐怖を全然知らない事もある。多くの恐怖症、例へば、場所苦悶、鐵道苦悶は明かに後年に至つて始めて現はれる他の苦悶、例へば、暗黑、雷、動物に對する苦悶は最初から存在してゐるやうに思はれる。前者は重症的意義を有し、後者は寧ろ特異性、性情であるやうに思はれる。この後者の一つを顯はす人は、それに類似した他の苦悶をも有してゐると考へて通例間違つてはゐない。吾々はこれらの恐怖症をすべて苦悶ヒステリーのうちに入れることを、換言すれば吾々はこれらのものを誰も知つてゐる轉化ヒステリーと密接に結びつけられてゐると考へることを、私は附言して置かなくてはならない。

神經病的苦悶の第三形式は吾々を謎の前に連れて行く。苦悶と恐怖されてゐる危險との間の關聯は全然吾々の眼から隱されてゐる。この苦悶は、例へば、ヒステリーに於いてはヒステリー的症候の隨伴物として、或は、感動狀態の生じることは豫期されるが苦悶的感動狀態は少しも豫期されないやうな種々の興奮狀態の下に於いて、或は何等の狀態にも關係なく、吾々にも患者にも理解されないで、獨立した苦悶發作として現はれる。而して誇張すればこれを說明し得るやうな一つの危險、一つの原因さへも何處にも見出されない。さればこの自發的發作によつて吾々が苦悶狀態と呼ぶところの複合體はその構成分子に分割され得ることを吾々は知るのである。その發作の全體は一個の著しく發達した症候——戰慄、失神、動悸、呼吸困難——によつて代表されることが出來、さうして吾々が苦悶と認めるところの一般的感情はその際缺如すること、或は認められないやうになることが出來る。しかも吾々が「苦悶等價物」と名づけるこの狀態は苦悶そのものと同じ臨床的及び病原的價値を有してゐるのである。

さて、こゝで二個の疑問が生じる。危險が何等の或は殆ど何等の役割を演じないこの神經病的苦悶を、全然危險に對する反應であるところの現實的苦悶に關聯させることは可能であるか。また、神經病的苦悶は如何に理解さるべきか。吾々は先づ最初に、苦悶の存するところには人が恐怖する何物かゞ存在するに相違ない、といふ期待を固執したいと思ふ。

臨床的觀察はこの神經病的苦悶の理解に種々の手掛りを與へる。さればその意義を私は諸君に語らうと思ふ。

(イ)豫期的苦悶或は一般的憂慮が性的生活に於ける或る過程――即ちリビドーの或る利用と密接な關係を有してゐることを確めることは困難でない。この種の最も單純な、而して最も敎へるところの多い例は所謂滿たされざる興奮を經驗する人々に、換言すれば、その强力な性的興奮が十分に放散されず、滿足な完了に達し得ないやうな人々、例へば、婚約中の男や、十分な精力を持つてゐない、或はある目的のために性交を餘りに急いで或は不完全に行ふ夫を持つた婦人に起る。かういふ場合にはリビドー的興奮は消失して、その代りに苦悶が、豫期的苦悶の形式でゞもまた發作と苦悶等價物の形式でゞも、現はれる。この用心深い性交の中斷は、それが性的規則として行ひ得られる時には、極つて男に於いては、婦人に於いては尙更、苦悶神經病の原因となるものであるから、醫者はかゝる場合には先づ第一にこの病原を探すがよい。無數の實例は性的誤用が止めば苦悶神經病も消失することを示してゐる。

性的抑制と苦悶狀態の間には一の關聯が存するといふ事實は、私の知つてゐる限りでは、精神分析學に親しくない醫者でさへも最早否認しない。しかしながら、この關聯を逆にして、かゝる人々は心配性の素質を有してゐるが故に、性的事柄にも用心するのであるとの見解を、それに代へようとする試みが爲されずにゐないであらうことは想像するに難くない。けれどもこの見解に對しては婦人の行動が決定的な反證を提供する。婦人の性的作用は本來受動的なものである、即ち男の方からの取扱によつてその作用は規定されるが、性交の嗜好とそれを滿足させる能力が多ければ多いほど、その婦人は夫の陰莖或は性交の中斷に對していよいよ確實に苦悶の顯現によつて反應するであらう。これに反してかゝる虐遇は、不感性の或は性的飢饉がそれほど烈しくない婦人に於いては遙かに小さな役割しか演じない。

今日醫者が熱心に勸めてゐるところの性的節制が苦悶狀態の發生に對してこれと同じ意義を有するのは、言ふまでもなくその滿足な放散を拒否されたリビドーが同じ强さを持續し、昇華作用によつてその大部分が消費されない時に於いてのみである。病氣になるかならないかを決定するものは常にその量的因子である。病氣から離れて性格

は苦悶は性的制限と密接に關聯してゐるといふことは動かすべからざる事實である。

私はまだリビドーと苦悶との間のこの發生的關係を裏書するすべての觀察を諸君に語つた譯ではない。例へば、苦悶狀態に對する或る年齡期——思春期や月經閉止期のやうな、リビドーの產出が增加する時期の影響がそれである。多くの興奮狀態に於いても吾々はリビドーと苦悶が混合すること、最後にリビドーが苦悶によつて取つて代られることを明かに觀察することが出來る。これらすべての事實からは二重の印象が得られる。卽ち第一、それは常態的消費を拒まれたリビドーの累積の事柄であり、第二、それは全然身體的過程の問題であるやうに思はれる。リビドーから苦悶がとうして生じるかは現在では不明である。吾々はたゞリビドーが消失してその代りに苦悶が見出されると確言し得るに過ぎない。

（ロ）第二の手掛りは精神神經病、特にヒステリーの分析から得られる。この病氣に於いては苦悶は屢々症候に隨伴するが、また孤立的苦悶も發作として或は慢性的狀態として現はれることに就いては旣に述べて置いた。患者は自分が何を恐怖してゐるかを言ふことが出來ず、明かに第二次的推理によつて、それを最も都合のよい恐怖、死の、狂氣になることの、打たれることの恐怖と結びつける。この苦悶、或は苦悶を伴ふ症候を生ぜしめたところの狀態を分析して見ると、吾々は通例どんな常態的心的過程が阻止され、苦悶の顯現によつて取つて代られたかを發見することが出來る。言葉を換へて言へば、吾々は無意識的過程を、それが抑壓を受けないで、意識內に眞直に入つて來たかのやうに解釋する。この過程は或る感動狀態を伴つてゐたのであらうが、今や吾々は、驚いたことには、この常態的過程に隨伴する感動狀態は抑壓後には孰れの場合に於いても、それがどんな性質のものであるを問はず、苦悶によつて取つて代られてゐることを知るのである。さればヒステリー的苦悶狀態の無意識的相當物は苦悶と同性質の興奮、卽ち苦悶、羞恥、困惑のやうなものであることもあらうし、積極的なリビドー的興奮、或は憤怒のやうな敵對的、攻擊的な興奮であることもあらう。かうして苦悶は一切の感情狀態が、それに屬する觀念內容が抑壓

されてゐる時には、それと交換される或はされ得るところの通貨である。

（八）第三のものは殆ど苦悶を經驗しないやうに見えるところの、强迫觀念的行爲を行ふ患者に於いて、觀察される。若し吾々が彼等の强迫觀念的行爲、彼等の洗淨や形式的行爲其他の實行を妨げるならば、或は彼等自身がそれを止めようとするならば、彼等は恐ろしい苦悶に捉へられてその行爲をせざるを得なくなる。吾々は苦悶は强迫觀念的行爲によつて隱蔽されてゐたのであること、その行爲は苦悶を免れるために爲されたのである事を理解する。從つて强迫觀念的神經病に於いては苦悶は症候形成によつて置き換へられたのであつて、さもなければ現はれたに相違ない。さうしてヒステリーは眼を轉ずるとき、吾々はこれと同じ關係の存する事を見出すのである。卽ち、抑壓作用の結果として、純粹な苦悶か、症候形成を伴ふ苦悶か、或は苦悶を伴はない完全な症候形成かゞ現はれる。從つて、抽象的意味に於いては症候は一般にたゞ、さもなければ避け難い症候の出現を免れるためにのみ形成されるのである、と言つても間違つてゐないやうに思はれる。かうして苦悶は神經病の問題に對する吾々の興味の、いはゞ中心點となるのである。

苦悶神經病の觀察によつて吾々は、苦悶を生ぜしめるところのリビドーの變態的使用は、身體的過程の基底から結果する、と結論した。而してヒステリーと强迫觀念的神經病の分析によつて、これと同じ結果を伴ふ同じ變態的使用は、心理的裁判所の拒絕によつても行はれ得るといふ追加的結論を得た。されば神經病的苦悶の起原に就いては吾々はこれだけのことを知つてゐるのである。だがこれだけでは甚だ漠然としてゐる。けれども今のところでは私はこれ以上どう進むべきかを知らない。變態的に使用されたリビドーであるところの神經病的苦悶と、危險に對する反應に對應するところの現實的苦悶とを關係づけようとする吾々の第二の仕事は更に困難であるやうに思はれる。この兩者の間に關聯はないと人は考へるかも知れないが、吾々は現實的苦悶と神經病的苦悶とをその感じに於いて區別すべき手段を少しも有してゐないのである。

この求められた關聯は、若し吾々が屢々主張されたところの自我とリビドーの對立を假定するならば、見出されるであらう。吾々が知つてゐるやうに、苦悶の現れは危險に對する自我の反應であり、逃走を開始しようとする信

神經病的苦悶の現れは、まだ容易に苦悶を壓迫しようとする症候形成に變化するのである。どもも類似はこれに止まらない。丁度外的危險から逃走しようとする緊張が抵抗と適當な防禦手段に變ずるやうに、悶のあるところには人が恐怖するところの或物があるに相違ないといふ、吾々の期待は滿たされるであらう。けれの內的危險を外的危險であるかのやうに取扱つてゐるのであると考へることは不當ではあるまい。さうすれば、苦號である。されば、神經病的苦悶に於いても自我はそのリビドーの要求から逃避しようと試みてゐるのであり、こ

吾々の理解の困難は今や他のところに存する。卽ち、自我のかのリビドーからの逃避を意味するところの苦悶はそれにも拘らずこのリビドーそのものから出て來てゐるらしいのである。このことは明瞭ではない。さうしてある人のリビドーは根柢に於いてはその人の一部分であつて何か外的なもののやうに彼と對立し得るものではないことを吾々は忘れてはならない。吾々にまだ明瞭になつてゐないのは苦悶發現の局所的力學である。どんな種類の心的勢力がその際消費されるか、どの心理的體系にそれは屬するかといふことである。私はこの問題にも答へることが出來ない。けれども吾々はもう二つの他の手掛りを辿つて、吾々の思索を助けるために、再び直接觀察と分析的調査を行ふことを怠つてはならない。吾々は子供に於ける苦悶の發生と、恐怖症に附着する神經病的苦悶の起源に眼を轉じようと思ふ。

子供の恐怖は極めてありふれた事柄であり、それが現實的苦悶であるか神經病的苦悶であるかを決定するのはかなり困難である。否、この區別の價値そのものが子供の態度によつて疑はしいものになる。蓋し、一方に於いては吾々は子供があらゆる未知の人、新しい狀況、對象を恐れることを不思議に思はず、その反應を極めて容易に彼等の弱さと無知によつて說明する。從つて吾々は子供には現實的苦悶への強い傾向があると考へ、若しこの恐怖が遺傳によつて齎されたものであれば非常に都合がよいと思ふ。無知と無力のためにあらゆる新奇なものや、今日吾々には最早恐怖を起させないやうな見慣れた物の多數を恐れる原始人や、今日の野蠻人の行動を子供は繰返してゐるに過ぎないと考へる。また若し子供の恐怖症が少くとも一部分は人類發達の原始期にあると思はれるやうなもので

あるならば、それは全然吾々の期待に合致するであらう。

他方、吾々はすべての子供が同じ程度に恐怖的ではないこと、あらゆる種類の對象や狀況に對して異常に臆病な子供が後に神經病者になることを看過することが出來ない。神經病的素質は從つて現實的苦悶への顯著な傾向に露はれ、神經質よりも恐怖が第一次的であるやうに思はれる。かうして、子供が、後には大人がリビドーの强いことを恐れるのは彼等があらゆる物を恐れるからに外ならない、といふ結論に吾々は達する。苦悶はリビドーから生ずるといふ考はこれによつて卻けられるであらう。さうして若し現實的苦悶の諸條件を調べるならば、吾々は當然次の見解に達するであらう。卽ち、自己の無知と無力の意識——アドラーの言葉を借りて言へば、劣等であるとの意識が、若しそれが少年時代から成年時代まで持續し得るならば、神經病の究極的原因である。

これは吾々の注意を要求し得るほどに單純でもあり、尤もらしくも聞える。確かにこれは神經質に就いての吾々の見解の變化を意味するであらう。かゝる劣等感が、苦悶的素質や症候の形成と共に、後年まで持續するといふことは、吾々の所謂健康が例外的に生じた時に寧ろ說明が必要であるほどまでに、確實であるやうに見える。けれども子供の恐怖に就いての周到な觀察は吾々に何を敎へるであらうか。子供は先づ第一に未知の人を恐れる。狀況は人々と關係あるためにのみ重要なものになるのである。さうして對象が恐れらるのは一般に更に遲い。けれども子供が未知の人々を恐れるのは、彼等が惡意を持つてゐると思ふからでもなく、彼の無力を彼等の力と比較して、彼等は彼の存在、安全、無苦痛に對して危險であると認めるからでもない。子供をかゝる不信的な、世界の壓倒的な攻擊衝動を恐れるものであると考へるのは、實に貧弱な理論的解釋である。その反對に、子供が未知の姿を恐れるのは、彼が親しい愛する人——主として母親——の姿に慣れてゐるからである。恐怖に變化されたものは彼の絕望と熱望である。從つて消費され得なくなつたリビドーである。それが支へられなくなつて、苦悶として放出されたのである。またこの子供の苦悶の原型であるところの狀態が出生の際の最初の苦悶狀態、卽ち母との分離の反覆であることは少しも偶然ではない。

子供の最初の狀況恐怖は暗黑と孤獨に關するものである。前者は屢々一生涯續き、兩者共に愛する附添人、卽ち

母親の居なくなつたことを恐怖するのである。闇を恐れる子供が隣の部屋へ叫んでゐるのを私は嘗て聞いたことがある。「伯母ちやん、話してよ、怖いんだもの。」「話したつて私は見えませんよ。」さうすると子供が答へた。「誰かゞ話してゐると明るくなります。」闇の中に於ける熱望はかうして闇の恐怖に變化されるのである。神經病的苦悶は現實的苦悶の第二次的な、特殊な場合に過ぎないといふことを見出すよりも、吾々は寧ろ小さい子供に於いては現實的苦悶のやうにはたらき、神經病的苦悶と共通の根本的特徴――即ち使用されなかつたリビドーから生ずるといふ特徴を持つた或物を認めるのである。本當の現實的苦悶を子供は殆ど持つて來なかつたやうである。高い所、川の上の狹い橋の上、汽車やボートの中のやうな後年恐怖症の條件となり得る狀況を子供は少しも恐れない。無知であればあるほど子供は恐れることが少い。子供が生命保存の本能を多く遺傳されるのは望ましいことで、さうすれば子供がそれからそれへと危險なことをやるのを看視し妨げる世話が大いに助かるであらう。けれども實際に於いては子供は先づ第一に、自分の力を恃み過ぎて、少しも恐怖せずに行動する。何故ならば彼は危險を知らないからである。彼は水の端へ走つて行くであらう。窓枠へ攀ぢ上るであらう。先の尖つた物や火を弄ぶであらう。一言にして言へば、彼を傷け、附添人をはら〳〵させるやうなあらゆることをする。彼は苦い經驗によつて自ら學ぶことを許されないから、現實的苦悶が終に彼のうちに現はれるのは全然敎育の影響によつてゞある。

若し或る子供があつてこの恐怖の敎育よりも少しく以上に進んで、誰も警告しなかつた危險を自分で見出すとするならば、彼はリビドー的欲求をその體質のうちに普通以上に持つてゐるか、或は以前にリビドー的滿足に耽つてゐたからである。後に神經病になる人々もまたこの種の子供に屬してゐるとしても少しも驚くには足らない。神經病の發生に最も好都合な條件は閉ぢ込められたリビドーのかなりの量を長い間持ち堪へ得ないことであることを吾々は知つてゐる。こゝに於いてもまた體質的要素はその力を揮つてゐることを諸君は認められるであらう。吾々はこの要素の力を否定しようとしたことは決してない。吾々はたゞ誰かゞこの力を高調して他のあらゆる力を無視し、體質的要素を、觀察と分析との一致した結果によれば、それの屬してゐない、或は最小の役割しか演じないところにまで導入する時にのみ、それに反對するのである。

子供の苦悶に就いての觀察によつて得られた結果を概括すれば、幼兒の苦悶は現實的苦悶とは殆ど關するところがなく、その反對に、大人の神經病的苦悶と密接に結びついてゐる。それは後者と同じく使用されざるリビドーから生じるものであつて、その失はれた愛の對象に外的對象或は情況を代用する。

諸君は恐怖症の分析が別に新しいことを敎へなかつたと聞くことを喜ばれるであらう。恐怖症に於いても子供の苦悶に於けると同じことが起るのである。放出され得ないリビドーが絶えず內向して一見現實的苦悶らしいものとなり、さうして些細な外的危險がリビドーの要求の代表者となされるのである。この合致は少しも不思議ではない。何故ならば幼時の恐怖は後に苦悶ヒステリーに現はれるものゝ原型であるばかりではなく、またそれの直接の豫備條件であり序曲であるからである。あらゆるヒステリー性恐怖症は子供の恐怖にその起原を有してゐる。それの繼續である。それが他の內容を有して居り、從つて異つた名前で呼ばれなくてはならない時に於いてさへもさうである。兩狀態の差異はその機構に存してゐる。大人に於いてはリビドーが苦悶に內向されるためには、リビドーが一時的に使用され得なくなるだけでは最早十分ではない。大人は既に長い間かゝるリビドーを支へることを、或は他の方面に使用することを學んでゐる。けれどもリビドーが抑壓を受けた心的衝動に固着した時には、まだ意識と無意識とが少しも分れてない子供の時に於けると同じ狀態が再び造られ、さうして幼時の恐怖への退行によつて、いはゞ、リビドーの苦悶への轉向が容易に行はれ得るやうな道が開かれる。吾々は、諸君も記憶して居られるであらうやうに、抑壓作用をかなり考察して來た。けれどもその際には吾々はたゞ抑壓された觀念の運命だけに關心して來た。無論、これは認めることも表現することも容易であつたからである。この抑壓された觀念に附隨する感動狀態に起ることに就いては吾々は今まで全然看過して來たさうして今始めて內向して苦悶になることが感動狀態の、常態的過程に於いてはどんな性質を以て現はれるにしても、直接の運命であることを知つたのである。而してこの感動狀態の變形は抑壓過程の遙かに重要な結果である。けれどもこのことを語るのは容易でない。何故ならば吾々は無意識的感動狀態の存在を無意識的觀念の存在と同じやうな意味に於いては主張し得ないからでなる。觀念は、意識的であつても無意識的であつても、或る點までは變化しない。吾々は無意識的觀念に對應したものを擧げるこ

とが出來る。けれども感動は一つの放出過程であつて、觀念とは全然異つたものとして考へられなくてはならない。徹底的な探究と心的過程に就いての吾々の假說の明瞭な理解がなければ、吾々は無意識に於いて感動に對應するものが何であるかを語ることが出來ない。而してそれは吾々がこゝに於いて爲し得ないところのものである。けれども吾々は、苦悶の發現は無意識體系と密接な關聯を有してゐる、といふ今得たところの印象を十分記憶して置きたいと思ふ。

苦悶への內向、もつと適切に言へば、苦悶の形に於ける放出は抑壓を受けたリビドーの直接的運命である、と私は言つた。私は、これが唯一のものでも究極的のものでもないと附言しなくてはならない。神經病に於いては苦悶の發現を妨げようとする過程が行はれ、また種々の方法に於いてその過程はさうすることに成功する。例へば、恐怖症に於いては、吾々は神經病的過程の二形相を明かに區別することが出來る。第一のものは抑壓を行つてリビドーを苦悶に內向せしめる、そこで苦悶は外的危險に結びつけられる。第二のものはあらゆる用心と警戒によつてこの外物のやうに取扱はれた危險を避けようとする。抑壓は自我が危險と感じるところのリビドーから逃避しようとする一つの試みである。恐怖症は恐れられてゐるリビドーに今味方するところの外的危險に對する防禦に譬へられることが出來よう。恐怖症に於けるこの防禦體系の弱點は言ふまでもなく、外部に對しては實に堅固なこの城塞が內部からの攻擊には堪へ得ないといふことである。リビドーの危險を外部に放射することは決してよい方法ではない。從つて、他の神經病に於いては苦悶の發現の可能に對して他の防禦體系が使用される。これは精神病理學の極めて興味ある部分であるが、遺憾ながらこれを語れば餘りに本題から離れるであらうし、また根本的な專門知識が必要となるであらう。私はたゞもう一事だけを附言して置きたい。私は前に「反對攻擊」に就いて述べたが、それは自我が抑壓の際に使用するものであり、抑壓を持續するためには爲し續けられなくてはならないものである。抑壓後の苦悶の發現に對して種々の形式で防禦するのがこの反對攻擊の仕事である。

再び恐怖症に戻らう。單に恐怖症の內容だけを說明しようとすること、それが何處から來たか、これこれの對象或は狀況が恐怖の對象になつたといふこと、それ以外に何等の興味を持たないことが、如何に不十分なものである

かを諸君は悟られたことゝ私は思ふ。恐怖症の內容は夢に於ける顯在夢と殆ど同じ意味を有してゐる、それは眼に見える部分である。恐怖症のこの內容のうちには、スタンレー・ホールが言つたやうに、系統發生的遺傳によつて恐怖の對象となるに適したものが多數にあるといふことは、必要な制限を加へて、容認されなくてはならない。これらの多くの恐怖される事物がたゞ象徵的關係に於いてのみ危險と關聯してゐることは、これと合致しさへもする。

かうして吾々は苦悶の問題が神經病心理學に全く中心的な地位を占めてゐることを確信する。吾々は苦悶の發現がリビドーの運命と無意識體系に結びつけられてゐることから强い印象を受けた。たゞ一點だけがそれに結びつけられてゐない、吾々の見解に於ける罅隙であるやうに思はれる。けれどもそれは、現實的苦悶は自我の自己保存衝動の顯現と考へられなくてはならない、といふ殆ど異論を許さないところの事實である。

第二十六講　リビドーの原理とナーシズム

吾々は幾度も、一寸前にも繰返して、自我衝動と性的衝動の區別に就いて言及した。抑壓はこの兩者が互に對立し得ること、その時には性的衝動がきつと屈從し、退行的迂路によつて滿足を手に入れざるを得ないこと、そこでそれは非常な頑强さでその敗北に對する補償を見出すことを吾々に示した。その時吾々は、この兩者は最初から「必要」に對して異る關係を有してゐること、從つて兩者は同じやうには發達せず、現實原則に對して同じ態度を執らないことを知つた。最後に、吾々は性的衝動は苦悶といふ感動狀態に對して、自我衝動よりも密接に結びついてゐることを認め得ると信じてゐる。この結論は重要な一點に於いてのみまだ完全でないやうに見える。されば此の結論を支持するために吾々は次の注目すべき事實を擧げて置きたいと思ふ。即ち、最も根本的な自己保存衝動なる飢渴は滿足されなくとも內向して苦悶にならないのに反して、滿たされざるリビドーが苦悶に變化することは、吾々が既に知つてゐるやうに、最もよく知られた、また屢々觀察されるところの現象である。

性的衝動と自我衝動を區別することの正當であることには問題はない。否、それは性的衝動が個人のうちに一特

殊的活動として存在してゐることによつて假定されてゐる。唯一の問題はこの區別がどんな意義を有してゐるか、吾々はこの區別をどれほど決定的なものであると考へようとしてゐるかといふことである。これに對する答は、性的衝動はその肉體的及び心理的顯現に於いて吾々がそれに對立せしめた他の衝動とどれほどまでに異つた作用をするか、さうしてこの相異から生ずる結果はどれほど重要なものであるかといふことに就いての吾々の確證を俟つて始めて與へられるのである。吾々はこの兩群の本質的差異を主張しようとは無論思つてゐない、またそれを認めることは困難でもあらう。兩者共に個人の勢力の源泉の名稱として吾々に現はれるに過ぎない。またそれが同一物であるか或は本質的に異つたものであるか、若し同一物であるとすれば何時相互に分離したのであるかといふ議論はこれらの概念のみによつては爲され得るものではなく、その底に存する生物學的事實によつて支持されなくてはならない。而して現在に於いては吾々はこれに就いて餘りに少しのことしか知つてゐない、たとへ知つてゐるとしてもそれは吾々の分析學の仕事には關係がないであらう。

ユングに倣つて一切の衝動の原初的統一を高調し、それらすべてに現はれる勢力を「リビドー」と名づける事も明かに餘り役に立たない。性的機能はどんな技巧によつても心的生活の分野から消去することは出來ないから、從つて吾々は性的及び非性的リビドーと語ることを餘儀なくされる。但しリビドーといふ名が、今まで吾々の用ひて來たやうに、常に性的生活の衝動力の意味を有すべきことは無論である。

從つて、性的衝動と自己保存衝動との區別はどの點まで十分に正當であるかといふ問題は精神分析學にとつて餘り重要でもなく、また分析學はそれを論ずる資格もない、と私は思ふ。生物學的見地からは種々の點から見て確にこの區別は重要である。性的機能は實に有機體のうちに於いて個人を超出して種と關聯を有する唯一の機能である。この機能の使用が、他の諸活動のやうに、その個人に必ずしも利益を齎さないで、却つて異常に高度の快樂の代償として生命を脅かすやうな、また屢々それを奪ふやうな危險に彼を陷れることは否定さるべくもない。また個人生活の一部分が子孫のための準備として保存されるためには恐らくは全く特殊な、他のすべてのものとは異つた代謝作用が必要であらう。最後に、自己を最も重要なものとし、性慾を他のあらゆるものと等しく彼の滿足の手段

と考へるところの個體は、生物學的見地からすれば、一生殖系列に於ける一挿話、眞の不滅性を與へられた胚原形質の短命な附屬物に過ぎない。それは彼の死後に殘る世襲財產の一時的保持者のやうなものである。

けれども神經病の精神分析的說明のためにはかゝる廣汎な見地は必要でない。性的及び自我衝動の區別に從ふことによつて、吾々は轉移神經病の一群を理解する鍵を得た。吾々はそれの起源を性的衝動が自己保存衝動と衝突するといふ、或は生物學者的に言へば——もつと不精確な表現にはなるが——獨立せる個體としての自我の一部が一生殖系列の一員としての他の部分と對立するやうになるといふ根本的狀態に見出すことが出來た。かゝる分離は恐らく人間にのみ存するのであらう。從つて大體から見て人間はその神經病によつて動物より優れてゐるのであると言つてもよからう。彼のリビドーの過發達と恐らくそれによつて可能となつたところの彼の豐富な心的生活の形成がこの種の鬪爭を生ぜしめる條件であるやうに見える。またこれが人間をして動物を超出せしめた偉大な進步の條件であることは言ふまでもなく明白であり、從つて彼の神經病たり得る能力は彼の文化的發達の能力の反面であるに外ならないであらう。けれどもこれもまた吾々の當面の問題とは離れた思辨に過ぎない。

性的及び自我衝動はその顯現に於いては相互に區別され得ると吾々は今まで假定して來た。轉移神經病に於いてはこれは何等の困難もなしに爲され得る。吾々は自我がその性的欲求の對象に向ける勢力の投資を「リビドー」と名づけ、自己保存衝動からの他のすべての投資を「興味」と名づけた。さうしてこのリビドーの投資、その變化、その究極的運命を探究することによつて心的生活に於ける諸力のはたらきを始めて遠見することが出來た。轉移神經病はこの探究に最も都合のよい材料を提供した。けれども自我は、種々の組織からの自我の合成とその構造、機能樣式はまだ發見されなかつた。吾々にはこの事柄に就いての知見を得るためには他の神經病的障碍の分析が必要であるやうに思はれるのである。

精神分析的見解をこれらの他の精神病にまで及ぼすことはずつと前から爲され始めてゐる。既に一九〇三年にK・アブラハムは私との論爭の後に、早發性痴呆（精神病の一つに數へられてゐる）の主要特質は、この病氣に於いては對象のリビドー占有が缺如してゐることである、と述べてゐる。(『ヒステリーと早發性痴呆との精神性慾的差異』

けれどもこゝで直ちに問題が生じる。對象から離れた早發性患者のリビドーはどうなるであらうか。これに對してはアブラハムは躊躇なくから答へる。即ち、そのリビドーは自我に復歸する、さうしてこの反射的復歸が早發性痴呆の誇大妄想の原因である。この誇大妄想はあらゆる點に於いて誰も知つてゐる戀愛關係に於ける對象の過重視に似てゐる。かうして吾々は始めて精神病の一特徴を常態的戀愛生活に關係させることによつて理解し得るやうになつた。

私は直ちにアブラハムのこの最初の見解は精神分析學に包有されてゐること、精神病に對する吾々の態度の基礎となつてゐることを諸君に述べて置きたい。吾々は徐々に、對象に向けられてゐるところの、この對象から滿足を得ようとする欲求の表現であるところのリビドーはまたその對象を棄て、その代りに自我を置くことも出來る、といふ觀念を信用するやうになり、この見解を徐々に完全なものにして來た。リビドーのかういふ使ひ方を吾々はナーシズムと名づけるが、この名前はP・ネッケによつて描かれた變態性慾の一つから借用されたものである。即ちこの種の變態性慾者は普通ならば自己以外の性的對象に向けらるべき愛情をすべて自己の肉體に向けるのである。對象へではなくて自己の肉體と人柄へのこの種のリビドーの固着は決して例外的な些細な現象でないことは一寸考へれば明白である。その反對にこのナーシズムは恐らく一般的な原基的な狀態であつて、對象の愛は後に至つて始めてこれから、しかしながらそのために必ずしもナーシズムが消失されることなしに、發達したのであらう。諸君はまた對象リビドーの發達史から、多くの性的衝動は最初は自己の肉體によつて、所謂自己色情的に、滿足を得ること、この自己色情の能力が性慾をその教育に於いて現實原則に從ふやうに引止めて置くのであること、を想起されるに相違ない。從つて自己色情はリビドー發達のナーシズム的階段に於ける性的活動であつたのである。

簡單に言へば、吾々は自我リビドーと對象リビドーとの關係に就いて一の觀念を形成したのである。私はこれを動物學からの比較によつて例證することが出來る。極めて僅かしか分化してない原形物質の小集團から成り立つてゐる最も單純な形式の生命を考へて見る。その生命は僞足と呼ばれる突出物を延ばし、その生命物質はそのうちに流れ込んで行く。けれどもその生命はまたこの突出物を再び引込めて、元の集塊になることが出來る。さて、この

突出物の延長はリビドーの對象への放射に比較さるべきもので、リビドーの大量は自我のうちに殘存し得るのである。常態に於いては自我リビドーは何等の困難なしに對象リビドーに變化し、それを再び自我は受入れることが出來るのであらう。

これらの觀念によつて吾々は今や心的狀態の全系列を說明することが、或はもつと控へ目に言へば、常態生活に屬すべき諸狀態、例へば、愛してゐる時や器質的疾患の、睡眠時の心的狀態をリビドーの原理の言葉によつて敍述することが出來る。睡眠狀態に就いては吾々は、それは外界からの轉向と眠りたいといふ態度に依存するものである、と假定した。夢に表現される夜間の心的活動は眠りたいといふ欲望を助けるものであること、且つ全然利己的動機に支配されてゐる事を吾々は見出した。今や吾々はリビドーの原理の光に照して、睡眠は對象のあらゆるリビドー的及び利己的占有が斷念されて再び自我の中へ引き戾された狀態である、と言ふことが出來よう。このことは睡眠による元氣囘復に就いて、また一般に疲勞の性質に就いて新しい解釋を齎さないであらうか。睡眠者が夜每に呪ひ出すところの胎內生活に於ける幸福な孤立の姿はかうして心理的方面からも補全される。睡眠者に於いてはリビドー分配の原始狀態、完全なナーシズムの狀態が再現される。そこではリビドーと自我興味とはまだ合一して居り、自足的自我のうちに未分のまゝで共住してゐる。

こゝで二個の注意をして置く必要がある。第一、ナーシズムと利己主義は概念上どう違ふか。ナーシズムは利己主義をリビドー的に補全することであると私は思ふ。利己主義に就いて語る時には、人はたゞその個人の利益だけを眼中に置いてゐるが、ナーシズムと言ふ時には、リビドーの滿足をも考慮に入れる。實踐的動機としてはこの兩者はかなりの程度まで區別され得る。或る人は全然利己的であつて、しかも、一對象に於けるリビドーの滿足が彼の自我の要求である時には、その對象に强くリビドーを固着させることが出來る。彼の利己主義はその時對象の追求が自我に損害を齎さないやうに注意するであらう。或る人は利己的であると同時に非常にナーシズム的であることが、卽ち對象の必要を殆ど感じないことが出來る。さうしてこの必要が、また直接的な性的滿足の必要であることもあれば、普通「肉慾」と對立的に「愛」と呼ばれるところのあの高級な、性的要求から離れた欲求であること

もある。これらすべての關係に於いて利己主義は自明の、不易の要素であり、ナーシズムは可變的要素である。利己主義、利他主義の對立はリビドーによる對象の占有とは關係のない概念であつて、性的滿足を追求しないことによつて後者とは異つてゐる。けれども愛が最高潮に達した時には利他主義はリビドーによる對象の占有と合致する。性的對象は通例自我のナーシズムの一部分を自分の方へ引き寄せる。このことは所謂對象の「性的買ひかぶり」に於いて認め得られるやうになる。若しこの上に利己主義から來た利他主義が性的對象に向けられるならば、その性的對象は優勢になる。それはいはゞ自我を吸收してしまふ。

この要するに無味乾燥な科學的空想の後に、若し私がナーシズムと高潮に達した愛との經濟的對立に就いての詩的表現を諸君に示すならば、諸君はほつとされることゝ私は思ふ。私はそれをゲーテの"Westöstliche Divan"に於けるヅライカと彼の愛人の對話から引用しようと思ふ。

ヅライカ

民衆も奴隷も勝者も
なべて言ふ、
人としてあることのみが
地上の子の最上の幸福であると。
自我を失はざる限り、
如何なる生も營むに足る。
若し人間として生き得るならば
一切を失ふもよし。

ハテム

さうであらう！　さう思はれる。
だが、私は他の道を歩いてゐる

あらゆる地上の幸福を、私は
ツライカのうちにのみ見出す。
彼女が私を使ふ時、
私は價値ある私となる。
彼女が私から立ち去れば、
私は直ちに私を失つてしまふ。
その時ハテムは空無である。
だが私は既に姿を變へてゐる。
彼女が愛する幸福な人のうちに
素早く、私ははひり込む。

第二は、夢の學說の擴大である。夢の生起を說明するためには吾々は、抑壓された無意識は自我から或る獨立性を獲得し、そのために、自我に依屬してゐる一切の對象占有作用が睡眠の目的に從つて停止されてゐるのに、これだけが睡眠の欲求に從はず、その占有作用を續けるのである、と假定しなくてはならない。かう假定して始めてこの無意識的材料が夜間に於ける監視作用の中止或は寛減を利用し得ること、またそれが前日の殘留物を、禁止された夢の欲求を形成する材料とすることを知つてゐることが理解されるのである。他方、この前日の殘留物は睡眠の欲望によつて爲されたリビドーの撤退に對する抵抗力の一部をこの抑壓された無意識的材料との既存の聯合から得て來るのであらう。この重要な動的因子を從つて吾々は夢の形成に就いての吾々の見解に追加しようと思ふ。

器質的疾患、苦痛な刺戟、器官の炎症は明かにリビドーをその對象から分離させるやうな狀態を生ぜしめる。引き戾されたリビドーは再び自我に戾つてその身體の疾患部に强く固着する。實際、かゝる狀態に於いてはリビドーのその對象からの撤退は利己的興味の外界からの轉向よりも顯著であるとさへ人は主張することが出來よう。この

ことからして憂鬱症――こゝでは或る器管は、病んでゐると知覺されることなしに、同じやうな風に自我の憂慮の種になる――を理解する道が開かれるやうに思はれる。けれども私はこゝでこの問題を追究する事を、或は對象リビドーの自我への復歸の假定によつて理解され得るやうに、或は表現され得るやうになるところの他の諸狀態に就いて論じる事を差し控へようと思ふ。何故ならばさうしようと思へば私は今諸君の注意を集めてゐるに相違ないところの二個の抗議に出會ふに定つてゐるからである。先づ第一に、何故に私は睡眠、病氣及びこれに類似した諸狀態を論じた際に、これらの諸狀態はたゞ一個の統一された勢力――自由に流動して時には對象に時には自我に固着し、その孰れの目的にも等しく役立つところの勢力を假定することによつて說明され得るのに、リビドーと興味、性的衝動と自我衝動の區別を主張したのであるか、と諸君は問ひたく思はれるであらう。第二に、どうして私はリビドーのその對象からの撤去も、對象リビドーの自我リビドー――更に一般的に言へば、自我勢力――への變化は、毎日毎夜繰返されてゐる常態的心的過程であるにも拘らず、一病理學的狀態の原因であると見るほどまでに大膽であり得るのか、を諸君は知りたく思はれるであらう。

それに對する答はからである。諸君の第一の抗議は尤もらしく聞える。睡眠、病氣、戀愛の狀態を研究するのに自我リビドーと對象リビドー或はリビドーと興味を區別する必要は恐らく決してないであらう。けれども諸君はこゝであの研究のことを、吾々の出發點となりまた吾々が今論じてゐる心的狀態の觀察を可能ならしめたあの研究のことを看過して居られる。リビドーと興味、從つて性的衝動と自己保存衝動の區別は轉移神經病を生ぜしめるあの鬪爭の性質を知るに及んで吾々の爲さゞるを得なかつたものである。それ以來吾々はこの區別を棄てることが出來ないのである。對象リビドーは自我リビドーに變化し得るといふ、從つて、人は自我リビドーを勘定に入れなくてはならないといふ假定は、所謂ナーシズム的神經病、例へば、早發性痴呆の謎を解決し得る、或はそれとヒステリーや强迫觀念との類似や差異に滿足な說明を與へ得る唯一の假定であるやうに思はれる。さうして今吾々はこれらの場合に決定的に證明されたところのものを病氣や睡眠や愛の狀態に適用するのである。この適用を續けて、これによつて何處に達し得るかを見ることは吾々の自由である。直接に吾々の分析的經驗を基礎としない唯一の主張は、

リビドーは何處までもリビドーであつて、それが對象に向けられても或は自我に向けられても、決して利己的興味に變化することもその逆になることも決してない、といふことである。けれどもこの主張は既に批判的に評價されたところの性的衝動と自我衝動の區別に異つた表現を與へたものに外ならない。さうして吾々は發見的動機からしてこの區別を、それが無價値であることが分るまでは、固守しようと思ふ。

諸君の第二の抗議も正當な問題を捕へてはゐるが、しかし誤つた方向に向けられてゐる。確かに對象リビドーの自我への撤退は直接に病氣の原因とはならない。その撤退が毎日睡眠前に起り、覺醒した時にはまた元通りになることは事實である。原形質極微動物は突起物を引込めて、また次の機會にそれを延ばす。けれども或る一定の、極めて有力な過程が、リビドーが對象から撤退することを強制した時には、事は別になる。ナーシズム的になつたリビドーは最早その對象への歸路を見出すことが出來ない。さうしてリビドーの自由な運動に對するこの障碍は確かに病氣の原因となる。ナーシズム的リビドーが一定の程度以上に累積する時には人はそれに堪へ得ないやうに思はれる。リビドーが對象を占有したのは、自我がこれの過度の累積によつて病氣にならないためにリビドーを送り出さゞるを得なかつたのは、このためであることは想像するに難くない。若し早發性痴呆を徹底的に探究することが吾々の目的の一つであつたならば、リビドーを對象から分離してその歸路を塞いでしまふところの過程は抑壓過程によく似てゐて、それの片側であると考へらるべきであることを私は諸君に示してもよいのである。諸君はこの過程の條件は、吾々が今知つてゐる限りに於いては、抑壓の條件と殆ど同一であることを認められるであらう。その鬪爭は同じものであり、同じ力の間に行はれるやうに見える。その結果が、例へば、ヒステリーの結果と非常に異つてゐるとしても、その理由はたゞその素質の差異にのみ存し得るのである。これらの患者に於いてはリビドー發達の弱所はその發達の異つた階段に見出されるのである。症候形成の過程を可能ならしめるところの決定的固着は何處か他のところに、恐らくは初期のナーシズムの階段に於いて行はれるのであらう。さうして早發性痴呆は最後にはこの階段に復歸するのである。吾々はあらゆるナーシズム的神經病に於けるリビドーの固着點は、ヒステリーや强迫觀念的神經病に見出されるものよりも遙かに初期の發展階段に存してゐると假定せざるを得ない。これは

たことであらう。

疾患――恐らくは精神病學に屬する――を説明しようとする試みが如何に見込のない仕事であるかを諸君は知られ

ある。根柢に於いては兩者は同じ領域に屬する現象である。轉移神經病に就いての分析的知識なくしてこれらの諸

れよりも遙かに酷いナーシズム的神經病の謎を解決するに足ることを知つて居られる。兩者の間には廣い共通點が

極めて注目すべきことである。けれども諸君は吾々が轉移神經病の研究によつて得た概念もまた實際に於いてはこ

早發性痴呆の症候の狀態――これは極めて可變的なものである――はリビドーが對象から引き離されることやそれがナーシズム的リビドーとして自我のうちに累積されることによつて生ずるところの症候によつてのみ規定されるものではない。寧ろ他の諸現象が廣い部分を占めてゐる。それはリビドーが再びその對象に歸らうとする努力から生じるものであり、從つて囘復或は治癒の試みに相應するものである。これらの症候は實に目立つた、騷がしいもので、ヒステリーの症候に、もつと稀には强迫觀念的神經病に酷似してゐるが、しかしあらゆる點に於いて異つてゐる。早發性痴呆に於いてはリビドーのその對象に、卽ちその對象の觀念に戾らうとする努力は實際にその何物かを捕へることに成功するやうに見えるが、しかしそれは、私の見るところでは、いはゞその對象の影である。その對象に屬する言語表象である。私はこゝでこのことに就いてこれ以上述べることは出來ないが、しかしこの對象に復歸しようとするリビドーの作用は吾々に意識的觀念と無意識的觀念の差異を實際に生ぜしめるものが何であるかを透見せしめるやうに私には思はれる。

今や私は分析の仕事が次の一步を進むべき場所へ諸君を導いて來た。吾々が自我リビドーの概念を用ひることを敢てしてより以來、吾々はナーシズム的神經病に接近し得るやうになつた。吾々の仕事はこれらの諸疾患の動的因子を發見し、同時に自我の理解によつて心的生活に就いての吾々の知識を完全にするにあつた。吾々の志してゐる自我の心理學は吾々の自己知覺によつて得られた材料の上に築かれてはならない。それは、リビドーの場合に於けるやうに、自我の障碍と分裂の分析を基礎としなくてはならない。恐らく吾々は、あの更に偉大な仕事が完成された時には、轉移神經病の研究によつて得られたリビドーに就いての吾々の現在の知識を價値なきものと考へるであ

らう。けれども吾々はまだその方に餘り進んでゐない。轉移神經病の際に有效であつた方法はナーシズム的神經病に對しては殆ど無力である。何故さうであるかに就いては直ぐに述べる。これらの患者に於いては吾々は一寸進むと常に越え難い障壁に遭遇する。轉移神經病に於いても吾々はかゝる抵抗障壁に衝き當るが、しかし吾々は徐々にそれを倒すことが出來た。ナーシズム神經病に於いてはその抵抗は排除することが出來ない。精々のところ高い障壁の向うに好奇の一瞥を投げて、壁の向うに行はれてゐることを窺ふ位のものである。從つて吾々の方法は他の方法と取り代へられなくてはならない。吾々は今の所ではかゝる代用物が見つかるかどうかを知らない。材料は確かにこれらの患者に於いては十分にある。吾々の疑問に答へはしないけれども、材料は澤山ある。さうして現在吾々の爲し得ることは、轉移神經病の症候に就いて得られた理解の助けを借りてこの材料を解釋することである。兩者の合致點はかなりに大きく、こゝから出發してよいことを十分に保證してゐる。この方法がどれほどまでに遠く達し得るかはまだ分つてゐない。

吾々の進む道には、この外にも、また他の諸困難がある。ナーシズム的疾患及びそれに關聯を有する精神病の謎はたゞ轉移神經病の精神分析的研究に通じてゐる觀察者によつてのみ解決されるのであるが、吾々の精神病學者は精神分析法を研究せず、吾々精神分析學者はナーシズム的症例を餘り見ない。先づ第一に精神分析學を豫備科學として習得した精神病學者が育成されなくてはならない。このことはアメリカに於いて始められて居り、そこでは多くの指導的精神病學者は學生に精神分析學を講義し、また寺院や癲狂院の監理者はその患者をこの學說によつて觀察しようと努めてゐる。けれども吾々は時としてはこのナーシズムの障壁の彼方に一瞥を投げることが出來た。それで私は吾々が發見したと信ずる二三のことを諸君に語りたいと思ふ。

慢性的な體系的狂氣であるところの偏執病は現在の精神病學によつて試みられてゐる分類に於いては明確な位置を有してゐない。但しそれが早發性痴呆と密接な關係を有してゐることは疑ひを容れない。私は偏執病と早發性痴呆とをパラフレニーといふ名稱の下に一括しようとさへも提議した。偏執狂の形式はその內容に從つて言へば、誇大妄想、被害妄想、戀愛妄想(色情狂)、嫉妬妄想その他である。吾々は精神病學からの說明を期待しない。かゝる說

明の一例として、これは確かに舊式な餘り立派でない例であるが、一症候を他の症候からの知的推論によつて說明しようとする試みを私は擧げて見ようと思ふ。その說明はかうである、迫害されてゐると信ずる第一次的傾向を持つ患者は、この迫害からして必然的に自分は非常に重要な人物に相違ないと結論し、從つて誇大妄想が現はれるのである。吾々の分析的見解によれば、誇大妄想はリビドーが對象から退いたので自我が大きくなつたことの直接的結果であり、原初の幼兒的形式への復歸の結果として生じた第二次的ナーシズムである。けれども被害妄想の症例に於いては吾々は吾々に或る手掛りを辿る機會を與へたところの二三のものを觀察した。第一に、大多數の場合に於いては迫害者は被害者と同性であることに吾々は氣がついた。これに無害な說明を與へることは何時も可能ではあつたが、しかし深く硏究された二三の例に於いては、常態時に於いては最も愛せられてゐた同性の人が罹病後には迫害者に變つたことが明かになつた。妄想のこれ以上の發展は誰も知つてゐる聯想によつて可能となるのであつて、その聯想によつて愛する人が他の人に、例へば、父が敎師或は權威者に置き換へられるのである。この常に確證されて行く觀察からして、吾々は次のやうに結論する。即ち、被害偏執病はその病人が餘りに强くなつた同性愛的衝動を防禦するところの手段である。愛或は憎惡の對象の生命を非常に危險ならしめるところのこの愛情の憎惡への變化は、されば常に抑壓作用の結果であるところのリビドー的衝動の苦悶への變化に對應してゐる。この一例證として私はこの型式の最近に取扱つた例を擧げようと思ふ。一人の若い醫者は以前彼の親友であつた大學敎授の息子の生命を脅かしたゝめに、彼の故鄕から出されなくてはならなかつた。彼はこの友人は最も惡魔的な意圖と超人的な力とを持つてゐると考へた。彼は近年この患者の家に起つたあらゆる不幸とあらゆる公私の不運との責任者であつた。そればかりではない。この惡友とその父の敎授とはまたこの戰爭を起させ、ロシヤを國內に呼び込んだのであつた。彼は彼の生命を何千回も滅ぼしたのであつて、この罪惡人の死によつて一切の不幸は終滅するであらうと、この患者は確信してゐた。しかも彼の彼に對する愛情はまだ非常に强くて、彼がこの敵を目の前で打ち倒す機會があつた時に彼の手を痺れさせた程であつた。この患者との短い會話によつて私はこの二人の友情關係は、高等學校時代からのものであることを知つた。少くとも一度それは友情の境界を越えた。一緒にゐた一夜が完全な性

交の機會を與へた。この患者は、彼の年齢と彼の魅力ある人柄には自然であるにも拘らず、婦人に對しては何等の感情をも抱かなかつた。彼は一度美しい教養のある娘と婚約したが、その娘は愛人が餘りに冷淡であるといふのでその婚約を破棄した。數年後、彼が始めて一婦人に十分性的滿足を與へ得たその瞬間に彼の病氣は勃發した。この婦人が感謝と熱愛を以て彼を抱きしめた時、彼は突然不思議な痛みを感じた。その痛みは鋭い切開の時のやうに彼の頭蓋骨を取り捲いた。後になつて彼はこの感じを腦の一部を取り出される手術を受けてゐるやうであつたと述べた。さうして彼の友人は病理學的解剖學者であつたから、彼は徐々にこの婦人を誘惑のために送ることの出來るのは彼の外にはないといふ結論に到達した。その時以來彼は他の色々の被害妄想を起し、自分はこの舊友の陰謀の犧牲になつたのであると考へた。

けれども迫害者が被害者とは異つた性のものであり、從つてこの病氣は同性愛的リビドーに對する防禦であるとの吾々の說明と矛盾するやうな症例に就いてはどうであらうか。暫く前に私はこの種の症例を調べる機會を得て、この外見的矛盾の背後に一の確證を見出すことが出來た。ある若い娘は二度愛を交した男に迫害されてゐると想像したが、實際は一番始めには母親の代用であると認められ得る一婦人に對して妄想を抱いてゐたのであつた。二度目の密會の後に始めて彼女はその婦人に向けてゐた妄想をその男の方に轉移したのである。從つてこの場合に於いても迫害者の性は被害者のと同じであるといふ條件は最初は矢張り守られてゐたのである。辯護士と醫者とに訴へた時には彼女は最初の妄想のことを述べなかつたので、それは偏執病に就いて、吾々の理論と矛盾するやうな外觀を呈したのである。

同性愛的對象選擇は本來異性愛的選擇よりもナーシズムには一層密接な關聯を有してゐる。故に、强い望ましくない同性愛的衝動が拒絕される時には、ナーシズムへの歸路は特に容易に見出される。私は今まで愛の生活の根柢に就いて、吾々が知つてゐる限りに於いては、諸君は語る機會を餘り持つてゐなかつた。また今それを補足することも出來ない。私はたゞ次のことだけを述べて置きたい。卽ち、ナーシズム的階段の後に來るリビドー發達への一步であるところの對象選擇は二樣に、ナーシズム的型式によつても或は依據的型式によつても爲され得る。前者に

よれば自我の代りに自我に最も類似したものが對象として選ばれ、後者によれば他の生活欲望を滿たしたが故に價値あるものとなつた人がリビドーによつてもまた對象として選ばれるのである。ナーシズム的型式の對象選擇への强いリビドー的固着を從つて吾々は顯在的同性愛への傾向の一つに數へる。

諸君は私がこの學期の最初の講義に於いて、或る婦人の嫉妬妄想の一例を述べたことを記憶して居られるであらう。今吾々は殆ど終りに近づいたのであるから、諸君はきつと吾々は妄想を精神分析的にどういふ風に說明するかを聞きたく思はれるであらう。けれども私はこれに就いては、諸君が期待して居られるほどに言ふべきことを持つてゐない。妄想を論理的議論や現實的經驗によつて理解し難いことは、强迫觀念の理解し難いのと同じやうに、それの無意識的なるものに對する關係が說明してゐる。無意識的なるものは妄想或は强迫觀念によつて表現され、阻止されるのである。兩者の差異はこの二つの疾患の局所的及び動的差異に基いてゐるのである。

偏執病に於けると同じく憂鬱症に於いても——序に言ふが、憂鬱症の下には極めて種々の臨床的型式が分類されてゐる——吾々はこの病氣の內部構造を一瞥し得るやうな場所を見出した。この憂鬱症患者は自責を以て烈しく自己を苦しめるが、しかしその自責は實際は他人に、彼等が失つた性的對象に、或は或る過誤のために尊敬しなくなつた人に關係したものであることを吾々は知つてゐる。このことからして吾々は次のやうに結論することが出來る。卽ち、憂鬱症患者は彼のリビドーを對象から引き戾しはしたが、しかも「ナーシズム的同一視」と呼ばるべき過程によつてその對象を自我そのもののうちに造り上げたのである。いはゞ、自我のうへに投射したのである。私はこゝで單にこの過程の比喩的描寫を爲し得るだけであつて、局所的に動的にそれを表現することは出來ない。この時には自我そのものが放棄された對象のやうに取扱はれ、さうしてその對象に與へようと考へられたあらゆる復讐的及び攻擊的處置に苦しめられるのである。憂鬱症患者の自殺的傾向もまた、患者の苦惱は同時に自我そのものにも、愛され憎まれた對象にも、關係してゐるのであると考へられゝば、一層よく理解されるであらう。他のナーシズム的疾患に於けると同じく、憂鬱症に於いてもブロイレル以來 ambivalenz と呼ばれてゐるところの感情生活の一特徵が極めてはつきりと前景に現はれて來る。ambivalenz とは反對の感情（愛情と敵意）が同一人に向けられる事

を意味してゐる。私はこの講義に於いては ambivalez に就いてこれ以上述べることが出來ない事を遺憾に思ふ。

ナーシズム的同一視の外にヒステリー的同一視がある。これはずつと以前から知られてゐる事實である。この兩者の差異を二三の明白にされた定義によつて諸君に示すことが出來ればよいのだが。週期的及び循環的型式の憂鬱症に就いては私は諸君が確かに聞きたく思つて居られるであらうところの或る事に就いて語ることが出來る。即ち、ある都合のよい條件の下に於いては、平靜な發作の中間期に於ける分析的治療によつて、その狀態の、或はその反對狀態の再現を阻止することは可能である。私はこの經驗を二度有してゐる。このことからして吾々は憂鬱症に於いても錯亂に於いても鬪爭の一種特別の解決法が行はれてゐること、それの先要條件は他の神經病のそれと合致することを知るのである。この分野には精神分析學の爲すべきことが如何に多く殘つてゐるかを諸君は想像することが出來るであらう。

私はまたナーシズム的疾患の分析によつて吾々の自我の組織を種々の能力からのそれの構成に就いて何等かの知識を得べきことを希望して置いた。或る點に於いて吾々はこの仕事を始めてゐる。觀察妄想の分析からして吾々は、自我のうちには不斷に觀察し、批判し、比較し、かくの如きものとして自我の他の部分に對立するところの一能力が存在する、といふ結論に達した。從つて、患者が一足歩くごとに窺はれ觀察されてゐる、彼のあらゆる思想は傳へられ批判されると訴へる時、彼はまだ十分評價されてゐないところの一眞理を吾々に啓示してゐるのであるやうに吾々には思はれる。彼はこの不快な力を外界にあつて、彼とは無關係な何物かに歸する點に於いてのみ誤つてゐる。彼は彼の自我のうちに彼の現實的自我と彼のあらゆる行爲とを理想的自我――これは彼がその發達の行程中に創造したものである――によつて批判する一能力の支配を感じてゐるのである。吾々はまたこの理想的自我は原初の幼時的ナーシズムと結びついてゐるところの、けれどもそれ以來多くの障碍や屈辱を受けたところのあの自己滿足を再び取り戻す目的のために創造されたのであると思ふ。この自己批判的能力が自我監視作用、即ち良心であることを吾々は認める。これは夜間夢を監視して許し難い欲望衝動を抑壓するものと同じ監視作用である。觀察妄想に分解された時には、この能力はそれによつてそれの起源が兩親、教師及び社會的環境の影響にあること、これら

の典型的人物の誰かを自己と同一視することにあることを吾々に示すのである。

これが精神分析學をナーシズム的疾患に適用することによつて得られた二三の結果である。その數は確かにまだ多くない。さうして屢々なほ新領域に十分通曉することによつて始めて得られるあの嚴密性を缺いてゐる。これらの結果はすべて自我リビドーの、或はナーシズム的リビドーの概念を利用することによつて得られたのであつて、この助けによつて吾々は轉移神經病に於いて確證された結論をナーシズム的神經病にまで擴大し得るのである。けれども諸君はこゝで質問されるであらう。ナーシズム的疾患と精神病のあらゆる障碍をリビドーの原理の下に總括することは、あらゆる場合に心的生活のリビドー的因子が發病の原因であることを認めることは吾々にとつて可能であらうか。自己保存衝動の機能の變化をその原因と見る必要は決してないであらうか。さて、この點は急いで決定する必要もなく、まだまだその時機でもないやうに私には思はれる。吾々はそれを靜かに科學の進步に委ねて置いてよい。病原的影響を生ぜしめる能力が實際にリビドー的衝動の特權であることが證明され、從つてリビドーの原理が最も單純な現實的神經病から個人の最も烈しい精神錯亂に至るまでの全線に於いて凱歌を擧げようとも私は少しも不思議とは思はないであらう。何故ならば吾々は生活の現實、必要に從屬するのを拒絕することがリビドーの特色であることを知つてゐるからである。但しリビドーの病原的刺戟によつて自我衝動が第二次的に參加し、その結果機能障碍が惹き起されることは十分あり得ることゝ思つてゐる。またたとへ烈しい精神病に於いては自我衝動自體が第一次的に混亂されることを認めなくてはならないとしても、吾々の研究方法が無效になるとは私には考へられない。未來が、少くとも、それを決定するであらう。

前に殘して置いた曖昧な點を明かにするために暫く苦悶に後戻りしたい。危險の前に於ける現實的苦悶は自己保存衝動の表現であるといふ殆ど異議を容れない假定は、他の點ではあんなに明瞭な苦悶とリビドーとの間の關係と調和しないと吾々は言つた。けれども若し苦悶發作が利己的自我衝動からではなく、自我リビドーから來たものであつたならばどうであらうか。苦悶狀態は何時でも有害なものである。その不利益は苦悶が强くなるほど顯著になる。その時には苦悶はそれのみが利益であり自己保存の目的に適ふところの行爲を、それが逃走であるにせよ自己

防衞であるにせよ、妨害する。從つて若し吾々が現實的苦悶の感動的部分を自我リビドーに、その際の行爲を自己保存衝動に歸するならば、あらゆる理論的困難は取除かれるであらう。諸君は吾々は恐怖を感ずるが故に逃走するのであるとは眞面目に信じて居られないであらう。否、吾々は恐怖を感じ、さうして危險の知覺から喚起された一般的動機からして逃走するのである。非常な生命の危機を通り越して來た人々は、彼等は少しも恐怖を感じたのではなく、單に行動した――例へば、猛獸に武器をさし向けたのである、と吾々に語つてゐる。さうしてこれは確かに最も機宜に適したものであつた。

第二十七講　轉移作用

吾々の講義は今やその終りに近づいたのであるから、諸君は必ず裏切られてはならない筈の或る一つの期待を抱いて居られるであらう。精神分析の錯綜した迷路に諸君を導いて來てこの講義を終る前に必ずや私は分析を行ふ基礎を成してゐるところの治療法に就いて一言するであらうと諸君は考へて居られることと思ふ。私もまたこの題目に就いて語らずに置くことは出來ない。何故ならばこの考察からして諸君は一の新事實を、それなくしては吾々が研究したところの諸疾患は決して十分に理解され得ないやうな一事實を學ばれるであらうからである。

諸君は治療の目的のために分析を行ふその方法に就いての指導を期待して居られないことを私は知つてゐる。諸君はたゞ精神分析的治療がどういふ風に行はれ、大體どういふ結果を得るかを一般的に知りたく思つて居られるに過ぎない。さうして諸君はこれを知る十分な權利を持つて居られる。けれども私はこれを諸君に語るつもりはない、私は諸君自らそれを見出されることを主張したい。

一寸考へていたゞきたい。諸君は既に病氣を起させる諸條件に就いてもまた患者に影響を及ぼす一切の因子に就いても重要なことはすべて知つて居られる。それならば治療的影響を及ぼし得る餘地は何處に殘つてゐるであらうか。先づ第一に遺傳的素質がある。吾々がこれに就いて餘り語らなかつたのは、このことが他の方面に於いて十分高調されて居り、別に新しく言ふこともないからである。けれども吾々は決してこれを輕視してゐるのではない。

それは吾々にとつてもまた常に吾々の努力を限界するところの與材である。次に幼時の經驗の影響がある。これは吾々が分析に於いて何時も重視したところのものである。けれどもこれは過去に屬するもので、吾々はこれを起させないやうにすることは出來ない。次に吾々が「現實の拒絕」の名の下に包括したところの生活の不幸――愛の缺乏、貧窮、家庭的不和、結婚に於ける誤つた選擇、都合の惡い社會的關係、個人を壓迫する嚴酷な道德的因襲の要求がある。成程こゝでは極めて有效な治療を行ふ餘地は十分にある。けれどもそれはウインの人の傳說にあるヨセフ皇帝の用ひた治療法――その意志の前に於いては人間は跪き、困難は消失するやうな權力者の慈悲深い援手のやうなものでなくてはならないであらう。けれども吾々の誰がかゝる善行を吾々の治療手段と爲し得るであらうか。貧乏で、社會的に無力で、醫者として生計を立てなくてはならない吾々は、他の治療法を用ひる他の醫者のやうに、貧乏な人々に治療の手を延ばすことさへも出來ない。さうするためには吾々の治療は餘りに多くの時間と勞力とが必要である。けれども多分諸君は前述の因子の一つに固執して、そこに吾々の影響が及び得る點を見出したと信じられるであらう。若し社會によつて課せられた因襲的制限が患者に强ひられた拒絕の一部を成すものであるならば、吾々は治療によつて彼に勇氣を、或は直接に、社會によつて高く評價されてはゐるが屢々嚴守されてゐないところの理想を棄てることによつてこの障碍を乘り越え、滿足と健康を手に入れるやうに彼に忠告を與へることが出來る。從つて人は性的に「自由な生活」をすることによつて健康體になる。この際分析的治療が一般的道德に仕へないことは確かにこの治療の缺點である。個人に與へたものを分析的治療は一般社會から奪つたのである。

けれども誰が諸君にこんな誤つた印象を與へたのであらうか。性的に自由な生活をせよといふ忠告が分析的治療に一の役割を演じ得るといふやうなことは問題ではない。患者のうちにはリビドー的欲望と性的抑壓、性的傾向と禁欲的傾向の間に執拗な鬪爭の行はれてゐることを吾々が知つてゐるといふ理由だけで既に問題ではない。この鬪爭は一方を勝利を占めるやうに援助することによつては解決されない。成程吾々は神經病者に於いては禁欲主義が勝利を占めてゐることを認める。抑壓された性的衝動が症候にその出口を見出すのは正にこの結果である。若し吾

々が今その反對に性慾に勝利を得させるならば、無視された性慾抑壓作用が症候となつて現はれざるを得ないであらう。孰れの方法もこの內的闘爭を停止せしめることが出來ないで、一方は何時も滿足されないであるであらう。但し醫者の忠告のやうな一要素が奏效するほどまでに闘爭か不安定な症例も稀にはある。けれどもこれらの症例は本來分析的治療を必要としないのである。醫者がかゝる影響を與へ得るやうな人々は醫者がゐなくても自分でその解決を見出すであらう。禁欲生活をしてゐる青年が姦通をしようと決心した時には、或は滿たされない婦人が他の男に埋合せを求める時には、彼等は通例醫者の、況んや分析家の許可を待たないものであることは諸君の知つて居られる通りである。

この問題を考察する際に、人は大抵、神經病者に於ける病原的闘爭は同一の心理的分野にある心的諸衝動の間に常態的闘爭を混同されてはならない、といふ重要な一點を看過してゐる。それは一方は先意識と意識の階段に現はれ、他方は無意識の階段に抑壓されてゐるところの二勢力の間の抗爭である。さればこそこの闘爭は決して終局しないのである。この闘爭者は互に誰も知つてゐる物語にある鯨と北極熊ほどに出會ふことがない。有效な解決は兩者が同一の領域に現はれた時始めて爲され得るのである。さうしてこれを可能ならしめることがこの治療の唯一の仕事であると私は思ふ。

この外に、若し諸君が生活行爲に關する忠告と指導とは分析的方法の一重要部分を成すものであると考へて居られるならば、私は諸君の考は誤りであると斷言することが出來る。その反對に、吾々は出來る限りかゝる顧問の役を避けて、患者自身がその解決を見出すよりも以上のことは何も欲しない。この目的のために吾々はまた彼が職業の選擇、企業、結婚或は離婚のやうな彼の生活に重大な關係を有するすべての決定を治療中は差し控へ、治療後に始めて實行することを要求する。諸君は恐らく全然別な風に考へて居られたであらう。たゞ非常に若いか或は無力な人に對しては吾々はこの望ましい制限を嚴守することが出來ない。彼等に對しては吾々は醫者と教師の立場を兼ねなくてはならない。さういふ際には吾々は自己の責任をよく知つてゐて、十分愼重に事を行ふ。

けれども分析的治療に於いては神經病者は自由の生活を慫慂されるといふ批難に對して私が熱心に抗辯したから

といつて、諸君は吾々は因襲的道德に與するものであると結論されてはならない。このことも同樣に吾々の目的からは遠い。成程吾々は改革家ではなくて單なる觀察者ではある。けれども吾々は批判の眼を以て觀察することを避けることは出來ない。さうして因襲的性道德に味方することも、社會が性的生活の問題を實際的に處理するのに用ひる手段を是認することも不可能であることを見出した。社會がその道德律と呼んでゐるところのものはそれが値するよりも以上の犧牲を要求してゐること、それの運用は聰明と誠實に導かれてゐないことを擧證するのは容易である。吾々は患者にこの批判は必ず聞かせる。吾々は性的生活に就いても他の事柄に就いてと同じやうに偏見なく考察するやうに彼等を慣らさせる。さうして彼等が治療の結果として獨立的になつた後、彼等自身の判斷によつて放縱な性的生活と絕對的禁欲との中間立場のどれかを選んだとしても、吾々の良心はその結果によつて少しも重くされることはない。自己に就いての眞理を十分把握した人は、たとへ彼の道德標準が或る點で一般のものとは異つてゐても、常に不道德の危險に陷ることから防護されてゐると吾々は考へる。この外に、吾々は神經病者の治療に於ける節制問題の意義を過重視しないやうに注意しなくてはならない。たゞ少數の場合に於いてのみ拒絕とその結果としてのリビドー堆積に因由する病原的狀態は餘り困難なしに爲され得るやうに性交によつて消失する。

從つて諸君は精神分析的治療は自由な性的生活を許容することによつて奏効するのであると說明することは出來ない。諸君は何か他のものを探さなくてはならない。諸君のこの推測に對して爲した私の評言の一つが諸君を正しい方向に導いて行くと私は思ふ。恐らく吾々の仕事を有效ならしめるものは無意識的なものを意識的なものに置き換へ、無意識的思想を意識的思想に變形することであらう。正にその通りである。無意識的なものを意識的なものにすることによつて、吾々は抵抗を除き、症候形成の諸條件を消滅せしめ、病原的鬪爭を何等かの解決を見出すに相違ないところの常態的鬪爭に變化させる。吾々は患者のうちにこの心理的變化を起させること以外には何もしない。吾々の援助はこれを起させ得る程度に比例するのである。取除かるべき抑壓作用或はそれに似た心理的過程のないところには、吾々の治療が試むべき何物もまた存在しない。

吾々の努力の目的は種々の形で表現され得るであらう――無意識なものを意識的なものたらしめること、抑壓を

取り除くこと、記憶喪失の罅隙を滿たすこと、これらは結局同じことを意味してゐる。けれども恐らく諸君はこの言明に不滿を感じて居られるであらう。諸君は神經病者の囘復をこれとは異つた風に考へ、精神分析の骨の折れる仕事の後には、彼は別の人間になるのであらうと思つて居られたのに、精神分析の結果、彼は以前よりも少し少い無意識と少し多い意識を持つやうになるだけであるといふことを聞かされたのである。だが、諸君は恐らくかゝる內的變化の意義を過輕視して居られるであらう。治療された神經病者は、根柢に於いて同一人であることは言ふまでもないが、確かに別の人間になつたのである。しかしこれは非常なことである。換言すれば、最も好都合な條件の下に於いてなり得るであらうやうな最上の自我になつたのである。若し諸君が彼の心的生活にこの一見些細な變化を起させるために人はどれほどのことを爲さなくてはならないか、どれほどの努力が必要であるかを聞かれたならば、種々の心理的水準に於けるかゝる變化の重要さを一層よく理解されるであらう。

私はこゝで一寸脇道して、諸君は所謂「原因療法」に就いて知つて居られるかどうかを尋ねたいと思ふ。これは病氣の顯現を攻擊せずに病氣の原因を取除くことを目的とする治療法に與へられた名前である。さて、精神分析法は原因療法であるかどうか。この答は容易ではないが、しかしかゝる疑問の提出の無價値なことを確信せしめる機會を恐らく與へるであらう。分析的治療が直接症候の除去を目的としない點から言へば、それは原因療法のやうに使用されてゐる。けれども他の點ではさうでないと言ふことが出來る。吾々はその原因の連鎖を抑壓作用よりも遙かに前に遡つて衝動的素質にまで、體質に於けるそれの相對的强度とその發達行程に於ける錯進にまで辿つて行つた。今若し化學的方法によつてこの心的機械に干涉し、その時に存在するリビドーの量を增減し、或は他の衝動を犧牲にして一衝動を强めることが可能であると假定すれば、それこそ本當の原因療法であり、吾々の分析はその療法のために原因を調査する不可缺の豫備的仕事となるであらう。リビドーの過程にかゝる影響を與へることは、諸君の知つて居られるやうに、今のところでは全然不可能である。吾々の心理的療法が攻擊するのはこの連鎖の他の點をである。症候の根元であると吾々に思はれる所をではなくて、症候からかなり離れた、極めて異常な風に吾々が近づくことの出來たところの點を攻擊するのである。

それならば患者に於ける無意識なるものを意識的ならしめるにはどうすればよいか。嘗ては吾々はそれは極めて簡單であらうと思つた。たゞこの無意識的なものを見つけ出して、それを患者に告げさへすればよいと思つた。けれども吾々は既にそれが淺薄な誤謬であつたことを知つてゐる。その無意識的なものに就いての吾々の知識は彼の知識と同質ではない。若し吾々が彼に吾々の知つてゐることを語るならば、彼はそれを彼の無意識的なものゝ代りに置かないで、その側に置く。さうしてそれは殆ど變化されない。吾々は寧ろ、この無意識的なものを局所的に考へなくてはならない。さうすれば無意識的なものは容易に意識的なものにそれを索めなくてはならない。この抑壓が取除かれなくてはならない。抑壓作用によつてそれが生じたその個所に就いての彼の記憶のうちにそれを索めなくてはならない。さうすれば無意識的なものは容易に意識的なものによつて置き換へられる。かゝる抑壓はどうして取除かるべきか。吾々の仕事はこゝで第二段に入るのである。先づ第一にこの抑壓が見出されなくてはならない、次にこの抑壓を支持する抵抗が取除かれなくてはならない。

この抵抗はどうすれば取除かれるか。同じ方法によつてゞある。それを見つけ出して患者に語るのである。抵抗もまた一の抑壓作用から、吾々が取除かうとしてゐるその抑壓から、或はもつと前に起つた抑壓から生じる。それは不快な衝動を抑壓するために爲された對抗から現はれるのである。從つて吾々は今以前にしようと思つてゐたのと同じことをする、即ち解釋し、發見し、さうして患者にそれを告げる。けれども今度は吾々はそれを正しい個所に於いてするのである。この對抗或は抵抗は無意識にではなくて吾々の協同者であるところの自我に屬してゐる、それが意識されてゐない時に於いてさへもさうである。こゝで「無意識的」といふ語が現象の意味にも體系の意味にも取られ得ることを吾々は知つてゐる。それは極めて曖昧で困難であるやうに見える。だがしかしこれは前に言つたことの反覆ではないだらうか。この點に就いてはずつと前に論じて置いた。――されぼこの抵抗を除き、對抗を退けることは、若し吾々が吾々の解釋によつてこれを自我に知らせることが出來るならば、可能であるやうに思はれる。それならばそれを可能ならしめるために、吾々が利用し得る衝動力はどんなものであるか。第一は患者の回復したいといふ欲望であつて、これが彼に吾々と協同して仕事をすることを促す。第二は吾々の解釋によつて援助された彼の知性である。若し吾々が彼に抵抗を認め、その抑壓に對應する彼の無意識的觀念を見出すに適當な豫

期觀念を與へて置くならば、彼の知性が一層容易にそれを爲すことは疑ひを容れない。若し私が諸君に、「空を御覽なさい、輕氣球が見えるでせう」と言つたならば、私が單に空に何があるか見て御覽なさいと言つた時よりも、諸君は一層容易にそれを認められるであらう。始めて顯微鏡を見る生徒は教師からどんなものが見えるかを敎へられる。さもなければ彼はそこに見えてゐるにも拘らず何も見ることが出來ない。

さうして今度は事實である。種々の型式の神經病の全部に於いて、ヒステリー、苦悶狀態、强迫觀念的神經病に於いて吾々の假定は實證されてゐる。かういふ風に抑壓を索め、抵抗を見出し、抑壓されたものを指示することによつて實際にこの仕事を成就することは、卽ち抵抗を克服し、抑壓を取除き、無意識的なものを意識的なものに變化することは可能である。これを爲す時吾々は、抵抗が克服されるためには患者の心內に如何に激烈な戰鬪が、同じ心理學的領域に於いて、その對抗を支持しようとする動機と放棄しようと待ち構へてゐる動機との間の常態的心的鬪爭が行はれるかを實にはつきりと見るのである。前者は以前に抑壓を生ぜしめたところの舊い動機である。後者のうちには新しく來た、この鬪爭を吾々の都合のよいやうに解決するであらうと期待されてゐるところの動機がある。吾々は舊い抑壓鬪爭を再現させて、當時完結されたところの過程を再び生じさせる。さうしてこの鬪爭の新材料として、吾々は第一に以前の解決は病氣を生ぜしめたことを證明し、異つた解決は健康を齎すであらうと約束する。第二にこれらの衝動のあの最初の排斥の時以來すべての事情は非常に變化してゐることを指摘する。當時は自我は弱く幼稚であり、恐らくリビドーの要求を危險なものとして警戒する理由はあつたであらうが、今日に於いては自我は强くなり、經驗を有し、その上醫者の援助を得てゐると言ふ。かうすればこの再現された鬪爭は抑壓よりもよい結果を生ぜしめると吾々は期待してよい。さうして、前に言つたやうに、ヒステリー、苦悶神經病、强迫觀念的神經病に於いてはその結果は大體吾々の豫想を實證する。

けれども、この外に、事態は同樣であるにも拘らず、吾々の治療法が少しも奏効しないやうな型式の病氣がある。これらの病氣に於いても自我とリビドーとの間の最初の鬪爭は抑壓を——局所的には轉移神經病のと異つた特色を有してゐるであらうが——生ぜしめたのである。こゝでもまた患者の生活のどの點に於いて抑壓が起つたかを探し

出すことは可能である。吾々は同じ方法を適用し、同じ約束を準備し、期待觀念によつて同じやうに彼を援助する。さうして現在とあの抑壓の時との間の時間はこの鬪爭が異つた結果を生ぜしめるに好都合なやうに經過してゐる。しかも吾々は抵抗を克服することも抑壓を取除くことも出來ない。これらの患者、偏執病、憂鬱病患者、早發性痴呆に惱んでゐる患者は何の影響も受けないで、精神分析的治療の無效であることを證明する。これは一體何故であらうか。知性が缺如してゐるからではない。分析には無論ある程度の知的能力が患者にある事を必要とはするが、例へば、鋭敏な偏執病患者は確かにこの點では缺けてはゐない。他の衝動力も存在してゐる。例へば、憂鬱病患者は、偏執病患者とは反對に、自分が病氣であること、そのために惱んでゐるのであることを高い程度に自覺してゐるが、それにも拘らず彼等は矢張り少しも影響を受けない。こゝで吾々は吾々の理解し難い事實の前に立つてゐるのであつて、從つて吾々は他の神經病に於いては可能な成功のあらゆる條件を實際に理解してゐるのかどうかを疑はざるを得なくなる。

若し吾々がヒステリー患者と强迫觀念的神經病患者を治療し續けるならば、吾々は直ちに第二の、吾々が一度も接したことのない事實に面接する。卽ち、暫くすると患者は吾々に對して極めて妙な態度を採るやうになることを吾々は認める。吾々は治療に影響のある一切の衝動力を勘定に入れ、吾々と患者との間の事情を十分に考量し、從つてそれは算術問題のやうに均衡されてゐると信じてゐるので、この時にはこの計算に入れなかつた何かゞ忍び込んで來たやうに思はれる。この豫期しない新要素はそれ自體が多面的であるから、私は第一にこれの最も屢々現はれる、また理解し易い型式に就いて述べて見ようと思ふ。

吾々はその時彼の苦しい鬪爭の解決以外には何も求めない筈の患者がその醫者の人柄に非常な興味を持ち始めることを認める。この醫者に關聯する一切のことは彼には彼自身の事よりも重要なものに見え、さうして彼をその病氣のことから離れさせる。彼との關係は一時非常に愉快なものになる。彼は大層柔順になり、何處でゝも彼の感謝を示さうとし、吾々が恐らく彼に豫期しなかつたであらうやうな性質の美しさやその他の善良な特徵を現はす。かうして醫者はその患者に就いてよい意見を抱き、かゝる賞讃すべき人格に援助を與へ得るやうになつた幸運を讃へ

る。若し醫者がその患者の近親と語る機會を得たならば、彼はこの賞讃が相互的であることを聞いて滿足するであらう。患者は家庭にあつて絶えず醫者を褒め、さうして新しい德を彼に與へ續ける。「彼はあなたのことで夢中になつてゐます、彼はあなたを無茶苦茶に信用してゐます。あなたの言葉は何でも彼には啓示のやうに思はれるのです。」と彼や近親は言ふ。この合唱の間にあつて鋭い眼を持つた人は言ふであらう。「彼は實に退屈なほどあなたのことばかりを言つてゐます。彼はあなたのことを口にしない時はありません。」

醫者は彼の人格に就いての患者の賞讃を、彼が彼に與へ得る所の囘復の希望からきたその治療が齎した驚くべき解放的な啓示によつての患者の知的範圍の擴大から來たものである、と考へないことを吾々は希望する。この狀態の下に於いては分析もまた素晴らしく進捗する。患者は彼に與へられた暗示を理解する。治療法によつて命ぜられた仕事に專心する。記憶、聯想のやうな必要な材料は豐富に彼に現はれて來る。彼は彼の解釋の確實と精確によつて醫者を驚かす。さうして醫者は外の世界の健康人によつてはあんなにも烈しく反駁されるこの新心理學的觀念のすべてを、患者は如何に喜んで受入れるかを滿足さうに觀察してゐさへすればよい。分析中のこの十分な一致はまた客觀的に、あらゆる方面から認められる病狀の改善となつて現はれる。

けれどもかゝる上天氣は何時までも續くものではない。曇天がやつて來る。治療に困難が始まる。患者は最早何も聯想しないと主張する。彼が最早分析に興味を有してゐないこと、彼の思ひ浮んだことは何でも言つて、それを批判的に押し隱してはならないといふ命令が時々無視されることは誰の眼にも明かになる。彼は治療を受けてゐるのではないやうな風に振舞ひ、醫者とそんな約束をしたことがないかのやうである。彼は明かに何事かに心を奪はれてゐるが、しかしそれを語らうとしない。これは治療にとつて危險な一狀態である。極めて强力な抵抗が生じたのであることは紛ふべくもない。けれども一體何事が起つたのであらうか。

若しこの狀態を明白にすることが可能であるならば、この障碍の原因は醫者に向けられた患者の强い愛情——醫者の態度によつても治療中に生じる關係によつても說明されない愛情であることが見出されるであらう。この愛情がどんな形で表出されるか、どんな目的を追求するかは無論二人の個人的關係によつて異る。若し若い娘と靑年で

あればそれは普通の戀愛であるやうに思はれる。娘が幾度も二人だけでゐて祕密なことを語り得るところの、また權威ある援助者といふ位置にある男に對して戀をするといふことは自然であるやうに思はれる。さうして吾々は神經病に罹つてゐる娘は戀する能力を障碍されてゐると見てもよいことを恐らく看過するであらう。醫者と患者との人的關係が今述べた例よりも遠くなればなるほど、それは愈々說明し難くなるが、それにも拘らず吾々は常にこの同じ愛情關係を見出すのである。若し若い、不幸な結婚をした婦人がまだ獨身の彼女の醫者に對して烈しい熱情を抱き、彼と關係するために離婚しようとし、或は事情がそれを許さない時には、彼と祕密な戀愛關係に入らうとするのならば、まだ理解することは出來よう。かういふことは精神分析の時でなくても起る。けれどもこの場合には婦人や少女から、治療問題に對して彼等が全く明確な態度を持してゐることを立證するところの、驚くべき告白を吾々は聞くのである。彼等はたゞ愛のみが彼等を囘復に導くことを常に知つてゐて、治療の始めからこの關係によつて最後には生活が今まで彼等に拒んだところのものを手に入れることが出來るであらうと期待してゐたのであつた。たゞこの希望のためにのみ彼等はあんなにも治療に骨を折り、彼等の考を述べることの困難に打ち勝つたのであつた。もう一つ附け加へて言へば、さうして普通ならば信じ難いことをあんなにも容易に理解したのであつた。けれどもかゝる告白は吾々を驚かす。それは吾々の計算を臺なしにしてしまふ。吾々はこの計算の最も重要な要素を落したのであらうか。

その通りである。經驗が增せば增すほど吾々はこの吾々の科學的方法を恥ぢしめるところの新要素を否定し得なくなる。最初の間は分析的治療が何か偶然的な、即ちそれとは目的を異にした、それから生じたのではないところの出來事に障碍されたのであると考へることも出來よう。けれども醫者に對するこの種の愛着がどんな新しい場合にも繰返され、最も都合の惡い條件の下に於いても、恐ろしく不釣合な場合にでも、老婦人に於いても白髮の男に對しても、吾々の判斷によれば少しの誘惑も存在しないやうな場合に於いてさへも現はれる時には、吾々は障碍的出來事といふ考を棄てゝ、それは病氣そのものと緊密な關聯を有する一現象であることを認めざるを得ない。

吾々がかうして餘儀なく認めるところのこの新事實を吾々は**轉移作用**と名づける。これは醫者の人柄への感情の

轉移といふ事を意味してゐる。何故ならば治療の狀況がかゝる感情を生ぜしめるとは考へられ得ないからである。吾々は寧ろこの感情の容易に抱かれることは何か他の原因を持つてゐて、患者のうちに以前から形成されてゐたものであり、それが分析的治療を受けた機會に於いて醫者の人柄に轉移されたのであると推定したい。轉移作用は熱情的な愛の要求となつて現はれることもあれば、それほど極端でない形で現はれることもある。愛せられたいといふ欲望の代りに若い娘と老人の間に於いては娘として可愛がられたいといふ欲望が現はれることがある。リビドー的欲望は永久的な、しかしながら理想的に清淨な友情の申出に變化されることがある。多くの婦人は轉移作用を昇華してそれを存在し得るやうな風に修正することを理解してゐる。他の婦人はそれを粗雜な、始めのまゝの、殆ど存在し得ないやうな形式で表現せざるを得ない。けれども、それは根柢に於いては常に同一であつて、同じ源泉から來てゐることは見紛ふべくもない。

轉移作用といふこの新事實を吾々は何處に分類すべきかを尋ねる前に、吾々はこれの敍述をもつと完全にしようと思ふ。一體男の患者はどうであらうか。こゝでは吾々は少くとも性的差異と性的愛着といふ厄介な要素を勘定に入れなくても濟むであらう。さて、その答は婦人に於けるのと餘り變らない。彼も同じやうに醫者に愛着し、彼の性質を買ひ被り、彼に興味を集中し、醫者と親しい生活をしてゐるすべての人を嫉視する。男性と男性の間に於いては、患者の顯在的同性愛がこの部分衝動を他の風に使用するその程度に於いて、轉移作用は昇華された形式で屢々現はれ、直接な性的要求は稀に現はれる。醫者はまた男性の患者には女性に於けるよりも屢々一見したところでは今までの敍述とは正反對と思はれる形式の轉移作用――敵對的或は消極的轉移作用が現はれることを觀察する。

第一に、轉移作用は治療の始まりから患者に存するものであり、一時分析の最も強い衝動力となることを吾々は明白にして置きたい。轉移作用が二人協同の仕事である分析に好都合にはたらいてゐる間は、吾々はそれに就いて何一つ見ないし、またそれに氣を揉む必要もない。それが抵抗に轉じたならば、吾々は注意をその方に向けなくてはならない。さうして二個の異つた、相對立する條件の下に於いて彼の治療に對する態度が變化したことを認めるのである。第一は、愛情が內的抵抗を呼び起さなくてはならないほどに強烈に、またそれが性的欲求から來たもの

であることを示すほどに明白になつた時にであり、第二は、轉移作用が愛情からではなくて敵對的感情から成つてゐる時にである。敵對的感情は通例愛情よりも遲く、またその被面の下に現はれる。兩者が同時に現はれる時には、それは他人に對する大抵の人の心のうちであるところの二重感情(アンビヴレンツ)の好例を提供する。抵抗は從順と同じ從屬關係を示してゐるやうに、敵對感情は愛情と同じやうに、その前置語は對立的であるが、一つの感情の結合を示してゐる。さうして醫者に對する敵對的感情に「轉移作用」の名を與へることは決して不當ではない。何故ならば治療の狀況はこの感情が生じるのに十分なやうな機會は確かに與へないからである。消極的轉移作用に就いてのこの必然的見解は吾々が積極的或は愛情的轉移作用の解釋に於いて誤つてゐないことを確證する。

轉移作用は何處から生じるか、それは吾々にどんな困難を與へるか、如何にそれを克服すべきか、吾々は最後にそれからどんな利益を得るかといふやうな問題は、分析の專門的說明に於いて始めて十分に取扱はれ得るもので、私はこゝではたゞ一寸觸れるに止めて置かなくてはならない。吾々が轉移作用によつて生じた患者の要求に從ふべきことは言ふまでもない。それを不親切に、或は怒つて拒絕するなどは以ての外である。吾々は患者に彼の感情は現在の狀況から生じたものでなく、醫者の人柄に關するものではなくて、ずつと以前に彼に起つたことの再現であることを證明することによつてこの轉移作用を征服する。かうして吾々は彼に彼の再現を憶起に變化させる必要がある。さうする時にはどんな場合にでも治療の最大障碍であると見えるところの轉移作用は、それが愛情的であると敵對的であるとを問はず、治療の最良の用具となり、その助けによつて吾々は心的生活の閉ざゝれたる扉を開くことが出來る。けれども私はこの豫期しない現象が諸君に與へたに相違ないところの怪訝の念を取除くために一言して置きたい。吾々が分析する患者のこの病氣は完結したもの、固定したものではなくて、生物のやうに成長し續けてゐるものであることを吾々は忘れてはならない。治療の開始によつてこの生長は決して停止するものではなくて、治療が患者に試みられるや否や病氣の生產力はたゞ一方向に、卽ち醫者との關係の方に集中されるやうになる。從つて轉移作用は木と樹の皮との間の形成層――これが新組織を形成して幹を太らすのである――に較べらるべきである。轉移作用がこの意義を持つや否や患者の憶起のはたらきはずつと減退する。されば吾々は最早患者の

以前の病氣を取扱つてゐるのではなくて、それに取つて代つた新しい變形された病氣を取扱つてゐるのであると言ふのは間違つてはゐない。吾々は昔の疾患のこの新版を最初から知つてゐる。それの發生と成長を見てゐる。さうしてそれに對しては少しも誤らない。何故ならば吾々自身がその病氣の中心的對象だからである。患者のあらゆる症候はその原初の意義を棄てゝ、この轉移作用と關係を有する新しい意味を取り入れてゐる。或は、かゝる意味を持ち得る症候だけが後に殘つてゐる。さうしてこの新しい人爲的神經病が征服されると共に治療の前から存在した病氣は取除かれる、卽ち治療の仕事は完結するのである。醫者との關係に於いて常態的になり、抑壓された衝動刺戟の影響から免れた人は、醫者が再び彼から離れた時にも、彼自身の生活に於いても常態的になり、衝動の影響から免れてゐる。

轉移作用はヒステリー、强迫觀念的神經病、苦悶ヒステリーの治療にかういふ重要な、眞に中心的な意義を有してゐるのであるから、從つてこれらの病氣を一括して**轉移神經病**と名づけることは不當ではない。分析によつて轉移作用のこの事實に就いての十分な印象を得た人は、この神經病の症候にその出口を造つたところの抑壓された衝動がどんな種類のものであるかを最早疑ふことは出來ない、さうしてそれがリビドー的性質のものであるといふことに就いてこれ以上に有力な證據を求めないであらう。症候はリビドーの代用的滿足であるとの吾々の確信は轉移作用の現象の理解によつて始めて決定的に確證されたと言つてもよいであらう。

今や吾々は治療の過程に就いての吾々の以前の動的見解を訂正し、それをこの新發見と合致させることが出來る。患者が吾々が分析によつて見出したところの抵抗と常態的鬪爭を續けなくてはならない時には、彼は回復したいといふ吾々の欲する決心を彼に抱かせるところの一つの力强い推進力を必要とする。さもなければ彼は以前の結果を繰返さうと決心して意識内に齎されたものを再び抑壓するかも知れない。この鬪爭の結果を決定するものは彼の知的考察ではなくて——それは十分强くもなければ、かゝる仕事を完成するに足るほど自由でもない——ひとり醫者に對する彼の關係である。彼の轉移作用が積極的である限りは、彼は醫者を權威者と考へ、彼の談話と見解とを信じる。この種の轉移作用がないか、或はそれが消極的である時には、彼は醫者の言ふことを少しも耳に入れない。

信仰はこの時その發生過程を再現するのである。信仰は愛の派生物であつて、最初は議論を必要としない。後になつて始めて信仰は、それが彼の愛する人から言はれたのであつても、批判的考察を試みるほどまでに議論を必要とするやうになるのである。信仰によつて支持されない議論は患者に影響を與へない。大抵の人の生活には何の影響も與へない。從つて人は、知的方面に於いてさへも、彼がリビドーを對象に固着し得る限りに於いて、影響を受け得るのである。さうして彼のナーシズムの程度に比例して、最上の分析的方法によつてさへも、彼の感受性は制限されてゐることを認め且つ恐れる十分な根據を吾々は有してゐる。

リビドーを他人に向ける能力は無論すべての常態人に認められなくてはならない。所謂神經病者の轉移作用的傾向はこの一般的特性が異常に強くなつたものに過ぎない。若しかゝる普遍性と重要性とを持つた人間的特徴が今まで認められも利用されもしなかつたらそれこそ不思議であらう。實際それは利用された。ベルンハイムは催眠現象に就いての學説を、その鋭い眼光を以て、あらゆる人間は多少暗示され得る、「被暗示的」であるといふ命題の上に建設した。彼の被暗示性は、餘りその範圍が狹く限定されてゐるが故に消極的轉移作用はそのうちに入らないけれども、轉移作用への傾向に外ならない。けれどもベルンハイムは暗示とは本來何であるか、どうしてそれは生じるかといふことに就いては何も言ふことが出來なかつた。暗示は彼にとつては公理的事實であつて、その起源を說明することは出來なかつた。彼は「被暗示性」が性慾に、リビドーの機能に依屬するものであることを認めなかつた。さうして吾々が分析的方法に於いて催眠術を用ひることを止めたのは、たゞ暗示を轉移作用の形で再び發見せんがためであつたことを吾々は認めざるを得ない。

けれども私はこゝで一休みして諸君の言を聞かうと思ふ。諸君はそれを言はなければとても私の講義を聞き續けることが出來ないほどに抗議したく思つて居られることを私は知つてゐる。「それならば君は到頭君もまた催眠家と同じく暗示の力を借りて仕事をすることを告白したのである。吾々は始めからさうだと思つてゐた。けれども、唯一の有効なものが暗示であるとすれば、過去の憶起、無意識的なるものゝ發見、變歪作用の解釋と復譯等の廻り路や、勞力、時間、金錢の多大な消費は何のためであるか。何故君は、他の誠實な催眠家のするやうに、直接に症候

に對して暗示しないのであるか。更に、若し君がこの廻り路によつて直接的暗示によつては見出されなかつた多くの重要な心理的發見をしたと辯解するつもりであるならば、誰が一體この發見の妥當性を保證するのであるか。これらのものもまた暗示の、即ち、偶然の暗示の結果ではないか。暗示によつてもまた君は患者に君の欲することを、君に正しいと思はれることを印象させることは出來ないか。」

諸君のこの抗議は非常に興味あるもので、答へられなくてはならない。けれども今日はもう時間がないから、私はさうする譯に行かない。だから次にしようと思ふ。その時私は諸君の抗議に答へることにして、今日は私が最初に述べたことを完結しなくてはならい。私は轉移作用の事實によつて、何故に吾々の治療的努力はナーシズム的神經病に於いては成功しないか、を説明しようと諸君に約束して置いた。

私は數言を以てこれを説明することが出來る。さうして諸君はこの謎が如何に簡單に解かれるかを、一切が如何によく組み合はされてゐるかを知られるであらう。經驗の示すところによれば、ナーシズム的神經病に罹つてゐる人は轉移作用を行ふ能力を缺いてゐる、或はそれの殘片をほんの少し持つてゐるに過ぎない。彼は醫者の言を聞き流す。彼は、敵意からではなくて、無關心から醫者に背を向ける。從つて彼は醫者によつて影響されない。彼は醫者の言を聞き流す。何とも感じない。從つて吾々が他の人々に對しては行ひ得るところの治療過程、即ち、病原的鬪爭の再現と抑壓による抵抗の克服は、彼等に對しては何の役にも立たない。彼等は少しも變化しない。彼等は屢々病理學的結果を生ぜしめた自分の力で恢復しようと試みるが、吾々はそれを少しも變化させることは出來ない。

これらの患者の臨床的觀察に立脚して、彼等にあつては對象への固着は斷念されて、對象リビドーは自我リビドーに變化したのに相違ないと吾々は主張した。この特性によつて吾々はこれを神經病患者の第一群（ヒステリー患者、苦悶神經病患者、强迫觀念的神經患者）から區別した。治療を試みる際に於ける彼等の動作はこの推定を確證してゐる。彼等は少しも轉移作用を示さない、從つて彼等は吾々の努力に影響されず、吾々によつて治療されない。

第二十八講　分析的療法

諸君は今日吾々が何に就いて語らうとしてゐるかを知つて居られる。精神分析の效果は本質的に轉移作用に、即ち暗示に依存してゐることを吾々が容認した時、諸君は、何故に吾々は精神分析的療法に於いて直接的暗示を用ひないのか、と私に尋ね、さうして、暗示がかゝる重要な役割を演じてもなほ吾々は精神分析的發見の客觀性を保證し得るかどうかをも疑問視された。私はこれに十分な答をすることを諸君に約束した。

直接暗示は症候の顯現に、諸君の主權と病氣の原動力との間の鬪爭に向けられたところの暗示である。この時には諸君はこの原動力には顧慮しないで、たゞ患者にそれの症候の形に於ける顯現を抑壓することを要求される。從つて諸君が患者を催眠狀態に入れても入れなくても、それは大した變りはない。ベルンハイムは、彼一流の鋭さを以て、催眠狀態に於ける本質的なものは暗示である、催眠狀態そのものは既に暗示の一結果であり、暗示された狀態である、と反覆して主張した。さうして彼は催眠狀態に於ける暗示と同じ結果を齎し得るところの覺醒狀態に於ける暗示を好んで用ひた。

さて、私は經驗の結果と理論的考察の孰れを前に語るべきであらうか。

先づ經驗の方から始めよう。私は一八八九年にベルンハイムをナンシイに訪ね、彼の門下生になつた。さうして彼の暗示に就いての著作を獨譯した。爾來數年間私は暗示療法を、最初は禁止暗示を、後にはブロイエル式の患者の生活を質問する方法を倂せ用ひた。從つて私は十分な經驗から催眠或は暗示療法に就いて語ることが出來る。古い醫者の諺によれば理想的療法とは急速な、確實な、患者に不快でない療法である。さうしてベルンハイムの治療法は確かにこの要求の二つを滿たしてゐる。それは分析的療法よりも遙かに急速に、比較にならぬほど急速に行はれた。さうして患者には迷惑も不快も齎さなかつた。醫者にとつてはそれは何處までも單調なものになつた。どの患者も同じやうに取扱へばよかつた。症候の意味に就いては何も知ることなしに、種々の症候にその存在を禁止する同一の定りきつた手續をすればよかつた。それは一つの機械勞働であつて、科學的仕事ではなかつた。それは魔術や呪術や手品を想ひ出させるが、しかし患者の利益には反しなかつた。けれどもそれは第三の點に於いて失敗した。それはどんな點に於いても確實ではなかつた。それは或る患者には有效であつたが、他の患者にはさうでな

かつた。或るものにはそれでうまく行つたが、他のものにはさう行かなかつた。さうして人はそれが何故であるかを知らなかつた。けれどもこの不定性よりも悪いことはその結果が長續きしないことであつた。暫く經つて患者のことを聞いて見ると前の病氣がまた現はれてゐた。或は他の病氣がそれに代つてゐた。でまた新しく催眠させなくてはならなかつた。心の奥では催眠を反覆することによつて患者の獨立性を奪つてはならない、この治療を麻睡劑であるかのやうに彼に常用させてはならないといふ警告が經驗的方面から爲されてゐた。時としては事が思ひ通りに運ぶことのあることは事實である。殆ど困難なしに完全な永續的結果の得られることもある。けれどもかういふ好結果の條件は隱されてゐる。ある時には、私は一寸した催眠療法で酷い狀態を完全に取除いたが、その患者(婦人)が正當な理由なしに私を嫌惡するやうになると、それは少しも變化されずに再發した。それから再び仲好くなると私は前よりも遙かに徹底的にその症候を消失させることが出來たが、彼女が私に再び敵意を持つとまた現はれて來た。また或る時には私は次のやうな經驗をした。私が催眠術によつて幾度もその神經病的症候を取除いてやつた一人の患者は、特に頑强な發作の治療中に、突然私の頸を抱き締めた。これらの事柄は、人が欲すると欲しないとに拘らず、自分の暗示的權威の性質と起源の問題に考察の眼を向けることを餘儀なくせしめる。

經驗の方はこれだけにして置かう。經驗は吾々が直接暗示の方法を放棄することによつて何もかけがへの無いものを斷念したのではないことを示してゐる。吾々はこのことに就いて二三の考察をして見ようと思ふ。催眠的方法の使用には醫者の方にと同じく患者の方にも殆ど努力する必要がない。この方法は神經病に就いて今も大抵の醫者が抱いてゐる者に完全に合致してゐる。醫者は神經質な人に向つてかう言ふ。「何も變つたことはありません。たゞの神經衰弱です。ですから私の一言二言であなたの惱みは直ぐ消えてしまひます。」けれども、直接にさうして適當に工夫された方法の助けなしに攻撃された時には、エネルギーの重荷は最少の努力で取除かれるといふことは、吾々のエネルギーに就いての思想と相容れない。事情がこれに似てゐる限りに於いては、經驗はこの手品が神經病者に對して成功しないことを示してゐる。けれども私はこの議論が難點のないものでないことは知つてゐる。何故ならば爆發といふやうな現象もあるからである。

に敍述され得るであらう。卽ち、催眠療法は心のうちに行はれてゐる或る事を隱蔽し胡魔かさうとし、分析療法は或る事を曝發し除去しようとする。前者は化粧のやうなものであり、後者は外科手術のやうなものである。前者は症候を制するために暗示を用ひ、抑壓作用を强めるが、他の症候形成に參加する一切の過程はそのまゝにして置く。分析療法はその病氣の更に深い根柢にあつて症候を生ぜしめるところの鬪爭を攻擊し、この鬪爭の結果を變化せしめるために暗示を用ひる。催眠療法は患者を元の無力のまゝにして置くから、從つて新らしい病氣の刺戟がやつて來た時には彼は矢張りそれに抵抗することが出來ない。分析的療法は內的抵抗を取除くために醫者にも患者にも非常な努力を要求する。この抵抗の克服によつて患者の心的生活は永久的に變化され、より高い發達階段に達し、新しい病氣の可能性を無くする。この抵抗を克服する仕事が分析的治療の中心的作業である。患者はこの克服に成功しなくてはならず、醫者は敎育の性質を有する暗示によつて彼のこの仕事を助けるのである。從つて精神分析的治療を一種の再敎育と呼ぶのは正當である。

今や私は暗示を治療的に用ひる吾々の方法と催眠療法に於いてのみ可能な方法との差異を諸君に明瞭ならしめ得たことゝ思ふ。諸君はまた、轉移作用も暗示によるものであることを知つて居られるから、何故に催眠療法の結果は不定であり、何故に分析療法の結果はそれが爲し得る範圍內に於いては確實であるかを理解されたであらう。催眠術を用ひる際には吾々は全然患者の轉移能力の狀態に賴らなくてはならないが、しかも吾々はこの狀態そのものに影響を與へることが出來ない。被催眠者の轉移作用は消極的であるかも知れないし、或は最も普通にあるやうにambivalentであるかも知れない。或は彼は特殊の態度を採る事によつて轉移作用を行はないやうにするかも知れない。吾々はこれに就いては何事も知らないのである。精神分析學に於いては吾々は轉移作用そのものにはたらきかける。それを妨害するものを取除いて、治療の用具とする。かうして吾々には暗示の力を全然異つた風に利用することが出來るやうになる。吾々はそれを使驅し得るのである。患者は自分の好みに從つて暗示されるばかりではなく、彼が暗示の影響を苟しくも受ける限りに於いては、吾々は彼の被暗示性を指導する。

こゝで諸君は言はれるであらう。吾々が分析の背後に隱れてゐる衝動力を轉移作用と呼ぶと暗示と呼ぶとを問はず、患者に對する吾々の影響が吾々の發見の客觀的確實性を疑はしいものにするといふ危險は矢張り存してゐる。治療に都合のよいものは研究に有害なものである、と。これは精神分析學に對して最も屢々なされる抗議であつて、たとへ的を外れたものではあつても、不條理なものとして無視され得ないものであることはこれを容認せざるを得ない。若しこの抗議が正しいものであるとすれば、精神分析學は要するに特別に巧みに變裝された、特に有效な一種の催眠療法に過ぎないであらう。さうして過去の生活の影響、心的力學無意識等に就いての分析學の主張は輕視されてもよいであらう。反對者はさう考へてゐる。特に、性的經驗の意義に關するすべてのことは——性的經驗そのものではないまでも——吾々の墮落した空想のうちにかゝる結合が形成された後に患者に「敎へ込まれた」のである、と彼等は考へてゐる。この非難は學說の助けによつてよりも經驗の證據によつて一層よく反駁される。精神分析を自ら行つた人は誰でも、患者をかういふ風に暗示させることは不可能であることを幾度となく確信したであらう。彼をして一學說の信奉者たらしめ、さうして醫者の抱いてゐるあり得べき誤謬に參加せしめることは無論少しも困難ではない。彼は他の場合に於けると同じくこの際にも學生のやうに振舞ふ。けれども吾々はこれによつて彼の知識に影響を與へるだけであつて、その病氣に影響を與へはしない。彼の鬪爭を解決し、彼の抵抗を克服するためには、彼のうちに實際に存するものを彼に語つてやるの外はない。醫者が誤推したものは分析の進行中に消失するであらう。それはもつと正しいものによつて却けられ取つて代られるに相違ない。吾々は周到な方法によつて暗示から生じる一時的成功に對して警戒する。けれどもたとへ生じたとしても大したことはない。何故ならば吾々は最初の結果を以ては滿足しないからである。吾々はその患者に於ける一切の曖昧なものが說明され、記憶の罅隙が埋められ、抑壓の最初の原因が見出されるまでは分析が完成されたとは考へない。成功が餘りに早くやつて來た時には吾々はそれを分析の仕事の進捗であるとよりも寧ろ障碍であると考へ、その成功の基礎をなしてゐるところの轉移作用を絕えず曝露して、その成功を再び破壞する。根柢に於いては分析的治療法を催眠療法から區別し、分析の結果は催眠の結果であらうといふ疑惑を一掃するものは今言つたこの特徵である。他のあらゆる催眠療法に於

いては轉移作用は用心深く保存され、少しも觸れられないである。分析治療法に於いては轉移作用そのものが治療の對象であつて、その種々の形式に分解される。分析的治療の終りには轉移作用そのものが取除かれなくてはならない。その時若し成功が續いて來るか或は保持されるならば、それは暗示によるものではなくて、暗示の助けによつて成された內的抵抗の克服に、患者のうちに起つた內的變化によるものである。

單純暗示の影響が生じないのは恐らく吾々が治療中、消極的（敵對的）轉移作用に變ずることを知つてゐるところの、抵抗に對して絕えず戰ひ續けてゐるためであらう。吾々はまた、さもなければ暗示の所産であると疑はれるかも知れない分析の個々の結果の多數は他の疑ふ餘地のない方面から確證されることをもこゝで指摘して置きたいと思ふ。この點に就いての吾々の證人は痴呆及び偏執病であつて、彼等は言ふまでもなく暗示によつて、影響される疑は少しもない。彼等の意識に現はれた空想や象徵の飜譯によつてこれらの患者が吾々に物語るところの事は、轉移神經病患者の無意識に就いての吾々の調査の結果と忠實に合致し、從つて吾々の屢々疑はれてゐるところの解釋の客觀的眞理を確證してゐる。この點に於いては精神分析を信じても諸君は決して誤られないであらうと私は信じてゐる。

今や吾々は病氣恢復の機構をリビドーの原理の言葉によつて敍述しようと思ふ。神經病者は享樂及び活動の能力を缺いてゐるが、前者は彼のリビドーが何等の現實的對象に向けられないためであり、後者は彼のさもなければ自由に使用し得る勢力の多くがリビドーを抑壓して置くために、またリビドーの突擊を防ぐために消費されなくてはならないからである。若し自我とリビドーとの間の鬪爭が終止し、彼の自我が再びリビドーを自由にするならば、彼は健康を囘復するであらう。されば治療の仕事はリビドーをその以前の、自我の手の屆かぬところへの固着から解放して、それを再び自我に仕へさせることにある。さて神經病者のリビドーは何處に固着してゐるか。これを見出すことは容易である。それはリビドーにその時唯一の可能な代用滿足を與へるところの症候に固着する。されば吾々は症候を征服して、それを取除かなくてはならない——さうしてこれは正に患者が吾々に求めるところのことである。症候を取除くためにはそれの發生した點にまで遡つて、當時それを他の出口に導いて行くことの出來なか

この抑壓過程の再現は一部分はこの過程を憶起させることによつても成され得るが、この再現の仕事の重要部分は醫者との關係に於いて、卽ち轉移作用としてあの昔の鬪爭を新しく始めさせるにある。この時患者は以前と同じやうに振舞はうとするであらうが、吾々は使用し得べき全部の心的力を呼び出して、彼をして他の解決法を採らしめる。從つて轉移作用は一切の相爭ふ力が遭遇せざるを得ないところの戰場である。

すべてのリビドーとそれに對するすべての反抗とは醫者との關係に向つて集中される。かうしてこの際にリビドーが症候から離れることは必然である。患者の本當の病氣の代りに人爲的に得られた轉移作用、轉移病が現はれ、リビドーの種々の非實在的對象の代りに、これも同じく「空想的な」、醫者の人柄といふ對象が現はれる。この對象のために生じる新しい鬪爭はしかしながら醫者の暗示によつて最高の心理的階段にまで擧げられ、常態的な心的鬪爭となる。新らしい抑壓がかうして避けられるために自我とリビドーとの對立は無くなり、患者の心的統一は囘復される。そのリビドーが一時的對象たる醫者の人柄から再び離された時には、それは以前の對象に復歸することが出來ないで、自我に自由に使用されるやうになる。この治療中に吾々が征服しようとした力は、一方に於いては、リビドーのある傾向に對する自我の嫌惡であつて、これは抑壓的傾向として現はれた。もう一つの方は一度捕へればその對象を容易に離さうとしないリビドーの固執性である。

治療的仕事には、從つて二方面がある。先づ第一に一切のリビドーは症候から轉移作用の方に押し向けられ、そこに集中され、第二にこの新對象の周圍に於いて戰が行はれ、さうしてリビドーはその對象から解放される。この成功的結果を齎すに是非とも必要な變化は、この新しい鬪爭によつて抑壓作用を除去してリビドーを再び無意識內に逃避して自我から離れることの出來ないやうにすることである。而してこの變化を生ぜしめるためには醫者の暗示によつて自我を變化せしめればよい。無意識的なものを意識的なものならしめる解釋の仕事によつて、この無意識的なるものを犧牲にすることによつて、自我は擴大され、敎育されることによつてリビドーと妥協し、それにある程度の滿足を好んで許容するやうにされる。さうしてリビドーの要求に對する自我の恐怖はリビドーの或る量を昇華

作用によつて消費するといふ自我が新たに習得した能力によつて輕減される。治療の過程がこの理想的叙述に近ければ近いほど、精神分析的治療の成功は大きい。治療の障碍物はリビドーが可動性を缺いてゐて、その對象から離れようとしないことゝ、患者のナーシズムが頑强であつて、ある程度以上に對象轉移作用を發展させないことである。轉移作用によつてリビドーの一部分を吾々の方に引き寄せることによつて、吾々は自我の支配から離れたリビドーの全量を手に入れるのであることを附言すれば、回復過程の力學は恐らく諸君に一層明白になるであらう。

こゝでもう一つ言つて置きたいことは、吾々は治療中に、また治療によつて生じたリビドーの分布からして以前の病氣中に於けるリビドーの留つてゐたところを直接に推定してはならないといふことである。强力な父親轉移作用を醫者の方に再現させ、それを取除くことによつて或る患者を治療し得たと假定しても、そのことからしてこの患者は以前父親へ彼のリビドーをかういふ風に固着させて、苦しんでゐたのであると推論するのは誤つてゐるであらう。父親轉移作用はそこで吾々がリビドーを捕へるところの戰場であるに過ぎない。患者のリビドーは他の陣地からそこへ誘き寄せられたのである。この戰場は必ずしも敵の最も重要な城塞とは合致しない。敵の首都の防備はその城門の前に於いて行はれる必要はない。轉移作用を再び取除いた後に始めて吾々は病氣中に於けるリビドーの分布を想像に於いて再構成することが出來るのである。

リビドーの原理の立場から吾々はまた夢に就いても究極的叙述をすることが出來る。神經病者の夢は、彼等の誤謬や自由聯想と同じく、吾々に症候の意味を見出し、リビドーの分布を發見することを得しめる。彼等の夢はその欲望充足の形式によつてどういふ欲望衝動が抑壓を受けたか、自我から離れたリビドーはどういふ對象に固着してゐるかといふことを吾々に示してゐる。從つて夢の解釋は精神分析的治療に重要な役割を演じるものであり、多くの場合に於いては長い間その仕事の最重要な手段である。睡眠狀態はそれ自體に於いて抑壓作用の或る弛緩を生ぜしめることを吾々は既に知つてゐる。この重い壓迫の減退によつて抑壓された欲望は、夢に於いては晝間症候に許されるよりも一層明かに自分を表現することが出來る。かうして夢の研究は、自我から離れたリビドーが屬するところの抑壓された無意識的なるものに就いての知識を得る最も便利な方法である。

けれども神經病者の夢は重要な點に於いて常態人のと少しも異つてゐない。否、兩者を區別することは恐らくは出來ない。神經病者の夢を常態人の夢にも適用しないやうな風に說明することは出來ない相談であらう。從つて神經病と健康態との區別は晝間に妥當なだけであつて、夢の生活には妥當しないと吾々は結論せざるを得ない。神經病者の夢と症候との間の關聯の結果として得られた假定の多數は、健康人に對しても適用される必要がある。吾々は健康人もまたその心的生活に於いて夢及び症候形成の唯一の要素であるところのものを有してゐることを認めざるを得ない。さうして健康人もまた抑壓を行ひ、それを續けるために或る量の勢力を浪費する、彼の無意識的體系は抑壓されたけれどもなほ勢力を保有した欲望を藏してゐる。彼のリビドーの一部分は彼の自我の支配下にないと結論せざるを得ない。健康人もまた結局神經病者であるが、しかし彼の形成し得る唯一の症候は夢であるやうに見える。けれども若し吾々が彼の覺醒生活に鋭い探究の眼を向けるならば、吾々はこの尤もらしい結論と相容れないものを發見する、即ちこの一見健康な生活は無數の些細な實際的には無意味な症候形成を以て滿たされてゐるからである。

神經質的健康態と神經病との區別は從つて實踐的區別であつて、その本人がどの程度に享樂及び活動能力を保有してゐるかによつて決定されるのである。この區別は恐らく自由に使用され得る勢力と抑壓によつて捕へられた勢力の量との相對的關係にまで遡らるべきものであらう。即ち質的なものではなくて量的なものである。この見解が神經病は、體質的素質を原因としてゐるにも拘らず、本質に於いては治療され得るといふ吾々の確信の基礎をなしてゐるのであることは言ふに及ばないであらう。

健康者の夢と神經病者の夢は同一であるといふ事實から健康者の特質を推論することはこれ位にして置かう。夢そのものに就いてはしかしながら更に推論されなくてはならない――即ち、吾々は夢と神經病的症候とを別々に考へてはならない。夢の本質は「思想を古代的表現樣式に飜譯することである」との言葉に述べ盡されてゐると信じてはならない。夢は吾々に現實に存するところのリビドーの固着點と欲望の對象を示すものであると假定せざるを得ない。

今や吾々は殆ど終りに近づいて來た。恐らく諸君は精神分析的治療の題下に於いて、私が理論ばかりを述べて、治療に要する諸條件やそれが到達する結果に就いて少しも語らなかつたことに失望して居られるであらう。けれども私は兩方とも省略する。第一に私は諸君に分析的方法の練習に實際的指導を與へようとは少しも考へてゐなかつたからであり、第二にはさうしない二三の理由を私は有してゐるからである。吾々の講義の劈頭に於いて私は好條件の下に於いては吾々は心的治療法の他の領域に於ける最も立派な治療にも劣らない治療の效果を擧げ得ることを高調して置いたが、私は更に附け加へて、この結果には他の如何なる方法によつても達することが出來ないと言ふことが出來る。これ以上のことを言へば、私は自家廣告によつて吾々の反對者の高い非難の聲を消してしまはうとしてゐるのだと疑はれるであらう。醫者の「同僚」は、公開の會合に於いてさへも、幾度となく精神分析學を攻撃し、分析の失敗と有害な結果を集めて公表し、それによつて誤られたる社會にこの治療法の無價値であることを知らしめようとしてゐる。けれどもかゝる手段の惡意的罵詈的性質のことは言はないとしても、この種の蒐集された材料によつて分析の治療的效果を評價することは正當でないであらう。分析的治療は、諸君の知つて居られる通り、まだ餘り發達してゐない。この方法が完成されるまでには長い時間が要る。さうしてこのことはたゞ經驗の增加によつてのみ成され得るのである。この方法を指導することの困難のために初心の醫者は他の方面の專門家よりも遙かに多く彼自身の能力の發達に頼らなくてはならず、從つて彼の始めの頃の結果によつて分析的治療の十分な治療能力が評價されてはならない。

分析の初期に於いて治療の試みが屢々失敗したのはこの方法には全然適しない、さうして今日に於いては吾々が或る指標に從つて除外するところの症例にそれが行はれたからである。けれどもこの指標もまたたゞ治療を試みることによつてのみ得られたのである。最初吾々は非常に酷くなつた偏執病や早發性痴呆には分析の及ばないことを知らなかつた。しかも吾々はこの方法をあらゆる種類の疾患に試みる權利を有してゐた。けれどもこの初期に於ける失敗は大部分は、醫者の過失や誤つた對象選擇に因るのではなくて、外的條件がよくなかつたことによるのである。吾々は必然的な、さうして克服することの出來る患者の內的抵抗に就いてばかり述べて來た。患者の周圍や環

境が分析に對して爲すところの外的抵抗は理論的興味は少いが、實際的には最も重要な意義を有してゐる。精神分析療法は外科手術に比較さるべきものであつて、それと同じやうに、その成功のために最も都合のよい條件の下で行はれることを要求する權利を持つてゐる。外科醫は手術の際にどんな準備をするかを諸君は知つて居られるであらう。彼は適當な部屋、十分な光を使用し、立派な助手を使ひ、親戚の人を近づけない。若し外科手術が患者の全家族の前で行はれ、彼等が手術のことに口を出し、メスの動くたびに大聲を擧げるとしたら、一體どれほどの手術が成功するであらうか。精神分析的治療に於いては親戚の干渉は非常に危險である、しかも吾々はこの危險を如何に處理すべきかを知らない。吾々は必然生ずることを知つてゐる患者の內的抵抗に對しては準備してゐるが、この外的抵抗に對しては如何に防衞すべきであらうか。患者の親戚を何等かの說明によつて納得させることは不可能である。彼等をこの事柄から全然離れてゐるやうに說得することも出來ない。また吾々は彼等と事を共にすることが出來ない、何故ならばさうすれば患者の信賴を失ふ危險があるからである。患者は自分の信賴する人が自分の味方をすることを要求する——さうしてこれは正當なことである。屢々家族を分裂せしめるところの軋轢に就いて知つてゐる人は、分析者として患者の最近親者が彼の病氣を癒すことに、彼をそのまゝにして置くほどの興味を示さないことを見出しても驚かないであらう。屢々あるやうに、神經病者がその家族と不和の關係にある時には、健康人は彼の利益と患者の囘復の孰れを選ぶべきかに長く躊躇しない。實際、夫が、彼が正しく想像したやうに、彼の罪悪がすつかりばれてしまふやうな治療法を少しも喜ばないとしても驚くには及ばない。吾々もまたそれに就いては少しも驚かないが、しかしその時吾々の努力が無效に終つたとしてもそれは吾々の罪ではない。何故ならば夫の抵抗が病妻の抵抗に附加されてゐるからである。吾々は單に、現在の條件に於いては、成功しないことを試みたに過ぎない。

私は多くの症例を叙述する代りに、醫者としての顧慮のために損な役割を演じなくてはならなかつた、一例だけを語らうと思ふ。數年前、私は一人の若い娘に分析的治療を試みた。彼女は既に長い間苦悶のために家の外に出ることも一人で家に居ることも出來ないのであつた。彼女は非常な躊躇の後に、彼女の母と裕福な一友人との間の愛

情的關係をふと見つけて、そのことばかりを想像してゐると告白した。けれども彼女は分析の時間に話されたことを極めて下手に――或は極めて巧みに――母に暗示した。卽ち、彼女は母に對する態度を變へ、母以外の人では一人でゐることの恐怖を鎭めることが出來ないと言ひ張り、彼女が出て行かうとする時にはその扉を閉ざした。この母親自身が以前は非常に神經質であつたが數年前水治療院へ行つてから癒つた。別の言葉で言へば、彼女はその療院で或る男を識り、彼とあらゆる點に於いて彼女を滿足させるやうな關係に入つたのであつた。彼女の娘の烈しい要求に驚かされて、彼女は突然その娘の恐怖が何を意味してゐるかを理解した。彼女は母親を囚人にし、彼女の愛人との關係を續けるのに必要な自由を彼女から奪ふために病氣になつたのである。彼女は直ぐにこの有害な治療を止めることに決心した。娘は精神病院に送られ、そこで長い間「精神分析の不幸な犧牲者」と言はれた。その間私はこの治療の惡い結果のために惡評を蒙つた。私は醫者の規則を守る義務があると思つたので沈默を守つた。幾年かの後私はその病院を訪ねて臨場苦悶に惱んでゐるその娘を見た同僚から、彼女の母親とその富裕な友達との關係は知れ渡つてゐることで、夫と父の承諾を得てゐるのであるらしいといふことを聞いた。從つてこの治療はこの「祕密」の犧牲となつたのである。

多くの患者が諸國からやつて來たので私がウインの町の好惡を顧慮しなくてもよくなつた戰前の數年間、私は重要な生活關係に於いて他人から獨立してゐない患者は治療しないことに定めた。けれどもどの精神分析家もこれを爲し得る譯ではない。恐らく諸君は、私の親戚に就いての警戒からして、吾々は分析の目的のために患者をその家族から離すべきである、卽ちこの治療を精神病院に居る人々だけに制限すべきであると推論されるであらう。けれども私はこの點では諸君に同意することが出來ないと思ふ。患者にとつては、少くとも彼が酷い衰弱の狀態にゐない限りは、治療中彼に與へられた仕事に努力しなくてはならないやうな狀況の下に居る方が遙かに利益である。たゞ患者の近親者はこの利益を彼の行によつて無くしてしまつてはならない。特に醫者の努力に對して敵對的行爲を執つてはならない。けれども吾々が近づくことの出來ない人々にどうしてかゝる態度を執らせることが出來るであらうか。治療の前途は社會的環境と家族の敎養の程度によつて如何に影響されるかといふことを諸君もまた自ら知

られるであらう。

このことは治療法としての精神分析學の效果に暗い影を投じないであらうか。たとへ吾々の不成功の大多數はこの厄介な外的要素を勘定に入れることによつて說明され得るとしても。分析學の友人達は吾々の成功の統計表を作つて不成功の分と對照したらよからうと奬めて吳れた。けれども私はこれにも同意しなかつた。私は統計表は對照された單位が似てゐないならば、また治療を試みられた症例が種々の點に於いて等値のものでないならば無價値であると主張した。更に、治癒の持續性を判斷し得るためには餘りに短い時間しか經過して居らず、また多くの症例に就いては吾々は說明することが出來ない。彼等は彼等の病氣をも治療をも祕密にしてゐる人々であり、從つて彼等の治癒も同樣に祕密にされなくてはならなかつた。けれどもこれに對する最も强い反對理由は、人間は治療の事柄に就いては最も不合理的に振舞ふものであつて、合理的議論によつて彼に影響を與へ得る見込は少しもないといふ事實を吾々は知つてゐることである。治療上の新事實は、例へば、コッホがツベルクリンの肺結核に對する効果を公表した時のやうに、無茶苦茶な感激を以て受け入れられるか、或は、實際は天與の惠みであるところのジエンナーの種痘のやうに——これは今日に於いてもなほ反對者を有してゐる——底知れぬ不信を以て迎へられるかである。精神分析學に對しては明白な偏見が行はれてゐる。若し非常な重症患者を吾々が癒した時には、人は「あんなことは少しも證據にならない、彼は今日までにはひとりでにでもよくなつたかも知れない」と言ふであらう。さうして既に憂鬱と噪病の囘期を經過した一患者が憂鬱の後の時期に私のところへ來て、三週間後に再び噪病の發作を始めた時には、彼の全家族も信用されて呼ばれた醫者も、この新しい發作は彼に試みられた分析の結果に外ならないと確信した。偏見に對しては手の着けやうがない。交戰中の國民が他の國民に對して今日示してゐるところの偏見はこのことを新しく例證してゐる。最も賢明な方法は時がその偏見を拭ひ去るのを待つことである。時が來れば同一人が同一事を前とは異つたやうに考へるやうになる。何故彼等がもつと前にさう考へなかつたかは解き難い祕密である。

分析的治療に對する偏見が今日既に去りかけてゐることは事實らしい。精神分析學の不斷の普及と諸國に於いて

分析的治療を行ふ醫者の增加したことは、これを保證してゐるやうに思はれる。まだ青年の頃、私も、今日「眞面目な人」によつて精神分析に對立させられてゐるところの、催眠的暗示療法に對してこれと同じやうな醫者としての憤激に捉へられた。けれども催眠術は、治療の用具として、その最初の期待に副はなかつた。吾々は精神分析家は吾々がそれの正統なる相續者であることを主張し得るし、また多くの鼓舞と理論的說明を催眠術に負うてゐることを忘れてもゐない。精神分析に就いて噂されてゐる有害な結果は本質的には鬪爭の昂進といふ一時的現象に限られてゐるのであつて、これは分析が下手に行はれた時とか分析が中斷された時とかに起るのである。諸君は吾々が患者に對してどんなことを行ふかといふことに就いては旣に說明を聞かれたのであるから、吾々の努力が持續的損傷を與へ勝ちなものであるかどうかを自ら判斷することが出來るであらう。分析の濫用は種々な風に可能である。特に轉移作用は誠意のない醫者の手で扱はれる時には危險な手段である。けれどもどんな治療法も濫用されないとは定つてゐない。切れないメスは外科醫の役に立たないであらう。

今や私は終りに來た。諸君に向つてした私のこの講義は私自身でさへも非常に氣になる多くの缺點を有してゐる。これは誰もやるあの謙遜ではない。特に、一寸觸れたばかりの題目に就いては、後に立歸つて論ずると屢々約束して置きながら、その約束を果し得るべき場所でそれを論じなかつたことを遺憾に思ふ。私は諸君にまだ完成されてゐない、發達の途上にある事柄に就いて語らうとしたのであるが、今度は私の簡單な槪說そのものが未完成のものになつた。多くの點に於いて私は結論を引き出し得るやうに材料を準備して置きながら、それを引き出さなかつた。けれども私は諸君を精神分析學の專門家たらしめることを目的とはし得なかつた。私はたゞ諸君に分析學に就いての或る理解を與へ、興味を喚起することを欲したのである。

精神分析學 終

ショーペンハウエル論文集

ショーペンハウエル著
佐久間政一譯

譯者序

一、譯者は本書を譯編するに當つて、本論文集のうちに、いかなるものを收むべきかについては、下の諸書を參照した。

Mrs. Rudolf Dircks : Essays of Schopenhauer (The Scott Library).

Ernest Belfort Bax : Selected Essays of Schopenhauer (Bohn's Philosophical Library).

Wm. M. Thomson : Essays by Schopenhauer.

Bailey Saunders : Studies in Pessimism.

一、譯者はこれらを準據として材料を集め、本書が包含する十五章を得た。其うち『婦人論』『自ら考ふる事に就て』『讀書と書籍』『噪音に就て』『自殺論』『生存空虚の說』は『パレルガ・ウント・パラリポメナ』第二卷から、『狂氣に就て』『性愛の形而上學』『天才論』『詩の美學』は主著『意志と表象としての世界』第二卷から採つた。

一、飜譯するに當つて、パレルガはケーベル先生校訂のものに據り(Berlin, Verlagvon Moritz Boas 189)、主著の方はレクラム版のグリーゼバツハ本に據つた。意味の解釋に就いては、上揭の英譯書の外に、主著の英譯、The World as Will and Idea. Translated by R. B. Haldane and J. Kemp. vol. III (89)を參照した。これらの英譯書に對する譯者の批評は卷末の附錄にある。

一、譯者は此書を出すに當つて、從來我國で出版されたショーペンハウエルの譯書に、可成り多くの誤譯と曲解とがある事を發見して驚いた。譯者は特に此點に留意して、大過なからん事を期した。此書が多少でも、これまでに誤り傳へられたものを訂正する事が出來たら、譯者の勞は報いられる。但し本書に誤譯があらば、教示の勞を取られんことを、大方の諸君にお願ひして置く。絕對に完全な飜譯は容易に出來るものではないから。

一、原著に在る希臘・拉典・伊太利・佛蘭西等の他國語に就いては、譯者は既存の英獨譯に據り、これなきものはすべて先輩又は同僚諸君の教示を仰いだ。此機會に於て、これらの方々、及び原書或は參考書を貸與又は惠與して下さつた方々に、厚く感謝の意を表する。

一、なほ單行本としての性質上、或は一般に讀まれたいと云ふ目的の上から、又は他の關係上から、若干の個所に於て、少しばかりの省略と或云ひ換へ又は補譯を施した。然しこのために大體が害せられるやうな事は少しもなく、寧ろ却つて理解し易くなつたと思ふ。

一九二九年九月下旬

仙臺に於て

譯編者識

目　次

譯者序……三
ショーペンハウエル小傳……六
婦人論……一九
自ら考ふる事に就いて……三〇
讀書と書籍……四〇
噪音に就いて……四八
自殺論……五一
觀相論……五六
生存空虚の說……六四
狂氣に就いて……七一
性愛の形而上學……七六
天才論……一一〇
詩の美學……一三四
附　錄……一五二

ショーペンハウエル小傳

アルトゥール・ショオペンハウエル（Arthur Schopenhauer）は、千七百八十八年二月二十二日ダンチッヒのハイリゲンシュトラーセ百十七番地に生れた。父は富裕な紳商で、名をハインリッヒ・フローリス（Heinrich Floris）と云ひ、千七百四十八年の生誕で、母はヨハナ・ヘンリテ（Johanna Henritte）と呼び、千七百六十六年の生れであつた。兩人の結婚は千七百八十五年で、當時ハインリッヒは三十八歳、ヨハナは十九歳であつた。

ショーペンハウエル家の祖先は、和蘭人であつたが、アルトゥールの曾祖父の代になつて、ダンチッヒに移つたと傳へられる。アルトゥールの父は慧敏な商才と鞏固な性格とを持つて居たが、其外にまた英佛の文學に關する相應の知識を有し、特にヴォルテールを愛讀した。其政治上の意見は自由民權的共和制的であつて、自由を愛し、獨立を尊んだ。英國の政治と其家庭制度とは彼の欣仰するところで、家具の類まで英國風のものを愛用した。アルトゥールが後年英國に對して持つた好感は、或は既に幼年時代に無意識的にはぐくまれたものであつたかも知れない。且ハインリッヒは世界主義的（コスモポリタンティシュ）の意見を持つて居たので、此長男を世界市民（ヴェルトビュルゲル）たらしむべく教育しようと企てた。アルトゥールと名づけた所以も、此名前が各國を通じて同一であるからであつた。

アルトゥールの母ヨハナは、舊姓をトロジイネル（Trosiener）と呼び、父はダンチッヒの市參事會員であつた。彼女はすぐれた知力を有し、且文學に對する好愛の念を持つて居た。後になつて若干の小說と旅行記とを出して、閨秀作家として世に知られるに至つた位であるから、相當の教養を持つて居た事は解る。アルトゥールの後年の學說に從へば、人間の性格卽ち意志は父から傳はり、知力は母から授かるものである（本書『性愛の形而上學』參照）が、彼自身が、恐らく此學說の最確實な例證であつたであらう。

千七百九十三年、アルトゥールが五歳の時、これまで自由市であつたダンチッヒは、普魯西（プロイセン）に倂合される事となつた。此事件は、自由と獨立と共和とを人間生活の理想とするハインリッヒの堪へ得るところではなかつた。彼は

其家族と家業とを携へてハムブルヒに移つた。この市は以前のダンチッヒと同じく自由市であつたのである。
『私の息子は實世間の書物を讀まなければならぬ』。世界市民として其子を敎育しようとしたハインリッヒは、また自己の職業の好個の後繼者を、アルトゥールに於て見出さうとしたので、此二つの目的から、彼は千七百九十七年(此年アルトゥールの唯一人の妹アデーレが生れた)九歲の少年を携へて巴里に赴き、暫らくハアヴル(Havre)に滯在した後、アルトゥールをそこの知人グレゴアール(Grégoire)の許に託して、自分は單身ハムブルヒに歸つた。アルトゥールはこゝに二年間とゞまつて、此家の同齡の息子アンティームと共に私敎育を受けたが、此時代は彼にとつて極めて愉快な時で、後年になつても此時の思ひ出は、彼をよろこばしたと云はれて居る。
千七百九十九年アルトゥールはハムブルヒに歸來したが、佛國に於ける二年間の敎育は、此國語を異常に習熟せしめたと同時に、母國語をほとんど全く忘却せしめた。彼は其後三年の間ハムブルヒで私敎育を受けたが、此頃彼の兩親、——特に母は文學界の人々と交際して居たので、當時著名の文人は屢彼の家を訪れた。クロップシュトックも此家の饗應を受けた一人だと傳へられる。恐らく此等の事が因となつたのであらうが、此時代から學藝に對する憧憬と、商業生活に對する嫌惡とが、彼のうちに目覺めたのである。彼の父は此傾向を察して、一時はアルトゥールのために僧職を買はうかとも考へたが、費用のためにこれを斷念して豫定の如く自己の事業の後繼者たらしめようと決心した。然し彼は、此目的を貫徹するために、强壓手段を採る事を避けて一策を案出した。即ち彼は二個の提案を出し、アルトゥールをして其一を選ばしめた。それは學術研究の道に上るために、高等學校に入學するか、然らずんば、今兩親が企劃しつゝある大旅行に參加するかであつた。さうすれば彼は舊友アンティームに會ふ事も出來ようし、英國の風物・伊太利の古蹟に接することも出來るであらう。然し此旅行に出れば、學術の硏究は、永久に斷念しなければならないと云ふのであつた。第二の提案は、旅行を好み異鄕の生活に憧れつゝあつた少年の歡迎するところとなつて、ハインリッヒの巧計は忽ち成就したのであつた。
千八百〇三年の春、アルトゥールは兩親に從つて、大旅行の途に上つた。一行は和蘭からカレーに出て、英國に渡り、それから佛蘭西に轉じて、伊太利に出で、墺太利・瑞西等を歷遊して、二年の後ハムブルヒに歸つた。此間

にも兩親はアルトゥールの教育を閑却せず、父は英佛語の學習を、母は日記をつける事を命じた。殊に兩親が英國からスコットランドへ旅行した三月の間は、アルトゥールを倫敦の附近ウィムブルドンのさる牧師の寄宿學校にとゞめて學習させた。此間に彼の英語は頻りに上達したのである。此語學的素養を基礎とした彼の學力は、後年（第二次伯林時代）カントを英譯しようと云ふ自信を彼に得しめたのである。（但し此計畫は實行されなかつた）然し同時に彼は英國の教職者の頑迷不靈なのに驚いた。當時の書翰は此事を示して餘りある。後年彼は英國と英國人とに對して、多大の好感を示したのにも拘らず、否英國人を以て歐洲の諸國民中に於て最もインテリゲント（聰明）な國民だと賞讃したにも拘らず〔本書『噪音に就て』參照〕其宗教方面の事柄に於ては、一切の機會を利用してこれを痛罵することを忘れなかつた。

アルトゥールが父母と共にハムブルヒへ歸來したのは、千八百〇四年の秋であつたが、其後ダンチッヒへ行つて確信式を受け、翌年の初めから、約に從つて商業生活に入り、先づ父の知人の商店に通つて事務の見習をした。然し彼は依然として此業務に興味を持たず、閑を偸んで讀書や考察に耽つた。後年彼自身の云つた通り、恐らく彼は最も不良な店員であつたであらう。

然るに間もなく、ショーペンハウエル家にとつて、最大の不幸事が起つた。彼の父ハインリッヒは、其店をハムブルヒに移した際に、多くの金錢的犧牲を拂はなければならなかつたし、其後の商況も決して好良ではなかつた。此爲めであつたかどうか解らないが、ハインリッヒの性質は著しく激烈になり、行爲にも風變りなところが増して來た。とかくするうちに、千八百〇五年四月某日、彼は自身の穀倉に沿へる運河のなかから死體となつて引き上げられた。過つて落ちたのであつたか、或は自殺したのか原因は一切不明であつたけれど、一般の風評は後者だと認定したのであつた。

寡婦ヨハナは、亡夫の遺産を整理した後、アデーレを伴つてヴァイマール（Weimar）に移つた。これはハインリッヒの死後一年を經た時であつた。當時ヴァイマールには、獨逸文學界の巨星ゲエテを中心として、シュレーゲル兄弟、ヴィーラント、ハインリッヒ・マイエル等の詩人文學者が雲の如く集まつてゐて、眞に一代の偉觀であつた。

少からざる收入を携へて、此文藝の中心地に轉じたヨハナは、間もなく文士詩人達と交を訂して、諸人の好愛するところとなり、文筆に親しみつつ、華やかな生活を送る事が出來た。然るにアルトゥールは約を重んじて、たゞ獨りハムブルヒに止まり、父の遺業を繼續したけれど、商業生活に對する彼の憎惡と嫌忌とは、日を追うて益增進した。惟ふに此時代は、彼の生涯のうちで最も悲しい時であつたらう。當時彼は陰鬱にしてほとんど絕望的な氣分のうちに生活してゐたと傳へられる。彼は屢書を裁して母に送り此業務から退くべき許可を乞うた。此申込は初めは彼女の許すところとならなかつたが、其衷情の切なるを認めて、遂にこれを聽許したので、アルトゥールは父の死後二年にして、初めて囚はれたる生活から解放せられ、新たに學術研究の緒に就くべく、欣然としてヴァイマールに赴いた。

然し學術を研究するためには、彼には素養が缺乏して居た。彼は準備としてまづ古典語を學ばなければならなかつた。そこで彼は、母の友フェルノーの勸告に從つて、千八百〇七年夏七月、ゴータ(Gotha)に赴いて、拉典語を其初步から學習し、兼ねて獨逸語學及び文學を學んだ。時に年十九歲であつた。彼の熱心は、著しく速かに彼の學力を進步せしめ、數ケ月にして今まで後れたものを取り戾したかの觀があつた。然し同年十二月、詩を作つて某教授を嘲つた事に累せられて、居ること僅かに半歲にして、最早ゴータを去らなければならなかつた。

ヴァイマールに歸來した彼は、こゝで古典語の學習を續けたが、母の許(もと)には居なかつた。かねてから意志と感情との疏通を缺ける母子の間は、この時愈緊張して來たからである。華美な生活を好むヨハナと憂鬱にして思索的なアルトゥールとは、其性質上相容れなかつた事は勿論主な原因であつたらうが、母の素行に對しても、息子は大なる疑を懷いて居たのである。彼の『婦人論』(本書の卷頭にあり)を讀む者は、母子の間の不和の原因を、此うちから見出さうと企てる。兎に角彼は專心に勉強したので、二年ならずして、大學に聽講すべき學力を得た。

千八百〇九年九月、彼は母より父の遺產の三分の一を分與され(利子年收約五十磅位)去つてゲッチンゲンに學び、醫科に籍を置いた。彼はこゝに十一年まで居たが、其聽講するところは、自然科學、解剖學、鑛物學、數學、歷史等に亙り、後に至つて、論理、生理及び人種學をも包含した。また閑時には、音樂を樂んで、笛と四絃琴(ギタラ)とを學

んだ。第三學期〔一學期は半年〕には、彼はカント派の學者として有名なシュルツェ(Gottlob Ernst Schulze)の心理學及び形而上學を聽講したが、哲學研究の覺悟を定めたのは此時で、シュルツェは彼に向つて、哲學を專攻するやうに、特にプラトーンとカントとを攻究するやうにと勸告した。彼自身が後年云つたところに從ふと、これは『賢明な』勸告であつて、自分がこれに從つた事を少しも後悔しなかつたのである。十一年の四月には、彼はまたヴァイマールに於て、ヴィーランドに會つた。當時七十八歳の高齢に達して居た此老詩人は、恐らくヨハナの依頼によつてであつたらうが、初めは彼の哲學專攻を中止せしめようとした。其時彼は斷乎としてかう答へた。『人生は困難な問題です。私はこれを考へて一生を送らうと決心しました』。なほ暫らく會話がつゞいた後に、彼の性質を觀破した老詩人は改めて彼に云つた。『君の性質は分りました。哲學をおやりなさい！』後日ヴィーランドはヨハナに向つて、アルトゥールの『偉い人』になる事を豫言したと傳へられる。

千八百十一年の夏の末つかた、彼はベルリン大學に轉じて、自然科學の研究をつゞけ、兼ねてヴォルフの希臘文學、シュライエルマッヘル(Schleiermacher)の『基督教時代の哲學史』及びフィヒテ(Fichte)の『意識の事實と知識學(ヴイセンシヤフツレーレ)』を聽講した。彼はフィヒテに對しては、『先天的の尊敬』を持つて居たが、其講義を聽くに及びて、何の得るところもない事を發見し、從來の尊敬は忽ち『輕蔑と嘲笑』とに變つて仕舞つた。彼はフィヒテの唱ふる『知識學(ウイセンシヤフツレーレ)』を『知識の虚無(ウイセンシヤフツレーレ)』〔學と云ふ字のレーレと虚無と云ふ字のレーレとは綴はちがふけれど音は相通じて居る〕だと嘲り『此學の創始者は、法螺吹で猿か道化者に過ぎないものであつて、其原型たるカントの深遠なる學說をポンチ畫的に誇張し、笑ふべきものにした』と罵つた。シュライエルマッヘルの講義も、彼にとつては『無思想の記録』に過ぎなかつた。かくの如く大學の哲學に失望したる彼は、自然科學と希臘羅馬の作品の研究とに從事し、殊に後者を讀むためには、毎日二時間を割いたが、これは後年になつてもなほ歇めなかつた。

かゝる間に、彼の思想は漸次に圓熟して來た。此時既に『意志と表象としての世界』の思想が彼のうちに發芽し初めたのである。千八百十三年の彼のベルリンに於ける手記には『一つの著作――倫理と形而上學とを合一すべき一つの哲學』が彼の心のうちに生長しつつあることを認め、此二つを『これまで人々が分離したのは、人間を精神

と肉體とに分つ如く間違つた事だ』と書いてある。即ち後年の主著によつて築き上げられた廣大な哲學體系は、『母が自分の體のうちに子供の出來たのを知らないやうに』彼の知らぬうちに、彼の內部に於ていつしか生長しつつあつたのである。

此年、彼はベルリンでドクトルの稱號を得ようと考へたが、ナポレオン軍の來襲が目睫の間に迫つたので、彼は戰禍を避けてドレースデンに走り、つゞいてヴァイマールに歸つた。然しこゝで彼はまた母と衝突し、退いてルドルフシュタットに赴き、此地で彼の處女論文『充足原因の四根に就きて』(Ueber die vierfachen Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde) を綴り、これをイェナ大學に提出して、十月に博士號を得た。此論文は同じ年の末に自費で出版され、ゲエテの注目と同感とを得たのである。

彼がゲエテを知つたのは、これより以前の事であつたが、此年の十一月ヴァイマールに歸つて以來、二人の間には可なり親しい交際が結ばれた。當時のゲエテの日記や書簡のうちには屢ショーペンハウエルの名があらはれて居る。ゲエテが二三年前ニュウトンの說に反對して、公にした自分の色彩論を、此若い哲學者に說明して聞かせたのは此時であつた。彼はゲエテの意見に共鳴を感じて、直ちに研究を此方面に向け、其結果は『視覺と色彩とに就て』(一八一六)となつてあらはれた。――彼自身の告白するところに依ると、彼はゲエテとの交際によつて非常に大きな信ずべからざるほどの利益を得たのであつた。倨然として高く持し、傲岸人に下らなかつた此哲人も、ゲエテに對しては最後まで敬意を持し、いかなる場合にも、彼を尊敬し嘆美する事を忘れなかつた。

ヴァイマールで起つた出來事の中で、彼にとつてもつと意味の深かつたのは、東洋學者フリードリッヒ・マイエルと相知つた事であつた。彼はこの人によつて、初めて印度哲學の要綱を知つた。人も知る如く、ショーペンハウエルの哲學は印度思想の影響を受けた點が少くはないが、後年に於ける此成果は、此時マイエルによつて彼の心のうちに種子を下されたのであつた。印度思想と彼の哲學との關係については、彼自身かう述べて居る。『私は自身の開展のうちで最も良い部分を、まづ直觀世界の印象につゞいて、カントの著述と印度の聖典との印象に、それからまたプラトーンに負うて居る事を自白する』『私の學說の歸着するところは、あらゆる世界觀のうちで最も古いもの即

ち吠咜の世界觀と一致する。然し、私が說くものが旣に吠咜のなかに存在するかのやうに理解してはならぬ』。

此頃になつて、今まで緊張してゐた母子の間の關係は遂に破裂した。彼は千八百十四年の夏、ヴァイマールを去つて、ドレースデンに赴いた。ヨハナは其後二十四年間生存して居たが、二人はこの時以後に面會した事はなかつた。(尤も通信だけはヨハナの晩年になつてから取り交すやうにはなつた。)此破裂に關して、いづれが責を負ふべきかの問題は、こゝでは其儘にして置く。唯當時のヨハナを思ひ起さしめる材料を、アンゼルム・フォイエルバッハの『覺書』の中から取出して見よう。『ショーペンハウエル夫人、富める寡婦、博識ぶる人物、女流作家、多辯・巧妙且つ利發。眞情なし。獨りよがり。稱讚の渴望。いつでも自分に向つて微笑してゐる。云々。』然しアルトゥール自身も圓轉滑脫な人物でなかつた事は言ふまでもない。

ドレースデンに於て出來た最初の述作は、曩に述べた『視覺と色彩とに就いて』(Ueber das Sehen und die Farbe)であつた。これは千八百十六年に出版されたが、其內容はゲエテの色彩論を基礎として、これに科學的研究を加へ、若干の修正を施したものである。然しゲエテは此修正を否として、ショーペンハウエルをも自己の學說の反對論者のうちに加へた。

千八百十七年、彼は遂に筆を執つて、伯林時代から胸中に醱酵しつつあつた彼自身の哲學體系を書き下した。此著述は彼の主著『意志と表象としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung)で總數四卷、外にカントの哲學に對する批評が附けてあつた。世界を以てわれらの表象に外ならずとなす彼の思想、意志を以て萬物の根源と見做し一切の現象はすべて意志の客觀化であると考へる世界觀、並びに人生の苦惱の原因は、無窮に求めて足るを知らざる意慾そのものであるが故に、此苦惱から解脫せんが爲めには、意慾を根源から斷滅しなければならぬと說く厭世觀と解脫論とは、此主著の根本思想をなすものである。

此書の完成したのは、十八年の三月であつたが、彼は其出版を書肆ブロックハウスに託して、九月の末伊太利漫遊の途に上つた。從つて最後の校正は此國でなされた。印刷が豫定より後れた爲に、書物が市場にあらはれたのは、此年の十二月の末であつたが、扉には一八一九と印刷してあつた。一般の受けは、書肆自らが豫期して居たや

り捌いたが、なほ若干は在庫して居る』とあつた。十七年後に著者が書肆に賣れ行きを問合せた時、其返事には『その多數は反古同樣の價で賣うに、愚かつた。然し彼はかゝる不快を償つてなほ餘りある大なる慰籍をゲエテに於て見出した。十九年の三月、ネープルスに於て彼が妹から受取つた書簡に依ると、ゲエテは寄贈された此書を、『大喜びで受取り、直ちに此厚い書物の頁を切り、いきなり讀み初めた』が一時間の後、アデーレの許に書を寄せて、彼が此書の著者に對して『深く感謝して居る事を告げ、且つ此著全體は甚だ結構だと考へる』旨を傳へた。彼はまた『重要な場所を列擧して、』それをアデーレや其他の人々に『讀み聞かせ、そして非常に喜んだ』相であつた。アデーレは更に附加して云つた『私の考へるところに依ると、ゲエテが眞面目にその人の作を讀んだ著述家は、あなた一人だと思ひます、そして私は喜ばしく思ひます』と。

初め彼が伊太利に向つて旅立つた時、ゲエテは當時伊太利に逗留中のバイロンに宛てた紹介狀を彼に與へた。ヴエニスで二人は一緒になつたけれど、彼は此紹介狀を利用しなかつた。彼自身の云ふところに從ふと、バイロンの前にあらはれる勇氣がなかつた爲めだとある。當時伊太利には三人の厭世家が居た。それは『バイロンとレオパルディと私とだが、それでも誰も互に知り合ひにはならなかつた』と彼は書いた。

ショーペンハウエルはヴエニス、フローレンス、ローマを歷遊して、古代の文物の硏究と、古美術品の觀賞とに耽つたが、翌年七月ミランに來た時、妹からの書翰に接して、ショーペンハウエル一家の人々が投資して置いたダンチッヒの或商館が破産した事を知つた。彼は倉皇として伊太利を去つたが、それでも途すがらヴァイマールにゲエテを訪れて、舊交を溫めることを忘却しなかつた。ゲエテは此訪問を以て『相互の敎訓』になつたと日記にかきつけた。

千八百十九年の七月には、彼はハイデルベルヒに居たが、大學に奉職しようと思ひついたので、ハイデルベルヒ、ドレースデン及びベルリンの三大學に求職したが、此要求はベルリン大學の容れるところとなつた。翌年の三月から、私講師（プリヴアトドツエント）として開講することを許された。然し此經驗は失敗に終つた。それは聽衆がなくて、學期を終ることが出來なかつたからである。此直接の原因は、彼の講義時間とヘエゲルの講義時間とが同じ時刻であつたために、

聽衆は全くヘエゲルの吸收するところとなつた事に在る。當時ヘエゲルは普魯西の哲學界の主權を握り、名聲天下に布いて居たから、ショーペンハウエルがこれと駢進し得ざる事は寧ろ當然でなければならぬ。殊に其學說は共にカントを源流としてはゐるが、其思考の過程を全然別にしてゐるから、其歸結も全く別種なものになつた。かゝる異說が一般に認められなかつたのも、また當然でなければならない。――兎に角、彼は講義に全然失敗して、千八百二十二年五月、怏々として伊太利に旅立つた。

之に先立つて、二十一年の八月には、マルケェト事件と云ふのがあつた。聊か滑稽味のある事件であるが、ショーペンハウエルの性質を知るのに都合がよいから、こゝに擧げよう。――當時彼は、ニーデルラーグシュトラーセの四番地アケルと云ふ寡婦の家の二間を借りて居たが或日歸宅した時、彼の部屋の前にある小室〔これは共同の部屋であつた〕の內で、三人の婦人達が談話してゐるのを見出した。ショーペンハウエルは甚しく噪音を嫌忌する性質であつたから、かゝる事のないやうにと、豫め貸主に通知して置いたのであつた。それにも拘らず、今三人の婦人の雜談しつゝあるのを見て、彼は不愉快を感じて退去することを彼等に要求した。其うちの二人は直ちに立ち退いたのだが、他の一人は彼の要求に應じなかつた。彼は再度要求したが、無益であつたので、矢庭に腰を捉へて、彼女を引き摺り出し、其品物をうしろから投げ出した。彼女がすぐにまた殘した品物を取りに入つて來た時、彼は再び――今度は猛烈に且つ罵詈を交へて――室外に押し出した。其はずみに彼女は倒れて絕叫した。此婦人は同宿のもので、カロリーネ・ルイーゼ・マルケェトと稱し、年齡四十七歲、裁縫を職とするものであつた。

翌日彼女は、此一件を事實以上に誇張して、法廷に訴へた。ショーペンハウエルは、罵詈の非行であつた事だけは認めたが、其他の行動は寄宿人としての正當の權利を行使したに過ぎないと主張した。此事件は六ケ月の後、彼に有利な判決が下つたが、原告が控訴したので訴訟は久しきに亙り、彼が伊太利や瑞西を旅行しつゝある間に漸く決定して、ショーペンハウエルは二十タアレルの罰金に處せられた。然し彼の不幸はこれ丈けではやまなかつた。マルケェトは彼の留守中に更に一策を案出して、彼に倒された結果、一腕の自由を失ひ、其他の組織も惡影響を受けた爲めに、仕事をする事が出來なくなつたから、賠償として相當の年金をもらひたいと云ふ事を伯林の法廷に訴

へた。此訴訟にもショーペンハウエルは敗れて、三百タアレルの訴訟費用を負擔し、且つ年々六十タアレルを扶助金として此婦人に贈與すべく命ぜられた。それは千八百二十四年十月のことであつた。

かゝる間に彼は、千八百二十二年から二十三年にかけての冬を、フローレンスで送り、春になつてから南に進んだが、六月にはミュンヘンに歸來した。こゝで彼は疾に罹り、暫らく療養の上、湯治のためガスタインに轉じた。

千八百二十五年五月、彼は伯林に歸來して、マルケェト事件の判決を、彼の有利になるやうに顚覆しようと努力したが無效であつた。翌年五月最後の判決は下されて、彼は矢張り六十タアレルを毎年マルケェトに贈與しなければならなかつた。彼女は、其後二十年も生存したと傳へられる。二十六年の七月から、彼は再び伯林大學で講義を開いたが、此度も、ヘエゲルと同じ時間であつて、前回と同じく失敗に歸した。彼は其著作の到るところに於て、ヘエゲルを攻撃してゐるが〔本書『讀書と書籍』『觀相論』等を見よ〕彼に對する憎惡の一因は、講義の競爭で敗北した事にあるかも知れない。

此第二次伯林滯在の間に、彼は先年の論文『視覺と色彩とに就いて』の拉典譯を公にし、又西班牙人グラーシンの『處世の神託と處世術』を其原語から獨譯したが、これは彼の死後フラウエンシュテートによつて發行された。彼は自己の生活に夥しい不滿を懷きながらも、千八百三十一年まで伯林に居た。此年伯林ではコレラが猖獗を極めたので、恐れて彼はマイン河畔のフランクフルトに移つた。其後しばらくマイハイムに居たが、間もなく〔三六〕フランクフルトへ歸つて來て遂にこゝを永住の地と定めた。惟ふにフランクフルトが嘗てのダンチッヒの如く共和制であつたことも、此選定の一因を成したであらう。かくして彼はもう二度とは伯林の土を踏まなかつた。

ショーペンハウエルが、こゝで第一に書いたものは、『自然界に於ける意志に就いて』(Ueber den Willen in der Natur)であつて、これは一八三五年に成り、翌年公刊されたものであるが、彼の主著にあらはれた意志說を、自然科學のあらゆる方面から證明したものであつた。彼自身はこれを其學說の『焦點』と呼んだ。

千八百三十八年、諾威のドロンハイムの學士會(アカデミー)は、賞を懸けて『人間の意志の自由は、自意識より證明さるゝや否や』と云ふ問題に對する解答を求めたが、彼はこの懸賞に應募して『人間の意志の自由に就いて』(Ueber die

Freiheit des Willens) と云ふ論文を提出し、賞を得て、此學士會の一員となつた。

つゞいて彼はコーペンハーゲンの王立學士會の懸賞問題たる『道德の淵源・根柢は、意識(又は良心)のうちに直接に存在する道德觀念のうちに於て、及この觀念から生ずる其他の道德的根本概念の分解のうちに於て求めらるべきか、或は他の認識根據のうちに於て求めらるべきか』に對して論文を書き『道德の根柢に就いて』(Ueber die Grundlage der Moral) と題し、必ず入選する事を期して提出したが(一八四〇)、豫想に反して丁抹の學士會はこれを落選せしめた。其理由とするところは、提案に對する理解が缺けて居ると云ふ事と、偉い哲學者〔フイヒテヤヘエゲルのこと〕を取扱ふ方法が甚しく無禮だといふ事であつた。此不當な批判は、いたく彼を激昂させた。翌年此二個の論文は、『倫理學の兩根本問題』(Die beiden Grundprobleme der Ethik) と題して出版されたが、彼は後の論文にはわざ〳〵『丁抹學士會落選』と云ふ言葉を添へ、且つ此書の序文に於て、丁抹學士會と其所謂『偉大』なる哲學者とを嘲笑し痛罵した。彼は實際、死に至るまで此學士會が加へた無禮を怒つて居た。

彼の主著『意志と表象としての世界』は依然として賣行が惡かつた。從つて彼が大增補を加へて再版させようとした時も、書肆は非常に思案した後、著者に對する報酬は、決定しないで置くと云ふ條件の下で、漸く承諾したのであるが、第一卷は僅かに五百部、第二卷は七百五十部を印刷したに過ぎなかつた。然し此增補版(一八四四)の賣れ行きは、依然としてはかばかしくなかつた。

千八百四十七年には、博士論文『充足原因の四根に就いて』が大訂正と大增補とを加へられて再版せられ、千八百五十一年には『補說と追加』(Parerga und Paralipomena) が出版された。此書は彼が五六ケ年を費して著述したものであつて、彼の著述中で最も廣く讀まれて居るものであるが、當時はいづれの書肆も、これが出版に指を染むるものなく、彼の最初のそして最も熱心な弟子フラウエンシュテートの多大の盡力によつて、これが出版書肆を伯林で見出すことが出來たけれど、それは著者に對する無報酬を條件とするものであつた。實際ショーペンハウエルは此出版によつて、單に此書を十册だけ書肆から贈與されたにすぎなかつた。

結婚の問題も折々は、彼の念頭に上つたらしく、且つ關係した婦人も少しはあるやうであつたけれど、本當に結

婚しようと云ふ十分の覺悟が彼に生じないうちに、彼はいつしか自分を老獨身者の群れの中に見出したのである。何故に十分の覺悟が出來なかつたかに就いては、小さい色々の原因もあらうが、主因は彼の人生觀のうちに在る。これは本書を讀む事によつて充分に理解されるであらう。

彼の生涯の最後の九年間には、彼は別に新しい著述をなす事なく、今まで公にしたものゝ改版にのみ從事して居た。『自然界に於ける意志に就いて』は、千八百五十四年に其二版を出したが、これも增補せられ、且つ大學の教授連〔哲學科の〕に對する痛罵が附け加へられた。二月の後には『視覺と色彩に就いて』の第三版が出で、次いで千八百五十九年には主著の第三版、千八百六十年に『倫理學の兩根本問題』の二版が出た。

フランクフルトでは、初めは彼は有名な閨秀作家ヨハナ・ショーペンハウエルの息子として知られるに過ぎなかつたが、主著の第二版を出した頃から、漸次に景慕者を得て、其左右には少數ながら熱心な弟子達が集まつた。彼は今や極めて規則的な生活を送り、愛犬を座側の伴侶として、靜かに晚年を暮らして行つた。

千八百六十年の二月、食後の散步の折に、突然心悸動を感じ、其爲にほとんど呼吸する事が出來なかつた。此症狀は漸次に開展して行くので、ドクトル・グヴィンネルは、彼の習慣とする冷水浴を廢し、且つ寢床の中で朝食を採るやうに勸告した。然しショーペンハウエルはこれに從はなかつた。九月十八日の夜、彼はグヴィンネルと談つて伊太利へ今一度行きたいと云ふ希望を述べ、『パレルガ』に重要な增補をしなければならないから、今死ぬのは殘念だと語り、且つ彼の著述が極めて遠隔な土地に於て、暖き歡迎を受けてゐる事をよろこんだ。かやうに熱心でまた溫藉な態度を、グヴィンネルは未だ嘗て此哲人に於て見た事はなかつたと云ふ。越えて三日、ショーペンハウエルはいつもの如く起床して、例の通り冷水浴をし、朝食を採つた。從僕は朝の空氣を入れる爲めに、窓を開いて退いた。暫らくしてグヴィンネルがやつて來た。そして老哲學者が長椅子の隅にもたれて居るのを見出した。その顏にはいつもの通りの表情が浮んで居た。そこには何等の苦悶の痕跡もなかつたのである。彼は自分の希望した通り、何等の苦痛なくして長逝したのであつた。

彼の遺骸は、二十六日エヴァンゲリストの儀式で葬られた。平たい墓石の上には、只 Arthur Schopenhauer と

のみ刻まれて居る。

＊　＊　＊　＊　＊

筆者曰。此小傳を記すにあたつて、筆者が參照したものは、ケーベル先生校訂の『パレルガ』の卷頭にある同先生の Schopenhauers Leben und Kulturhistorische Bedeutung. スコツトライブラリーの Essays of Schopenhauer の卷頭にある Biographical Note 及び W. Wallace : Life and writings of Schopenhauer 其他二三の哲學史である。

婦人論

シルレルの詩『婦人の品位』は熟慮の作であつて、對偶(アンティテーゼ)と對照(コントラスト)とによつて能く人を動かすけれど、これにも勝(まさ)つて婦人を眞に讃美するものは、私の考に依ると、ジュウ〔一七六四—一八四六 佛國の著述家〕の述べた數語である。曰く『婦人がなければ、われらの生活の始めに助けなく、其央(なかば)には喜びなく、其終りには慰めがなからう』と。同じ事をバイロンは其作『サルダナバール』の第一幕第二場で、より感傷的に云ひあらはした。『人間の生命のそもそもの初めは、婦人の乳房から湧き出でざるを得ない。おんみの最初の小さい言葉は、婦人の脣から敎へられ、おんみの最初の涙は、婦人によつて抑へとゞめられた。そしておんみらの最後の吐息は、あまりに屢々一人の婦人の聞いてゐるところで吐き出された。男性の人々は、甞て自らの統率者であつた人の最後の時間に侍する賤しきつとめを忌み避けた時に。』

此二者の言葉は、いづれも婦人の價値に對する正當な見方をあらはして居る。

既に婦人の形の外觀が、婦人の精神的ならびに肉體的の大なる仕事に適せざる事を示して居る。婦人は人生の債務を、行爲することに由らないで、受苦することによつて償却するのである。分娩の苦痛、子供の世話、夫に對する服從——夫に對しては婦人は常に忍耐の強い・快活な伴侶でなければならぬ——などがそれである。最も激烈な悲哀と歡喜と、そして力の强烈な表出とは婦人には授かつてゐない。却つて其生活は、男性のそれよりも本質的にいより幸福であるとか、より不幸であるとか云ふことなしに、より靜かにより目立たず、そしてより穩かに送られなければならない。

われらの最初の小兒期の養育者及び敎育者として、婦人が其役目に適合する所以は、婦人それ自らが子供らしく、愚かで、且つ近視眼的であつて——一言で云ふと、眞の人間たる成人(おとな)〔男性〕と子供との中間の階段に立つものだからで

ある。試みに少女が毎日毎日子供と戯れ、踊り、歌つて暮らす有様を見よ。そして一人の男が、よい心掛を持つてゐたら、此位置に置かれた時、いかなることをなし得るかを想像したまへ。

自然は少女に向つては、戯曲論に所謂クナルエフェクト（花火の如くぱつと見物の視聽を一時的に目ざます效果）を狙つて、數年の間――殘餘の歲月を犧牲にして――充分な美と魅力と豐滿とを與へ、此期間に或男性の空想を把握して、自己の世話を、一生涯の間或何等かの形式で、正直に引受けさせる。男性を動かしてこゝに至らしめるには、然し單なる理性的の熟慮だけでは十分確實な保證をすることが出來ないやうに見える。從つて自然はその創造物の他の一切に於てなす通りに、婦人にも、その生存を確實ならしめるに要する武器と器械とを、必要な期間だけ給與する。即ちこの場合にも、自然は相變らずの節倹的の處置を採るのである。雌蟻が交接の後、もはや餘計になり且つ產卵に對して危險な翅を喪失する如く、婦人も通例、一二回產褥についた後には、其美を失ふものである。これ恐らく同一の理由からであらう。

此故に若い婦人は、心の中では、家庭的の或は其他の實務的の仕事を、第二次的のものと考へ、進んではまた純然たる戯れだと思惟する。彼等が、唯一の眞面目な仕事として考へるのは、愛とか、男性を擒へる事とか及びこれに關聯せる仕事、即ち化粧舞踏の類である。

すべて事物は、それが優秀完全であればあるほど、成熟に達するのが遲々たるものである。男子は二十八歲以前には、其理性と精神能力との成熟に達することは殆どあり得ないが、女子は十八を以て成熟する。然しながらこれに相當して、女子の理性なるものは頗る狭隘なるを免れぬ。此故に婦人は其一生を通じて子供であり、常に最も近いものばかりを見、現在に執着し、事物の外觀を其眞相と考へ、最も重大な事件よりも瑣末な事柄を好むのである。

理性とは則ち、その力によつて、人間が動物の如く單に現在にのみ生きるのではなく、過去をも未來をも通觀し熟慮する所以のものであり、人間の先見・懸念・及び屢々起る憂悶の如きは、皆これによつて生れる。婦人は其理性が薄弱であるから、上述の事が齎す利益と不利とにあづかる事が、男性よりもずつと少い。寧ろ婦人は精神的近眼者であつて、その直覺的理解力は近いところを鋭く見るけれど、其狭隘な視野のうちには、遠距離のものが入つて

來ない。それ故に眼界に存せざる一切のもの、過去又は未來に關するすべての事は、女性の心に愬へること、男性の心に作用するよりも遙かに強い。男子にもあるが、然し婦人に於てずつと屢々發見せらるる——往々にして狂氣に近い——濫費癖は、此理由から生ずるので、彼等は心のうちに惟へらく、金錢を儲けるのは男子の職分であり、これを出來得るなら夫の存命中に、或は少くとも夫の死後に於て蕩盡するのが自分達の役目であると。夫が獲得したものを、家計の爲めに、彼等に渡すといふことそれ自身が、既に彼等の此信念を强める所以となるのである——上述のすべての事は、勿論多くの不利益を齎すけれど、然しまた利益なところもある。即ち婦人はわれらよりもより深く現在に沒頭し、從つて苟も忍び得らるゝものである限り、現在をわれらよりもよりよく享樂すると云ふ長所を持つて居る。婦人は心勞せる夫を休めるために、——必要な場合にはまたこれを慰藉するがために、一種獨特の快活さを所有するものであるが、此快活は上述の長所から生れて來る。

古への日耳曼人の風にならつて、困難なる事件に當つては、婦人にも相談するのは決して非難すべき事ではない。何となれば、婦人の事物理解法は男子のそれとは全然別であつて、殊に彼等が目的への最捷徑路を行くを好み、最も近いところに存する事物を眼中に置く點に於てわれらとは異なるからである。われらは最も近いところに存する事物を、それがわれらの眼前に存するといふことに由つて、大抵は觀過し去るもので、かゝる折には再び手近な、そして簡單な考へ方を得るために、眼前に存在するものまで連れ歸られる必要がある。更にこれには次の事が加はる。婦人はわれらより疑もなくより冷靜であり、從つて事物に就ても、事實存在する以上に多くのものは見ないのである。然るに男子は、其激情が動かされると、やゝもすれば存在するものを擴大し或は想像的のものを附加する傾を有する。

婦人が男子よりもより多く憐憫を有し、從つて不幸な人々に對してより多くの仁愛と同情とを示すけれども、正義・正直・誠實等に於ては男子に劣る事も、同一の源泉から導いて考へ得る。何となれば婦人の理性が弱い結果、現在のもの、具體的のもの、直接に現實的なものが、その力を彼等の上に行使して、此力に對しては抽象的思想や、常在的格言や、堅い決心や、一般に過去未來或は目前に存在せざるもの・遠隔なものに對する顧慮は、ほとんど多

くなすところがないのである。されば彼等は德そのものに對する第一次的の主要な性質を持つてはゐるが、これを展開せしむるに往々必須の器械たる第二次的の性質を缺如する。此點に於ては、婦人は肝臟を持つてはゐるが、膽囊を有せざる生物と比較され得る。――（私の『道德基礎論』第十七節を參照のこと）――此故に婦人の根本的缺陷として「不正」と云ふ事が發見される。此缺陷はまづ理性と熟慮とに於ける上揭の缺乏から生れ出でて、彼等がより弱きものとして、「力」ではなくして「狡計」を賴みとするやうに自然から定められて居る事によつて助長される。彼等が本能的の譎詐を有し、虛僞に對する亡ぼしがたき嗜癖を持つのは此理に因る。蓋し自然は、獅子に爪と齒とを、象と猪とに牙を、牛に角を、烏賊には水を濁らす墨汁を與へたやうに、婦人に對しては、其自己防衛のために「伴はる力」を賦與して以て、これを武裝した。卽ち自然は、男性に體力及び理性として與へたすべての力を、女性にはかゝる天賦での形でもつて授與したのである。虛偽は夫れ故に婦人には生れつきのものであり、從つて賢女と愚婦との區別なく、婦人には殆ど同程度に於て具はつてゐる。されば婦人があらゆる機會に際してこれを行使するのは、上記の動物が攻擊を受けた際に、直ちに其武器を使用すると同じく、極めて自然な事であつて、或程度までは自己の權利を行使するのだと感ずる。此故に全く誠實な・偽りなき婦人はおそらくあり得ないものであらう。だから彼等は他人の虛僞を極めて容易に洞觀する。從つて彼等に對しては伴らうと試みざるが得策である。――上述の根本的缺陷ならびにその添加的缺點から、虛僞・不貞・裏切り・忘恩等が生れて來る。法廷に於ける僞證は、男子よりもより屢々、婦人のなすところである。一體婦人の宣誓なることが認めらるべきものであるや否やが、抑もの問題であらう。――何の不自由もない貴婦人が、商店で萬引する事實は、到るところで折々繰返されるではないか。

若い・强壯な・美しい男性は、人類の繁殖のために自然から呼ばれたもので、種の退化を防ぐことが目的である。これは自然の牢乎たる意志であつて、その表現は婦人の激情である。此法則は、其歲時の古き事と力の强き事とに於て、他の一切の法則を凌駕する。夫故に自己の權利と利益とを此法則に矛盾するものに置く人は殃である。此人

は何を云つても、また何を行つても、最初の重要な機會に當つて、情けなくも滅茶苦茶に破碎されるであらう。何となれば婦人の祕密な・表はれてはゐない・無意識的な・生得的の道德はかう告げるからである。『われらは、個體たるわれらの爲めに、少しばかり圖るところがあるといふことによつて、種族に對する權利を得たやうに誤想する如き人々を欺く權利がある。種族の構成と、從つて其幸福とは、われらから出づる次の時代によつて、われらの手のうちに置かれてあり、われらの世話に委ねられてある。われらは良心的にわれらの義務をやつて行かう。』婦人は然し此最高の原則を、決して抽象的に意識してゐるのではない。單に具體的な事實として意識するだけである。そして此原則に對しては、機會が來た時に、行爲を以て發表する外に、何等の發表方法も持つて居ない。彼等が此行爲をなすに當つては、其良心は、われらの推測するよりも、ずつと多くの平靜を、彼等に與へる。これは蓋し個體に對する義務を損傷することによつて、種族に對する義務が——種族の權利は個體の權利よりずつと大きい——よりよく盡されると云ふ意識が、彼等の心の極く暗い一隅にあるからであらう。(此事については『性愛の形而上學』を參照せよ)

詮ずるところ、婦人はたゞ種族繁殖の爲めのみで生存するものであり、其天分は全く此點に存するのであるから、彼等は個體の爲めよりも種族の爲めにより多く生活し、個體的事件よりも種族に關する事件をより眞面目に考へる。此事はまた婦人の全性質と全行爲とに或輕佻な色彩を與へ、男子の傾向とは全然異なつた傾向を授ける。結婚生活に於て隨分屢々見られる・否・ほとんど通常と云つてもよいほどの不和合は、かゝる點から發生するのである。

男子と男子との間には、無頓着といふ事が生得的に存するけれど、婦人には生れながらにして既に相互の敵意がある。所謂商賣敵(かたき)の憎惡は、男子にあつては其時折の組合的關係にのみ限られて居るが、婦人にあつては、此性全體を包呑して居る。何となれば、彼等はすべて唯一つの商賣しか持たないからである。彼等は、街上で行きあつてすら、互に相見ることゲルフ黨とギベリン黨の如くである。〔前者は伊太利中世紀の皇帝反對黨にして法王を助け、後者は其反對黨で互に甚しく敵視し合つた。——譯者註〕初對面の二人の婦人は、男子がこんな場合になすよりも、明らかに、より多くの矯飾と虛僞とを以て相對する。從つて二人

の婦人間の御世辭は、男子間のそれよりも遙かに滑稽である。また男子は、目下のものに對してすら、矢張り若干の遠慮と人情とを以て話をするけれど、高貴の婦人は、身分の低い、（然し自分の召使ではない）女と話すに當つて、大抵は倨傲にしていやしむべき態度を採るもので、ほとんど見るに忍びざるものがある。これ蓋し婦人にあつては、階級上のすべての區別は、男子に於けるよりも遙かに不定であり、より速かに變化しまたは消失する事から來るのであらう。また男子にあつては幾萬の事項が考量の中に入れられるけれど、彼等にあつては唯一つの事――いかなる男子の心を獲たかといふ事のみが、決定を與ふるものであるからでもあらうし、更にまた彼等の仕事の一面的であるために、男子よりも相互に甚だ近く接して居るので、階級によつてわけたる相互の區別を顯著ならしめようと欲する點からも出て居よう。

身長の低い・肩幅の狹い・臀の大きな・脚の短い連中〔女性のこと〕を『美しい性』〔女性の美稱〕などと命名するのは、男の智力が性慾にくらまされたからこそ出來たので、女性の美全體は實は此性慾のうちに存するのである。これを『美しい性』と呼ぶよりも、『非審美的』な性と名づけた方がずつと正當であらう。音樂に對しても、詩歌に對しても、或はまた造形美術に對しても、彼等は實際何等の感じも受納性も持つて居ない。彼等がこれを有するやうな振りをするなら、それは他人の氣に入らんがための單なる人眞似に過ぎないのである。兎に角上述の事は、婦人が或事物に純然たる客觀的參與をなすことを不可能にする。私の考へに依ると、其理由はかうである。男性は何事に於ても、事物を直接に――或は理解により、或は征服することによつて――支配せんと努力する。然し婦人はいかなる時、いかなる處に於ても、單に間接の支配を、夫を通じてするやうに定められて居る。そして婦人は夫丈けを直接に支配する力を持つ。されば婦人が、一切の事物を唯夫を得る手段としてのみ見る態度は、婦人の天性そのものゝうちに根蔕を持つて居る。婦人が他の或事に關與するのは、實はいつでも見せかけであり、また單なる迂路にすぎない。その終極するところは呈媚であり、模倣である。さればルソオも旣に云つた。『婦人は一般にどの藝術に對しても何等の愛を持つて居ない。また何等の理解もない。そして彼等は少しも天才を持つてゐない』（ダランベルへの書簡）

と。例へば音樂會やオペラや演劇などで、婦人達の注意の方向と方法とを觀ずるがよい。そして最大傑作の最も立派な個所に於ても、其駄辯を繼續する子供らしい無邪氣さを見よ。若し、古代希臘人が婦人を觀劇に加らせなかつたと云ふ事が眞實であるとするなら、彼等は尤も千萬な事をしたのである。かうしたら、劇場で少くとも何か聞えるであらう。現今では『婦女達は敎會の中にて默すべし』といふ箇條に〔哥林多前書、一六ノ三四にあり。――譯者註〕、『婦女達は劇場の中にて默すべし』といふ箇條を加へるか、或は後者を前者にかへて、大文字で以て上幕(あけまく)の上に書きつけるのが適當であらう。――婦人のうちで最もすぐれたものも、美術方面で、眞に偉大且つ純正で、また獨創的なものを制作する事が出來なかつたし、又一般に或永久的價値のあるものを出す事が出來なかつたといふ事實から考へると、われらは婦人から前述以外の事を豫期する譯には行かない。この事實は繪畫に關して最も顯著である。繪畫の技法は男性に適すると同程度で女性に適するものであり、從つて婦人達も熱心に繪畫をやつては見るが、然し彼等は只一つの傑作すら示さないのである。これ實に、婦人には、繪畫の直接に要する『精神の客觀化』が缺けてゐるからである。彼等はいかなる場合でも主觀的に陷つてゐる。此缺陷から、普通の婦人は、繪畫に對する本當の受納性すらないと云ふ事が生れて來る。何となれば、『自然は飛躍をしない』からである。ウアルテ〔ファン・ウアルテ一五二〇――一五九〇、馬德里の醫者で著述家。譯者註〕も三百年前から有名な其著『科學に對する頭腦の試驗』に於て、一切の高等な能力は婦人にはないと斷じた。個々の部分的な除外例は、事實全體を變更する事は出來ない。大局から見ると、婦人は最も徹底的なそして最も治しがたき俗物であり、またいつまでも俗物たる境涯を脫し得ざるものである。それ故に、妻が夫の身分と稱號とを共有すると云ふ極めて不合理な社會組織に於ては、妻は夫の卑しむべき名譽心に不斷の刺戟を與へる。婦人がかう云ふ性質を持つてゐるので、彼等が采配を振つたり、音頭を取つたりすることが、近代社會の腐敗を釀すのである。婦人の社會的の位置をきめるに最もよい標準は、ナポレオン一世が『婦人に階級なし』と言つた言葉である。其他の點に就てシャムフォールはかう云つてゐるが、これも正しい。『婦人はわれら自身の弱點とか痴愚なところとか取引するやうに出來てゐるが、われらの理性と交渉するやうには出來てゐない。彼等と男子との間の同感は表皮的なもので、それは精神や感情や性格には觸れない。』女性は所謂セクスス・セクイオール〔第二等の次續的のセツタスの義〕で、いかなる點に於ても

人後〔男性の後の義〕に立つ・第二次的の性である。夫故に人は婦人の弱點を大目に見てやらなければならないが、これに對して過度に尊敬を拂ふのは滑稽であり、彼等自身の眼中に於て、われらの價値を自ら貶す所以である。自然が人類を二つに分けた時、これを眞二つに等分したのではなかつた。兩極性のものすべてにあつては、積極と消極との區別は、單に質的なばかりでなく、また實に量的なものである。――希臘羅馬の人々及び東方の諸民族は、まさしく斯くの如き見方で、婦人を見たもので、かくして彼等は婦人に適當する地位を、われらより遙に正當に認識した。われらは夫の基督教的・日耳曼的愚蒙の最上の産物たる古代佛蘭西の慇懃と、愚にもつかぬ女人崇敬とを持つた。然しこれは唯、かのベナアレスの神聖な猿を往々にして想起せしむる位に、婦人を横柄に且つ無遠慮にしたに過ぎぬ。此れらの猿は、自己が神聖視され且つ自己に對する殺傷の禁斷されてゐるのを知つて、自己の欲するあらゆることが許されると考へて居る。

西方諸國の婦人、特に所謂『淑女』〔英レディー獨ダーメ〕なるものは、其居るべからざる地位、即ち間違つた地位に居るものである。如何となれば、古へから第二流のセックスと呼ばれた婦人は、決してわれらの尊敬と崇拜との對象たるに適せず、男性よりも高く頭を擡げ、男性と同一の權利を持つに相當しないからである。われらは、此間違つた位置に置かれた結果を十分に見ることが出來る。從つて歐洲に於てもまた人間の第二號たる婦人には、それに相當する地位を指定し、現在の亞細亞全體が笑ふばかりではなく、過去の希臘羅馬も齊しく嗤笑したらうと思はれるかの『淑女』なるものに、終結をつけさせることが願はしい。其結果としては、社會的・公民的並びに政治的の諸關係に於て、計算し得ざるほどの利益が生れて來よう。そして「サラ」族法典の如きは解り切つた贅物として、全く不必要であらう。歐洲の眞の意味の『淑女』なるものは全然生存すべからざる生物である。然し主婦・及び主婦たらんとする少女はなくてはならぬ。後者は從つて倨傲尊大にならぬやうに、而して家族生活と服從とに向くやうに敎育されなければならぬ。歐羅巴に所謂『淑女』なるものが存在するといふ事は、女性中の大多數を占むる低い身分の婦人達を、東洋に於けるより遙かに不幸ならしめる原因である、バイロン卿すら云ふ。『古代の希臘人の間に於ける婦人の狀態を考へて見ると、それは充分に都合よきものであつた。騎士及び封建時代の蠻風の殘物たる現今の狀態は、

人工的でまた不自然である。彼等は家庭に留意しなければならず、また衣食を十分に供給されなければならないけれど、然し社會に混る必要はない。また宗教に於ては充分の教育を受けなければならないが、詩も政治論も讀む必要はない。たゞ敬神と料理とに關する本を讀めばよいのだ。音樂と描畫と舞踏と、折にはまた少しの園藝と耕作とがよい。私はエピルス婦人が、立派な成功を以て道路を修繕するのを見た。これらの仕事が、枯草を作つたり、牛乳を搾ると同樣に、婦人の手でやられてはならぬ理由があらうか？』と。

歐洲の結婚法は婦人を男子と同等の價値あるものと認める。夫故に此法は間違つた前提から出發してゐる。一夫一婦制の歐羅巴にあつては「結婚する」とは、男子が自己の權利を半減して、自己の義務を倍加する意味である。然し本當ならば、法律が婦人に男子と同樣の權利を認容したと同時に、また男子と同樣の理性をも婦人に付與しなければならなかつたのである。法律が婦人に承認する權利と尊敬とが、自然的な割合を越えるほど、實際に此特典にあづかる婦人の數は減じて行く。そしてこれら少數者に與へた特權と、同量のものは、他の多數者の自然的に有する權利から剝奪されるのである。何となれば、一夫一婦制と、それに附隨する結婚法とが、事實の眞に反戻して、婦人を男子と全く等價値なものと認め、これを基礎として婦人達に付與した反自然的に婦人に便利な地位は、聰明にして深慮ある男子をして、かゝる大なる犧牲を供し、かゝる不均等な契約を結ぶ前に〔「現行制度の下の結婚をする前に」の意〕甚だ屢々躊躇逡巡せしむるからである。一夫多妻主義の諸族にあつては、いづれの婦人も扶養されてゐるが、一夫一婦制の民族にあつては、結婚せる婦人の數は少く、扶助者を有せざる婦人が澤山殘つて居る。彼等は上流社會に於ては、無用の老孃として座食し、下層社會にあつては不適當な困難な仕事を課せられるか、さもなければ賣春婦となるのである。後者は、喜びと名譽とを缺く生活を送るのであるが、かゝる世態にあつては、男性を滿足せしむる爲めに必要缺くべからざるものであり、夫故にまた既に夫を持ち、又は夫を持つことを期し得る如き幸運な婦人達を、男子の誘惑に對して保護する特殊の目的を持てる公認された一階級として現はれて來る。倫敦だけでも此種の婦人は、八萬人を算する。これらの人々は、一夫一婦制の爲めに最も恐ろしい不運に陷つた婦人でなくて何であらう。實際

彼等こそ一夫一婦主義の祭壇に供せられた人身御供でなくて何であるか？ こゝに述べられた・かゝる悪い境遇に陷つたすべての婦人達は、虚飾と尊大とを持てる歐洲の『淑女』に對する避け難い對當物である。されば女性を全體として考へれば、一夫多妻主義の方が實際彼等に有利である。他の方面から言つても、其妻が或慢性病に罹つて居るとか、石婦（うまずめ）であるとか、或は段々に彼の妻としては老い過ぎて來た時に、更に第二の妻を迎へてはならぬと云ふ事は理性的には認められぬ。モルモン宗が多くの歸依者を得たのは、反自然的な一夫一婦の撤廢といふ事が多くの共鳴を見出したに因るらしい。――且つ又婦人に不自然な權利を與へたことは、延いてまたこれに不自然な義務を課することとなつた。此義務の背反は婦人を不幸ならしめる。多くの男子に對しては、階級とか財產とかに對する顧慮は――それらに附帶する著大な條件がない限り――結婚を慫慂する資料とはならない。彼等は妻を選擇するのに、妻及び其生むべき子供達の運命を確保する他の條件に依らうとする。さて此條件がいかに正當で合理的でまた事態に適合して居ても、婦人自らが結婚のみによつて與へられる不相當の權利を放擲してこの條件に同意するならば、結婚は市民社會の基底をなすものであるから、此同意のために或程度まで自分自身の名譽を失ひ、悲しむべき生活を送らなければならなくなる。蓋し人間の天性は、他の人々の意見の上に、その意見には全く相應（ふさは）しからぬ重い價値を置く習はしを持つからである。然し婦人が同意しなければ止むを得ずして自己の嫌忌する男子に嫁するか、さもなくば老嬢として枯凋する危險を冒す事になる。これ適婚期間は甚だ短いからである。歐洲の一夫一婦制に就てのかゝる方面に關しては、トマジウス〔一六五五―一七二八獨逸の法律學者〕の該博な『蓄妾論』は、次の事實を教ふるが故に、充分に讀まるべき價値を持つ。この論文に據れば、蓄妾はすべての文明民族の間に於て、またルテルの宗教改革に至るまでのすべての時代に於て許されたる――否或程度までは法律的にすら承認された制度で、いかなる不名譽をも伴隨しては居なかつたが、此制度がかゝる階段から突き落されたのは、單にルテルの宗教改革の爲めであつた。而して此制の撤廢は、僧侶の結婚を是認する爲めの更に一箇の手段として承認された。玆に於て舊教側も、此點に於て後れを取るわけには行かなかつた。

一夫多妻の是非に就て議論する必要は全くない。これは到る處に存在する事實として考へらるべきものであつ

て、問題はたゞ其調整をいかにすべきやである。一體何處に眞の一夫一婦制を實行する人があるか？　われらすべては、少くとも暫くは、――然し大抵は常に、――一夫多妻の生活をしてゐるではないか？　斯くの如く男子は皆多數の婦人を必要とするものだから、多くの女性を世話するのは、男子の自由であり、或は進んで男子の義務であるより、より以上に正當な事はない。かくして婦人は從屬的のものとして其正當なる且つ自然的なる立脚地へ引戻され、歐洲文明と基督教的・日耳曼的愚劣さの怪物たる、滑稽にも尊敬と崇拜とを要求する所謂『淑女』は世界から其姿を消し、只『婦人』のみが存在することとなり、今日の歐羅巴に充滿する不幸な婦人は最早全く其跡を絶つに至るのである。

ヒンドスタンに於ては、いかなる婦人も決して獨立ではない。摩努の法典第五章第百四十八節によつて、いづれの婦人も父或は夫・兄弟又は息子の監督の下に立つて居る。寡婦が夫の屍と共に自焚するのは無論見るに忍びざる事であるが、夫が子供の爲めに働くといふ事で自ら慰めつつ、其全生涯に亙つての撓まざる勤勉によつて獲得した財産を、夫の死後、寡婦が其情夫と共に蕩盡するのも同じく見るに忍びざる事ではないか。『中間が最も幸福である』――原始的の母の慈愛なるものは、動物に於ても人間に於ても、純然として本能的である。從つて子供が肉體的に補助される必要がなくなると共に此愛情は消失する。此時以後に於ては、習慣と理性とに基く母の愛が、原始的のそれに代つて現はれなければならぬ。然しかゝる愛は往々にして出現しない。特に母たる人が其夫を愛さなかつた時に然りである。父の子に對する愛は、これと別種なもので、ずつと耐久的の性質を持つ。これは子供の內部に於て自らの最も深い自我を再認するからで、夫故に形而上的の起源を有する。

地球上の、ほとんどすべての新舊民族――例へばホッテントットに至るまで――に於て、財産は男子の子供にのみ傳はるが、歐羅巴だけは此例に外れて來た。然し貴族は別であつた。――夫が大なるそして永い勤勞と辛苦とによつて辛うじて得た財產が、婦人の手に落ちると、其沒常識のために、僅かの間に蕩盡され又は浪費されるやうな事は、極めて見苦しい事だが、然し屢々起る事柄である。かゝることは、婦人の相續權を制限することによつて豫防されなければならぬ。私の見るところに依ると、婦人は、寡婦と娘とに論なく、土地又は資本を相續することを

しないで、一生涯の間、抵當的に保證された利子のみを相續するのが最良の制度だと思はれるが、然しそれも男性の相續者が皆無なる事を必要とする。財産を取得し得べきものは男子であつて、女子ではない。婦人は從つて財産を絕對的に所有する權利もなく、それを管理する資格もない。婦人は相續せる眞の財産、即ち資本家屋土地などを自由に處分してはならない。いかなる場合にも後見者が必要である。夫故に婦人はいつも自分の子供の後見役となる譯には行かない。婦人の虛榮は、よしそれが男子の虛榮より大きくない場合でも、全く物質的の事物——即ち彼等自らの美と、次いでは浮華・衒耀・虛飾と云つたやうな方面に向つてゐるので、社交界は彼等の最もすきな天地となる。此事はまた——特にまた其理性の貧弱な爲めでもあるが——婦人を『浪費』に傾かせる。だから希臘人は云つた。『大體に於て、婦人は生れながら浪費的である』と。男子の虛榮心は之に反して往々非物質的美質、即ち理解力・博學・勇氣の如き方面に赴くのである。——アリストテーレスは其『政治論』第二卷第九章に於て、スパルタ婦人は遺産及び持參金を所有する權利や其他多大の自由を持つて居たので、其許された範圍は餘りに廣く、このためにスパルタ人にとつての非常な不利が生じたこと、並びにこの事がスパルタの沒落を促進した事に就て詳論して居る。——佛蘭西に於てルイ十三世以來漸次に增大し來つた婦人の勢力は、宮廷と政府とが段々腐敗して來た事に對して責を負ふべきものではなからうか？　此腐敗は第一革命を喚起したもので、此第一革命はまた後のすべての革命を誘致したのであつた。兎に角歐洲の『淑女』に於て其最も鮮明な徵證を見る如き、誤れる婦人の位地は、社會狀態の根本的缺陷であつて、此缺陷は其中心から、すべての部分の上に有害な影響を波及するのである。

婦人が其天性上服從するやうに出來てゐることは、次の事實によつて認められる。充分に獨立不羈な位置に、即ち女性の自然に背反する位置に置かれたるすべての婦人は、間もなく、自己を指揮し、統御する或男子に結びつくもので、これは婦人が支配者を要するからである。此際其婦人が若ければ、支配者は戀人であり、年を取つて居たら、懺悔聽聞の僧侶である。

自ら考ふることに就いて

いかに豐富な圖書館でも、不整頓であるならば、甚だ小さい・然し整理の行屆いた書庫ほどの利益も與へない。同樣に、いかに多量の知識でも、自己の思慮がこれを咀嚼したのでなければ反復熟慮した僅かの知識より、其價値は遙かに乏しい。何となれば、人が自己の知識を完全にわがものとし、且つこれを充分に驅使し得るのは、自己の知れるものを諸方面に於て結合し、或眞理を他の各の眞理と比較することによつて初めて出來る事であるから。又われらが沈思熟考し得るものはたゞわれらの知れる事柄に限られてゐる。故に人は學ばねばならない。然し人の本當に知れるものは、旣に自分の熟考を經たものに限られてゐる。

さて、讀書や學習は、實際自分の欲するがまゝに、これに從事し得るものであるが、本來の意味での「思考」はさうは行かない。それは恰も火が風に煽られ・保たれるやうに、對象に對する興味によつて刺戟され且つ維持されなければならないからである。そして此興味は、純粹に客觀的なこともあれば、單に主觀的な事もあらう。後の場合はわれらの個人に關する事件に際してのみ存在する。前の場合は然し、自然に就て思索する人々にだけ存在するもので、これらの人々にとつては、思考は呼吸と同じく、自然的なことであるが、かやうな人達は稀にしか見當らない。大抵の學者にあつてすら、眞に思考する事は甚だ稀である。

自分で考へることが精神に及ぼす作用と、讀書が精神に及ぼすそれとは相異つたもので、其間の距離は信じ難い程大きい。本來われらの頭腦には各相異があつて、或ものは讀書に傾き、他のものは思考に傾いて居るが、上述の距離は、此本來的の相異を益々擴大する。讀書は、精神が其瞬間に持つて居た方向と氣分とには緣の遠い且つ異種的な思想を、精神に押しつけるものであつて、それは恰も印章が自らの形を封蠟の上に捺印するのと同じである。讀書の際には、精神は何等の衝動をも興趣をも感ぜざるものを考へるやうに、外部的に充分に强制される。――然し自ら考へる場合には、精神は其瞬間に外界或は記憶によつて定められた自己自身の衝動に從ふのである。われらの知覺する外界は、決して讀物のやうに、特定の思想を精神に押しつけることはしない。單に當事者の資性と其時の氣分とに適應せる事を考へるやうな材料と機緣とを與へるだけである。――夫故にあまり多く讀むと、精神の彈

力性がなくなるのは、永く重いもので壓しつけて置くと、發條の彈力が失はれると同一である。されば自由な時間さへあれば、いつでも直ちに書物を手にするのは、自己の思想を持たざる爲めの最も的確な方法である。博識多讀が、大抵の人を其天性以上に愚鈍蒙昧ならしめ、其著述を全く不成功ならしめる理由は、まさしく上述の方法を實行したからである。彼等はポープの云つた通り『いつも、讀まれるためでなく、讀む爲めに』(Dunciad III, 194)〔自分の著は人によまれないで自分は人の書を讀んでばかりゐる義〕居るのである。

學者とは、書物を讀んだ人々のことで、思想家や天才や、世界の啓發者や人類の恩人は直接に世界と云ふ書物を讀んだ人達である。

實際、眞理と生命とを有するのは、自分自身の根本思想だけである。何となれば人が眞に而して全く理解し得るのは、自己の根本思想のみだからである。吾等の讀んだ他人の思想は他人の食物の殘滓であり、知らない客の脱ぎ棄てた衣である。

讀んで知つた他人の思想と、われらの心のうちに浮び來つた自己の思想との關係は、石に殘つた前世界の植物の印象が、春の花咲く植物に對すると同じである。

讀書は單に自己の思索の代用物たるにすぎない。讀書に當つては、人は自分の思想が他人によつて、引縄〔往時幼兒に歩行を敎へるために用ゐし縄〕で導かれる事を許すのである。且つ又多くの書籍の效能は、世にいかに多くの邪路があるかを示し、輕しく書物に誘導されると、いかに甚しく迷ふかを敎へるに止まる。然し彼の守護神によつて導かれるもの、——卽ち自ら・自由に且つ正當に思考する人は、正道を發見すべき磁針儀を持つのである——夫故に人は、自己の思想の泉の停滯した時にのみ讀書するやうにしなければならぬ。思想の流れの停滯することは、實際最良の頭腦に於ても屢々在る事である。之に反して書籍を手にせんがために、自己の思想を逐ひ拂ふのは聖靈に對する罪惡である。此場合かくの如き人は、乾醋植物標本を見るために、或は銅版彫刻の美しい風景を眺める爲めに、自由な自然から逃

遭する輩に酷似する。

往々人は、自分の思索と思想と聯絡とによつて、非常に骨を折り且つ長い時を費して考へ出した或眞理又は見解が、或書を開けば既にちやんと出來てゐるのを容易く見つけ得る類のものである事があるが、さう云ふ場合でも、該眞理又は見解は自分の思索で得たものであるから、其價値は百倍である。何となればかくして初めて、これらのものは、完成的部分として又生ける一員として、われらの思想の全系統のうちに入り來り、これと完全にして且つ堅固な結合をなし、其理由も結論もはつきりと理解され、われらの全思考法の色彩と色調と極印とを有するものとなるからである。それは其必要が感ぜられた瞬間に、丁度折よくやつて來たもので、從つて堅固な位置に座し、二度消え去ることはない。從つてゲエテの詩句、

『おんみがおんみの祖先たちから相續したものを、
おんみは自己のものとせんがために獲得せよ』

と云ふ言葉は、こゝで完全に適用され得る。否むしろこゝで完全に説明されるのである。自ら思索する人は、自分の意見に對する權威(オーソリテイ)ある證例を、後(あと)になつて知るのであるが、其時にはオーソリテイは單に彼の意見と彼自身とを力強くするに役立つばかりである。然し書籍哲學者は、自分の讀み集めた他人の意見を一つのものに纏めて、オーソリテイを出發點とする。かうして出來たものは解らない材料から出來上つた自動人形のやうなもので、前者はこれに比べると自然の生める生きた人間にたぐへられる。如何となれば、外界は、思考する心に胎種を下し、此心は受胎し、姙娠して遂に分娩するに至つたからである。

單に學んで知つた眞理が、われらに附着する有様は、義手・義足・義齒・蠟細工の鼻、或はせいぜい他人の肉で出來た造鼻などが、われらに附着すると同じ程度のもので、これ以上に出るものではない。然し自己の思索に依つて得た眞理は、自然の四肢體軀と同じく、これのみが眞にわれらの所有に係るものである。思索家と學者との區別はまさにこゝに存する。それ故に自ら思索する人の精神的收得物は、正確な光と蔭、整つた調子、色彩の調和を以て、生氣潑剌として浮び出づる美しい繪畫のやうに見える。これに反して單なる學者の精神的獲物は、いろいろな顔料

に充ち又系統的に配列されてはゐるが、調和も機關も意味もない大きな調色板に酷似してゐる。

讀書とは、自己の頭腦の代りに、他人の頭腦を以て考へるといふ意味である。自ら思索することは或脈絡ある總體(ガンツェス)が——たとへ嚴密に完全でなくとも、兎に角或體系(ジステーム)がそこから開展することを企圖するのであるが、これに對しては、絕えざる讀書によつて他人の思想が力強く流れ込むよりも、もつと有害な事はない。何となればこれらの思想は、各別な精神から湧き出て、他の體系(たいけい)に屬し、他の色彩を持つもので、決して自ら思考と知識と識見確信との一總體を作るやうに合流する事はなく、寧ろ頭腦の裡に輕いバビロンの言語の混亂〔バビロン塔の完成を、イエホヴア神が嫌つて、人々の言葉を混亂させて、これを不可能にしたと云ふ故事に因る。たゞしこゝでは單に思想の混亂を意味する〕を引き起し、かゝる思想を過度に詰め込んだ精神から、一切の明瞭な識見を奪ひ、かくしてその精神の秩序をほとんど紊亂させるものだからである。此狀態は、ほとんどすべての學者に於て認められる。彼等が健全な理解と正當な批判と實行上の分別とに於て、學問なき多くの人々に劣る所以は實にこゝに存する。これら學問なき人々は、經驗と會話と零碎な讀書とに依つて、外部から與へられた僅かな知識を、自己の思想の下に服從させ、或はこれを合併するのであるが、學術的思索家も實はこれらの人のなすところを、大きな尺度で行ふにすぎない。これらの人々は、多くの知識を必要とするが故に、多く讀まなければならないが、然し其精神は充分に强いから、これらすべてを克服し同化し、彼等の思想的體系のうちに併合し、かくしてこれを、彼等の愈々擴大して行く大規模な識見の有機的に關聯する全體の下に隷屬せしめるのである。この場合、彼等自身の思想は、オルガンに於ける主調低音(グルンドバス)の如く、いつも一切を支配し、決して他の音調によつて壓伏されることはない。然し單に物識りと云ふべき人の頭腦では、云はゞあらゆる調子の斷屑が入り亂れて、基本調(グルンドトーン)は最早發見されないと云つたやうな有樣になつて居る。

讀書を以て其生涯を送り、其知識を、書籍から汲み取つた人々は、或國土に就ての精確な知識を、多くの旅行記から得た人達に似て居る。かゝる輩は多くの事に就て教示することが出來るけれど、然し實は此國土の狀態についていかなる聯絡ある、明瞭な根本的知識をも所有してゐない。これに反して其生涯を思索で送つた人々は、身みづから其國土に居た人達と同じで、彼等だけが、話頭に上つてゐる事柄の眞相を知り、其事物の總體的關係を知り、

そして眞にこれらの事物に精通してゐるからである。

普通の書籍哲學者が、自ら思考する人々に對する關係は、歴史研究者が、事實の目撃者に對すると同じで、後者はいつも事物についての自己の直接な理解から話すのである。夫故に自ら考へる人々は、根柢に於ては相一致するものであつて、その相違は、單に立脚地の相違から生ずる。然し此の立脚地が何等の變化をも、事件そのものに與へないとすれば、彼等すべては同一の事を云ふ。何となれば彼等は、彼等が客觀的に把握した事のみを云ふからである。私は私自身、說の餘りに奇論的なのを氣にして躊躇ひつゝ公衆に語つた議論が、後になつて古來の偉人の書籍のうちで見つかつて、其ためによろこばしい驚愕を經驗したことが屢々ある。――書籍哲學者は、これに反して甲が何を云ひ、乙が何を考へ、そして丙が何を抗論したかを語る。これを彼等は比較し・考量し・批評し、而して事物の眞理に到達しようと努める。此點に於ては彼は批評的の歴史著述家に似て居る。かゝる人は、例へばライプニッツが或時代に暫くの間スピノザ派であつたか否かを研究するであらう。この事の甚だ明瞭な例證を、好事家達に供給するものは、ヘルバルトの『道德及び自然法の解剖的說明』並びに『自由に就ての書簡』である。――かくの如き人々が自己に課する勞の多大なる事に就ては、誰しも喫驚するであらう。何となれば、かやうな人達が、只事件そのものだけを眼中に置くならば、僅かの思索で、すぐに目的に達するやうに見えるから。然しこゝには少しの故障がある。一體坐つて讀書するのは、いつでも出來ることであるが、思索する方はさう行かない。思想と人間とは同じやうなもので、自分の勝手な時に、いつでも人々を呼び寄せようとしても、出來る事ではない。彼等のやつて來るのを待つ外はない。或事についての思索は、外的機緣が內的の氣分や緊張と、工合よく・調和的に適合することによつて、自然に來なければならぬ。然しこれこそ、決して彼等のもとには來ることなきものである。此說明は、われわれが自分の利害得失に關する事を考へる場合にすら發見される。即ちかう云ふ個人的の利害に關する件で、或決定をしなければならぬとすると、われらは任意に選んだ時間に於て、此事件を考へる爲に靜坐し、その理由や原因を熟考し、その後に決定するやうなことは出來ない。何となれば、かゝる場合には當該事件に就てのわれらの

考察は、安定して居ないで、他の事物に移り行くからである。加之此事には、往々にして事件其ものに對する嫌惡も、あづかつて一因を構成する。かゝる場合には、われらは無理強ひに考へようとしてはならぬ。思考しようとする氣分が自ら來るのを待たなければならない。此氣分は屢々唐突に且つ繰返へしてやつて來るものである。いろいろの時間に於ける色々な情調は、事件に對して全く別な見方を授ける。この徐々たる成行きは、『決心の成熟』と云ふ言葉のもとに理解されるものである。何となれば思考課程は分割されなければならず、之れによつて以前に看過した多くの事が、われらの眼前にあらはれ來り、且つ事物はより明瞭に解つて來ると、大抵はずつと耐へ易いやうに思はれるが故に、當初の嫌忌は消失するからである。――理論的方面の事も同樣で、矢張り良好な時間の來るのを待つて居なければならぬ。且ついかにすぐれた頭腦でも、すべての時間に於て思索に適するものではない。夫れ故に思索以外の時間を讀書に利用するのはよい事である。讀書とは既に前に述べた通り、自己の思考の代用物であり、且つわれらの方法とは異つた或方法に於てゞはあるが、他人がわれらの代りに考へて吳れるから、精神に材料を給與するものである。讀書の性質が既にかうだから、人はあまりに多く讀んではならない。さもないと精神は代用物に慣れ、其ために事物そのものを忘れ、既に踏み拓かれた道路を行く習慣が出來て、他人の思索の徑路を辿る爲めに、自己の思考の道を行く事を忘却するやうになる。少くとも人は讀書の爲めには、其眼を全く現實の世界から轉じなければならない。然し思考すべき機緣と氣分とは、書を讀むよりも現實世界を見る事に依つて、遙かに度數多く與へられる。何となれば其原始性と力とを有する眼前實在の事物は、思考する精神の自然的對象であつて、此精神を最もたやすく動かし得るものであるから。

かう觀察して來れば、自ら思索した人と書物哲學者とは、既に其演述に於て容易く認識する事が出來るのは、少しも怪しむに足りないのである。卽ち前者は眞摯で、直接的原始的であつて、すべての思想と表出とが獨自的だと云ふ特徵を有し、後者はこれに反して一切が他人の手から來たものであつて、傳承的概念であり・掻き集めた屑物であり、押された印形を更に押し寫したやうに、力もなければ鈍くもある。そして其文體は傳承的な常套的な辭句や、流行語などから成つてゐて、その狀、恰も自國で貨幣を鑄造しないから、他國の貨幣を通貨とする國に似てゐる。

單なる經驗は、讀書の如く、思索の代りをする事は出來ない。純粹の經驗が思索に對する關係は、食物が消化及び同化に對すると同じである。若し前者にして、自分だけがその發見によつて、人智を進めたのであると誇るならば、それは口が、身體の存續は自分の仕事だと誇らうとするやうなものである。

凡べての眞に能力ある頭腦の作物は、確實とそれから生ずる明晰と云ふ性質によつて他のものと峻別される。蓋しかゝる頭腦はいつも、自分が云ひあらはさうと欲する事を、確實明晰に知つてゐたからである。——散文を以てゞも、詩を以てゞも、或は音樂を以てゞも。——他の人々の作には此確實と明晰とが缺けて居る。此點によつてすぐに作者の頭腦の能不能が認識される。

第一流の精神の特徴は、彼等の一切の判斷が直接な事にある。彼等が生み出すものは、凡て彼等の自己の思索の結果であつて、其發表によつて、どんな場合にも、第一流から出たものである事が認められる。從つて彼等は精神的國土に於て、諸侯の如く帝國に直屬し、其他のすべての他の人々は陪臣の位置に立つものである。此事は何等獨自の特色をも示さゞる彼等の文體によつて認知される。

眞に自ら思索する人は、夫故に次の點に於て一個の君主に等しい。彼は直屬で自己の上に何人をも認めない。彼の判斷は君主の斷定の如く、彼自身の完全權力から生じ、彼自身から出て來る。何となれば君主が他からの命令を受けないやうに、彼もまた他に權威を認めないで、彼自身が是認したものにのみ權威を與へるからである。——これに反して流行せる諸種の意見や權威や偏見に囚はれたる頭腦の平民は、法律と命令とに默從する人民に似てゐる。

論爭せられつゝある事件を、權威ある言葉を引用することに依つて、決定しようと熱中し且つ急ぐ人々は、乏しい自己の理解と見識との代りに、他人のそれを戰場に引出し得ると、（大した應援を得たやうに）甚しく悦ぶものである。かう云ふ人々の數は夥しい。何となれば、セネカの云ふ通り『各人は批判するよりむしろ信じようとする』からである。彼等が論爭するに當つて、共に選んで用ゐる武器は權威ある言であつて、彼等は此武器を以て互に襲

ひかゝる。だから論爭に陷りでもしたら、理由を述べたり論據を擧げたりして自ら禦ぐのはつまらない事である。自ら考へたり、批判したりする力のなくなつた彼等は、かう云ふ武器に對して、不死身であるからで、彼等は相手の尊敬心に愬ふる論據として、彼等が權威とする（偉人などの）言葉を振りかざして對抗し、そして勝利を叫ぶであらう。

現實の世界に於ては、それがいかに美しく、幸福でまた愉快なところだと證明されても、われらは常にたゞ重力の影響の下に動くにすぎない。そしてわれらはいつでもそれに打克つて行かねばならぬ。然るに思想の世界に於ては、われらは肉體なき精神であつて、重力の法則もなければ、困窮に苦しめられることもない。だから美しい豐饒な心が、仕合せな瞬間に、自己のうちに見出すほどの幸福は世のなかにない。

思想が眼前にあるのは、戀人が目前に居るのと同じで、われらは此思想を決して忘れることなく、此戀人は決してわれらに對して冷かになることはないと思ふ。然しそれらが眼前から去り、心のうちから消えた時にはどうであらう！　最も美しい思想すらも、若しそれが書き下されなければ、とり返へしのつかないやうに忘却される危險があり、戀人とても、若しわれらに配せられなければ、われらから引き離される危險がある。

世には、その方面を考へてゐる人にとつては、若干の價値を有する思想が澤山ある。然し此思想のうちで、反跳的又は反射的の作用によつて働く力――卽ち此思想が書き下された後、讀者の同感を起す力を持つものはほんの僅かしかない。

然し此場合、眞の價値を有するものは、人が初めは自分の爲めにのみ考へた思想である。一體思索家はこれを二種に分つことが出來る。一は第一に自分の爲めに考へる人で、他はまづ他人の爲めに思考する人々である。前者は、

目に考へるからである。實際また彼等の生存の快樂と幸福とは思索する事にある。これに對して第二の人々は詭辯派とも云ふべきで、他人から思索家だと見られようと欲し、其幸福を自らのうちではなくて、他人から得ようと希望してゐるものゝうちに置く。こゝに彼等の熱心がある。或る人が此二つのクラスのうち、いづれに屬するかは、その人のやり方全體ですぐ解る。リヒテンベルヒは第一の種類のものゝ標本であり、ヘルデルは明かに第二の種類に屬する。

生存の問題が――此曖昧な・苦しみの多い・須臾な・夢の如き生存そのものゝ問題が、いかにわれらに重大でまた切實であるかといふ事を考へるならば――人が此問題に氣が着くや否や他のすべての問題と目的とは、これによつて蔽ひかくされる位に重大切實である事を考へるならば――そして僅少の稀有な人々は除外例として、すべての人人が此問題を明瞭に意識せず、否實際これを感悟したやうな樣子は少しもなく、此問題よりも寧ろ他のすべての事件に頓着して、只今日と彼等の將來の僅かな近い部分しか考へないで暮して行き、生存の問題は、或は明白にこれを避け、或はこれに關して、好んで、俗間哲學の一體系を取り來つて滿足するやうな事を考へると、――人間は思考する生物だと云ふ言葉も、甚だ廣い意味で解釋さるべきものであるといふ意見を持つやうになる。而して爾後は無思想とか、愚昧とか云ふことのどんな有樣にも特に驚かないやうになり、寧ろ普通人の知力的視野は動物の視野よりも――動物は將來と過去とを意識せず、其全存在は云はゞ只現在のみである――無論廣いけれど、然し一般に人が考へるほど、そんなに廣濶なものではないことを知るであらう。

會話に於てもまた、大抵の人の考へは、丁度刻藁のやうに、短く切られたもので、從つていかなる長い糸をも、これから紡ぎ出すことが出來ないのは上述の事實に相應する。

若し此世界が、本當に思考する人達ばかりで滿されてゐたら、あらゆる種類の噪音が、かくも無制限にゆるされてゐることは不可能であらう。――然るに最も驚くべき最も無目的な噪音すら無制限にゆるされてゐるではないか

（『喉音に就て』を見よ）。――また自然が人間を思考するやうに定めたのなら、自然はこれに耳を與へなかつたであらう。或は少くともわれらの耳に、蝙蝠の如く、空氣の通過しない覆皮を附けたであらう（私は實際此點で蝙蝠を羨むものである）。然し人間は、他の動物と同じく憫むべき生物にすぎない。其力は生存を維持するに足るだけにしか算定されてゐない。それ故に人間は、いつも開いて居て、夜も晝もまた諮詢されないでも、迫害者の接近を報告して吳れる耳を必要とするのである。

讀書と書籍

無識は、それが富に隨伴して見出さるるとき、初めて其人の價値を落すものである。貧者は自己の貧困によつて束縛される。彼の仕事は、彼の知識の位置を占め、彼の思想を使役する。これに反して無識の富者が、單に逸樂を逐つて生活し、獸類と選ぶところなきは、われらが日に日に目撃する通りである。その上になほ、彼等は自己に最大の價値を與ふる所以のものに對して、富と時とを用ゐなかつたと云ふ非難が加へられる。

われらが讀んで居る時には、他の人がわれらの代りに考へる。われらは單にこの人の心的過程を繰り返すに過ぎない。それは丁度書き方を習ふ際に、生徒が其の筆を以て、敎師が鉛筆でつけた線條を辿つて行くと同じである。從つて讀書に當つては、思考作業の大部分がわれらから取り除かれる。さればわれらは自らなす思考作業から讀書に移る時、負擔の輕減されたことを明かに感得する。然し本來的に云ふと、讀書してゐる間は、われらの頭腦は、われら自身の活動場でない。それは他人の思想の鬪場である。されば甚だ多く讀み、殆ど終日をこれに費して、只合間合間に思考のない閑暇を得てそれで休養をする人は、自ら考へる能力を漸次に喪失するものであつて、それは丁度、常に騎馬する人が、終には步行そのものを忘却すると同じである。かゝる事は然しながら、甚だ多くの學者達に於て見られる事實で、彼等は讀書によつて自ら愚昧にしたのである。絶えざる讀書、いかなる自由な瞬間に於ても直ちにまた初められる讀書は、絶えざる手工よりもより甚しく精神を不具ならしめる。何となれば手工作業に

當つては、人はなほ自己の思考に耽ることが出來るからである。發條(はね)が他の物體の壓(あつ)を絶えず受けて居ると、遂には其彈力を失ふと同じく、精神も亦他人の思想の壓を絶えず受けて居ると、遂には其彈力を失ふと同じく、精神も亦他人の思想の壓を不斷に受けると、その彈力を喪失する。あまり多くの榮養物によつて胃が損はれ、從つて身體全部が害を蒙ると同樣に、餘り多くの精神的食物によつて、精神は過度に滿され且つ窒息せしめられる。何となれば多く讀めば讀むほど、讀まれたものは愈々少き痕跡を、讀者の心に貽すからであつて、心はかくして、その上に幾度も幾度も重ねて書かれた石板のやうになる。それは沈思考察の境地に達することがない。しかしながら人は沈思し考察する事によつてのみ、讀んだものを自家藥籠中のものとなし得るのである。絶えず讀書して、後(あと)になつてから考察する事がなければ、讀んだ材料は根を生ぜず、大抵は消失する。總じて精神的榮養物は、肉體的のそれと同樣で、攝取したものの漸く五十分の一位の部分が同化せられ、殘餘は蒸發・呼吸・其他の作用によつて消散する。

上述のすべての事に加ふるに、なほ次の一事がある。紙上に書かれた思想は、砂上に印した徒歩者の足跡に過ぎないもので、人はそれによつて徒歩者の取つた道を知ることは出來るけれど、徒歩者が途すがら目睹したものの何であるかを知る爲めには、人は自己の眼を使用しなければならぬ。

著述家としての諸特質、例へば人を說服する力、文辭の絢爛、比較の才能、表出の大膽・辛辣・簡潔(キユルツエ)・優雅或は輕快、更にまた機智或は驚くべき對照を示す力、簡明(ラコニスムス)、素朴(ナイヴ)の如きものを、われらは單に、これらの性質を所有する作家の著述を讀む事によつてのみ獲得する譯には行かない。だが然し、われらが如上の性質を既に天賦として、即ち潜能的(ポテンチイヤ)に所有するならば、讀書に依つて、これらの諸性質をわれらのうちに喚び起し、これを意識に齎し、これを以ていかなる事がなし得べきかを知り、われらの傾向を强め、また實にこれを使用せんとする勇氣を奮ひ起すことが出來、これを實際に適用した時の效果を、いくつかの例證に據つて判定し、かくして正當な用法を習得することが出來るのである。これらのすべての事が達成されて後初めて、われらは上述の諸性質を、本當に自己の所有とするのである。われらは斯くしていかに自己の天賦を使用すべきかを敎へられるのであるから、かゝる過程のみが、

讀書より著作への修養の唯一の道である。然し天賦の存在が此場合いつでも前提たることは云ふまでもない。天賦なければ人は讀書によつて、死せる冷たい習癖を學び、淺薄な模倣者となるより外に行きどころはない。

地層が過去の時代の生物を順序正しく保存して居るやうに、圖書館の書棚は順序正しく過去の迷妄と其解說とを保管してゐる。これらのものは前者と同じく、彼等の時代に於ては生氣に横溢して、著しく世を騷がしたものであつたが、今や枯死し化石して存在し、單に文學的古生物學者によつて觀察されるばかりである。

ヘロドート〔希臘の史家〕の云ふところに依ると、クセルクセス〔波斯王〕は自己の無數の軍を見た時、これらの人々のうち只の一人でも百年後には生き殘つて居ない事を考へて涕泣した相である。書籍市の厚い目錄を見た時、これらの書籍のうち只の一册でも、旣に十年後には生き殘つて居ないであらうと考へる時、泣くを欲せざる人があらうか。

文學に於ても人生と同じく、いづれに向つても直ちに人類の度しがたい賤民に遭遇する。彼等は隨處に數限りなく生存してゐて、すべてを滿し、すべてのものを汚す事恰も夏の蠅の如くである。小麥から滋養を奪つてこれを枯死せしめる文學的惡草たる惡書の數も、同樣に限りなく多い。これらは單に金錢を得んが爲に、或は地位を獲得せんが爲めに書かれたものであるのに、當然良書と其高貴な目的とに屬すべき時と金とを世人から剝ぎ取るのである。さればこれは單に無益である計りではなく、却つて積極的に有害である。われらの近代文學全體のうち十中の九までは、世人の衣囊から若干の金錢を欺き取るより以外に何等の目的も持たず、此目的のために、著者・發行者及び批評家は堅く黨を結んで居る。

文士・賣文者流及び濫作家達は、時代の良趣味と眞修養とに逆つて、高雅な社會を誘導し、彼等が調子を揃へて一齊に同じものを、卽ち最新の作を、彼等の社會に於ける會話の材料の爲めに讀むべく巧みに敎へ込んだのであつた。これは狡猾でまた惡性的ではあるが、馬鹿にならぬ詭計である。此目的に役立つのは、嘗ては有名であつた諸家の

筆に成る惡小説及び類似の作品で、例へば以前のスピンドラア（獨逸の小説家・一五七九—一六八八）バルヴァア（リツトン卿のこと）及びエージェン・シュウ（佛の小説家一八〇四—一八五七）の作の如きものである。然し、單に金錢のために書き、從つていつでも無數に存在する・極めて凡庸な頭腦の生むだ新作を常に讀むやうに、そしてその代りにあらゆる時代と國土との稀有優秀な大家の傑作を、たゞ名前だけで知るやうな義務を負はせられる讀書界の人々の運命よりも、もつと憫むべきものが世にあらうか。特に日刊の文學新聞なるものは、美を愛好する人々から、その眞の修養のために、此方面に於ける純正なる作物に捧げらるべき時間を奪ひ去つて、平凡な頭腦の常套な愚作に與へしめるために、狡猾に考案された方法にすぎないのである。

されば、われらの讀書といふ事に關しては、讀書せざる術が最も重要である。此術はいかなる時に於ても、世人の大多數が恰もその時持て囃してゐる作物を、其ために直ちに手に取るやうなことをしないところに存する。例へば丁度その時、喧しい世評に上り、或は更に其最初の而して最後の年（二年とは生命が續かぬ意味）に於て數版に達するやうな政治上又は宗教上の小册子・小説・詩等を直ちに手に取らざる事に在る。かゝる時には、愚者のために書く人は、いつでも多數の讀者を見出すものなることを考へ、いつも切り詰められた讀書時間を、專ら偉大なる思想家の作に——既に世に定評ある・すべての時代と民族とが有する偉大にして嶄然他を拔ける思想家の作に用ゐよ。かゝる偉人の作のみが、眞にわれらを教養するものである。

惡書はこれを讀まなくとも、讀まないことの非難があるべき理由なく、良書はいくら度々讀んでも、讀み過ぎたと咎められる譯はない。惡書は知的の毒藥であつて、精神を破毀する。——世人はあらゆる時代の最良のものを讀む代りに、常にたゞ新らしいものを讀むが故に、著述家は流行的思想の狹い範圍内に止まり、時代は自己の糞土のうちに愈々深く沈むのである。

いかなる時代にも、文學には二種あつて、兩者は可なり疎遠な關係を以て相並んで行く。眞の文學と、單に其外觀を有するものとがそれである。前者は久遠の文學に生長するものであり、學術或は詩のために生活する人々のあ

づかるところで、自己の道を眞摯靜肅に、しかしながら極めて緩漫に歩んで行く。此方面では歐洲に於て一世紀のうちに、僅かに十册出るか出ないかの寡産であるが、然し永遠の生命を持つてゐる。さりながら學術や詩などを、衣食の資として生きて居る人々の文學は、關與者の騷擾と喚聲との間を疾驅して驀進する。そして年毎に數千の作を市場に出す。然し數年後には次の如き質問が起る。『どこにそれらの本があるか？　どこに彼等の夙く而して高かつた名聲があるか？』と。さればわれらは後者を流轉の文學、前者を常住の文學と名づけて差支へない。

世界史に於て、半世紀なるものはいつでも注目に價する期間である。何となれば、歷史を形作る材料はいつでも流れ去りつゝあると共に、また實に或事件が常に起りつつあるからである。これに反して文學史に於ては、此年數は屢々全く打算に入らない。何となれば此間に格別何事も起らず、いくつかの拙劣な試みは、文學史そのものに何の關係も持たないからである。かくして人は、五十年前に居たと同一の場所に居るのである。

此事を明かにするが爲めに、人類に於ける知識の進展を、惑星の軌道の形で想像して見よう。そして知識が或顯著な進展をなした後で、間もなく陷る迷路を、プトレメオス（紀元二世紀のアレキサンドリアの有名な天文學者）の周轉圓であらはして見よう。惑星は周轉圓の各を通過した後に、出發前に居た舊位置に復歸する。此惑星の軌道の上で眞に人類を導き進める偉大なる人々は、然し決して反覆して起る周轉圓に入ることはない。後代の名聲なるものは、多くは當代の喝采を犧牲にする事によつて得られる理由、及び其反對の事實の理由も、上述の事から說明が出來る。かかる周轉圓の一例は其最後にヘエゲルの漫畫的哲學を有するフィヒテやシェーリングの哲學である。此周轉圓は抑カントによつて描かれた圏線の終點から出發したもので、私は後に出でゝこゝを起點として、更に正統の前進を續けしめたのである。其間に然しながら前述の・及び他の二三の似而非哲學者は、彼等の周轉圓を通過し、今や遂に其運動が完成されたので、彼等と共に走つた人々は、今に至つて元の出發點に歸着せることを認めるのである。

事物のかゝる成行と關聯することであるが、われらは科學的・文學的・並びに藝術的の時代精神が、約三十年目每に破産の宣告を受けるのを見る。蓋し此等の年月のうちには、新たに生じた迷誤が、いつも自己の背理の重さの下に倒れざるを得ないやうな程度に上つて行くとともに、この迷誤に對する反對も漸次に强烈になるからである。斯

くして局面は全く轉換する。然しまた、反對の方向に於ける或迷妄が後續することも屢々ある。周期的に復歸する事象の道程を示すことは、思ふに文學史の正當にしてまた實用的な題目であらう。然しそれについては文學史そのものはほとんど考へない。其上、この期間は比較的に短いから、遠い時代からその實際的事實を蒐集することは困難である。さればわれら自身の時代に於て此方面についての實例を觀察するのが一番便宜である。今若し其例を實際科學から採らうとするなら、まづヴエルネル〔一七五〇―一八一七 獨逸の鑛物地質學者〕の岩石水成論的地質學を擧げることが出來やう。然し私は上に掲げた・われらに緣の近い例證にとゞまらう。獨逸哲學に於ては、光輝あるカントの時代の直後に、これと異つた時代が來た。こゝでは人を確信せしめる代りに、あつと感じさせ、深遠明晰である代りに、華美で誇張的で、特にまた難解であることが、加之、眞理を索むる代りに奸策を廻らすことが努められた。かゝれば、哲學は一歩も進むことが出來なかつた。遂に此派全體と其方法とは破產した。何となれば、ヘエゲル及び其一派にあつては、一方には、無稽な事を案出する大膽さと、他方に於ては、無良心的に自ら推讃することが、彼等の敬服すべき〔反語〕行爲全體の明白な目的と共に、終には恐ろしく膨大したので、すべての人達は其大風呂敷に對して眼を開くやうになり、次いで或露顯の結果、上流社會からの保證が撤廢されることとなつて、すべての人の口もまたこれに對して開かれた。ヘエゲル一派は、今まで存在した似而非哲學中でも最も憫然なものであるが、此ためにヘエゲル派の起源をなしたフィヒテやシェーリングまで迷惑を受けて、不信用の谷底へ引きずり込まれた。これによつて考へても、カント直後の時代、即ち十九世紀の上半に於ける獨逸哲學の全稱的不完全は明白な事である。それにも拘らず、われらは他國人に對して――特に英國の或著述家が惡意あるアイロニイで、獨逸國民を思索的民族だと呼んで以來――自ら獨逸人の哲學的天賦を誇つて居るのである！

既にあげられた周轉圓の一般的理論に對して、更に其例證を藝術史から得ようと欲する人は、彫刻界に於て前世紀に、特に佛國で發達し繁榮したベルニイニ〔伊太利の十七世紀の建築家にして畫家・彫刻家を兼ねた〕派を觀察するだけでよい。此派は古代の美の代りに、凡庸な自然を、古代の簡朴と優雅の代りに、佛國のメヌエット〔一種のゆるやかな舞踏〕の趣をあらはしたものであつたが、ヴヰンケルマンの提唱の下に、古代派への復歸が初まつた時、此派は遂に破產して仕舞つた。――更に此世

紀の初めの二十五年間に於ける繪畫史は、別に一箇の例を供給する。當時は藝術を以て、中世期的の信仰心の單なる手段或は器械と考へ、從つて宗教的の主題のみが、藝術の唯一の題材として選ばれたのであつた。然し今やこれを取扱ふ畫家には、中世期的の信仰の本當の眞面目はなくなつて居るが、たゞ上述の妄想の結果として漫然とフランチェスコ・フランチア〔本名はフランチェスコ・ライボリイニ、伊太利ボロニヤの畫家。一四五〇――一五一七〕ピエートロ・ベルゲイー〔本名ピエートロ・ヴアヌチイ。一四四六――一五二四、伊太利の畫家。ラフアニルの師〕アンヂェロ・ダ・フイエーソレ〔有名なるフラ・アンジエリコのこと。一三八七――一四五四〕の如き人々を模範とし、またこれらの人々より後に出た眞に偉大な人達よりも、彼等を却つてより高く尊崇したのである。ゲエテは此誤想に關して、且つは詩に於ても同じやうな努力が當時行はれて居たので、其譬喩（パラーベル）『僧戯』を書いたのである。上記の一派も其後また、出來心に基くものだと認められて破産した。これに續いて來たものは、自然への復歸の運動で、これは風俗畫や實生活のあらゆる種類の描寫にあらはれた。――但し平凡常套の域に迷ひ込むことは折々あるけれど。

上に述べた人間の進歩の徑路に相應して、文學史も其大部分は、畸形兒の陳列室のカタローグに過ぎないものである。これらの畸形兒を最も長く保存して行くアルコールは、此場合には(幀裝に用ゐられた)豚皮である。正しい形を具備して生れたものを、こんなところで捜す必要はない。それらは生存してゐる。世界の到るところで、われらは生ける彼等に遭遇する。彼等は不死のものとして、永遠に潑剌たる青春を保有して世に出てゐるからである。前述の「眞の文學」を構成するものは、只彼等だけである。人數に乏しい眞の文學の歴史は、われらは既に若い時から凡べての教養ある人々の口を通して聞いて居る。決して片々たる綱要書の如きものを讀んで初めて知つたのではない。――或事を本來的には知らないで、只すべての事について喋舌り得るが爲に、文學史を讀まんとする目下流行の偏執狂に對しては、私はリヒテンベルヒの舊版第二卷三十二頁に在る極めて熟讀に價する章句を推薦しようと思ふ。

(註) リヒテンベルヒは物理學者でまた文學的の著作もある人、一七四二――一七九九、ゲッテインゲンの教授であつた。

シヨオペンハウエルの指示したところにはかうある、『現時、人々は科學史をあまり精細に研究して、科學に大なる損害を及ぼしつゝあると私は信ずる。人々は好んで科學史を讀む。然し實際、この事が頭腦を空虚にすることはないけれど、本當の力を失はせる。歴史が頭腦を充し

てゐるからである。頭腦に詰め込むのではなくて、これを強くし、力と天賦とを發達させて、自己を大きくしたいといふ衝動を、甞て心のうちに感じたことのある人は、科學に於ける所謂文献學者と談話するより、もつと力なきものはないと云ふ事實を見出したであらう。かゝる人人は科學に於て、何等自分で考へたところはなく、單に無數の歴史的文献的の事項を知れるだけである。かゝる人の談話を聞くのは、恰も飢餓に瀕せる時、料理書を朗讀してもらうやうなものである。自己と眞の科學との價値を知れる人々の問に於ては、所謂文献史は決して重んぜられないだらうと私はまた信ずる。これらの人々は、文献學者とは異つて、いかに他人が判斷したかといふ事に氣を留めるよりも、より多く自分で批判をするのである。或科學に於ける文献的研究に對する好愛が增加するにつれて、其學問を開拓する力が減少し、自分が學術を所有してゐると云ふ信念のみが增大する。これは最も悲しむべき事である。かゝる人々は學問を眞に所有してゐる人よりも、より高い程度で、自己を眞の學問の所有者であると信ずる。眞の學問は其所持者を倨傲ならしめる事は決してない。科學を自ら開拓する力がないので、其朧ろげな歴史を鮮明することに從ふ人々や、大部分は器械的なる此方面の仕事を、科學そのものゝ演習だと心得て、先人の既になした事を列述する人々などが、却つて傲慢になるものだと云ふのは、確かに根柢ある意見である、云々。』以下略

——譯者補——

私は然し、實はいつかは人あつて次のやうな悲劇的文學史の著を試みんことを希望するものである。其文學史には、諸國の國民が、今は自己達の最高の矜持として提示する古來の偉大なる著述家や藝術家を、その生前に於ては、どんなに待遇したかと云ふ事實が記され、またあらゆる時代とあらゆる國々に於て、善と正とが、いつも勢力を占めてゐる惡と逆とに反對して切り拔けなければならなかつた限りなき戰鬪が描かれ、或はまたほとんどすべての眞の人類啓發者や、一切の部門と藝術とに於けるほとんどすべての大家巨匠が受難し殉道した顚末が述べられてなければならぬ。そして一方では、名聲と名譽と富とが、斯道に於ける無價値な人々に、與へられたのに、他方では前述の人々は――其僅少の例外を除いて――世人の承認と同情とを得ることなく、門下生すらなくして貧苦の裡に窮困したことは、恰も父のために獵して野獸を斃したエザウが、彼の外套を着て變裝したヤコブの爲めに、家(うち)で父の祝福を盜まれたと同樣であることが敍述され、これらの出來事があつたに拘らず、彼等が自己の道に對する愛は常に彼等を支へ保つて、終には人類の敎育者としての最も困難な戰ひを終つて、不死の桂冠が彼を摩(きしまね)き、彼にも次の意味を有する時が來るに至つた事が記されてなければならぬ。

『重き鎧は、羽衣となりつ。

『苦みは短く、喜びは限りなし。』

（註） これはシルレルの戯曲『オルレアンの乙女』にある詩で、ジャンダルクの最後の言葉である。

噪音に就いて

カントは『活力』に就て一篇の論文を書いた。然し私は活力に對して哀悼歌を綴らうと思ふ。何となれば、敲音・槌音・打音などの形で、活力があまりに屢々使用されるために、私は私の生涯ぢう、日に日に苦しめられて來たからである。勿論世間には、噪音に對して無感覺であるが故に、私のかう云つたのを聞いて微笑する人があらう、否甚だ多くあるであらう。然しこれらの人々はまた、論證・思想・詩又は藝術品に對して、約言すれば、あらゆる種類の精神的印象に對して無感覺な人達である。此原因は、彼等の頭腦の質が强靱で、組織が堅固な事に存する。これに反して噪音が思索する人々に與へる苦痛についての愁訴を、私は殆どすべての偉大なる著述家の傳記や、或は其他自分で發表した報告のうちで發見する。例へば、カント、ゲエテ、リヒテンベルヒ、ジャン・パウルの如きはこれで、若しこの方面に言及しない人があつたら、それはたゞ、文の前後の關係が、著者の筆をこの方向に導かなかつたのだといふ事に止まる。

自分はこれを次のやうに解説する。一つの大きなダイヤモンドを細かく打碎くと、その價はこれらの小さい破片の價の總和以上に出ないと同じく、又軍隊がいくつかの細かい部隊に分けられると、最早何事もなし得ないと同様に、偉大なる精神も、それが中斷せられ・攪亂せられ・破壞せられ・轉向させられると、普通の精神よりより多くの事をなし得るものではない。何となれば彼の優秀は、其精神が一切の自己の力を、恰も凹面鏡がすべての光線を集中する如く、一個の點・一個の對象に集中する事によつて生ずるものであるが、噪音によつての中斷は、此點に於て精神の妨害をなすからである。夫故にすぐれた思想家は、常にあらゆる攪亂・中斷・轉向等を嫌忌し、殊に噪音によつての亂暴な中斷を嫌つた。然しこれと同一な事でも、普通の人々を特に悩ませはしないのである。歐洲諸國民のうちで最も怜悧・慧敏な國民（英人）は、『決して中途で邪魔させるな』と云ふ事を、第十一戒として算へた位である

〔モオゼスの十戒に次いで大切な戒と云ふ意味である――譯註者〕。噪音は、われら自身の思想を中斷し、或は進んで破壞をさへするものであるから、あらゆる中斷のうちで最も無作法なものである。然し中斷さるべきものが全くない時は、噪音が特に感じられないのは勿論であらう。――折々或低い、併し絶えざる噪音が、私のはつきりとこれを意識する前に、しばらくの間、私を苦しめ・邪魔することがある。この場合、私はその何たるかゞ解るまでは、丁度脚先へ石塊をのせたやうに、私の思考の歩みが絶えず困難になつてゐるのを感ずるだけである。――

然し、今や概論から各論に移つて、私はまづ最も恕しがたき且つ最も耻づべき噪音として、都市の狹い響きわたる小路で鳴らさるゝ本當に忌々しい鞭の音を擧げなければならぬ。此音は人生から一切の安靜と思慮とを奪ふものである。鞭を鳴らす事が許されてあるといふ事ほど、人類の愚鈍と無思慮とに就て、極めて明瞭な概念を與へるのは外にはない。此突然の・鋭い・頭腦を痲痺せしむる・一切の思慮を奪ひ・思想を殺す響きは、苟も思想に類似する何ものかを頭腦のうちに有する人なら、誰だつても苦痛に感ずるに違ひない。夫故にかゝる音(おと)は、幾百の人を其精神的活動に於て――たとへ其活動がいかに低級な種類のものであつても――攪亂するに違ひなく、思索家の冥想裡に闖入しては、斬首の劍が頭と胴との間を通過する如く、これに苦痛と破壞とを與へるのである。いかなる音(おん)でも、此忌々しい鞭の音ほど、鋭く頭腦を截斷しはしない。此音を耳にすると、人は直ちに鞭について居る革紐(かはひも)の末端を頭腦裡に感得する。これが頭腦に及ぼす働きは、接觸が含羞草(ねむりぐさ)に及ぼす作用と同一で、其影響はともに後々(あと)まで持續する。實益といふ最も神聖な事に對して私は十分の尊敬を持つてはゐるが、一車の砂或は肥料を運んで行く男が、市街を三十分ほど通行する間に、一萬ばかりの腦裡に浮び出でつゝある思想を、其萠芽のうちに枯死せしめるやうな特權を、「運搬」と云ふいくらか實益ある行爲によつて、獲得したとは、どうしても信じ切れぬ事柄である。成程槌の音・犬の吠聲・子供の泣聲などは、恐るべきものではあるけれど、本當の思想殺戮者は鞭を鳴らす音で、人々が時折持つ思念的の結構な瞬間を、滅茶々々に滅却するのが、此音の使命である。車を引く獸を驅る爲には、凡ゆる響のうちで最も忌はしい此音を使用するより外に、何等の方法もない時だけは、餘儀ない仕儀として辯疏する事が出來よう。然し事實は全く反對である！　此咀はしい鞭の鳴る音は、單に不必要であるのみならず、また無益である。と

云ふのは、元來鞭を鳴らすのは、馬匹に及ぼす心的作用を主眼としたのであるが、これは此音を不斷に濫用する習慣のために、鈍くなり且つ失はれて仕舞つたからで、馬は此音を聞いて歩みを早めはしない、此事は特に、乘客を捜しつゝある空(から)の傭馬車が、極く緩々(ゆるく)と行きながらも、馭者は絶えず鞭を鳴らしつゝあるので解る。鞭で一寸、馬體に觸れた方がずつと多くの效力がある。若しまた此響によつて鞭の存在を絶えず馬に想起させる事が、どうしても必要だと假定しても、其目的の爲には普通に出す響の百分の一だけの强さで充分であらう。實際動物は人の知れる通り、極めて輕微な、或はまた殆どわれらの氣がつかない位の聽覺的、又は視覺的の合圖にすら注意するもので、此事實については既に調教された犬やカナリヤが驚嘆に價する適例を示して居る。此故に鞭を鳴らすのは、純然たる惡戯であり、或は更に、腕を以て勞働する社會部分が、頭腦を以て勤勞する人々に對して加へる厚顏(あつかま)しい嘲弄であると思はれる。かゝる憎むべき事が都市に於て宥されるのは、大なる野蠻(やばん)であり、不正である。これは革紐の末端に結節を附けよと云ふ警察令で、極めて容易に除かれ得る事だから、尙更ら此感を深くする。賤民をして彼等の上に立てる階級の頭腦作業に對して注意させるのは、少しも惡い事ではあるまい。何となれば彼等は一切の頭腦の仕事に對しては、極端な畏れを懷いて居るから。然し非番の郵便馬匹を連れたり、車から解かれた荷車馬に乘つたりして、人口稠密な都市の狹い小路を、一尋もある鞭を一生懸命に鳴らしながら行く奴(やつ)は、直ちに馬からおろされて、杖で正直に五つもなぐられるがよい。たとへ世界中の博愛論者が、立派な理由から體罰全部を廢止せんとする立法團と共に、鋒をそろへて此所罰を非難しても、私は説服されないつもりだ。然しもつと激しい例を十分に度々見ることが出來る。それは、馬を連れずに單身で往來を行く馬丁が絶えず鞭を鳴らすことである。不都合な寛大のお蔭を以て、此男には鞭を鳴らすのが、これほどひどい習慣になつたのだ。肉體と凡ての其滿足との爲めには一般に非常に優しい取扱がなされてゐるに係らず、思索する精神そのものは、尊敬を受けるなどはさて措き、最も僅かな顧慮をも保護をも與へられざる唯一つのものであつてよからうか？　馭者（荷馬車の）、荷擔夫、辻待人足などは人間社會の馱獸である。彼等は全然親切に、正義・公正・寛大・用意を以て取扱はれなければならない。然し恣(ほしいまま)に噪音を立てゝ、人類のより高い努力の邪魔をすることは決して許されてならぬ事である。此鞭の鳴る音が、既にどの位

多くの偉大にしてまた美しい思想を世間から追ひ拂つたかを私は知りたい。私が命令する權力を持つなら、私は馭者たちの頭に、鞭の鳴る音と笞刑との間には、斷つべからざる關聯のあることを染み込ましてやるだらう。——より多くの智力と、より微妙な感じを持てる先進諸國が、この點でもまた範を垂れ、これに傚つて獨逸人も亦、同樣な點までやつて行く事を私は期待する。一方ではトーマス・フードは獨逸人に就て、かう云つてゐる。『音樂的の國民としては、彼等は、私がこれまで會つたなかで、最も騷々しい國民である』と。獨逸人がかう云ふ民族である原因は、彼等が他の國民より、より多く騷々しさを好むからではなくて、騷々しさを耳にした人々の魯鈍から來る無感覺に基くのである。彼等は格別何事をも考へないで、たゞ喫煙ばかりしてゐるのだから——いや喫煙が思考の代用物になるのだが——思考に於ても讀書に於ても妨げられるところがない。不必用の音——一例をあげれば、戶を非常に無作法に且つ野鄙に音高く閉すことであるが——に對する一般人の寛大な態度は、即ちこれ彼等の頭腦が一般に魯鈍にして無思想である事の一徴證である。獨逸に於ては、何人も噪音を氣にかけないやうに、或方法が講ぜられてあるかのやうに思はれる。例へば無目的に太鼓を打つなどは其一つであるが。

最後に此章で論じられた問題の參考書に關しては私は推薦すべき只一册の——しかも立派な只一册の——詩的作品を持つてゐる。それは卽ち有名なる畫家ブロスツイノオ〔伊太利の肖像畫家。一五〇一—一五七二〕が三韻脚法で作つたエピステル〔書簡體の詩文〕『デ・ロモリー・ア・メセツル・ルカ・マルティーニ』である。これには、伊太利の或町の種々の噪音のために、人々が蒙つた苦しみが、悲喜劇的の方法で、詳細に且つ甚だ面白く描かれてゐる。

自殺論

私の見る限りに於ては、もろ〳〵の宗教のうち、其信者が自殺を一個の罪惡と認めるのは、たゞ一神教的宗教即ち猶太の諸宗教だけである。而して舊約全書に於ても新約全書に於ても、自殺に對する何等かの禁止、若しくは單に或非認さへ發見されないのは、更に驚異すべき事である。夫故に宗教の教師達は、自殺に對する禁止の基礎を、彼等自身の哲學的根柢の上に置かねばならないのである。然し此根柢は甚だ脆弱であるから、彼等は其議論に於て力

の缺如するところは、彼等の嫌惡の表現の强さに依り、卽ち罵詈によつて補塡しようとするのである。從つてわれらは、自殺が最大の卑怯であるとか、それは亂心せる場合に於てのみ可能であるとか、或は同じやうな愚劣な言說を聞かなければならず、更に進んでは自殺は不正であるなど丶云ふ全然無意味な文句を耳にさせられるのである。然し各人は世界に於て、自己と其生命とに對する權利より、もつと確實な權利を何物に對しても持たないのは明白な事ではないか。上に述べたやうに自殺は罪惡の一つに算入されてさへある。これに關聯するのは——特に賤民的に頑冥な英吉利に於ては、——自殺者の不面目極まる埋葬法と遺產の沒收とである。此故に陪審官は、自殺者に對しては、ほとんど常に狂氣と云ふ判決を與へる。自殺について、判定を下さうと思ふなら、人はまづ自己の道德的感情に愬へるがよい。そして或知人が或罪惡を——卽ち殺人とか、慘酷とか、詐欺・竊盜などをなしたといふ報知が吾人に與へる印象と、自殺の報知が與へるそれとを比較せよ。前者は激しい憤慨と、極度の不快と、懲罰或は復仇に對する要求を引き起すけれど、後者は悲哀と同情とを喚起し、且つ惡行爲に伴ふ道德的否認がこれに混入するよりも、寧ろより屢々自殺者の勇氣に對する嘆賞の念が加はり來るであらう。自ら進んで世を辭した〔自殺したこと〕知人とか友人とか親戚とかを有する人はいくらでもある。——かゝる人々は嫌惡の念を以て自殺者を考へること、恰も犯罪者を考へると同じでなければならないであらうか。私はそんなことを全然否定する。私の意見に從へば寧ろかうである。僧職に居る人々は、何等の聖書的典據を示すことも出來ないのに、のみならず又何等の堅固なる哲學的論據をも持たないのに、いかなる權利を以て、或は說敎の壇上から、或は其著述に於て、われらからは敬愛せらるゝ多くの人々の行つた一行爲に、罪惡の烙印を施し、又自ら進んで世を去つた人々に對して、正當の禮を以てする葬送を拒むのであるかに就て辯明するやうに、一度は要求せらるべきものであり、且つ此場合に求められるのは、理由であるから、空疎な言說や罵詈の類は其代りとなり得べからざる事が、まづ確定されなければならぬ。刑法が自殺を禁ずればとて、それは宗敎的に何等有力な理由ともならない。その上、この禁止たるや甚だ笑止千萬である。何となれば、死をだに怖れざる人が、どんな懲罰を怖れるであらうか？——自殺未遂を罰するならば、それは自殺遂行法の拙劣さを罰するに止まるのである。

希臘・羅馬の人々もまた決してかくの如き見方で、此事件を眺めはしなかつた。プリニウス〔二三――七九、有名なるヴエスヴエヤス山の大噴火の時窒息して死したる人、老プリニウスと云はる。其著に Historia Naturalis がある。〕は云ふ。『われら思ふに、人生なるものはどんな形でもよいから曳き摺つて行かなければならぬほどに、願はしいものではない。汝の性質がどう作られてあらうと、汝は他の人と同じ方法で死ぬのである。不品行なそして瀆神的な生活をして來てもまた同様である。されば、自然が人間に賦與する一切の財寶のうち、適當な時機に死ぬことより勝つたものはなく、しかもそのうちで最もすぐれた財寶は、各人が自殺し得る事である』と。彼はまた曰ふ。『神すら萬能な譯ではない。何となれば神は自ら欲しても自殺することが出來ない。然るに（人間は自ら殺し得るから、）これこそ人生の多くの不快な事のなかで、最上の賜として神から人間に與へられてゐるものだ』云々。マッシリア〔マルセーイの舊名〕とケオス島〔希臘の一島〕とでは、自殺に對する十分な理由を陳述し得た人々に向つては、市長から公然にすら毒人參の飲料が交附された。

（註）ケオス島に於ては、老人が自ら進んで自殺するのが風習であつた。

而して事實いかばかり多くの古代の英雄や賢者は、自殺によつて自己の生命を終つたであらうか！ 無論アリストテーレスは自殺を以て自己に對する不正ではないが、國家に對する不正であると云つたが、ストーベオス〔希臘の著述家で紀前五百年頃〕は、其アリストテーレス派倫理の解説に於て、次の如き文章を引用してゐる。『自殺は、最大不幸の裡に在る善人と、最大幸福の裡に居る惡人とに取つて一個の義務である』と。同じく彼は引用して曰ふ。『此故に人は結婚し・兒を生み・政治的生活に參加しなければならぬ。そしてまた全體として德の練磨をなさんがために、自己の生命を維持する要があると共に、必要に應じてはまた生命を放棄しなければならない』云々。更に進んでストア學派になると、自殺を高貴にして勇敢な行爲だと嘆美する。それは無數の章句――特にセネカの著作からの最も力强い章句によつて證明されるであらう。また世人の知る如く、印度人にあつては自殺が屢々宗教的行爲として行はれる。特に寡婦の自焚とか、ヤッゲルナウト〔印度の毘瑟拏神の第八化身たるクリーシュナの偶像を云ふ。此像は毎年車に載せて牽き建られ、信徒はこれに轢殺さるれば極樂に行き得ると信じ、從つて自ら轢死するもの多し――譯者註〕の車輪の下に身を投ずること、或はガンヂス河や寺院の聖池に住む鰐魚に自己を犧牲として捧げる等がそれである。同様に、人生の鏡たる劇場に於ても、われらは――例へば有名なる支那劇『支那の孤兒』が其一證であるが――高

貴な性格を有する人々の殆ど凡べてが自殺するのを目擊するが、然しこれによつて彼等が罪を犯すのだといふことは、いかなる方法によつても示されて居らず、觀衆もまたさう云ふ考へを起さない。われらの劇場に於ても究極するに同じである。例へば『マホメット』曲中のパルミラ、『マリア・シュツウアルト』曲のモルティマア、オセロ及びテルツキイ夫人〔シルレル作『ヴアレンシユタイン』に出る人物〕などがわれらの舞臺に於ける例證である。ハムレットの獨白は、一つの犯罪についての冥想であるであらうか？　否彼はたゞ、もし人間が死によつて絕對に滅びることが確實であるなら、世界の本性を考察した結果から考へると、死んだ方がまさつてゐる事を述べるにすぎない。『然しこゝがまゝならぬところだ』――一神教即ち猶太的諸宗教の僧侶や、これに迎合する哲學者達によつて作られる自殺反對論は、實は薄弱で、他愛(たわい)もなく論伏さるべき詭辯にすぎない。此詭辯の根本的駁論を、ヒュームは其『自殺論』に於てなした。これは彼の死後初めてあらはれたが、英國に於ける例の不面目な頑冥と耻づべき僧侶的專制によつて直ちに抑壓されたものである。それ故に甚だ僅少な部數が祕密に且つ高價で賣られたに過ぎない。そして今此偉人の該論文及び他の一論文〔靈魂不滅論〕が保存されてゐるのは、バアゼルの複刻のおかげである。（Essays on Suicide and the Immortality of the Soul, by the late David Hume. Basel, 1799 Sold by James Decker, pp. 123, 8vol）然し冷靜なる理性を以て、一代の自殺反對論を駁擊したる――英國第一流の思想家にして著述家たる――人の手に成つた純然たる哲學上の一論文が、外國に於て保護されるまで、不正品のやうに故國を潛行しなければならなかつたのは、英吉利國民の大なる耻辱でなければならぬ。此事はまた同時に、敎會が此點に於ていかなる種類の曇りなき良心を有するかを明示してゐる。――自殺に反對する唯一の有力な論據を、私は私の主著第一卷第六十九節で述べた。それは、自殺が悲哀の此世界から眞正に解脫する事に換ふるに、單に外觀的の解脫を以てするから、最高の道德的目標に到達する邪魔となるので、これに反對しなければならぬと云ふ事に存する。然し此誤想から、基督敎の僧侶が目して以てそれだとしようとする罪惡へ至る間の道は甚だ長く且つ遠い。

基督敎は、其深奧な根柢に於ては、「受苦」といふ事を、人生の眞の目的だとする眞理を持つてゐる。從つて自殺は、此目的に背戾するものとして非難される。然し希臘羅馬の古へに於ては、より低い見地からして、自殺は是認

され尊敬されたのである。自殺に反對する上述の〔基督教の本義的の〕理由は、然しながら一個の禁慾的な論據のもので、歐洲の道德學者がこれまで占め來つた立場より、より高い立脚地からのみ唱へられ得るものである。しかしわれらが此甚だ高い立脚地から降ると、自殺を咎むべき何等の堅固な理由もない。されば此事に反對する一神教の僧侶達の異常に旺盛な・しかし聖書によりても或はまた他の有力な論據によりても支援せられざる熱心は、或隱れたる理由に基くに相違ないかのやうに見える。生命を自發的に放棄する事は、思ふに、『すべては慥かに美しい』と唱へた人にとつては、下手な挨拶だと云ふ事が、或は此理由ではあるまいか。——もしさうだとするなら、これまた一神教的諸宗教の義務的樂天論の一例で、自殺から非難されないやうに、先手を打つて、こちらから自殺するのである。

生の恐れが、死の恐怖に打克つや否や、人間は自己の生命に終結を與へるものだと云ふ事は、通例發見される事實である。然し死の怖れの抗爭は頗る大きく、これは云はゞ生の出口に守衞として立つものである。若し人間の最後が、純粹に消極的なものであり、生存の突然の終熄であるなら、何人と雖も、恐らく自殺しない人はあるまい。——然しそこには積極的な事がある。卽ち肉體の壞滅がそれである。これが人を恐れ、たぢろかせるもので、それは實に、肉體は『生きんとする意志』の顯現だからである。

然し通常は、これらの守衞との鬪爭は、遠距離からわれらが眺めてゐるやうに、そんなに困難なものではない。殊に精神の苦惱と肉體のそれとの間の衝突の結果として、さう困難なものではない。例へばわれらが肉體的に非常にひどく或は永く苦悶して居るならば、われらは他の一切の苦惱に對して平氣になるもので、疾病の囘復のみがわれらの心に懸つてゐる。これと同じく、强い精神的苦悶はわれらを肉體的のそれに對して無感覺ならしめる。卽ちこれを輕蔑せしめるのである。のみならず、肉體的の苦惱が優勢を占めるとしても、それはわれらにとつては都合のよい注意の轉向であり、精神的苦悶の休憩時である。自殺に關する肉體的苦痛は非常に大きい精神的苦惱によつてなやまされてゐる人達の眼中に於ては、すべての重味を失つて仕舞ふから、自殺を容易ならしめるものは、まさしく精神的苦悶である。この事は純粹に病的な・深い不愉快な氣分によつて、自殺するやうに促進される人々に於

て特に顯著である。かゝる人々は自殺を遂げるに、何等の克己をも要しない。彼等に附せられた看視人が二分間も離れると、彼等は手早く自己の生命に終焉を與へるのである。

苦しい・恐ろしい夢に於て、恐怖が最高度に達すると、恐怖それ自身がわれらを覺醒させ、此覺醒によつて夜の怪物どもは消散する。人生の夢に於ても、恐怖の最高度が、この夢を破るべくわれらを強ゐる時には、同じ事が起るのである。

自殺はまた一種の實驗であり、人間が自然に向つてこれを課し、それに對する答案を強要せんとする一種の質問である。其質問に云ふ『人間の認識と生存とは、『死』によつていかなる變化を受けるであらうか？』。然し此實驗は甚だ拙である。何となれば、質問した意識と、解答を待つ意識との同一性は、死によつて失はれるからである。

觀相論

外部が内面を描き出し、顏貌が人の性質全體を表現し又表明すると云ふ事は、すべての人の有する假說であつて、其先天性と、從つて其確實性とは、善にまれ、惡にまれ、兎に角何事かに依つて表はれた人物、又は或異常な仕事をした人を目睹したいと云ふ慾望、或は此望がとげられないと、せめては他人から其人の風貌を傳へ聞きたいと云ふ慾望のうちに明白にあらはれてゐる。且つ此慾望は機會さへあれば、いつでも現はれて來るのである。だから一方では、かやうな人物が居ると推測されるところへ人々が押し寄せるのであり、他方では新聞――特に英國の新聞の努力は、まづ其人物を詳細凱切に記述し、之につゞいて間もなく、畫家や銅版師がこれをありありと見せて吳れるやうになり、最後にはかゝる目的のために非常に尊重さるゝ寫眞が來て、此需要を完全に充たして吳れるやうになるのである。同じ理由から、日常生活に於ても、人々は自己の遭遇するすべての人を觀相法的に檢覈して、其道德的及び知力的性質を、私かに相手の顏から豫め知らうとする。然し若干の論者の云ふ如く、精神と肉體とは全然別なものであつて、體が心に對する關係は、衣服が身體に對すると同じだから、人間の外貌は、少しも重要でない

と云ふなら、上述のすべての事件が起り得るわけはない。

然し、人間の顏はむしろ象形文字であつて、確かに解讀され得るもの、其アルファベットは既にちやんとわれらの胸中に備はつてゐるのである。しかのみならず、人間の顏は通常其口よりも、より多くの・そしてより面白い事を云ふものである。何となれば顏は、口からいつかは出るであらうものゝすべてを摘要して居て、其人物のすべての思考と企圖との組合文字(モノグラム)だからである。また口は、單に或人間の思想を云ひ表はすけれども、顏面は自然の思想を云ひあらはす。此故に、人は誰でも相手かまはずにこれを談話する要はないが、誰でも相手かまはずに注意深くこれを觀察するだけの價値はある。――個體が既に、自然の個々の思想として、觀察さるべき價値を持つてゐるなら、美は此價値を最高の程度で有する。何となれば、美は自然のより高い・より一般的な概念であるからである。美は種族に就ての自然の思想である。美がわれらの眼を力強く捉へるのは此譯である。美はまた自然の根本的にして且つ主要なる思想である。之に反して個體は副次的思想であり、一個の隨つて生れ來る歸結にすぎない。

凡べての人は、口には云はないが内心には「各人は見える通りのものだ」と云ふ原則を持つてゐて、これを出發點とする、此原則は正當でもある。然し困難なのは其適用の方法である。これに對する能力は、或部分は生れつきで、又或部分は經驗から得られる。然し何人も餘蘊なく知悉することは出來ない。最も熟練せる人すら、なほ且つ誤り(あやま)をなすからである。それでも顏は、人を欺くものではなくそこにあらはれて居ないものを讀むやうな過ちを犯すのは、われらの罪である。勿論顏を讀むのは、大切な而して困難な仕事であつて、此術の原理は決して抽象的に習得することは出來るものでない。これに達する最初の條件は、人を純客觀的な見方を以て理會することであるが、これはさう容易い事業ではない。と云ふのは、若し嫌惡・偏愛・恐怖・期望などの極く僅かの痕跡でも、或はまたわれら自身が今いかなる印象を彼に與へつゝあるかと云ふことを考へるだけでも、――簡單に云へば或何等かの主觀的なことが少しでも――加はると、象形文字は混亂し且つ變造される。――言語の音を聞くのは、其言語の意味を理解し得ざる人に限られてゐる通りに――何となれば言語が理解されゝば、意味が直ちに符牒〔言語〕を意識から追ひ出すからである――或人の人相を見得るのは、其人とは未だ親しくはない人、換言すれば、其人と度々會つたり、

の結果は、此印象の誤りでなかつたことを確證するやうになるものである。

賴し得る事を前提とするのであるが。——其後の相識關係即ち交際は此印象を流し去るであらう。然し後になつて

に、個人的に重要な關係を持つて居る人なら、其印象を書き留めて置くがよい。——勿論これは自己の觀相力を信

第一回の時だけである。夫故に人は第一の印象に注意深く着眼し、此印象を記憶して置かねばならぬ。もしわれら

時ばかり刺戟を與へ、葡萄酒の味は第一の杯に於てのみ本當であるやうに、顏もまた其充分な印象を與へるのは、

て其顏を讀解する可能性とを持ち得るのは、嚴密に云ふと、初對面の時に限られてゐる。否ひはそれが入り來つた

或は談話したりして、其顏に慣れるやうな事のなかつた人だけである。されば人が、或顏の純客觀的印象と、從つ

併し、われらはこの場合、次の事實を隱蔽しようとしてはならない。第一印象なるものは大抵甚だ不愉快なもので

ある。——然しまた大多數の顏はどれ丈けの役に立つか？——美しい・善良な・聰明な顏を除いては、即ち極めて

少數の極めて稀に在る顏を除いては、どの新しい顏も、纖細な感じを有せる人々には、大抵驚愕に近い感じを呼び

起すにとゞまるではないか！　それは新しい・人を驚かすやうな結合を示して、不愉快の感じを起さしめるのであ

る。實際、それらは通常に情けなき顏附である。加之、其性質の朴素的卑俗や下劣や、或は更に悟性の動物的に淺

薄狹少なことが、顏面にはつきりとあらはれて居て、どうしてかやうな顏を持つて外出する事が出來るだらうか、

なぜ寧ろ覆面（マスク）を掛けないだらうかと訝からせるやうな連中が世間にはある。否、一歩をすゝめて唯一目見たばかり

でも、見た人の方が汚瀆されたやうに感ずる顏面もある。だから、世を隱遁して、人を近づけないでも濟む特殊の

地位に居る人達が、新らしい顏を見る苦痛を全然回避して、面會を拒んだからとて、これを惡く取る譯には行かな

い。——此事を形而上學的に說明すると、かう云ふ考察になる。即ち各人の個性なるものは、其人が生存する間、

それによつて引き戾され・訂正さるべきもの其ものに外ならぬと。然し心理的說明で滿足しようとするなら、次の

ことを自ら尋ねて見ればよい。一生涯中、心の中には、小さい・低い・憫むべき思想と、いやしい・利己的の・嫉妬深

い或は意地惡き願望とより外には、ほとんど何物もあらはれなかつた人物の顏としては、どう云ふ人相が豫期され

るだらうかと。かゝる思想や願望の各は、それが存在した間は、顏面に其表現を浮べたもので、すべてこれらの痕

くなる。

從つて、言ひ換へるとわれらがその印象に對して鈍感になるに從つて、その印象はもはや何等の作用をも及ぼさな

ふのである。夫故に大抵の人は、初めてその顏を見た時に、おそろしく思はれるのである。然しこの顏も慣れるに

跡は屢々反復せらるゝ事に依つて、時の經過と共に、顏面上に深い皺を刻みつけ、これをすつかり凸凹にして仕舞

聰明慧智な人の顏は、年月を經て徐々に出來たもので、或はあまつさへ老年に至つて初めて高い表情に達するこ

とすらあつて、若い時代の肖像畫には、かゝる表情の僅かの端緒しか見られない所以は、上述の理由――即ち顏面

の表情は、無數の一時的且つ特徴的な緊張によつて徐々につくられて行くものだと云ふこと――によつて解釋され

る。他方に於て、人が初めて見た顏に對して驚愕を感ずる所以は、或人の顏面が正しい而して十分な印象を與へる

のは、最初の時のみであると述べた前記の意見と相應ずる事である。故に他人の顏の印象を純粹に客觀的に且つ何

等のまざり物なき形で受け取る爲めには、其人とどんな關係もあつてはならない。そして若し出來得るなら、其人

と一度も談話を交換した事のないのがよろしい。談話そのものが、既に話者双方をいくらか親しくするもので、或

種の融合(ラポトル)を導き入れ、相互的主觀的關係を齎すが、理解の客觀性はこのために傷けられるのである。其上、誰でも

他人から尊敬を受け、友情を得ようと努力するものであるから、觀察される人の側では、既に自分達の熟知せる虛

偽術を直ぐに應用して、其顏面によつて僞善・諂諛の手管を弄し、これによつてわれらを買收するから、初めにはつ

きりと見えた事も、ぢきにもう解らなくなる。この結果は、普通には『大抵の人はより近く知り合ふと、得るとこ

ろがある』と云ふけれど、實は『大抵の人は、より近く知り合ふと、われらを欺くものだ』と云ふ方が正しからう。

然し後になつてよくない事情があらはれて來ると、大抵は第一印象の下した判斷は其正しい事が認められ、又往々

自己の正しいことを嘲笑的に主張する。これとは異つて『より近い知り合ひ』が直ちに敵對的關係となる事もある

が、此時はかゝる知り合ひによつて、何等の得るところもなかつたことがすぐに解らう。より近く知り合ふことに

よつて利益が得られると云はるゝ今一つの理由は、初めて會つた時には、われらに警戒の念を起させた人物も、こ

れと談話を交へると、彼自身の全性格があらはれて來るばかりではなく、其人の持てる修養もあらはれて來るもの

で、換言すれば、其人が實際に、また自然的にそれであるものばかりではない、全人類の共有財産から得たものでもあらはれて來て、其云ふところの四分の三は、彼自身のものではない、外部から入り來つたものである事も見出される場合もあるからで、實際われわれは、かゝるミノタウル〔半人半牛の怪物〕が、意外にも人間らしく談話するのに驚く事が屢々ある。然し、こゝで止めないで更に一歩を進めて見よ。即ち『より近い知り合ひ』を今一層より近く進めて見よ。さうすれば、第一印象の時、其人の顔面が期待させたところの『獸的性質』が、十分明瞭に現はれて來るであらう。――夫故に觀相的烱眼を授けられた人は、此眼の下す判斷、即ちあらゆる從來の相識關係に先行し從つて純眞無雜なる此判斷を十分に注意しなければならぬ。蓋し人の顔面は、其人が何であるかを直截に云ひあらはすもので、若しそれがわれらを欺くならば、顔其ものゝ罪ではなくて、欺かれたるわれらの側に罪がある。また一方、人間の言語なるものは、單に自分の考へる事を云ふものであり、或はより屢々只自分の學んだ事だけを云ふものであり、もつと進むと、考へてゐない事を、考へてゐる振りをして云ふのである。その上、われらが或人と話す時、否、たゞ或人が他の人と話すのを聞く時でも、其人の眞の人相に注意しない。これはわれらが相貌を單に基質（ズブストラート）として、即ちたゞ與へられてあるものとして放擲し、專ら人相の感情的方面、即ち談話の際に於ける顔面の表情にのみ注目するからである。然し話者の方では、此場合良い側が、表面（おもて）を向くやうに心掛けて行つてゐるのである。

ソクラテースが、そのものゝ能力を檢するやうに紹介された一靑年に向つて『君は私に君が見えるやうに話して吳れ玉へ』と云つたのは（此場合ソクラテースは『見る』といふ言葉を、只『聞く』と云ふ意味で使用したのではなかつた）、正鵠を得た言葉である。何となれば、話しする時のみ、人間の顏の諸機關殊に目が活氣づいて、其人の精神的資産と能力とが、顔面に表はれ出づるものであり、かくしてわれらは其人の叡智の程度とその能力とを差しあたり評價し得るものであるし、ソクラテースが此場合に狙つたのは、事實これに外ならなかつたからである。然し、他の點から見ると、かう云ふ議論が主張される。第一に、此規則は人心の深奧に橫はる道德的性質には適用することが出來ぬ。第二に、人は話しをする際に、顔面筋肉の運動によつて、其顏容ははつきりと開展して行くのであるが、此開展によつて客觀的に知り得たものを、われらは間もなく、其人とわれらとの間に生ずる個人的關係に

よつて主觀的に喪失すると云ふ事である。此個人的關係が引き起す魅力は甚だ輕微なものではあるが、それでも既に云つた通り、われらを公平無私にして置かない。此終りの方の見方から云つたら、『君は私に君が見えるやうに默つて居玉へ』と云つた方が、一層正當であらう。

或人物の眞の人相を、純正に且つ深刻に理解する爲には、其人が孤居して自分を自分自身にうち任せて居る時に觀察しなければならぬ。あらゆる會合や、他人との談話は、既に他人の反映を其の上に投げるものであつて、且つ大抵はこれが其人に有利になる。何となれば、彼は起動と反動とによつて動かされ、又このために高められるからである。然るに孤居して自己を自己に委されて居り、自らの思想と感情とのうちに游泳する狀態にある時は――彼は全く彼自身である。かゝる時には、深刻に洞察する觀相眼は、其人の性質全體を一般に亙つて直ちに捕捉し得るものである。何となればそれ自身だけの顏の上には、其人のすべての思想と努力との基調や、其人が將來それであるべきもの及び其人が孤居する時のみ感ずる事などに就ての取消すべからざる判定が、刻まれてゐるからである。

狹義に於ける人相は、人間の騙佯的の技術が、そこまでは到達し得ない唯一のものであるから、觀相は僅かに人間を知る爲めの主要なる手段である。騙佯的の技術の働き得るのは單に感情的の方面、擬態的動作の範圍に限られてゐる。かくの如く人相は騙佯的の技術の及ばざるところにあるものだから、それで私は人を見るに當つては、其人が孤居し、自己に沈潛して居る時を選び、且つ談話しないうちに研究する事を推擧するのである。其一の理由は、上述の場合に於てだけ、人間は純な・僞りのない人相を示すもので、會話が初まると、感情的方面が直ちに流れ込み、習得せる騙佯的技術が行使されるからである。今一つの理由は、一切の個人的關係なるものは、それがいかに輕微であつても、人を拘束するもので、そのためわれらの判斷が主觀的に不純になるからである。

なほ云はねばならぬ事がある。一般に觀相の道に於ては、人間の知的能力は、道德的能力よりも遙かによく解るものである。これ思ふに前者の方がより多く外部に浸出するからであらう。即ちそれは顏と其表情とにあらはれ、歩容に示され、且ついかなる小さい運動にも發露するもので、恐らく人は、或人の馬鹿か、痴呆か、天才なるかを、背後から見て判別する事が出來るであらう。運動の鉛のやうな鈍重は、愚昧をあらはし、痴呆は其印章を一切の態

度に捺し、才氣と思考とは同じく外部に現はれる。ラ・ブルイエールの言葉の基く所はこゝにある。彼は曰ふ『われらの擧動のどんな細かい、どんな目につかぬものでも、われらの本性を示す或ものがそこにあらはれてゐないものはない。馬鹿は入つて來ても、出て行つても、坐つても立ち上つても、默つて居ても立つてゐても、天才ある人とはまるで違ふ』と。序でに曰へば、ヘルヴェチュウスに依ると、常人は天才を見つけ出し且つこれを回避する確かな・素早い本能を持つて居る相だが、これは上揭の意見から說明がつく。然し天才と愚人との相異が、かく一擧手一投足の間にもあらはれる所以は、まづ第一に次の事實に基くのである。一體頭腦が大きく且つ發達して居れば居るほど、また頭腦の割合に脊髓と神經とが細ければ細いだけ、知能ばかりでなく、同時に四肢の可動性や柔順さもまた增大する。何となれば、この場合、四肢は頭腦から、より直接に且つより截然と支配せられ、從つて凡てがより多く、一本の糸によつて操られることになつて、あらゆる運動のうちには、其目的が精密にあらはれるからである。これは、動物が進化の階段上、高等になればなるほど、より容易く、唯一個所を傷けることによつて殺すことが出來ると云ふ事實に類似する。否、これと聯關してゐる。例へば蝦蟇類を見よ。彼等の運動が鈍重で怠惰で緩慢である如く、彼等はまた愚鈍である、同時に非常に執着的の生命を有する。これは彼等が非常に貧弱なる頭腦と、甚だ太い脊髓と神經とを有することから說明がつく。然し一般には步行と腕の運動とは、主として腦の作用によるものである。何となれば四肢は、脊髓神經を介して腦髓から運動と其運動の修正（いかに小さい修正でも）とを受けるからであり、これがまた自意的の運動はわれらを疲らす理由となるのである。そして疲勞の感は、苦痛の感と同じく、腦髓のうちに其席を有するもので、われらが考へるやうに、手足のうちにあるのではない。それ故に疲勞は睡眠を促進する。然るに有機的生活の運動で、腦髓から喚び起されたのではないもの、即ち無意識的の運動は、疲れることなく繼續する。心臟・肺臟の運動がそれである。思考と手足の運動とは、共に同じ頭腦の働きであるから、個人の性質の如何に從つて、頭腦の働き方の特質は、此兩者に現はれる。愚昧な人々は木偶像のやうに運動し、英才の人のあらゆる關節はものを云ふ。——知力的性質は其の態度や運動よりも、遙かによく顏面によつて認知される。詳しく云へばそれは顏の形、額の大きさ、顏面の諸道具の緊張と運動、特に眼のそれから認知される——眼にも許多

の階級があつて、下は豚みたいな小さい・曇つた・つかれた眼から初め、幾多の中間階級を經て、天才の爛々烱々たる眼まで上つて行く。——怜悧な眼付は、いかに上等なものでも、天才のそれと異なる所以は、前者が意志に奉仕してゐる事の歷然たる證據を示すに對して、後者はこれから全然離脫せるところにある。〔通常人の知力は意志に奉仕してゐるが、天才の知力は意志の羈使から離れてゐると云ふのがショオペンハウエルの根本的見解である。なほ悉しくは天才論を見よ。——譯者〕——夫故にスクウアルザフィキイが、其著『ペトラルカ傳』のなかで、自分がペトラルカと同時代人なるヨゼフ・ブリヴィウスから、傳へ聞いた事として載せてゐる逸話は、全然信を措くに足るものである。それに依ると、或時ペトラールカが多くの紳縉貴人の間に立ち交つて、ヴィスコンティの宮廷に出て居た時、ガレアッツオ・ヴィスコンティは當時まだ少年であつたが、後にはミラノの第一の公爵となつた子息を顧みて、臨席せる人々のなかから、最も賢明な人を選び出せと命じた。少年はすべての人達をしばらく眺めて居たが、遂にペトラルカの手を握つて、父の許へ連れて行つたので、一同は非常に驚嘆したといつてゐる。思ふに自然は、人類中の傑出者には其品位の印章を明瞭に捺押するので、子供にすら認められるのであらう。此故に私は、私の明敏な同國人諸君に忠告したい。曰く諸君にして今一度、或平凡人を三十年間も偉大なる思想家として吹聽したくなつたら、其折にはどうぞヘエゲルみたいにビーヤホールの主人然たる人相の持主を、此對象物として選擇なさらぬやうにお願ひする。自然は此男の顏の上に、讀み易い手蹟を以て、自分の得意な『平凡人』と云ふ文字を、ちやんと書いて置いたではないか。

然し人間の知力的方面に關する事は、其道德的方面卽ち品性には當篏らない。後者を觀相的方法で認定するのは遙かに困難である。何となればそれは形而上的のもの、として、非常に深いところに存し、身體と關係はあるけれど、知力のやうにこれと直接に結びついてはゐず、又その或部や系統と關聯してゐるのでもない。且つ各人は自己の悟性を——一般に人間はそれに甚だ滿足してゐるものであるが——公然と示し、且つあらゆる機會に際してこれを示さうと努力するけれど、道德的方面を全く自由にさらけ出す事は甚だ稀で、大抵は故意に隱匿するものだからである。そして長い練習は此隱匿を甚だ上手にする。また一方既に述べた通り、惡い思想と無價値な努力とは、漸次に顏面に其痕跡を殘して行く。特にそれは眼に殘るものである。夫故に、觀相的に批判して、われらは或人が決

して不朽の作を出し得ざる事を、容易に保證し得るけれども、其人が決して大罪を犯さぬであらうといふ保證を與へる事は出來ないのである。

生存空虛の說

生存の空虛なる事は、生存の全形式に於て『時』と『處』とに於ける個人の有限なるに比べて、此兩者夫自身が無限なることに於て、現實の唯一の生存法式としての刹那的現在といふ現象に於て、或は一切の事物は相關聯し相依憑するものなる事に於て、または、世にかつて常住するものあることなく、凡ては絕えず流轉し、變化するものなることに於て、或はまた滿つるを知らざる望蜀の念に於て、最後にまた人間の努力には常に妨礙が加へられ、人生はこれを克服するまで、これと戰ひ、これを切り拔けて進まねばならない事に於て、明らかにあらはれてゐる。『時』と、『時』のうちに於ける・また時によつての萬物の轉變とは、單に形式に過ぎないものであつて、此形式の下に於て、『生きんとする意志』は——物自爾(ディング・アン・ジッヒ)として不滅・恒久なる『生きんとする意志』は、自己の努力の空しきことを示されるのである。——『時』なるものは、その力を以てすると、すべてのものが如何なる時にも、われらの手のうちに於て『無』になるものであり——從つて萬物は此力のためには其眞の價値を喪失する。

嘗て存在したものは、今は最早存在しない。今存在しないと云ふ點では、丁度嘗て存在しなかつたものと同一である。然し現在存在するすべてのものは、次の瞬間には既に存在したとなる。だから現在は、それがいかにつまらないものであらうと、最も價値ある過去よりもすぐれてゐる。前者が現實だからである。そして前者が後者に對する關係は、『有(エトワス)』が『無(ニッヒ)』に對すると同じである。——

人は幾千年か生存して居なかつた後に、突如として、生存のうちに表はれ來つて自らも驚くのであるが、間もなくまた非生存の境に入つて幾千年かを過(すご)すのである。かう云ふ見方に對して、感情は反抗して曰ふ、『これは決して正しくはない』と。粗野な悟性すら此種の事を觀察して『時』は其性質に於て或理想的なものではないかと豫感する。思ふに『時』の理想性は『處』の理想性と共に、一切の眞の形而上學の祕庫を開くべき鍵鑰である。何となれ

ば、此理想性のあるによつて事物の自然的秩序とは全然異つた別種の秩序の存在する場所が作られるからである。カントの偉大な譯は玆に在る。

われらの生涯のどの出來事についても、われらが『ある（イスト）（現にある義）』と云ひ得るのは、只の一瞬間に過ぎない。其後は永遠に『あつた（ウァール）』と言ふ言葉でこれを云ひ現はさなければならぬ。宵々毎にわれらの生涯は『一日丈け乏しくなるのである。若し永久のつきせぬ泉がわれらの有に屬しゐて、われらはいつでも其うちで生命（いのち）の時（とき）を新に得ることが出來ると云ふ隱れたる意識が、――われらの本質の最も深い根柢に横はれる此意識が、――存在しなかつたなら、われらはわれらの短い生命の時間が、刻一刻と過ぎて行くのを見て、恐らく亂心せざるを得ないであらう。

此觀察を土臺として、次のやうな說を立てる事も、たしかに出來る。眞實なものは現在だけであつて、他の一切のものは、單に思想の遊戲に過ぎないから現在を享樂し、これを生の目的となす事こそ最も大きな眞理だと云ふ考へである。然し此考へ方もまた最大の愚見たるを免れない。何となれば次の瞬間に最早存在せざるもの、夢の如く全く消え失せるものは、決して眞摯なる勞力の對象たる價値を持ち得るものではないからである。

われらの生存は、消え行く現在より外に、その上に立脚すべき何等の基礎をも持たない。それ故にわれらの生存は、其本質上、不斷の運動を其形とするもので、われらの常に追求する安靜は何等の可能性をも持つてゐない。さればわれらの生存は、例へば山を走り下る人の如く、停止しようとすれば、倒れざるを得ないから、只走りつゞける事によつて倒れないで居るのである。――或は指頭に載せて均衡（バランス）を取られた棒にも似て居るし――或はまた絶えず運行する遊星にも似て居る。遊星は其運動を止めるや否や、太陽のうちに墜落するものである。――されば『不安』が生存の形である。

いかなる種類の安定も、いかなる持續的の狀態もあり得ないで、一切は小休みなき旋轉と變化とをつゞけ、急ぎ・飛び、綱の上で絶えず步いたり・動いたりして自分を支へて居るやうな此世界に於ては――『幸福』といふ事は、想像すら出來ないのである。プラトーンの所謂『不斷の變化のみあつて、決して常住のなき』ところには、幸福は

住み得るものではない。まづ第一に、誰も幸福ではない。人は一生を通じて、想像上の幸福を追求する。しかもこれに達する事は稀れで、よし到達しても直ちにあてちがひの失望を感ずる。だが通常は、何人も最後には、船破れ檣折れて、港のうちに走り込むのである。然し變轉常なき現在から成り立ち來つて今や其終りにやつて來た生涯に於て、これまで幸福であつたか不幸であつたかと云ふ問題の如きは、もはや最後の港に入つた以上は、結局全く同じ事となるのである。

更にまた、人間の世界に於ても動物界に於ても、かの偉大にして多樣な・休みなき運動が、饑餓及び性慾なる二箇の簡單な衝動によつて起され又維持されて行くのは——恐らくは『退屈』の感じも少しくこれに加はつて働くだらうが、——實際驚異に價する事ではないか。なほまたこれらのものが、人生と云ふ變化多き人形芝居を操る複雜極まる器械に向つて、主要な動力を供給し得るといふ事も、同じく驚異に價するではないか。

今これを少しく詳細に觀察すると、まづわれらの眼に映ずるのは、無機物の存在が、絶えず化學的の力によつて攻撃せられ、遂には消滅せしめられるのに對して、有機物はこれと反對に、物質への斷えざる代謝によつて其生存を可能ならしめられて居る事、及び此代謝そのものは絶えざる流入を、——從つて外部から救援を得る事を必要とする事象である。それ故に有機的生活は、それ自身に於て既に、手の上で均衡を取られてゐる棒に酷似する。かゝる位置に据ゑられたる棒は、常に動搖せざるを得ない。この故に有機的生活は、絶えざる需要であり、常に反覆してやつて來る缺乏であり、而してまた終りなき困窮である。然し此有機的生活のおかげを以て、初めて意識が可能となるのである。——從つてすべての有機的生活はまた有限の存在であるが、この對偶として無限の生存が考へられる。それは外界からの攻撃に曝されず、外部からの救助をも要せず、此故に恒久に自己を變ぜず、永遠に靜止するものであつて、本來發生したものではないから滅びることもなく、轉變することもない。これには『時』がなく『多數』もなければ『多樣』もない。——このものに對する消極的の認識が、プラトーンの哲學の根本基調をなすものである。『生きんとする意志』の否定は、この狀態に向つて道を開拓する。

われらの生活の有様は、粗細工のモザイクの畫に似て居る。近いところで見ては、何等の效果をも持たない。こ

れを美しく見るためには、遠ざかつて立たねばならぬ。だから熱望した或ものを手に入れることは、とりもなほさず其價値なきことを見出す意味である。而してわれらは、常により良きものを期待して生活するが、同時にまた過去の事柄に對して悔悟的憧憬を懷くことが屢々在る。たゞ然し現在の事件のみは、一時的のものとして理解され、目的に達する道程であるとしか考へられない。夫故に大抵の人は、最後になつて、自己の過ごした生活を回顧すると、其一生を通じて一時的の暮らしを續けて來たことを發見し、氣にも留めず・味ひもしないで過ぎて來たものが、卽ちこれ彼等の生涯であり、且つ彼等がそれを期待して生活して來たものは、實は此生活に外ならなかつた事を見出して愕然とするであらう。故に人間の生涯は希望によつて愚化されつゝ、死の腕のうちに跳り込むものである。

個人的の意志はまた、足るを知らざるものである。このために願望の滿足は、更に新らしい願望を生じ、其要求は永へに充足さることなく、無限に向つて進んで行く。これは畢竟、意志をそれ自身として考へて見ると、一切世界の主權者であつて、すべてのものが隷屬するのであるから、意志に滿足を與へ得るものは、『部分』ではなくて、『全體』でなければならぬのに、『全體』は無限だからである。——われらが今、此世界の主權者が個々的現象となつてあらはれて來た時、いかに僅少のものしか與へられないかを見る時、——大抵は個人的の肉體を支へるに足りるだけしか與へられないのを見る時に、同情の念を禁じ得ないのである。人間の深き悲しみはかくして生ずる。

現代は、精神的に無能無力であり、あらゆる種類の惡を崇拜する事にかけては、頗る卓越せる時代であつて、實に夫(か)の自讃的で衒揚的で且つ語調の不快な『現時(イエツトツアイト)』と云ふ言葉と甚だよく適合してゐるやうに思はれるが——(『現時』と云ふ言葉の示す『今』は、最もすぐれた『今』であつて、此『今』を生ぜんがためにのみ、すべての他の『今』があつたのだと豪語するかのやうに響いて來る)、——此現代に於ては汎神論者すら、人生は所謂『自己目的』であると公言するのを憚らないのである。然し若しわれらの生存が世界の究極の目的であるなら、それこそ古往今來世のなかに存在した目的のうちで、——これを樹てたものがわれらであつても、他人でもあつてもそれに論なく——最も愚劣な目的であらう。

人生は、まづ一個の仕事としてあらはれる。自己の生命を保持する仕事がそれである。此仕事が遂げられると、

得られたものは重荷となる。つゞいて第二の仕事があらはれる。それは虎視眈々たる猛禽のやうに、安全なる域に入つた生活を見つけると、直ちに襲ひ來る『退屈』を防ぐがために、得られたものを適當に處理する事がそれである。されば人間の第一の仕事は或ものを得ることで、第二の仕事は、其得たものを忘却する事にある。さうしなければ人生は、一個の重荷となるのである。

人生が迷誤の一種であることは、人間が慾望の複合物であつて、其充足は容易に得らるべきものではないが、たとへこれを滿足し得ても、それは單に苦痛なき狀態を與へるだけであり、此狀態はまた人間に『退屈』の感じを、與へるに過ぎない事を考へて見さへすれば十分に解る。此退屈の感じは人生そのもの〻空虛の感じであるから、また直接に生存そのもの〻無價値を證明するものである。若し生が、――われらの全存在はこれに對する要求から成つてゐるが、――積極的で且つ眞實な價値をそれ自身のうちに持つてゐるとしたら、決して退屈の感じを與へる筈はない。却つて、單に生存してゐるといふ事それ自身が、既にわれらに充足と滿足とを與へなければならぬ。然るにわれらは或何物かを得んとして努力するか、或は純粹に知力的な仕事に沒頭するかでなければ、生をたのしまないのである。前者にあつては、目的へまでの距離と、其途中に存する障碍とが、目的そのものを、われらに滿足を與へるものとしてわれらの眼に映らしめる。然し此幻影は目的に到達した後には消え失せる。――後の場合に於ては、棧敷に居る觀客の如く、人生を外部から見るために、人生を脫出するのである。感覺的の享樂すらも、不斷の渴望の裡に存するもので、その目的が果されるや否や忽ち消失する。二者のうちのいづれか一つに從事することなくして、生存そのもの〻上へ投げ出されると、われらは生の無價値と空虛とをしみじみと感悟する。これが卽ち『退屈』である。――また、驚異すべき事象に對するわれらに內在的な・滅ぼしがたき慾求は、いかにわれらが事物の成行きの退屈で且つ自然的な順序の中斷せらる〻ことを好むかを示すものである。――夫の華美な生活をなし、堂々たる城廓に住む貴人の贅澤も、所詮はわれらの生存の本來的な貧弱さを超脫せんとする無益な努力に外ならない。冷頭靜思するならば、寶石・珠玉・羽毛或は多くの蠟燭に照さる〻赤天鵞絨・舞踏者・輕業師・假裝や假裝行列の如き、そもそも何物であらうか?

人體と云ふ極めて巧みに錯綜せる機關のうちにあらはれた『生きんとする意志』の最も完全な顯現も、遂には塵に歸らざるを得ないものであり、其全存在も全努力も、最後には明かに絶滅の手に委ねられると云ふ事は、意志の全努力も畢竟空虛な・果敢なきものである事を、常に眞實で正直な『自然』が、素朴な方法でわれらに陳述するに外ならない。若し生がそれ自身に於て何等かの價値あるものであり、絶對的のものであるならば、『無』を目的として持つ筈はない。――この事についての感じは、次に掲げるゲエテの美しい詩の根柢をなして居る。

『古塔の上高きところに、勇者の氣高き心はあり。』

『死の必然』は人間が單に一個の現象であつて、決して物爾自（ものそれみづから）ではなく、從つて眞に存在するものではないと云ふ事から、直ちに抽出し得る命題である。然しかゝる種類の現象のうちにのみ、其根柢に存する物爾自があらはれ得るといふ事は、物爾自の性質の結果である。

われらの生涯の初めと終りとの間には、いかなる差異があるであらうか！　前者は熱望の迷想と樂慾の歡喜とから成り、後者は一切の機關の破壞と死屍の腐敗とから出來て居る。健康と生の享樂との二つの方面から見ると、生涯の始と終との間の道は、常に下り坂の觀を呈して居る。たのしく夢見る小兒期と、愉快な靑年期、困難の多い壯年期と、虛弱なる・また往々憐れむに堪へたる老年期、最後の疾病の苛責と臨終の苦悶。から觀じて來ると、生存其ものが、既に一個の失錯であつて、其結果は漸次に、且つ益々多く現はれて來るやうに思はれないであらうか？

人生を幻滅だと理解するのが一番正しい。凡べてはさう觀ずるやうに出來てゐるのは、十分明白なことである。

* * * *

若し人が其眼を世態の成行きを大觀することから轉じ、特にまた人間生死の急速な連續や、其須臾な假現的存在を觀察することから轉じて、例へば喜劇にあらはれるやうな人生の細部を眺めると、世と人との姿は、かの滴蟲類の群れる水滴や、肉眼には映ぜざる乾酪蛆の群などが、顯微鏡にうつし出さるゝ有樣に髣髴する。此等の動物の熱心なる活動や鬪爭は、觀察者を笑はせるが、人生とてもこれを比較し得ざるものではない。何となれば、かゝる

狹い場所に於ける偉大にして且つ眞面目な活動が、滑稽感を起さしめると同じ理屈で、人間の生涯の如き短い時間に於ける同じやうな活動も、當然同樣の感じを與ふべきものだからである。——

人生は顯微鏡的性質のもので、分つべからざる一個の點である。われらはこれを時と處との二つの强いレンズによつて引伸ばすが故に、著しく擴大されてわれらの眼に映ずるのである。

『時』とはわれらの頭腦のうちに在る一裝置であつて、『持續』と云ふ事によつて、物とわれら自身との全然空虛な存在に、現實の外觀を與ふるものである。——

過去に於て、或幸福を獲、或享樂を捉へ得べかりし機會を利用せずに逸した事を、後で悔しがつたり・喞つたりするのは馬鹿げたことである。——たとへ其機會を利用したからとて、今になつて何が殘つて居ようぞ？　記憶の枯燥せる木乃伊だけではないか。われらに與へられたすべてのものは、みな斯の如きものである。されば『時』と云ふ形式は、どうそれが見積られやうとも、實は一切の地上の享樂の空虛な事を、われらに敎示する手段に外ならない。

われらの存在とすべての動物のそれとは、共に確立せる・而して少くとも時間的に定止せるものではなく、單なる流轉の存在に過ぎない。それはたゞ推移によつて存立するもので、渦卷ける水に比較する事が出來る。尤も肉體の形はしばらくの間はほゞ不易である。然しそれはたゞ、物質が不斷に代謝して、舊きものは棄てられ、新らしきものが輸入せられると云ふ條件の下に於てゞある。されば此輸入に適當せる物質を絕えず供給する事が、あらゆる生物の主な仕事である。彼等は同時にまた彼等のかゝる生存が、上述の如くほんの僅かの間である事を自覺して居る。夫故に彼等は其退去するに當つて、彼等の代りに來るべき他の生物に、彼等の生存を讓らうと企てる。此企圖は自意識のうちには性的衝動となつてあらはれ、他物の意識、卽ち客觀的の觀方に於ては生殖器の形に於てあらはれる。此本能は、例へて云はゞ眞珠を貫ける糸のやうなもので、急速に相續いであらはれる個體は、丁度眞珠が相追ふて現はれるに似て居る。若しわれらが想像のうちに於て此繼續の速度を早くし、且つ其順序全體に於ても、個々の眞珠に於ても、常に同一の形を保つて、しかも其材料を絕えず變へるのを想見する時には、われらの生存なるも

のは、單に一個の似而非生存に過ぎないのを知るであらう。存在する唯一つのものは觀念であつて、これに對する事物は、影の如き性質のものたるに過ぎずとなすプラトーンの學說の根柢には、かゝる見方が存するのである。——

われらは、物爾自に對して單なる現象に過ぎざる事は、榮養料として常に要求せらるゝ物質の不斷の流出と流入とが、われらの生存の必須的要件をなす事によつて、確められ例證せられ且つ明示される。われらは煙とか・焰とか・瀑布などに比ぶべきもので、他からの流入がなくなるや否や、直ちに衰へ又は停止する。——

『生きんとする意志』は、結局虛無に終るべき純粹の現象のうちに現はれるものだと謂ふことが出來る。然し現象そのものと共に、此虛無は『生きんとする意志』の內部に止まつてゐて、其基礎を上述の意志の上に置くものである。然しこれにはいくらか不明な點もあるが——

人類世界の全體を一目のうちに集めて、これを大觀しようと試みるならば、眼に映じ來るものは、そもいかなる光景であらうか。到る處でわれらが目睹するものは、いかなる瞬間にも生じ來る・脅威的の一切の危險と殃とに對して、人々が自己の命と存在とを擁護せんがために、肉體と精神との全力を鼓して、絕えず戰鬪し・猛烈に力爭する有樣である。——若しわれらにして、これらすべてが價する價格、卽ち生命と存在そのものとを考へて見るなら、苦痛を離脫せる生存の若干の空隙の存在を見出すであらう。然し此空虛も直ちに『退屈』の襲ふところとなつて、新らしい要求のために速かに狹められる。——

新らしい要求の後ろには、直ちに『退屈』の存する事は、——此退屈はまた怜悧な動物をも襲ふものである——生そのものがいかなる眞正の價値をも有せず、單に必需と幻迷とによつて運動せしめられるに過ぎざる事の結果である。此運動が停止すると、生存の絕對的の不毛と空虛とがあらはれて來る。——

何人も『現在』に於て自己を十分に幸福だと思つた人はない。若し人がさう感じたなら、そのために全く酩酊したのであらう。——

狂氣に就いて

精神の眞の健全は、完全に想起し得ることにある。勿論想起といふ事に關して、われらの記憶は、あらゆるものを貯藏し得るもの丶やうな解釋をしてはならない。蓋しわれらが通過して來た生活の徑路は、時間に於て收縮する事恰も旅人が過ぎて來た道を顧ると、それが空間に於て縮まつて見えると同一である。個々の年を區別するのは、往々にしてわれらに困難を覺えしめるが、日附に至つては大抵は解らなくなつて仕舞ふ。然し本來的には、全く同一で且つ無數に反覆され、其形が、云はゞ相蔽ふやうになつた出來事のみが、個々に認知することの出來ぬ位に、記憶そのもの丶うちで混同すべきものである。これに反して、知力が正當で力強く且つ全く健全であるならば、何等かの意味に於て特殊的な或は重要な出來事は、記憶のうちに留まつてゐて、直ちに再び發見さるべき筈である。——此記憶はたとへ漸次に、其充實と明瞭との度を減じはしても、平均的に繼續して行くものであるが、此等の斷ち切れた狀態を狂氣と名づけるのだと私は既に述べて置いた〔『意志と表象としての世界』第一卷第三十六章參照〕。これを確證することに、次の觀察を役立てようと思ふ。

健全な人の記憶は、彼自身が目擊した事件に對して、或確實性を賦與するもので、此確實性は或事物に對する現在の彼の知覺と同じ位に堅固で安全なものだと考へられる。だから彼が宣誓すると、その事件は法廷に於て確實な事だと決定される。之に反して、狂氣だと云ふ單なる嫌疑すらも、證人としての陳述は、直ちに其效力を減殺される。『正氣』と『狂氣』との間の準據は、畢竟上述の點に存するものである。若し私にして、私が思ひ出した或事件が事實存在したものであるかどうかを訝り出すやうになれば、私は自分自身に對して狂氣の疑ひをかけた事を意味する。但し其事件が夢で見た事であつたかどうか判然しない場合は除外である。また人あつて、私の正直な事を疑はないで、しかも私が目擊者として話す事件の眞否を疑ふならば、其人は私を狂人だと考へて居るのである。また、元は自分の虛構した事件であるが、屢々これを繰り返へして話したために、仕舞には自らもこれを信ずるやうになつたら、其人は此一點に於て實際既に亂心して居るのである。われらは狂人に對して、機智とか・個々の利發な考へとか、或はまた正當な判斷をすら期待する事が出來るが、たゞ過去の事件に就ての彼の證言には全然信を措くことが出來ない。人の知る如く佛陀釋迦牟尼の傳記なる『普曜經（ラリタウイストラ）』に於ては、佛陀が降誕した時、全世界の凡べての

病者は健やかに、すべての盲者は見えるやうに、すべての聾者は聞えるやうになり、そしてすべての狂者は『其記憶を取り戻した』としてある。最後の事件は、剩へ二個所で述べられてゐるが、味ふべきことではないか。

私自身の多年の經驗は、私を次のやうな推測に導いた。狂氣は比較的に最も多く俳優間に現はれるものであると。一體これらの人々はいかばかり彼等の記憶を濫用するであらうか！　彼等は毎日新らしい役割を覺え込むか、或は舊い役割を繰り返へさなければならない。此等の役割はすべて相互に無關係であるのみならず、互に矛盾し反對してゐる。そして各の俳優は、毎夕全く別な人物になるために、自己を全然忘却しようと努力してゐる。かゝることは直接に、狂氣への道を拓くものである。

狂氣の發生に就ては、私の主著〔『意志と表象としての世界』〕第一卷に述べて置いたが、これは次に擧ぐる事を思ひ起すならば、よりよく理解されるであらう。即ちわれらは、われらの興味・われらの矜持・或はわれらの願望を手ひどく傷ける事物を考へるのを嫌ひ、これらの事を眞面目に且つ精密に檢究せんが爲に、われら自身の知力の前に置く事を躊躇し、しかも之と反對に甚だ容易く無意識的にこれらの事柄から脫離し、或はまたこれを逃避するけれど、愉快な事件は全く自發的に心の中に浮び出て、たとへこれを驅逐しても、幾度も繰返へして來襲するので、われらは幾時間も思ひをこれに奪はれる事などを想ひ見る事がそれである。さうすれば主著に述べた事柄は、ずつとよく理解されるであらう。意志は元來、自己の厭ふものを、知力の光の下に來らしめる事に反抗するものであるが、狂氣が人間の心のうちに闖入する場處は、此反抗そのものゝうちにある。と云ふのは、凡てのいやな新らしい出來事は、知力によつて同化されなければならない。即ち、此いやな新事件は、たとへそれよりより滿足を與ふるものを押しのけなければならないやうな事があつても、兎に角われらの意志と其利害とに關する眞理の體系のうちに於て、或場所を占めなければならないのである。此事が出來て仕舞へば、上述の新事件がわれわれを苦しめる事は甚だ少くなるが、此作業そのものは、往々にして甚だ人を苦しめ、また大抵はたゞ徐々に且ついやいやながら行はれる。然し此作業がいつも間違ひなく行はるゝ限り、精神の健全は存續し得るのである。これに反して、或場合に、意志が或認識を受け容れる事に對して甚しく反對し抗爭して、其ために上述の作業が全然實行されなくなると、或種の事件

又は變化は、知力の眼に對して全然隱蔽される。何となれば意志はこれらのものを見るに堪へないからである。かくして生じた空隙は、必要な關聯をつける爲めに、勝手なもので充塡され——こゝに狂氣が生ずるのである。何となれば知力は、意志に奉仕してそれを悅ばさうとする自己の天分を放棄したが故に、今や人は在りもしない事を想像する。然しかくして生れた狂氣は、堪へ難き惱みのレーテ河〔希臘の傳說に據ると、レーテ河は冥界を流れる河流で、此水を飲めば萬事を忘却すると云はれてゐる。こゝでは世の惱みを忘れしむるものゝ義である。——譯者註。〕であり、惱ませられたる自然の——即ち意志の最後の救治法であつたのである。

私の見解のあやまらざる所以を示す・注意すべき一證左を、こゝで序でに擧げようと思ふ。カルロオ・ゴッチイ〔伊太利の貴族で喜劇作者。一七二〇——一八〇六。戲曲的童話の制作を以て有名である。——譯者註〕は其戲曲『士耳其の怪物』第一幕第二場に於て、忘れさせる魔藥を飲んだ人物を出すが、それは全く狂人のやうに見える。

上に述べた事によつて、狂氣の起源は、或何等かの事柄を、心から高壓的に「投げ出す」謂であると認め得るが、此「投げ出し」は然し、或他の事柄が頭に入る事によつてのみ可能である。之に反對する成行、即ち何事かゞ「頭に入る」のが先きで「心から出る」のが後れると云ふやうな經過は、ずつと後れてある。然し此經過は、或人が自分の依つて以て狂した誘因を、常に念頭に思ひ浮べて、終にこれから離脫し得ざる場合に生ずるもので、例へばそれは戀愛から來る多くの狂氣、所謂エロトマニイ〔色情狂〕に於ける如く、本人は其原因となつた事柄に纒綿して居る。或は又突然に起つた・恐ろしい出來事に對する恐怖が、原因となれる狂氣の如きも此部である。かゝる病者にあつては、既得の考へを、云はゞ死力を盡して把持してゐるから、他の考へ——特に之と反對の思想は現はれて來ることが出來ない。此二つの經過は然し、本質上何等の相違もない。即ち、劃一的に聯絡ある囘想の出來ない事は、兩者に共通な特質である。然るにかゝる囘想は、われらの健全にして・理性的な熟慮の根柢をなすものである。——狂氣の發生する成行に就ての上述の相違は、これを正當に批判して適當に應用するならば、眞の妄想を分類するに鋭く且つ深い根柢を與へるであらう。

私は、これまで狂氣の精神的原因ばかりを觀察して來た。即ち外的・客觀的の機緣によつて導かれ來つた原因のみを見て來た。然し狂氣は、純然たる身體的原因、即ち腦髓または其外皮の畸形又は部分的のディスオルガニザツィ

オーン〔組織の分解〕や、疾病に冒された他の部分が腦髓に與へる影響などに基く方がより屢々である。間違つた感覺的直覺即ち諸種の幻覺は、主として後に述べた種類の狂氣に於てあらはれる。然し狂氣を生み出す身體的並びに精神的原因は大抵相互に關與するもので、特に精神的原因が肉體的原因に影響するところが多い。それは丁度自殺の場合と同じである。自殺は元來、外的機緣のみによつて行はれる事は甚だ稀れで、或肉體的の不快が、其根柢に橫はるものである。此不快の程度によつて外界からの機緣の大小强弱も決して來る。不快が最高の程度に達した時のみ、外部からの機緣は全然不必要になるのである。だから、如何なる不幸も、誰でもを自殺せしめる丈けの力はなく、どんなに小さい不幸でも、これと同じ位の小不幸が人を自殺せしめた事がなかつたと斷じ得るほどに小さいものはない。私は狂氣の心的起源を述べて、健全な人――少くともすべての外見上健全だと思はれる人が、大なる不幸の爲に發狂する所以を明らかにした。然し肉體的に旣に狂氣的傾向を甚しく有する人々にあつては、極く僅かの不快事でも、これを發狂せしめるに足るだけの力を持つ。例へば、私は精神病院に居た或一人を想ひ出す。それは以前兵士であつたが、士官が彼をエルと呼んだ爲めに發狂したのであつた、〔獨逸語のエルは本來「彼」の意味であるが十七世紀から十八世紀の央にかけて對稱の尊稱として用ゐられた。然し近時は相手をからかふ時か卑しむ時かに用ゐられるだけである――譯者註〕。狂氣となるべき明白なる肉體的素質があつて、それが十分に成熟した場合には、全く何等の機緣もなくして發狂するものである。單に精神的の原因から來た狂氣は、思想の進行を無理に倒錯させるから（此倒錯はまた狂氣を生ずるものである）、腦のいづれかの部分の一種の痲痺又は其他の敗壞を引き起し得るもので、この痲痺または敗壞は、速かに除去されないと、永續的のものになる。それ故に狂氣は當初に於ては治し得るけれど、やゝ暫らく經つてからは醫しがたいものである。

ピネルは、譫妄狀態（デリリウム）のない躁病（マニア）〔亂心なき狂氣〕の在る事を敎へたが、エスキロールはこれを駁擊した。爾來これに對する贊否の議論も多く出たが、此問題は單に實驗による外に解決の道はない。然しかゝる狀態が實際に存在するものであるなら、その說明は次のやうになる。卽ち意志が時を定めて、知力の支配と指導とから、從つて動機から全然脫離し、盲目的な・猛烈な・破壞的な自然力としてあらはれ來り、從つて其道に當る一切のものを絕滅せんとする病的慾望としてあらはれる。かく解放された意志は、堤防を破つた水流、騎者をはね飛ばした馬、制動螺旋の取り去

られた時計に似て居る、但し此場合停止を受けるのは、理性卽ち思慮する方の認識であつて、直觀する方の認識ではない。もし後者が停止されるならば、意志は全然其指導者を失ひ、隨つて人間は動けなくなつて仕舞ふ。然し狂者は客體に向つて突進するから、それはたしかに客體を知覺してゐるのである。彼はまた現在の行爲を自覺し、後になつても此行爲を記憶してゐる。然し彼には一切の思慮がない、卽ち理性によつて指導されることがない。從つて現存せざるもの・過去に屬する事または未來に關する事件に對する熟慮と考量とは、狂者のなし得ざるところである。發作が經過して、理性が支配權を恢復するやうになると、理性の作用は正當に歸へる。何となれば狂氣の發作の場合には、理性それ自身の活動が狂はせられたのでも、壞られたのでもなく、たゞ意志が暫らくの間、理性の支配を全く離脫する方法を見出したのに過ぎないからである。

性愛の形而上學

われらは詩人が主として性愛の描述に從事するのを見るに慣れて居る。それは通常すべての戲曲の——悲劇でも喜劇でも、ロマンチックなものでもクラシックなものでも、印度劇に於ても歐洲劇に於ても一切の戲曲の——主想(ハゾプトテーマ)であるが、同樣にそれはまた敍情詩並びに敍事詩の遙かに大きい部分の材料となつてゐる。殊に歐洲のすべての文明國に於て、幾世紀か以前より每年每年、地の果菜(なりもの)のやうに規則正しく作り出された幾百千の小說を、後者のうちに算入するならば、尙更(さら)である。此等の作はすべて、其主なる內容に依れば、此激情の多岐な・短い或は詳細な記述に外ならない。またこの激情の最も成功せる描述、例へばロメオとジュリエット、新エロイーズ(ルーソーの小說)及びヴェルテルの如きは、不朽の名聲を得た。然しロシュフコオが、激情的の愛と幽靈とを比較して、すべての人々がその話しはするけれど、何人もそれを見たことはないと言ひ、同樣にリヒテンベルヒが其論文『愛の力に就て』に於て、此激情の現實性と自然性とを駁擊して否定したのは、實は大なる誤謬である。何となれば、人性の自然と懸け離れた而してこれと矛盾するものが、——卽ち據り所なくして畫かれた戲畫の如きものが、——あらゆる時代に亙つて、詩的天才者から倦む事なく描寫せられ、人類から不變の興味を以て迎へられるなどゝ云ふ事はあり得べからざ

るものであるから。そしてまた眞理なくんば、いかなる藝術的の美も存在し得ないからである。

『何物も眞より美しきはなく、眞のみが愛らしいものである。』——ボアロオ。

然し日常の經驗ではないが、兎も角經驗の確證する事實で見ると、通常の場合には、强烈なだけでなほ制御し得らるゝ偏愛となつてあらはれるものも、或事情の下では、其の激烈さに於て他の一切の激情を凌駕するものとなり、一切の顧慮を排斥し、信ずべからざるほどの力と忍耐とを以て、あらゆる障碍を打ち破り、遂には自己の滿足の爲に生命さへも躊躇することなくして賭し、且つ此滿足が全く拒まれる場合には、生命を投げ出すやうにすらなるものである。ヴエルテル〔ゲエテの有名な小説『若きヴエルテルのなやみ』の主人公である。〕やヤコポ・オルテイ〔十八世紀から十九世紀の初にかけての伊太利詩人ウゴオ・フオスローロの書簡體の小說『ヤコポ・オルテロの最後の書簡』の主人公で戀のために死ぬ『ヴエテル』の系統に屬する小說である。——譯者註〕の如き人々は、單に小說の中に存在するばかりではなく、歐洲に於ては此種の人間が一年に少くとも六人はあらはれる。然しこれらの人々は、人に知られざる死によつて失はれる。何となれば、彼等のなやみを記述する人は、役所の記錄掛の書記か新聞の探訪記者の外にはないからである。それでも英國や佛國の新聞に於ける警察裁判的の記事を讀む人達は、私の云ふところがあやまつて居ない事を證明して吳れるであらう。然し此激情の爲めに精神病院に入る人の數は更に多い。最後にまた、外界の事情に妨げられた戀人同志の情死に就ても、年々いくつかの場合が示される。然し相互に愛し合つて居る事が確實であつて、此愛を享樂することに於て至上の幸福を覓めようと期待せる戀人達が、何の故に、極端な手段に訴へてもあらゆる面倒な關係を押し除け、如何なる困難を凌いでも生存を續けて行かうとはせずに、彼等に取つての至上の幸福を、彼等の生命と共に放棄するのか、私にはどうも說明がつかない。——然し此激情の度の低いものや、單なる萠芽は、誰でも每日眼の前に見て居るし、老人ならぬ限り、大抵は誰しも胸のなかに持つて居よう。

上來の言によつて考へて見るなら、何人でも、性愛なる事件の實在性と重大さとを疑ふ事は出來ない。夫故に、あらゆる詩人の常用たる此主題を、哲學者が一度取つて自己の主題になした事を〔哲人たる自分が、詩人の常用主題を取扱ふ事との義〕怪むより先きに、かく人生に於て重要な役目を演ずる事件〔卽ち性愛〕が、これまで哲學者達からほとんど全く觀察さるゝ事なく、未だ加工を經ざる素材として現存せる事實について驚く方が至當であらう。古來此問題に最も多く關與した哲學

者はプラトーンであつて、『饗宴』と『ファイドロス』とは特に此問題を取扱つた篇である。然し、彼がこれについて洩らしてゐるのは、神話・寓話及び冗談の範圍を出ないで、大部分はまた希臘の男色にのみ關係して居る。ルソオは其著『不平等について』に於て、此題目に就て少しばかり述べてゐるが、それは間違つても居るし、不充分である。性愛に關するカントの解説は、其論文『美と崇高との感について』の第三節にあるが、それは甚しく皮相な觀方で、また專門的の知識を缺いて居る。從つて或點まで不正當である事を免れない。最後に來るのはプラアトネル〔一七七四―一八一八、獨逸の醫學・著述人類學者〕であつて、彼は其著『人類學』の千三百四十七頁以下に於て、此問題を論じてゐるが、これは何人が見ても淺薄皮相の見としか受け取れない。これに反してスピノーザの定義は、その豐かな素朴味の爲めに、こゝに引用される價値を持つ。『戀愛は外部的原因の觀念が隨伴する一種の快感である』と。こんな譯だから、私にはそれを利用したり辯駁したりすべき先輩がない。此問題は客觀的に私の許に押し寄せて來て、自ら進んで私の世界考察の連鎖のうちに入つたものである。――その上、丁度今此激情に支配されて居り、從つて自己の豐かな感情を最も崇高靈妙な形象で云ひあらはさうと努める人々の目からは、甚だ少い喝采を受けるに違ひないと私は自分ながら期待して居る。かう云ふ人達にとつては、私の意見は餘りに物質的で、また形而下的に見えるであらう。然し事實に於ては、形而上的で更にまた超絶的ですらあるのである。たゞ私は次の事だけは一寸考へてもらひたいと思ふ。それは、今彼等を感激させて、マドリガル〔一種の戀歌〕やゾネト〔短詩の一體〕を作らせてゐる事件が、もう十八年も前に起つたら、彼等からはほとんど一瞥をも與へられなかつたらうと云ふ一事である。

何となれば、すべての戀愛は、いかにそれが靈妙な外觀を呈して居やうとも、其根柢は性的本能のうちにのみ在るもので、加之、それは一層確定せる・特殊的な・剩へ最も嚴重な意味に於ける個人的の性的本能に過ぎざるものであるからである。この一事を堅く記憶しつゝ、性愛がそれの凡ての階段と色合とに於て、單に劇や小說に於てのみならず、實際世界に於ては、生命に對する愛に次いで、凡ての衝動のうちで最も強い・最も活動的なものたるを見、又それが人類の若い側の力と思想との半分を絶えず占領し、殆ど一切の人間の努力の最終の目標となり、最も重大な事件に有害な影響を與へ、最も眞面目な仕事をいかなる時間にも中絶させ、折々は最も偉大なる頭腦をすら暫ら

くの間混惑せしめ、政治家の商議の間へも、學者の研究の間へも、つまらない事件を携へて妨害しつゝ平然として闖入し、艶文や毛髪を官廳の紙挾みや哲學上の原稿のなかに押し入れる術を知つて居り、同樣に巧みに日々最も紛糾せる・最も悪い事件を計畫し、最も貴重な關係を切り離し、最も強固な羈絆を斷絶し、時あつてか生命或は健康を、時あつてか又富と地位と幸福とを犧牲として供へしめ、またその他の場合には、正直な人をも不正直にし、これまで眞實であつた人をも裏切ものに仕上げ、從つて全體から見ると、一切を轉倒し・混亂せしめ・そして轉覆するやうに努力する悪意あるデーモン〔鬼神〕としてあらはれ來る有樣を眺めるならば、われらは次のやうに叫ばざるを得ないであらう。『此騷擾は何のためであるか？』『此雜沓と喧騷と心配と困窮とは抑々何のためであらう？』と。實際、問題の眞相は、たゞいづれのハンス〔男名。こゝでは一般に男を代表してゐる〕もが自分のグレーテ〔女名。こゝでは一般的に女を代表してゐる。〕を見つけ出すといふ事である〔私はこゝで自分の思つてゐる事を本當に云ひあらはすことを敢へてしなかつた。だから好意ある讀者は、此文句をアリストフアネス風の言葉に飜譯しなければならない。――原著者註〕。然しかゝる一小事が、何故にかく重要な役目を勤め、良く統制された人生のなかへ、絶えず攪亂と紛糾とを齎すのであらうか？　――然し眞理の精神は漸次に、眞面目な研究者に答を示して與れる。問題となつてゐる此事件は、實は前に考へたやうな一小事では決してない。寧ろ事件の重要性は、所爲の眞面目と熱心とに完全に一致適應して居るのであつて、あらゆる戀愛事件の窮極の目的は、――其事件がゾクス〔希臘の演劇で喜劇に用ゐられた半靴〕で演ぜられやうと、コトルン〔同じ悲劇に用ゐられた半長靴。譯者註〕でやられやうと、――人生に於ける他の一切の目的よりも、實際一段と重要であり、從つて人々が此目的を追求せんとする際に採る・深い眞面目さに充分してゐるのである。その故は、これによつて決定されるものは、次の時代の構成と云ふ大事件である。われらが舞臺から下りた時に、新に登場するであらうところの劇中の人物は、此瑣末と見える戀愛事件によつて、其存在に關しても、其性質に關しても、きちんと決定されるのである。未來の人間の存在が一般にわれらの性慾によつて條件づけられるやうに、これらの人間の性質も、性慾滿足の場合に於ける個人的選擇、即ち性愛によつて全く規定せられ、且つこれによつていづれの點に於ても、取消しのつかぬやうに確定せられるのである。こゝが此問題を解決する鍵鑰の存するところで、此鍵鑰を使用するに當つて、戀愛のいろいろの程度を――即ち下は最も輕微な好愛から、上は最も激烈な激情に至るまでの階段の各を――通過して調べて行くなら、これを

もつと充分に理解するであらう。そして其時戀愛の程度の相違は、選擇の個性化の程度の如何に相應するものである事を知るであらう。

夫故に、現在の人々のすべての戀愛事件をひつくるめて、それはみな人類が未來の時代の組成についてなす眞面目な省察であり、この組成にそれ以後の無數の時代の組成がかゝつて存するのである。此事件に於ては、他のすべての事件に於けるやうに、個人の幸・不幸が問題である事はなくて、將來に於ける人類の生存とその特殊の性質とが問題であり、從つて個々人の意志は、より高い程度に上つて、種族の意志としてあらはれて來るのであるが、此重要な事件の上に、戀愛事件の感動的にして崇高なところや、其歡喜と苦痛との超絶的なところが基礎を有し、詩人達はこれを無數の例證に於て描述すべく、幾千年の間倦むことを知らなかつたのである。いかなる主題でも、興味に於ては、この右に出づるものはあるまい。且つ戀愛は、種族全體の幸不幸に關係するものであるから、これと、單に個人の幸福にのみ關係する他のすべての事件との關係は、丁度立體が平面に對すると同じ關係である。されば戀愛事件なき戲曲を興味づけるのは、非常に困難なことであり、他方に於ては、戀愛の上敍の性質から、たとへそれが毎日主題として信用されても、決して用ゐつくされることがないのである。

個人の意識のうちに一般に性慾としてあらはれ、異性の或一定の個人の上に向つて居ないものは、それ自身丈け取つて考へ、現象を離れて見れば、單に「生きんとする意志」に過ぎないのである。然し或一定の個人に向けられた性慾として、意識のうちにあらはれるのは、それ自身に於て、「ちやんと定まつた個性として生きようとする意志」である。此場合には性慾は、たとへそれ自身に於て主觀的な要求であつても、其巧みに客觀的讚美と云ふマスクを蒙り、これによつて意識を欺く術を知つて居る。これは、自然が自己の目的のためにかゝる戰術を要するからである。然し此讚美がいかに客觀的に、且つ崇高な色彩を帶びてゐるやうに見えても、あらゆる戀着なるものは、或一定の性質を有する個體を產み出すのを目的としてゐる事は、戀着の場合に於ける主要事が、交互の愛などではなくて、所有——即ち肉的の享樂そのものである事によつて、眞先に證明せられるのである。夫故に交互の愛は確實であつても、肉的享樂が缺乏すると、前者がこれを補つて慰安を與へることは出來ない。寧ろかうした境地では多く

の人は自殺したのである。これに反して強き戀着を懷ける人々は、もし相互的の愛を得られない時には、所有——即ち肉的享樂を以て甘んずる。この事はすべての强制的結婚によつて證明されるし、同樣にまた、婦人の嫌ふのにも拘らず、澤山の贈物や其他の犧牲物を以て購はれたなさけ或は進んで强姦的行爲などによつて立證される。この特定の子供が生れるといふ事が、——たとへ關係者たる當人達の意識には登らずとも——戀愛事件全體の眞の目的であつて、この目的を達する方法は、副次的の事にすぎない。——かう言ふと、氣高い・敏感な人々、特に目下戀に陷つてゐる人達は、私の見解を、粗野な現實論だと云つて笑ふであらうが、いかに哄笑しやうと、私の方が正しくて、笑ふ方が間違つてゐるのである。何故かと云へば、次の時代の個體を精確に定めると云ふ事が、彼等の誇張的な感情や、超絕的でシャボン玉みたいな考へ方より遙かに高い・遙かに價値ある目的を持つてはゐないのか？ 此世界に存するいろいろの目的と名のつくもののうちで、此目的よりもつと重要な・もつと大きいものがあり得るであらうか？ 激しい愛情が感ぜられた時の深さや、その發露した時の眞面目さ、その範圍のうちにあつたり、其機緣となつたりする瑣事に與ふる重い意味などは、上述のやうな目的の存在することを考へる時に始めて理解されることで、これらの現象は、此重大な目的にふさはしいものである。此目的を眞の目的だと考へる限り、愛の相手を得るために費す煩雜な勞力や限りなき努力や苦勞などが、事件に相應するものだと考へられる。何となれば、かうした活動と勞苦とによつて此世に生み出されるものは、全く個性的の決定を受けた將來の時代だからである。否、此の時代は性慾の滿足のために、相手を用意周到に・且つ確定的に・そしてまた自分の意見を以て選擇する行爲——これを人は戀と名づける——のうちに旣に働いて居るのである。戀する二人の間に於て增加して行く愛情は、畢竟二人が產み得・且つ生まんと欲してゐる新らしい個體の「生きんとする意志」に外ならない。のみならず、此二人の戀情に充ちた眼差が、はたと相會ふた時、そこに最早新らしい生命の焰は燃え初め、此新らしい生命は、自らが調和せる又良き組成を有する將來の個體であることを告知してゐる。彼等二人は實際相合同し融合して只一個のものとなり、此一個のものとしてのみなほ生存しつゞけようとする熱望を感ずる。此熱望は彼等の產み出したもの〔子供〕に於て滿足を得るのである。即ち此もの〔子供〕のうちには、二人の遺傳的性質が一個のものに融合歸一して生存し續け

るのである。反對に、男女の間の動かし難い・執拗な・相互的嫌惡は、もし彼等が子供を生むなら、それは構造の惡い・それ自身に於て不調和な・不仕合なものであらうといふ事の徴證である。夫故にカルデロン（一六〇〇—一六八一西班牙の劇詩人）は、恐ろしいセミラミスを大氣の娘と呼んだけれど、しかしこれを强姦の娘（此れには夫殺しといふ行爲が後續した）として紹介した事には深い意味が存する。

最後に云へば、性を異にする二個の個體をして、他を排してかやうに强く相互に牽引せしめるものは、全種族のうちにあらはれたる「生きんとする意志」に外ならない。この意志は今や、二人の間に生るべき個體のうちに、意志それ自らの目的に適合せる・自己の本質の客觀化を・最早豫見してゐるのである。此新個體は、父からは意志卽ち性格を、母からは知力を得、體質は兩者から受けるであらう。然し大抵は姿に於ては、母よりも父により多く似、大きさに於ては、父よりも寧ろ母に似るものである。——これは、動物の雜種をつくる場合にあらはれる法則に依つて云つたのであるが、此法則は主として、胎兒の大きさは子宮の大きさに從はねばならぬと云ふことに基くのである。個人個人の全く特殊な・そして全く特有な「個性」なるものが、說明の出來ぬやうに、二人の愛着者の全く特別な・個性的の激情も、亦說明の出來ないもの である。——實際、此二者は深い根柢に於ては同一のものであつて、前者は後者に於て含まれてゐたものの發露である。新個體の成立の端緖、其生命の眞の發生點（プンクトウムサリエンス）として目さるべきものは實際は兩親が互に相愛し初める瞬間である。英語の非常にうまい言ひ表はしを用ゐると、『互にすき（ファンシイ）』初めた瞬間がそれである。——旣に述べた通り、二人の憧憬的な眼差が相會ひ相附着した時に、新個體の最初の萠芽が生ずるのである。此萠芽も勿論、他のすべてのものの萠芽のやうに、大抵は踏み躪られ、ものにならないで終るのである。此新らしい個體は、云はゞ新らしい（プラトーン的の）觀念であつた、凡べての觀念は、因果の法則が彼等の間に分與する物質を貪り捉へて、非常な焦燥（あせり）を以て現象として現はれ出でようと努力するものであるが、上敍の人間的個體の特殊な觀念も、同樣に最大な貪慾と焦燥とを以て現象界に自らを實現せしめようと努力する。此貪慾、此焦燥こそ、未來に兩親となるべき戀人同志の間の激情である。此激情には無數の程度があるが、其兩極端はこれを『地上の愛』及び『天上の愛』と名づけて差閊へない。——但し其本質から見ると、いかなる階段、いか

なる程度に於ても全く同一である。然し單に程度の上から見ると、此激情が個人的であればあるほど――換言すれば、愛せらるる方の個體が、其一切の部分と性質とによつて、愛する方の個體の願望やその個人性によつて確立された要求やを滿すのに、最も適合して居れば居るほど、――愈々其力を增して强くなる。然し此場合、何が重要な問題であるかは、更に硏究を續けて行くうちに明瞭にならう。纏綿的の好愛が、第一にまた根本的に向ふところは、健康と力と美と、從つてまた靑春とであるが、これは意志が、あらゆる個性の基底としての人類の種族的特質を現し出さうと努めるからである。日常の戀愛三昧はこれ以上に進んで行かない。その次には、特殊の要求がこれに結びつく。此要求の何たるかを、われらは進んで個々に討究して見ようと思ふが、『兎に角これらの要求と共に、――これが滿足さるべき見込のある場合には、激情は、ますます程度を高めて行く。然し此激情が最高の程度に上るのは、二個の個體が相互によく適合する時である。此適合によつて、父の意志卽ち性格と、母の知力とは互に相結合して、個體を玆に完成する。此個體は、全種族のうちにあらはるる一般的の「生きんとする意志」が憧憬するものであり、此憧憬は意志そのものの宏大さに適應せるものであるから、從つて人間の心の限界を踏み超えて居るし、其動機もまた同様に個人の知力の範圍を越えて居る。さればこれこそ眞の偉大なる激情の魂である。――次に考察さるべき多くの條件の各に於て、二つの個體が相互に適合する事がより完全であればあるほど、相互の間の纏綿は愈々强烈になるであらう。由來世の中に全然同一な條件は二つはないから、或定まつた女は、或定まつた男に――產み出さるべきもの〔小兒〕にいつも關係して――最も完全に適合するに違ひない。かゝる二つの個性の相逢ふ事は甚だ稀であるが、それと同じく眞に激甚な戀愛も世に稀なものである。然しかゝる愛の可能性は、何人の心のうちにも在るから、詩的作品に於てかゝる高度の愛が描かれても、われらは理解し得るのである。――戀の激情は本來生るべきものと其性質とを中心として、その廻りに旋轉するものであつて、其核子もそこにあるのだから、性を異にする二人の若い・よい教養の在る人達の間に於て、その心ばせと性格と精神の方向とが一致してゐる事を基礎とせる友情が――性愛の全然混交して居ない友情が存立し得るのである。單に性愛が全然混じて居ないばかりではない、此點に於ては互に相嫌忌して居る事すらある。この現象の原因を尋ねて見ると、若し彼等が結合して子供を生むならば、

その子供は肉體的又は精神的に不調和な性質を持つであらうと云ふ事になるであらう。約言すれば、その子供の生存と資質とが、種族のうちに現はるる「生きんとする意志」に適合しないからであらう。これと反對に、心ばせ・性格・精神の方向などが質を異にして居て、それから生ずる嫌惡もあり、進んではまた敵意を懷くにも係らず、性愛が生じまた存立する事があり得る。その場合には、性愛そのものが上述のすべての相異に就て、二人を盲目ならしめるのである。かゝる時に、性愛が結婚をするやうにそゝのかすと、それは甚だ不幸な結婚となるであらう。——

さてこれから、もつと根本的な討究に入らうと思ふ。——一體、自利的觀念(エゴイズム)は、一切の個性に亙つて一般的に存在する根深い性質であるから、或個人の活動を喚び起さんがためには、自利的の目的を示すのが一番よく、かうすれば最も確實に奏效するものだと考へて差支へない。確かに、種族は、死滅の運命を有する個體性そのものよりも、個體に對して、より早く・より近く・且つより大なる權利を持つてはゐるが、個體が種族の持續や權威のために、活動しなければならぬ場合とか、或はこのために犧牲を拂はなければならない時に、當該事件の重要なる所以を、知力に十分に理解させ(—知力は個體的目的のみ考へるやうに出來てゐる—)、これによつて個體が事件の重要性に適應して活動するやうに仕向けることは決して出來ない。夫故に、かうした場合には、自然は次のやうな手段を講じて、自己の目的を達し得るにすぎない。卽ち自然は、個體に或種の妄想を植ゑ込み、その力によつて、實際は種族の爲めにする事をも、個體自身の爲めになる事の如くに思はせるやうに仕組むである。そのために個體それ自らは、自己に盡してゐると思ふのだけれど、實は種族のために盡力してゐるのである。而して此場合には、後(あと)ではぢきに消失する單なる幻(まぼろし)が、彼の眼前に搖動し、動機として現實の事物の代理をする。此妄想こそ本能に外ならない。此本能は大抵の場合、種族の感覺(ジン)とも見做すべきもので、種族の利益になる事を、意志の面前につき出して見せる。此場合には意志が個體的になつて居るから、この爲に欺かれて、種族の感覺のつき出したものを、個體の感覺で知覺し、實際は單に一般的(ゼネラアル)な(此場合、「一般的」と云ふ言葉は最も本來的な意味で、解されなければならぬ)目的を追求しつつあるのに、個體的の目的を追求しつつあるのだと思惟せざるを得ないやうになる。われらは、動物に於て、本能の外面的なあらはれを、最もよく觀察することが出來る。これ動物に於ては、本能の役割が最も重要なものである

からである。然し本能の內的の成行は、すべての內面的な事と同樣に、われら自身に就て經驗して知り得るものである。よく世間では、人類には最早ほとんど本能はなく、今持つてゐる本能は、恐らく、新生兒が母の乳房を求めてこれをつかまへる位のものであらうと云ふけれど、事實に於て、われらは甚だ確定せる・明瞭な・加之複雜した一個の本能を持つて居るのである。卽ちそれは、性の滿足のために、他の個體を、微妙な方法で・眞面目に且つ自意を以て選擇する本能がそれである。此滿足それ自身は――詳しく云ふと、此滿足が個體の切なる要求に基く肉的享樂である限りは――相手となる個體の美醜には、何等の關係もないのである。夫故に美醜に關して熱心に行はれる顧慮と、及び此顧慮から生じ來る周匝な選擇とは、共に明かに選擇者の關知するところではなくて（選擇者そのものは、然し自己の關知するところだと思つて居る）、眞の目的たる生れ出づべきもの〔子供〕の關與するところである。生るべきもののうちには、種族の典型が、出來得る丈け純粹に・また嚴正に保存されてゐなければならぬ。幾多の肉體的の出來事や、道德的の不快事によつて、人間の形態には、種々雜多な變種は生ずるけれど、しかも純正な典型は、そのあらゆる部分に於て、繰り返へし繰り返して作られるのである。これは美意識の指導の下でなされるのであるが、美意識は一般に性慾の先に立つもので、これなくんば、性慾は嘔吐を催すべき汚はしき要求となり下がるのである。されば各個人は、まづ第一に最も美しい個體を――換言すれば、種族の特質が最も明晰にあらはれてゐる個體を――決定的に好愛し、且つ激しくこれを慾求する。第二に、各人は他の個體に於て、自己自身に缺如せる完全を特に要求する。加之自分自身の缺點の反對をなす缺點を、美なりと思惟するものである。例へば小さい男は大きな女を、金髮の人は黑髮のものを索める。――男子が自分の心に適つた美を有する婦人を見た時、眩惑的な狂喜が彼を捉へ、此婦人との合一は至上の幸福であるやうに思はせるのであるが、此狂喜こそ正しく種族の感覺であつて、明らかに現はれた種族的特徵を認識して、これを種族の永遠のものとして行かうとするのである。種族の典型を保持して行くのは、美に對する此牢乎たる愛着心であり、夫故に此愛着は、非常に大なる力を以て働くのである。われらは此愛着心がなす諸種の考慮を、先に行つてから特に觀察しようと思ふ。さて此場合に人間を導くものは、實は種族の最善を目的とせる本能であるが、人間自身は、單に自己自身のより大なる享樂を索めて居ると思惟

するのである。――實際こゝでわれらはあらゆる本能に就ての教訓に富める說明を得た譯である。卽ち本能は此場合と同じやうに、ほとんど一般の場合に、個體をして種族の幸福のために動かしめる。何となれば一匹の昆蟲が、單にそこで自己の卵を產むために、或一定の花や果實や汚物や――或は姬蜂の如く――他の昆蟲の幼蟲を求め、且つこの目的を達するまでは、いかなる辛勞や危險をも恐れざる苦心經營は、卽ちこれ人間が性的滿足のために、或定まつた・自己に個體的に適合せる資質の婦人を念入りに選擇し、これを得んとして熱心に努力し、此目的を達せんがためには往々一切の理性に逆つて行動し、或は馬鹿馬鹿しい結婚により、或は財產と名譽と生命とに價する戀愛事件により、或は進んで姦通又は强姦等の犯罪によつて、自己自身の幸福を犧牲にする事に酷似する。凡てはたゞ到る處に主權を振へる自然の意志に從つて、たとへ個體を犧牲にしても、種族の爲めになる事に力を盡さうとするのである。いかなる場合に於ても本能は、或目的觀念に從つて居るかのやうに働くけれど、然し此觀念は全くないのである。自然が本能を植ゑ込む場所は、行爲する個人そのものが其目的を理解し得なかつたり、目的を追究するのが厭(いや)であつたりする場合である。夫故に通常、本能は動物にのみ與へられてあるもので、しかも主として理解力の最も少い最も下級の動物に賦與されて居る。然し此論文で觀察される場合だけにはほとんど限つて、また人間にも與へられて居る。人間は勿論、目的を理解することは出來るであらうけれど、若し本能がなかつたら、必要なる熱心を以て、卽ち彼自身の個體的幸福を犧牲にするやうなことをしてすら、此目的を追求する事はあるまい。夫故にすべての本能に於けると同じく、眞理は意志の上に働きかけんが爲めに、妄想の形を取るのである。男子を瞞着するものは淫蕩な妄想であつて、このために彼は自分の氣に入つた美を有する婦人の腕に抱かれると、あらゆる他の人の腕に抱かれたより、大きい快樂を感ずるであらうと自ら思ふ。或は進んで、それが專一に只一つの個體に向けられると、此個體を占有することが、彼に一個の豐饒なる幸福を與へるだらうと確信するやうになる。夫故に彼自身は、自分の快樂のために、辛勞と犧牲とを費してゐると考へるけれど、實は正則な典型を維持せんがためにのみ、かゝる苦勞をするのである。或はまた、此兩親からのみ生れ得る全く特定の個體と、生命を與へんがために、かく努力してゐるのである。こゝには、かの本能の特性――卽ち全く目的觀念がなくして、しかもこれに從つて行

動するかのやうに見えると云ふ特性が、十分に存在してゐるので、此妄想に騙られてゐる當人は、自己を誘導する唯一の目的たる生殖と云ふ事を、往々にして嫌忌し且つ妨げたがるのである。これは殆どすべての野合的戀愛に於て見られる。本能の特徴は上述の如くであるが故に、此特性の上から、享樂を遂げた後では、いづれの戀人も不思議な失望を經驗し、且つかやうに熱中して追求したものも、あらゆる他の性的滿足が與へるよりより多くのものを與へない事に驚くであらう。そこで彼はこれをもつて自己の益せられたところのないのに氣がつくのである。此願望と人間の有する他の一切の願望との關係は、種族が個體に對すると同じであつて、夫故にまた無限のものが有限のものに對すると同一である。之に反して、滿足は本來は只種族を益するだけのものであるから、個體の意識には上つて來ない。個體は此際、種族の意志によつて激勵され、あらゆる犧牲を供して、全然自己のものではない或目的に奉仕したのである。夫故に戀する人は、此偉大な仕事をとうとう仕遂げた後で、自分の欺かれた事を感ずるのである。これは、前にあつた妄想が、此時全く消えたからで、此妄想のために、今や個體が種族から欺かれたものとなつたのである。夫故にプラトーンは甚だ適切に云つてゐる。曰く『肉慾は最も多く人を欺く。』

これらのすべての事は、其方の側から、說明の光を動物の本能と其工作慾との上に投げ返す。疑ひもなく動物もまた、彼等を欺瞞する妄想に囚はれて、自己自身の快樂のためにするのだと思つてゐるが、實は非常に熱心にまた克己の念を以て、種族のために働いてゐるのである。鳥は巢を作り、昆蟲は卵のために唯一の恰適所を捜索し、或はまた自分には食べられないけれど、當來の幼蟲の餌として卵側に置かれなければならないやうな獲物を採りにすら出る。蜜蜂・熊蜂・蟻等は、巧妙な巢を作り、非常に複雜せる經濟に沒頭する。彼等はすべて疑ひもなく妄想によつて、――種族のためにする盡力に、自利的目的のマスクをかぶせる妄想によつて――導かれるのである。これは、本能の發現の根柢に橫はれる內的卽ち主觀的經過を、われら自身に理解せしめるには、恐らく唯一の方法であらう。然し外的卽ち客觀的には、われらは、本能によつて強く支配さるゝ動物、特に昆蟲に於ては、神經節の系統卽ち主觀的の神經系統が、客觀的のもの卽ち腦髓系統に勝れる事を發見する。此事實から推して、彼等は客觀的で正當な理解によつては導かれないで、神經節系統が頭腦に及ぼす作用で生ずる・主觀的にして且つ願望をそゝり立て

る表象によつて動かされ、從つて或妄想に驅逐されてゐる事が解る。すべての本能に於ける生理的經過は、斯の如きものであらう。——説明のために、私はこゝで、人間の本能についていくらか弱いが然し別個の一例として、姙婦の氣まぐれな食慾をあげよう。これは胎兒の營養が流入する血液の或特別な又は或一定の變化を、折々要求する事から生ずるやうに見える。そこでかゝる變化を生じ得る食物は、姙婦には忽ち熱望の對象となつてあらはれ、かくしてこゝでもまた妄想が生ずるのである。されば婦人は男子より本能を一つ多く持つて居る。また神經節系統は婦人の方が遙かによく發達してゐる。——人間が動物よりもより少い本能を持ち、且つ此僅かな本能すら較もすれば誤導され易いと云ふ事は、人にあつては頭腦が非常に勝れてゐる事實から説明される。性的滿足の爲めの選擇を本能的に指導する美意識は、これが男色への傾きに墮落すれば、それは誤導されたのである。蒼蠅が、その本能に從つて卵を、腐敗せる肉の上に産みつける代りに、天南星屬の或ものゝ腐肉的な臭ひに誘惑されて、此花の上に産卵するのも、同一の範疇に屬する事である。

すべての性愛の根柢には、「生まるべきもの」（子供）に全く向けられた本能が存する事の確證は、本能をより精しく解剖すると得られるであらうから、われらはこの解剖を避ける譯には行かない。——まづ第一に擧げられるのは、男性は其天性上、戀愛にかけて變り易い方に、女性は變らない方に傾いて居ると云ふ事實である。男子の愛は、其れが滿足を得た瞬間から著しく降下する。また自己の所有せる婦人よりも、他のほとんどすべての婦人が、より強い力で男を引きつける。彼は變化を渴望するのである。之に反して女子の愛は滿足を得た瞬間から上昇して行く。これは自然の目的から生ずる必然の結果である。自然は種族の維持を夫故にまた出來得るだけ大きい增殖を狙つて居る。男子は丁度それ丈けの數の婦人を自由にする事が出來るなら、一年に百人以上の子供を優に作り得るのである。然し女はいかに多くの男を持つても、一年間に（双生兒は別として）一人しか小兒を生むことが出來ない。だから男は常に別な女を求めるけれど、女はしつかり一人の男を守つてゐるのである。蓋し自然は、女性をして本能的に思慮を經ずして、當來の子供のために、扶養者たり保護者たる人を保留して置かせるからである。されば貞操の正しい事は、男子にあつては人工的で、婦人にあつては自然である。夫故に、婦人の姦通は、客觀的に其結果か

ら見ても、主觀的に其反自然な事から云つても、男子の姦通よりも、遙かに宥しがたいものである。

異性に對するよろこびは、たとへわれらにそれが客觀的に見えても、實に單に覆面をした本能であり、言ひ換へると、自己の型を維持しようと努力する種族の感覺に外ならないが、われらは此事を根本的に知り、且つ十分の確信を得るために、此よろこびに於てわれらを指導する諸種の顧慮的條件をより詳しく探究し、且つその細項に立ち入つて論じて見ようと思ふ。たとへ揭げらるべき細項が、哲學的の著書に於ては、奇觀を呈しやうとも。――此顧慮約條件は、次の三つに大別される。其一つは、直接に種族の型卽ち美に關する條件で、も一つは、身體的性質に關するもの、最後の一つは相對的なものに過ぎないか、兩個體の有する偏頗や異常な點に對して、相互的に必要な訂正を施し、互に中和せしめる事から生ずるものである。今われらはこれを一々調査しようと思ふ。

最も高い・そしてわれらの選擇と好愛とを指導する顧慮的條件は、年齡である。全體から云へばわれらは、月經の初まる時から、其閉止する時までの間を性愛の適齡として承認するけれど、其中でも十八歲から二十八歲までの間が、特にすぐれてよろこばれる。上記の年齡の以外では、いかなる婦人もわれらを引きつけることは出來ない。年老いた――換言すれば、最早月經を見なくなつた婦人は、われらに嫌惡の感を起さしめる。若い婦人は美人でなくとも、いつでも人を引きつけるところを持つてゐるけれど、若くない美人は全然人を引きつけない。――夫故に此場合無意識的にわれらを導いて行く目的は、明らかに生殖の可能力一般である。だから一切の個體は、それが生殖又は受胎に最も適する時期を遠ざかれば、遠ざかるほど、いよいよ異性に對する牽引力を失ふものである。――第二の考察條件は健康である。急性の疾病は一時的に邪魔するに過ぎないが、慢性病や惡液質の如きは、われらをいやがらせて退ける。これは、かゝる疾病が子供に移るからである。――第三の考察條件は骨格であるが、これは種族の型の基礎をなすが故である。老齡と疾病とに次いでは、不恰好な容姿ほど人をきらはせるものはない。いかに顏が美しくとも、此缺點を補ふことは出來ない。むしろ顏がいかに醜くともすらりとした姿を持つて居れば、その方が疑ひもなく好かれるのである。またわれらは骨組のあらゆる不釣合を、極めて鋭敏に感受する。例へば寸法のつまつた・太つて低い・脚の短い恰好や、外的の出來事に基いたのではない場合の跛(びっこ)などである。之に反して、著し

く美しい形姿は、あらゆる缺點を償ひ得るもので、われらを蠱惑する力を持つ。これに關聯するのは、われらが小さい足を喜んで、これに高い價値を置く事である。これは、いかなる動物でも其跗骨と蹠骨とを加へると、人間のそれほど小さいものはなく、此事實はまた人間の直立して歩行し得る事に關係があるので、足の小さいのは、人間と云ふ種族の主要的特徴だからである。人間は蹠行動物である。さればまたイエズス・ジラアハ〔猶太人で紀元前二百年頃にエルサレムに於て、ヘブライ語で道德訓集錄を編んだ。其後彼の孫がこれを希臘語に譯した。——譯者註〕はかう云つて居る。『身長が眞直にすらりとしてゐて、美しい足を持つてゐる婦人は、銀の柱脚の上に立てる黃金の柱のやうである』と。齒もまたわれらには重要である。それは營養に對して根本的に必要であり、且つ全然遺傳的なものだからである。——第四の條件は或程度に於ける肉附の豐かな事、言ひ換へると植物性の作用の、即ち可型性の主宰せる事である。これは、かゝる狀態が胎兒に對して豐かな營養を豫約するからである。それ故に甚しく瘠せた女は、著しく嫌惡の念を起さしめる。そして肥えた婦人の胸は、男性に對して非常なる魅力を及ぼす。其故は、これが婦人の增殖作用と直接に關聯して居て、新生兒に豐かなる營養を與へ得ることを豫見せしめるからである。之に反して過度に肥滿せる婦人は、われらに嫌忌の情を起さしめる。此理由は、かゝる體質が子宮の萎縮を——從つて不姙を示すからである。これは頭腦の關知するところではなく、本能の知る所である。——最後の條件として、顏の美しさが初めてやつて來る。此場合にも、最先に觀察されるのは骨に關係ある部分である。夫故に美しい鼻が主として念頭に置かれるのである。短い・空向きの鼻は一切をぶち毀す。上向きに或は下向きに少しく曲つた鼻は、これまでに無數の少女の一生の運命を決定した。これは、種族の型に關係する事だから、さうあるのも尤もである。小さい顎骨によつて出來た小さい口は、動物の口に對して、人間の顏の特有的特質として、甚だ主要なものである。後へ退いた顎——言はゞ削いだやうな顎は特にいやなものである。何となれば前へ出た顎は、われらの種族の專有的な特徵であるから。最後に來る考察の條件は美しい眼と額とである。これは心的性質——特に母から遺傳する知力的性質に關聯するものである。

一方女性の側の好尙が遵奉する無意識的な考察條件を、同樣に精しく列擧する事は無論出來ない。然し大體に於ては次の事項が主張され得る。まづ婦人は男子の三十歳から三十五歳の間を好むと云ふ事實がある。元來人間の最

高の美を現はすのは青年期であるのに、婦人はこれにもまさつて上掲の年齢を好むのである。此理由は、婦人達を導くものが趣味ではなくて、本能であり、本能はこれらの年齢に於て、生殖力が其頂點に達してゐる事を見て取るからである。一般に婦人は男子の美――殊に男子の顔の美には、殆ど目を呉れない。美を子供に與へることは、婦人自身の方だけで引き受けて居るかのやうに見える。主として婦人の心を捉へるものは、男性の力とこれに關聯せる勇氣とである。何となれば、この二つは、強い子供達の生產と、同時に此子供達の勇敢なる保護者たることを確示するからである。男子の持てる肉體的缺點とか、型はづれとか云ふやうなものは、婦人それ自身がこれと同一の部分に於て缺點がないか、或はまた、これと反對の側に於て卓越せるところが在る事によつて、婦人は子供をつくり出す際に、これらを排除し得るものであるから、從つて男子の持てる缺陷が子供に傳はる事はないのである。然し男性にのみ特有で、母が子供に與へ得ざるものはこの例からは、取りのけてある。即ちそれは、骨組みの男らしい結構、廣い肩、狹い臀、眞直な脚、筋肉の力、勇氣或は鬚のやうなものである。夫故に、婦人が往々醜い男を愛することはあるけれど、決して男らしからざる男を愛することはないと云ふ事實が生れて來る。これは後に擧げた缺點を中和することは、婦人のなし得ざるところだからである。

性愛の根柢に横はる顧慮的條件の第二類は、心的性質に關するものである。此點に於てはわれらは、婦人が全く男子の心即ち性格の特質によつて引きつけられるものである事を發見する。――性格は父から傳はるものである。婦人の心を捉へるものは、主として意志の鞏固・決斷・勇氣・及び恐らくはまた正直とか親切とか云ふ諸性質であらう。之に反して、知力上の優秀は、婦人に對していかなる直接の・また本能的な力をも及ぼさない。何となればこれは父から傳はるものではないからである。男子の理解力の缺乏は、婦人の側では別に何とも思はない。寧ろ卓越せる精神力、或は更に天才のやうなものは、一種の變態として不利な結果を將來する。夫故に、醜い・愚かな・粗野な人間が、良い修養のある・聰慧な・且つ愛らしい男子を退けて、婦人の愛を占領する事が間々在る。また愛情から出た結婚が、精神的に全く種類を異にした人々の間になされることが折々ある。例へば男は粗野で、力強くて・識見が狹く、女は感じがやさしく、考が纖細で、修養あり・審美的である場合とか、男が天才であり學者であつて、女が鈍物にす

ぎない場合などがそれである。

『似もつかぬ形と心と(の人々)を、兇暴な微笑を以て、堅きくびきの下に結びつけることを好む戀の女神（ヴヰーナス）にはさう思はれたのである。』

このわけは、此場合知力的方面ではなく、これと全く異つた顧慮的條件が支配するからで——即ち本能の顧慮する諸條件が幅をきかすからである。結婚の目的は、夫妻が靈敏な談話を交す爲めではなくて、子供をつくることである。結婚は心と心との結合ではない、體と體との結合である。されば若し婦人にして或男子の精神に戀着したと主張するなら、それは虚浮な笑ふべき云ひ草であるか、或は變種せる心の過度の緊張に過ぎない。——男子はそれと反對に、本能的の愛に於ては、婦人の特性的の性質によつて決定されるものでない。多くのソクラテースがそれぞれのクサンティッペを見出したのは此譯で〔ソクラテースの妻クサンティッペは精神上のいかなる點に於てもソクラテースの配たるに相應せざる無理解にして猛烈な悍婦であつた——譯者註〕例へば沙翁、アルブレヒト・デュウラア、バイロンの如きは其仲間である。然し知力的性質は母から傳はるものだから、此場合に作用はする。それでも此ものの影響は、較もすれば肉體的の美によつて凌駕され易い。肉體の美は、もつと重要な諸點に觸れて、もつと直接に作用するものである。そこで一方では、世の母親達は此ものの作用を經驗したことがあつたり、或は感じたりして、自分達の娘が男の心を引きつけるやうに、美術やいろいろの語學をなど修得させる。此場合には、彼等は人工的な手段によつて、知力を補修してやらうとするので、それは恰も、必要な場合には臀や胸に詰物でもして、娘の美しさを增補してやらうとするのと同一である。——但し玆で論じて居るのは、いづれも、眞の戀着がそこからのみ生ずる直接にして且つ本能的な牽引力に就てである事を、讀者に記憶してもらひたい。怜悧な修養のある婦人が、或男子に於て其理解と才智とを尊重し、或は男子が理性的な熟慮によつて、其許嫁の性格を試めし、また考察するやうな事は、こゝに論じてゐる問題に關係はない。かゝる事柄は、結婚に於ける好性的選擇の基礎にはなるけれど、われらの問題としてゐる激情的な戀愛には關係がない。

こゝまでは、私は單に絶對的の考量條件、即ち何人にもあてはまる顧慮的條件を觀察して來た。今度は私は個人的な相對的條件に移つて行かう。かゝる種類の考察條件にあつては、既に不完全にあらはれて居る種族の型を改良

し、選擇者自身が既に持つて居る型(かた)はづれを訂正し、かくして型の純正な表はれへ還元させるのが目的である。それ故にこの場合には、各人は自己に缺けたるものを好愛する。かゝる相對的の條件に基く選擇は、個人の資質から出發し、そして個人的資質を目標(めあて)にして居て、夫の單に絶對的な條件から出立する諸條件に比べると、ずつと確定的で・明白で・且つ排他的である。だから、眞の激情的な戀愛の根源は、此相對的の考察條件のうちに存するのが通常で、たゞ普通の・より輕い愛性の念の源泉だけが、絶對的の考量條件のうちにあるであらう。されば大なる激情に火を點ずるものは、別に、規則正しい・完全な美を持てる婦人たるを要しないのが通常である。眞に激情的な愛が成立するがためには、或一事が必要であるが、此或一事は化學的の譬喩に依つてのみ云ひ表はされる。即ち兩方の人間は、酸とアルカリとが中性鹽になるやうに、互に中和するものでなければならぬ。これに必要な條件は主として次の如きものである。まづ第一に、性はいづれも偏(かたよ)れるものであつて、此偏(かたよ)りは或個人に於ては、他の人におけるより、よりはつきりとまたより高い程度で存在するから、いづれの個體に於ても、此偏りは甲なる異性によりてよりも、乙なる異性によりてずつと良く補塡され・中和されると云ふ事があり得るものである。これは、新たに生まるべき個體に於ける人類の型を補正するために、――新個體の構成と云ふ事が、如何なる時にも、萬事の目標となつて居るのである――自己の偏倚(かたより)とは反對の偏倚が必要だからである。生理學者の知れる事實によると、男性にも女性にも各無數の程度・階段が許されてゐて、これらの階段を經て、男性は忌むべきギナンデル〔男女兩性を有する人、卽ち兩性變體の一種を持つ人――譯者註〕やヒポスパディエウス〔尿道下裂症を持てる人、尿道下裂は兩性變體者に附きものである――譯者註〕まで沈んで行き、女性は快活なアンドロギーネ〔雌性變體の一種、――譯者註〕にまで上つて來る。而して此兩側から完全なヘルマロフデティヌムス〔陰陽體〕に達し得るもので、兩性の中間を保つて、そのいづれにも加はらず、從つて蕃殖の役に立たない個體は、このヘルマロフデティヌムスと云ふ狀態に立つものである。從つて二個の個體が相互に中和するために必要なのは、男の側の男性的性質の或程度が、女の側の女性的性質の或程度に適合して、其ために兩方の偏倚が互に消し合ふ事である。されば最も男らしい男は、最も女らしい女を求め、其反對に男らしくない男は、女らしくない女を求める。かくしてあらゆる個體は、性の程度に於て、自己に適合してゐる度合のものを求める。此場合、二人の間に於て必要な比例が、どの位な程度であるかは、

彼等によつて本能的に感知される。そしてこれは、他の相對的の條件と共に、より高い程度の愛着の根柢をなすものである。夫故に相愛する人達は、互に心が調和してゐると稱するけれど、大抵の場合、生まるべき子供と其完全なこととに關した方面に於て、上述の種類の調和が、事件の核子をなしてゐるのであるし、またこの方が彼等の心の調和よりも明らかに重要なものである。——精神の調和は、結婚後間もないうちに、ひどい不調和に變ずる事が屢々有る。これにまた別の考察條件が馳せ參ずる。その條件は、各個體がその弱點・缺陷及び型外れの、生るべき子供に宿つて永久化し、或はそれらが全く變態なものに生長するやうな事のなからんがため、他の個性の力をかりて、これらのものを排除せんと努めるものであるといふ事實に基礎を置くものである。例へば、男が筋肉の力の方面で、弱ければ弱いだけ、いよいよ多く力強い婦人を求めるであらうし、婦人の側からも同様な要求が行はれるのである。然し婦人は力の弱いのが自然であり、また通常でもあるから、女が力の強い男を好くのは普通である。——次に重要な考察條件は身體の大小である。小男は決定的に大女を好み、小女はまた大男を好く。若し小男が、父の大きいにも拘らず、母の小さかつたために影響されて小さくなるのなら、大きい婦人に對する憧憬は愈々激しくあるであらう。何となれば、此男子は父から脈管系統とその勢力とを引きついで居て、此エネルギーは大きい體軀に血液を供給し得るからである。これに反して、父も小さかつたのなら、此嗜好はより少く感じられやう。大きい男子を大きな女子がきらう譯は、あまりに大きな人種の出來るのを避けようとする自然の意圖に基くもので、それは、此婦人の與へる力では、かやうな人種が長生するのに、力が餘りに弱いからである。然しそれでもかゝる婦人が、社交場裡でもつと立派に見えようとするがためなどで、大きな夫を選ぶならば、子孫が此愚擧を償ふやうになる。——次にまた、肌色に對する顧慮は甚だ決定的なものである。白い肌色の人は、黒い又は褐色のものを要求するが、後二者が前者を要求するのは稀れである。此理由は、金髪と碧眼とはたしかに亞種——否ほとんど變態を構成するもので、白鼠或は少くとも白馬に似たものである。白色人は歐洲以外のいかなる所にも土生的でなく、極地の近傍にすら生れては居らぬ。たゞ歐洲にだけ土生的なものであつて、明らかにスカンディナヴィヤから發源したものである。序にこゝで私の意見を述べるが、一體白い肌色は自然的なものはなく、人間は本來、われらの祖先の印度人のやう

に黒いか又は褐色の肌色のものであり、從つて白色の人間が原始的に自然の懷から出たことはなく、白人種と云ふ言葉は、隨分口にされるけれど、實は白人種と云ふ人種はなく、すべての白色人は褪色したものである。自分の不慣れな北地へ押し込まれて、そこで外來植物のやうに生存し、これらの植物のやうに、多には溫室を必要とし、幾千年か經つうちに、人間はとうとう白色になつたのである。約四百年前に歐洲へ移つて來たチゴイネル〔英語でジプシイと云ふ漂泊種族である〕は、印度人種の一つであるが、それは今や印度人の肌色から歐洲人のそれへの過度狀態を示して居る。夫故に自然は性愛といふ事でもつて、原型たる黒髮と褐色の眼とへ歸らうと努力するのであるけれど、白色の皮膚は第二の自然になつた。勿論それは印度人の褐色化した肌が、われらをいやがらせるほどの程度ではないけれど。――最後に云ふと、肉體のいづれの部分に於ても、各個體は其缺點と型はづれとを矯正しようと努める。其部分が重要であればあるだけ、其努力はなほ激しい。夫故に獅子鼻の人は鷹のやうな鼻や鸚鵡のやうな顏を見ると、口では云ひ切れないやうな滿足を感ずる。他の部分についても同一である。過度にひよろ長い構造の體軀・四股を有するものは、不相當にちゞまつた・短い構造の身體をすら美しいと見るものである。――氣質に就ての考量的諸條件も同樣な具合で行はれる。各人は自己と反對の氣質を好む。但しそれは唯其人の氣質が判然したものであることの割合に應じてである。――或點に於て甚だ完全な人は、これと同じ事に於ける不完全を捜し且つ愛するやうな事は勿論ないけれど、他の人々に比べては、より容易にこれを氣にしないで居ることが出來る。何となれば彼自身には、此部分に於ける大なる不完全が子孫に傳はる心配がないからである。例へば自分自身の色が極めて白い人は、黃色を帶びた顏の色を見ても、いやな感じを起さないであらう。しかし黃色な顏を持てる人は、目もくらむばかりの白色を見ると、神々しく美しく思ふであらう。――極めて醜い婦人を男が戀するといふ稀有な場合は、前に述べた兩性適合の程度が、きちんと調和するやうになつて居て、女の變態的事項全體が、自己のものと精確に反對の位置に立ち、互に中和し得るものたる時である。かゝる場合には戀着は高度に達するならひである。

われらが、婦人の身體の各部を檢査しつつ觀察する場合や、婦人がまたわれらに對して同じ事をなす場合に於ける眞面目さ、われらの氣に入り初めた婦人を、われらが研究する際に於ける批評的愼重、われらの選擇の我儘な事、

許婚の夫が許婚の妻を觀察する鋭敏な注意、いかなる點に於ても欺かれまいとする用意周到、重要な諸部分に於ける過剩又は不足に對して重き價値を置くこと――これらはすべて、目的の重大さに全く相應して居る。何となれば新らしく生れるものは、一生涯の間、同じやうな部分を持たねばならぬからである。例へば、婦人がほんの少しだけ脊が曲つて居ても、やゝもすれば、その子息は傴僂になる。他のすべての場合にも、かうした事はあるのである。――これらの事についての意識は、勿論存在しては居ない。むしろ誰でも、此のむづかしい選擇は、自分自身の樂欲の爲にするのだと思惟してゐる（樂欲は此場合實は參加し得べきものではない）。然し彼は、自分自身の體質を前提として、それが種族の利益に丁度良く適應するやうに選擇をしてゐるのである。種族の典型を、出來得るだけ純粹に保つことが各人の祕密なつとめである。個體は此場合自ら知らないで、より高いもの、卽ち種族の命をうけて働くのである。夫故に、事物そのものとしては、個體にとつてはどうでもよいものであるかも知れず、否どうでもよいものであるべき筈のものを、個體が重要視するやうな現象が起る。――初めて相見た異性の若い二人が、互に相觀察する場合に於ける無意識で深い眞面目さや、彼等が相互の上に投げる探究的で・貫くやうな眼差や、兩當事者のあらゆる部分と容貌とが受けなければならない細心な檢閱など、――すべて此等のもののうちには全く特別な或物が存する。卽ち此探究と檢覈とは、彼等二人によつて生れ得べき個體と、其性質の組合せに就ての種族の守神の冥想である。此冥想の結果によつて、相互の氣に入りの程度、並びに相求むる强さの程度が決定する。此相求むる心はまた、著しく高い程度に上つた後、それ以前には氣がつかないでゐた或事が發見された爲めに、突然に消失することもある。こんな風に、種族の守神は、生殖能力を有するすべてのもののうちにあつて、來るべき種族について冥想してゐる。クピード〔愛の神〕がたえず活動的に、思案し熟慮しつつ從事して居る大事業は、當來の種族の構成に外ならない。種族そのものと、すべての來るべきものとに關するクピードの大きな仕事の重要さに比べては、その全體が一時的の性質しか持つてゐない個體に關する事柄の重要さの如きは、甚しく低く・乏しいものである。それ故にクピードは、從者を遠慮なく犧牲にしようといつでも心掛けて居るのである。何となれば、クピードが個體に對する關係は、不死のものが死滅するものに對する如く、クピードの利害が個體の利害に對する割合は、無限が

有限に對するのと同じである。この故にクピードは、自分が個體の幸不幸に關する事件よりも、ずつと高尙な種類の事柄を司るのを自覺して、戰爭の騷ぎのうちでも、實務生活の混雜のうちでも、或はまた疫病の跳梁する間にあつても、崇高な無頓着を以て、自己の仕事を遂行する。そして自らの仕事を追究しても、僧房の隱遁的生活の中へさへ入り込むのである。

種族の典型を出來得るだけ完全に再現する爲めと云ふ點から見て、二個の個體の肉體的構成の一方が他の一方の全く特別で且つ完全な補充物であり、從つて後者は前者を排他的に要求するやうな事のあり得る所以は、既に上に證明したのであるが、これによつてわれらはまた、兩性の戀着の程度は、戀着そのものの個體化するにつれて愈々增進するものなることを知つたのである。既にかうした場合でさへ顯著な激情が起るのであるが、此激情が只一つの相手に向ひ、また只此一つのものにのみ向けられてあると云ふ事によつて、——即ち云はゞ種族の特別の命令を受けてあらはれると云ふ事によつて、直ちに一層高尙な・また一層崇高な色彩を帶びて來る。これと反對な理由から、單なる性慾は野卑であると斷じてよい。何となれば、それは何等の個體化もなく、漫然とすべての人に向つて、ほとんど質といふ事を顧みずに、たゞ量の方でのみ、種族を維持して行かうと努力するからである。然し性慾の個體化は——從つて同時に戀着の強度は——高い程度に上騰して、この戀情を滿足するにあらざれば、一切世界の財寶も、否生命そのものも、其價値を喪失するやうな事にもなる。かゝるときには、此激情は他の願望の到底上り得ざるほどの激しさに達する願ひとなるもので、從つていかなる犧牲を捧げることにも躊躇せず、若し此望みがどうしても遂げられなければ人を狂氣にしたり、自殺さしたりする事がある。かゝる過多なる激情の根柢をなす・無意識的な顧慮的條項のうちには、上に述べた考察的の諸條項の外に、なほ他のものが存するに相違ない。これらは前陳の諸條項のやうに、われらの眼前に直接に橫はつては居ない。だからわれらは次のやうな假定を立てなければならない。卽ち此場合には、體質ばかりではなく、男の意志と女の知力とが、相互に特に良く適合して居て、其結果、こゝで種族の守神が生み出さうと狙つてゐる或全く一定せる個體が、此二人からのみ生まれ得るのだからであると。然し此理由は、物自爾の本質のうちに存するもので、われらの思慮の及ぶところではない。或はもつと嚴正に云ふ

ならば、「生きんとする意志」はこの場合、此父と此母とからのみ生じ得るきちんと一定せる個體に於て、自己を客觀化しようと要求してゐるのである。意志それ自身の有する此形而上的欲求は、初めには萬有のうちに於て、未來の兩親たる人々の心のうちより外に、いかなる他の活動範圍をも持たないのである。そこで未來の兩親の心は、此衝動によつて捕へられ、此時もなほ、純然たる形而上的の――換言すれば實際に存在する事物の以外に存する――目的を持つものを追求しながら、自分自身の願ふものを追求するのだと思惟するのである。夫故に、今初めて生れ出づる可能性を得た未來の個體が、生存圏内へ踏み込まうとする熱望は、萬有のそもそもの根源から湧き出づるものであるが、此熱望こそ、現象界裡には未來の兩親相互間の高い・そして自己以外の一切のものを輕視する激情となつてあらはれ來るものである。實際これは比類なき迷妄であつて、戀する男子は、この力によつて、その女と同衾するがためには、世界一切の財寶を放擲してよいと思ふやうになる。然しかく熱望された同衾も、あらゆる他の同衾と同じもので、決して普通以上のものを與へはしないのである。かゝる高い激情も、其目的は上來述べたところに存する事は、この激情が他の激情と同樣に、――關與者達それ自身も驚くのであるが――これを享樂すると共に、頓に消失すると云ふ事實によつて見られ得るのである。此激情はまた、婦人の不姙（フーフェラント〔一七六二―一八〇九、獨逸の醫學者〕によると、不姙は十九の偶然的な體質的缺陷から生ずる）によつて、本來の形而上的目的が達成されざる場合にも消失するものである。こゝでは上敍の目的が、日々幾百萬となく踏み躙られて滅びて行く萌芽の場合と同じ運命に會ふものであつて、此等の萌芽のうちには、實にまた同一の形而上的の生命原則が生存にあらはれようと努力してゐるのである。然しこんな場合には、とても目的を達成する事が出來ないから、「生きんとする意志」そのものに取つては、自らの眼前には空間と時間と物質との無限な範圍が開かれてあり、從つて生に立ちかへるべき無限の機會が存するのだと云ふ事より外に、慰めとなるべき事柄はないのである。

テオフラーツゥス・パラッェールズス〔一四九四――一五四一。獨逸の化學者、兼ねて醫學に通ず、又見神學をも研究した。――譯者註〕は、此問題を論じなかつたし、又私の思想の行き方全體は此人とは全く異つたものであるが、然しこゝで陳述した意見が、一度はほんの一寸でも、彼の心に浮んだに相違ないやうにおもはれる。何となれば、彼は全く別な關係の個所に於て、例の散漫な文體で、次の

ごとき注意すべき言葉を書きつけてゐるから。『世には神によつて結びつけられた人々がある。これは例へばダヴヰツドとウリアの妻〔バートゼバの事、王ダヴヰツドは其軍ウリアの妻を奪つた。——譯者註〕の如きものである。これは正しい合法な結婚（何となればこれは人類の確信であるから）に直接に牴觸はしてゐるけれど。——然しソロモンは、かうしなければ、バートゼバとダヴヰツドとの間から生れることが出來なかつたであらう。そこでバートゼバは姦婦になつたけれど、神はソロモンの爲めに此二人の關係を結んだのであつた。』〔ソロモンは王ダヴヰツドと姦婦バートゼバとの間に生れたのである。〕

　愛の憧憬は、これを數限りない變化の形に於て云ひあらはすべく、あらゆる時代の詩人が努力したものであり、しかもまた此對象を十分に描きつくすことが出來ず、否むしろ此對象に滿足な取扱を與へることすら出來ないのであるが、此憧憬は、ある定まつた婦人を所有することゝ限りなき幸福の觀念とを結びつけ、反對にまた其婦人が得られないと云ふ考へと言ひ切れない悲痛の情とを聯結する事は人の知る通りである。さて愛の此憧憬と悲痛とは、一時的にしか存在しない個體の慾望から發生することは出來ない。これは、上述の出來事によつて自己の目的のために缺くべからざる手段が得られたり・失はれたりする有樣を眺めて、深くこれを嗟嘆する種族の靈(ガイスト)の太息である。限りなき生命を有するものは、種族そのものだけであつて、此故にそれはまた限りなき願望と無限の滿足とそして無窮の悲痛を有し得るのである。然し此等はこの場合、必滅の者、卽ち人間の狹い胸のうちに閉ぢ込められてゐる。夫故に、この小さい胸が破裂するやうに見えたり、或はまた無限のよろこび・限りなき悲しみの胸一ぱひに充し得るおとづれに對して、これを云ひあらはすべき何等の言葉をも發見し得ないのは不思議でない。それ故にこれは、崇高なる種類のあらゆる戀愛詩に材料を與へる。從つてかゝる詩は、一切の地上的の事を飛び越えた・超絶的な比喩の境にのぼるのである。これがペトラルカの主旨(テーマ)でありサン・プレウやヴェルテルやジヤコポ・オルティの材料である。これらは以上の見方以外に理解されがたく、又說明されることも出來まい。何となれば戀の相手の何等かの精神的優秀が、——一般に云へば客觀的・實在的の優秀が、相手をあのやうに限りなく尊敬する事の基礎となり得るものではない。たしかにこれは、ペトラルカの場合に於けるやうに、往々婦人の方が、十分精確に男子に知られて居ない爲めである。ひとり種族の靈のみは、一瞥して如何なる價値を或婦人が或男子に對して、及び其男子の

目的に對して有するかを觀破し得るのである。また最も大きな激情は、通常初めて相見た時におこるものである。

戀をした事のある人で、一目見たときに、戀したのではなかつたものがあらうか？

——沙翁、『御意の儘』三ノ五

マテオ・アレマーン〔西班牙の著述家、一五五〇—一六一〇〕の著で二百五十年このかた有名な小説グーツマン・デ・フルファラーチェのなかに在る次の一箇處は、此點に關して注目すべきものである。『愛するためには、時間を澤山かけたり、熟慮したり、選擇したりするやうな手間は要らない。只最初の唯一の瞬間に於て、或適應と一致とが互に迎合することが、即ち普通に「血の同感」と名づけられるものが必要である。かゝる點へは星辰の特別の影響が人々を驅る習である〔當時星辰は人の運命を司ると云ふ思想があつた。——譯者註〕。』されば自分の戀人が競爭者によつて奪はれるか、死によつて失はれた場合には、激烈に戀する人にとつては、それはあらゆる悲しみ以上の悲しみである。何となれば此損失は超絶的の種類のものであるからで、それは單に個體としての彼〔愛する人〕に關するばかりではなく、彼の永遠の本性に於て、即ち種族の生命に於て、彼を侵したからで、彼自身はまた種族の特殊の意志と委託とを受けて、此世に生れ來つたものであるからである。嫉妬が苛責的な・恐ろしいものである事や、愛人を他人の手に渡すのがあらゆる犧牲のうちで最も大きなものである事はこの譯によるのである。——英雄は一切の悲嘆を耻とするけれど、戀のなげきだけは耻ぢない。何となれば此場合に、かなしみ泣くのは英雄其人ではなくて、種族そのものだからである。——カルデロンの『偉大なるゼノビア〔パルミラの女王、シリアを侵略したが、二百七十二年ローマ軍に捕はれた。——譯者註〕』の第二幕で、ゼノビアとデシウスとの間の或場合に於てデシウスはかう云つてゐる。

『恭けなや！　さらばおん身は私を愛するのであるか！　その代には私は幾百幾千の勝利をも棄てるであらう、私は復歸するであらう。云々』

茲に示された事例は、性愛即ち種族の利害に關する事があらはれて來、それが明確なる利益を自らの眼前に見るや否や、これまであらゆる利害に打勝つて來た『名譽』の觀念も、忽ちこのものゝために擊退され終るものだと云ふことである。此現象の基くところは、種族の利益が、單に個體にのみ關する利益に比べると、後者がいかに重要

なものであつても、其重味に於ては遙かにこれに立勝つたものであるといふ事に在る。夫故に名譽・義務・誠實等の精神が、あらゆる誘惑や死の脅威にさへ堪へた後でも、種族の利益にだけは冑をぬいで降服する。――同樣に私的生活の方面に於ても、人が良心の命令に從ふ事の稀なのは、此場合に於けるより甚だしきはなく、他の場合には正直で義しい人々すら、良心に從はないことが折々あり、また激烈な愛が、即ち種族の利益が、彼等を捕へた時には、姦通すら平然として行ふと云ふ事實が發見されるのである。しかのみならず、此場合には彼等は、自分達の行動は種族そのものゝ利益のためであるから、個體の利益の爲めに行動する事によつて與へられる權利よりも、より高い權利を持つのだと自覺して、大それた事、してならぬ事をも平氣で犯すかのやうに思はれる。此點に於ては、シャムフォールの言葉は注意すべきものである。曰く『或男と女とが互に激しく戀する時は、彼等を分けようとする邪魔ものが何であつても、例へば夫や兩親のやうなものであつても、二人はそんなものにおかまひなく、自然によつて互に相愛し、人間の法律と習慣との如何に拘らず、神權によつて相互に所有し合つてゐるやうに、私にはいつも思はれる』と。此點について憤慨しようと思ふ人は、まづ聖書に就て、救世主が姦通せる婦人に對して著しく寛仁な態度を採つた事、ならびに彼が、これと同一の罪を、そこに居たすべての人々にも豫定した事を見るがよい。――デカメロン〔伊太利のボッカチオ（一三一三―七五）の名著〕の最大部分は、此見地からすると、種族の守神が、自己の足下に蹂み躙つた個人の權利や利益に向つての單なる嘲笑や嗤笑であるやうに考へられる。――階級の區別或はこれと同樣のすべての事情が、激しく愛着して居る人達の結合に反對する時は、同樣にたやすく、種族の守神のために排除せられ、そして無價値なものだと宣告される。蓋し種族の守神は無限の世代に亙つて存する自己の目的を追求しつゝ、かゝる人間的の掟や省慮を籾殼の如く吹きとばすからである。同じ深遠な理由から、どんな危險でも、それが戀愛的激情の目的に關係ある場合には、喜んで引きうけられ、其他の場合には臆病な人々すらも、この折には勇敢になるものである。――また、戯曲や小説に於て、われらは、戀愛事件のために、即ち種族の利益のために戰へる若い人達が、只個體の幸福のみを念とせる老人に打ち克つのを、よろこばしき同感で以て眺める。蓋し相愛する二人の努力が、これに反對するいかなる努力よりも、遙かに重要で・崇高で、それ故にまたずつと正當である事は、種族が

個體よりより要重である事と同じである。從つて、ほとんどすべての喜劇の根本主題は、そこに描かれたる人々の個人的利害に反對し、從つてこれらの人の幸福を轉覆せんとする目的を持てる種族の守神の出現である。普通には、種族の目的が貫徹されるが、これは所謂詩的正義によつて、觀者に滿足を與へるのである。何となれば、觀者は種族の目的が個體の目的より遙かに大切な事を感得するからである。それ故に喜劇の終末に於て、觀者は勝利の榮冠に飾られた相愛者を見て、喜んで歸宅する。何となれば、相愛者達自らがこれによつて自己の幸福を建設したと妄想すると同じく、觀者もさう思ふからである。然し實際に於ては、戀人達の方が、用心深い老人の意志にもとつて、自己の幸福を犧牲にして、種族の幸福に奉仕したのであつた。僅少の風變りな喜劇に於ては、これを轉倒して、種族の目的の方を犧牲として、個人の幸福を貫徹させようとする努力があつた。然し此場合には、觀者は種族の守神が受けると同じ苦痛を感ずる。そしてこの結末によつて堅固になつた個性の利益のために慰められる譯には行かない。此種のものゝ例としては、二三の甚だ人に知られた・小さい作品が私の頭に浮ぶ。それは『十六歳の女王』とか『理性の結婚』とかである。戀愛事件を取扱へる悲劇に於ては、大抵は種族の目的が水泡に歸するが故に、其道具となつた相愛者も同時に滅びるのである。例へばそれは『ロメオとジュリエット』、『タンクレット』、『ドン・カルロス』、『ヴァレンシュタイン』、『メシナの花嫁』などで見ることが出來る。

人が戀をして居る場合には、往々にして滑稽な・また折々は悲劇的な現象を露はすものである。それは、其人が今や種族の靈によつて占領せられ、支配せられて居て、最早自分自身のものではないからで、かくして彼の行動は、個體としては全く不適當なものとなる。戀慕の一層高い程度になると、人間の思想は、非常に詩にして且つ崇高な色彩を帶びて來るばかりでなく、超絕的でまた超自然的な方向を持つやうになるのである。この方向の賦與されたために、人は其本來的にして又形而下的な目的を全限界から逸して仕舞ふやうに見える。これは畢竟、個人が種族の靈によつて鼓舞されてゐる爲めで、種族の事件は單に個體にのみ關する事件よりも、遙かに重大である事は前にも述べた通りであるが、今や個體は種族の特別の依託を受けて、全く個性的で且つ全く一定した構成を有する子孫が、無限に亙つて存在する爲めの根柢をつくる事を、目的としてゐるのである。而して此個性的で且つ一定した構成は、

彼自身が父となり、彼の愛人が母となつて初めてつくり得る全然特定的なものである。其上此特定の性質は『生きんとする意志』の客觀化が、明白に其存在を要求してゐるにも係らず、これまで、かゝるものとして實際の生存には到達し得なかつたものである。かやうな超絶的の重要價値を有する事件に參與して働くと云ふ感じは愛に陷れる人々をして、一切の地上的な事の上に超絶せしめ、彼等の甚しく形而下的な願望に、甚だ超自然的な着物をきせる。其ために戀愛は、最も散文的な人物の生涯に於てすら、詩味ある挿話となるのである。但し最後に擧げた場合に於ては、戀愛事件が往々喜劇的色彩を帶びる事はある。――種族のうちに客觀化せらるゝ意志の如上の命令が、戀する人の意識裏にあらはれる時には、其婦人と結合することによつて發見せらるべき限りなき幸福の豫想をマスクとしてかぶつて來る。戀が最高度に達すると、此幻想は光輝を迸發して、此戀が成就しなければ、生命までもすべての魅力を喪失し、今や人生は悅びなく、無趣味で・享樂し得べからざるやうに見え、その爲めに人生に對する嫌惡が、死の恐怖にすら打ち克つやうになつて、折々は自發的にこれを短縮する事も起るのである〔自殺する事を指す〕。かゝる人の意志は、種族の意志の渦中に引き込まれたのであるか、さもなければ種族の意志が個體の意志に甚しく打勝つたもので、其人は第一の資格で活動することが出來なければ、第二の資格で働くことを拒絶するのである。此場合、個體は、或對象に集中された種族意志の限りなき憧憬を容れる器としては、あまりに脆弱過ぎる。だから、自然が人間の生命を救ふために、かやうな絶望的狀態の意識を覆ふに、狂氣といふ面紗を以てして與れないならば、結末は自殺となり、折々はまた相愛者の情死ともなるのである。――如何なる年も、此種の出來事に依つて、上叙の解說の眞實なることを證明せずには過ぎて行かない。

然し遂げられぬ戀だけが、折々悲劇的の結末を齎すのではなくて、遂げられた戀も、幸福へ導くよりも不幸に導く方がより屢々有る。これは此激情の要求するところが、往々にして當事者の個人的幸福と甚しく衝突し、これを轉覆するからであり、この要求が其人の他の事情と一致せず、これらの事情の上に建てられた生活の計畫を破壞するに由るのである。且つ又、戀愛は屢々外部的の事情と矛盾するばかりではなく、戀する人それ自らの個人性とすら矛盾するものである。何となれば戀の相手方が、性的關係を離れて見ると、戀する當人を憎み・輕蔑し・或はまた嫌

惡する者ですらある事があるから。然し種族の意志は、個體の意志より遙かに強烈なものであるが故に、戀する當人は、自らの忌み嫌ふ性質に對して、眼を閉づるやうになり、すべてを看過し、すべてを不問に附して、自已の戀情の對象と永遠に結合する事になるのである。戀の妄想はかくの如く人を盲目にするものであるが、種族の意志が遂行され終るや否や、此妄想は忽ち消滅して、其人の手許に忌々しい一生の道連れ（妻女）を殘して去る。われらは往々、甚だ理性的な且つ優秀な男子が、がみがみ女や悍婦と一緒になつてゐるのを發見して、どうしてこれらの男子がこんな選擇をしたかを怪み、不可解だと思ふことがあるが、上叙の理由から直ぐに説明がつく。此故に古人（希臘羅馬の人々）は、愛の神アモールを盲目としてあらはした。のみならず、戀する男が、許嫁の氣質或は性格の上に、忍びがたい點あつて、これが將來彼の生涯を苦しめる事を明らかに知りながら、且つこれを痛感してゐながら、其ために恐れて退くことをしない場合があり得る。

おんみの胸のうちに罪ありや否やを
私は尋ねず、また氣にもかけない。
私は、おんみが何であらうとも
おんみを愛することを知つてる計りだ。

——沙翁。シムベリン　三の五

蓋し彼の求めて居るのは、自已の事ではなくて、將來に生まるべき第三者に關する事である。然し妄想が彼を包んで居るから、彼自身は自已の事を求めてゐるやうに思ふのである。此の自已の事ならぬものを求める心は、いかなる場合に於ても偉大と云ふ事のスタンプであつて、激烈な戀情にもまた、崇高と云ふ色彩を與へ、これを詩の價値ある題材とするのである。——最後に云へば、性愛はまた其の相手方に對する非常な憎惡とも兩立することが出來る。この故に、プラトーンはこれを狼が羊に對する戀に比べたのである。この狀態は、激しく戀する男が、いかに骨を折つても、またいかに懇願しても、相手が絶對に聞入れない時に起つて來る。

『私は彼女を愛し・また憎む』

愛する女に對して、かう云ふ場合に起る憎惡は折々男子をして其女を殺し、續いて自分を殺すやうな事までさせる。此種の事件の二三の例は毎年起る習であつて、新聞紙上で發見される。夫故にゲエテがかう云つたのは全く至當である。

拒まれた戀、地獄の火、これよりもひどいものを私は知らない。（意譯）

（すべての拒まれた戀にかけて！　地獄の火にかけて！　私は呪ひ得んがために、もつとひどいものは何であるかを知りたいのだが〔無い〕。（直譯）

戀する男が、相手の冷酷な態度や、彼自身の苦惱を自分の喜びとするその虚榮な心を、慘酷だと名づけるのは、實際いかなる誇張でもない。何となれば彼は今や、昆虫の本能に似た衝動に支配されてゐるからであつて、此衝動は理性の擧ぐる理由などは一切構はず、自己の目的を絶對的に追求して、すべての他のものを輕視させる。彼はもうこれをやめるわけには行かないのである。惟ふに、戀の熱望が充されなかつた爲めに、それを鎖の如く、また足につけたる鐵塊の如く、其生涯を通じて曳きずつて歩かなければならず、寂しい森のうちで、いくたびか歎息を洩らした人は、決して唯一個のペトラルカだけではなかつた。かゝる運命の人は多かつたのである。然し此なやみと共に、詩才が備つて居たのは、ペトラルカ只一人であつた。ゲエテの美しい詩句、

人がそのなやみのためにもだす時、
神はそれを語るべき力をわれに賜ひぬ。

と云ふ言葉は、ペトラルカによく當箝るのである。

實際、種族の守神は、個人の守護神と到るところで戰爭をする。それは後者の迫害者であり、仇敵であつて、自己の目的を貫徹する爲めに、個人的の幸福を容赦なく破壞しようと、いつでも用意して居るのである。加之、國民全體の幸福すら此もの〔種族の守神〕の犧牲となつた事がある。この種の出來事の一例を、沙翁は其作『ヘンリイ六世』の第三部第三幕第二場及び第三場に於て見せる。この事の基礎となる事實は、われらの本質の根蒂は、「種族」のうちに存するが故に、「種族」は「個體」よりも、より手近に、又より早くわれらを動かす權利を持つもので、其爲めに

種族に關する事件が優先の位地に立つのである。この消息を感知して、古代の人々は、種族の守神をクピードに人格化した。これは其容貌の無邪氣なのに拘らず、敵意ある・慘酷な・從つて評判の惡い神で、また移り氣な・專制的なデーモン〔鬼神〕であるけれど、それでも神々と人類との主人たるものである。

エロスよ、おんみ、神々と人々との暴君よ！

（註）希臘のエロス・羅馬のアモールは愛の神である。――譯者。

人殺しの飛道具、盲目及び翼はクピードに附帶するもので、最後のもの即ち翼は、戀の無常不定を指示して居る。しかし此不定は通常、戀が滿足された結果なる幻滅の感じと共にあらはれて來る。

戀の激情は、其基礎を或妄想の上に置く。此妄想は、種族に對してのみ價値あるものを、個體に對して價値あるものと見せるものであるから、種族の目的が達成された後には、其欺瞞も消失せざるを得ない。今まで個體を占領して居た種族の靈は、今度はこれをつき放す。個體は種族の靈から棄てられて、元の狹隘と貧弱とに戻つて來るのであるが、過去を顧みて、かの高い・勇猛な無限の努力をした後で、彼の享樂に與へられたものは、各の性的滿足が與ふるものより、より以上の何物でもなかつた事を知つて愕然とするであらう。豫期に反して、個體そのものは以前よりも幸福になつてゐないのである。夫故に幸福を得たテゾイスは、其アリアドーネを棄てるのが普通であらう〔テゾイスはアツテイカの王子で、クレータに於て王女アリアドーネの助けによりて怪物ミノタウロスを殺し、アリアドーネと結婚したが、後これを棄てた。――譯者註〕。ペトラルカの激情が滿足されたとしたら、鳥の歌が卵を產んだ後に默するやうに、彼の歌も其刹那から止んだであらう。

私の『愛の形而上學』は、今現に此激情にまき込まれて居る人々には、いかに氣に入らなからうとも、一般に理性的觀察なるものが、この激情に對して何か或事をなし得るものだとするならば、私の發見した上述の根本眞理は、何よりもまづ此激情を征服すべき力を有すべき筈であるといふ事を序に云つて置く。然し、古への喜劇作家の云つた言葉は、疑ひもなく眞實であらう。『それ自らに於て分別もなく・掟もなき事を、分別によつて統制し行くことは出來はしない』。

戀愛で出來た結婚は、種族の利益のために行はれたもので、個人のためではない。勿論關與者二人は自己の幸福

を進めるのだと思つて居る。然しその眞の目的は、彼等二人によつてのみ生じ得べき新個體の產出にあるが故に、彼等自身の關知せざるものである。彼等は此目的によつて結びつけられて、爾後は出來得るだけ互に睦ましくして行かうと努める。しかし激しい戀愛の本質たる本能的の妄想によつて結びつけられた夫婦は、其他の點に於ては全く異種的な性質のものであることもなくはない。此妄想は上に敍べたやうに、必ず消失すべきものであるが、これが消失した時には、異種的な方面が判然とあらはれる。從つて戀愛から成立した結婚は、通常其終末が不幸である。これは、元來結婚そのものは、現在の人々の爲めではなくて、これらの人々を犧牲にして、當來の時代のために配慮するものだからである。西班牙の諺に曰ふ、『戀愛で結婚するものは、悲しみのうちに生活しなければならない』と。――便宜上・都合上から結ばれた婚姻――大抵父母の選擇に依るが――はこれと反對である。かゝる場合に顧られる條件は、それがいかなる種類のものであらうと、少くとも現實的の色彩を帶びるものであつて、自ら消失し得るやうなものではない。此顧慮的條件は、現在の人々の幸福を目標としたものであつて、從つてたしかに當來のものに取つて不利益である。然し此現在の人々の幸福といふ事も疑問である。結婚に際して、自己の好愛の滿足を企圖する代りに、金錢に目を呉れるやうな男子は、種族に生きるよりも、より多く個體に生きるのであつて、これは眞理に背反するが故に、反自然な事としてあらはれ、或輕蔑を喚び起す。兩親の勸告に反對し、富める・そして老いては居ない男子の結婚の申込を拒絕し、一切の便宜上の顧慮を等閑にして、唯自己の本能的の嗜好によつて夫を選ぶ娘は、自己の個體的幸福を、種族の幸福の犧牲に供するものである。人々が此娘に或る稱讚を與へるのを吝む譯に行かないのは、個體的幸福を犧牲にしたからであり、より重要なる方の事を選んで、自然（寧ろ種族）の感覺で行動したからである。然し兩親の勸告は、個性的自利主義の考から出たのである。――上述の事から考へると、婚姻を結ぶにあたつて、個體か、種族か、いづれか一つが損をしなければならないかのやうに見える。事實に於てもまた大抵はさうである。蓋し便宜と熱愛とが手を携へて行く事は最も稀れな場合である。人間の大多數は肉體的・道德的または知力的に憫むべき狀態にあるが、これは結婚が普通純然たる選擇や好愛から生じないで、あらゆる外的の顧慮から生れ、偶然的の事情で結ばれるといふ事に、或部分まで原因を有して居る。然し便宜と云ふ事と

共に、好愛の方もまた或程度まで顧られるやうな事になると、云はゞ種族の氏神と和を媾じた譯である。幸福な結婚は、人の知れる通りに、稀れである。これは結婚の主要目的が、現在の人々を仕合にしようとするのではなくて、當來の人々の爲めに計ると云ふ事であり、こゝに結婚の本質が存するからである。然し、やさしい・相愛する人々の慰籍となる事には、激しい性愛に、全く別種の根柢から出る感情、即ち意向の一致に基く眞の友情が加はつて來ることが往々あるといふ事實を附記して置かう。此友情は然し、大抵は、眞の性愛が滿足されて消失した後に、初めてあらはれて來るもので、通常次のやうな事情から生れる。即ちそれは、生まるべきものに關して、相互間に性愛の成立した二人の持てる相補ひ相適する肉體的・道德的・及び知力的性質が、此兩人だけに關してもまた、相對立する氣質的特性や精神的の優秀として相互に補充する關係を持ち、これによつて心情の調和が作り出されると云ふ事情である。

こゝに論じられたる愛の形而上學は、私の形而上學全般と精密な聯絡を持つて居る。而して後者が前者の上に投げる解說の光は、次のやうに總括される。

性慾の滿足の爲めに行はれる選擇は、用意周到なものであり、また無數の階段を經て、最後には激烈な戀愛にまで昇つて行くものであるが、此選擇によつて生ずるところは、人間が當來の時代の特殊的・個性的な構成に眞面目に參與することであるといふ事實を、私は前から論述して來た。此大いに注目すべき參與は、上來の諸章〔『意志と表象としての世界』の中にある此論文に先行する諸章を指す。――譯者註〕に於て證明された二個の眞理を確證するものである。即ち其一は、人間の本性それ自身は、破るべからざるものであつて、それは次の時代の種族のうちに永存すると云ふ事である。何となれば、あのやうに活潑で・また熱心な參與は、――省察と企畫から生れたのではなくて、われらの本性の最も奧深い特質と衝動とから生れて來る此參與は――若しも人間が全く死滅すべきものであり、此人間とは本當に異つた・又全然別な種族が、單に時間上の關係で、彼に後續するものに過ぎないとしたら、此參與はあのやうに滅しがたい有樣に於て存在することもなからうし、あのやうな大勢力を人間の上に及ぼす事も出來ない筈である。其二は、人間の本性爾自は個人によりも、種族の方により多く存する事である。何となれば、種族の特殊の構成についての關心は、一切の戀愛事

件の――卽ち下は最も輕微な好愛といふ狀態から、上は最も眞劍な激しい戀に至るまで一切の戀愛事件の――根柢をなして居るものであるが、此關心こそ何人にとつても、本來的に最も高い事件であつて、此事の成否は、最も銳く各人の感情に觸れる。だから此事件は特に感情の事件と呼ばれるのである。此方面に關する利害が強く且つ明確に現はれて來ると、單に自分一個にのみ關する利害は、すべて等閑視せられ、必要な場合にはまた犧牲にされて仕舞ふ。されば人間は、この事によつて、個體よりも種族の方が自分にとつて大であり、自個は個體に於てよりも、より直接に種族のうちに生きるものなる事を實際に證明するのである。――然らば、戀する男が、全く已を棄てゝ、選んだ相手の眼付きをうかゞひ、どんな犧牲でも彼女のために供しようとするのは一體何が故であるか？――それは、彼女を求めて居るのは、彼そのものゝ不滅な部分であるからで、すべての其他のものを要求するのは、いつも只彼の死滅する部分である。――或婦人に向へる活潑な・或はまた熱烈な要求は、從つてまた、われらの本性の核子の破りがたき事と、われらの本性が人類のうちに永存する事とに對する保證である。然し此永存をつまらぬもの・不滿なものだと考へるのは、妄迷である。此迷妄の由つて生ずるところは、種族の永續といふ事を、われらに似ては居るが、どの點でもわれらと同一でないものが、將來の時代に生存する意味であるとしか考へない事に存する。此考へはまた單に外部にのみ向へる認識から出發して、直覺的にわれらが知解し得る種族の外貌のみを見て、其內的本質に着眼しない事から生ずるのである。然し、此內的本質こそ、われら自らの意識の核子として其根柢をなし、意識そのものよりも更に直接であり、物爾自として個體化の原則から離れて、一切の個體のうちに――それが並存しやうと續存しやうとそれに論なく一切の個體のうちに――存在して、眞に同一なものである。これ卽ち「生きんとする意志」であつて、從つて生命と永續とを切實に要求するものである。されば、これは死の運命を免れて居り、死の攻擊を受けずに居る。しかし、それは現在の狀態よりまさつた狀態に達する事は出來ない。從つてそれには生命があると共に、個體の不斷のなやみと努力とがあるのは確實である。此なやみと努力とからこれを解放して與れるものは「生きんとする意志」の否定より外にはない。生きんとする意志を否定する事によつて、個體の意志は種族の幹から離れ、種族のうちに生存する事を止めるのである。さうなつた時の有樣がどんなものであるかと云ふ事に

ついての概念は、われわれの持たざるところで、またこの概念を構成する材料もない。それは、「生きんとする意志」であらうか、或はあるまいかと云ふ自由を持てるものだとしかわれわれには云ひ表はせない。後の場合は、佛敎では『涅槃』と云ふ言葉を以て云ひあらはして居る。此所は、人間の一切の認識が、認識としては永久に到達し得ざる點である。

われらが、此最後の觀察點から、人生の混雜を眺めると、すべての人々が人生の窮困と辛苦とに煩はされ、無限の慾求をみたしたり、多樣なやみを防ぐために、その全力を盡しつゝあるが、しかし此なやましい個體的存在を、僅の間保つより外の事は、敢へて期待しないのが目にうつる。然しまた此混雜の眞只中で、相愛する二人の眼が、慕はしげに相會ふさまもわれらの眼に映つて來る。――だが、なぜあんなに祕密に・おづおづと・人に知られぬやうに眼差を交はすのであるか？――それは、これらの相愛者たちは、一種の反逆者であるからで、即ち彼等は、さうしなければ間もなく終極に達すべき窮困と辛慘とを、わざわざ永遠に傳へようと私にたくらむ叛逆者で、其同種族が過去に於てなした通りに、彼等もまた此終極の來るのを不可能ならしめんとするものだからである。

天才論

詩や藝術のすべての眞の作品が――哲學上のものですらさうであるが――、湧き出で來る源泉たる認識の方法に就てはすでに述べたが〔これに關しては、『意志と表象としての世界』第二卷第二十九章及第三十章にある。――譯者註。〕、此認識の力が優勢の位置に立つと、こゝに天才の名を以て云ひあらはされる狀態が出現する。此認識は、その對象としてプラトーン的『觀念』を有し、此觀念は抽象的にではなく、直觀的にのみ認知されるものであるから、天才の本質は、直觀的認識の完全な事と力強い事とに存する。從つて一般に、直觀から出發して直觀に愬うるもの、即ち造形美術〔繪畫、彫刻、建築等〕の作品と、次いでは直觀を想像に媒介せしめる詩的作品とが、天才の作として最も明確に指さゝれて居るのである。――既にこゝでも天才と單なる能才との區別が認められる。由來能才の長所とするところは、其論證的認識の敏捷と尖銳とが、直觀的認識力のそれよりもより大なることにある。かゝる才を賦與された人は、他の人々よりもより敏速に又より正當に考

へる。天才はこれに反して他の人々とは異つた世界を見る。蓋し天才の頭腦には、普通の世界が他の人々に於けるよりもより客觀的に、——從つてより純粹に、またより明晰にあらはれるが故に、天才者は目前の世界を、普通の人よりもより深く洞見する事のみによつて他の世界をも見得るのである。

知力は、其本分上、單に動機を媒介する者に過ぎない。それ故に知力が本然的に事物に於て見るところは、此事物が意志に對して持つ關係(直接・間接・及びあらゆる關係を含めて)だけであつて、それ以外のことを理解しない。動物にあつては、事物と意志との關係が、ほとんど全く直接であるから、此事は最も明瞭に解る。彼等の意志に關係を持たざるものは、彼等にとつて存在しないと同じである。それ故に、われらは往々、隨分利發な動物でも、それ自身として注目さるべき事物を少しも氣づかずに居ると云ふ事實を見て驚くのである。例へばわれらの人柄や環境などに著しい變化が起つても、彼等はいかなる怪訝をも起さない。普通の人にあつては以上の直接關係の外に、間接的可能的の關係が加はつて來て、其和が有用な知識の總體を構成するのである。然し此場合にも彼の認識は、諸般の關係の埒內に留まつて居る。此故に、普通の頭腦は事物の十分に純粹な客觀的形象に達し得るものではない。蓋し普通人の直觀力は夫れ自らの彈力によつて且つ無目的に、世界を純客觀的に理解する丈けの力を充分に持つてゐないので、意志に刺戟され動かされる事がなくなると、直ちに疲勞して働けなくなるからである。然るに、上述のことが成し遂げられる場合には、——即ち頭腦の表象力が剩餘を有するが爲めに、外界の純粹にして明瞭且つ客觀的な形象が、目的なくして作られる場合には、——(かゝる形象は意志の目的に對しては無用なものであり、これが高い程度に上ると、意志の目的を妨害するものとなり、更に進んでは有害なものとさへなるのであるが)——少くとも既に、天才と云ふ名で云ひあらはされる異常態の素質が存在して居るのである。此名の示すところは、この狀態では、眞の自我たる意志とは異つたもの、云はゞ外部から來れる神靈(ゲーニウス)が働いて居るやうに見える事である。比喩を用ゐないで云ひあらはすと、天才の本質は、元來意志に仕へるためばかりで生じた認識能力が、意志に奉仕するよりもより強大なる發展を遂げた事に存する。だから嚴密に云へば、生理學は腦髓の活動かのやうな剩餘と、從つて腦髓そのものゝ剩餘とを『剩餘に依る異常態』のうちに入れるであらう。而して此異常態は人の知れる通り生理

學では、『不足に依る異常態』及び『位置變動に依る異常態』と並べられてゐるものである。夫故に天才の本質は、知力の異常なる剩餘と云ふ事に存し、此剩餘の利用される方面は、生存一般に關する事柄である。かくして天才は、普通人の知力が個人の役に立つやうに人類全體の役に立つのである。これを極めてわかり易く云へば、普通人は三分の二の知力と三分の一の意志とから成つて居るとするなら、天才は三分の二の知力と三分の一の意志とから出來て居る。なほこれを化學上の比喩で說明するとかうなる。元來中性鹽の鹽基と酸との區別の存するところは、根基と酸との關係が兩者に於て全く反對になつてゐる事に在る。根基卽ちアルカリーが根基たる所以は、そのうちに於て根基が酸素に對して優越の地歩を占めて居るからで、酸の酸たる所以は、そのうちに於て酸素が優勢だからである。意志と知力とに關して、通常人と天才との間に存する關係も同樣であつて、これによつて兩者の間に截然たる區別が出來る。此區別は彼等の性質や行爲全體にあらはれるが、然し特に彼等の業績そのもののうちに現はれる。此場合、注意すべき一差異として附け加へて云つて置かなければならぬ事柄は、化學的の物質の間に於ける全體的反對が、相互間の親和力・牽引力の原因となるに反して、人間界では通常これと反對な現象が見られる事である。

認識力のかゝる剩餘の最も手近い發現は、普通に、最も根本的で且つ最も元質的な認識――卽ち直觀する認識にあらはれるそしてこれを一個の形像に於て再現する。畫家や彫刻家はかうして生ずるのである。されば、これらの人々にあつては、天才的の理解と藝術的の製作との間の距離が大層短い。だから此場合には、天才と其活動とがあらはれ、形式は最も簡單であり、從つてこれを敍述することも甚だやすい。それでも、これでもう、あらゆる藝術に於ける、また詩や哲學に於ける、すべての眞の作品の湧き出づる源泉を說明し終つたのである。但し其過程はさう簡單ではない。

一切の直觀は知力的なもので、單に感覺的なものではない（『意志と其表象としての世界』第壹卷）。これに前陳の說明を附け加へ、同時にまた、前世紀（十八世紀）の哲學が直觀的認識力に『下等な精神力』の名を與へたことを公平に考へ合せて見るなら、當時の言語を用ゐなければならなかつたアーデルング（此名前で有名なる人二人あり。叔父甥の關係を有す。共に言語譯者。叔父ヨオハン・クリストフホは一七三四――一八〇六、フリードリッヒは一七六八――一八四三、茲で云はれた本人はいづれなるか不明。――譯者註）が、天才を『下等な精神力の著しく强き事』だとしたのは、ヂャン・パウル（ヨオハン・パウルフリ

—ドリツヒが本名である。一七六三——一八二五。獨逸の文學者〕が、其著『美學階梯』でこれを引用した際にあびせかけたやうな手酷い嘲笑に價する言でもなく、本來さほどに甚しく不合理な事でもないのが解るであらう。この推稱すべき人〔デヤン・パウルのこと〕の上掲の著書は、大きな長所を持つてはゐるが、理論的に解說すべき場所や、一般に教訓することを目的とせる個所に於て、絕えず洒落(しやれ)のめした敍說や、譬喩ばかりで進んで行く書き方をするのは、不適當な事だと云ふ事を書き添へて置く。

事柄の眞正な本質は、たとへ條件付きであつても、まづ直觀に向つて自らを開き示すものである。一切の概念、一切の思念は、抽象したものに過ぎない。從つてそれらは直觀から來た部分的の表象であつて、抽き出して考へる事によつて出來たものである。凡べての深い認識は、否本來の知識すらも、其根柢を事物の直觀的理解のうちに有する。あらゆる眞の藝術品、一切の不朽の思想が、其生命の火花を受けた產出の過程は、直觀的理解のうちにあつたのである。これに反して、概念から生ずるものは、單なる能才の作品、單に理性的な思想、模倣、及び目前の需要と同時代の人々とのみを目當とせるものに過ぎない。

然しわれらの直觀がいつでも事物の實際的の存在に結びつけられてあるならば、直觀の材料は全く偶然そのものゝ支配の下に立つであらう。一體偶然なるものは、事物を丁度適當な時に生起せしめる事は稀で、これを適當に排列する事も亦稀有であつて、大抵は甚だ缺陷のある見本でこれをわれらの前に提示するのである。夫故に人生のあらゆる意味深い形像を完全にし・整頓し・仕上げ・確保して、深く透徹する認識と此認識とを傳達すべき意味深遠な作品との目的の要求するところに從つて、思ふがまゝにこれ〔形像〕を再現し得るがためには、空想が必要なものとなつて來る。空想が高い價値を有する所以はこゝにある。天才はたゞ空想によつてのみ、自己の造形・詩作又は思考の聯關の必要に應じて、對象や出來事をそれぞれ明瞭に思ひ浮べ、そして淸新な食物を、一切の認識の源泉たる直觀世界からいつでも取り出し得るものであるから、空想は天才に缺くべからざる道具である。空想を有する人は、云はゞ靈を呼び寄せる力を持つてゐるもので、呼び寄せられた靈は、適當の時機に眞理を此人に啓示して吳れる。一體、事物の赤裸々な現實は、眞理そのものを只薄弱に、或はほんの稀にしか示さず、しかも大抵は不適當な時機

に於てあらはすものである。夫故に空想のない人が天才に對する關係は、岩にくつついたまゝで、機會の齎すものを持たなければならない貝類が、自由に動き得る動物——殊に翼あるものに對する關係と同じである。蓋し空想を有せざる人は、眞の感覺的直觀より以外のものを知らないからである。かゝる人は此直觀の來るまで、概念と抽象物とに喰ひついて居る。然し此二者は、決して認識の核子ではなくて、殼や包皮にすぎないものである。かやうな人は、計算や算術に於ての外には、決して偉大なことを成し遂げないであらう。——造形美術や詩歌の作品文は同樣に身振狂言の所作(しよさ)の如きは、空想なき人に對しては、出來得るだけの程度で、其缺陷を補ふ手段として、また空想を有する人にとつては、其使用を容易ならしめる手段として、見做され得るものである。

されば天才の特有的・根本的な認識方法は、直觀的な事ではあるけれど、其眞の對象をなすものは、決して個々の事物ではなくて、これらの事物にあらはれたるプラトーン的の『觀念(イデー)』である。〔『意志と表象としての世界』第二卷第二九章參照〕。個々のもののうちに一般の相(すがた)を見るのは、正しくこれ天才の根本的特質であるが、普通人は個々のものに於て、只個々のものとしてのみそれを見るだけである。これ、個々のものは、個々のものとしてのみ現實に屬し、また現實のみが彼にとつて利害の關係を有するもので、卽ちそれだけが彼の意志に關係を有するからである。各人が個々の事物を見るに當つて、單に其事物だけを見るか、又は多少普遍的なものを、或は進んで其種族に最も普遍なるものを直ちに觀取するか（考へるのではない）どうかの程度は、やがてこれを各人と天才との間の距りの遠近を定める標準である。この故に天才の眞の對象は一般事物の本性であり、事物そのものゝ普遍的な相(すがた)であり、（個ではなくて）全である。個々の現象の研究は能才の活動範圍で、常に事物相互の間の關係のみを其學術の對境とする實科的科學の領域がそれである。

觀念(イデー)を理解するには、これを認識する人が、認識の純然たる主體たる事、言ひかへると意志が全く消失する條件とする〔『意志と表象としての世界』第二卷第三十章參照〕。われらはこゝに留意するを要する——われらが、風景をわれらの眼前に髣髴せしむるゲエテの多くの詩を讀み、或はヂャン・パウルの自然描寫を讀んで感得する喜ばしい感じは、われらがこれによつてゲエテなりパウルなりの心が有する客觀性に —— 換言すれば其純潔さに參與することに —— 基くのである。これ

らの人々の心のうちに於ては、表象としての世界が、既に此純潔さを以て、意志として世界から分離し、云はゞ全くそれから離脱して仕舞つたのである。——天才の認識方法は、本來あらゆる意慾とその關係を撥無したものであるから、從つて天才の作は故意又は我儘から生ずるものではなくて、本能的の必然性によつて導かれたものだと云ふ結論が出る。——天才の激發とか、靈感の時とか感激の瞬間などゝ稱せらるゝものは、知力が意志から自由になつたこと、換言すれば知力が今や意志に奉仕する事をやめて、しかも不活動又は弛緩の狀態に陷ることなく、却つて暫らくの間全く獨りで、自發的に活動する場合を指すのである。此時知力は最大の純潔さを有し、世界を映し出す明鏡となるのである。何となれば知力は今や自己の根源たる意志から全然分離して、一個の意識に集中された「表象としての世界」そのものとなつて居るからである。かゝる瞬間に於て、云はゞ不朽の作の魂(たましひ)がつくられる。これに反して、故意に思考する場合には、意志が知力を導き、これに問題を指定するから、知力は自由ではないのである。

大抵の人の顏に押されてゐる平凡の極印(スタンプ)・卑俗の表情は、其認識が意慾の下に嚴重に服從せしめられてゐる事と、堅い鎖が此兩者を縛つてゐるから、從つて事物を見るには、意志と其目的とに關係づけて考へるより外の方法を知らない事との現はれたものである。之に反して、天才の表情には、天賦の豐かな人達に共通な著しい近似が浮んでゐるが、それは畢竟、其知力が意志に仕へることを免除せられ・解放されてある事や、意慾よりも知力の優れて居る事が明らかに顏にあらはれたものである。また苦悶はいづれも意慾から生ずるが、認識はこれに反してそれ自身に於て苦痛なく快活なものであるから、これによつて高い額・澄んだ、凝視する眼とが彼等天才者に與へられるのである。蓋しこれらは〔額眼〕意志と其窮困とに仕へるものではなくて、偉大にして超世間的な快活の趣を彼等に與へるものである。此快活な表情は折々流れ出でゝ、他の部分の幽欝さ——殊に口のあたりにたゞよへる幽欝さと甚だよく適合する。此點については、ジョルダァヌス・ブルヌスの格言が最も適切に云つてゐる。『悲しみのうちによろこばしく、喜びのうちに悲しく。』

知力の根柢たる意志は、知力の活動のうち、意志の目的より以外のものに向けられたものにはすべて反對するの

である。夫故に知力が外界を純客観的に深く理解し得るのは、それが自らの根柢たる意志から、少くとも暫くの間離脱した時だけである。知力が意志に結びついて居る間は、自ら進んで働くやうな事はとても出來ない。意志（利害）が呼び醒まして活動させなければ、知力は混々として眠つて居る。然し一旦呼び醒まさして働かせられると、意志の利害に從つて事物の關係を認識するのには、無論最も適したものとなる。利發な頭腦と云ふものは、いつも呼び醒された――即ち意慾によつて旺んに動かされた頭腦でなければならぬが、上述のやうな頭腦は即ちそれである。然し、かやうな頭腦には、この爲めに、事物の純客觀的本質を把握する力が無い。蓋し意慾と目的とは、頭腦を一方にかた寄らせ、事物を見る際にも、此二つに關係ある部分だけを觀取するやうになつて、其他の方面は消失せたり、間違つた狀態で意識に入り込んだりする。だから、例へば心配を懷きつゝ急いで旅をする人には、ライン河と其兩岸とは只一條の横線としか見えず、これに架した橋も、この横線を切る一本の縱線としか見えないであらう。自分の目的で頭腦が一ぱいになつて居る人々の心には、世界はあだかも戰場の圖面で見られた美しい風景の土地と同じやうな有樣にしか映るまい。無論これは事態を明かに說明するために採つた極端の例ではあるが、意志の一寸した興奮すらも、その結果として、僅かではあるが前揭のと同種な認識の變造が生ずる。知力が意志の羈絆を離れ、自由に對象のうへに翱翔して、意志によりて驅逐せられないで、しかも旺盛に活動する時に於てのみ、世界はその眞の色彩と形態と、そして其全體の正當な意味とに於て示されるものである。勿論この事は、知力の自然性と本分とに背反するもので、即ち或程度まで反自然である。夫故にこれは非常に稀れに起る事である。然し天才の本質の存するところは此處である。此狀態は、たゞ天才に於てのみ高度に且つ持續的にあらはれるが、他の人々にあつては、ほんの近似的にまだ除外例的にあらはれるだけである。――ジャン・パウルは其著『美學階梯』の第十二章で、天才の本質を『熟慮』に置いた譯を、私は上述の意味で解釋する。即ち常人は、自己の意志によつてそれに屬する人生といふものゝ渦卷や喧騷のうちに埋沒して、其知力は生活の事物や事件によつて滿されて居る。然しこれらの事物と生活そのものとを、客觀的の意味では全く理解して居ないのである。アムステルダムの取引所に於ける商人達は、自分の隣人の言葉を完全に聞き取ることが出來るけれど、取引所全體の喧騷は――海潮の洶湧する響

にも似て、且つ遠距離に立つ見物人を驚かすほどの此喧騒も、――全く彼等の耳には入らないのである。この事實は丁度前述の事と同じ譯である。これに反して天才は、其知力が意志の利害から、卽ち其人格の利害から脫離してゐるので、これらのものに關する事柄が、世界と事物そのものとを彼に對して隱すことなく、從つて此二者は明瞭に認知せられ、それ自らとして、客觀的直觀で會得せられる。此意味に於て、天才は『熟慮』せるものだと云へやう。

畫家をして、眼前の自然を忠實に畫布のうへに再現せしめ、詩人をして、抽象的概念によりて、嘗て見たことのありありとした現在態を云ひあらはさせ、これを他人の明瞭な意識にのぼせて、精密にこれを再生させ、或は同じく詩人をして、他の人々が單に感じてゐるに過ぎない事を、言語で發表させる所以のものは、ことごとくこれ所謂『熟慮』のなすところである。――動物は全く熟慮なしに生活する。勿論動物には意識があつて、これによつて自己と自己の禍福とを知り、又禍福を釀成する物事をも認識する。然し其認識はいつまでも主觀的に留まつて、決して客觀的になる事はない。認識のうちにあらはれるすべての事は、彼には自明であるやうに見える。從つてそれは表現の目的物ともならず、思考の對象（卽ち問題）ともならない。動物の意識は、この故に全く內在的である。通常の人の意識は、無論これとは同一ではないが、然し類似の性質を有するもので、事物と世界とに就ての彼等の知覺は、專ら主觀的であり、主として內在的狀態にとゞまつて居る。世界に存する事物を知覺するけれど、世界そのものを見ないし、自己自身のなす事と他人からなされる事柄とは知覺しても、自分自身をば知らないのである。意識の明瞭さが無數の階段を經てのぼり行くやうに、熟慮も亦漸々に增加して來て終には一點に到達する。此點へ來ると折々（これは稀でもあり、其明瞭さの程度も非常に異なるけれど）雷光のやうに、次の如き疑問が、頭腦のうちに閃く事がある。曰く『此一切のものは何であるか？』と、或はまた『それは一體どういふ風に作られて居るのか？』と。此第一の問が、大なる明瞭さと持續的の存在とに達すると、そこに哲人が生れるのであり、後の問題が同樣になると、こゝに詩人や藝術家が生れるであらう。それ故に此兩方のものゝ高い職務は、其根柢を『熟慮』する事のうちに持つて居るが、此熟慮はまづ、彼等が明かに世界と自己自身とを認知し、これによつてまた此兩者を明かに省察する事から生ずるのである。然し此過程全體は、知力が自己の優勢なために、本來は自己の奉仕すべ

き意志から、時あつて分離する事から生ずる。

天才についての上來の觀察は、生物の全系列に亙つて見られる『意志と知力との段々廣くなる分離』といふ見解に關聯するもので、また互に補充するものである〔『意志と表象としての世界』第二卷第二十二章には此『分離』に就て論じてある。――譯者註〕此分離が最高の程度に達したものは天才である。此場合には、知力が其根柢たる意志から全く分離して、全然自由になるものでこれによつて表象としての世界が初めて十分なる客觀化に到達したのである。

茲にはなほ天才の個性に關して二三の事を述べて置かう。――シセロの言に據ると、アリストテーレスは、『すべて天才は憂鬱だ』と云つた相であるが、この言は疑ひもなく同じ人〔アリストテーレス〕の著『プロブレーマタ』(三〇ノ一)に載つてゐる章句と關係がある。ゲエテもまたかう云つた。

『私が幸ひな事にのみ遭遇して居た間は、私の詩才の焰は甚だ少しであつた。これに反して、私が脅かし來る禍から逃れた時には、此焰は炎々と燃えた、――やさしい詩は、虹のやうにたゞ暗い地の中にのみ畫かれる。さればこそ詩人の天才は憂鬱の成素を好むのである』〔原韻文〕この言葉は次のやうな事實から說明がつく。即ち、意志は、知力に對する其原始的の支配權をいつも繰返して主張するので、知力の方では、自分に都合の惡い場合には、より容易に身を引いて、其支配の下から逃げ出すのだと云ふ事實から說明がつく。蓋し知力は、言はゞ氣晴しをするために、好んで此等のいやな事件から離れ、今や愈々大なる精力を以て他の外界に向つて行くから、より容易に純客觀的になれるのである。自分に都合のよい事情の下では、これと反對な事が行はれる。然し全體として又一般として觀察すると、天才に添物として憂鬱が隨伴する譯は、生きんとする意志が、明るい知力の光で照らされることが強くなればなる程、より判然と自己の狀態のみじめさを認めるからである。――天賦の豐かな人に於て悲哀な氣分の甚だ屢々認められる事實の象徵は、モンブランの頂が大抵は雲に覆はれてゐる事に見られる。然し折々、特に朝まだきに、此山を包む雲がちぎれて、朝暾に赤く染められた峰頂が、天そゝる高みから雲を越えて、シャムーニを見おろす時には、眺める人の心の奥の奥までも打開くやうな景色を見せる。これと同じく、大抵は憂鬱な天才も、折々は彼にだけあり得る上述の特殊な快活を示す事がある。此快活は、精神の最も完全なる客觀化から生ずるもので、恰

も光輝の如く其高い額を繞るやうに思はれる。かくして『悲しみのうちによろこばしく、喜びのうちにかなしい』と云ふ事になる。

畢竟するにすべての凡庸作家は、其知力がなほ意志に強く結びついて居て、只其激勵の下に於てのみ働くが故に、たゞ全く意志に奉仕するだけであるといふ事に、その凡庸たる所以がある。だから彼等のなし得るところは、個人的の目的ある事の以外には出られないのである。個人的の目的に從つて、彼等は惡畫を描き、無趣味な詩を綴り、淺薄な不合理な哲學說を作るのである、從順な不正直によつて、高い上役(うはやく)に取り入る必要がある時には、また屢々不正直な哲學說すら作り出すのである。彼等の行爲と思考とはすべて一己的(ベルゼーリツヒ)である。夫故に彼等のなし得るところは、たかだか、他人の純眞な作品の外面的・偶然的・任意的なところを習癖(マニエル)として獲得し、核子を得る代りに包莢を握るに過ぎない。しかも彼等はすべてを得たと思ひ、進んでは前述の純正な作品をも凌駕し得たと妄想する。それでも失敗たることが明かになると、多くの人はなほ、自己の善良な意志を以てすれば、結局はそこへ到達し得べしと期待する。然し此善良な意志こそ、實にこの到達を不可能ならしむるものである。何となれば、それは畢竟、單に個人的(ベルゼーンリツヒ)な目的のみをねらふものであり、個人的の目的では、藝術も詩も哲學も、とても眞面目にはなり得ない。『彼等は自分で自分の明り先きに立つ』〔自分で自分の邪魔をしてみること——譯者註〕と云ふ諺は、本當に彼等に適合する。知力が意志の支配と其計畫のすべてから脫離し、其ため自由に活動し得る事、この一事のみが本當の眞面目さを與へるが故に眞の作を生み出す力をわれらに賦與するものだと云ふ事だに彼等は全く氣づかないのである。いや氣づかないのが結構で、もし氣づいたら彼等は投身(みなげ)をするであらう。且又、先に敍べた善良の意志といふ事は、道德に於てはすべてゞあるが藝術に於ては何物でもない。藝術に於ては、其詞が既に示す通り『能力(ケンネン)』のみが肝腎である。〔獨逸語では藝術をクンスト(Kunst)と云ひ、なし得ることをケンネン(können)と云ふ。兩者の間に關係あり——譯者註〕——いかなる事に於て、或人が眞面目であるか? 結局はこの間が最も肝腎な點となるのである。殆どすべての人の眞面目なのは、自己及び自己關係者の幸福に關する事件で、彼等にはこれを增進することは出來るけれど、その他の事をする力はない。蓋し勝手な又は故意な努力とか、企圖とか云ふものは、われらに誠の・深い・本當な眞面目をも與へるものでもなければ、その補ひをするものでもない。否、もつと

正當に云ふなら、それの代りをするものではないのである。蓋し『眞摯』なるものは、自然がこれを据ゑた場所に蟠居して、決して他所に移動しない。しかし此眞面目と云ふ事がなければ、どんな事でも半分しか成就するものではない。天才者が自己の幸福に對する氣配りが、往々甚だ拙劣なのも同じ理由から起るのである。鉛の錘（おもり）を物體につけて置くと、此物體は錘によつて定められた重心の要求する位置へ、いつも引き戻されるやうに、人間の知力と注意とは、いつも眞正の眞面目さの有るところへ連れ歸られる。其他の事は、本當の眞面目なしにやられるのである。夫故に、其人の眞面目さが自己一人に關する事柄や、實際的の事物には存しないで、客觀的・理論的のものに存する甚だ稀有な異常の人物のみが、事物と世界との實相を、卽ち最高の眞理を色讀し、或は何等かの方法で再現し得るのである。蓋し、個體以外に出でゝ客觀のうちに入つて行く眞面目さは、人間の天性の知らざるものであり、不自然なものであつて、本來的に云ふと超自然的なものである。然し此眞面目さによりてこそ、其人は偉大なので、彼の創作が、彼自身を占有せる・彼とは異つた守護神の作に係るやうに見えるのは、かうした眞面目があるからである。かゝる人々に取つては、造形するのも、詩作するのも、思考するのも共に目的であるが、他の人達にあつては、手段である。彼等は此手段を用ゐて自己自身の事を追究するのであり、また通常はこれを有利に進展せしめる方法を心得て居る。これ蓋し、彼等は時流に阿附して、其要求と機嫌とに迎合すべく用意して居るからである。それ故に彼等は概ね順境に生き、天才は往々甚しい窮境に立つ事になる。これは彼が自分一個の幸福を、客觀的目的のために犧牲にしたからであるが、彼の眞面目はそこにあるので、又實際其外にすべきやうもないのである。普通人のやり方は此反對である。この故に彼等は小さく天才は大きい。されば彼の作は永遠に亙る性質のものではあるが、其承認される事は、大抵後世に於て初まる。然し普通の人々は其時代と共に生きまた死するものである。一般に偉大な人物と目すべきものは、實際上の事にしろ、理論上の事にしろ、それに與（あづか）つて活動するに際して自分一個の事件を求めないで、只客觀的の目的だけを追究する人達に限られてゐる。實際の場合に於て、此目的が誤解されたものであつても、或は此誤解の結果として、其目的が一個の犯罪であるにしても、其人は依然として偉大なることを失はない。『自己と自己の事件とを追究したい』と云ふ一事は、いかなる事情の下に於ても、其人を偉大

ならしめる。これに反して、自分一個の目的を目ざしてなされる行爲は小である。如何となれば、この目的によつて活動させられる人は、彼自身の・極めて小さい人柄に於てのみ自己を認め又自己を見出すからである。これと反對に、偉大なる人は、すべてのものゝうちに、即ち全體の中に自己を認め、前者の如く只小宇宙の中にのみは生活せず、否寧ろより多く大宇宙のうちに生活する。正に此故に、全體は彼にとつては重要である。これを描寫し・說明し・或はこれに實際的に働きかけんが爲にこれを理解しようと努めるのである。何となれば全體は彼に無緣のものではないからで、彼自らも、全體が自己に關係あることを感知する。斯の如く自己の範圍が宏大だから、人々は彼を指して偉大だと云ふのである。されば此崇高な賓辭は、何等かの意味に於ける眞の英雄と天才者とに相當するもので、其意味するところは、其人が自己の天性に反して、自分自身の事件を追求せず自己一人の爲めではなく、すべての人のために生活したと云ふ事である。——人間の大多數は、いつでも小さくあらねばならず、決して偉大になる事は出來ないのは明かであるが、さらばとて其反對のこと、即ち或一人が徹底的に——即ちいつも・またいかなる瞬間に於ても、偉大であるといふ事はあり得べきでない。

『何となれば、人は普通の土から作られ、
習慣を自らの乳母と呼ぶから』

いづれの偉人にしても、折々は只の個人であらねばならぬこと、即ち單に自己自身だけを眼中に置かねばならぬ事がある。言ひ換へると、小人物でなければならぬ時が往々ある。いかなる英雄も、其侍者の眼には英雄として映らないと云ふ甚だ正當な言葉の基くところはこゝにある。侍者には英雄を評價する力がないからなどと思つたら大變な間違である。この考を、ゲエテは其小說『親和力』の第二卷第五章に於て、オティリイ〔女主人公〕の思ひ付きとして載せて居る。

天才は自らで自らの報酬を持つて居る。蓋し人は自分に對しては、必然的に、自己がそれであるもののうちの最良のものたらざるを得ないからである。『能才を持つて生れ、また能才になるやうに生れたものは、能才そのものの中に自分自身の最も美しい生存を發見する』とゲエテは云ふ。われらは過去の偉人を仰ぎ見る時、『此人は、今なほ

われらから讃美されるとは、何んて幸福な事だらう』などとは考へない。却つて『其殘した痕跡が、幾世紀かを活氣づけたやうな（偉い）精神を、直接に享有して居た此人は、どれ程仕合だつたであらうか』と考へるのである。價値の存するところは、名聲そのものではなくて、彼をしてかゝる名聲を得しめた所以のものである。そして其樂しみは不滅の子を產み出すに在る。夫故に、身後の名譽なるものは、本人の知るものでないと云ふ事實から出發して、その無價値なことを證明しようとする人は、丁度、隣人の屋敷内に積まれてゐる蠣殼を羨まし相に眺めて居る人に對して、蠣殼の全然無用なことを、甚だ賢げに論證しようとする利口ものと一般で、甚だ馬鹿げた事である。

天才の本質に就てこれまで述べ來つたところに依れば、此の本質は、本來意志に奉仕すべき職分ある知力が、此職務から自らを解放して自立的に働くと云ふところにあるのだから、此點に於ては明かに自然に反して居る。されば天才とは、自己の本務に不忠實になつた知力である。天才に結びついてゐる不利益は實にこれに基くのである。われらは今天才と、それよりも智の優勝と云ふ點でずつと劣れる人とを比較して、天才の不利益な點を觀察する道を拓かうと思ふ。

通常の人々の知力は、意志に仕へるやうに嚴重に束縛されて居て、從つて本來はたゞ動機を受容する事だけに從事するものであるが、それは例へば世界といふ舞臺で、此等の人形の各々を動かす針金の集合のやうなものだと考へてよい。大抵の人々の乾燥無味で・いかめしい眞面目さは此點から出るのである。然し此眞面目さに一段と立ちまさつた眞面目がある。それは動物の持つ眞面目さで、彼等は笑ふ事がないのである。然し、意志から解放された知力の持主たる天才者は、有名なミランの人形芝居で、大きな針金人形の間に立ち交つて藝を演ずる生きた人間に比較さるべきもので、舞臺の上に居るもののうちで、すべてを知覺するものは只此人一人であり、從つて棧敷から演戯を見物するがために、暫らくの間舞臺から離れる事を望む唯一のものである。——天才の熟慮とはこんなものである。——然し非常に理解力があり、理性に富んだ人で、賢人と云はれてもよい位の人物ですら、天才とは甚しく異なるものである。かゝる人の知力は實行的の方向を採り、最良の目的と最善の手段との選擇を熟考するもので、從つて意志に奉仕して居るから、眞に其天性に從つて働くので、こゝが天才との相異點である。羅馬人が『グラヴィ

ータス』と名づけた堅實にして實行的な眞面目さは、知力が意志に仕へる事を廢めず、意志に關係なき事件へ迷ひ込む事なきを豫想して居る。それ故にグラヴィータスは、天才の條件たる知力と意志との分離を許さない。怜悧な頭腦だとか、優秀な頭だとか、實際的方面の大事業に好適する腦髓だとか云はれるものは、客體が此人の意志を盛んに動かして、客體相互の間に於ける諸種の關係を絶えず探究せしめ得る頭腦の事で、その知力は夫故に堅く意志に結びついて居る。これに反して、天才の頭腦に對しては、世界の現象は客觀的に見られたために、天才者其人には關係なきものとなり、觀想の對象として映ずるだけであるから、意慾は意識の裡から逐ひ出される。行爲の能力と創作の能力との差異は一に懸つて此點に存する。創作の能力は認識が客觀的なる事と深遠な事とを要求するが、此二個の性質は知力が意志から全然分離する事を前提とする。之に反して行爲の能力は、認識を應用する事と沈着で果敢なる事とを要求するが、これらはまた能力が絶えず意志の命を遵奉するのを要とする。知力と意志との間の羈絆が解ければ、知力は自己の自然的使命を脫離して、意志に奉仕する事を閑却するやうになる。例へば刹那に迫つた難儀に於てすらも、なほ且つ此知力は自己の解放を主張し、現に危險を個體に與へつゝある周圍をも、恐らく其繪畫的印象によつて理解することをやめないであらう。理性的でまた理解力に富める人の知力はこれに反して、常に其立場を守り、境遇と其要求とに向つて居る。夫故にかやうな人物は、いかなる場合にも、其事情に適合せる事柄を決定し、又實行するもので、天才者にありがちな脫線的行爲や個人的の失錯や、愚擧などをやる事はないのである。天才がこんな事をするのは、其知力が專門的に意志の指導者であり番人である事をやめて、多かれ少かれ、純客觀的の考へ方をするやうに要求されてゐるからである。此二つの全く異つた能力相互の對立的關係は、これを抽象的に云へば上の如くであるが、ゲエテはそれを具體的に戲曲『タッソオ』でもつて、タッソオとアントニオとの間の相反によつてわれらに見せた。天才と狂氣とが近似して居る事は、屢々觀察された問題だが、これは主として、天才の特有な・然し反自然的なる「知力と意志の分離」といふ事に基くのである。然し此分離を、天才の意志が薄弱に歸する事は決して出來ない。天才は激烈でまた激烈な性格を條件とするからである。そこで此分離は別な見方から說明されなければならなくなるのであるが、これは次の事實で解說がつく。實行的の方面で卓越せる人物・卽ち

行爲の人は、其强い意志に必要な知力を完全でまた充分な分量に於て持つのであるが、大抵の人にはこれが缺けて居る。然し天才になると、其知力はどんな意志に仕へても有り餘る位に、全く異常的な・實際的の剩餘を持つて居る。かゝる事は甚だ稀であるから、眞の創作の人は、行爲の人より千倍も少い譯である。上揭の場合には知力は其異常な剩餘によつて、決定的に優越な地位を占め、そして意志から分離するのであるが、かうなつた知力は今や自己の起源を忘却して、自らの彈力と彈性とによつて、自由に活動し、かくして天才の創作が作する事になるのである。

斯の如く、天才とは、自由な知の活動で、——換言すれば、意志に仕へる事から解放された知力の活動であるから、其結果として、天才の創作した物は、どんな實利的の目的にも副ふものでないと云ふ事になる。音樂が奏せられ、哲學が思索せられ、繪畫が畫かれ或は詩歌が作られる——それは唯々それ丈けであつて、天才の作は實利に役立つものではない。非實用的だといふ事が、天才の作品の特質であり、またその授爵狀である。人間の作り出す其他のものは、すべてこれ我等の生存を維持し、或はそれを容易ならしむる爲めのものである。只こゝに云はれて居る天才の作のみはさうではない。これはそれ自らのために存在するもので、此意味に於ては、生存の花として、或は生存の純利得として見らるべきものである。それ故にかゝる作を翫賞すれば、われらの心は開くのであつて、これは此場合に、われらは貧窮困難といふ重々しい地上の雰圍氣から浮び出づるからである。——これと同じく、美と實利とが結合して居るのを見るのは甚だ稀である。高い美しい樹木は果實を結ばず、果實の生るのは、小さく醜い矮木である。一ぱいに亂れ咲く庭薔薇には實がつかず、却つて小さい・殆ど香氣のなき・野生の薔薇が實を結ぶ。最も美しい建築物は、最も實用的な建物ではなく、殿堂は住宅ではないのである。高い・稀有な精神的天賦を具へた人が、强ゐられて、最も平凡な人に適するやうな單に實用的な仕事を執るのは、丁度美しい繪畫で飾られてゐる貴重な花瓶が、料理用の壺として濫用されるのと同じで、天才ある人を實用的な人と比べるのは、恰も金剛石を煉瓦と比較するやうなものである。

されば、單に實際的のみの人が、その知力を用ゐるところは、自然がそれに使用するやうに指定した場所であつ

で、即ち事物相互の關係と、認識する個體の意志と此事物との間の關係とを理解せんが爲にのみ用ゐられるのである。然るに天才者は、知力の天分に背いて、事物の客觀的本質を理解するが爲に、自己の知力を使用する。だから天才の頭腦は彼自身のものではなくて、世界に屬するものである。これ天才は何等かの意味に於て、世界そのものの啓發に貢獻するものだからである。此事からして、かゝる頭腦を惠まれたる個人には、色々な不利な事が起つて來る。かやうな人の知力は、その目的で作られては居ない用途で使用される器械が、いづれも持つやうな缺點を現はす事になる。まづ第一に、かゝる知力は云はゞ二君に仕へるやうな事になる。何となれば、それは自己自身の目的を追求せんがためには、いかなる機會に於ても、自然がきめた本來の役目を放棄するからであつて、このために知力が甚だ不適當な時に意志を見棄てるやうな事が起り、從つてかやうな天賦の個體は、生活には多少とも不向になるもので、加之其行動には狂氣じみた節が折々出る。且つ、認識の力が增加したので、知力は今や事物に當つて其個別的なところよりも、普遍的のものをより多く見るやうになるが、意志の要求するところはこれと反對で、事物の個別相を認識する事にある。ところで、此異常に高騰した認識力が、また折あつてか、俄かに其全力を擧げて、意志に關する事件と其慨狀とに向ふ事があるが、此場合にはこれらをあまり生々と了解し、一切をあまりにきらびやかな色彩と、あまりに明るい光とのうちに眺め、又恐ろしく擴大して見る傾があるから、かゝる個性を有する人は、ひどく極端に陷る傾を持つものである。この事を一層詳しく說明するには次の事が役に立たう。あらゆる偉大なる理論上の成功はどうして得られるものであるかと云ふに、それが何の方面であるにしても、その本人が精神の全力を一點に向け、こゝに精神力を傾注し、堅固にまた專一にこゝに集中することによつて、他の一切の世界は彼の眼中から全く消失して、彼自身の對象とするもののみが、一切の實在を塡充するやうになるのが必要である。此偉大にして强烈な集中は、素より天才の特權ではあるけれど、これは又折々現實の事物、日常生活の事件の上に向けられることがある。これらは此場合、上述のやうな焦點の下に持ち込まれるので、非常に大きくなつて、太陽顯微鏡に照された蚤が、象のやうな體格になるのと同じやうな現象が起る。天賦の豐かな人達が、折々つまらない事件のために、他人には解しがたい程の激烈な情緒を起すのはこのためで、普通の人なら全く平氣で居る筈の或事情のた

めに、これらの人々が悲哀や・歡喜や・憂慮や・恐怖或は憤怒に陷るといふ事實は、しばしば目睹されるのである。夫故に、天には冷靜といふ事が缺如する。冷靜とは、事物を見るに當つて、其事物に實際所屬してゐるもの（特にわれらのあり得べき目的に關係する見地から見て）より以外の何物をも眼中に置かない事の謂である。それ故に冷靜な人間は天才たり難い。天才に附帶する上掲の不利益に、更に感受性の過大といふ事が加はつて來る。これは、異常に高まつた神經や腦髓の生活が齎すものであるが、これはまた同じく天才の條件たる「意慾の猛烈」と云ふ事と相提携する。意慾のかゝる猛烈さは、身體的には心臟の鼓動の強い力となつてあらはれる。以上のすべてから容易く生ずるものは、氣分の過度な緊張、情緒の激烈、優勢な憂鬱性の下に於ける甚だ變り易い機嫌などで、ゲエテはこれをタッソオの人物に於てわれらに見せた。天才の內的苦悶は不朽の作の母胎ではあるが、彼が或時は夢見るやうな沈鬱に陷り、また或時は激しく興奮する有樣を、不足なき才智を受けた常人と比べて見るならば、後者は何たる理性や、落着いた平靜や、申し分のない見積りの力を持つてゐる事だらう。そして其行爲がいかに十分確實にまた平均的に營まれる事だらうか！――これらにはまた、天才が孤獨で生活するといふ一條項が加はる。天才者は素より少數であるから、容易に同じやうな人と會ふ事はなく、さればとて常人の仲間となるには、あまりに懸絕し過ぎて居る。他の人々を主宰するのは意慾であり、天才が重しとするものは認識する事である。夫故に前者の喜びは、後者の喜びではなく、後者の喜悅は前者のそれではない。彼は單に道德的の生物で、世界に對してはたゞ個人的の關係を持つに過ぎない。然し天才はその上にまた純粹の知力であり、純粹の知力として人類全體に屬するものである。この知力はまた、その母なる土卽ち意志から離れ、たゞ折々意志に歸つて來るに過ぎないが、この思考過程は、其幹に纏はりついて居るやうな常人の知力のそれとは、直ちに、充分に區別されるであらう。そのためでもあり、又お互の步調が合はない爲めでもあるが、天才は他の人々と共同して考へるのに適して居ない。卽ち他人と會話するに適さないのである。天才者が常人を喜ばないやうに、常人も天才者とまた彼等を押しつけるやうな天才者の優越とを喜ばない。夫故に、彼等は自己と同じもの と交際することをより氣持よく感ずるし、彼（天才）もまた自己と同資格のもの と談話する方を選ぶであらう。然しかやうな談話は、通常古人の遺著を通じてなされるに過

ぎない。夫故にシャムホールの云つた言葉は甚だ正しいものである。曰く『偉大な諸性質ほどひどく、澤山の友を得る邪魔をする惡德は少ししかない』〔偉大な性質を有する人は其性質の爲に累せられて、多くの友人を得ることが出來ない。これに比べると惡德を待つ人でもずつと多くの友人を得ることが出來るもので、一體友人をつくることの邪魔になるやうな惡德はあまり見當らぬと云ふ意味である。――譯者註〕天才に與へられる一番仕合せな運命は、自分の得意としない仕事を免ぜられて、創作のため自由な閑暇を與へられる事である。――この事からまた次の事實が生ずる。天才〔才氣そのものを指す〕は、其所有者が全くこれに全力を傾注して、妨げられるところなく、これを享用することが出來る間は、其所有者を非常に幸福ならしめるけれど、然し此人の全生涯を幸福にすることは到底出來ない。否むしろ其反對の事をなし得るもので、これは傳記類に記載されたる經驗が立證するところである。且つ天才は其行爲や仕事に於て、大抵は時代と矛盾し、且つこれと鬪爭するものであるから、外部との折合がよろしくない。單に能才ある人々は、いつでも丁度具合のよい時に生れるものである。これは、彼等が時代の精神と要求とによつて呼び起されるからで、彼等は丁度此要求を充(ゑた)すだけの力はあるのである。此故に彼等は、同時代人の進み行く教養の道に參與したり、特殊の科學を一歩一歩進展させる事にあづかつたりする。そしてこれに對して報酬と賞讚とが與へられる。然し彼等の作つたものは、次の時代にはもう用ゐられなくなつて、此時既に新らしく表はれて來た他のものによつて交代される。之に反して、天才が或時代に入つて來るのは、丁度彗星が遊星の軌道に飛び込んだやうなもので、前者の全然不規則な針路は、後者のきちんと定まつた一目瞭然たる軌道にとつては、全然別種なものである。されば天才は、眼前に存する・規則正しい當代の教養の道に參與する事は出來ない。それは（恰も死に瀕せる大將軍(イムパラアトル)が自分の槍を敵中に投げたやうに）自己の作品を行手の途上遙か遠いところに投げ出すのであつて、時代は此途を辿つてこの作品に追ひつかなければならないのである。此間に繁榮の頂點に達する能才者と彼との關係は、福音書著者の次の言葉で言ひ表はす事が出來やう。『我時いまだ至らず、爾曹の時は恒に備れり』〔ヨハネ傳七ノ六〕。――能才は他人の作業能力を越えたことをなし得るけれど理解能力を踏み越えたことをなし得るのではないから、これを評價する人をすぐに見つけ出すが、天才の仕事はたゞに他人の作業能力を超えてゐるばかりではなく、また其理解能力をも踏み越えて居るから、他の人々は彼を直接に認知し得ない。能才は、例へば他人の屆かない的(まと)に當てる射手の如く、天才は他人が見る事すら出來ない的

に射當てる人に似て居る。だから他人はたゞ間接に、卽ち後になつてから、射當てた報告を受取るだけで、しかもそれとて只信賴と信任とによつて承認するにすぎない。この故にゲエテは其『敎訓書簡』に於て云ふ。『模倣は、人間の生れつきではあるが、模倣さるべき人物は中々認められない。優秀なるものの見つかるのは稀だけれど、それの評價されるのはなほ稀である』と。シャムフォールは云ふ『評價するといふことに就ては、人間は丁度ダイヤモンドみたいなもので、大きさ・純粹・完全の或程度までは、一定せる・指示された價格があるが、此點を超えると相場もなければ買手もない』と。ヴェルラムのバアコもまたから云つた。『常人の間には、最高の德に對して何等の覺りもないので、最も低いものを讚美し、中庸のものを嘆稱するのである』と。恐らく『常人の間では！』と鸚鵡返しに叫ぶ人があらう。然し私はマキャヴェリーの確言したところを引用してヴァアコの所說を援助しようと思ふ。彼は曰ふ『世の中には、常人より以外のものは居ない』〔『常人はさうだらうが』と僞がる人があるだらうが、世間の人はみんな常人さと云ふ程の意味。――譯者註。〕。ティーロもまた（名聲について）云つた、『人は誰れでも自分が信じて居るよりもより多く、群衆の仲間入をしてゐるのが普通の有樣だ。』と。――天才の作が、ずつと後代になつて認められる事の結果として、それらは同時代人から觀賞されることが稀で、從つて同時とか現代とか云ふものの與へる潑剌たる色彩に於て觀賞されることは稀である。却つて無花果や無漏子の如く、生の狀態に於けるよりも、乾燥した狀態に於てずつと多く賞味されるものである。――

さて最後に、天才者を身體の方面から觀察すると、それがいろいろの解剖的並びに生理的特性によつて條件づけられて居るのを見る。これらの特性は其一つ一つが完全に存する事は稀であるが、すべてが倂存する事は更に稀有である。然しこれらはいづれも絕對的に必要である。この事からして、何故に天才が全く孤立して、ほとんど不吉とも思はれ相な除外例としてのみ世に現はれるかの理由が說明される。天才の根本條件は、感受性が易激性や再現力より異常的に優つて居る事で、しかもこれは男性の身體に具はつて居なければならないのである。此後の方の條件は、事を更に困難ならしめる。（代人は著しい能才を持ち得るけれど、天才を持つ事は出來ない。之は婦人がいつでも主觀的だからである。）同樣に、その腦髓系統は全然孤立することによつて、神經節系統から判然と分れ、兩者は互に全く反對の形を取つて、頭腦は身體に於ける其寄生的生活を、眞に斷乎たる・孤立的で・又力強く且つ獨立的

な方法で送つて行く樣にならなければならぬ。勿論かうなれば頭腦は、身體の他の部分に對して敵對的な作用を與へ易く、また身體そのものも、強い生活力を有し、良好な構造を持つて居ないと、頭腦の高まつた生活と休みなき活動とのために、いち早く磨り耗(へら)される。だから強い生活力と良好な構造とは、また天才者の條件の一つである。胃は腦髓と特殊の密接な交感を有するものであるから、其健全な事も同じく條件の一つである。然し主な事は、頭腦が非常な發達と大きさとを有し、特に幅廣く又高くなければならぬ。但し奧行は之に比べて劣つて居やうし、大腦は小腦と比較して異常にまさつて居るだらう。頭腦の全體の形も、其諸部分の形も餘程重要である事は疑ひもないが、之を精密に規定するには、まだ吾等の知識が足りない。勿論、高貴な智慧の存在を知らせる頭盖骨の形は、容易に識別する事が出來るけれど。——次に腦髓の實質の組織は、極めて纖細・完全であつて、最も純粹な精選された・柔い而して最も敏感な神經體(ネルウエンズブスタンツ)から出來て居なければならぬ。また腦髓の白質が灰白質に對する量的關係も、重要な影響を及ぼす事は確かであるが、これも同樣にまだわれわれの說明し得るところでない。然しバイロンの遺骸の解剖報告に依ると、彼の腦髓の白質は灰白質に比べて非常に多く、腦全體の重さは六ポンドあつたさうである。キュウヴィエ〔自然科學者、一七六八——一八三二動物學及び比較解剖學に精し〕の腦の重さは五ポンドあつた。通常の腦の目方は三ポンドである。——腦髓の優越と反對に、脊髓や神經は非常に細くなければならない。薄い骨から成れる・美しい丸天井をした・高い・廣い頭盖が、腦髓を保護しなければならないけれど、此際に腦髓を狹めるやうなことがあつてはならない。腦髓と神經系統とのかやうな構成はすべて母から傳へられる遺產である。然し父からの遺產として、活潑にして激情的な氣質がこれに加はらなければ、天才と云ふ現象を引き起すにはなほ不十分である。此氣質は身體的には心臟の非常な力としてあらはれ、從つて血液の循環——殊に頭部に向つての循環の力として現はれる。何となれば、第一には腦髓に特有な膨脹が之によつて增大するからである。腦はこの膨脹によつてあの壁を壓しつける。從つて負傷して壁に孔(あな)が出來ると、腦髓はそれから迸り出る。第二には心臟の適當な力によつて、腦髓は或內的な運動を受け取るものである。此運動は、呼吸の際に於ける腦髓の高低運動とは全く別なもので、四個の腦動脈の搏動する際に、腦の實質全體が受くる震撼である。又この腦動脈の力は、增加した腦髓の量に相當しなければならぬ。上述の運動は一

般に腦の活動には、缺くべからざる條件である。そこで、血液は途中の短ければ短いだけ、より多くのエネルギーを以て腦に到達するものであるから、低い身長と、特に短い頸とが、腦の活動に都合がよい。だから偉大なる思想家が巨軀を有する事は稀有である。然し途中の短いのは、必ずしも不可缺の條件ではない。たとへばゲエテは中脊（ちうぜい）以上であつた。血液の循環に關係する條件は、父から來るものであるが、これが缺けると、母から來る良好な頭腦の組織だけで出來上るものは、せいぜい能才卽ち上等な理解力にとゞまるもので、此理解力はか〻る場合に現はれて來る粘液質的の氣質によつて援助されることになるが、然し元來、粘液質の天才と云ふものはあり得ない。天才の氣質に於ける諸種の缺陷については上に敍べたが、其多くは父から來る此の條件から說明することが出來る。これとは反對に、母から來る條件がなくて、父からのだけが存在する事になると、——言ひ換へると、通常の出來の頭腦或は惡い構造の頭腦に、父からの條件が具はると、——其結果は智力のない活潑、光のない熱が生じ、狂暴な人物、堪へ切れぬ焦燥と癇癖、を有する人間が出來上る。兄弟二人のうち、其の一方だけが天才であるとすると大抵は兄の方がそれである。カントは其一例であるが、これは兄が作られる時に於てのみ、父が力と情熱との年齡に居たのであると云ふ事から說明され得る。今一方の條件、卽ち母から來るものは、また諸般の不利な事情によつて阻害されることがあるけれど。

私はなほこ〻に、天才の子供らしい・無邪氣な性格に就て、言ひ換へれば、天才と小兒期との或類似に就て、——一言添へて置かねばならぬ。——一體子供の時代には、天才に於けると同じやうに、腦髓と神經との系統が絕對に優越の他位にあるものであるが、これはそれらのもの〻發達が、身體の他の諸機關の發達に遙かに先んじて居るからである。事實、腦髓は七歳にして既に、其充分なる大きさと嵩（かさ）とに達し終るものである。夫故にビシャー〔一七七一——一八〇二。有名なる佛の醫學者にして、組織・解剖等にくはし。——譯者註〕は云ふ。『小兒期に於ては、筋肉系統に比べると、神經系統が比較的大きいが、これは後年には見られぬ事である。此時期から後には、他の系統の大抵のものが、神經系統の上に出る。神經をはつきりと見るためには、いつも小兒が用ゐられるのはわれらの知れる所である』（『生死論』第八章第六節）。これに反して生殖器系統の發達は、一番晩れて初まるもので、感應性・生殖（レプロドウクチオーン）及生殖作用は壯年期に入つて初めて十分に

活動し、通常は腦髓の作用を凌駕する。一般に小兒が怜悧で・理性的で・知識慾に富み、敎へ易く、且つ全體から見ると、すべての理論的の仕事を、成人よりもより多く好み且つより多くこれに適する所以はこの事から説明される。蓋し上述の發達の過程の結果、子供は意志よりも、換言すれば好愛・願望・激情よりも、より多くの知力を有するからである。一體知力と腦髓とは一つのもので、生殖器系統とあらゆる慾望中の最も激しい慾とは同じく一つのものである。だから私は此系統を意志の焦點と名づけたことがある。小兒期では此系統のいやらしい活動が未だ目覺めず、一方に頭腦の働きは既に充分の活潑さを持つてゐるから、此時期は、とりもなほさず無邪氣と幸福時代であり、人生の樂園・失はれたるエデンであつて、われらは其後の全生涯の間、憧憬の念を以てこれを回顧するのである。此幸福の根據は、小兒期に於てはわれらの全存在が意志よりもむしろより多く認識の方面にある事に存する。且つ此狀態は、一切の事物の新奇なことによつて、外部からも幇助される。かくして世界は、人生の朝あけの光を浴びて、潑剌に且つ蠱惑的に輝き、又魅力ある姿を現はしてわれらの前に横はるのである。小兒期の小さい慾望や・ぐらつく好愛・僅かな心配などは、認識的活動の優勢なのに比べては、甚だ輕微である。子供の無邪氣な澄んだ眼は、よくわれらを喜ばせ、折々はまた崇高にして默想的な表情に達する——ラファエルは此表情を用ゐて天使の頭像畫を美しくした——が、この眼差は、上に敍べた事から説明される。されば精神力なるものは、自己の奉仕すべき需要よりも、遙かに先んじて發達するものである。此點に於ける自然のやり口は、相變らず其目的に適つてゐる。何となればかく知力が優勢を占めて居る時代に、人間は其時にはまだ知られて居ない・將來の需要のために、認識の大貯蓄をなすからで、彼の知力は今や小休みなく活動し、一切の現象を貪慾に把握し、これらを懷に收めて、來るべき時のために、用意周到に貯蓄して置く。——それは丁度、蜜蜂が將來の需要を豫感して、食ひ盡し得るより遙かに多量の蜜を集める事に酷似する。人間が其發情期以前に、見解に知識とに於て得るところのものは、全體として考へる時、其人が此時期以後に學ぶものすべてよりも、確かに多量である。——たとへ其人がいかに博學になるにしても。——其譯は、これが人間のすべての認識の基礎になるものだからである。——此時までは子供の身體には成型性〔しなやかで、どうにでも伸縮屈曲し得る性質〕が主宰して居るが、此力は自己の仕事を完成した後には、實質を變化して、生殖器系統に

飛び込むのである。これによつて發情期と共に性慾が現はれ、かくして意志が段々と勝利を占めて行く。此主として理論的で・學習好きな小兒期に續いて來るのは、或時には嵐の如く猛烈で、また或時は憂鬱に沈む・落着きのない靑年期であるが、これはやがて熱烈で眞面目な壯期に移つて行く。子供にはかの禍を孕む本能がまだないので、其意慾は穩かで、認識の下に從屬してゐる。小兒期に特有な無邪氣とか叡智とか理性的とか云つたやうな性格は、このことから生ずるのである。——小兒期と天才との類似が何に基くかと云ふことに就て、もうこれ以上に陳述する必要はほとんどあるまい。意志の需要以上に認識力が餘つて居る事と、これから生ずる認識活動の優勢な事とがこの類似の基礎である。實際、あらゆる小兒は或程度まで天才で、天才はまた或程度まで小兒である。兩者の緣の近い事は、まづ素朴と崇高なる單純とにあらはれる。これは眞の天才の基本的特徵である。なほ此の緣の近いことは其他の多くの特徵にあらはれるが、或る「小兒らしさ(無邪氣)」はたしかに天才の特性の一つである。ゲエテに就てリイメルが傳へるところに依ると、ヘルデルやその他の人々がゲエテを非難的に蔭口して、彼はいつまでも大きな小兒であると云つた相である。彼等の此言葉はたしかに正當ではあるが、これを非難的に用ゐたのは心得違ひである。またモオツアルトについても、此人が生涯ぢう子供であつたと云はれてゐる。シュリヒテングロルの『ネクロロオグ』(故人小傳)にはモオツアルトに就てかう書いてある。『彼は彼の藝術に於ては、夙(つと)に成人(おとな)になつたけれど、すべての其他の點では、いつも子供であつた。』天才が世界を眺める樣は、恰も自分に緣なきものを眺める如く、又演劇を見物する如くであつて、卽ち純客觀的の興味を以てこれを見るのだから、これだけでも既に大きい子供である。一體常人は主觀的の興味しか感じ得ないもので、事物に當つては、いつも自分達の行爲に對する動機のみを見るものであるが、これらの人々の有する無味乾燥な眞面目さは、天才者のあづかり知らざるところである事、子供に於てかゝるものゝ絕無なのと同一である。一生の間、或程度まで大きな子供で居る事が出來ないで、眞面目で面白味のない・全く落着いた・理性的な人物になるやうな人間は、此世界の甚だ有用でまた技能ある市民ではあり得るだらうが、天才では斷じてあり得ない。實際天才者は、其感受系統と認識活動とが(小兒にあつて自然であるやうに)優越して居て、此狀態が異常的に一生を通じて繼續し、永續的のものになる事によつて、天才者たり得るのである。

此痕跡は常人になつても、また實際靑年時代まで繼續する。それ故に、たとへば幾多の學生に於て、なほ純然たる精神的努力と天才的な風變り(ふうがは)が、まぎれもなく認められる事がよくある。然し自然は其軌道のうへに歸つて來る。彼等は踊に化して、成年期には俗物の權化となつてあらはれ、後年になつて再び會つた人々を愕然たらしめるのである。——次に掲げるゲエテの美しい言葉は、今述べた全徑路に其基礎を持つて居る。曰く『子供は約束した事を守らない。若い人々は甚だ稀にこれを守る。そして彼等が約を守る時には世間の方で守らない』(『親和力』第一部第一章)。蓋し世間は、値價ある者に與へるのだと揚言して高くさし上げて居た冠を、後日になつては、世間の下等な目的の器具となつたり、或は却つて世間を戯いたりしたものゝ頭上に置くからである。——前に述べた通り、ほとんどすべての人に、靑春の美しさといふものが一度はあるやうに、誰にもまた靑春の知力と云ふものが存在するものである。これは事物を把握し・理解し・學習することを好む心的性質であつて、何人も小兒期にはこれを有するけれど、靑年期には或人々にしか認められず、其後になると靑春の美しさと同じく、消失し終るのである。只極めて僅少な人々、卽ち選拔された人々に於てのみ、このいづれかゞ一生を通じて續き、高年になつても、なほ其痕跡が認められる。かゝる人物こそ眞に美しい人、或は眞に天才的な人である。

小兒期に於ては、腦神經系統と叡智とが卓越し、成熟期になるとそれらが退歩する事は既に述べたが、この現象は人間に最も近い動物なる猿猴類に於て、同様の關係が著しい程度で存在する事によりて、重要なる解說と確證とを得るのである。一體、最も利口な猩々は、若年の黑猩々(ボンゴオ)であるが、これは生長すると、人間との顏貌の非常な類似がなくなり、それと同時に驚嘆すべき叡智も消失して、顏面の下部の動物的な部分が大きくなり、此爲めに額は後退して、大きな頸筋が筋肉的素質に加はつて、頭蓋の形を動物らしくし、神經系統の活動は低下して、其代りに異常な筋肉力が發進する。此の筋肉の力は此動物を維持するのに十分であるから、今や澤山の智慧は餘計なものになるのだと云ふ事が段々に確かめられた。此點に關してフリードリッヒ・キュウヴィエが云つた事は、特に重要なものであるが、フルウランは同氏の『博物學』を批評する文中で、これを解釋した。曰く〔此文章は一八三九年九月の Journal des Savans に出で、次いで若干の增補を以て一八四一年に Résumé analitique des observations de Fr. Cuvier sur l'instinct et l'intelligence des animaux, p. Flourens. と云ふ表題で單行本にしたものである〕『猩々の智慧は、隨分高い程度にそしてま

た夙（はや）いうちに發達するものであるが、これは年を取ると共に減退する。猩々の若い時分には怜悧で狡猾で且つ機敏なので、われらは驚かされるけれど、成熟した猩々は卑猥で粗暴で御しにくい動物であるに過ぎない。これは凡べての猿に共通な事で、彼等は猩々と同じく其體力の增進するにつれて、智慧の方は減退するのである。最も多くの智慧を持てる動物でも、その全部を所有するのは若い時だけである、』と。また曰ふ『すべての種類の猿の年齡と智慧との間の關係は反比例であつて、エルテルスと稱する猿〔Gymno-pithecus の亞種の雌の一種で、婆羅門教に於て崇敬せらるゝ猿の一つである。——原著者註〕は、若い時には顴が大きく、口が僅かに前に出て、頭蓋は高く丸い。年を取ると顴は見えなくなつて後退し、口は著しく突出するやうになる。其道德の側も身體の方面に劣らざる變化を示す。怜悧・從順・信賴の代りに、無感覺・亂暴及び孤獨を愛する事が現はれて來る。キュウヴィヒ氏の言に依れば『此相異は甚だ大きい。われらは動物の行爲を、われら自身の行爲によつて判斷する習慣であるから、其見方を考へると、若い動物は、其種族の持つ一切の道德的性質が完備した時代の個體であつて、生長せるエルテルスは、肉體力の外にはまだ何物をも持たなかつた時代の個體だと考へたいのである。然し自然が動物を取扱ふ方法は、われらの考へるところとは異つて居る。動物は畢竟自然によつて指定されたる範圍を超えて出てはならないのである。彼等にとつては何等かの方法で其生存を保持することが出來れば、それで充分なのである。この爲めに彼等に體力のない間〔若い時分〕は、知力が必要であつたのだが、體力が得られると、他のすべての力はいらなくなつて其效用を失つたのである」と。また曰ふ『種の保存は動物の身體的性質に賴ると共に、同じくまた知力的性質にも賴る』と、此最後の言葉は、知力を以て爪や齒と同じく、意志に仕へる道具に外ならずと見る私の學說を鞏固にするものである。

詩の美學

詩の最も簡單な・そして最も正しい定義として、私は次の如く云ひたい。『詩は言葉によつて想像力を働かせる術である』と。〔此事については『意志と表象としての世界』第一卷第五十一章に述べてある。〕ヴヰーラント〔獨逸の詩人にして文學者。一七三三——一八一三。〕がメルクに與へた書翰の一節は、これを確證するに足るものである。曰く『私はたゞの一節（シユトローフエ）のために二日半を潰したことがある。それは畢竟私

の求める只一つの言葉が發見されなかつた爲めであつた。私はその事をいろいろひねくり廻して考へ、頭腦をあらゆる方向にむけて見た。これは無論自分としては、例へば一枚の繪畫について述べる場合があるとする、と私の眼前に浮んだのと同一の・確定した視象を、そのまゝ讀者の眼前にもあらはさうと望むからで、その上また君の知れる通り只一つの筆づかひでも、只一つのドルッケル〔繪畫で、明暗や光をはつきり出すために用ゐる深い蔭の義ならん――譯者註〕でも又は一つの反射光すら、全體の趣を變へる事が屢々有るからである。』―詩がそのうちに自己の繪畫を描き出す材料は、讀者の想像そのものである事に依つて、次のやうな便宜が與へられる。即ちこれらの詩的繪畫の一層細密な仕上げと一層精緻な筆觸とは、各人の想像のうちで、其人の個性の如何や、知識の範圍や、氣分などに最もよく適當するやうに、自ら生れて來て、極めて活潑に其人を刺戟するといふ事がそれである〔同じ詩なり小說なりでも、讀者の個性其他によつて其效果が相異することを考へて見ればよくわからう。――譯者註〕。然るに造形美術〔繪畫、彫刻、建築等〕にはかゝる便宜がない。これは、一個の形像、一個の姿體がすべての人に滿足を與へなければならぬ。然るにかゝる形體には、藝術家の個性或はモデルの個性の特徵が、常に何等かの形に於て、主觀的又は偶然的で・何等の效果もない附帶物として着いてゐるだらう。無論このやうな附加物が少ければ少いほど、より多く客觀的であり、從つてその藝術家はより天才的なのではあるが。――詩の作品は繪畫や彫像よりもずつと強い・ずつと深い・而してずつと一般的な效果を及ぼす所以は、既に上述の事からでも或部分までは說明される。民衆は實際、繪畫や彫像に對して甚だ冷淡な態度を取るもので、造形美術は總じて其效果が甚だ弱い。これに就て奇妙な證明を與へるのは次のやうな事實である。即ちそれは、大家の作畫が個人の家や種々の場所で發見される事が折々あるが、これは多年の間埋沒して居た爲めでもなければ、隱匿されて居た譯でもなく、たゞ何等の注意をも受けずに、從つて何等の效果をも示さずにあつたのが、急に誰かに見付け出されたに過ぎないと云ふ事である。この事實を考へても、造形美術が、いかに效果の微弱なものであるかが解らう。私は伊太利でフロレンツに居た時(一八二三)、ラファエルのマドンナが發見されたが、それは永年（ながねん）の間或宮殿の召使部屋の壁上にかけられて居たのである。しかも、此事は、他の國民にすぐれて立派な美意識を持てる伊太利人の間で起つた事ではないか。これによつて見ても、造形美術の作品が直接の效果を持つこと少く、またこれを評價する爲めには、他のすべての藝術を評價するよりも、遙か

に多くの教養と知識とを要することが證明される。これに反して惻々人を動かす・美しいメロデイは間違もなく世界を遍歴し、優れたる詩は國民から國民へと傳はる。貴人や富者は、造形美術に最も有力な扶助を與へ、或は其作品にのみ著しく多大の金額を拂ふのみならず、今日では本當の意味での偶像崇拜心が、有名な古大家の繪畫に對して、廣大な地所の價格をも抛たしめてゐるが、この原因は主として、傑作なるものが少く、從つてこれを所有すれば所持主の誇りとなると云ふ事にある。然しその次ぎには、これらの作を觀賞するには、ほんの僅かの時間と努力としか要らず、いかなる瞬間にもすぐにその用意が出來るからでもある。然し詩を味ふには、——音樂すらも同樣であるが——比べものにならぬほどの面倒な條件がある。だから造形美術はまたなくても濟む。例へば回々教の諸國民はすべて造形美術を有しない。然し詩と音樂とを持たぬ國民は無い。

さて、詩人がわれらの想像を動かす目的は、われらに觀念（イデーン）を示さんがためである。換言すれば、一個の例によつて人生と世界とが何であるかを示さうとするのである。このためには詩人自らが人生と世界とを知悉することで第一の條件である。此見方が淺いか深いかによつて、其詩の深さが極まるのである。事物の性質を理解する深さと明瞭さとには無數の程度が在るやうに、詩人の階段も數多くある。彼等は各々、自分の認識したものを正しく描き出す限り、また其描いたものが原物（オリギナール）にきちんと合致してゐる限り、自己を卓越せる偉いものだと考へるに相違ない。彼はまた、最大作家の作品を見ても、自己自身の作に在るものよりより多くのものを認識しないから、——即ち彼自らが自然そのものゝうちに於て見ると同量のものしか認識しないから、——自らを此大家の同列のものだと思惟するに相違ない。これ彼の眼光がより深い所には決して到達し得ないからである。最上の詩人は、他人の見方がいかに淺薄であるかを知るが故に、また他の人々に見えなかつたがために、描出されることも出來なかつたものゝ背後に、いかばかり多くの事が横はつてゐるかを知れるが故に、更にまた、自己の眼光とその描くところとがいかばかり他の人々より進んでゐるかを知悉せるが故に、——自己が最上の詩人であることを認めるのである。淺薄な人々は彼を理解する事が出來ない。然し彼にして若しこれと同じく彼等の何たるかを理解し得なければ、恐らく絶望に陷らざるを得ないであらう。何となれば、彼を正當に評價するためには、其人が既に非凡な人物である事

を要し、凡庸な詩人の彼を尊重し得ざる事は、彼が凡庸の詩人を尊重し得ざると同じであるが故に、彼は後になつて世間の稱讃が來るまでは、自分自らの稱讃で以て久しい間暮らさなければならないからである。――然るに世人は、かゝる人に要求するのに甚しく謙遜であるべき事を以てし、此自己稱讃をすら妨げるのである。然し長所を持つて居て、且つ此長所がどの位の價値を有するかを知れる人が、此長所と價値とに對して盲目である事は、六呎の身長を有する人が、自己の他人を凌駕せる事を認めないで居るのと同じく、到底出來ない相談である。塔の基底から尖頭まで三百呎あるならば、尖頭より基底までは同じく三百呎あるのは確かである。ホラーツ、ルクレチュウス〔前九九――前五五。羅馬の文學者にして哲人〕オヴィツド、及び殆どすべての古代人は、自己に就て矜持を以て話してゐる。ダンテ、沙翁、ヴェルラムのバアコ、其他多くの人々も同樣である。自分で自分の偉大な精神を認めることなくして、しかも偉大なる精神を持ち得るといふ事は、一個の背理である。これは自分の無價値な事の實感を、謙遜の感じだと考へ得るために、絶望的の無能力者のみが、それを用ゐて自らを慰める屁理窟にすぎない。或英人は滑稽的ではあるが、然し正當にもかう云つた。『メリット〔merit ここでは實價とか技倆とかの意味で、功勞の義ではない。――譯者註〕とモデスティー〔modesty 謙遜〕とは、其頭文字〔卽ちエム〕以外に共通のところが無い』と。謙遜な大家は、自分についての考へ方が正しいかどうかと云ふ事を、私はいつも疑ふのである。コルネーユは直截にかう述べた。

『僞りの謙遜は、何人にもより多くの信用を與へはしない。私は自分の價値を知つてゐるし、又他人がそれについて私に談る事を信ずる。』

最後に云ふと、ゲエテは無遠慮にかう云つた。『役に立たない奴原のみが謙遜だ』と。然し、次の如く云つた方がなほ間違がなからう。凡そ他人から謙遜を熱烈に要求し、うるさく謙遜を迫まつて、絶えず口癖に『さあ謙遜に！どうぞ！謙遜しなさい！』と叫ぶ人々こそ正眞正銘のやくざ者で、言ひ換れば全然價値のない奴原、自然の作つた出來合品、人類中の愚民團の正組合員である。何となれば、自ら價値を有する人だけに、他人の優劣な價値もわかるものである。――但しこゝで云ふ價値とは、眞正にしてまた眞實の價値を意味して居る事は勿論である。――然し全く何等の特長も眞價もない人は、世の中にかゝるものの全く存在しない事を希望する。他人がかやうなもの

を持つてゐるのを見ると、彼等は恰も拷問臺に載せられたやうに感じ、蒼白な・靑い・黄色い嫉妬の炎が彼等の心を嘗めつくす。そこで彼は一切の個人的に待遇された人人〔天賦の豊かなる人々の義〕を勦滅しようとする。もし遺憾ながら、彼等を生かして置かなければならないなら、それは彼等が其特長をかくし、全くこれを否定するといふ條件、否むしろこれを放棄するといふ條件の下に於てでなければならぬ。されば屢々われらが耳にする謙遜に對する讃辭は、こゝに根柢を有するものである。謙遜の讃美者が、或眞價の出來上りつゝある間にこれを窒息せしむべき機會を――少くともそれがわれらに示されたり・人に知られたりする事を妨遏する機會を持つならば、これを利用して諸種の妨害をなすことを誰が疑はうか。何となれば、これは彼等の理論に對する實習であるから。――

さて、詩人は各の藝術家のやうに、いつでもわれらに個々の事、個體的のものを提示するけれども、彼自らが認識せるもの及びこれによつてわれらに認識させようとするものは、(プラトーン的の)觀念であり、種族全體である。夫故に、彼の描き出す形象(ビルト)のうちには、云はゞ人間の性格と境遇との原型が明かに示されて居るであらう。物語の詩人並びに戯曲詩人は、人生から全然個々的のものを採り來つて、これを其ものの個性に於て精細に描くけれど、彼等はこれによつて全人生をわれらに啓示するのである。勿論、彼の取扱つてゐる事柄は、外觀上個々のものであるが、實はこれいかなる時代に於ても到るところに存在する事柄であるにすぎない。詩人――殊に戯曲詩人の言葉は、一般的の格言として云つたものでなくてさへ、實生活に屢々當篏めて適用し得る理由はこゝにある。――詩が哲學に對する關係は、經驗が實驗科學に對する關係と同じで、經驗は現象を個別的・實例的にわれらに示すけれど、科學は一般的概念によつて、現象全體を統括する。これと同じく、詩は個々のものにより、實例によつて萬物のプラトーン的觀念をわれらに知らしめるが、哲學は事物のうちにあらはれたる其内的本質を全體的普遍的に認識することを敎へるのである。此點で見ても詩がより多く靑年の特質を持ち、哲學がより多く老年のそれを備へてゐる事がわかる。事實、詩才なるものが本當に花を開くのは靑年時代だけである。詩に對する受容力〔感ずる力〕も亦この時に於て屢々激情的である。靑年は韻文を韻文として好み、往々くだらないものまで好愛する。此傾きは年を取るに從つて漸次に減少し、老年になると散文を好むやうになる。靑年時代は此の詩的傾向によつて、現實に對する考へ

方が、やゝもすれば破却される。蓋し詩と現實との相違は、前者にあつては人生が面白く、其上苦痛なくしてわれらの眼前を通過するが、現實に於てはこれに反して、生活に苦痛のないうちは面白くなく、またそれが面白くなれば、苦痛のないわけには行かぬといふところに在る。現實よりもより夙(はや)く詩に親んだ青年は、現實から要求するのに、詩のみがなし得る事柄を以てする。これが卽ち、最もすぐれたる青年が屢々不快感に厭服される主因である。

韻律(メートルム)と韻脚(ライム)とは一の拘束物ではあるけれど、然しまた詩人が自らの身體を包む被覆である。此被覆を着ると、詩人はその他の場合に云ふべからざる事を云つても差支へなくなる。われらを喜ばしめるのはそれである。——彼は自らの云つた事に對して半分しか責任を持たない。韻律と韻脚とが他の半分を代表しなければならぬ。——韻律卽ち時量(ツァイトマース)は、單なるリズムで、其本質は時間のうちにのみ存する。そして時間は先天的の純粹直觀であるから、韻律はカントの用語に從へば、單に純粹感覺性に屬するものである。これに反して韻脚は聽覺器官に於ける感覺のあづかるところであるから、これは經驗的感覺性の關與するものである。だからリズムの方が、韻脚よりも遙かに氣高く且つ品格ある方法であつて、希臘羅馬の人々は、このゆゑに韻脚を輕視した。韻脚の起源は、古代の言語の廢頽によりて野蠻時代に生じた不完全な言語のうちに存する。佛蘭西の詩の貧弱な譯は、主としてそれに韻律がなく、單に韻脚のみに限られてゐることに基くのである。此缺點をいろいろの手段によつて隱すために、衒學的な澤山の規則が作られたが、其ために韻脚法が困難になつたことによつて、此貧弱さは更に一層助長された。例へば、韻脚は耳に愬へるのではなくて、目に見せるものであるかのやうに同じやうに、書かれたシラブルスのみが韻を踏み、ヒアートゥス〔兩綴の間の母音の重複。例へばDu, Adamの如きもの——譯者註〕は禁ぜられ、幾多の言葉は詩のうちにあらはれるのを許されないやうな事は、彼の衒學的な規則の一例であるが、近來になつて此國の詩人達は、これらのすべてのものを除かうと努めて居る。——だが、少くとも私にとつては、いかなる國語でも、ラテン語のやうに、其韻脚が快く且つ力強い印象を與へるものはなく、韻脚を施した中世紀のラテン詩は、特殊の魅力を持つて居る。これは、ラテン語が近代の諸國語のいづれとも比較にならぬほどにより完全でより美しく且つより氣高い言葉であるから、此言語からは元來輕蔑されゝ、近代諸國語の所有物となつてゐる韻脚といふ装飾品をつけても、なほよく優雅の趣をあらはすのである。

若干のシラブルを間に置いて、再び同一の音がひゞくやうにとか、或はこれらのシラブルが、一種のリズム的の拍子をあらはすやうにとか云ふ子供らしい目的を以て、或思想に對して、或は其正當にして純正な表現に對して、いさゝかでも暴力が加へられるならば、眞面目に考へて見ると、これこそ理性に對する叛逆だと云はねばならぬ。然しかゝる暴力を行使しないと、韻文の出來ることは甚だ少いのである。この故に、他國語では、散文の方が韻文より遙かに理解し易い事になる。即ち韻文には上記の暴力が加へられてゐるからである。詩人の祕密な工場を見る事が出來るなら、われらは思想が韻脚を求めるよりも、韻脚が思想を求める方が十倍も多い事を見出すであらう。言ひ換へると韻脚が思想に先んじて在る場合の方が遙かに多く、思想が先にある場合でも、思想の方から讓歩しなければ、中々事が捗らない。――然し韻文術はかゝる考察には目も臭れないで、あらゆる時代と民族とを自分の側に引きつけるのである。韻律と韻脚とが人心に及ぼす作用はかくも大きく、これらに特有な神祕的の誘惑手段はかくも有效なのである。私はそれをかう説明したい。即ちかく有效に作用するのは、上手に韻を踐んだ韻文が、其甚だ強烈な效果によつてそこに云はれた思想は、既に前から言語のうちに豫定されて(否、むしろ豫造されて)存在し、詩人はたゞこれを見つけ出すの勞を取つたかのやうに感ぜられるからである。つまらない思ひ附きでも、それが韻律と韻脚とを得ると、意味深長のやうに見え、此裝飾で目立つて來る。それは丁度少女達の間でも普通の顏が化粧をして居れば、人の目を惹くやうなものである。偏した思想・間違つた考へでも、韻文にすると眞實らしく見えて來る。一方では、有名な詩人の名文句すら、忠實に散文でうつし出されると、縮んでみすぼらしいものになる。たゞ眞のみが美であつて、眞理の最も美しい裝飾が赤裸々といふ事であるならば、散文に於て偉大で且つ美しくあらはされる思想は、韻文で同樣の效果を及ぼす思想よりも、より多くの眞價を持つ譯である。――韻律と韻脚とか云ふ子供らしく些細のものに思はれる方法が、かく力強い效果を及ぼすことは、意外であつて、實際考究に價する。私はこれを次のやうな方法で解說する。元來、聽覺に直接に與へられたもの即ち言葉の單なる響は、リズムと韻脚とによつて、一種の音樂となるが故に、それ自身に於て或完全さと意味とを獲て、最早單に手段としてではなく、指し示された或事の單なる符牒――即ち言葉の意味の符牒としてではなく、それ自らの爲めに存在するもののやうに見え

て來る。而してその響によつて耳をよろこばすのが、其使命の全部であり、此使命を果すと共に、一切の事は成就せられ、すべての要求が滿されたやうに見える。從つて此響が其上になほ一つの意味を持つと云ふ事は、即ち一個の思想を云ひ表はして居る事は、今や一個の待ち設けざる附加物で、恰も音樂に言葉を添へたやうに思はれる。それはまた、われらを突然によろこばす不意の贈物の如く、こちらに何等の要求もないので、甚だ容易にわれらを喜ばすことが出來る。然し其上になほ、云ひあらはされた思想それ自らが價値あるものなら、——即ち散文で云ひあらはされても價値のあるものならば——われらは全く魅せられる。私がまだ極めて小さい頃、或韻文の調子がよいために、これが充分な意味と思想とを包含してゐる事を悟らないで、隨分長い間此韻文をたのしんだことを記憶して居る。いづれの國語にも、調子ばかりよくつて、意味のほとんど無い詩がある。支那學者デヴィスは自己の飜譯した『老生兒』〔"An Heir in Old Age" by John Francis Davis, London, 1817（子なき或老人が、子を得んがために第二夫人を迎へ、これに子を生ましめる事になるが、此間に起る家庭內の波瀾や曲折を描いた戯曲。——譯者註。）〕の序文に、支那の戯曲は或部分まで歌はるべき韻文で出來てゐる事を述べ、更に附言して曰つた『此等の文句の意味は屢々曖昧である。支那人自身の云ふところに從つても、か〻る韻文の目的は主として耳に阿ねる事であつて、意味は閑却せられ、且つ恐らくは和聲のために犧牲にされる事が屢々あらう』と。此言葉を聞くと、誰でも希臘悲劇の往々にしてほとんど意味のわからないコオラスを憶ひ起すのである。

眞の詩人は、高級・低級に論なく、直接にそれが認知される標徴は其韻脚が自然で無理のない事に在る。即ち韻脚は神慮によつて來たかのやうに自ら現はれ、彼の思想は初めから韻脚を踐んで頭のうちに浮んで來る。これが本當の詩人である。內密の散文家は、これに反して思想のために韻脚を求め、濫作者は韻脚のために思想を索める。韻脚のある詩を二つ見ると、どちらが思想を父とし、どちらが韻を父としてゐるかがすぐに發見される事は甚だ屢々ある。韻が父となつてゐる詩句が、ほとんどたゞ場所埋めの尾韻詩だと見られないやうに、韻が父である事をかくすところに技術が存するのである。

私の感ずるところに依れば（こゝでは證明は出來ない）、韻脚は其性質上雙對的のものである。其の效果は同一の音が一度丈繰り返へしてやつて來ることから生ずるので、度々反覆されたからとて、效果が強められるものでは決

してない。されば或最後のシラブル（綴）が、それと同じ響きのシラブルを聞き終ると、その效果はなくなるもので、此音が三度目にやつて來ても、それは別の韻脚で、たゞ偶然に前のものゝ韻と同じになつたのであるとしか考へられない。卽ち少しも效果を高めないのである。此韻は今まで存在した韻脚の列に加はるけれど、それ等と結合して一個のより強い印象を生ずることはない。此譯は、第一の韻は第二の韻を通して第三のそれまではひゞいて來ないからである。此故に第三のものは、一個の美的贅物（プレーナスムス）で何の役にも立たざる二重の元氣である。だから斯樣な韻脚疊積法に、大なる犧牲を拂ふ理由は少しもない。然るに人々は、オクタァヴァリーメン〔伊太利八句體。首六句は交互韻で、尾二句は偶然である。──譯者註。〕テルツェリーメン〔十綴又は十一綴の三韻一句の詩、例へば abaheb cdc と云ふ風に進んで行くもの。──譯者註。〕、及びゾネット〔十四行詩〕の如きものに於て、上述の疊積法に對して大きい犧牲を捧げて居る。そして此犧牲こそは、これらの詩を讀む事によつてわれらの心に與へられるいやいなみの原因をなすものである。何となれば詩的享樂は、頭腦をなやませつゝある間に起るものではないからである。大詩人は成程、この形式とその困難とを克服して、よく輕快優雅の趣を示し得るけれど、これだけの事實は、未だ此形式を推擧する理由とはなり得ない。何となれば、これらの形式は、それ自身に於て面倒くさく、且つ效果のないものだからである。立派な詩人ですら、此形式を用ゐる時には、韻脚と思想との間に屢々葛藤が生ずるのである。此葛藤に於ては、或時には韻脈が勝ち、或時には思想が勝つ、卽ち思想が韻脚のために萎縮するか、または韻脚が弱い思想で僅かに納得させせられて居る。それ故に、沙翁が其ソネットで各四行句に、各々別な韻を踐ませたのは、沙翁が無識であつたからではなく、却つて彼の趣味がすぐれて居たからだと私は思ふ。兎も角、此詩の聽覺的效果は、このためにも毫も減じない。そして思想そのものは、かうした方が、傳來の西班牙長靴のなかに押し込まれなければならなかつた時よりも、より正しい取扱を受けるのである。

或國語が、詩にのみ用ゐられて散文には使用されない語を澤山持つて居るなら、それは其の國語の詩にとつては不利である。又一方、詩には用ゐられない若干の言葉が在る時も同一である。散文では使用されざる言葉の多いのは、ラテン語や伊太利語に於て最も屢々發見される事實であり、次の事、卽ち詩には用ゐられざる言葉の例は佛蘭西語にある。此國では近頃これを『佛蘭西語の謹嚴振り』と名づけたが、甚だうまい云ひ方である。此兩方の現象

は、英語に於てより多く、獨逸語では最も少い。專ら詩にのみ用ゐられる言葉は、われらの心に緣遠く、直接に精神に愬へない。それ故にわらの感情を冷かな狀態に放置する。かやうな言葉は詩の會話用語で、云はゞ實際の感情の代りに、畫に描かれた感情である。かゝる言葉は眞情といふものを排除する。——

近頃屢々論じられる事であるが、古典的(クラシック)の詩と浪漫的(ロマンテイック)の詩との區別は、詮ずるところ私には次のやうな點にあると思はれる。即ち前者は、純粹に人間的な・眞實な・而して自然的な動機より以外にはどんな動機をも知らないが、後者はこれに反して人造的・傳承的・想像的の動機を有效なものとして働かせると云ふところに、主要な區別點が存するので、後者にはまた第一に基督敎の神話から來た動機が加はり、次には名譽に就ての騎士的にして誇張的且つ空想的な原則や、無趣味でまた笑ふに堪へた基督敎的日耳曼的の婦人崇拜などが參加し、最後にはまた譫言を口走る月夜狂〔月夜彷徨症の事〕みたいな超物質的の戀愛がやつて來る。これらの動機が人事關係と人間の天性をいかに奇怪にゆがめるかは、浪漫派の最上等の詩人に於てすら認める事が出來る。例へばカルデロンの如きは其一人で、宗敎劇の事はしばらく措き、私はたゞ『最も惡い事は必ずしもいつもきまつてはゐない』とか『西班牙に於ける最後の決鬪』とか云ふ作、或は同樣の喜劇『エン・カーバ・イ・エスパータ』等を引合に出して來る事が出來る。これらの要素に更に加入するものは、會話に屢々あらはれて來るスコラ哲學風の煩瑣であつて、かゝる煩瑣は、當時、上流階級の精神修養のうちに屬して居た。これに反して常に自然に忠實なる古人の詩は、これと比べると斷乎として優秀の位置に立つて居る。又古典派の詩は絕對的の眞理と正當さとを持つて居るけれど、浪漫派の詩は制限されたそれを有するに過ぎない。希臘建築とゴシック建築との差異も同樣である。然しわれらが注意しなければならぬ事は、一切の戲曲的及び說話的の詩が、其事件の舞臺を古代の希臘又は羅馬に置くと、古代に就てのわれらの知識——特に生活の細部に關するわれらの知識が不十分で斷片的で且つ直觀から汲み取られたものでないから、此ためにかかる作品は不利な位地に立つことになる。此事はやがて詩人をして多くの事を回避せしめ、一般的の事柄で滿足するやうに强ゐる。このため彼は抽象に陷り、その作には、詩のどうしても必要とする直觀性と個性化とがなくなる。凡べてかゝる作品に、空虛とか退屈とか云ふ特殊の色彩を與へるのはこれである。但し此種のものでも、沙翁の手に成つたも

のは、敍上の缺點を脱離してゐる。何となれば彼は躊躇することなくして、希臘人や羅馬人の名の下に彼の時代の英人を描き出したからである。——

敍情詩の多くの傑作、特にホラァツの二三の頌歌（オイデン）（例へば第三卷の第二の頌歌を見よ）や、ゲエテのいくつかの歌（リイデル）（例へば『牧羊者のなげき』の如き）などには、正しい聯絡がなく、思想が全く跳躍してゐると云ふ事で非難された。然しこれらの場合には論理的の脈絡は故意に避けられて、詩中にあらはれる根本感情や情調などの統一が、その代りとなつたのである。此統一は、それが一條の糸個々の眞珠を貫いて走るが如く全體を貫き、而して觀照の對象の迅速なる變轉を仲介するといふ事によつて、愈々判然と現れるのである。これは丁度音樂に於て一つの調（トーンアルト）から他の調へ移る事が、第七諧音によつて仲介せられ、此音によつて、その中になほひゞいて居る基調が、新しい調の屬和絃（ドミナンテ）となると同じである。此性質はペトラルカの作で次のやうな言語を以て初まるカンツェーネのうちに最も明らかに、——否ほとんど誇張に近いまでに——あらはれてゐる。——『されどわが歌ひ來し如く、歌ふことは最早あらざるべし』——

抒情詩に於て主觀的要素が主宰するやうに、戯曲に於ては、客觀的要素のみが唯獨りで排他的に存在して居る。此二者の間には、敍事詩が幅廣い中間を占めて居る。これには物語風の譚詩から、眞の敍事詩に至るまで幾多の形式と變形とがある。敍事詩が中間であるといふ譯は、此種の詩では、その主要な點に於ては客觀的であるけれど、主觀的の要素も時によりて程度こそ異なれ、兎も角折々あらはれて來るからである。此主觀的な要素は、詩そのものの調子とか、敍述の形式とか、諸處に織り込まれた考察とかに現はれて來るのである。だから、戯曲に於けるやうに、詩人その人が全く見失はれるやうな事はない。

總じて戯曲の目的は、『人間の本質と生存』とが何であるかを、一個の實例によつて示すことに在る。此場合、これらのものの悲哀な一側が、われらの方に向けられることもあれば、愉快な一面が示される事もある。或はまた其中間・過度のところがあらはれる事もある。然し『人間の本質と生存』といふ事そのものが、既に論議の種子を包んで居る。何故なれば、戯曲に於ては、本質卽ち性格が主點であるか、生存卽ち運命とか事件とか行爲とかゞ主要點

であるかと云ふ問題は直ちに論爭さるべきものであるからである。その上、此二者は概念の上でこそ分離することが出來るが、描寫に於ては分ちがたいやうに堅く相纏綿してゐる。何となれば、そこにあらはれる各の性格〔人々〕をして其本性を發揮せしめるものは、只事情と運命と事件とのみであり、性格のみから動作(ハンドルング)が生じ、動作から事件が生ずるからである。勿論描寫に於ては、この二つ〔本質と生存〕のうち、いづれか一方がより多く顯揚されて居る事もある。此點に於ては性格劇と筋(すぢ)の劇とが兩極端を作るのである。

敍事詩と戲曲とに共通な目的は、著しい境地に置かれた著しい性格〔人物〕を基として、此兩者によつて導き出された異常な動作を描出しようとする事であるが、此目的は次のやうな場合に、詩人によつて最も完全に果されるであらう。即ち詩人は人物をまづ其性質の一般的色彩しか見られざる平靜の狀態で連れ出して來、次に一つの動機を持出すのである。此動機は一つの動作を出し、此動作から新らしい强い動機が生ずる。此動機はまたより著しい動作を生み、此動作は更にまた新らしい而してますます强烈な動機を產する。かくて詩の形式に適合せる時間のうちに於て、舊(もと)の平靜の代りに激烈なる動搖が來り、此動搖から今や重大な動作が生ずる。此動作に於て、曩には各人物のうちにまどろんでゐた諸性質が、世相と共に明瞭に開展してあらはれて來る。——

偉大なる詩人は、自分の描くどの人物にも全く變ずる事が出來る。そしてこれらの人物のいづれもの口から聲色使ひのやうに全く別な言葉を話し出す。今英雄の口から話したかと思ふと、すぐ其あとで、若い無邪氣な少女の脣から物語り、しかも同一の眞實性と自然さとを有するので、沙翁やゲエテの如きはこれであるが、第二流の詩人は、描かるべき主要人物を自分に變ずるもので、例へばバイロンのやうなのがそれである。此場合には副位の人物には生命のない事が屢々ある。凡庸の作に於ては主要な人物すら生命を持たぬ。——

悲劇を喜ぶ心は、美の感じには屬せずして、崇高の感に屬するものである。事實、悲劇は崇高の感じの最高度である。われらが自然のうちに存する崇高を見た時、純粹の直觀的態度を取らんがために、意志の利害から蟬脫するやうに、悲劇の結末(カタストローフェ)を見る時にも、われらは「生きんとする意志」から離脫するのである。悲劇に於ては、人生の恐ろしい側が提示される。即ち人類の悲慘、偶然と迷誤との支配、正しき者の沒落、惡人の凱歌など、われら

の意志に直接に反對する世界の諸相が、われらの眼前に提出されるのである。これを眺めると、われらはわれらの意志を生活から離し、最早これらを欲せず・また愛さないやうに要求される事を感ずる。然しまさしくこの事によりて、われらは、此場合なほ或物がわれらの心に殘留して居る事を自覺する。此或物は決して積極的に認識することが出來るものではないが、只消極的に、最早生を欲せざる或ものとして認識される。例へば第七諧音が基本諧音に伴ふ如く、又、赤が靑を要求し、且つこの色を眼のうちに生ずる如く、あらゆる悲劇は全く別種の生存、一つの別な世界を要求する。此世界に對する認識は、いつもたゞ間接に、――即ち此場合には上述の要求によつて與へられる。悲劇の結末を見た瞬間には、われらは人生がおそろしい夢であつて、われらはこれから目ざめなければならぬと云ふ確信を、いつもよりより明晰に與へられる。此點に於ては、悲劇の效果は力的崇高のそれに似て、兩者は共にわれらを意志と其利害との上に超脫せしめ、われらが自らの意志に反對するものを見て喜ぶやうに、われらの感情を變化せしめる。悲劇的の事件は、それがいかなる形を採つて表れやうとも、われらの心が高揚するために、特殊の跳躍をこれに與へるものであるが、悲劇に此性質を與へるものは、世界と人生とがわれらを眞に滿足せしめるものではなく、從つてこれらは執着する價値のないものであるといふ認識の生ずる事である。悲劇的精神はこゝにある。かくて此精神はわれらを「斷念」に導くのである。

希臘羅馬の悲劇に於ては此「斷念」の精神が直接にあらはれてゐる事、或は直接に云はれてゐる事は稀有であるといふ事實を私は承認する。『コロネウスのエーヂプス』〔希臘のソフオクレスの作――譯者註〕はあきらめて且つ喜んで死に就くけれど、しかし祖國に對する復仇といふ念が彼を慰めて居る。『アウリセのイフキゲーニア』〔希臘のオイリピデス（ユウリピデス）の作――譯者註〕は甚だ喜んで死に就くけれど、彼女を慰めてその心をかく一變せしめたものは、希臘全土の幸福といふ事であつた。此變化のために、彼女は初めにはどうしても避けようと思つて居た「死」を、喜んで引受ける事になるのである。偉大なエシロス〔希臘の戯曲作家〕の作の『アガメムノン』では、カサンドラは喜んで死ぬ、『人生はもう充分だ』と彼女は云ふ。然しまた復仇の考が彼女を慰めて居る。『トラヒスの婦人達』〔ソフオクレスの作〕に於ては、ヘラクレスは必至の勢に屈服して從容として死ぬけれど、斷念に到達して居るのではない。オイリピデスの『ヒポリトス』も同樣で、彼を慰める爲に

出現せる女神アルテミスは彼に對して、死後に建てらるべき殿堂と身後の名譽とを約束する。然し決して人生を超脱せる生存と云ふものを指し示さず、又凡ての神々が瀕死の人を見棄てるやうに、此女神もまた臨終の彼を棄て去るのが目につく。――基督教に於ては、神々は〔こゝでは天使の事ならんか〕瀕死の人にあらはれるが、婆羅門教に於ても佛教に於てもさうである。且つ佛教では神々は實は他から輸入されたものではあるが。――されば ヒポリトスは、希臘の凡ての悲劇の主人公のやうに、避けがたき運命と神々の曲ぐべからざる意志とに對する諦めを示しては居るが、『生きんとする意志』そのものの放棄を決してあらはしては居ない。ストア派の恬淡と基督教の諦めとは根本から異つてゐるが、其の區別は前者は避けがたい必然的な禍害をぢつと忍耐し、泰然としてこれを待ち設けるが、基督教は意慾を斷絶し・放棄することにある。これは同じく古代の悲劇の主人公は、運命の避くべからざる打撃の下には斷乎として歸服するけれど、基督教の悲劇はこれに反して「生きんとする意志」全體を放棄し、世界の無價値と空零なことを意識して、喜んで此世界を棄てるのである。――然し私もまた近代の悲劇は、古代人の悲劇よりも、より高い階段の上にあるものだと云ふ意見を十分に持つて居る。沙翁はソフォクレスよりずつと偉大であり、ゲエテのイフキゲーニエに比べると、オイリピデスの同名の劇は、ほとんど粗野でまた卑俗に見える。同じ人の『酒神祭尼』は異教の僧侶に左袒せる・いやな・見るに忍びない製作品である。多くの古代の戯曲は全然悲劇的傾向を持つて居ない。例へばオイリピデスの『アルケステ』や『タウリスに於けるイフキゲーニア』の如きものである。或作に至つては厭ふべき嘔吐をさへ催さしめる動機を持つ。『アンティゴーネ』や『フィロクチート』〔共にソホクレスの作である――譯者註〕の如きは、それである。古代悲劇のほとんどすべてが、人間を偶然と迷誤との支配の下にあらはしてゐるけれどこの事によつて起され又此事から人を救ひ出す「斷念」なるものを示さない。これらすべては、古人が未だ悲劇の頂點と目標とに達せず、否一般に人生に對する考へ方のそれに到達して居なかつた爲めである。

　されば古人は悲劇の主人公その人に於て、斷念の精神即ち生から意志を離れしめる事を、その人の意向として描くことはほとんどなかつたが、それでも悲劇の特殊な傾向と效果とは、觀者のうちに此精神を喚びさまし、たとへほんのしばらくの間でも此考へ方を誘起する。舞臺上の恐ろしい出來事は、人生の辛慘と無價値とを――それ故に

人生のあらゆる努力が空零なることを觀者の前に提示する。たとへ漠然たる感じであつても、觀者が其心を人生から離し、その意慾を他に轉じて、世界と人生とを愛しないやうにする方がより良いことだと悟るに相違ない。又これによつて、その心の奥の奥で、他の意慾に對當して他の種類の生存があるに相違ないと云ふ自覺が動かされる。――若しさうでないとするなら、人生のあらゆる目的と財寶とを超越して心が高揚する事や、人生と其誘惑とから精神が他に轉向する事、及び既にこのうちにあらはれたる（たとへ自分では充分にはわからないけれど）別種の生存に對する心の趨向などが悲劇の傾向たる事があり得やうか？ そして又人生のおそろしい方面の描寫が、最も明らかにわれらの眼前に持ち來された時、それがわれらに快く作用し、且つわれらに對して高い享樂となり得る事が、どうしてあり得やうか？ アリストテーレスは悲劇の最終の目的を「恐怖」と「同情」とを動かす事に置いたが、此二つの感情はたしかにそれ自身に於て愉快な感じに屬してはゐない。だから、此二つは目的ではなくて、ほんの手段に過ぎないのである。――されば、意志を人生から離さうと云ふ要求が、悲劇の眞の傾向であり、人類のなやみをわざと描寫する事の窮極の目的である。夫故に「諦め」によつて生じた精神の高揚は、主人公それ自らに於て示されずに、たゞ觀者が大きななやみを見る事によつて、其心のうちに惹起されるのである。又此なやみはこれに苦しめられる主人公にとつて、正當の報いである事もあれば、全く不當な事もある。古代人のやうに、代近作家の多くもまた、人間の不幸を總體的に描寫する事によつて、觀者を上記の情調のうちに引き入れる事で滿足するが、然し或人々はさうではなく、なやみによつて生じた主人公その人の心情の轉向を描寫する。前者は云はゞ只前提を與へるだけで、結論はこれを觀者にまかせるのであるが、後者はこれに反して結論若しくは其筋の脚色の含める教訓を、主人公の心の轉向として描いたり、時にはまた齊唱の口から出る觀察として書きあらはす。例へばシルレルの『メシナの花嫁』で、コオラスが『人生は財寶のうちにて最も高きものにはあらず』と歌ふやうなのがそれである。此所で序に云へば、カタストロフェー（結末、大團圓）の本當の悲劇的效果、即ちこれについて引き起される「斷念」と「高揚」とが、オペラの『ノルマ』に於けるほど、純なる動機を持ち、且つ明瞭に云ひあらはされてゐるものは稀である。此オペラではそれは『おんみの心が與へしだけおんみの心は失へり』と云ふ二聲曲にあらはれるが、此二聲曲

では意志の轉換は、突然音樂にあらはれた靜寂によつて示されるのである。一般に云ふと、此曲はそのすぐれた音樂や、オペラの語法のみに可能なる言ひ廻しなどは姑く措いても、單に動機と其内的經濟の方面から見て、最も完全な悲劇であつて、動機の悲劇的賦與の方法に於ても、動作の悲劇的進行に於ても、或はまたその悲劇的展開に於ても、またこれらのものが主人公の心に作用して、これを世間から超脱せしめる效果（此效果は觀者にも移つて行く）に於ても、眞に悲劇の標本たる資格を持つて居る。且つ又このうちにはいかなる基督教徒も、いかなる基督教的の考へ方もあらはれて居ないから、こゝで得られる效果は、愈々眞正なものであり、又悲劇の眞の本質をより判然（はつきり）とあらはすものとなるのである。

　近代の劇作家は、時と處との統一を〔アリストテーレスは「時」と「處」と「動作」との統一を戲曲の大切な事だと考へ、これを三統一と云つた。——譯者註〕等閑視するがために、嚴しく非難されてゐるが、此閑却は、それが動作の統一を破る位の程度に進んだ時に、初めて缺點となるのである。かうなれば後に殘るものは、たゞ主要の人物の統一だけになる。沙翁の『ヘンリー八世』は其例である。然し動作の統一は佛國の悲劇で見るやうに、絶えず同一の事柄についてのみ談るやうな處まで行く必要はない。佛蘭西の悲劇では、戲曲の進行は、幅のない幾何學的の線のやうに動作の統一を嚴守して『前へ！ 前へ！ お前の仕事だけを考へよ』と云ふやうな具合で驀進する。そして事件は全く事務的に取扱はれて、どんどんと捗取つて行く。事件に必要ならざる些事に停滯する事なく、左右を顧る事もしない。沙翁の悲劇はこれに反して幅を持てる線に似て、時間を費し、廻り道をなし、且つ動作を捗（はかど）らせず、或は動作に本當の關係すら持たない對話や場面があらはれて來る。然しわれらは行爲する人物や、或は彼等の境遇を、これによつてより根本的に理解する事が出來る。動作は勿論戲曲の主眼ではあるが、畢竟は一般に人間の本質と生存との描寫が目的である事をそのために忘却するやうなことがあつてはならぬ。

　戲曲詩人も叙事詩人も、自分自身が運命そのものであり、夫故に運命の如く曲ぐべからざるものなる事を知らなければならない。——同樣に、自らは人生の鏡であるが故に、甚だ多くの惡人や、折々はまた不埒千萬な人物を出現せしめ、或はまた多數の愚者・ねぢけ者・馬鹿者などを出さなければならないけれど、時々はまた理性的な人・利口

な人物・正直な人・善人又は極めて稀有の例外として氣字の高尙な人物をも現はさねばならない。ホメロス全體のうちには、私の考へるところに依ると、眞に氣字の高尙な人物は描かれて居ない。多くの善良な・また正直な人々は描かれては居るけれど。――沙翁の作全部を通じてかやうな人物は恐らく二人位は發見されるであらうが、これらとて決して過度に高貴な人達ではない。恐らくコルデリアとコリオランあたりは此部に入らうが、その外にはほとんどない。これに反して上にあげたやうな諸種の人物は彼の作にうようよと集まつてゐる。然しイフラント〔一七五九―一八一四。獨逸の作劇家〕やコッツェブウ〔一七六一―一八一九、獨逸の喜劇作家〕の作には高貴な心の人々が澤山居る。然しゴルドニイ〔一七〇七―一七九三伊太利の喜劇作家〕は上に私が推擧した通りに作つた。彼はこれによつて自分がより高い位置に立つものなる事を示して居る。これに反してレッシングの『ミンナ・フォン・バアンヘルム』はあまり多くの・そしてあまりに廣汎な高尙なる精神を現はさうとして大層骨を折つて居る。ゲエテの作全體から驅り集めて來ても、ポーザ公〔シルレルの戯曲『ドン・カーロス』中の人物。――譯者註〕一人に見出されるやうな高貴性は見あたらない。但し獨逸の小さい作で『義務(プリヒト)のための義務(プリヒト)』と云ふのがあるが（カントの『實踐理性批判』から來たやうな題である）、これにはあらはれるたつた三人の人物は、いづれも過渡に高貴な心を持つて居る。――

希臘人は悲劇の主人公を皆王族から取つて來た。近代の作者も大抵はさうである。これはたしかに、階級に行動する人又は行爲を受ける人により多くの品位をあたへるからだと云ふわけではない。戯曲の主要な點は、人間の激情を動かすことになるのだから、この感情を引起すものの相對的の價値はどうでもない。農家の裏庭も王國も同じ事をなし得るには違ひない。また平民悲劇〔世話悲劇〕も決して絶對的に非難さるべきものではない。然し大きな權力と威望とを有する人々が悲劇に最も適してゐる譯は、われらがそれに於て人生の運命を認識し得べき不幸な事件には、充分な大きさがあつて、いかなる觀者にも恐るべきものだと思はれるものでなければならぬからである。普通の市民の家族を窮困と絶望とに陷れる事情は、富める人又は身分の高いものの眼から見ると、甚だ瑣末な事柄で、人間の助力により、否折々は極めて僅かな事によつて排除されさうに思はれる。それ故にかう云ふ觀者は、これらの事情によつて悲劇的に感動する事は出來ない。これに反して身分の高い人や權力のある人の不幸は、絶對的におそろし

くあり、又外部からの救助の屆きがたいところにある。王者は自己の權力で自分を救ふが、さもなくば滅亡せざるを得ないのである。その上、墜落は高いところからするのが一番ひどい。從つて普通の市民には此高さが缺けて居るのである。——

さて、悲劇の傾向及びその最後の目的が、『斷念』への轉向及び「生きんとする意志」の否定への轉向であると云ふ事が解つたなら、其反對即ち喜劇に於ては「生きんとする意志」の絶えざる肯定への要求がたやすく認められるであらう。勿論喜劇も亦人生のあらゆる描寫の避け難いやうに、人生のなやみと嫌忌すべき事とをわれらの眼前に提示しなければならない。然し喜劇はこれらの事を須臾なもの、喜びの中に終るもの、一般に成功と勝利と希望とを混入したるものとして現はすのであり、また此三つは後では實際優勢となるのである。そして其うちで笑に對する無盡藏の材料を取り上げる。元來人生なるものは、其厭ふべき事柄にすらも、笑ふべき材料は充滿して居るものである。そしてかゝる材料はいかなる場合に於ても、われらの機嫌を取つて呉れる。畢竟、喜劇は人生がその全體に於て、良いものであり、且つ全く樂しいものである事を宣言するものである。然し喜劇は、其次に起る事の何たるかをわれらに知らせないやうに、歡喜の頂點に於て、急いで其幕をおろさなければならないものである。然し悲劇の方は、通常何事もその後から來ないやうに終局がついて居る。その上思ひがけなくわれらが人生の滑稽な側を一度いくらか眞面目に眺め、またそれがいかに素朴な言葉や擧動のうちに、——詳しく云ふと、小さい狼狽、個人的の恐怖、一時の憤怒、內心の嫉妬及び多くの他の同じやうな情緒が、美の典型から離脫せる現實の影像の上に印銘する素朴な言葉や擧動のうちに——現はれて來るかといふ事を眞面目に考へて見るならば、思慮深い觀察者は思ひがけなくも、次のやうな確信に達するであらう。卽ち、かゝる人々の生存と行爲とはそれ自らに於て目的であることは出來ない。反對に彼等は只間違つた道を取つて、迷路を通つて生存に達し得たもので、かやうにして現はれるものは、實はむしろ生存しない方がよいと云ふ確信を得るやうになるであらう。

附錄

（ショーペンハウエルを讀まんとする人達に。）

ショーペンハウエルの最初の全集は一八七三年から七四年にかけて、門弟フラウエンシュテートによつて發行された。これは全部六冊で、第一卷には、價値の豐富な緒論（アインライトゥング）の外に、ショーペンハウエルの傳記がついて居る。此哲人の傳記と云へば誰れでもすぐに、

Wilhelm Gwinner : Schopenhauers Leben. (1878)

を想ひ出すのであるが、ケエベル先生はこれを素材は多いが、整形なく且つ可なり思想が貧弱だと評し、これよりも上揭の傳記の方がよいと云つて居られる。また同先生は、人としてのショーペンハウエルを知らうと思ふものは、同じくフラウエンシュテートが千八百六十三年に出した。

Arthur Schopenhauer. Von ihm, über ihm.

を讀まなければならないと指定された。これにはリンドネルの Ein Wort der Verteidigung と云ふ優れた論文がついて居る相である。同時に、

Schopenhauers Briefwechsel mit Joh. Aug. Becker. (1883)

も讀むべきものだと云はれる。

フラウエンシュテートはまた千八百六十四年に、故人の遺稿を探つて、

Aus Schopenhauers handschriftlichem Nachlass

を出した。其他に

Neue Briefe über die Schopenhauersche Philosophie (1876)

Schopenhauer-Lexikon (1871)

がある。

次に出た全集はレクラム社の出版に係り、編者はショーペンハウエル傳の著者グリーゼバッハ（Griesebach）で、フラウエンシュテートの全集よりもずつと完全である。なほ別に此人によつて、遺稿四卷が出版されて居る。

最も完全な全集は、目下續刊されつゝあるドイセン(P. Deussen)の校訂編纂に係るものであるが、これは全部十四册の豫定であるが、今までに出版されたのは數册ばかりであつたと記憶して居る。ショーペンハウエルは、英・佛・西・伊・希・拉の六國語に通じてゐたので、彼の著作にはこれらの國語がどん〳〵使用されてゐる。これは邦人に取つては、極めていやな且つ不便な事であるが、ドイセン版では希臘語と拉典語とには、獨譯がついて居る相である。ケエベル先生校訂の『パレルガ・ウント・パラリポメナ』にもむづかしいところ（希拉）には脚註として獨譯がついて居り、且つ綴字法を全く新式になほしてあるから、邦人には極めて便利である。

Parerge und Paralipomena. Herausgegeben sowie mit Einleitung und Anmerkungen vessehen von R. Koeber. Berlin. Verlag von Maritz Moas (1891)

なほシュタイネルの編纂、コタ社の出版に係る十二巻の全集もある。これには遺稿も少しは入つてゐるが、不完全である。

主著の英譯には

The World as Will and Idea. Translated by R. B. Haldane and J. Kemp. 3vols. がある。これは非常に立派な譯書で、誤譯と思はれる點は極めて少い。然しこれには他國語の譯がついて居ない。

Bailey Saunders 氏は Schopenhauer's Series と稱する叢書を出版してゐるが、此人の譯風は自由譯とでも稱すべきもので、勝手に表題を變へたり、文章中の或個所を省略したり、或は全く言ひ換へたりして居る。だから嚴密な譯書とは云へない。

嚴密忠實の點で、最も驚嘆すべきものは、ボンのライブラリイにある、E. B. Bax のショーペンハウエル論文選集である。これはほとんど一點一劃も空しくしない嚴重な譯で、英文そのものの特性を・全く犧牲にしてゐるかのやう

に思はれる所である。スコットライブラリーのショーペンハウエル論文集〔原名は此書の序文にのせてある〕も相應の出來ではあるが、所々省略したり、勘違ひしたりしてゐる。トムソン譯は必ずしも嚴密な飜譯ではないが、そしてきたない、廉い(?)本であるが、他國語の譯が可成澤山ついてゐるので、一寸便利である。

日本譯については玆に云はない。

ショーペンハウエル論文集 終

(總頁數──516)

昭和四年九月廿六日印刷
昭和四年十月一日發行

非賣品

著作者 神田豐穗
東京市麹町區内山下町一ノ一

發行者 神田豐穗

世界大思想全集
22

發行所 東京市麹町區内山下町一ノ一
株式會社 春秋社
電話銀座五六五二番
振替東京二四八六一

印刷所 東京市牛込區辨天町一五七番地
濟揚社

印刷者 本間十三郎

世界大思想全集

春秋社版

世界大思想全集

春秋社版